

避けたりとかそういう
のはしない。

銀座

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

個人的に、すごいビームが撃てるとか、切れないものはないとか、全てを破壊する一撃とか、超高速で戦闘とか、そんなものよりも、そんなすごい攻撃がありがたみが無くなるほど雨あられと降り注ぐ中を、生身1つで平然とゆったり無傷で歩いてきて、真顔で『今、何かしたのか？』って言うってくるガチタン系が一番カッコイイと思う。

そんな感じの主人公が見たかった。

注意！

作者のこんな感じの話があつたらな、みたいな妄想を纏めてるだけです。作者は原作

未プレイな上に三國志の知識もないです。話の流れも何もかもおかしいとおもいます。この2次創作小説知識だけで書いてるクソ野郎です。小説をかくのも初心者な上、勉強してちゃんとした文章にする気は今の所ありません。

作者はクソ野郎なので、自分に都合のいい感想以外は要りません。褒めたりおだてたりされるとやる気を出すタイプです。文句を書かれるとやる気なくなるのでやめて下さい。文句があるくらいなら読まないで帰っていただくようお願い申し上げます。

目次

0 話 【脳内】登場人物紹介【設定】

1

1 話 転生されたよ！

16

2 話 修行回をキンクリ。

23

3 話 設定忘れてたんじゃないよ！

29

4 話 関羽さんマジ関羽さん

35

5 話 いつから俺が話してたと錯覚して

いた？

53

6 話 よく考えるとラージャンンって別

に獅子ではない

72

7 話 ハルクさんのズボンが破れない

謎。

8 話 そうだ、トンカツ食べよう。

100

9 話 くらえ必殺！飛鳥文化アタック！

115

10 話 多分柔軟性という部分では、ル

ィより礼ちゃんの方が上。

136

11 話 ロード・トウ・もも

153

12 話 恋姫には力の幼女と智の幼女

は居ても技の幼女はいない。

170

13 話 ケンタッキーは美味しいよね。

191

14 話 鍋焼きうどんには玉子を落とし

たい派	202	21話	お好み焼きには鉄板が必須。
15話	伝説の料理、牛の丸焼き。	317	
227		22話	鳥ささみのねぎわさポン酢は日
16話	味付き玉子を極めると飯がめつ	本酒派	332
ちや進む。	241	23話	サンドイッチは一枚肉なら鶏
17話	酔豚にパイナップルがどうと	肉が1番。	344
か以前にまず酔豚が駄目	262	24話	豚肉の角煮は甘過ぎないのが
18話	地味にミカンの缶詰美味しいよ	ベスト	361
ね。	274	25話	デカイビーフステーキは硬めの
19話	豚肉の塩漬は、ドリップ処理	方が素敵。	383
が1番重要。	287	26話	君が望む焼きイカ
20話	タコ焼き食べたくてもタコがな	27話	あなたが愛した舌平目のムニエ
い。	302	ル	416

28話 僕と私の鴨南蛮。 | 437

29話 鍋はつけちやいけないキムチチ

ゲ | 457

30話 甘い焼きトウモロコシ生活

479

31話 夏の人参帳 | 511

32話 味付けは塩だけで美味しい焼

き豚 | 528

33話 ビーバーの尻尾焼きは珍味や

で。 | 555

34話 洛陽に珍味を求めるのは間

違っているだろうか。 | 586

35話 湯豆腐に鶏肉を足すと幸せ。

| 611

36話 僕のスーパーマカダミアナッツ

| 626

37話 カレー味の焼肉は、カレー粉だ

けでは出来ないから気をつける！

649

38話 何故アンパンマンの親友にミ

ルクマンが居ないのか。 | 680

39話 カツ丼は、余計な甘さのない

ソースカツ丼派 | 721

40話 焼肉はタレより塩胡椒派

770

41話 コーンスープはポタージュ

スープと混ぜて飲め！

809

4 2 話 あっさりだろうとこつてりだろ
うと山盛り食えば飽きる。それがらーめ
ん。

855

4 3 話 カルボナーラよりミートソ
スが好き。

922

4 4 話 プリンよりは茶碗蒸し！

992

4 5 話 アップルパイは焼きたてより
も冷やした奴が好き！

1082

0話【脳内】登場人物紹介【設定】

??～登場人物紹介～

・主人公

姓

名 羌毅

字名

真名 道玄

・転生特典

ラージャンLevel 1400

ハルク

・ステータス（完全変身時）

力：天限突破

防…砕け得ぬもの

速…2マツハ（但し2秒間に限る）

知…その辺の親父

統…出来なくはない

・取得スキル

料理人B（ギリギリプロ級）

木工C（基本は知ってる）

石工A（もはや職人）

彫刻師A（ネットで売れる）

保父B（子供に懐かれ安い。条件付きでA）

ラージャンン式体術EX（ラージャンンに出来ることは全部出来る、ラージャンンに出来ない事も出来る。）

闘気術B（内気功S、外気功E）

裁縫C（手編みのマフラーくらいなら）

?? 所持称号 new!!

・頭のおかしい蛮族

常識や物理的に不可能な事をやらかし続け、一定数以上の被害を出すと獲得。注目度がアップし、戦場では敵味方問わず士気をー70 (MAX100)する。一度敵として相対したものののみ一定確率で「恐慌」の状態異常を付与する。

追加効果・全ての蛮族に風評被害発生。

・情愛の坩堝

不特定多数から恋し愛される人気の異性5人以上からの一定以上好意を持たれ、かつ3人以上に好意を持つと獲得。向けられる感情によって効果が変化。人数が増えると効果増大、さらに相手に向ける感情によって効果が増減する。

嫉妬↓愛 を増幅

愛 ↓嫉妬 を増幅

困惑↓興味 を増幅

興味↓恋 を増幅

恋 ↓一定値で愛に変化

?? 変身別身体変化早見表。

通常人間状態：身長230センチ、ほぼ角のない獅子目彦彦

超弱簡易変身：肌の色が変わったような気がする？

簡易変身：肌か緑色に！

部分変身：ごく一部変身。使いにくい。

完全変身：オガ郎とオガ吉を足して二で割った感じでだいたいあつてる。真紅の虎縞模様と、長い金髪が特徴。ラージャンなのにディアブロス風の角を持つ。

鬼神激昂変身：厨二に良くある激怒したりすると暴走したりするあれ。完全変身状態で、全身からメルエムさん並の黒いオーラが立ち昇り、両腕が肥大超硬化、常時マツハ2で好き勝手動き回り、白い魔王さまの星砕き並の太さのビームをノータイムで口から吐き出す。チャージビームの場合はスーパーサイヤ人4の悟空さんのかめはめ波と同等以上の威力を持つ。つまり角度を間違えると地球がバアン！また、拳による一撃は富士山を一撃で標高と同じ深さまでクレーターにし、防御力はFF7におけるメテオの直撃を受けて初めてハリセンくらいの衝撃を感じる。出てくる世界を間違えたレベル。尚、テンプレに従い設定はしたけど出てくる予定は一切ない。

?? 人物設定

前世は整骨院を営む整体師。その他、看護師資格や調理師免許、栄養士など、割と医

学的な知識を保有するが、ガチの手術とかは全然出来ない。結構なベテランだが、本人はサバイバルや狩猟など、アウトドアが好きだけどゲームや漫画、アニメにもそこそこ精通する厨二が完治しなかった系中年オヤジ。

好きなものはビッグ・ザムや梵天丸、ウボオーギン、ハルク、キングコング、ジャック・ラカン、サイタマ、とら、有澤、エネルギー戦闘時のルフィ、通常兵器の集中砲火を無視するエヴァなど、相手の攻撃を防御も回避もしないで平然と潜り抜ける頑強タイプとパワータイプ。今頃になってモンハンにハマり、ラージヤンに虐殺されまくるもその力強さに魅了されたアホ。

死んだ時にそのままのノリで特典を設定し、最初は恐る恐る、使い方を覚えてからはだいたい勢いで力を使っている暴走中年。地味に転生直後のサバイバルなどで、手が鉄の道具より頑強かつ便利だからか、日曜大工的技術が進化しており、特典が消えても頑張って生きていける領域になっている。

前世では何度か恋人に近い存在はいたが全て恋人未満なので未婚、歳のせいもあり、恋愛に対して消極的。転生してからは大きくなり過ぎた息子にドン引き、エロゲオークじゃないんだから、と女性との肉体関係を早々に諦めた。

が、実は彼本人も気付いていないが、異性からは好印象、同性からは悪印象を持たれやすくなるフェロモンが出てます。野生の動物の群の王的な奴です。このフェロモン

は相手がそれぞれ好感か嫌悪感を抱くたびに効果が強くなる、という御都合主義的フェロモンです。簡単に言えば女性はこの人優しい、とかかつこいい、とかそんなんで相手が好きになりやすくなり、男はあいつばっかりいい女連れやがつて、で嫌いになりやすくなります。

とはいえ、なりやすくなる、だけなので効かない人は効かない為、男なら一刀くんや一部の兵達などは無効状態で仲良くしてます。女性は女性で、必ず好きになる、というわけではないので、肉体関係にまで行くのは築いた関係がものを言います。でも一応エロゲが元の2次創作オリ主なので、基本相手から来てくれるというベリーイージーモード。

しかしながらうちの畜族は何故自分が好かれるのか把握してないタイプなので、来るものは拒まず、来てしまった以上は去られたくない小心者ですが、自分から恋愛しよう、という気はゼロ。美人に嫌われるのは悲しいのでご機嫌とりは色々しますが、相手を恋愛対象としてません。なので本人的にはリトくんの隣のポジをとつて、ラッキースケベのお零れが貰えればそれでいいや、なゆとりスタンス。しかしリトくんポジの一刀くんが居ないところで調子に乗るので、特典とオリ主補正もあり、色々勘違いされて居ます。

詳しくはたぶん裏話にて。たぶん。

基本的に温厚で小心者で、変な意味じゃなく子供好き。見た目と印象が違い過ぎて初対面で勘違いされがちだが、子供と仲良くなるのは早い。若干フェミニスト気味で、恋姫世界の女武将を殺した事はまだ一度もない。その為、女性に怒られるのは苦手。しかし特典のおかげで死なない自信があるので殺意とか敵意、威圧といったものは効果が無い。

?? 通常人間状態時、人物与ダメージ比較表

・闘気術、闘気硬化なし。

呂布↓受けると普通にダメージ。頭とかで死ぬ可能性あり。

華雄、鈴々、嚴顔、夏侯惇↓微ダメージ。普通の人々が背中強く搔いて赤くなった、くらいダメージあり。が、自己治癒機能で20秒程で治る。

その他↓武器、膂力的に非ダメージ。

・闘気術、闘気硬化あり

呂布↓中ダメージ。頭なら50回くらい切れば死ぬかも？

その他↓微ダメージ。頑張っても五歳児のデコピンくらいのダメージしかない。自己治療により攻撃した1秒後にはダメージ量の3倍くらいずつ回復していく。

・おまけ、完全変身時

御坂美琴↓レールガンでもノーダメージ。

ブロリー↓壮絶な殴り合いの果てにオリ主負ける。

キン肉マン↓肉のカーテンでも防げないぜ！

デイスティニーガンダム↓何なんだあんメメタア！

アラレちゃん↓オリ主秒殺。決まり手は地球割りパンチ

アンデルセン神父↓こいつは素敵だ、全て台無しだ！

・備考

呂布ちゃんだけは僅かでも変身しないと勝てません。何故なら攻撃が素手では当たらない為。岩とか装備すれば勝てます。基本的に呂布ちゃんだけが今作唯一オリ主にダメージを与えられる公式チート。彼女だけがオリ主にとっては、とある世界の神秘におけるところのそげぶさん。

後はまだまだ倒せません。つまり呂布ちゃんが男だったらオリ主暗殺の可能性微レ存。

??簡単ヒロイン紹介

・オリ主現ハーレム

関羽さん↓ハイパーヤンデレ。命助けられてか何でかオリ主に惚れる。独占欲が最も強く、本当は愛人仲間はいない方がよかった。誰よりもオリ主にとつての1番に拘る。2人きりの時間を邪魔されたり、他の女とイチャイチャされると嫉妬で即ヤンデレに。そのまま嫉妬が過ぎると幼稚で狂気的になる。具体的には他の女性全てに攻撃的になり、オリ主の全てを独占しようとする。彼女だけは裏話に登場。

趙雲さん↓隠れ激ヤンデレ、DM痴女、さらにメンマで酒好き。今作では宝慧クラツシャーの宿命を背負う。要素を詰め過ぎたキャラ。何気にオリ主に愛と忠誠の全てを誓う、臣下に最適の武人。独占欲は溜まると爆発するが、基本的にはそうでもない。

龐統さん↓ヤンデレ。オリ主は元々乗り物兼動物枠だった。いつの間にか性愛の対象へ。つまり異種姦好きの変態。

諸葛亮さん↓ヤンデレ。龐統さんと大体同じ。最近はさらに深みへ沈み、露出も良いかなと思いは始める。

程昱さん↓微ヤンデレ。嫉妬もするが、どちらかという独占欲。単独では手を出して来なそうなおリ主に手を出させる為、大人ボディな仲間とのオリ主共有化計画を立

案、成立させたやり手。糖尿病予備軍。

郭嘉さん↓弱ヤンデレ。昔は常識人だった。オリ主と流琉の料理で元気になりまくり、さらにヤリまくりで鼻血を克服。DM。

張飛さん↓スーパー天使。特にヤンデレではないが、おとーさんをとられるのは嫌。おとーさんと結婚するのだ！めっちゃ可愛い

典韋さん↓ヤンデレ。割と常識人。しかし隠れてオリ主を溺愛している。なので兄さまには私が居なければ駄目、の状態で理想。実はややs。

楽進さん↓重度ヤンデレ。オリ主のマイペースを可能にする理不尽に感動し、憧れる。コンプレックスである傷を気にしないオリ主にのめり込む。悪い男にのめり込む優等生タイプ。

李典さん↓ノットヤンデレ。だが、オリ主が仲間とヤルのは許すが、それ以外は駄目。オリ主が普通に好き。最近仲間が増え過ぎて深く考えずオリ主を絞ることにしている。

于禁さん↓非ヤンデレ。オリ主ハーレム唯一の経験人数2人。敗因はオリ主から性の喜びを始めたこと。気持ち良さが別次元、とのこと。

呂布さん↓デレデレ。オリ主が自分より強いから子を産む気にいるが、優しさに惹かれてもいる。あとご飯美味しいから。最近オリ主に抱きつくと山の匂いがして安眠で

きることに気付いた。

陳宮さん↓ツンデレ。呂布さんがハーレム入りしたから自分も入った。呂布さんに勝った強さと優しさは認めている。

張遼さん↓実は純デレ。巫山戯てはいるが、オリ主の圧倒的強さと優しさと野生にキユンときた。好きか嫌いかで言ったら好きだが、股を開いたのはノリ。

華雄さん↓実は元の名前が葉雄、真名が華だったという裏設定捏造。本当は紆余曲折を経て華雄になったエピソードを裏話にて描こうとして断念された経歴を持つ。自己より強い男が将来出てこなさそうなので流れてオリ主の子種を狙った。

董卓さん↓ヤンデレ予備軍。オリ主を神聖化しつつありながらも、白馬の王子様の存在と勘違い、恋してしまった。劉備さんイケメンにする為にちよつと性能落とされた可哀想な子。

賈コウさん↓ガチツンデレ。字はたぶんこれで合ってる。董卓さんを強引に笑顔にしたオリ主に嫉妬と感謝の二律背反。しかし董卓さんを万が一にも裏切らせない為にハーレムに参加。にも関わらず、巨根にあっさりエロ堕ちした話を裏話にたぶん書きます。めいびー。

夏侯淵さん↓ヤンデレ。最初は悪友ポジだったが、オリ主が陳留に滞在した間色々あったらしい。裏話にたぶん書きまします。現在唯一他陣営からハーレム加入。オリ主の

現地妻を自称する。

備考

この圧倒的ヤンデレ率。オリ主のハーレムは一般人なら死ぬ。よく見ると別に好きじゃない奴も入ってる辺りオリ主のハニートラップ耐性の低さがわかりますね！

??その他ハーレム予備軍の人達。

曹操さん↓どちらかと言えば勘違いでオリ主を人格者だと思いついでいる。強くて人格者、素敵！でも他に行かれたら厄介すぎる！体使っても手に入れなきゃ！って少し前まで思ってた。

夏侯惇さん↓男のくせに華琳様と真名を交換しおって！でも強くて優しい。秋蘭も幸せそうだし、ちよつと気になってきたぞくそう！な感じ。

荀彧さん↓頭も悪く、字の読み書きも出来ない野蛮人。．．．なのに、こんなにも優しい上にお菓子も美味しいなんて、卑怯よ！な感じで困惑気味。華琳さんの為にオリ主と愉快的仲間達が大活躍し、華琳さんに手を出してはいないので、ちよつとだけオリ主に優しい。

許褚さん↓ちよつといくら何でもありえないよ！絶対おかしいって！あの人本当に刃物通らないよ！でもごはんは美味しいし、流石も幸せそうだからいい人！くらいの印象。実は卒業した典韋さんに置いてかれたみたいで微妙な気分。

「公孫賛さん↓オリ主は親友だと思ってた。しかし酔った勢いでオリ主をからかおうと誘惑したら鼻で笑われ、具体的な説明と共に駄目出しされ、女の誇りをコテンパンにやられた。ならば見返してやろうと色々研究し、何度もオリ主に色仕掛けを仕掛けた結果、それでも意識しないオリ主を逆に意識し始めた。オリ主が新しい女に手を出す度に胸が痛み、あんな奴なんかない！と自分を誤魔化し続けている。」

孫策さん↓ちよつとあいつ私の勘にピンピンくるんですけど！敵対したらヤバいんですけど！何としても敵対しないようにしないと！な感じ。でもオリ主の事は嫌いじゃない。周瑜さん取られるくらいなら身体張ってでも取り込む構え。

周瑜さん↓ヤンデレ。オリ主の見た目とオーラに勘違いし、惚れつつある。きつと眼鏡が曇ってるんだ！地味に敵対は不味いので取り込みたい狙いも。流石周瑜さん腹黒！最近オリ主ハーレムの女性陣にちよつとジェラシー。

黄蓋さん↓孫呉における初期夏侯淵さんポジの人。なんだかんだ混ざりますたぶん。悪ふざけでオリ主を誘惑し、周りを煽って遊んでいたが、オリ主が自分に無反応なのに

元董卓軍の女性を取り込んだ事にご立腹。それで最近意識し始めた。

孫権さん↓オリ主の強さと威圧に勘違い。さらに周瑜を救い、孫策を窘められる人物として尊敬を始めてしまった残念な子。オリ主に対する第一印象はべっこう飴の人。

甘寧さん↓孫権さんに悪い虫が！とオリ主を排除したいがご飯とお菓子が美味し過ぎて出来ない。孫権さんに手を出される前に体を張ってでも何とかしようとして、色々あつて意識しちゃうかもしれない。たぶん。

周泰さん↓猫好き同士だが不慣れなひとだと思ってる。実は黄蓋さんや周瑜さんと一緒にオリ主誘惑に参加した。

陸遜さん↓実はオリ主が悪ふぎけで書いた日本語のラノベを見つけて、解読できたら孫呉にくる、という密約を交わしている。未知の図書に弱いのもし解読できたらハーレム入りするかも。キーポイントは一刀くん。

??その他の人たち。ハーレムには関係しません。

劉備さん↓関羽さん達本来の蜀の將をオリ主にほぼ持つてかれた可哀想な人。その癖オリ主に素知らぬ顔で怒られて、でも受け入れて頑張っちゃう凄い良い人。優れた仲間がいなかったため原作より全体的にパワーアップ。現在は一刀くんを独り占めしている。原作と違って独占欲は強め。

一刀くん↓言わずと知れた現在主人公。降りてきた場所が蜀なのに、オリ主に仲間兼ヒロインを根こそぎ持つてかれて苦労中。でもオリ主とは親友状態を保つ見た目も内面も完璧な超絶無敵のイケメン。劉備さんに出会って1カ月で襲われ、それでも男の責任を果たそうとする男の中の男。劉備さんと一緒に進化中。于禁さんについては、性技でオリ主に負けたのは悔しいが、正直劉備さんが怖いのでこれでよかったとも思っている。

袁紹さん達↓実はオリ主と会ったことあるけど書くのが面倒だったから割愛された。田豊さん出したくなったらたぶん出てくる。

袁術さん↓同じくオリ主にあったことある設定にしようと思ってやめた。張勳さんが好きなので、呉編で出ますたぶん。

太眉達↓正直存在を忘れてた。もしかしたら出る。

後はそのうち増やします。

1話 転生されたよ！

やあ、みんな大好き転生者の俺ですよ！

テンプレ的なアレで何と今、かの有名な恋姫無双の世界に生まれませ！面倒だから転生場面プロログ的なさむしんぐはだいたい飛ばしちゃうぜ！

もらった特典は2つ！金獅子レベル1400と緑の巨人だ。もうガツチガチのパワー系です！圧倒的パワー！だけどスピードはそこまでじゃないよ！パワーだから仕方ないね！でもパワー過ぎて肉のカーテンよりも防御力あるよ！隕石くらいなら無傷かな！やり過ぎたね！

何がって？モンハン好きのみんななら分かるよね？モンハン4Gじゃあギルクエラージャンのレベルは最大140なんだ！あのグラビモスサイズの岩投げてくるラージャンさんの10倍だよ、10倍!!さらにハルク！控えめに見積もつてもパワーは全キャラ中1位だと思っんだ！呂布さんでギリワンチャンあるかなって感じ？

え？ラージャンなんてパターン分かれば雑魚だろって？まあ実際廃人は千単位で狩ってるからそう思うよね。だからこう考えてみてくれ。

最大4人の狩りで1頭クエの耐久力を持ったラージャン同時10頭エリアチェンジ無しで戦うと思ってくれ。こう考えたら大分無理ゲーだろ?そこにハルクやで!強い
で?

神様も親切なひと?で、このままの特典では俺の身長は10メートル越えだったんだが、流石にキツかろうという事でギユギユツと圧縮して貰って身長は230センチ!人間にしたらまだだいぶ巨人だけど、トリコになったと思えばまあいいでしょ!神様に感謝!しかもこれだけじゃなくて、おまけで食べるものに困らないようにって四次元ポケット的な袋を貰ったよ!中身は日本でよく使った醤油、味噌、塩などの調味料各種と米だよ!これらは基本無くならないんだってさ!最高ですね!ホンマええ神様、今までなんとなく無神教というか無宗教だったけど信仰します!現金だけど許してください!
い!

そんなこんなで転生しました!まあ親とかいないんですけどね!気がついたら地上最強シリーズ的な装備でよくわからん山の中だったぜ!周りが比較的平らな地面だったから、ラージャンの身軽さで木を登らなかつたら森か山かの区別も怪しかったかもわからんね!これで属性耐性バッチリとか言ってる場合じゃなかった。せめてさらにク

ンチユウ装備も、とかそんな場合でもないよね。

まあいいや、とにかくそんな感じで俺の第2の人生が始まったのさ。

まあ激昂したらたというか変身したら角とか尻尾とか生えるから、人かどうかは分からないんだけどね！早くもやっちゃまった気がするぜ！その場のノリと勢いで特典決めると後で後悔する典型だね！みんなは気をつけろよ。

・・・いや、ホント。

恋姫なんて目的は色々あれど、可愛い女の子、つまりは人間と仲良くなるのがメインの世界で何で怪物になれる特典とか選んでしまったのか。転生時の俺はトチ狂ってたとしか思えんな。

おかげですっかり絶望した俺は、未だに山から出てないんだぜ、俺。夜が明けるときに木に傷をつけて数えてたんだが、もう30日目だ。つまり一月山の中にこもりつきりだ。そろそろ本当に獣になれる気がしてきた。

いやまさか、せっかく神様が身長を縮めてくれたのに、怒るとさらに変身するとは思って無かったね。よく考えたらハルクは怒ると変身するわけだから当然なのだが。

え？なんで気付いたのかって？

それはね、転生したての山の中で、ジャンプしたり大岩持ち上げたり大木蹴ったりして身体能力の高さを確かめて楽しんでたら、すっかり夜になってしまつて、ラージャンが入ってるから夜目とかは大丈夫だったんだが、せっかくだから神様がくれた四次元袋の食材で飯にしようと思つたんだよね。

善は急げとばかりに薪を集めて、身体能力確認の時うつかり殺しちやつた鹿を拾つて、川の近くでいざ米を炊こうとしたのさ。そこで気付いたのさ。

あれ？米を炊く飯盒も御釜も無いぞつて。

思わず叫んだね、神様お茶目か！つて。ドジっ子かよ！つて。

おまけによく考えたらライターもなければ火打ち石もない。そもそもあつても火打ち石とか使つたこともない。さらには拾つてきた鹿も、血抜きとか皮剥ぎとかの知識はマンガでたくさんあつたけど、まず刃物が無い。そういや地上最強シリーズつて元の

キヤラ的にナイフ腰に下げて無かったなって気付いたけど、そもそも腰装備ないやとか
思い出したけど、とにかくその時はそれでカツとなっちゃったんだ。こう、なんでやね
ん！的なの？

それで怒りに任せて地面殴ったら思わぬ威力で地面に大穴があいて（具体的にはビツ
クバンインパクト10個分くらい）、川の近くだったから当然川の水が入り込んで、と言
うかそこだけ池みたいになり、ちかくに置いてあった鹿は木っ端微塵になって流され、
地面を殴った反動で俺は天高く飛び、自分で開けた穴に落ちて泥だらけ、しかも前世泳
げなかったので一瞬溺れ死にかける、と言う転生1日目で間抜けな死に方をするところ
だったんだ。

というか、高い身体能力があることに気付かなかったらそのまま死んでたかも分からん
ね。

で、訳も分からなかったが、何か急に溺れかけ、夜目が効くとは言え急な事態に混乱
した俺は、考えるのを放棄して不貞寝した。そして朝起きて思い出してまたイライラし
ていたら、目の前に池があることに気付いたのさ。まあ前述した通り作ったの俺なんだ
が。

そこに反射した俺が映ってた。全身はだいたい濃い深緑で、ラージャンの様に虎の様
な横縞、これが何故か濃い紅色で、さらにはうしおとらのような長い長い金髪、

強面の顔とイノシシの様な長い牙! 極め付けは角! 何故か耳の斜め後ろあたりから正面に向かつて生える黒く太い角! 何故かラージャンじゃなくてディアブロスみたいな角! 腕とか脚とかが妙に太くて鋭い爪とかあつて、とにかく人じゃなかった。百歩譲つて人じゃないのはいいが、コレはどう見てもオークとかオーガとかそっち系だった。

俺は思つたね。何故せめてラージャンかハルクにしてくれなかつたのかと。

そして絶望した。このタイムリングでテンプレよろしく特典の使い方とか知識が流れ込んでできたのもあるがそれ以上に。

朝、寝起きの男性に起こる生理的特徴が、自身の大きな身長に見合うほどに巨大だったからだ。

〇〇コが大きくて、見た目も巨大なオークとかオーガ、おまけにここは女の子になつた三国志の武将とキヤツキヤウフフするためのエロゲが元の世界。そう、俺は……

……俺は、エロゲ世界における鬼畜キモオタ的な存在になつてしまつたのだつた。わざわざ転生特典使つて。

目指すはタイタンフォームとかビッグ・ザムとかそーゆー系だつたのに、結果は女騎士

とかをくつころする系になってしまった。貧弱なゴブリンよりはマシ、みたいな感じ。え、くだらない？ぶつ殺すぞこの野郎！女を守る系キャラを目指してたのに女を犯してなんぼみたいなキャラになった厨二が抜けないおっさんの気持ちがあるか!?

まあそんな感じで恋姫世界の可愛くて強い武将たちとの戦いと言う荒波に、当たる前に碎けた俺は、第2の人生が始まったその瞬間からすでに引きこもりと言う、どう考えでもお先真つ暗なスタートを切ったのだった。

続く？

2話 修行回をキンクリ。

やあどうも、前回テンパったり絶望したりしたオークとか系転生者の俺だよ！

いきなりだがまず聞いてほしい。何か悲しくなるからしばらく俺が性欲モンスター系転生者なんて話はなかった。イイネ？

では、あれからちよつと落ち着いて来たので、簡単に何が起きたかを纏めていこうと思うよ。

実は最後にちよつと書いたけど、なんか変身した後脳内に特典の使い方とかダウンロードされたのか、軽くなるなら自分の意思で変身できる様になった。もつとも、怒ると変身するのは止められないっぽい。山生活だと人間関係が存在しないので怒ることもあんまりない、そのため詳しい検証は難しいが。

基本的な機能は超パワーやスーパータフネス、回復能力などを含めたハイパーな感じの身体能力と言うか身体機能がメインで、後はラージャン得意の闘気硬化と雷が使い

た。この雷がレベル1400のおかげか多少バグっていて、ラージャンは口から以外ほぼ雷を出さないはずなんだが、全身からジンオウガみたいに体からバチバチさせるくらいの発電は可能っぽい。

なので、これを使って火を起こせる様になったのが一番の収穫だと思う。まあ火加減が難しく米は結局炊けていないし、とった肉は腕というか指先だけ変身させて、変身した爪で解体をしているが、実践経験が無いので今でもたまに内臓傷つけたりと失敗も多いが、調味料のおかげで何とか食えている。

ちなみに、変身して一度生で獣肉を食べてみたけど、変身したから生で食べた方が美味しいとか、そういう事は無かった。味覚とかは人間と同じらしい。まあ視力とか嗅覚とかは獣らしく強化されているので、さじ加減がよくわからないのだけけど。

とりあえず次生まれ変わったら特典はスキルのグルメとハンター生活をつけてもらう事にしよう。そうしみじみ思った。

手加減とかは微妙に覚えた。微妙につてのは、もともと強すぎるので、人間状態でも

結構簡単に石とか砕いちやう上に、変身すると熊とかでも普通に爪とか使わずに引きちぎれちやうので、人間相手に力加減が出来ているかは分からない。山の中過ぎて人間居ないしね。居ても危な過ぎて試せないが。

そんな感じで手探りでサバイバルしながら、脳味噌ダウンロードされた特典の知識などを実践したりしつつ、体を動かしていたら、いつの間にか山での生活に慣れて来た。初日に作った池もいい感じに飲み水確保に使いやすいし、あまり離れていないところに自然に出来た洞窟もあり、そこで寝泊まりしている。ちなみに先住民の熊さん夫婦は美味しくいただきました。

最初は虫が多くて寝てる間に襲い掛かる獣とかもいて大変だったが、その辺の虫やへびなどの毒とか効かないし、そもそも人間状態でも激昂ラージャン2体分くらいの身体能力があるらしく(ダウンロード知識参照)、普通の野生動物くらいなら俺の皮膚を牙も爪も針も通らない。

睡眠妨害に苛立つて変身して暴れたら、その日から俺の住処の周辺には動物は近寄ってこなくなった。どうも変身した俺⇨人間状態俺っていうのを覚えられたらしい。体臭とか違うのだろうか? まあ一緒ならその時点で近寄ってこないか。とりあえず狩りがやりにくくなった。

まあ虫には苦勞したけど、雷で火をつけられる様になつてからは適当に生木をくべて煙で虫除けをしている。さらに時間が経つと、岩や木を紙切れみたいに切り裂く爪のおかげで、石製の鍋と木製の器とか箸とか作れる様になり、だいぶ過ごしやすくなった。

早くもこのまま一生を山の中で過ごしでもいい気分になつて来たが、もうそろそろ人恋しい気もして、ちよつと悩んでいる。

つーか言葉は恋姫だから日本語で大丈夫だと思ふが字が書けない。どうしたものか。

一応この場所はくつそ山奥だが、明るいうちに変身して全力ジャンプしたらエリア移動時のラージャンもビックリの高さまで飛び上がった。着地も無傷で、ハルクパワーだと思ふがすご過ぎてよく分からん。ラージャンの足の細さが改善してるのは何かいい感じ。ともあれ、そんなスーパージャンプを何度か繰り返したら俺のいる山から2つくらい山を越えた先に川を発見、その下流に小さな村を見つけた。中国だと邑つて言うんだつたか？もう少ししたらポチポチ行つてみたい。

こ、コミュニケーションとれるかしら、と思わず女々しくなるけど、頑張らなくては。ラージャンでハルクなクリーチャーだからな。情けないのはダサくなるので気を付けよう。なりきりロールプレイという奴だ。

うん、そう思うとちよつと気合が入る。実を言うといい加減うる覚えの前世知識だよりの山の幸に飽きてきていて、ちゃんとした野菜が食べたいというのが人里に行きたい最大の理由だった。

本来山の幸は豊富で、うる覚えの食べられる山菜とか気にしないでも、別にキノコとか毒も効かないので食べても良いのだが、と言うか食べたのだが、ぶつちやけ毒キノコっぽい奴は味もそんなに美味しくないし、果物は時期外れなのか見かけない。肉も時期が悪いのか臭みが強い。四次元袋の中にある香辛料などで幾らかはマシだが、所詮素人のせいかな正直美味いとまではいかず、極めてやろうかと思わないでもないが、そんなことするくらいなら街まで行って普通に育てられた肉買った方が早いと思う。

何よりここが恋姫ならば時代に見合わない料理とかもあるはずで、こんなところでサバイバルしているよりはご馳走にありつけるはずだ。

まあ金は持ってないので、今のうちに熊やら猪やら鹿やらを買っておいて、肉や毛皮を四次元袋に放り込んでおかねば。それで人里で交換したり売ったりすれば幾らかは金になるだろう。

よし、そうと決まればもう少し獲物を狩り集めたら、人里に向かおう。それで出来れば野菜とかと交換し、近くの街への道とか聞こう。ぶつちやけ恋姫世界には自分で選ん

できたわけではないので、能力的には俺 t u e e e !! やりたい放題できるだろうが、別にしたいわけでもない。つくづく特典を間違えた気もするが、先のごとは一旦置いてこう。

よっしや、とりあえず今日はもう寝るか！待ってる人里！

そう気合いを入れて寝ることにした。

続く？

3話 設定忘れてたんじゃないよ!

やあみんな、転生してから結構な時間引きこもってたオーク系転生者の俺だよ!

前回から路銀とか野菜とか交換用に獲物狩ったり、長期ひとり旅用にうろ覚え前世知識で野草とかきのことか取って乾燥させて保存したり忙しかったけど、ようやく三ヶ月分くらい用意できたので早速山を歩いて人里目指して見てるよ!

実は最初の頃、肉とかきのことか山菜とか必死こいて乾燥させたり燻製したりしてたけど、よく考えたらその後結局四次元袋に入れるんだから最初から四次元袋に入れれば良いことに気付いて愕然としたよ!しかもどうやら四次元袋内は時間が流れないみたいで、2週間入れておいた生肉が何も劣化しなかったんだ!ファンタジーに良くあるご都合主義だね!さすがが神様分かってる!毎日の祈りは欠かしてないよ!名前も知らないけど!

更には変身時の俺の爪は凄いらしく、岩とか簡単に貫いたり斬り裂いたりできた。だ

からノリで食器とか鍋とか作ったよ！幾つかは狩り過ぎて余った熊とか鹿とかのモツ煮を作つて鍋ごと四次元袋に入れてみた。まさかの調味料扱いでチューブ生姜が入つてたからね、味噌と合わせて臭みとりに最高だった。多分大丈夫だけど中身溢れたら俺は泣く。食材取り出すたびにモツ煮の匂いとか嫌すぎる・・・！

現在はその中でも最大サイズの寸胴石鍋を背負つて歩いていきます。どのくらい大きいかと言うと、人間を立つたまま4人くらい煮込めるサイズ。大は小をかねると言うだろうか？実際は近くに水源がないと満足に鍋も作れないけどなか過ぎて！全然大は小を兼ねて無いね。

今はそれに5匹分の熊や鹿の毛皮、一部燻製した肉などを入れてる。まあ良く考えたら四次元袋とか人前でおいそれと使えないから、燻製肉とか作れるようになって結果オーライだった。つまり人外に変身とか人前で使えない特典は全然結果オーライじゃないよ。

まあそんな落ち込む話はさて置き、現在住処だった洞窟から出て2日、ようやく後1つ山を越えたら人里つて付近まできてる。変身すれば多分ジャンプ4回くらいで着くけど、人間状態だとハルクもラージャンもスピードタイプではないからか、そこまで移

動速度は速くない。俺がゆっくり歩いているのもあるけど。

ちなみに今は2回目の水分補給にちよつと谷を降りて川に向かっているところだ。四次元袋内にたくさんデカイ石鍋に水を入れて保存してあるのだけれど、ついでに魚も食べたくなったんだ。四次元袋に生きてる魚は入れられなかったからな。燻製魚ならたくさん入ってるけど。

え、メタ生魚入れておけて? みんなだつて倉庫にたくさん生肉入つててもアプトノスわざわざ狩つてその場でこんがり肉作るだろ? そんな感じだ。予備は予備なのさ。

あ、そうそう。せつかくなので名前をつけてみた。いくら恋姫世界とはいえ、前世の日本人な名前は名乗れないし、真名とか呼び合うのにもちよつと憧れがある。とはいえ、あくまで恋姫が好きなだけで三國志とか中華の歴史に興味はないので、細かい歴史や成り立ち、時代背景に興味は一切ないので知識もない。何か転生した時からきてるこの史上最強シリーズも中華っぽい服装でもないし、真名はあるけど姓も字もない蛮族的設定で行くことにした。

真名は前世で好きだったイマイチ擬人化してる生き物とそうでない生き物の境界線が分からない感動マンガの虎さんからインスパイアして『道玄(ドウゲン)』にした。共

通点は虎縞模様だけだ。あの虎さんカツコイイよね。

で、名前の方は何故か横文字の古代中国マンガでの蛮族イメージから羌族の羌と、好きなキャラの楽毅から『羌毅(キョウキ)』と名乗ることにした。ある意味全身凶器だし、特典も狂氣的だし、韻踏んでいい感じじゃないかなと思ってる。

・・・決して自虐では無い。

そんなことをしていると、風上から生き物の血の匂いと、何か声が聞こえてきた。こんなとこに人が?と思わなくも無いが転生後初の人間の声にちよつと感無量だ。ついでに人間ってこんな匂いと気配なんだなとしみじみ思う。

・・・おっと、どうやらしみじみしてる場合じゃ無いらしい。血の匂いと一緒にここ二ヶ月ほどで嗅ぎ慣れた熊さんの匂いと気配が感じられる。どうやら襲われているらしい。

このまま転生初の人間との邂逅が、人間(死体)になって『へんじがない、ただのかばねのようだ・・・』になつてしまう。急がねば。

急いで風上に向かい、角を曲がると、何か荒ぶつてる熊の背中と、それに隠れて尻餅

ついてるっぽい人間が見えた。よくわからんが怪我をしているらしい。熊が立っている様子から見て、まだ死んではないだろう。すぐに助けることにする。

といつてもやる事は簡単だ。背負っていた大寸胴鍋を静かに下ろし、できる限り気付かれないように気配を殺して、高い身体能力任せに一足飛びに熊の背後へ。慎重的には230センチある俺より一回りデカイ中々の熊さんだが、この大きさでもG級激昂ラージャン2体分の人間状態の俺には下位ジャギイと変わらない。後ろから首筋を掴んで思いつき後ろに引つ張って、そのまま投げ飛ばした。

一応殺してはいない。怪我くらいはしただろうが、川に向かって投げたし、肉も毛皮も有り余っている。力量差を察して逃げてくれれば追わないつもりだ。熊の方へ向けてた視線をすぐに前へ向けた。

そんなことよりまずは目の前の人を、と思つて見下ろしてみると同時に驚愕する。何故こいつがこんなところに？

どうも何かに引っかけたようなボロボロの服、凄い見覚えあるのある青龍刀みたいな

槍、女性らしい膨らみをもった身体に、強い意志を込めた瞳、何よりも長く美しい黒髪――。

かの有名な美髭公ならぬ美髪公、関羽雲長がそこに居た。

・・・いや、なんでやねん。

4話 関羽さんマジ関羽さん

やあみんな、そろそろ鳥の唐揚げが食べたい見た目は人肉食いそうなオーク系転生者の俺だよ！

親方、熊さんを吹っ飛ばしたら女の子が！

と思わず名シンの妄想が浮かぶが、現実逃避しても始まらないな。何度瞬きしても変わらない、二次元が三次元になったことで若干見た目が変化しているが、恐らく目の前のポロポロ美人は関羽さんだろう。青龍刀みたいな槍持つてるし。名前忘れたけど転生者だったりしなければ間違い無いはず。衣装的にもこんな感じだった。何故こんなところにいるのかはさっぱり分からんが。

・・・それはさておき、その助けた亀さんならぬ関羽さんに、現在進行形で何故か俺睨まれています。なにゆえ？確かに身長はかなり高いし、人間状態とはいえ筋肉モリモリだ。熊さんみたいなものではあるが、熊ではないので安心してくれても良いのではなか

ろうか？

とりあえず、ざつと見てみると深い傷はそんなにないものの、結構あちこちから服が破れて血が滲んでいるし、右肩から胸元にかけて少し広めの浅い傷が2本、極め付けは右足の太ももというか膝だが、恐らくこれは脱臼している。でも多分折れてはいない。前世で田舎の整骨院やつた俺の目が狂つてなければ、だが。

軽く周りを見渡すと、少し高い崖があつて、そこから引きずつたような跡がある。崖自体は本当にそんなに高くはない。せいぜい10メートルくらいだろう。前世のひ弱な日本人ならいざ知らず、ラージャンな俺でなくとも恋姫武将なら武器を持ったまま無傷で飛び降りられる筈だ。本当にそんな程度の崖なので、原因は恐らくその前か。

服をみると膝裏や袖周りなど泥や草がこびりついている。昨日まで軽く雨が降っていたし、上の方から滑り落ちて無理な体勢で着地したとかそんなところだろう。

・・・そのまま熊と戦うとか、シレンさん並みの不幸つすね。落とし穴落ちたらモンスタールハウス！みたいな。

だがまあ、浅いとはいえあちこち傷だらけだし、幾ら恋姫世界とはいえ、消毒薬や傷薬が普及しているとは思えないから破傷風やらの病気も怖い。なので一応声をかける

ことにした。

「大丈夫か？」

「ひっ……」

な ん か 怯 え ら れ た

なんでやねん。いくら俺がかの種馬一刀君ではないとは言え、もうちよい何かあるやろ！胸キyun展開やなくともありがとう！とかあるやろ！顔か!?顔がイケメンやなきや女助けちやいけなけんか！まず女かどうかも分からず助けたんだから仕方ないやろ！ただし、イケメンに限る。ってか？やかましいわ！

……ん？あれ？

そうか、顔か！

その答えに行き着いた瞬間、一気に冷静になった。よく考えたら今の俺、人間状態だ

けど見た目は角の獅子目彦だった。今まで描写忘れげふんげふん、もとい山籠りして人に会つてないから気付かなかつた。眉なしコワモテで、目は三白眼の身長230センチ、筋肉モリモリの大男、それが崖から落ちた女の前に佇んでたらどう思う？

・・・すごく、山賊です・・・。

そりゃ怯えるわ！よく見たら睨んでる目も若干涙目だし、槍持つてる腕も何かプルプルしてるから、結構長い間熊と戦っていたのかも知れない。そんな中急遽現れた蛮族的大男。そりゃ警戒とけねえわ！危機一髪どころか一難去つてまた一難だよ！助かつてないんだから助けてくれてありがとうも無いわな。

とりあえず、根気よく話しかけて敵じゃないアピールしとくか。このまま見捨てるのは寝覚めが良くないし、何よりも美人の損失は世界の損失だ。というわけでもう一度声をかけてみる。大丈夫かー？

すると今度は少し現状を理解できたのか、関羽さんらしき人の目から少し力が抜けて、同時に槍を持つ手も下がった。よし、第一関門突破かな。

と、思ったら急に焦った様に槍を持ち上げ、尻餅ついたらま構えた。なんぞ？

「あぶないっ！」

ん？何かと思つたらさっきの熊さんだった。逃げてなかったのか。関羽さんに会つた喜びで忘れてた。熊さんは全力で後ろから俺を抱きしめつつ、首筋に噛み付いている。ああ、関羽さんがメツチャ青い顔して槍持つて立とうとしている。あ、転んだ。そりやそうだ。

まあ大丈夫だから落ち着け。その怪我で動くと後が怖い。手当てするから座つてなさい。そう優しく声をかけてみた。

「何を呑気な！その状態で！．．．あれ？」

何か心配してくれたらしい関羽さん。流星は未来の猛将、すぐに冷静になつたらしい。

「血が．．．出てない？いや、そもそも噛めてない．．．？」

そりや呑気でいるさ。この程度では俺に傷1つどころか菌形さえつかない。いくら人間状態でもG級激昂ラージヤン二頭分の身体強度を持つ俺に、下位のアオアシラにも勝てない様なただのヒグマが全力出したところでこうなるのは当然である。服でさえモンスター素材を使った地上最強シリーズなので破れてさえない。

まあ、これが普通の人間なら後ろから首筋を熊に噛まれたら、その瞬間出血がどうかではなく、首の骨と一緒に肉を喰い千切られて即死、それを防いでもこの後ろから抱き締めている爪に皮膚を引き裂かれて内臓ポロポロこぼして出血死かショック死、服が引き裂けない様な強力なものでこの怪力で圧死する。普通の人間ならこの時点で3回は死ぬるだろう。

だがあいにく俺は見た目は女を襲いそうなモンスターの代名詞オークさんだが、中身はレベル1400の極限ラージヤンとアメモミ界でもパワー系最強クラスの緑の巨人ハルクを融合させたみたいなハイパーパワー系転生者の羌毅さんだ。フリーザさんの言えばまだ変身を二回残してる様な状態とは言え、こんなもんで死ぬはずもない。

とりあえず関羽さんを安心させる為、あえてゆつくりと熊さんの拘束攻撃を外し、そのまま力で無理矢理抑え込んで脇の下に熊さんの頭を通して首を絞める。

残念ながら力の差を見せた上で牙を剥いてきたのだ。もう逃す気もない。このまま絞め殺す事にしよう。

ゆっくり力を入れて、窒息させる。人間状態でも全力出せば首の骨を折ることも、首を引きちぎる事もできるが、出来るだけ傷を付けたくない。このまま絞める。その際拘束を外そうと熊が頑張つて俺の腕に爪を立てるが、俺の腕は現在全部位中最高硬度を誇る。何故なら締めやすい様に闘気硬化中だから。故にまるで金属を引つ掻くような音を立ててはいるが、まあ無傷だ。

やがて熊が糞尿をこぼして、そのまま死んだ。きちんと解体してやりたいが、まずは関羽さんだ。とりあえず体を洗う意味も込めて目の前の川に沈めて、俺自身も手を洗う。関羽さんの手当てするのに野生動物触った手ではね。まあ気休めみたいなものだが。

さて、川から上がり再び関羽さんの元へ。何か呆然としてるが、目の前で熊さんが生身の人間に絞め殺されたらそれも仕方あるまい。気にせずしゃがんでできる限り視線を合わせつつ、意識を戻してもらうため、話しかける。

「とりあえず動かないほどの怪我はその右膝だけか？他にも動かないところとか、分かるか？」

「・・・ハッ!?!い、いや、あと左の足首が少し・・・」

声を掛けられて気付いたのか、関羽さんが小さく報告してくれた。ふむ？どれ、と左足首を持ち上げてみる。その際小さい悲鳴が聞こえたが、痛みと若干羞恥が混じっていた。まあスカートだからね、仕方ないね。見ないし緊急時だから許してね、と心の中で謝りつつ触ってみたが、腫れてはいるものの、骨折までは多分いつてない。関羽さんの表情であたりをつけ、まずは右膝を先にやる事にする。

「見た所、今すぐ対処しなければならぬのは右膝だけだ。脱臼している様だから嵌め込もうと思うが、かなり痛い筈だ。覚悟はいいか？」

まあぶっちゃけ脱臼だってそんなに急がなくてもすぐさま命に関わってきたりはないと思うが、こーゆーのは後に回すと怖いからな。早いに越したことはないだろう。かなり痛い。

いきなりの事でまだ少し困惑しているらしい関羽さん、痛いけど覚悟しろって唐突に

言われたのにも関わらず、逡巡は少しだけで直ぐに覚悟を決めた顔を見ると、俺の方を真っ直ぐ見て言った。

「……ありがとう。大丈夫だ、やってくれ。」

それを聞いた俺は、一度大寸胴鍋まで戻ると、鞣した毛皮の一部を切り取り、毛のある方を内側にして丸める。それを持って戻り、関羽さんの口に噛ませる。噛み皮だ。舌を噛んだり、歯を噛み砕いたりしない様に、念の為だ。

そして、行くぞ？と声を掛けて、彼女が領いた瞬間一気に引つ張っては元の位置に戻しつつ嵌め込む。力加減には細心の注意を払う。この体になって初めて人間に会って触れている。うっかり引きちぎる可能性もある体だ。ぶっつけ本番で申し訳ないが、とりあえずうまくいった様で良かった。

「~~~~~ツツ!!」

声にならないくらい激痛を必死に耐える関羽さん。落ち着くのを待つて、膝が動くか確認をとる。痛いだろうが、脱臼したときに神経でも傷つけていれば事だ。この時代に21世紀の最新医学みたいに動かさないで体の不調を調べる術がない以上、我慢してもらおう他ない。

涙目になりながらもゆっくりと右膝を動かす関羽さん。とりあえずは大丈夫だな。当然歩くのは暫く無理だろうが。

1番の大怪我の手当てが終わったので、もう一度左足首を見るが、こちらは恐らく捻挫だろう。軽く固定すればいいな、これは。

さばつと終わらせて他の部分を見る。関羽さんに噛ませていた毛皮を取り、改めて全体をみると、落ちてくるときにどうも山肌を転がり落ちてきたのか、様々な部分から服が破れて血が滲んでいる。おまけに胸元の傷だ、これはちよつとまづい。本気で破傷風になりかねん。

努めて無関心な真顔を維持しながら、渋るといふか恥ずかしがる関羽さんに謝りつつ、このままでは死ぬとちよつと脅しげふげふ説得して、頭から雑念を追い払うため脳内で般若心経を唱えつつ彼女の服を脱がす。

わーい関羽さんセクシーシーンってかモロ！恋姫のエロ画像散々見たからまるで感動はないけど！

顔は真顔で固定したままお姫様抱っこして抱え、川で体を洗う。傷口に土や木屑、砂利などが残らない様に、痛いだろうが丁寧に傷口の中まで洗って流す。残念ながら消毒液も消毒用アルコールもないが、そのままにするよりはいい。後で大寸胴鍋で湯を沸かしてもう一度洗ってあげよう。決して関羽さんの綺麗な裸がもう一度見たいとか恥ず

かしがる関羽さんが可愛いとかではない。無いったらない。

川から上がると、谷というか川縁のためゴツゴツした石ばかりなので、売り物用の毛皮を三枚重ねて敷き、ささつと流木を集めて関羽さんから見えない様に指先を変身させて火をつける。时期的にそこまで寒くもないが、水浴びして裸でいる様な気温でもない。少し大きめに火をつけ、その近くに毛皮ごと関羽さんを連れてきて、この数カ月の間に山で集めたウドの茎やドクダミやヨモギなど、消毒効果、解熱作用のある薬草をいくつか取り出す。・・・天ぷら用にとつと良かった。

さも大寸胴鍋から取り出したかの様に石鍋を2つ出してかわの水を汲み、両方とも火にかける。その後薬草をすり潰して混ぜ合わせ、傷口に塗る。しみて痛いし、薬草臭いが我慢してくれと頼み、体が冷えない様に残りの毛皮を掛けて横になつてもらおう。毛皮三枚重ねとは言え石畳だ、痛いだろうがこれ以上は望めない、他の作業に取り掛かる。

今度は大寸胴鍋から中身を取り出して川で洗い、水を汲む。そしてそのまま火にかける。後で体を洗う用だ。

そして川に沈めておいた熊を引きずり出すと、いくつか木を倒して枝を払い、物干し竿様な形に固定すると、熊の解体を始める。

この辺りで恥ずかしくて顔を隠してた関羽さんが、おずおずと毛皮から顔をちよつとだしてお礼を言ってくれた。これまで自己紹介も無しにすごい事してしまっただけど、是非ノリで流されて忘れて欲しい。

まあ俺の方は忘れるとか無理だけどね！関羽さん可愛すぎな件。

だが今の俺は獅子目言彦的見た目のオーク系転生者、羌毅さんだ。そんなことを考えながら努めて平静を保ち、裸を見たけど医療行為なので何も感じてない風な態度をとり続ける。そうでないと正気に戻った関羽さんに斬られかねん。

しばらくすると、会話が無くして間が辛いのか、意外にも関羽さんから話しかけてきた。自己紹介に始まり何故あんなところで熊相手に死にかけて他のかも教えてくれた。その間俺は熊解体をしながら無口キヤラっぽい雰囲気を出すため、努めて口数少なくほとんど相槌を打つだけにした。

その話を纏めると、どうも俺が見つけた村よりさらに一つ山を越えた先に村があり、そこそ俺が目指した村は村同士の交易があったらしい。

それがその途中の山に賊が住み着いてしまい、人数がそこまで多いわけではないが、それでも山奥にある様な小さな村に対応できる様なものでも無く、交易品を奪われたり、作物を要求されたり、女性を攫われたりと散々だったらしい。

そこで正義を胸に抱く関羽さんが旅の途中に立ち寄り、困ってる民を見捨てては置けぬ！と賊退治を買って出たそう。幸い人数が30人前後で、自分1人でなんとかならんと踏んだ関羽さんは1人山に入り、賊退治を開始した。

実際に山に入ってみると、どうも賊は略奪が上手く行き過ぎて油断しきっており、アジトの見張りもザルで、簡単に追い詰められ、割とすぐに過半数の25人を倒すことに成功したんだとか。

だけどそこから山の天気が変わり、雨に降られ、残った数人の賊がバラバラに逃げた。逃して再び村を襲われては敵わぬと、なんとか慣れぬ山道を追いかけ、3人ほど斬り殺したが、残る数人を追いかけて居た時、罨にかかって奇襲を受け、さらに2人ほど斬り殺したものの、ぬかるんだ地面に足を取られたこともあり、崖に突き落とされてしまったそうだ。

もうこの時点で普通ならなんで生きてるの？って感じだが、まあ恋姫世界の武将ならこれくらい笑いレベルなので気にしない。やばいなはこれからだ。

その後はほぼ俺の推察通りにあちこち体を枝などに引つ掛けつつ転げ落ち、谷付近の切り立った崖に勢いで落ちてしまい、何とか足から着地したが、散々転がったせいで上手く体勢を直せず右膝を脱臼し、その際に左足首を捻挫してしまい、だが何とかしようと周りを見たら、ちょうど川が見えたので傷口を洗うために、喉も渴いていたため水を飲もうと這いつくばって移動しようとしたら、水を飲みに来た熊と遭遇し、逃げることもできないまま戦闘開始、したのが昨日の夕方日が沈む頃、だそうだ。ちなみに胸元の傷は最初の攻撃を避け損ねて掠ったものらしい。

・・・なんとというか、頭おかしいよな。特に最後の。

何処の世界の修羅ならそんなダメージ受けたまま12時間以上熊と死闘を繰り広げられるんだ？ 下半身ほぼ使えないんだぞ。

「・・・良く生きていたな。」

「正直、私自身奇跡だと思っています・・・」

まさしく奇跡だよバカ野郎！

あつぶねえ！後少し遅かったらいきなり原作キャラが知らぬ間に退場してたよ！桃園の誓い不発するよこだよ！

「本当に羌毅殿には心から感謝しております・・・！」

なんかすごい心込めて感謝されてるけど、それは正直ただの偶然だから気にしないでいい。むしろ俺の方がこんな出会いに感謝ですわ。結果的に助けられて本当に良かった。いきなりヒロイン死ぬとか笑えなさすぎる。

そんなことを考えながら熊を解体し、薬草はもう無いので、この後の傷薬代わりに熊の油を片方の鍋に入れ、溶かしたあと冷やしておく。熊の爪でつけられた傷は残らないと金の神でやってたが、本当かどうかわからんし、胸元の傷が残らないといいが。一刀くんはこんな事気にするようなイケメンでは無いと思うが、関羽さんが気にすると可哀想だし、こういった薬は切らさないようにしよう。

取り敢えず血が足りない関羽さんに、レバーやハツ、ハラミなどの内臓肉を纏めて叩き、山で取っておいた行者にんにくとニンソウ、塩とオールスパイスを入れて、さらには腹腔に溜まったプルプルの血液と混ぜ合わせる。そして熊の小腸を裏返して川の水で良く洗い、混ぜ合わせたアンを詰めていく。そのまま鍋に投入し、火が通ったところで取り出してぶつ切りにして、自然薯などの山菜と共に再び鍋に放り込む。生姜と味噌で味付けし、再び煮込む。

肝心の熊肉は解体だけして置いて取り敢えず毛皮に包む。硬いし熟成もしていないので、弱った？ 関羽さんにはキツイだろう。怪我以外は空腹と寝不足らしいので、これを弱つてるといっていいのかわかんが。

鍋が煮えるまでの間に別の鍋を密かに取り出して、米を研いで水に浸けておく。未だ上手く炊けないが、粥なら問題ない。明日の朝用だ。怪我の具合的に、関羽さんは二、三日動けないし、まだ日が高いが、ここで一夜を明かすことにしよう。幸い雨はもう降らないだろうし、川の水が増える心配もないはずだ。朝になって状況次第で場所を移動し、関羽さんの左足首だけでも軽くなったら移動しよう。

そう提案すると申し訳なさそうに「かたじけない」とお礼を言われた。まあ正直もうちよい男の俺を警戒した方がと思わなくもないが、やろうと思えばいつだって襲えていたし、信用されたと喜ぶことにする。実際は今襲われたらどの道どうしようもないと諦められただけかもだが。

ともあれ、器を四次元袋から取り出して、俺特製、超滋養強壮ブラッドソーセージの生姜味噌鍋である。病人食のため、味は薄めだ。肉は重いかもだが、内臓にダメージを負ってないだろうしいいだろ。たぶん。

一晩貼り続けた気が抜けて、寝落ちしそうな関羽さんに頑張ってもらい、ご飯だけは

食べてもらう。なぜか瞠目して驚かれる。あれ？不味かったかな？と心配して聞いてみると、逆に美味しすぎて驚いたらしい。色が色なので食べられるか不安だったとも言われた。

・・・あれ、味噌ってまだ普及してないのかな。いや恋姫世界だし、麻婆とか普通に食べてなかったか？いやゲームというか原作はやってないから知らないけど。まあいいや秘伝とか適当言って誤魔化しておく。

とにかく味がよければ問題あるまい。起き上がるのは辛いが腕と口を動かす分には問題ないらしいので、関羽さんの後ろから支えて体を起こしてあげつつ、ご飯を食べてもらおう。賊退治から今までずっと食事を取ってなかった事を思い出したらしい、良く食べる。

結果的に結構な量を一人で食べて、申し訳無さそうな顔して謝られたが

俺的にはむしろ美人さんが美味しそうに手料理をたくさん食べてくれたので満足である。また作れるから気にしない様にいい、起きたら食べられるように次も作っておくので、もう寝るようにと支えていた体をゆっくり倒して肩まで毛皮をかける。枕は無いが勘弁して貰おう。

恐縮していたが、やはり疲れていたのだろう。最後に調味料を水に混ぜて作った薄めの経口補助液擬きを口にすると、深い眠りに落ちていった。

さて、今日の風呂は無さそうな眠りっぷりなので、取り敢えず大寸胴鍋の火は消そう。そして脱がした関羽さんの服を川で洗い、下着類も含めて火のそばで乾かしておく。縫い針が無いので破れた部分は繕ってはやれないからそれは放置。あとは火を絶やさないう様に薪を拾いつつ、野生動物に襲われない様に関羽さんの看病をする。

この分だと今日どころか明日の昼ぐらいまで寝るかもしれないなあ、なんて美人の看病をするなんて前世じゃできなかつた状況にわくわくする俺であった。

結局不謹慎だな、と落ち着いたのは、関羽さんが目覚める翌日の朝になってからだ。た。

続く？

5話 いつから俺が話してたと錯覚していた？

やあみんな、平静を装って見ず知らずの女性の全裸を見た最低オーク系転生者の俺だよ！

そんなこんなであれから2日たった。

もちろん川縁では俺が寝にくいので、途中で木を倒して簡易の小屋というかテントもどきというかそんなを作りました。一応雨風くらいなら少しくらい大丈夫です。まあ運良く雨は降ってこなかったんだけどね！

ちなみに、これまで上手く動けなかった関羽さんのお風呂や着替えは私がやりました！半ば怪物然な見た目が逆に性的オーラを誤魔化したのか、関羽さんも慣れて来て申し訳なさそうな顔をしつつもなすがままです。

ふ、計画通り・・・！（ゲス顔）

実際は動かせないのは下半身というか、右膝付近だけなので、靴下や靴以外の着替えとか俺がやる必要ないんだけどな！関羽さんスカートだし。

異常な状況ですが、最初に俺が無理矢理手当てした際のやり方が普通となっていて、す。「仕方ない今は怪我してるし」という相手の弱味が異常と気付かせない・・・精神的に弱ってる人に刷り込む怪しい宗教的海口が上手くいつています。

え、女の子の弱みに付け込むクソヤロー？ハハッ、知ってるけど何か？どうせこの後一刀君に全部持つてかれるんだからちよつとくらいいい思いしてもバチは当たらん！普通の状況に戻って正気になる前に姿を眩ます予定です。まさに最低系オリ主！実際はオーク系だがな！

とはいえ、流石にどんなに異常な事態でも、関羽さんくらいの常識人なら、普通はこんな簡単に騙せない。なら何故大丈夫かというと、どうも俺の表情にあるらしい。

どうやら俺、勘違い系オリ主に良くある無表情キャラらしい。見た目が獅子目言彦の無表情キャラ、なるほどエロい気持ちなんか無さそうな存在だな！実際はそれを隠れ蓑にしてるだけだが。体とか触ってるけど一応医療行為だからセーフセーフ。

途中山の中に入って薬草なんかも採取し、熊の油パワーもあってか、もしくは関羽さんの回復力かは分からないが、右肩から胸元までの広い傷を残して、浅い擦り傷なんかはほぼもう治り、脱臼した右膝の腫れもだいぶ引いてきた。左足首も多少違和感あるものの、片足で立っても大丈夫みたいだ。

・・・いや、やつぱどう考えても頭おかしい回復力だな。恋姫の武将みんなこんなのか？だとしたら変態の域だが。

それはさておき、そんな感じでだいぶ傷も治った関羽さん、戦闘はまだ無理でも誰かが背負っても傷が痛む、なんてレベルじゃなくなつたので、現在俺の大寸胴鍋の上に乗ってもらい、一緒に背負って山越え中です。

俺が道を知らないので関羽さんに行商が通る道がある所を教えてもらい、そこをまず探している。山の中過ぎて大荷物を背負つての移動は大変だからな。特に背中の中の鍋の上の関羽さんは枝とかに引つかかりやすいのでずっと頭を低くしている。辛そうだが、歩かせるわけにもいかないし、お姫様抱っこしたら俺の両手がふさがるので、結局枝を払ってやれない。上から分厚い熊の毛皮でも被ってもらい、これ以上服が破れたりしないだけで許して欲しい。ごめんよ。

ちなみに、今向かっているのは関羽さんが賊退治の依頼を受けた村の方だ。

ここ数日で多少仲良くなったので、近くの村の様子を聞くと、どうやら関羽さんが依頼を受けた村の方が、俺が最初に見つけた村よりも大きく、医者はどちらの村にも居ないが、旅人に宿を貸す余裕くらいはあるらしいので、当初の予定を変更して、そちらの村に向かっていた。ついでに、関羽さんが依頼された賊のアジトに寄って、再び集まっていたのかも確認する。

これはほぼ関羽さんが賊を壊滅させたが、全員か確認出来ていないためだ。まあ残っていない人も数人程度のため、村を襲うことは出来ないししないはずだから、ただの確認である。賊も一度発見され、完全に突破された隠れ家にもう一度戻るほどアホじゃないはずだし。

むしろ攫われた女たちがどうなったのか気になる。関羽さんが言うには、バラバラに逃げた賊を追う時、牢の鍵は壊したらしいし、上手く逃げてるといいが。

「……あの、羌毅殿。本当に私重くないでしょうか？」

唐突に上から関羽さんが聞いてきた。どうも助けられた俺に長時間背負われているの

で、自分の体重が重くないか心配のようだ。この質問は3回目である。

ぶっちゃけ元々の荷物の特典で関羽さんの5倍近い重さがあるし、俺の身体能力は激昂ラージャン2体分。気にするだけ無駄であるので、3回目だが、もう一度大丈夫だから気にしない様に言う。そんなことより膝は大丈夫だろうか？

「あ、はい。怪我の方は大丈夫です。運んでいただいでるので痛みません。」

ならば良い。助けたのは俺だし、毒を食らわば皿までという言葉もある。最後まで責任持つて面倒を見るのは当然だ。気にすることはない。そんな感じの事を言うと、少し嬉しそうな感じで礼を言われた。恐縮していた頃に比べて慣れてもらえたようなので、素直に受けといた。

そうこうするうちに、賊のいた隠れ家に到着した。どうやら自然に出来た洞窟を元に隠れ家にしていたらしい。ちよつと賊に親近感が湧く。後ろの関羽さんに怒られそうだから言わないけど。

「・・・羌毅殿、これは・・・。」

すると後ろから真剣な声の関羽さんが俺の頭に顔を寄せてきた。もちろん気付いているので安心して欲しい。

「やはり。．．．どうしますか?」

どうやら賊の残党は本当に阿呆らしい。5人ほどの気配が隠れ家からする。戻つて来たのだろう。荷物や財産だけ持つてとつとと逃げるべきだろうに。いくら荒事に慣れていても5人ぼつちじや100人以上はいる村を襲えないのだから。

ぶつちやけ放置でも構わない気もするが、人数が少なければそれはそれで出来る犯罪はある。せつかくだからきちんと退治しないと、後で村人が困るし、叩いておこう。そう言うのと関羽さんは一瞬嬉しそうな顔をしたが、直ぐに申し訳なさそうな顔に変わり、声のトーンを落としていった!

「しかし、申し訳ございません、まだ私は自衛が精一杯で．．．」

まあともに立つのも辛い状況で槍は振れないだろう。分かっている事なので、俺がやるので気にしない様に言う。自分の尻拭いみたいで口惜しそうな関羽さんだが、あつて数日でも友人のつもりだ。だから頼つてくれて構わないの良いこと風なこと言つてうやむやにした。俺関羽さんを誤魔化しまくりワロタ。

大寸胴鍋鍋から中身を取り出し近くに隠して、関羽さんは動けないので逃げられないから、万が一外から他の賊が合流することも考え、空の大寸胴鍋に関羽さんに入つてもらい背負っていく。洞窟内は狭いから槍は満足に振るえないだろうが、同じ理由で矢が

飛んでくることもないはず。この大寸胴鍋は石製だから割れないように厚めに作ってあるし、内部でしゃがんでいれば怪我をすることもないだろう。そもそも関羽さんに危険がないように俺が頑張る予定だが、まあ俺人間相手は初戦闘だからな。

・・・関羽さんは何故か俺を百戦錬磨かなんかと勘違いしてるっぽいので、期待を裏切らない程度に頑張りたい。

それはさて置き、毘もクソも気にせず羨殺、いつきまーす！

そんな感じで関羽さん入り大寸胴鍋を背負って内心かなり気楽に突っ込む。ラージャンだから大丈夫ラージャン。暗闇を見るのは完全に特典任せですハイ。

入って数十秒で賊と遭遇。本当に狭いのね、ここ。たぶん昔はたくさん人が居たであろう広間には、僅かな木箱と残って居たらしい酒を飲んでる賊ども。

なんか驚いているか、俺もこんな洞窟で結構普通に火を明かりに使ってる賊に驚く。酸欠になったりしないのだろうか。

ともあれ酔っ払いながらも直ぐに武器を取り向かってくる賊。こちらが臨戦体勢なのを感じたようだ。俺はよく考えたら洞窟にもう一つ外に繋がる出口ないと最初の関羽さんの襲撃で逃げられないか、なんて答えに行き着いて納得して居た。

ガキーン！と音がする。見ると賊どもが持っていた武器が壊れたり、予想外の感触に

驚いたのか、単純に硬さで手が痺れたのか武器を落としたりしていた。

まあ関羽さんクラスならともかく、こんな村人崩れの賊如きに熊さんの全力爪攻撃以上の攻撃力などあるはずもない。人間状態だが、闘気硬化の使用すら必要ない。なんか賊があいつ刃物通らないんだけどマジで、って言ってる気がするが気にすまい。

未だ驚愕している賊の下へ、一息に近付くと片手で1人の賊の腕を掴んで持ち上げ、もう1人の頭に叩きつける。重い音がして1人が沈む。頭蓋骨が凹んで首が胴体に埋まっている。即死だろう。同じく叩きつけたこちらの人間も叩きつけられた胸が大きく陥没している。即死じゃないが助かるまい。そのまま投げ捨てる。

目の前の事態が理解できていないらしい賊を尻目に3人目に一足飛びで移動、首筋付近に手を水平に振り抜いて、そのままの勢いで回転、近くの賊の腹を蹴り飛ばす。胴体が大きく消し飛んだがこれで4人目。

最後の1人がようやく逃げようとしていたが、3人目のズリ落ちてきた頭を掴んで投げ、砲弾のような勢いの生首は最後の1人の背骨を着弾と同時に打ち砕く。勢い余って内臓を破裂させたらしい。後ろ向きでもわかるくらい血を吹き出して最後の1人が死んだ。

僅か数秒の事だが、何気に初の殺人である。ちよつとブルーな気持ちになったが、驚

いたことにそれだけだ。まだ純粋な食欲で襲いかかってきた熊を殺した時の方が罪悪感を感じた気がする。

ともあれ、賊退治は終わったので関羽さんを下ろす。よく考えたら後ろの関羽さんのことを全く考えてない速度を出してしまった。大丈夫だっただろうか？申し訳ない。

そう謝ると、関羽さんは笑って気にしないでと言ってくれた。しつかり掴まって居たのと、僅か数秒だったので特に問題はないそうさ。良かった。

関羽さんを抱えて、分かりにくくなってしまった賊を確認してもらい、ついでに洞窟内部も探す。他に賊の姿も無く、俺が殺した賊も関羽さんを崖から突き落とした連中らしいので、これでたぶん本当に賊退治は終了だろう。隠れ家からは、いくつかの金品が出てきたので、恐らく村人のものだろうと、ついでに返しにいく事にした。食糧とかは結構あつて持つていけないし、必要なら場所を教えて自分らで取りに行つて貰おう。

そうしてさぱつと洞窟を出ると、外に隠して置いた毛皮類を回収し、その上に関羽さんに乗せて、今度は村を目指して歩き出した。

話によると、急げば日が暮れる前には村に着くそうなので、昼飯は申し訳ないが、

保存食で我慢してもらって、移動しながら食べて貰う。そう言うのと関羽さんは最初複雑な表情をしたが、燻製肉を一口食べると一転して元気に食べ始めた。

なんでも保存食は基本不味いので、ここ最近の俺の調味料をふんだんに使った食事に慣れてしまった関羽さん的にはブルーな感じだったらしい。が、俺が急ぐと言った以上、乗せてもらう関羽さんとしては断りにくい。仕方なしに食べたら自分の知っているものと違って美味しい！と言う事らしい。

ますます恋姫世界の食事に不安を抱く。ひよつと街でもこんな感じなのだろうか。俺が街に降りる意味がだいぶなくなるんですがそれは。

そんな風は無表情のまま落ち込む俺に気付かず、燻製肉の他にも、その他手作り保存食を食べながら上機嫌な関羽さんは、先ほどの戦闘を褒めてくれたり、保存食を分けて欲しいとか話して掛けてきた。

俺は適当に相槌を打ちながら、少し急ぎ目に村へと向かったのだった。

あれからしばらくして、何とかまだ明るいうちに村に着いた俺は、初の人里にウキウ

キで入って怯えられ、背中に乗った関羽さんに慰められるというイベントをこなしたあと、おつかなびづくりの村人にやんわり歓迎？され、関羽さんと共に、村の空き家に泊めてもらうことになった。ちなみに関羽さんの服は村人の奥様方が好意で繕ってくれる事になり、現在はゆつたりした着物みたいな服を装備してる関羽さん。明日の昼までには直してくれるそうだ。やったね関羽さん！

賊を倒した事を報告した関羽さんがお礼として幾ばくかの礼金と、たくさんの食材と料理を貰ってきた。もちろんまともに動けない関羽さんごと、運んだのは俺だが。

俺はといえば、当初の目的通り毛皮を肉を、たくさんの野菜や小麦粉などに変え、ホクホクで四次元袋にしまったところだ。もうめんどくさくなつたので、関羽さんには他言しないように頼んで気にせず放り込む。いやあ、この数の肉や毛皮はこの村の猟師が賊に殺されて以来中々手に入らなかつたらしく、そのぶん野菜を増産して居たので、多めに野菜を貰えてラッキーだった。

四次元袋に驚きながらも関羽さんは、他言しないと誓ってくれたが、それ以上に日々の布団がわりの毛皮がなくなつた事を残念そうにして居た。まあ寝やすいからな、アレ。

もちろん関羽さんは、毛皮は俺の持ち物なので文句など言わないし、自分1人じゃ熊の毛皮3枚分は持ち運びも面倒どころじゃないと理解している。だからちよつと寂し

そんな顔をするだけだ。

くっ！しかしそれが何よりも卑怯だ。美人のこんな顔を見たら、思わず何とかしてあげたくなるじゃないか！

・・・だから思わず四次元袋の中にまだある事を漏らしてしまつた俺は悪くない。嬉しそんな顔の美人さんが悪い。

さて、さうこうしながら、村人の礼に貰つた料理と、借り家についてた竈でついに炊くことに成功したら米で夕食を済ました俺たちは、大寸胴鍋にお湯を沸かし、温度を調整したあと風呂に入つて居た。

残念ながら関羽さんは村に着いたことで少し正気に戻つてしまつたのか、それとも傷が治つてきたせいかわ、衝立を立てて一人ずつ入る事になつた。何にせよ今までの事に気が付いて青龍偃月刀を持ち出されなくてよかつた。多分関羽さんでも俺に傷などつけられ無いと思うが、一刀君に見せる身体だ。後で不貞を疑われないために執念で何とかしてしまふかもしれぬ。

大寸胴鍋は大男な俺が頑張れば2、5人くらい入る大きさだ、関羽さんならゆつたり入れる。俺？俺は体拭くだけだよ。入れない事はないが、何か出汁取られてるみたいな絵面なので、よっぽど風呂に入りたい時だけにしている。にしても大寸胴鍋全然鍋として使つてないな！もう簡易風呂つて言つていい気がしてきた。

なんか今更ながら関羽さんが覗かないで下さいね！とか言つてくるがもうなんども全部見たので脳内補完余裕です！とか言つたら怒られるだろうか？キヤラがブレるしやめておこう。素直に大丈夫かだけ聞いて、タオル（何故かバスタオルがあつた。意味がわからん）を衝立にかけて背を向ける。

決して覗かないどころか、衝立の方を向く事さえなく、地味に炊く事にした白米の残りをおにぎりになっていると、小さな声でやっぱり如何わしい目的じゃなかったんだ…みたいな呟きを耳が拾つた。やたら小さな声だが野獣ラージャンの聴覚の前では普通に拾えるのさ！あつぶねえ！畏だつたよ！テンプレに従わなくて良かった！

…まあ実際襲うだけならいつでも襲えたが、そんな気はない。色々理由はあるが、別に溜まつてるわけでもないし、正直関羽さんも綺麗だが、個人的な好みは周瑜さ「羌

毅殿？今何か失礼な事を考えましたか？」いやあ、関羽さんこそ至高の美女ですよね。蜀ルートで主人である劉備さんを差し置いてメインヒロインなだけありますよ本当！！

高速で考えを改めて誤魔化した。

女の勘半端ねえ。

一人風呂が嬉しいのか、長風呂の関羽さん。手持ち無沙汰なので、四次元袋から毛皮を取り出しゴロゴロする。先に体を拭いてしまったので寝転がっても問題ないのさ！地上最強シリーズは洗濯中だし、村人の服はサイズの無理があつたので、体には毛皮を巻き付けただけの真・蛮族！みたいなスタイルだが、関羽さんには蛮族生まれって言うてあるしヘーキヘーキ。もうなんか息をするように関羽さんに嘘ついてるな俺。クソヤロー極まりないけど、本当のことを言っても仕方ないしいいか。

しばらくして、関羽さんが風呂から出てきたので、風呂を片付ける。おお、湯上がり美人！眼福眼福。顔に出ないのを良い事に何時も通り湯上がりの関羽さん見て内心盛り上がる。何か関羽さんはちよつと不機嫌だったので、バレたかもしれぬ。誤魔化しておこう。

そして衝立を2人の間に移動して、寝床を分ける。だいぶ今更だがまあいいだろ。男
女七歳にして同衾せず、なんか下心をうまく隠す感じだしいいね！歯を磨いて寝るとし

よう。

と、思ったら関羽さんから話があると言われた。何か真面目な話らしいし、お茶でも用意しよう。村人から貰った麦を軽く炒って沸かしたお湯に入れ、ザルで濾す。暖かい麦茶だ。

麦茶を見たことがないらしい関羽さん、美味しそうに飲んでくれる。俺としては恋姫世界の食事情が心配で仕方ない。原作はやった事はなく、2次創作では結構まちまちだったが、普通に肉まんも餃子も米もあることが多かったので、調味料を当たり前に使っていたのだが、不味かっただろうか。

閑話休題

関羽さんからの話は、改めての謝礼と明日からどうするか、と言った話だった。正直謝礼とか散々聞いたので軽く流そうとしたら真名を預けられて固まる俺。いやそんな簡単に預けちゃあかんでしょ。俺畜族よ？的な話をして断ろうとしたのだが、何か強い口調でそんなの関係ねえ！的な感じで果ては交換でなくていいから預かって欲しいとまで言われてしまい、命助けられたくらいで義理堅すぎやろと思っただが、良く考えたら命助けられるとか大事だった。憧れもあったので俺も真名を預けて交換する事にし

た。・・・つーか、関羽さんの真名ってあいさではなくあいしやつて読むんだね。知らなかった。あぶねえ。

てか真名を交換した後何か言いにくそうにする関羽さん。何だろうか。ノリで決めた名前なので、意味とか特に考えてないし、実はへんな名前だったりするのだろうか？ そんな風に少し心配したら、関羽さんが謝ってきた。

何でも家族以外で、しかも異性と真名を交換するのは初めてだったらしい。だからちよつと照れていたのだとか。無理しなければいいのにと思ってたが、彼女の誇りに引けない何かがあったんだろうたぶん。

というか、これからどうするって話になって漸く張飛の存在を思い出した。そういやいないや。まだ出会ってなかったのね。

と、ここで問題が起きた。俺は恋姫無双は好きだが、バックボーンである三國志には興味ないし、好きと言っても原作はやった事はなく、何となく2次創作で流れを知っているだけのニワカである。張飛や劉備に合わせるためにどこに行けば良いのかさっぱり分からん。土地とか街とか位置関係も分からん。強いて言うなら呂布さん達がいるらしい洛陽だけ覚えてる。

あ、これはマズい。下手打つと原作破壊しちゃうぞ。

これは下手について行かずに別れた方が、原作の流れとか修正力パワーが働いて元に戻るかなとふと思ひ、いつまでも俺の様な蛮族男と2人では気が休まらないだろうとか適当にそれっぽい理由を並べて、脚が治ったら別れる事を提案してみた。個人的に蜀より呉の方がキャラ好みだしな！

・・・何かものすつごい悲しそうな顔をされた上に、脚が治っても出来れば一緒に来て欲しいと言われた。何故だろうか。僅か3日で気を許し過ぎである。

しかし俯いている関羽さんには悪いが、割と主人的には劉備より曹操さんの方が好きだ。まあおっぱいの大きさに呉が1番好きだが。↑ナチュラルクス野郎。

ここは見た目みたいに心を鬼にして断ろう。すまない関羽さん、真名交換したばかりだが許してくれ。そう伝えようと思った。しかし・・・

「あの、やっぱり駄目でしょうか・・・？」

そう決意した俺の前には、胡座をかく俺の脚、ズボンをチョンとつまみ、不安そうな顔で見上げる関羽さんが。

全然オツケーだよちくしょう！断れるかこんなもん！馬鹿か！反則だぞこの威力！刃物も衝撃も通さない俺が血を吐きそうになったぞ！

一刀くんはよくこのレベルの関羽さんの他にたくさんの女を口説けたな。俺なら無理だ。流石恋姫世界最強の種馬、次元が違う。チート持ちだが勝てる気がしない。

思わぬ懇願に洒落にならないダメージを与えられた俺だが、何とか冷静を装って着いてくと答える。その瞬間のばあつと花が咲いた様な喜びの顔に再び大ダメージを受けた。ええい、蜀の美髪公は化け物か！

これ以上は強固で定評のある俺の理性でもヤバいので、とりあえず脚がもう少し治るまでこの場所を借りる事を提案し、了解を得たので寝る事にした。しかし関羽さんは俺が着いてく事を了承したからか、嬉しそうにはい！と言って笑顔で布団がわりの毛皮に入っていた。くそう、今までそんな可愛く返事した事ないだろ！魔性の女か！

またしてもダメージを受けた俺はとつと不貞寝を決める事にして、行燈の灯りを消して、おやすみと言ってすぐさま布団を被ったのだった。

・ ・ ・ なかなか寝付けなかったのは言うまでもない。
続く？

6話　よく考えるとラージヤンって別に獅子ではない

やあみんな、最近見た目も能力の限界もラージヤンじゃないなら何故特典もラージヤンにしたのか今更疑問に思い始めたオーク系転生者の俺だよ！

あれから1週間で過ぎた。

何でか関羽さんはほぼ回復している。いくら早めに処置したとは言え脱臼である。他にも怪我があり、満足な医療機関もないのにも関わらず、関羽さんは既に稽古に精を出している。

なお、関羽さんは人外オーク系転生者である俺と違って普通の人間である模様。

なのにはぼ10日で脱臼完治。負担のかけりやすい膝なものにも関わらず完治。ちなみに現在は鈍った・・・！とか言って早朝からずっと青龍偃月刀を振っている。

関羽さんって凄い。心からそう思った。

この関羽さんで一番じゃないんだから恋姫世界は見た目以外外魔境過ぎる。なにここ修羅の国？武を志した瞬間から修羅の刻を生きてるの？修羅にならねば修羅に勝てぬとか最初に教わってんの？

それはさておき、明日にはここを発つことになった。正直に言うとな里一回来てみたかっただけで、欲しいもの買ったりしたら一旦山に帰ることも考えてたのだが、既に出てい出せない雰囲気である。

美人の悲しげな顔は卑怯である。可愛い過ぎて卑怯である。しかし可愛いのは正義なので訴えても勝ち目はない。なんて世界だ！・・・良く考えたら前世も同じだった。可愛いには勝てない。世界は無情である。

ちなみに、前回あれだけ俺と別れることを関羽さんが悲しんでくれた理由は、残念ながら俺自身ではなく俺の調味料満載の四次元袋とそこから作られる料理にありました。満面の笑みで「羌毅さんの手料理がない旅などもう考えられません！」と言われた時の悲しみが理解していただけるだろうか？引きこもりで表情筋が死んで無かつたら人も憚らず慟哭していた筈だ。

ヒロインだと思った？残念、餌付けでした！

カズマさんはすごい。正直俺もつかいやられたら憤死する多分。1回目は悲しみで何とか相殺した。いいよもう。所詮俺は獅子目言彦系コワモテオーク系転生者さ。逆に考えたら関羽さんでさえ胃袋を掴めたんだから、食いしん坊キャラのほとんどを落とせる筈。よし、こうなったらこの手で人を集めてオリ勢力を！あ、食いしん坊キャラだいたい幼女だ。

幼女を美味しいご飯で釣って戦争に参加させる大男。・・・事案不可避。お巡りさんこつちです！

始まる前からバッドエンドだった。何で一刀君はこれを回避できたのか。倫理も法も効かない一般人。無敵すぎるだろ何だこいつ。

閑話休題

ところで、やっぱりこの恋姫世界、妙に食事情が良くない。というよりは調味料があまり発達してない。料理法は結構幅広くあるのに、である。醤油は日本ほぼ固有だから仕方ないとして、コチュジャンなどの醬があるのに何故か味噌がない。酒があるのに酢がない。意味がわからん。何か妙な事になっているようだ。

まあ料理法があるならそれだけ習って俺が勝手に味付け変えればいいか。美味しいものは好きだが超絶美味しくない和我慢できないわけでもない。無理して追求するの

もだるいし、典章と運良く仲良くなれたら作ってもらおう方向で行こう。うん。

とかやったら関羽さんが何かいい汗かいた！みたいなにこやかな顔でやって来た。「久しぶりにいい汗かきました！」むしろ言って来た。あ、ハイ。昨日まで満足に動かせなかったもんね。

「だいぶ鈍ってしまったので取り戻していかねば、旅に支障が出てしまいますね！なので一緒に手合わせしましょう！」

いやそれはおかしい。

何だその理論。俺を無理矢理巻き込むな！なんて言わないけど。特典のおかげでチートだからか、関羽さんは俺を武芸者の扱いをしてくるので困る。特典のおかげで

俺はあくまでクリーチャーであって、アーチャーでもセイバーでもグラップラーでさえ無いので武を志してない。武の道をそもそも歩いてないので、剣と拳の違いがあれどとか以前の問題である。というかもはや対極ではなからうか。

世にある武の道が、勝てないを無くす、ところにあるのだとしたら、俺はそもそも『勝てない』存在になる事を望んでこの特典を選んだ。

力で勝てないから速さを鍛えて勝てるようになる、とか硬くて切れないから技術を鍛えて切れるように、とかそういう事をする気は無い。そういう事を相手に常に強い側になりたかったのだ。今は後悔してるけど。

まあたいそうな理由を並べたところで関羽さんに上目遣いで「ダメ……ですか？」つて言われた時点で俺に逃げ道はない。可愛いは絶対正義なので断ったら世界が敵になる。なぜならまず俺自身が可愛いの味方だからな。

……。

仕方ないのでやりました。まあ関羽さんの攻撃効かないで、余裕ぶっこいてたら執拗に目とか脆い急所狙って来てめっちゃ怖かったです。

おい金的はマジやめろ、筋肉関係ないから斬られたら再生するかわからないんだぞ！
武芸者じゃないからコツカケのやり方なぞ知らん！

・・・うつかり強めで反撃してしまった。当たらなかつたけど風圧で関羽さんが20メートルくらい吹っ飛んで血の気が引いた。マジ殺したかと。

まあ流石は関羽さん、上手く受け身取ってくれたけど。ちょうどお互い離れたので、明日出発だしこの辺にしておこうと言ったら割とあっさり了承してもらえた。

ラッキーと思つたらぐうーと音が聞こえた。なつた方を見ると真つ赤な顔した関羽さん。あらやだ可愛い。そういう朝ごはんも食わずにやってだというか、むしろご飯できたから俺が呼びに来たんだけ。忘れてた。

これは俺にも非があるな。聞こえなかつたふりしておこう。安心してくれ、ちゃんと多めに作つてあるぞ！

「しつかり聞こえてるじゃないですか！」

聞こえんな。温め直してくるから汗でも流してきなよー
すたこらさつさと家に逃げた。

さて、今日はいよいよ出発だ。

この日のために村近辺で野生動物を狩って、物々交換で野菜や米以外の穀物に変えておいた。食料類は弁当と水筒以外四次元袋に詰めてある。準備は万端である。

関羽さんの方は、と見ると村人に直してもらった服をきちつと着込み、相棒の青龍偃月刀をもって村人たちに別れを惜しまれてる。特に男ども。まあ逆の立場なら俺だってそーする。誰だつてそーする。スーパー美人だしな。

でも知ってるか?・・・あの人食料も水も一切持つてないんだぜ。完全に俺に丸投げである。水筒くらい持てよ。俺と逸れたりしたらどうするつもりなんだ。というか今までどうやって一人旅して来たんだろう。

ちなみに俺はと言うと、村人たちの大人は一人も来てない。未だに怖がられている節がある。何故だ。ハッキリ言つて狩つた獲物とか分けたり野菜と交換したり、鍛錬してあとはだいたい食つちや寝の関羽さんより村人と交流があるはずなんだが。

「おじさん・・・また来てね?」

「おっさん！また遊ぼうな!!」

「おじちゃん、もういつちやうの・・・?」

ちなみに子ども達はめっちゃ別れを惜しんでくれてる。最初は怖がられてたが、ちびっ子なんて美味しいもの高い高いでだいたいなんとかなる。今ではズボン掴んで涙目で別れを悲しんでくれるレベルだ。相変わらず顔は表情筋が死んでるが、死んで無かつたら嬉しくて泣き叫んでたかも知れん。でもーっだけ訂正したい。前世から数えでも俺まだ28歳なので、中年扱いはやめて欲しい。

おっと最後のセリフの子が泣きながら足にしがみつき始めた。ズボンが鼻水まみれになる前に早く出発しよう。ちやうど関羽さんも終わったことだし。

この数日間で作成させた技術、羌毅さん式ナデナデを使って子供を泣き止ませ、抱き上げて目線を合わせる。再び頭を撫でながら、また会う約束をする。ついでにちびっ子全員に手づくりベっこう飴を与えてと。

さあ行こっか関羽さん。着いてくだけだからどこ行くか知らんけど。

「……………」ジー

見るとジト目の関羽さん。何だ？ゴミでも付いてる？

「いえ、別に？ずいぶんモテるなあ、とか、女の子の扱いが上手いなあと思いました！」
え、何怒ってんの？いくら可愛いもの好きでもあの歳の子供にモテるもクソも無かるうに。確かに女の子ばかりだったけど。あれ、何これ俺ひよつとしてロリコンを疑われてる？いかんそれはマズい。関羽さんにあの人口リコンです！とか言われたら普通に捕まる。

慌てて誤解をとく。社会的に死んでしまうからな。

「慌てるところが逆に怪しいですが・・・まあいいでしょう。本当なら色々な意味で困ります。私が。」

そう言って歩き出す関羽さん。疑いが晴れたようなので黙って着いてく俺。まあ空が晴れて綺麗だし、幸先いい出発だろう。

なんて考えてたあれから2週間が経った。

現在は再び山の中を2人でとことこ歩いている。ここまでアクシデントも無く、順調だ。地味にあの村のあと一つしか村が無かったが、この辺は割とそういうものらしい。何事もなく着くと良いがと思つたら、よく考えたらまだ何処に向かつてるのか知らないや。隣の関羽さんに聞いてみよう。

「この辺で一番大きな街です。私はこれまで村と村を歩いて来ましたが、やはりそれだと路銀が減る一方です。ここら辺で1度稼いでおこうかと。街なら仕事も多いし。それに道玄も刃物が欲しいと言つていたでしょう？この辺の村は小規模で、鍛冶屋まであるところは少ないですから。」

なるほど。つーか前にポロつて言つた事覚えててくれたのか。いつまでも爪で捌いたりするの面倒になつて来たから助かる。ありがとう。

「い、いえ、大した事では……。私も用がありますし。」

ではとりあえず街で稼いで、ある程度貯まったらまた旅に出る感じか。仕える主人探してるんだっけか？

「ええ、まあ……。」

主人、主人ねえ。関羽さんといえば劉備さん。劉備さんと言えば関羽さん。なので劉備さんの居場所俺が知つてれば話が早いんだが、あいにく桃園持つてるくらいしか知らな

いのよな。桃園の誓いは知ってるけど、土地名も地方も分からん。もつと勉強しとくべきだったか。

まあまず張飛も居ないし。アニメならどつかの村で遭遇してたし、修正力に期待しよう！多分会えるでしょ。修正力が正常に働いたらまず俺ここに居ないけど。

などと考えながら歩いて行くと、水の音を微かに俺の耳が拾った。ふむ、このくらいの音量なら、もうしばらく先だな。ちよつと早そうだが、着く頃には野営する準備して良い時間になるだろう。関羽さんに伝える。

なんか微妙な顔する関羽さんだが、一応了解された。なんぞ？

まあいいや。今日は何作るかねえ？川が近いし、魚とれたら偶には変わり種で味噌焼きでも作ってみるか。白米も普通に炊いて、ちよいちよい拾った野草なんかをお浸しにして・・・うむ。関羽さんも地味に和食好きだし、それで行こう。

ちなみに、基本昼飯は携帯食だ。太陽が出ているうちしか普通は進めないから、昼に1から火を起こして料理するぐらいなら、先に進んで少しでも早く村へ入るのが正しい。まあ俺は夜目が効くけど関羽さんは無理だから当然つちや当然だ。もつとも関羽さんが言うには、もつと色々理由があるようだ。賊が出るかもしれないとか、人も動物にも夜は襲われやすいからとか、その他にも色々。

・・・関羽さんと出会うほんの少しだけ一人旅してた時はどれも気にしなかったから

なあ。勉強になるぜ。

そうこうしているうちに日が落ちて来て、夕暮れになり始めた頃、川を見つけた。ちようど良い時間なので、今夜はここで野営しましょ。

まあ普通ならもつと早く野営準備するんだろうが、四次元袋のある俺がいる以上、必要なのは水と薪だけである。その薪も道中地味に拾いながら歩いているので、問題は無い。

サクツと火をつけ、周りを石で囲み土台を作る。四次元袋から出した鍋に川の水を濾過して入れて沸騰させておく。

その間関羽さんに周りの枝や草木を払ってもらい、俺が前の村で作ってもらったテント擬きの紐を木に結びつけてもらう。これはほぼテントと言うか屋根のある蚊帳と言った方が近いかもしれない。

野営すると虫がうざいので、頑張つて手に入れたものだ。中で火を起こすと危険なので、寒くなつたら布団がわりの毛皮に頼るしか無いのが辛いところだ。関羽さんは快適過ぎると呆れてたが、虫が鬱陶しいのは同感なのか、文句を言わず設置してくれる。

関羽さんが寢床を用意している間に俺は川に釣竿を垂らし・・・。

たりはせずに大きな石を探す。そしてその石を見つけたら遠くから石を投げてぶつ

け、衝撃で浮かぶ魚をダツシュで拾う。俺はハンターじゃないので釣りは苦手なのだ。魚を捕ったらエラと内臓を取り出し、塩で揉み洗いしてまた洗い、味噌を塗って大きな葉に包み、焚き火の下に埋めて蒸し焼きにする。米は炊くがこれは明日用だ。余っている塩むすびがあるので先にそちを食べよう。鍋が沸騰して来たので、先にお湯を使って麦茶を作る。2人の器に注いだところで、関羽さんが設置を終えて戻ってきた。ナイスタイムिंग。

お茶を渡すと、しばし休憩タイム。もう少し魚に火が通ったらお浸しを作ろう。味付けはポン酢か醤油か悩むな。

「……。」
あれ、また何か関羽さんがお怒りである。どつたの関羽さん。何かあった？疑問に思い聞いてみる。

「……分かりませんか？それですよ。」
……どれの事だろうか。どうやら原因が俺にあるのは分かったが、何が悪いのか分からない。むむ。

俺が原因が分からず悩んでいることを察したのか、関羽さんは溜め息を吐いて、言った。

「……今は2人きりですよ？」

?・・・ああ！忘れてた！

「すまない、愛紗。・・・どうも、慣れなくてな。」

関羽さんは、今度は盛大に溜め息を吐いて、しかしちよつとだけ機嫌を直して仕方ないですね、なんて言った。

そうだそうだ、前回交換した真名だが、何か神聖な扱いをされているのに結構人前で普通に使われてる事に疑問を持っていて、関羽さんが預けてくれた事に感謝もしてるし、安っぽく呼びたく無いのであまり人前で真名で呼び合うのはしたくない、そう言った俺の意思を関羽さんは汲んでくれて、2人きりの時か、よっぽど気心を知れた人達の前以外ではお互いに真名を呼ばない様にしようと言ってくれたのだ。

・・・正直漢字の読み方を間違えて覚えてた事もあり、関羽さんは関羽さんで定着したので、こっちの方が呼びやすかっただけなんだが、言ったら怒られそうだからやめておこう。

しかしなるほど、言われてみれば不機嫌になったのは村を出てからだ。真名を預けたのに真名を呼んでもらえなかったら、まあ確かに不満に思うのだろう。それくらい相手に気を許し、信頼している証なのだろう。何か適当に名付けた真名を得意げに交換した

のを後悔してきた。ごめんよ関羽さん。

とりあえずまだちよつと不満そうな関羽さんに謝りつつ、食事に一品付け加えて機嫌をとってみる。関羽さんの好きなモツ煮だ。村にいた時一度出したらハマってしまい、三日間おねだりされて大鍋一つ分を空にされた。それからちよつと制限をかけたのだ。まあ味濃いいプリン体多いし体に良くないからな。ちなみに全部味噌味だ。関羽さんは味噌味が好きらしい。

「もう、こんなので誤魔化されたりしませんからね？・・・まあありがたくいただきますけど。」

ふ、口では仕方ない、なんて言っているが、ご機嫌なのが分かるぞ。ニッコニコしてゐるからな！ひやつはー！ゲロチョロだぜ！胃袋を掴む私に負けはない！！

なんて思いつつ、顔には一切出さずにお浸しを作り始める。とりあえずもうちよつとご機嫌取っておこう。

そんなこんなで夕食が終わり、地味に街道が近いので水源は目の前だが、隙だらけなので風呂は無し、お湯で体を拭くだけにする。ちよつと関羽さんが渋ったが許してもら

おう。一人旅してた頃はなくても大丈夫だったはずだしな。

「……道玄、貴方のせいですよ。こんなに贅沢を覚えてしまったのは。一人に戻れなくなつたじゃないですか。」

おっと責任転嫁ですか？これはいけない。なら責任持つて矯正しましょう！関羽さんこれから通常の保存食な。俺は普通にたべるけど。

「それは嫌です！……全くもう。食べ物とかの話だけではないんですけどね。」

知ってる知ってる。風呂も布団だよな。なんて言ったらちよつと呆れてたが。こころ、めんどくさい奴を見る眼差し止めろ。

そんなやりとりしている、ふと気付いた。これは……？

急に雰囲気の変つた俺にすぐ気付いた関羽さん。さつと、青龍偃月刀を取ると、目で俺に何があつたか問うてくる。

少し待て、これは……。誰か追われている？

しかも子供だなこれは。軽くて小さい足音が2つ。その奥から重い足音が10以上。「すぐ行きましょう。何処ですか？」

いや、その必要はなさそうぞ。ホラ。

それで関羽さんも気付いたらしい。足音が近付いて来ている。こっちに向かつて、と言うかこちらを指しているのだろう。十中八九賊だな。子供を追つ掛けていらしい。一応聞いておこう。どうする？

「無論、子供を助けます。」

だよな。了解。子供は俺が守るわ。関羽さんは賊を頼むわ。ああ、討ち漏らしても構わないぞ。数人ならなんとかする。・・・あれ、返事がないなど思つて見ると不満気な関羽さん。おい。

「戻つてますよ。」

もう直ぐ接敵だ。事と場合によつては子供もしばらく加えることになる。間違えない様にさ。そんな不貞腐れるな。

まだ不満気だが、諦めたらしい。表情を引き締めて音が聞こえる方の暗闇を見つめる。

それとほぼ同じタイミングで足音が関羽さんでもわかるくらい近付いて来た。俺も備える。

やがて来た。同時に2つ声があった。

「助けて下さいいっ!!」

あいよ！と間髪入れずに小さな2人を抱き寄せて、そのまま振り下ろされた刃を体で

受ける。ちびっ子がこつちを見て一瞬強張るが、心配するな。

この程度で俺に傷など付くはずもない。

案の定剣の方が弾かれる。その瞬間に割って入った関羽さんが一瞬で賊を切り捨て
る！流石関羽さんだ。

しかしもう直ぐ寝るって時にこんな面倒が転がり込んでくるとは。本当俺にはなん
かついでる。

機会があつたらお払いに行こう。そう決めて両手の中にいる妙に見覚えのあるち
びっ子2人のことを、俺は棚上げすることにした。

続く？

7話 ハルクさんのズボンが破れない謎。

やあみんな、美女（将来的には別の男のヒロイン）と2人で旅するリア充オーク系転生者の俺だよ！

のっけから負け犬フラグを立てて見たが、関羽さんは全然くっころする事もなく、アツサリと襲い掛かって来た賊を一気に5人ほど斬り伏せました。ブラバー！

ていうか念のために賊かどうか一応確認しようよ関羽さん。前に出会い頭に賊を滅殺した俺がいう事じゃないけど。世の中には少ないけど子供の悪人だっているんだよ？まあ攻撃して来た時点で殺して良いかと俺も思ったけど。

何て考えつつ、逃げて来た2人を抱き上げて大寸胴鍋を足で引き寄せる。関羽さんが相手の注意を引いてくれている事を確認して、大寸胴鍋の中身（ぬるくなつて来たお湯）を廃棄し、2人の中に入れて頭を低くしている様に言う。長い事走つて来たのだろう、ちびっ子2人は息も絶え絶えで、恐怖のせいか涙が滲んでいる。つていうか俺を見て怯えている気もするので、羌毅さん式ナデナデを発動！怖くないよアピールする。

ちよつと2人の目から不安が紛れたあたりで、もう一度頭を下げている様に言って、

2人がしゃがんだのを確認すると、俺も賊の方々と向き合う。いかんな、囲まれてる。予想以上に多かった。30人くらいだろうか。やはり聴覚が優れてても中身は一般人。使いこなすには時間が必要な。とりあえず関羽さんには人数が多かった事を謝罪して置こう。

「大丈夫です。この程度の数なら私だけでも何とかできます。」

流石関羽さん、一応病みあがり期間中のハズだが余裕があります。まあ俺もいるし、負けはしないだろう。とりあえず周りを見渡して、余裕ですよ感満載で強者アピール。調子に乗って雑種が・・・とか呟きそうになったけど、それは踏み台転生者フラグなのでやめておいた。ここでオリ主が出て来たらめんどくさ過ぎる。

「おうおう、捕らえたガキが逃げたと聞いて追っ掛けてみれば、こりゃ飛んだ上玉が付いてきたもんだ。ついてるぜえ。」

なんか出てきた。いかにもな賊の頭だ！実は賊の頭目を見たのは初めてな俺氏、ちよつとワクテカしてきた！そんな風に巫山戯た事を考えつつ関羽さんをエロい目で舐める様に見つめる賊の頭さんを観察する。すごいぞ！頭目なのにこの小物感！なかなかやるな。周りのモブの方が無口で強そうだ！いくら後ろのちびっ子2人が特別だ

からとて、あつさり逃げられといてこのドヤ顔！たまりません!!

俺が面白おかしく賊を観察する一方で、エロい目で見られまくつてる関羽さんは不機嫌を通り越して激おこプリンプリン状態である。すごい蔑んだ目で下衆共が・・・つて呟いてる。うーむ、シユールや。

「オイお前ら、ついでにこの女も連れて行こう。高く売れそうだ。男はいらねえから殺しちまえ。」

フオウ！スーパーテンプレ発言頂きました！計画もクソもないあたりが素敵や！

「笑わせるな下郎。人攫いが一度捕まえた幼子にまんまと逃げられ、何人もの大の大人が武器を持つて追いかけて回して捕まえられずここまで来ておいて、挙句私も連れて行く？・・・数以外に取り柄のない無能共が。」

きつつー！関羽さんきつつー！これは痛い。いくら賊でもこれは胸に刺さるぞ！21世紀日本のサラリーマンが、こんな感じの悪口言われたらもう立ち直れないレベルの口撃だ！良いぞもつとやれ！

などとふざけてたら、あまりの関羽さんのキツさにプッチンきた賊の皆さん、雄叫び上げて一斉に襲い掛かってきた。あらやだ凶星だったのね。

まあいいや、面倒だけどサクツと片付けよう。おい関羽さん、テントの周り汚すのは寝にくくなるからやめてね！あ、聞いてないやこれ。仕方ないな、俺だけでもゴミは

端っこに一箇所に纏めないとね。

関羽さんが華麗な槍捌きで賊を相手にするのを横目に、俺はこちらに向かってくる賊共のに向かい、一息で一番端のデカイやつ目の前に踏み込む。驚愕する目の前のデカブツの胸にラリアットを叩き込み、そのまま後ろの人間数人を巻き込んで思いつき振り抜く。

人間の束が、弾け飛ぶ。

うむ、懐かしの進化系ローラースケート漫画のベンケイさんみたいな感じを出したかったんだが、力が強過ぎた。叩きつけるどころではなく、人の束が丸ごと木っ端微塵になっちゃった。いかん、俺が一番汚してる。後で掃除が大変だ。手加減に気を使わなければ。

まあいいや、なんか今更こつちを見てビビる賊の一人を頭から捕まえて、逃げようとしていた頭目に投げつける。あ、いかん勢いつけ過ぎて両方すごい音を立ててへし折れてしまった。力加減が難しいな。賊の頭目なら街に引きずって行けば幾らか賞金貰えそうだったのに。

仕方ない、こうなったら残りで手加減の練習だ。何、そんなに怯えるな賊共！別にちびっ子泣かせた事を怒ってなんかいないぞ？前の村のガキ共と重ねて激怒なんか全然してないから心配するな！なあ！

・・・結局ものの数分で賊は全滅させました。

現在は返り血で真つ赤の俺がちびつ子をガン泣きさせて、関羽さんに呆れられながら慰めは私がやるからと戦力外通告を受けて、汚してしまった周りの片付けをしています。終わったら川で身体を流さなくては・・・はあ。

幼女助けて幼女に恐れられるこの顔が憎い・・・これが一刀くんなら怯えるどころか、相手がステキ！抱いてっ！ってなるのに。まあ今回の場合、万が一起来ても幼女が相手なのでそれやったら事案不可避だが。

とりあえず何度かに分けて街道の脇の山の中、少し奥へ置いておく。少し量が多いが、野生動物達が片付けてくれるだろう。さっきから血の匂いに引き寄せられて集まってきてるし。

さて、後片付けも水浴びも終わったところで、ちびつ子2人も落ち着いてきたみたいで、たぶんお腹を空かせているだろう2人のために、中華粥もどきをさばつと作る。未だちよつと俺を見てビクツとするちびつ子2人にメンタル傷つけられつつ、我慢して2

人の話を聞く。まあまずは自己紹介からかね。カツコで誰か分かるけど一応ね。

それで関羽さん含めて4人で自己紹介。さっきからはわわ、あわわとか言ってたから知ってますけど、やっぱり諸葛亮と龐統だった。関羽さんもだけど何してんのこいつら。原作前に死にかけたりすんのやめてくれ。

なんて思いつつ話を聞いてみると、確かに2次創作で読んだような話だ。なんか世間を知るために、そして自分達の知を活かす主人を探すために2人共水鏡塾を飛び出して、ちびっ子2人だけ旅をしていたんだとか。そして人攫いに騙されてうっかり奴隷にされかけ、命辛々逃げてきて今に至ると。なるほど、とりあえず1つ良いだろうか。

「はわわ、な、なんででしょうか・・・？」

いや、なんで旅立つ前に武力ある人間を雇うとかしなかったん？ 幾ら何でもちびっ子2人で何とかなるとか馬鹿げた事を考えてたわけじゃなからう。

「あう・・・それはっ、そのでしゅねっ！」

「えう・・・あわわ、朱里ちやあん！」

ああなるほど。自分達に知り合いで武力ある人が居なかったか、居ても付いてきてと頼めず、その辺の傭兵は信用出来ないから諦め、更にはそういった人に伝のある大人には黙って出てきたから頼れなかったとかそんな感じか？

めっちゃビクツとする2人。はわわあわわの合唱が始まった。どうやら完全に凶星

らしい。……こいつらコレで将来は国の未来を左右するレベルの軍師になるのかあ。恋姫世界は世も末だな。

「全く、今回はたまたま私たちが居たから良いものの、其方らの歳と武力で旅など無謀にも程がある！ 一步間違えたらいつ死んでもおかしくないんだぞ！」

関羽さんがお説教モードに入った。これは長くなりそうだが、ちびっ子2人が悪いので我慢して貰おう。是非猛省してくれ。はい飯と水。食ってしつかり怒られたらテントの中でおやすみよー

そう言つて立ち上がり、関羽さんに後を任せる。不思議そうな顔の関羽さん。

「羌毅殿、何処へ？ 賊はもう居ないと思いますが……」

ここにはな。どうも大きめの人攫い集団だったみたいだし、ちびっ子2人の話から隠れ家が近くにあるはずだ。まだ他に攫われた人もいるかも知れんし、隠れ家に残党がいるかも分からん。今ならまだ匂いで追えるから、確認ついでに隠れ家まで行つてみるつもりだ。関羽さんはここで2人を見ててやつてくれ。

「……なるほど、出来れば私も行きたいところですが、確かにこの2人を連れてはいけませんね。仕方がない、気を付けて下さい。」

あいや、行つてきまーす。さて、サクサク終わらせようかね。

・・・はいどうも、本当にサクツと賊の隠れ家がを襲撃し、地味に20人くらい残つてた連中を腕力に物を言わせて（物理）黙らせると、案の定何人か攫われた人達が居たので出してやり、金品はあんまり残つてなかつたので食糧をかわりに攫われた人達にもたせると、村が割と近くらしいので、朝になったら一緒に送るため、テントまで連れて帰る事にする。

まあテントは入れないけど、そこは我慢してもらうか。

∴

∴∴。

次の日。

助けた人達も早いうちに帰りたいだろうと、あれから少しだけ仮眠をとり、夜があける直前に出発し、本当に割と近くに村があつたので、昼前には攫われた人達を村に帰す事が出来た。

助けた人達の家族に感謝されまくり、歓待をされそうなところを何故かやたらと先を

急ぐ関羽さんが全て丁寧にお断りしてしまい、後ろ髪引かれつつも村を出てきたのが先ほどである。ううむ、せっかく助けた女性達と仲良くなれそうだったのに……。

なつたところで何も出来ないし、まあ、いいか。

というか、それよりも何でちびつ子2人がまだいんの？

「は、はわわ……」

「あ、あわわ……」

いや、それはもういいから。理由教えてくれ。別に怒ってないから。……駄目だから。関羽さん、何か知ってる？

「知りませんっ！」

あらやだご機嫌斜め。また何かぶりぶりしちやう関羽さん。最近怒りすぎですよ。肌によくないよ！機嫌なおして！

「……誰のせいだと思ってるんですか？」

え、なにそれ。また原因俺なの？初耳！

さっぱり分からん。今度は真名は関係ないよな？

よく分からんからご機嫌取っておこう。ハイこれ、手作りべっこう飴だよ！好きで

しよ関羽さん。ついでにちびっ子2人にもあげようではないか、ホレホレー

「・・・はあ、もういいです。許してあげるのの後2つ下さい。」

はいはい。ああ、ちびっ子ども砂糖が高価とか気にするな！ちびっ子はとにかくたくさん食べてデカくなれば良いんだよ！

とりあえず甘いもの食べて喜ぶちびっ子2人の頭を撫でつつ、これパツと見事案だよなあと思う。

まあ、とりあえず付いて来ちゃったものはしょうがない。順番間違えた気もするけど、纏めて劉備さんにパスしてあげようじゃないか！

続く？

8話 そうだ、トンカツ食べよう。

やあみんな、先日オトモアイルーならぬオトモ幼女が仲間になって国家権力の影に怯え始めたオーク系転生者の俺だよ！

幼女たちが付いてくるようになって早3日経ちました！

早くも幼女が獅子目言彦的見た目の俺に慣れてくれたのか、全然怯えなくなった。子供に怯えられるのは地味にダメージあるのでとても嬉しいです。でも1つだけ言いたい。

「はわわ、羌毅さんどうしました？」

「あわわ、急がないと今日中に街に着きませんよ？」

いやお前らそれ、俺の上に乗っておいて言うセリフじゃねーから！

そうこの幼女ども、こんなテンパリまくりの癖に、未来の大軍師の凶々しきと言うか行動力と言うか、こちらがちびっ子に甘いのをいい事に、勝手に護衛がわりにしてつい

て来た3日前のあの日から、日に日に態度が大きくなり、今では怪我しても無いのに怪我してた頃の関羽さんみたいに俺が背負う大寸胴鍋に入って楽しまくっているのである！

本人達は歩幅が違って着いてくのが大変とか、体力が無いから自分達に合わせて休憩取らせるのが申し訳ないとか言ってるが、何の悪びれもなく朝飯取って出発する時には勝手に入っているのだ。完全に確信犯である。

ぐぎぎ、悔しいのう、悔しいのうw

まあ正直2人合わせて関羽さんよりちよつと重いくらいなので気にはならないのだが、自分で歩かないから暇なのか、なんか面白い話して下さいとか言ってくる。非常にウザい。

関羽さん何とかならないだろうか。俺こいつらの父親でも無ければ保護者でも無いし、ましてや乗り物ではもつと無いんだけど。

「はあ、貴方が甘やかし過ぎなのですよ、羌毅。そもそもそんなに嫌なら前の村で置いて来たら良かったのに。心配だからとなんだかんだ連れて来たのは貴方自身でしょう。」
だつて置いてきたところで、旅はやめないだろうし、そうなったらまた2人で無茶な

旅するやん。危なかるーよ。子供は大人が守るもんじやろ。

「はわわ、私達もう子どもじゃ無いでしゅ！．．．あう、また噛んじやった。」

黙れ幼女。外見年齢18歳プラスしてからほざいてくれ。

「なら文句を言わずに最後まで面倒みて下さい。」

呆れ顔でそう言つて、話は終わりだとスタスタ行つてしまふ関羽さん。はいすいません。愚痴らず歩きます。拾った俺の責任ですよね。知つてた。

ああ、早く劉備さん見つけないと．．．そんでこの幼女どもを押し付けるんだ！（使命感）

．
．
．
．
．
．

次の日。

あれから幼女2人を背負つて何とか夕暮れ前に街へと辿り着きました！

「ビバ初街！とかやろうと思つたら、もう日が暮れる直前だったので、すでに活気が消えてきていて、さっさと宿を取る事にした。ちなみに入る時検問で俺が引つかかったのも遅れた原因ですよ。ごめんねみんな！今更だけど俺靴も履いてない230センチの巨人系蛮族だったわ！そもそも蛮族とかまだ偏見ではなく危険動物みたいなもんだもんな。忘れてた！」

「いえ、正直私達も慣れ過ぎて言われるまで違和感感じなくなつてましたしね・・・」
「慣れつてすごいでしゅ。街の人や兵隊さんと見比べてようやく羌毅さんが大きいこと思い出しました。」

「あわわ、と、とにかく大事にならなくて良かったです！」

「本当に泊めてくれる宿があつて良かった。最初に入った宿なんて、門前払いだったもんな。最悪俺一人で野宿しようかと思つた。」

「そんなことするぐらいなら、私も一緒に野宿しますよ。」

と苦笑いの関羽さん。本当にこの人ええ人や。

「その時は精一杯応援しましゅ！」

「えう、が、頑張つてくだしやい！」

完全に見捨てる気の幼女ども。ハハ、こやつめ。

お前らは罰としてこの街にいる間、街のものだけ食つてろ。関羽さんと俺は美味しくなかつたら自分らで作つて食べる。

「はわわ・・・横暴でしゅ！同等の権利を主張します！」

「あわわ、卑怯です！食べ物の人質にするなんて！」

はははは、おや？何処かで負け犬の遠吠えが聞こえるなあ！まあ知つた事じゃ無いけど！

「はあ。大人気ないですよ、羌毅・・・。」

むう。関羽さんにそう言われては仕方ないな。気が向いたらべっこう飴くらいならくれちゃろう。あ、関羽さんが呆れ返つた顔してる。

閑話休題

さておき、今日はみんなどうする？俺はまた道中で狩り集めた毛皮と肉を売つて、包丁と短刀、鍋とか旅の途中で使うものを買に行く予定だけど。

「私は役所に行つて、短期で簡単な仕事を探してみます。無ければ護衛や傭兵の仕事を担当してみます。」

そか、気をつけてな。幼女どもは？

「私達は本屋さんで用があるのですが……羌毅さんが心配なので、最初は着いてつてあげましゅ！また検問みたいな事になったら大変ですし！」

おいコラ、幼女はわわ！なに人を子供扱いしてんだ！初めてのお使いか！

「あわわ……えと、羌毅しゃん。お肉はお肉屋さんですけど、毛皮をどこで売るつもりですか？」

む？……服屋とか？

「はわわ、服屋さんで直接毛皮持つていっても買取してくれませんよう。もし買い取ってくれても、羌毅しゃん、そもそも毛皮の相場とか分かりますか？」

そりゃ……知らんなよく考えたら。ていうかこの国の貨幣制度をそもそも知らねえや。まず金を使った事ないなそう言えば。野菜とか物々交換だったし、他は自給自足出来たし。

そんな感じのことを言ったら全員がもの凄い残念な生き物を見る様な目で見てきた。しゃ、しゃーないやん？ちよつと前まで山暮らししてた蛮族ですしおすし。や、山での生活力は他の追隨を許さないよ！

「やっぱり私も着いてくべきだろうか……？」

「売り交渉も買い交渉も、全て私達がするので、羌毅しゃんは引っ込んで下さい。」

「えと、荷物持ち頑張ってくださいやい。」

・・・すいませんよろしくお願いします。くっ！さすがに街生まれには街の生き方で勝てなかったよ・・・。

・・・そんなこんなで無事毛皮と肉は貨幣に変わり、意外と高く売れた様で、欲しかった包丁と短刀、おまけに大きめの剣鉈に中華鍋、更には大きめの御釜が手に入りました！やっただけこれで料理がしやすくなる！ありがとう幼女！流石は知力マックス！

なので現在は本屋さんにきています。2人とも街に着くと必ず新しい本がないか調べるんだとか。そんなに買ってどうやって持ち歩いてたのかは謎だ。

おっと2人とも、お前らが歳の割にマせてるのは知ってるが、その本はまだ早いぜ！18禁で書いてあ・・・？ウツソだろ、エロ本はエロ本でもヤオイかよ！その歳でもう目覚めてんの？ちよ、コラやめろ読むんじゃない！淑女の嗜み？うるせー！腹のふくらみが胸より減ってから淑女を名乗れこの幼女ども!!

・
・
・

・
・
・
・

つ、疲れた。なんでこいつらヤオイ本買う時だけあんな体力発揮するんだ。あれぐら元気なら普段から歩けよ馬鹿野郎……。

なに？知識の収集の邪魔をした？笑わせんなマセガキどもめ。だいたい何でこの時代に漫画があるのか理解できん。流石は恋姫世界、常識が非常識極まりないわ。つーかチラツと見たけどあれ作者も男の逸物見たことないだろう。デフォルメどころの話じゃなかったし。

……え、なにお前ら驚いてんの？まさかあんなツルツルの起伏もない円錐みたいな本物だとも思ってたんの？あんな男の股間に付いたらズボンに穴空いて大変だろ。は？あの作者はあの手の本を何冊も手がけた著名人？知らんよ。じゃあワザと間違えた絵を描いて誤った知識でも振りまいてんじゃね。なに考えてんだ、本当に？

あん？何震えて……ああ、なるほど。流石にいくらマセてても、その歳で本物なんか見たことないか。え、見たことくらいある？いや何見栄張ってたんだ。見てないのが普通っていうか見たことあったら事案の可能性大だろ。まあつまりこんな幼女に見えるどころか実際に手を出した一刀くんはガチ危険人物。元の時代戻ったら警察か家を包

困するレベル。

ん？どうした幼女。無知は恥ずべきってお前何言ってるの？見たことないのが普通だつて言ってるんだろ。大人しくあと10年我慢しろよ。いや普通じや我慢できないっってお前バカ止めろ！見せて下さいとかホントやめろ下さいお願いします！周り見て！みんなの目を見て！蔑むどころか犯罪者見る顔だから！いや待てだから頭下げんな代わりに自分のとかやめろやめてー！事案どころじやないから！衛兵さんに捕まっちゃうから！他の人も駄目だよバカ止めろ！頼むから諦めて下さい止めろズボン降ろそうとすんなやめてよして触らないで！助けて関羽さーん！

・
・
・

ほ、本当に酷い目にあつた。．．．！あ、衛兵さん助けてくれてありがとうございませす。なんならこの家出幼女達、実家に送り返してくれても：あ、ハイ。すいませんちゃんと聞いて聞かせます。もうこんな事がない様にしますすいません。

くそう、完全に駄目な子供の保護者扱いされた．．．！俺はまだ独身だつたの。

「はっはっは！いやあ残念ですな。あとちよつとで2人が押し勝つかと思つたのです

が。」

うるせえだまれ。本当に押し勝ったりしたらどうするつもりだったんだ。散々煽りやがって。

「その時は、お兄さんが捕まって、万事解決ですかね？」

万事解決どころか人生を終結させられそうになってますが!?!なにサクツと俺を犠牲にしようとしてんの? 大事の前の小事? やかましいわ!

「まあ何とか誤解も解けて、周りの人もませた子供だなあで済ませてくれたから良かったじゃないですか。」

ありがとう。良いやつだなあんた。ところで、鼻血出てるけど。ハンカチいる? あ、慣れてるから大丈夫? なら良いけど。

・・・つか、そういうやお前ら誰? いや知ってる。前世知識で名前もどんなやつか知ってるけど初対面だからね、一応ね。

そういうや名前も知らないわ。むしろ名前も知らないのによくも散々引つ掻き回してくれたな特にその槍女。おいやめろ、私達の仲なのにとか明らかな嘘つくな寒いんだよ。つかなに経験豊富な女気取ってんだこの処女が。見りや分かんだよ。

「し、しよしよしよしよ処女ちゃうわ!」

いや待て、何でそのネタ知って・・・ああ単に図星なのね、めんごめんご。お詫びに

お前の仲間にはちゃんとあいつは経験豊富って口裏合わせといてやるよ。好きになつた奴との初夜でもちゃんとお姉さんぶれる様に、いかに経験豊富か捏造してみんなに話しまくつてやるわ。なに気にすんなお詫びだから。お礼とかいらさないよ。

「ちよ、ちよつとした悪ふざけではござらんか。何とか治つたし、ここらで手打ちとしましよう！」

あ？こちとら危うく牢屋暮らしになるとこだったんだが。ちよつとした悪ふざけ？
ほう。

「……お詫びに今晚ごちそうするので、どうかこの辺で手打ちに……。」

……まあ。その辺が落とし所か。これに懲りて、あんまり軽い気持ちでふざけるなよ。あん？泳がないと死ぬ魚がなんだつて？よろしい。ならば高級料理店だ。財布に明日があると思うなよ。

「あの、羌毅しゃん。」

「そろそろこの札外しても……？」

駄目。恥ずかしい？うっさい黙れ。嘘は書いてないだろ。ちゃんと私は恥ずかしい子ですつて書いてあるはずだ。自分で書いたんだからな。むしろ思春期の子供の親扱いで衛兵さんに怒られた俺が一番恥ずかしかったわ馬鹿野郎。帰ったら関羽さんに報告します。

「しよ、しよんな！それだけは！」

「もうしましえん！許してください！」

断固拒否。しつかり説教されてくれ。絶望する2人の幼女を尻目に、今更ながら3人と自己紹介。

とはいえやつぱり趙雲と程昱、郭嘉だった。ああでもまだ2人は程立と戯志才つて名乗ってるみたいだな。曹操さんにまだ遭遇してないらしい。あ、趙雲。高級料理は冗談だからその下手くそな色仕掛け止めろ。エロくないし鬱陶しい。

「!?」

とりあえず、関羽さん呼びに宿まで一緒に戻ることに。多分もう戻ってきてるだろう。

話しながら宿まで3人と一緒に歩く。へえ、街には今朝着いたのか。宿とかどうすんだ？ん？安ければ俺らと一緒にのどろ？部屋は余ってるみたいだったが、すまん。街に泊まるのがまず初めてだから安いかどうか分からん。見ての通り、普段は山に住んでる蛮族でね？なに？見た目はともかく、蛮族とは思えない？おい止めろ見た目はともかくとか傷付く。自覚はあるけど。はっ!?殺気!!

「ずいぶん楽しそうですね?・・・そちらの女性達はどちら様ですか、ど　　う　　げ　　ん　　?」

転生してから初の死を感じるレベルの殺気が襲いかかってきたので、すわ敵襲か！と思つたら関羽さんだった。な、何を言っているか分からねーと思うが俺にも（ry

か、関羽さんなんで街中で青龍偃月刀を構えてるの？危ないよ？衛兵さんに捕まっちゃうからしまいましょ関羽さん？

「関羽さん？おかしいですね、耳がおかしくなつてしまつたかな。今、道玄が私のことを関羽と呼んだ気がしたんですが……？」

「す、すまない愛紗……。」

アイエエエエ！ナンデ！関羽ナンデ！こんなに怒つてるのこの人！今は真名呼んでいい状況じゃないやろ！言つたら殺されそうな程の殺気が溢れてるから言わないけど！

「すまない？それは一体何に對してですか？私の真名を呼ばなかったことですか？それとも……ちよつと見ないうちにまた知らない女性と仲良くなつたことですか!？」

ゾオン！そんな音がなつた気がするほど関羽さんの殺気が跳ね上がる。何に怒つてんだこの人マジで!?!つかまたつてなんだまたつて！まだ女の人仲良くなつて関羽さん以外とじゃ精々会話くらいしかしてないぞ！幼女2人を除けばだが。前回失敗したしな！今だつてちよつと程立と戯志才と会話してただけだし。

てかアレ？いつの間にか幼女2人居ねえし！俺のメイン盾が……って関羽さんの横でいつの間にか一緒になって浮気した父親を見る顔してる☒あ、コラ！私達にこんな札を掛けさせて自分は美人と楽しく会話してたとかいらん告げ口すんな！その札は原因お前らだろ！というかなんだこの浮気した亭主とその妻みたいな構図！俺は誰ともまだそんな関係になつてないぞ！戯志才！妄想して鼻血出しながらくねくねすんな！誤解を解け！程立、何照れてんだお前幼女だろ！恋も浮気もありえねーから！趙雲お前も何か言つて……まで、何その顔。

まさかさつきアレだけ言ついてももう反故にするとかないよな？なんだその満面の笑みは！やめろバカ、おい馬鹿やめろ！洒落にならんぞ！何考えてんだこ「おや。私を無視して2人で盛り上がるとは……いい度胸ですな、道玄？」

「あ、愛紗……落ち着け。まずは落ち着け！」

「落ち着け？私は冷静ですよ？むしろ道玄の方こそ、何をそんなに慌てて居るんですか？……なにか慌てるような事があったのかなあ？」

うおっ！また殺気が強く……いかんそろそろ関羽さんが本気で殺意の波動に目覚めそうだな。何とかせねば！っ！しまった趙雲どこいった？あいつ何かやかしかねんまづつ「ねえー、いつまでここに居るんですか羌毅どのお？2人で夕飯を食べる約束でしよう？早く行きましょう！」

そう言つてワザと胸を押し付けるように俺の腕を抱き締め、俺の脚に自分の脚を絡ませて来る趙雲。満面の笑みで完全な棒読みだったが。

あたりにばら撒かれる業火のような殺気が一瞬消えて、津波の様な殺意と共に殺到する青龍偃月刀を見て俺はこう思った。

ーせめてこの馬鹿だけは道連れにしよう。

続く？

9話 くらえ必殺!飛鳥文化アタック!

やあみんな、自分が化け物なことを忘れてたうっかりお茶目なオーク系転生者の俺だよ!

ちゅんちゅん。

・・・朝になりました。スズメの鳴き声と、隙間から漏れる眩しい朝日。隣には俺の腕を抱き締めてぐっすりの関羽さん。そうこれは・・・

朝チュン関羽エンドだと思った?残念、ただの野宿でした!

昨日までは本当に大変だった。

あの後ブチ切れ関羽さんを治めようと何とか宥めたりすかしたりして居たのだが、その度に俺にしがみ付いて離れない趙雲が、クソみたいな演技でしなだれかかってきて、関羽さんを挑発、結果止まらない暴力の嵐。

飯を趙雲に奢らせるどころか夕飯そのものが流れた、というか翌日の昼まで関羽さん

は止まらず、何気に俺たちが泊まるはずだった部屋にはちやつかり程立と戯志才が泊まって（俺が1人部屋、関羽さんとちびっ子どもで3人部屋）いたらしい。

あまりの勢いに途中で街の扉の外まで場所を移し、近隣の人や建物に被害がなかったことは良かったものの、朝日が明ける頃には完全に飽きた趙雲が俺に負ぶさつて寝始め（逃げるのも流石に今の関羽さん相手は面倒くさいと判断した模様）、そこで最後の関羽さんリミッターが外れ、乱神モードのめだかちゃんみたいな関羽さんから、未来の関羽さんの仲間を死なせるわけにもいかなないので必死に趙雲を守りながら関羽さんを宥める俺。やがて太陽が真上に来る頃、ようやく少し落ち着き、疲れて動きが止まった関羽さん。しかし依然趙雲をおぶる俺を見て何かの感情の決壊が起きたのか、今度はガン泣きする関羽さん。

・・・いい加減泣きたいのは俺だが、何とか慰めようとした時だった。ポント。俺の背中を叩く手が。振り向くとそこに居たのは！

・・・関羽さんの暴力の嵐に巻き込まれない様に離れたところで見ていた衛兵の皆さんの姿が!!

そのままガン泣きする関羽さん、グースカ寝こける趙雲、それを背負ったままの俺た

ち3人は詰所まで連れてかれ、何故か俺だけ正座で事情徴収、泣き止まない関羽さんを宥めながらゴミを見る目で見て来る女性兵と、何か可哀想なものを見る目で見て来る男性兵、そして最後はとにかく危ないとか、責任はちゃんととれとか、浮気をする男はクズだとか、避妊はしろよとか散々説教されて解放されたのは昨日の夜になってからのこと。

諸悪の根源たる趙雲はいつの間にか女性兵と仲良くなつて酒家で飲みを繰り出して行つて、最初にとつた宿はなんとあれから一杯になつたらしく、もともととつて居た部屋は、程立と戯志才が2日目の代金を払つて正式に泊まつており(幼女2人はちゃっかり便乗)、残されたのは散々暴れて泣いて、疲れて眠る関羽さんと、それを背負う蛮族の俺(ほぼ完徹)……。

やがて俺の心を写したかの様にポツポツと雨が降り始め、急いで街の外で野営準備をして、その間関羽さんは濡れないように大寸胴鍋の中へ。急いで濡れないようにテントを張つて、地面から水が流れてこない様に石と木などを使って高床を作り、そこに毛皮を敷く。そして関羽さんをテントに移す頃にはすっかり深夜で外は土砂降り。火を起こすことも料理をする気も起きず、水を飲んで不貞寝したのだった。

……良く考えると俺、昨日は飯も食つてねえな。関羽さんもだけど。趙雲は後で泣

かす。

取り敢えず、まずはいつの間にか毛布がわりの毛皮ごといつの間にか移動してきて、俺の腕を抱き締めて幸せそうに眠る関羽さんをどうやって起こすかが問題か。

・
・
・

さて、あの後結局普通に起きた顔の赤い関羽さん。どうやら落ち着いてくれた様なのできちんと事情を説明し、誤解を解いてお互いに謝罪して、ようやく事態は解決を見た。ちなみに3人と出会うきっかけとなったちびつ子の痴女騒動を説明した時に、関羽さんはすごい冷酷な目で「ほう。分かりました。」とだけ呟いた。ちびつ子2人の未来が確定した気もするが、俺は悪くない。

現在は仕入れた包丁と中華鍋を使って、久しぶりにガチで料理中である。関羽さんは火を起こして土台を作ってもらい、そのあとは木を切ってもらって、食事台と椅子を用意してもらっている。

メニューは関羽さんにお詫びを込めて、甘いみそ、辛いみそ、濃いみその三種類で作る味噌三昧である。

街で買った肉まんの中身無しみたいな謎の饅頭を細かく千切って乾燥させ、小麦粉と解いた玉子をくぐらせた、大きく切ったイノシシの肩肉（柔らかくなる様加工済み）に隙間なく塗す。散々貯めてきた料理用兼治療用の熊の油をふんだんに鍋に入れて、熱する。指を入れていい温度になったら、粉付けした猪肉を油の中に入れていく。まあトンカツだ。

ソースには俺特製の甘い味噌ソースを用意し、せっかくなので決め台詞がお粗末!な少年料理人が作った料理をリスパクトした熊肉メンチカツも用意する。

更には街の肉屋で仕入れた馬肉（意外と安い）とたくさんの野菜（四次元袋から使用）を使った味噌風味（濃い目）のすき焼き鍋を用意する。

そして余った様々な肉の切れ端を片っ端から叩いて、これまた街で購入した豆腐と生姜、にんにく、俺特製コチュジャン擬き（辛味噌）と一緒に炒めて麻婆豆腐を作る。

おまけに関羽さんの大好きなモツ鍋も取り出して弱火にかけて取り出し、買ったばか

りの釜で炊いた、炊きたての白米が揃えば！

スーパー味噌三昧コースの出来上がりだ！さあ、おあがりよ！絶対食べきれないと思うけど！

「……。」

啞然とする関羽さん。まあどう見繕っても、張飛がいない俺たち2人じゃ食い切れない料理だよ！俺見た目と違って意外と食べないし。

目で多過ぎだろ、と責める関羽さんだが、全部好物の味噌を使った料理だと言うと、ソワソワしながらそれでも多いですよ、とか言う関羽さん。顔ニヤけてるぞ？まあお詫びだから気にすんな！食い切れなかったら小分けにして四次元袋に詰めときやまた食べるし。

一昨日の夜から何も食べてないし、腹減ってるだろ？深く考えずに食べようぜ？

「……それもそうです。確かにもうお腹と背中がくつつきそうです。さっそくください」

きましよう!」

そう言つてにこやかに箸を取る関羽さん。やれやれ、ようやく食事でありつけるぜ。

「やつとですか、風はもうお腹が空いてお腹が空いて、・・・ぐう。」

「寝るな!まあ、確かにお腹ぺこぺこです。」

「はわわ、待ちくたびれました。」

「あわわ、朱里ちゃんそっちのお皿とつてください。」

「メンマは無いのですか・・・仕方ない。」

・・・どっから出てきた裏切り者共。

・
・
・

あのあと一悶着あったが、取り敢えずご飯が冷めると関羽さんが矛を収めて、結局みんなでご飯を食べました。

人数が大幅に増えたので、大量に余るはずだった料理も綺麗さっぱりなくなり、戯志才と程立には使用した食器などを川で洗ってもらっている。

なお、ちびつ子2人は泣きながら痛む尻をさすりつつ、般若の様なオーラを出す関羽さんの説教を続けて受けている。ちなみにちびつ子2人の尻が痛むのは、俺が罰としてお尻ペンペンしました。もちろん優しく力加減はしている。じゃないと平手でも2人の尻がなくなっちゃうからな。

え?・・・趙雲?趙雲はどうしたって?

ああそれなら、今も俺の手の中で呻いているよ!正確には俺の握り拳でコメカミをグリグリされている。たまにちよつと力が入り過ぎてビクンビクンしたり、王を守る猫型キメラアントのに脳みそ弄られたハンターさんみたいに女性がしちやいけない顔して気絶したりしてるけど大丈夫!ちゃんと死なない様に手加減してるし、後遺症が残らない様に意識があるとき以外してないから!

・・・あれ、何でみんなそんな顔してるの?大丈夫だってしつかり手加減してるから

！何ならちよつと受けてみる？ははっ、そんな遠慮するなよー

閑話休題。

・・・さて、お仕置きも済んだし、これからどうするかね。

俺は街での用事すでに終わってしまったが、関羽さんはどうするの？なんか仕事を探すとか言ってなかった？手伝えることなら手伝うけど。

そう言つて関羽さんの方を見ると、未だに趙雲を追いかけていた足を止めて（お仕置きが終わったあと、もうお嫁にいけないとか言いながら、懲りずに新しい扉がどうか言つて俺に抱きついてきたので、関羽さんと槍を持って追いかけてこしてた2人）、こちらにやつてきた。

「それなんです、どうも面倒な事になっている様です。」

そう言つて真剣な顔をする関羽さん。む、面倒事かな？

取り敢えず。お湯を沸かして街で買ったお茶（謎に紅茶があつた。アールグレイみたいな感じ）を入れて、茶菓子に俺製クッキーと俺特製みたらし団子を食べながら話を聞くと、どうやらこの街を出て、次の街までの途中に、かなり大規模の賊が、関所を落として居座つていらしい。

大規模つてどのくらいだろうかと聞いてみると、同じく情報を仕入れていたらしいちびつ子2人と、将来の魏の軍師たちが、菓子を食べる手を止めずに言つた。約千人くらいとのこと。多過ぎじゃね。近隣の賊が全部集まったりでもしたのか？

そう聞いてみると、4人が仕入れた情報を教えてくれた。

何でも、最近腐つてる事に定評のあるどこぞの領主だが何かの私兵の一部が、最近任命されてやってきた敏腕な新領主に追われてこちらに逃げてきた。その数約200。そして最近様々ところで騒ぎを起こしている黄色の頭巾を被つた賊の集団と合併し、近隣最大の賊集団となり、その力と数にあやかろうと、不平不満の溜まつた民や、小規模な賊が次々と迎合、更にはだらけきつてやる気のない兵士しか居ない関所を襲つて落とし、住処まで手に入れて余計に拡大しつつあり、これ以上拡大する前に討伐軍を編成しようにも、一番近いこの街はそんなにたくさんの兵士はおらず、糧食も用意できないので、文を出し、近隣の軍を借りれないか交渉している真つ最中。まだまだ人手が用意

できないと。

まあ要するに最近よくある腐敗政治のツケが溜まっちゃった感じか。なるほど。で、それが関羽さんの仕事にどんな関係が?役所が麻痺でもしてんの?

「いえ、単純に賊討伐をして褒賞を得ようと思って居たのですが……。これなら2人で出来ますし。ですが……。」

あー、近隣全部集まっちゃったから、1人手を出すと全員相手にせにやなんのか。

「ええ、そういう事でして。」

何とまあ、それは正直めんどくさい。うーむ、どうしたもんか。手を出すわけにもいかなからなあ。もういつそ別のルートで違う街目指すかな。とか考える俺達。そこに声を上げる奴がいた。趙雲だ。

「何を思い悩む事がありましたよや。賊が集まっていて、民が困っていて、国軍がこないとなれば、我々の手で賊を退治すれば良いのです!!」

・・・何言ってるんだこいつ。相手何人だと思ってるのか。というか話聞いてたか？手を出してはいけないつつに。そういうと趙雲さんは明らかに失望した顔で言った。「あれだけの武を持ちながら、貴方も結局腰抜けですか。やはり男はその程度なのか・・・。困る民を救おうという正義の心は持ち合わせていないのか!？」

いやそれ関係ないから。まず状況を理解しているのかお前。そーゆー問題ではなくて、「・・・もう良い。ハッキリ言って失望しました。そなたには期待せず、私一人で向かう事にします。」ファツ!? までまで! 一人とか馬鹿か? 相手千人だぞってかお願いだから話聞け!

とか引き止めようとする俺に「腰抜けの言葉は聞きませぬ。私まで腰抜けになつてしまふ。」と捨て台詞を残して去っていく趙雲。いやいやだからね、そこじゃなくてね?

・・・はあ、と思わずため息をつく。周りを見ると何か全員の視線が集中している。アレ? 程立と戯志才はともかく、何で3人まで失望した顔してんの?

「本当に子竜を一人で行かせる気ですか? 確かに勝ち目は薄いですが・・・。」

本当に怖気付いてしまったのか? そう言外に問うてくる皆。・・・え、お前らもなの

?ではどういふつもりなのかって・・・いやいや!そうじゃなくて!

まずこの戦い、勝手に俺らがちよつかい出していいもんじゃねーから!

「・・・え?どういふ事ですか?だって軍がこないのでは・・・。」

いずれ民が襲われるって?あのな、趙雲もだけど誰が正規軍がこない何て言った?というかちびっ子どもは自分で言っただろ。

準 備 中 !!

やがてはしつかりした装備の軍がやってくんだよ!しかも軍人にとつて賊退治は功績になる!だからちゃんと勝てるようにしつかり準備してるわけだからな。それを横から一般人がいきなり功績搔っ攫ってみろ!あいつら嫉妬深いし、昨今の腐りっぷりだと下手したら逆恨みされるぞ!?

「!?!」

しかも相手は千人以上の賊だ。たった数人で勝つ事は出来ても一人残らず殲滅は非常に難しい。下手に追い込んでバラバラに逃げられてみる、どうやって追う気だ?よしんば追ったとして、殲滅するまでの間にどれだけの村や人が犠牲になると思う?逃げる

賊が生きるためにやる事なんか1つしかないぞ!?

とうかどいつもこいつも人を腰抜け扱いするがな、勝てないとも戦わないとも言つてねえだろ!人の話をまず聞けこの馬鹿ども!!

・・・ふー、いかん。ちよつと熱くなりすぎた。危うく変身するとこだ。・・・あん?なんだお前らその顔。鳩が豆鉄砲食らったような顔して。

「あ、いや、なんと言いますか。」

「見た目と違つて、お兄さんが頭良くて、驚いてます。」

ブツコロ。お前全員そこに直れ。一人一人泣くまで説教(物理)してやる。

ちよつと全員俺を脳筋扱いすぎなので、泣くまでお説教してやろうとしたら、焦つた関羽さんたちにそれどころではないと止められた。仕方がないので一旦予先を納める。・・・あくまで一旦納めただけが。

てかお前ら2人は助けに行かなくていいのか?幼馴染じゃないのか?そう聞くと、苦笑しながらいう。2人とも武力は無く、幾ら何でも無謀すぎるので、一緒に自殺まで付き合つてはやれないとのこと。まあ流石に無理があるよな。分かる分かる。

．．．まあ、その割には手に力入り過ぎだと思っけど。

「っ!．．．私達にもそれぞれ目的があります。だから、こんな事で無駄死には出来ません。．．．ですがっ!」

「自分に武力がないということをし、こんなに後悔する日が来るとは思わなかったのです。」

乾笑いしながら、悔しそうな事を言う2人。まあ正直まずあの馬鹿止めろよ、と思うが。まあいいや。とりあえず俺は出かけて来るわ。ちびっ子ども、お前ら今度は俺たちの分の宿とつとけよ?あ?一緒にいく?黙れ幼女。子供は寝ないと大きくならないぞ。

「なっ!?!まさか行くつもりですか?相手は千人ですよ?たった数人では無駄死にです。」
「いやいや、なんで負ける前提やねん。アレ、もしかして勝てないでも思ってたの?なんで?俺一度も勝てないとは言ってないよね?と言うか時間さえあれば、俺一人でもなんとかなるよたぶん。」

「な!で、ですが、先ほどご自分で殲滅は難しいと．．．!」

そりゃ俺素手だし。たくさんいる相手を一人ずつ潰してたらその間に逃げられるだ

ろうよ。ではどうするって・・・、アホか。要するに効率と速度の問題だ。本来なら逃げられないようにするのが一番だが、その準備の時間はどこその馬鹿が突っ込んだせいで取れないから、逃げられるよりも早く、たくさん潰すしかないだろ。

あん？それがどうするって武器使うんだよ。昔から人間は道具を使って効率を良くして生活してきただろ。当たり前やん。はあ？武器はどこかってお前ら・・・あるだろあそこに。

そう言つて指差す俺。何故か皆が驚いているが、ほら、良いから行くぞ。あの馬鹿本気で一人で行つたみたいだし、早よいかんと死んでしまふぞ！

・
・
・

ひゃつはー！狩りじゃ狩りじゃ！賊狩りじゃあ！！

はいっ、というわけで現在賊の溜まり場となつている関所に突入しました羌毅さんだ

よ!あ、関羽さんも一緒です!軍師たち四人はひ弱なので街にお留守番です。

そして何か倒した賊の死体で足を取られてやられそうな趙雲さんを発見し、邪魔なのでお手製の武器は上に一旦ぶん投げ!密かに練習していた超・必殺!の飛鳥文化アタックで乱入!

ドガアアン!!

いーヤアツフウー!何か色々なものを置き去りに!俺、颯爽登場!

やあ人の話聞かない系残念美人馬鹿!元氣してた?

「な、何故・・・?」

何故ここについて?どつかの馬鹿が人の話聞かず賊の群れに突っ込んだからだよ!

話してる間に正気戻った賊が一斉に武器を振るって来る。それを見て声を上げる趙雲さん。まあ落ち着け。俺にこいつら程度の攻撃なんぞ通らん。

案の定、まるで鉄に鉄を叩きつけたかのような大きな音を立てて弾かれる。驚愕する賊と趙雲さんだが、呑気に関羽さんに声かける俺。関羽さんや、どうもこの馬鹿疲れて動けないみたいだし、俺が大部分やるから逃げようとする討ち漏らしと、この馬鹿の面倒をお願いします。

「正直甚だ不本意ですが・・・仕方ありません。了解です。」

そうやって趙雲さんを引つ張る関羽さん。馬鹿にされたと受け取った賊どもが声を上げる。ああそうだと関羽さん。

「はい？何でしょう？」

危ないから、近寄らないでね！

そう言つて落ちてきたものを掴むと同時にあたりを薙ぎ払う！

風を引きちぎるような、凄まじい轟音とともに俺の周囲の賊の姿が消し飛んだ！！

「・・・は？」

さて、その声をあげたのは賊どもか、はたまた趙雲か。

どちらにしてもら今この場にいるほぼ全ての視線が俺の武器に集中しているのは間違いないだろう。

「・・・貴方が『それ』を武器だと言って引き抜いた時も冗談の様な光景でしたが。実際にこうして目の前で振るわれているのを目の当たりにしてもまだ、現実感が湧きませんね。」

呆れた様に、それでいて感嘆したように、呟く関羽さん。

『それ』はあまりに大きく、あまりにブ厚く。

『それ』はあまりに無骨で、あまりに荒々しく。

まさしく『それ』は武器というよりは・・・

・・・明らかに丸太だった!

むしろ引き抜いて持ってきただけだから、ただの木かもだが!あ、一応邪魔な枝は払ってあるからギリギリ棍棒かな!屋久杉の半分くらいの太さと40メートル弱の長さがあるけど! まあ持つて振って殴って相手を倒せばみんな武器で間違っていない

よね！

「いや、それはおかしい!!」

その場にいる全員から悲鳴のような突っ込みが上がるが、シカトして踏み込む。さっきの一撃で一氣に数十人くらい削ったが、相手は千人だ。早くやらないとまた宿に泊まれないからな。え、日帰り予定ですが何か？

轟音と共に振るわれる巨木棍棒。その度に巻き上がる阿鼻叫喚の嵐。逃げようとする連中の先頭にラージャンン投法で棍棒を投げつけ、拾わせないようにする連中は飛鳥文化アタックで一掃し、再び棍棒を振るって薙ぎ払う。数少ない出口の1つは関羽さんが死守してるし、全滅するまでひたすらこれを繰り返すだけの簡単なお仕事ですね！

あ、ちなみに現在、肌色がうつつすら変わるくらいに変身しております。だから現在極限ラージャンン1・5匹分くらいかな！じゃなきや流石にこのレベルの大きさの丸太は振れないし。

まあとにかくとつとと片付けようか！それで人の話を聞かないどつかの馬鹿に説教しないとな！なあその馬鹿！逃げられると思うなよ！

そう言つて逃げようとする馬鹿に釘を刺し、関羽さんの方を見る。そんなに人数も居ないし、まあ大丈夫か。そんな事を考えていたら関羽さんと目が合った。微笑む関羽さん。釣られて俺も笑う。周りが一気に引いた気がするが知ったことか!

さあ、来いと言つてやる。掛かつてこい。掛かつてこいよ賊ども!来れるものなら掛かつてこい!どの道来なきやこつちから行くけどなあ!

はーっはっはっは!み・な・ご・ろ・し・!じゃあー!

俺はそう叫んでまた踏み込んだ!

続く?

10話 多分柔軟性という部分では、ルフィより礼ちやんの方が上。

やあみんな、今更自分だけ料理が上手くなりまくってきてることに疑問を持ち始めたオーク系転生者の俺だよ！

さて、あれから2日経ちました。

あの転生してから初の無双乱舞した日から2日です。

ちなみにあの後ガチで日帰りで賊を殲滅し、街に着くまで本来幼児にしかないお尻ペンペンの刑をひたすら趙雲にしながら帰ってきたら、宿で待ってた軍師どもにドン引きされました。何でも本当に勝つと思つてなかった模様。あれ、恋姫世界つて一騎当千ザラじゃなかったっけか？最強である呂布さんが1万撃破して万夫不当だから普通かと思つてた。

ヤツベ、有名になりたくないし、賊は街の衛兵さんが倒したことにしよ。後片付け面

倒だから名乗らず、凶器である狂氣的な棍棒も肉片とかつきまくって臭いしメンテナン
ス面倒だから置いてきたし、地味に定期偵察に行つた衛兵さん達を見たし、きつと彼ら
も名が上がつて万々歳だろ。

そういうと不思議そうな顔する皆さんと、1人前前で幼子みたいな罰を受けて羞恥と
痛みで泣きそうな顔する趙雲。まだ許してあげませんよ。どつたんみんなして変な顔
して。

え、名を売る絶好の機会？要らんよそんなもん。別に武名を轟かすとかどうでもいい
し。武の道歩んでないからな。あ、でも欲しけりや誰か適当に名乗り出れば？今ならま
だ衛兵さんに押し付けてないから自分のものに出来るよ。

そう言つたら何故か溜息つかれたのさ。その後は何げに初の宿飯を食べて（普通に美
味しくなかつた！）、尻が痛くてまともに座れない趙雲を正座させ、膝の上に石を載せた
りしながら説教した。あ、拷問じゃないから足の下にギザギザの石とかは置いてないよ
！痺れて大変な事になつてる足をつついたりくすぐつたりはしたけど。

結果的に1番効いたのが、そうして説教してるよりも、街で買った味の薄いメンマを
調理して、拘束されて動けない趙雲さんの目の前でみんなで食べた時だったのは地味に
納得いかないが。あの時だけ速攻で謝つたからな。残さず食べきつた皿を見てガチ泣

きして慟哭して焦った。

まあ怒ってるのはこちらであつて、趙雲の馬鹿には猛省を促していただけなので、もう一回作つてまたみんなで目の前で食べてやった。何処かのトンガリヘアーボクサー最終話みたいに真つ白になつてた。

まあ次の日には妙に落ち着いた顔で、自分の小ささと世界の広さを知つた的な事言つてたし、真剣な顔で程立と戯志才に謝つていたし、少しくらいは反省したと思うよたぶん。あ、ちなみに俺はその頃街で食材買つて、せっせと旅の間のご飯作つてた。幼女どもは関羽さんとお出かけした。何でも着替えとか欲しいらしい。持つの俺とか言わんよな。一応関羽さん以外には四次元袋のこと教えてないから面倒だな。つーかあいつらもはや普通についてくる気だよね。

閑話休題。

ま、趙雲の更生記録は置いて、今日は何か趙雲ら3人から話があると部屋に呼び出されております。あ、ちなみに最初に泊まった宿に全員泊まっています。2日前まで賊が近くに溜まってたせいで、部屋をたくさん借りてた商団がそくさと街を出ちやつたからガラ空きなんだと。ラツキーでした。

で、来たけどなんぞ？あ、メンマ料理なら夜まで我慢しろよ。出したらすぐ酒飲むから決まった時間以外出してやらん。

「そんな！一度あの味を覚えさせて置いてお預けなんて・・・お願いします！何でもするのでどうかメンマを！」

ん？今何でもって言った？（ゲス顔
て言うか話ってそれなの？夜でいいじゃん。

「違います！ちよつと待つてください！星、貴女も今はそんな場合じゃないでしょ！」

あ、やつぱり。良かった、3人ともそんな真面目な顔してメンマの話とかされたら対

応に困る。で何だね？

「その前に、呼んだのはおにーさんだけなんですが？」

ああ、後ろの3人？そう言ったけど何かついて来た。特に幼女どもが告白とかどーとか言ってたからデバガメかも。勘違い訂正すんの面倒だから放置してた。聞かれたくない感じ？

「まあ、告白と言えば告白ですし、聞かれて困るわけではないので構いませんよ。」

そうなの？ならまあいつか。あれ、どつたの関羽さん、そんな驚いて。幼女たちまでよく分からんが何か大事な話らしいから邪魔しないであげてね。

「大事な話の前に、風の話聞いてください。」

良いよーなにになに？恋バナかしら。おにーさんレズは分かんないけどとりあえず聞
くよ！

とか思ったら2次創作で良く読んだ程立が程昱になる夢のお告げの話をされた。ふーむふむ、なるほど！だから改名したのね。いんじやね、大した違い無いけど、そーゆーのは自分の意志が重要だよ。頑張り！

で、それがどーしたの？ん、戯志才さんも本当の名前？騙してた？いいよ知ってるから。郭嘉さんでしょ？曹操さん大好きっ子の。アレ、何で知ってるのってそりやあ・・・おっと今の無し。ちよつとやり直すわ。

エエ！戯志才サンツテ本当ハ郭嘉サンツテイウノ!?オツタマゲー！

ええいうるさい。何も知らんよおにーさんは。戯志才が郭嘉さんだつて今知つたんだ気にするな。言葉の綾で言い間違いで目の錯覚だよ。え、目は関係ない？失敬失敬噛みました。聞き間違いだったね。え？絶対嘘だ？かみまみた！

まあそんなことはさて置き、何者ですかつてさて置き！改名報告と本名申告で用事は終わりか？じやあちよつと飯の準備を・・・あん？

真名を預ける？いやいら無いけど。貴方に仕えたい？あ、それ言う相手間違ってるから。日輪？いや人違いです。俺は太陽ではなく蛮族です。

・・・あれ？真名？・・・真名あ!?!どうしたお前ら、こんな知り合つて数日の蛮族に真名預けるとかなに熱でもあるの？頭大丈夫？医者呼んでこよつか!?!

「何故私たちはここまで理不尽な心配をされてるのでしょうか・・・。」

いやあ、正直なんでもいきなり言い出したのか分からんし。真名つて大事なものなんだから？俺でも大事にしてるくらいだし。と言うか郭嘉、お前さん曹操さんに仕えたいって言つてなかつた？会つたことないのに鼻血出すくらい憧れてたじゃん。

あ、お礼？いや趙雲はともかく、お前らには何もしてないし。お礼とか言われても要らんよ。つーか仕えたいとか言われても俺一般人だし。むしろ蛮族だし。甲斐性なんて無いので他を当たれ。

はあ？旗上げ？するわけ無いだろ。今だつて仕える主人探してる関羽さんに着いて行つてただけだし。幼女たちと関羽さんに良い主人が見つかったら山に帰るよ俺。

・・・あれ？

どったのみんなして急に黙って？ 関羽さん達まで。なに？ 聞いてない？ あれー、言っ
てなかったか？ まあその予定ですよ。正直人里には食材と料理と生活雑貨しか求めて
なかったし。

「駄目でしゅ！ ぜったいに駄目でしゅ!!」

「何故ですか！ 私と一緒にいるのが嫌なんですか!？」

うおっ、なになに急に。何で駄目なんだ幼女ども。心配すんなちやんと面倒見のいい
保護者探すから。最悪実家まで送るし。関羽さん、そんなこと一言も言っただけよ落ち
着いてー。びーくーるびーくーる。あ、伝わらないやこれ。

へあ？ なに程立じやない程昱。本気ですかって嘘だと思っただけ？ 何故って趙雲、そ
りやあ人里にそんな未練ないからな。だって最強とか興味ないし、金で欲しいものもな
いし、正直俺が作ったほうが飯美味いし、見た目で怯えられるし、必要なものがある時
だけ来ればそれでこと足りるし。ついでに知り合いが多いわけでもないし、真名交換

するくらい仲良いの関羽さんだけだし。

・・・ん？どうした郭嘉。それはつまり、仲の良い知り合いが居れば良いのですかって、いやそれは「姓は趙、名は雲、真名を星と申します。此度の恩に感謝を込めて、どうか我が真名を受け取っていただきたい。」おいやめろ、急に真面目な顔して話し出す「風は風といえます。」おいこ「あわわ、真名は雛里でしゅ！」無理矢理未練増やそうとすんな！こら、何だその顔、やめろ！交換しても旗上げなんかしないぞ！だから無理に真名を預けなくていい！無理じゃない？違うそうじゃない落ち着け！一時の熱に流されてはって聞け！聞いてくださいお願いします！

・・・結局全員と真名交換しました。旗上げは断固拒否したけど、山に帰る予定は未定になりました。

ははっ、関羽さんと幼女たちの涙目には勝てなかつたよ・・・。

あ、何度も言ってるけど趙雲、お前の色仕掛け下手だからやめろ。逆に鬱陶しい。無

理して見栄張んな処女なんだから。

「!?」

・
・
・

3日後。

さて、色々あってみんなの真名を預かって3日経ちました。

なんかよく分からんけど、3人ともついてくるそうです。朝食の席でそう伝えられました。ちなみに朝食は宿のものじゃなく俺が用意したものです。シヤケもアジの干物も無いのでメインは出汁巻きで、味噌汁、ご飯に、それとサラダをつけて、和風にしてみました。出汁巻きが好評なので嬉しいです。ちなみに漬物は用意できなかった。いや、四次元袋の中身って時間経過ないから漬からないんだよね。持ち歩くには嵩張るし、今は

まだ暖かいから下手したら腐るし。

ちなみに郭嘉さんとはかく、程昱はまだ俺が旗上げするのを狙ってるくさい。あ、どうでも良いけど程昱、俺の膝の上で寝るのやめて。おいコラ幼女ども、よじ登ってくんなスペースねえよ。なに？ずるい？分かった分かった、程昱下ろせば公平だろ。だから降りろ程昱。うおっ、いきなり後ろから抱きついてくんな趙雲、あ？胸の感触？悪くはないけどって待つて関羽さん！部屋で青龍偃月刀はまっすいよ！

・・・つ、疲れる。何なのお前ら、急に触れ合い過剰よ。年頃の女の子と幼女なんだから慎みを持ちなさい。関羽さんを見習え。特に程昱、お前だよお前。不思議そうな顔すんな。夜中いきなり布団に潜り混んできただ

バキイ！

・・・どしたの関羽さん湯呑みがあ、はいすいません。何でもありません。え、その後どうしたってそのまま寝たけど？あ、まさかまたロリコン疑ってる？そんなわけないじゃんそのまま寝たよ。暑いからやめろってだけでえ、問題はそこじゃない？男女七歳にして同衾せず？いやそれを言ったら普段から俺らも一緒のテントで寝てるし。え？それとこれとは別の話？そうなの？じゃあ私も一緒につて趙雲、お前は羞恥心を持って。心配しなくてももいつこテント用意するよ？

おい郭嘉鼻血出てる鼻血！妄想止めろ死ぬぞ！

・・・危なかった、こんなくだらん事であの郭嘉が死んだら後の歴史書になんて載せたらいいか分からんからな。つかなんの話してたつけ？・・・ああそうだ触れ合い過剰とかそんな話だ。なんかよく分からんけど、言いたいことは口で言えよみんな。

・・・あれ、どしたのまたみんなしてだんまり。つか最近このパターン多いね？あん？何で言いたいことがあるって分かったか？見りや分かるよ何となく。後俺鼻がいいから、地味に匂いでなに考えてるかうすらボンヤリ分かるぞ。え、体臭？今更だろ気にすんな！あ、ゴメン関羽さん。気をつけるから怒らないで。趙雲も槍を下ろせ。

ああいやそうじゃない。つまり言いたいことあるなら言ってくれって話だよ。なんかあった？相談ごとなら旗上げ以外乗るよ。お、何だ程昱なんでも言ってみろー・・・

・・・ん？真名？なぜ呼ばないのかってそれは。

・・・あー、関羽さんとの約束と言うか、俺の矜持と言うかそんな感じ。どういう事って、そーさな、真名は神聖なものだろ？だから、真名を許してない人が聞いてるところで、真名を交換するくらい大切な人の真名を呼びたくないというか、真名を預けてくれたことを大事にしたいとかそんなところ。人前で呼ぶにしたって、よっぽど気心知れた

仲の奴らでもない限りはってなに？此処にいる全員が全員と真名を交換してる？そんなの？いつの間に……。

あー。そうなのか。なるほど。

じゃあこの中でなら別に構わない、のか？まあそれならいいや。

ん？ていうかそれ気にしてたの？すまんすまん。これからお前たちだけの時は真名で呼ぶよ、風。だからもう布団に潜り込んでくるなよ。親交を深める？いや駄目だから。なに言ってるの？朱里も雛里も、また膝の上に乗って来るんじゃない。子どもじゃないんだろ。

何だ星、ニヤニヤして。あん？モテモテ？幼女にモテてどうすんだよ。もつと大人の女性を要求する。ん？なんだ仕方ないって。素直じゃない？誰が？何言ってるんのお前は。お前いつから大人の女性になったんだ。笑わせんなんちゃって恋の百戦錬磨。色仕掛けのテクに現実感持たせてから出直してこい処女。

て、おい稟！鼻血鼻血！お前どんだけ想像力豊かなんだ！いい加減にしないと死ぬぞ！

……まあいいや。俺そろそろ新しいテント用の布買ってくるから、食器は洗つとい

てね。

愛紗、すまんが付いて来てってアレ？なに、表情暗いよ？体調悪いなら休んでる？それなら他の奴に・・・大丈夫なん？無理はするなよー。じゃ行こっか。

・
・
・

そんなこんなで街に買い物に来ました。

あ、ちなみにウチの軍師たちが関羽さんと趙雲さんが賊退治したことにしたので、現在賞金で懐はメッチャあつたかいです。不安だった軍からの逆恨みも今の所ないっぽいし、割と気前よく褒賞金払ってくれたので、俺の心配は杞憂になつてくれそう。駄目なら逃げるだけだが。

・・・つーか隣の関羽さんがさつきから挙動不審です。

なんか急にここやかになつたり落ち込んだり。なんか俺に言いたいことがあるけど、やつぱり止めよう、とかそんな感じで悩んでるみたいなんだがよく分からん。あ、でも

とにかく無意識で俺の腕に胸押し付けるのをやめてください。趙雲のあほ色仕掛けと違って、無自覚な分理性がゴリゴリ消費される。もう何度目か分からないけど表情筋死んでてよかった！

「・・・道玄。」

んあ？なんぞ？言いたいこと決まった？ききますよい。と思つたらまた俯く関羽さん。どつたの関羽さんマジで。あ、腕に力込めないで理性ががが

うーむ埒あかんし仕方ない。さつき怒られたけど匂いで感情診断じゃー！

スンスン。クンクン。

んー、なんか混じつててよく分からんけど、不安と喜び？後は・・・寂しい？

結局よく分からん！聞いてみても答え返ってきそうにないし・・・

まあ、話してくれるの待ちましょ！

とりあえず久し振りに羌毅さん式ナデナデ！相手はリラックスする！りらーつくす！ナデナデ。

ぎゅつ。

おつとなんか予想外にハグされたぞー。なんか泣きそうだ関羽さん。

関羽さん関羽さん、ハグは嬉しいけど涙目でやるのは周りの視線が本当に刺さるんですかー？

駄目だなんも言えぬ。とりあえず満足するまでナデナデしておくことにした。

・・・しばらくしたら解放してくれたけど、テント用の布買って帰るまでの間、ずっと関羽さんが暗いまま腕にしがみついていたので、とつてもオロオロしてた俺でした。

くそう、良く考えたら俺も前世でそんなに経験ねえや。趙雲を笑えねー。

モテ力が欲しい。そう切実に思いました。サンタさんプレゼントしてくんないかな・・・。

続く？

11話 ロード・トゥ・もも

やあみんな、今更になって一刀君が蜀ルートでない可能性に気付いたオーク系転生者の俺だよ！

関羽さんと暗い雰囲気のデートから1週間経ちました。

なんか色々あったけど、とりあえず関羽さんは見た目元気になりました！あくまで見た目なので、空元気くさいけど。なんか他の女性陣つか他女性しかないけど、そっちは理解がある模様。

まあ、今俺にできることはそんなにないので、悩みとかを打ち明けてくれるその時に、余すところなく受け止める準備だけしときます。とりあえず参考図書としてリータけ読みたいたいんだけど。あ、はい無いよね。知ってた。

とはいえ、いつも順風満帆といきません。俺にも最近ちよつと悩み事もあります。そ

れは・・・

・・・スヤア（―――）zzz
 ・・・すーすー（―――）。oo

これです。

そう。最近何故か朝起きると誰かが一緒に寝ています。正直気を許しているせいか、俺は寝ていても近づいててきたのがこいつらなら気付けない模様。ちなみに今日は関羽さんと程昱です。

ついでに言えば、関羽さんは1週間前から皆勤です。いつもは程昱の代わりに幼女どもが多いです。郭嘉は一度もきてません。趙雲さんは朝起きたら調子こいてまたしても色仕掛けしてきたので、3日前から俺の部屋出禁です。

他の連中はともかく、関羽さんは本当に理性ガリガリ無くなるから、ちよつとマジ遠慮して欲しい。言ったら泣きそうな顔するので言わないけど。趙雲はあの下手くそ過ぎる色仕掛けなければなあ。普通に寝ているだけならマジ美人なんだが。

・・・いつか隙を見て娼館いかなきゃ！そう強く誓いました。

・
・
・

さて、なんかいつの間にか大所帯になってきたが、再び旅に戻り、空の下を歩いていく。行き先はなんと劉備さんらしき人のところ！少し前に俺が桃が食べたいと言ったら、郭嘉がこの辺りで有名な桃の産地を調べてきてくれて、みんなの主人探しも難航中？なので、見聞広めるついでにことでみんなで行くことになったのさ！もちろん俺が誘導というかゴリ押ししたんだがな！ふふふ、計画通り！

あ、ちなみにずっと言及してなかったけど、今の季節は夏ですよ！ちよつと遠いので、着く頃にはギリギリ桃がなっているかもしれないです。ついでに出来るだけ仕入れて

おこう。・・・桃園の誓いつて桃の実ではなく花が咲いてる時期の話だった気もするけど、今更だからいつか！まずまだ張飛居ないし！

もちろんいつも通り幼女どもは荷物籠の代わりである大寸胴鍋にライドオンしている。そしてその中に当然のごとく交じる程昱。まあ俺の中で風は幼女枠なのでそれは構わん。重さはそもそも荷物籠の代わりである大寸胴鍋が石製の時点でお察しであるので、増えたからと文句もない。

ただし、星。テメーは駄目だ。

あ？差別？人の上で風景見ながら風情とかほざいて酒飲んで酔っ払った挙句、揺れて気持ち悪いと吐いた馬鹿は誰だ？そうだテメーだよ。美女の雫？引っ叩くぞテメー。お前のせいで川に頭から飛び込む羽目になったんだぞこちとら。

俺の服はサイズがないから乾くまで禪一枚だったし。通りすがりの商人に、半裸の俺と上に乗る幼女どもを目撃されて、凄いな奴を見る目で見られた俺の身にもなれ！
・・・あん？代わりに横抱き？アホか。お前をそんな丁重に扱うくらいなら、毎度貧

血で死にそうな稟にやるわ。良いからとつと歩け酔っ払い。

未だブーたれる趙雲を引き落として歩かせる。呆れ顔の郭嘉だが、俺と目線は合わせない。こないだ趙雲のせいで半裸になった時から、俺の目を見るとその姿が浮かぶらしい。相変わらずの妄想力だが、そういうのはもうちよつとイケメン相手にしとけ。守備範囲広過ぎだぞお前。

あ、マセガキどもヤオイを布教すんな！とゆるかまだ持ってたのか。はい没取。次の野営時に薪がわりになります。横暴うるせー幼女。第二次性徴が現れてからほざけこのペドども。

そして関羽さん、ぶつちやけ歩きにくいんですが。もうちよつと離れて歩きませんか？あ、はい。なんでもないっす。人肌で暖をとるって大事だよね。今夏だけど。地味に汗で胸が服に張り付いて・・・眼福です。ありがとうございます!!

そんな風に和気藹々としながらの旅。こういうのも悪くは無いなーとも思う。ちよつと疲れるし、関羽さんと2人きりの時も静かで好きだったけど。強いて言えば女性比率高過ぎ。オリジナルの男武将はまだか？あ、それ俺か。駄目だ詰んだ。

・・・さて、今はみんなしてお昼休憩中です。もともと急ぐ旅でもないし、体力のない軍師組が休憩を増やすことを望んだのと、食べながらの移動に難色を示したからもある。正直俺からすれば軍師組は稟以外は歩いてないだろと言いたいところではあったが。

とはいえ、流石に1から準備するほどの時間は取れないので、相変わらず保存食：：と言いたいところだが、既に完全に俺お手製のお弁当です。保存食が普通に不味いのと、みんなと真名交換してから四次元袋のことも共有したので、堂々と使えるし、前回の街で何故かたくさん売ってた弁当箱を、それぞれ買ったからでもある。しかし不思議なことに、これだけ高い女性比率を誇りながら、料理しているのは唯一男である俺だけだ。なんでだろうなあ（遠い目）

「道玄殿がつくるおむすび？は美味しいです。これ、中身は何ですか？」

ん、それは高菜と挽肉の辛味噌炒めだな。辛過ぎない程度に抑えたから、食べやすい
だろ？

あ、星。いくら美味しいと褒めても酒は出さん。メンマがあるだけ良いだろ。あつ！こ
ら幼女ども、ピーマン除けるな！

はいよ愛紗、特製の味噌風味付き玉子。半熟だからそのノーマル塩むすびによく合う
よ。おいこら風寝るな！

・・・なんか俺本性猛獣の蛮族の筈なのに、主夫みたいになってきた。いつか本気で
親に間違われそうな勢いでマジに困る。

・ ・ ・
・ ・ ・
・

さて、昼メシも食べ終わり、弁当箱を洗う川が近くにないので、とりあえず四次元袋に入れて出発した。

途中俺たちとは逆の道へ向かう商人さんと知り合い、もう少し行くと村があると教えてくれたので、今日中に着けばいいなと思う。何でも結構大きい村で、宿屋は無いけど旅人向けに住民の居ない家を宿代わりに貸してくれるとか。

んー、初めて関羽さんと訪れた村を思い出すな。何か久しぶりでちよつと楽しみになってきた。なあ愛紗。懐かしくね？楽しみだなーそう聞くと久しぶりに屈託ない笑顔で肯定する関羽さん。いいね！

あと、ついでにーつ興味深い話も聞きました。何でも幼いが滅法強い賊がでるのだとか。あれ、それ張飛じゃね。確かアニメでそんな設定だった気がする。まあ本物かどうか分からないが、行ってみる価値はあるな。

ますます楽しみになってきた！というところで、唐突に髪の毛を引っ張られる。おい

よせ、止めろ朱里！剣で切れない俺でも、髪の毛を引つ張られたら地味に痛いんだ。言いたいことがあるなら口で言え。

で、何だよ。天気？雨がきそう？・・・確かに雲があるが、晴れてるぞ？ああでもそういや諸葛孔明って天候読んだり操ったりできるんだっけか？んー、もう直ぐ教わった村がある山が見えるはずだけど、間に合わない感じ？そか。

はいじゃあ、今日はここまでで野営するぞ。愛紗、俺と一緒にテント用意しようか。星、稟、薪拾い行ってきて。獲物？あー、雨降るまでそんな時間ないっぽいし、いいや。四次元袋の中に街で買った食材たくさんあるし。幼女どもはテント周りの石とか拾ってくれ。さて、雨降ったら火を起こせないし、冷めた飯が嫌ならみんな急げよー。

はい、てなわけで夜です。

あのあと野営準備をして、夜飯には少し早いけど食事を済ませたあたりから、朱里の読み通り雨が降ってきました。しかも意外と豪雨です。てゆうか嵐！雷鳴ってるし！念のためテントは頑丈に吊るしてあるが、飛ばないといいな。念のため若干森の中で設置して良かった。現在はみんなテントの中でゴロゴロしている。本を読むには暗いし、万が一を考えて、俺が酒を禁止にしたからだ。

にしても朱里の読みナイスである。ご褒美に羌毅さん式ナデナデしちやろうほれ！髪が崩れると言いながらも、きゃーきゃーいって喜んでるみたいなので良しとしよう。

ちなみに、以前は4人ギリギリだった寝床用のテントですが、前回新しい布を仕入れたので拡張しました。本当はもう1つ別に作ろうとしたのだが、満場一致で反対されたのでこの形に。

なお、このテントだが、もともとは2人旅の時を想定した超簡易なので、ちゃんとした骨組みは屋根部分だけである。イメージ的には運動会とかで使われるテントの隅にある脚の部分無くして、紐で結んで吊るす感じだ。こうすると現在のように風には少し弱い、足元を気にしなくてよいので、周りに木々さえあればそれこそ坂道にでも設

置出来る利点がある。まあ坂道になんぞ設置しないが。

この時代は当然のごとく木々が溢れてるので、設置に困ったことは一度もない。そのままだと直に地面なので、こうして雨の強い日などは、濡れないように高い床を用意しなければならぬのが欠点だが。

とはいえ、そろそろ面倒なので、このテント用の床を次の街で大工に注文する予定だ。四次元袋に入れれば好きな時にだせるしな。

みんなが言うには、嵐の日に濡れることなくこうして外に居られるだけで、破格どころじゃない快適さらしいが、日本のキャンピングカーの快適具合を知る俺としてはまだまだである。

．．．ん、ちよつと厠行つてくる。

「分かりました。気をつけて下さいね。」

いくら嵐とは言え、すぐそこだ。心配いらん。ついでにサラツと周り見てくる。大丈夫だとは思うが、土砂崩れが起きたら洒落にならんし。一刻以内に戻る。ちびっ子どもが厠行くなら誰かついて行つてやつてくれ。

そう言つて出る。後ろから子どもじやないのか叫びが聞こえたが、夜中に一人でトイレに行けるようになってから言つてくれ。未だにたまに夜起こされるし。

．
．
．

はい現在トイレに外出てきた差毅さんだよ！嵐の夜つて何か無性にワクワクするよね！なのでちよつと言いついでに外を散歩していますよ！ひゃつはー！ちよつ

と川を見てくるぜー！近くに無いからやっぱいいや！

とりあえず、土砂崩れが怖いのは確かなので、真面目に周りを見回る。おつとデカイ雷！今のは近いなー。つーか雨がやばい。びしょ濡れである。あとで乾かさなきや。こんなこともあろうかと掛け布団と言うか毛布も買ってあるので、今度は郭嘉さんに見られる前にかぶっておおなきや。

あー、でもこれは久しぶりに大寸胴鍋で風呂でも用意するか。関羽さんとの2人旅以来から、何故か地味に宿に風呂があつたので、体を拭く以外あまりしてないんだよね。女性陣増えたし。

んお？何か鳴き声聞こえる。どこだろ、何か助けを求めるような声だな。どこだろ。何か必死な感じだ。いつもなら放置だが行ってみよう。嵐の音がデカイ、追えるかな、声。てか何の鳴き声だこれ。

・
・
・
10分後。

そこには土砂崩れが原因で崩れ落ちたらしい家と、そこを必死に掘り起こすイノシシの姿が！

・・・、おかしいな。転生してから俺が見てきたイノシシとあのイノシシ違うんですけど。てか見覚えある。

あ、思い出した！アニメで張飛が乗ってたイノシシだ！そうだそうだ。じゃああの完全に土砂に埋もれて崩れた家は張飛のやつか。そーいや岩山かなんかの途中にあった気がする！あーなるほどね、スッキリした！なるほどなるほど！

じゃああその家の下には張飛がいるのか。なるほどな！

・ ・ ・ ちよつとまで馬鹿野郎!!

洒落にならんそこだけイノシシ邪魔だ馬鹿退け馬鹿！イノシシだけど馬鹿！

閑話休題？

くっそ、なんかもう本当にくっそ！劉備の義兄弟は馬鹿なの？恋姫だと姉妹？しらねえよ馬鹿野郎！もう馬鹿！本当に馬鹿なの死ぬの？

あのあと全力出して速攻張飛を掘り起こしました。ええ、変身したけど何か？お陰ですぐ掘り起こすことが出来た。その間ビビりながらも逃げなかつたイノシシお前偉い。見た目だいふ俺が知ってるイノシシと違うけど偉いからいい。偉いからお前がイノシシ名乗ることを許す。

・ ・ ・ 肝心の張飛だが、掘り起こした時は奇跡的に頭は土砂に埋まって無かつた。屋根が運良く土砂を防いでくれたらしい。体の方は土砂まみれだったが、元来体が頑丈なのだろう、おそらく家が崩れた時にぶついたらしいアザと、多分これもそうだが、右肩

が脱臼しているくらいしか目立った怪我はない。と言うか右肩は寝たまま持ってた矛のせいだろう。刺さらなくて良かったけど、寝る時くらい武器を置けよ……。

と言うか劉備義姉妹は何か？原作前に死にそうになる呪いでも掛かってんの？部位は違えど、関羽さんと同じく脱臼だし。出会う前から仲よすぎだろ！これで劉備もこうだったら訴えるよそして勝つよ！

まあいい、どうもただの気絶のようで、呼吸はしてる。意識がないうちに肩は嵌めておこう。さて、軽く添え木してと。つーか雨強いな。テントに戻ろう。お前も来るかいノシシ。心配するな、食ったりしないよ。お前の大事なこの子も助ける。だから一緒に謝ってくんね？あと証言もお願いします。いや本当に。

……実を言うのとつくに一刻過ぎてんのよね。と言うかこいつの鳴き声聞いた時には既に一刻くらい経ってた。つまり、関羽さん激おこポンポン丸を通り越してム力着火インフェルノの可能性が微レ存。

……さあ一緒に行こうかイノシシくん！逃がさないから是非諦めて一緒に謝ろう！え？自分は関係ない？俺たちもう友達だろ！むしろマブ！だから逃げるな！食つちま

うぞ！

・・・結局関羽さんどころか全員にぶちギレられたぜっ☆

そろそろ正座崩しても・・・駄目？

よ、幼女助けたから情状酌量の余地ありでは・・・あ、はいすいませんごめんなさい。
反省してます。

・・・足が痛いよう。

続く？

12話 恋姫には力の幼女と智の幼女は居ても技の幼女はいない。

やあみんな、暑がりなのにもいつも誰かと一緒に寝てるせいで毎朝暑くて目が覚める爽やかオーク系転生者の俺だよ！

前回危うく死にそうだった張飛をギリギリで救出に成功した。

その結果俺が得たものⅡ説教。

その遣る瀬無さは、プライスレス。

まあそんなわけであれから夜が明けました。右肩以外軽症の張飛はまだ目覚めていません。でも何か楽しそうな寝言をこぼすので、もう少ししたら普通に起きるでしょう。

一応土砂崩れに巻き込まれた幼女なので、昨日から交代で看病してます。特に関羽さんが脱臼して俺が助けた、というあたりでたぶんシンパシーを感じたのか、献身的な介護をしている模様。

なお、俺はみんなから交代で説教を受け続けているので看病は免除されました。ええそうです。今現在も説教中です。皆さん嵐の中、頑丈に張ったテントの中に放置した事を未だに許してくれません。

まあみんな俺がみんなを放置した事ではなく、一刻以内に戻るという約束をシカトしたせいで心配してくれて、もつと体を大事にしろ的な感じで怒ってくれている様なので、こちらとしてもすまなんだあ！つて申し訳なく思っただ大人しく聞いております。なのでそろそろ許してほしい。めっちゃ反省してる。あと朝ごはんが作れない。

「まるで反省してないじゃないですか！」

「自分を大切にしろと私に怒ったのは道玄殿の筈ですが？」

いやだって自分でいうのも何だが、俺の本性はレベル1400ラージャンと緑の巨人ハルクが混じって出来たクリーチャーである。しかも生息地は本来未開の山奥だ。いくら嵐だからって山で俺が死ぬ筈もない。むしろ元気に強くなってくるフラグである。だから心配するだけ無駄なんやで？

もちろんそんな口答えは出来ないけどな！あ、はい。反省してますごめんなさい。

結局朝ごはんの為に解放されたのは、呑気に眠る幼女が空腹と痛みにもだえて叫び起きてからでした。

・
・
・

「つまり、おっちゃんが鈴々を助けてくれたのだ？ ありがとうなのだ!!」ニパツ

なにこの子・・・、メ　　ツ　　チ　　ヤ　　可　　愛　　い　　！　　！でもお兄
 さんな。この動物っ子が！

目覚めてから、空腹とか痛みとか知らない人とか知らない天井とかその他もろもろでメダパニ状態の張飛ちゃんは、暴れに暴れてくれた。まるで警戒し過ぎてパニツク起こす猛獣のごとき勢いだった。

暴れた結果余計怪我した部分が刺激され更に暴れる悪循環。看病してた関羽さんごとっさの判断で外に出さなかつたらテントが完全にお陀仏だっただろう。

外に出た後もパニック状態で、怪我した体で暴れる暴れる。幼くても怪我しても張飛翼徳、あの関羽さんに潜在能力的には自分より上と言わせるだけあつて中々沈静化できず、趙雲と関羽さんが梃子摺つてた。

俺？ずっと説教のせいで正座してたから足が痺れて動けなかった☆

ぼ、僕は悪くない。悪いのは世界の方だ！・・・いや、それはさておき、軍師4人の盾になるので精一杯だった。

なので、鳴き声一つで張飛を落ち着かせ、現状を説明し、さっきのニパツな笑顔とお礼を引き出したイノシシ超えらい。おまえは出来るイノシシだよ本当。うちの全然策を練らない軍師どももより圧倒的にエライ。

後ろから策を必要としてから言ってくれさいと色々文句が上がるがとりあえず、そうだな。その元氣一杯なちびっ子！

「鈴々はちびっ子じゃないのだ!!」

ハイハイそうだねー。それはさておき、腹減らないか？そのイノシシも一緒に飯食わないか？そんな感じの事を聞いてみる。・・・返事は幼女の腹がしてくれた。

じゃあ、朝ごはんの準備しよつか皆さん。作るのは俺しかいないけど。

・
・
・

はい、とゆるーわけで、飯タイムが終わりました。ついでに飯の前に軽く自己紹介。知ってたけど張飛さんと言うらしいよこのちびっ子。

あ、ちなみに面倒だったのでメニユーは街で買った大量の麺を使った味噌ラーメンです。スープやトッピングは作り置きの酒のつまみから使用しました。

なお、張飛さんの食う量を知ってる俺が、ウチの幼女軍師1人丸ごと茹でられるレベルの鍋で直接出したところ、ふざけてるのかとみんなから批難が殺到するも、普通に食べきった張飛さんに皆さん驚きを隠せない様だった。むしろ片手怪我しても、食べる勢いが衰えない張飛さんに食べさせる方が苦労したくらいである。

俺は知ってたのでみんなのその顔見て盛大にドヤ顔してやった。ついでに驚きをプレゼントしてくれた張飛には、俺から羌毅さん式ナデナデと、大粒べっこう飴をプレゼ

閑話休題。

さて、じゃあそろそろ村向かうか。片付けるぞー。

そう言つて手を叩く。さつきまで俺をもみくちやにしてたみんなも、それで一齐に片付けを始めた。

何かもうすっかり馴染んだ風景である。ちよつと関羽さんと2人だけの時が懐かしく感じる。

んー、今日の昼過ぎには村に着きたいな。空き家借りれたら、久しぶりに風呂でも沸かそう。ん？どした趙雲。そんなに大きくない農村の空き家に風呂が付いてる訳がない？

あー、思わず関羽さんと目が合う。そういう最近やつてないっけ？そう言えばそうです。ね。なんて言い合う俺たちに、不思議そうな顔するみんな。

いや、少し前まで水辺があるところでは普通に風呂入ってたから……。なあ？そう言つて関羽さんと苦笑い。良く考えたらまだ2人旅の時の話だ。そんなに経つてないはずなのにもう遙か昔に感じる。随分道連れが増えたものだ。．．あれ、何か変な空気。

・ ・ ・ さん？どしたん鳳統。どうやってって、アレだよ。ほらそこにあるだろ、お前らの乗り物。あの大人が立ったままゆったり四、五人くらい入れるあれ。川とか近くに無いと水が確保できないから、毎回使ってたわけじゃ無いがな。

あん？何だよ趙雲その顔。今まで自分達が経験してない理由？んー、特に無いが、強いて言えば、人数増えたから？女性ばかりだしな俺たち。隠すの大変なんだぜあれデカイから。まあ高さで普通に見るのは難しいけど。いや、ズルイとか言われても困る。お前らだつて俺や他の男に見られたくないだろ？俺にならいい？羞恥心失くした行き遅れ気味処女とか子供産んだ人妻より需要ないぞ自称経験豊富。男心も知らずに何を経験してきたのかはわからんけど。

だいたい、関羽さんと2人の時だつて元はと言えば、関羽さんが動けないほど怪我したから衛生の為に俺が用意したんだs「ちよ、ちよつと待つてください。」んあ？なんだ郭嘉。そんな真面目な顔してー・・・？

アレ、なにこの緊張感。みんなどしたの急に。

「・・・我が主よ、動けない程の怪我した愛紗が、どうやって一人で風呂に入れたのかな？」

い、いや、趙雲。俺お前の主人じゃないよ？え、そんな事どうでもいいの？そう。あれそういう関羽さんさつきから何で黙ってって、なに程昱。え、いいから続きを話せ？いやそれは・・・

「それはつまり、2人は既に裸の付き合をしたことがあるということですかー！」

お、おい郭嘉！大丈夫か！ぬあつ、未だ嘗てない勢いで鼻血噴いてる！？おいこら、妄想止めろ死ぬぞ！それに俺は脱いでないぞ！・・・あつ。

振り向くとそこには顔を真っ赤にした関羽さんと、人を殺しそうな目でこちらを見つめるみなさんの姿が！

あー、えーとほら、治療！治療の為だから。汗かいた病人の体拭いてあげるようなもんだから！やましいこと何もないよ。本当だよ？なあ関羽さん！

「そ、そうですね！結局

一番最初しか一緒に入ったりとかしてないです！他に何にもなかつたし！」

ちよ、関羽さんたぶん今それ言っちゃいけないヤツ・・・！っ！な、何かなみんな

な。え、是非とも風呂に入りたい？いいけど、俺は一緒に入らないからな！不公平!? いやいや、みんな恥じらいって知ってる？それに風呂って1人で楽しむものだよ!?

お、おす！ちゃんと1人ずつ背中流すよ！任せとけ！．．．アレ、どしたの関羽さん、そんなに頬膨らませて。ちよ、何で青龍偃月刀構えてってまああああ！

．
．
．

ひ、酷い目にあつたが、ようやく着いたぜ村に。早速村長に空き家借りられるか聞きに行こう。ちなみにイノシシは山に戻った。どうも俺を信用してくれたようだ。

ん？どしたみんな？ああ、これ？張飛だけど。何故捕まえてるのか？逃げようとしたからだよ？何故逃げるって、怒られからじゃね。今は怪我で動けないから余計にな。張飛が何をしたかって．．．何だろ、盗みか強盗？たぶん人殺しまではしてないはず。まあこまけえことはいいんだよ！

「!!?」

・・・あれ、何でもみんな驚いてんの？ 幾ら手加減してたとはいえ、関羽さんと趙雲を2人同時に相手どれるただの幼女がいるわけないじゃん。戦闘経験豊富に決まってるさ。普通に考えなよー、と思わないでもないが、まあそんなことより村長の家だ。早く家借りよう。何故って？ さつきから離すのだからー！ って暴れる張飛さんが臭いからだよ？ そりゃ親なし一人暮らしで仲間はケモノなら風呂入るところか、体洗う習慣なんて無いよね！ 雨で濡れてる時はそれでもなかつたけど、乾いたら服が特にヤバイ！

それで村長の家に着いたらまあ言われる言われる、文句や罵声の雨霰、コレぞまさしく罵詈雑言！ なんて思う俺。とか村長さんや、なんでもいいけどそろそろ俺たちの用を聞いて欲しいんだけど・・・あ、はい聞いてないのね。知ってた。

なお、俺が捕まえてる幼女は頑張つて耐えてるようだが、目からポロポロ水が溢れている。まあ残念ながら自業自得ではあるので、ここで特に庇ったりはしない。他のみんなも、言いたいことはあるけれど、村長さんが話す張飛の犯した罪の数々に口を噤むしか無いようである。痛ましい顔をしている。あ、ようやく止まった。なんかあれだけシ

カトしてたのに最初から気付いてた感満載のお礼を言われた。それで張飛のはこちらに寄越せとかそんな感じの事を言われる。

まあ普通に断る。いやだつて未来の関羽さんの妹分だし。それより空き家が借りたいんだけど。何か戸惑う村長さんと、ホツとしてるけどそれで良いのか、みたいな顔のみんな。そんでこつちを見て何だこいつ、みたいな顔の張飛。くさい。

何か村の恥がどうか焦り始める村長さん。いやいいから。早く空き家に案内してくれ。こいつ洗いたいし。つか、心配しなくてもこんなちびっ子衛兵に突き出したりも殺したりもしねえよ。普通に手当ても飯も食わせるから安心しろ。だから早く。あれ、ひよつとしてここが宿代わりに空き家借りられるってパチなの？

・・・あ、またみんなシーンとする奴かコレ。ちよつと何かそれぞれ騒いでたみんなが、俺の一言で急に静まり返つて視線が集中する学生あるある思い出すからやめてよ。何かやらかした気分になるじゃん。

んで、なに驚いてんのお前ら。張飛は色々動物みたいなちびっ子だから仕方ないとして、他ののもうちよつと頭使えよ特に軍師組。知ってた？使わないと頭の回転遅くなるのよ？あ、コラやめろ！使わせないのはどこのどいつだっていや確かに必要として来なかつたかもだけど、やめろ髪の毛引つ張るなぶら下がるなハゲたらどうすんだ！

なに趙雲。どういうこつて、そりやお前、村長さんの罵詈雑言はこの動物みたいな匂いのちびっ子守るためのものだつて話だよ。何故つてそりや初対面で数々の恨みがこちらにありますよつてハッキリ分かるくらいちびっ子の悪口言つとけば、例えちびっ子に被害出された奴らがちびっ子を捕まえたとしても、「こいつなら自分らよりこいつを恨んでるから、処分はこいつらにやらせてやろう」みたいな感じになるだろ。

実際被害は本当のことだろうから実感籠つてるし、まあ普通はそれで騙されるよね。そうしてとりあえず身柄を確保出来れば、他の村人の手前無罪は無理だろうが、ある程度自分が庇えるとかそんなところだろうたぶん。

あ？なんだちびっ子理解できてないのか。要するに、お前を守ろうとしてくれたんだよ村長さんは。俺らをお前みたいないちびっ子に厳罰下す様な奴扱いしたのは業腹だが、良い爺さんだな。

何故って、そんなこと俺が知るか。お前の事情も村長の事情も知らんし。悪口言つたって、だからそれでもお前を助けるためだつたんだろ。なんだお前本当にあの罵詈雑言聞き流してたな？ 散々本心漏れてただろ、危ないから人を襲うな、とか、誰かの怨みを買うからこうなるんだ、とかそんな感じの。・・・まあ確かにちびっ子には分かりにくいか。

つまり、お前への恨み辛みみたいに聞こえるが、思わず漏れちやつた説教だろ。誰かを襲えば、今は勝ててもやがて勝てない奴が仕返しにくるから「お前が危ない」からやめろーとか、それ見たことか、勝てない奴が出てきたからこうなつた、死んでたらどうするんだーみたいなき感じだよたぶん。つーかこの爺さんからずっと心配つて感じの匂いするし。

そんな感じの事を言うと、何か余計混乱したらしい張飛ちん。まああんま頭使うタイプじゃないしな。馬鹿じゃなくても、いきなりこんなこと言われても理解できんか。まあいいや、そんな訳でとりあえずこのちびっ子本気で臭いからとにかく場所かしてくれ。それから2人で話したら？

そういうと、村長さんは何か色々籠つた感じの盛大なため息をついて、空き家の場所

と特徴を簡単に説明し、家の鍵を寄越した。今の時代にはもう鍵つてあるんだなーなんて妙に感心する俺。良く考えたら恋姫世界だからかもな。

まあいいや、早く行こうぜ。いい加減鼻が麻痺しそうだ。俺鼻がいいから本当に辛いんだ。未だちよつと話についていけないみんなを置いて歩き出す。慌てて追いかけてくる足音を聞きながら、俺は他の村人達の視線を遮るように張飛ちんを抱き抱え、空き家へと急ぐことにした。くさっ！

・
・
・

はいそんな訳で夜になりました。

あれから速攻大寸胴鍋でマックスお湯を沸かし、半分ほどを用意した別の桶（洗濯用、仮洗い用）に移す。風呂代わりである大寸胴鍋はそのままでは熱すぎるので水を入れて温度を調節した。

高さがあるのでみんなが入り易いように土台も用意する。関羽さんのときは俺が直接入れてたから土台が必要なことについさつき気付いた。危うく一緒に入れとちびつ子軍師達に言われるところだった。

つーかあいつら、俺があいつらのお宝本処分してから何かたまにすごい目でこつちを見てくる。主に股間とか尻とか。いくら歳の差あつても見せたら普通に御用なので、急いで木を切つて土台を作りました。

・・・地味に関羽さんや郭嘉まで残念そうだったのは見なかつたことにした。趙雲？あいつはまたもやこちらを揶揄おうと、懲りずに下手な色仕掛けを仕掛けてきたので、いい加減飽きたので逆に早く脱げよつてガン見してやったら何か逃げ出した。羞恥心くらいはまだあつて良かった良かった。所詮処女なんてそんなものである。

なお、張飛は汚れ過ぎなので仮洗用のお湯を少し熱め、くらいに調節して、関羽さんと郭嘉と一緒に体を洗うのを任せた。俺は服の洗濯を請け負う。

流石は恋姫世界、何故かブラジャーやパンティが既にあるだけあつて、体洗う用の石鹸や洗濯石鹸が既にある。この時ばかりは感謝だ。

じゃなきや張飛の服は汚れ過ぎて洗濯板だけじゃ汚れ全く落ちなかつたからな！

まあ関羽と郭嘉がいうには、本人もそのまま風呂に入れたら3回は風呂のお湯を変える必要があったらしいが。多めに用意して良かった・・・

で、夕飯はお米の気分だったのでチャーハンと野菜スープにしました。チャーハンはシンプルな玉子チャーハンと、街で買った豚肉を使った豚バラ青菜チャーハン、地味に和風が欲しかったので解した魚の干物とごま油、醤油で味付けした和風チャーハンの3種類用意した。ちなみにチャーハンはシットリが至高だと思っているので、パラパラを所望した趙雲はおつまみにメンマを用意して封殺した。これ以上騒ぐとメンマが無くなるぞと脅したのが効いた模様。

とはいえ、何か未だに困惑というか元氣無い張飛（現在程昱の着替えを装備中。ブカブカで可愛い。）があまり食べなかつたので、結構な量が余つた。この後村長との話が終わったなら食べるかもしれないのでおにぎりにして置いておく。

・
・

深夜。

結局、あの後村長と色々話して、色々な想いを聞いたらしい張飛は、泣きそうな顔で戻ってきた。反省してるところけどどうしたらいいか分からない、そう言う張飛の頭を撫でて明日一緒に謝りに行こうと約束する。色々あつて疲れてたのだろう、そのまま張飛は寝てしまった。

空気を読んで他の連中も先に寢床に入ってしまったので、残ったおむすびを包んで四次元袋にしまい、地味にさつき入れなかつたので、1人大寸胴鍋に湯を沸かして風呂に入ることにした。

この時間に火が見えると騒ぎになるので穴を掘ってそこで火を起こす。火が消えない程度に土台を作つて囲い、そこに水を入れた大寸胴鍋を置く。いい感じの温度になったら火を弱め、温度調節用に別の大鍋に水と柄杓を用意し、体を洗つてから湯に浸かる。・・・最高です。

露天なのもまたいい。流星に空が綺麗で星がよく見える。満月ではないが、月も綺麗だ。さつきは周りの村人が見えないように、借りた家の土間の中でやったからな。ある意味俺が一番いい思いをしてるだろう。

せつかくだからもつといい思いをするため、前に街で買ってみんなにも内緒にしてい

た梅酒を取り出して杯に注ぐ。つまみも用意しよう。大したものがないから、ドライフルーツでいいか。干した杏の甘酸っぱさと、梅酒の甘酸っぱさが口の中でじわりと混ざる。うむ、美味しい。氷があればなお良かったんだが、そればかりは仕方ないな。

そうやって、久しぶりに1人だけで、楽しく夜を過ごしたのだった。

．．．．．なんて、綺麗に終わりたかったんだけどなー。

何故ここにいる、程昱。何、今は2人きり？ そうだなすまない風。だから服を着ろ。．．．何？ まだ自分は風呂に入っていない？

．．言われてみれば確かに1人だけ髪濡れてなかった。仕方ないな、今変わるからってコラ、無理やり入ってくるな！ ちよ、こら待てもっと羞恥心を持って！ つーか狭いんだよ！ 関羽さんたちなら2人ずつゆったり入れても俺だと1人がゆったりギリギリなんだよ！ あ、コラやめろ分かった入っていいから酒を捨てようとするなそれ高いんだぞ離せ卑怯だぞ!!

そんな感じで2人でくつついて入ったよ！細かい描写は捕まるからしないけど、全部見られた。もうお婿に行けない・・・行く気なかったけど。

ちなみに、この痴幼女もなんだかんだ恥ずかしかつたらしく、終始顔真っ赤にしてた。なら何できたんだよ・・・。あん？色仕掛け？既成事実を作る？意外と義理堅いから？・・・ハツ（鼻で笑ってやった）。色々大きく出来てから出直せ幼女。というかそこまで俺を旗上げさせたいか。

どつちにしても、俺を動かしたいなら自分を犠牲にするようなやり方はやめとけ。打算で体を寄越されても嬉しくない。他の男は知らんが、俺はそういう策は好かん。俺の軍師になるなら仲間も自分も守れるようなやり方を考えてくれ。まあ旗上げしないから別に止めはしないが。

・・・なんだ？ああ、そうしろ。自分を大事に出来ない奴は、結局他人も大事に出来ないもんだからな。分かったらそろそろ出る。あ、それは嫌なのね。ハイ、もういいです。だから梅酒飲むな幼女。幼女に酒は良くないんだよ。

結局、2人して長風呂しながら、色々な話をした。こんなに色々話したの、関羽さんともないな。そう言ったら何故か少し嬉しそうだったが。

この先の話とか思想とか色々あったけど、一番驚いたのは過去に宝慧？だっけ。程昱の頭の上のアレ、この世界では以前にうっかり趙雲さんが粉々にしてしまったって事だ。道理で無いはずだよ……。てつきりまだ出会ってないのかと。趙雲エ……。

なお、ついうっかり話し込んで2人で逆上せたため、2人揃って這々の体で寝たのだが、どうも一緒の布団で寝てしまったらしい。朝凄いいい笑顔の関羽さんに蹴り起こされ、青龍偃月刀片手に説教されました。

……。ちゃんと別々に寝た気がするんだがなあ。

続く？

13話 ケンタッキーは美味しいよね。

やあみんな、なんだか最近ふとした拍子に自分の顔を見るとメツチャ驚いちやうオーク系転生者の俺だよ！

はい、あれから3週間くらい経ちましたよ。

時間が飛んだ？そんなこともキングクリムゾン!!

まあそんな訳で再び旅を再開中です。細かいことは省きますが、張飛ちゃんは結局付いてきました。まあ、ここまで来たら置いてくとかさういった選択肢は無いですね。なんか村長さんに最後想いを込めた感じのお願い致します・・・！ってやられたけど、残念！それは劉備さんに言ってください。なのでちゃんと途中までは任せとけ的な事を返しました。

張飛ちゃん、真名を鈴々といい、地味に俺たちと交換しています。あの後俺と一緒に村人達それぞれに謝りに行きました。どうも一部の村人達は、鈴々もよく覚えていない鈴々の家族と、その家族が居なくなつて鈴々が一人で生活をしてきたことを知っている

のか、険しい顔で怒り、厳しい言葉を投げかけ、時にはゴツンと拳骨を落とす人達も居ましたが、最後は皆さん許してくれて、必ず最後に同じようにごめんと謝りました。

どうにも鈴々を一人で生活させた事を悔やんでいる模様。まあ鈴々自身は学が無いだけで素直で利発、元氣一杯のスーパー可愛いちびっ子です。賊行為をさせないような躰を出来なかつた事は、彼らにしても反省しているのでしょう。

まあ、あくまでそれは一部の人の話で、中には鈴々に被害を受けてないのに文句を言う奴とかもいた。鈴々はとにかく片っ端から謝りに言つたからな。あまりに酷いのはちよつと俺が鈴々に見えない位置からガチ威圧をかけておき、見えないようなところから石などを投げてきた奴は全く同じ場所に倍の速度で弾き返しておいた。

最後はまあみんななんとなく許してくれた気がするよ、うん。俺を鬼を見るような目で見てくる奴とか何故かいたけど、俺はどつちかと言うとオークなのできつと勘違いしたんだと思う。そういや、俺つて未だに怒ると勝手に変身しちゃうんだよね。まあ別に今言つた事に他意はないよ。単に確認しただけさ。

最終的にスーパー素直良い子な鈴々は、みんなに迷惑掛けた事を反省し、あの村が自分の様な奴に迷惑掛けられない様に、この世から悪人を無くすのだから！って言つてた。なにこの子急にビッグな事言いだした可愛い。

まずはその為俺たちについて行つて修行したいそうで、正直俺ら修行の旅はしてな

いけど、まあ趙雲や関羽さんは鈴々の才能が素晴らし過ぎて気に入ってしまい乗り気だったので、2人に稽古つけて貰えば良いだろうと、みんなあっさりOKした。

俺？俺はもちろん反対だ。こんな素直可愛い幼女を一刀君の愛人なんてやはり反対だ。こうなったら俺が父親代わりになって一刀君には清い付き合いを徹底させねば。あと10年待たなければ世界が相手になっても全力で潰しに掛かる所存だ。なおこれは純粹に幼女を犯罪から守る為に決意しただけであって、決して鈴々がおとーさんと呼んでくれたからではない。自分の娘扱い並みに鈴々を可愛がってるからとか、そういうことは全くない。無いったらない。

ちなみに鈴々の家族的な親友であるイノシシくんは、あの辺一体の山の主らしく、あそこに残った。鈴々が涙のお別れをしていたが、鈴々が帰るまで代わりにあの村を守ってくれるらしい。出来るイノシシだと思っていたが、コレはもはや出来過ぎなので、出木杉くんの名をプレゼントした。・・・メスだったらしく、全力の突撃をくらった。

なお、鈴々が俺をおとーさんと呼んで、俺が鈴々を娘の様に可愛いがりだしてから、幼女軍師2人から抗議があつたが、腹黒幼女は娘じやないと言ったところ、とてもじゃないが口で言えない無言の抗議をされた為に、2人の要求を飲んで、晴れて俺には義理の娘が3人できた。よく考えたら1人は劉備さんの義妹(予定)で、残り2人は普通に家族と実家があるので、ものっそい訴えられそうな気もしてきた。

まあそんな感じなので、幼女ども風呂は自分らだけで入れ。あん？父親が娘と入るのは普通？いやお前ら前は血が繋がってないから手を出しても良いとか捕まりそうなことと言ってきただろ！……まさか！あれも罠、だと？

汚い！汚いさすが孔明汚い！孔明の罠さすがだけど、どっち選んでも結果同じとか本当に汚い！……結局、一度に入るのは幼女1人ずつで手を打ちました。ま、まあ仲間しか見てないから（震え声）なお順番はジャンケンで決めている模様。しれつと風が混じってるのは流石としか言い様がないよね！

そうやって旅をしているわけだが、最初の一週間で鈴々が脱臼を完治させたのは驚きました。関羽さんをも超える回復力は流石で、最近野営した次の日の朝は、ご飯の前に稽古が普通になってきた。

俺？俺は参加してない。朝ごはんの準備があるし、あの3人の中に混じっても、ちよつと早過ぎて棒立ちしか出来ないし。まあ全員からタコ殴りされても無傷なんですけど。とりあえず関羽さんと趙雲さんは反則や！チーターや！みたいなこと言うたけど、鈴々がおとーさん凄いのだー！って目をキラキラさせて褒めてくれたので、もうなんか凄い満足。もうなにも怖くない。

そんなこんなで今日まで旅をしてきたわけだが、最近ちよつと悩み事がある。

それは賊の方々である。

なんかどうも俺以外女子供しかいないので、凄く魅力的に見えるらしい。3日に一回くらいの割合で遭遇する。本当に賊が多過ぎて、獲物とかそんなにいるのか地味に疑問だ。それとも旅人そんなに行き交うくらい盛りだくさんなのか。いや、俺らがあまり見ないし、むしろそんなに裕福だったら国への不満が溜まるはずもないか。よくわからないな。

まあ、襲われてもたいていは10人とか20人とかである。戦闘メンバーのうち、誰か1人いれば余裕で殲滅できる規模なので問題はあまりないのだが、ウチの軍師組がトイレの為に茂みに隠れた時を狙った変態集団がでた時は俺がブチ切れて、アジトごと殲滅した。雛里なんか真つ最中に後ろから抱きつかれたらしく、マジ泣きしていた。まあその時の悲鳴で気付く事が出来たので、ある意味結果オーライではあるのだが。

……ちなみに、悲鳴がないと気付かないくらい離れていたのは、だいたい俺のせいである。結構離れても匂いを探知できちゃう俺の鼻は、もちろんそういつた匂いもキヤツチする。彼女達も乙女なので、仕方ないと分かりつつもあまり嗅がれたくないと、危険を冒して深い茂みに行くのである。これはあの残念処痴女趙雲でさえそうなので、今回の様なことが起きると非常に申し訳なくなる。最近では俺を除く戦闘メンバー

が必ず付き添ってくれるか、水辺なら匂いを探知しにくいと言ったところ、川があればその辺りの陰でするようになった。かなり安全になったので良かったと思う。

ちなみに、トイレの瞬間を狙った変態達は、アジトごと俺に潰された連中以外は、趙雲と関羽さんが、念入りに股間を攻撃してから始末されました。その際のお二人の顔は非常に怖かったです。

それにしても、遭遇率の上がってきた賊の皆さんだが、どうにも人数が多い場合、黄色い布を頭に巻いた奴らが増えてきた。これはやはりあれだろうか。それしかないよなあ。

黄色い布を巻いたやつらはそこまで何度も遭遇しているわけではないが、そもそも賊が格好を統一すること自体が稀だ。軍師組も真面目な顔で情報収集と分析を続けている。まあ流星にこの時代初のアイドルのおっかけ、なんて概念に辿り着いてはいないみたいだが。

なんてことを考えつつも、日々旅は進み、だんだんと目的地に近付いてきていた。途中で村に寄ったり山を越えたり川を越えたり時には平野を歩いたり、賊にあつたり熊にあつたり虎にあつたり窮奇にあつたりワニにあつたり巨大ナマズにあつたり渾沌に

あつたり、色々あつたりしたけどだいたい同じ内容なので割愛する。なお、賊以外の生き物は一部を除いてだいたい食べました。意外と大味かと思つたら美味かつたです。特にナマズを蒲焼きのタレ（俺お手製）で食べた時は大好評で、みんな何時もよりご飯を食べてくれたので嬉しいです。

なお、最近では俺の料理スキルの他に、木材加工などの日曜大工スキルも著しい成長をしてきていて、ノリで臍げな記憶を頼りに、原作で風の頭に乗つてた奴を再現してみた。勿論だいたい違いがある上に、塗料が無いので木の色そのままの不恰好極まりなかつたのだが、それでも風は大喜びで宝譚まーくつーと名付け、かの有名な腹話術もやつてくれた。中々にキャラがファンキーな感じで、俺もお気に入りだったのだが、製作三日目には寝ぼけた星が踏み壊し、ならばと再び同じようなものを作つたが、再度酔つ払つた星が粉碎した。

どうやらこの世界の星は宝譚を破壊する宿命を持つているらしく、三度宝譚の死に様？をみてしまった風は、珍しく哀しみを隠さず涙をこぼし（稟や星も初めて見たらしい）、俺にもう作らなくて良いと言つてきた。余りに悲壮なその姿に何も言えず、ただ抱き締めて、風が落ち着くまで頭を撫でていた。趙雲は毎日尻叩き100回の刑にした。容赦なく直に叩いた。四日目で新しい扉を開いたらしく、急に喘ぎ始めてぬるぬるし始

めたので、二週間ほどメンマと酒を禁止にした。灰になってた。

稟のやつは例の変態どもの事件の際、色々あってうっかり俺に色々見せてしまったのだが（決して俺が見たわけではない事をここに明言しておく）、どうも色々吹っ切れてしまったのか、逆に引いてた一線を取り払った感じになった。とは言え、元々天邪鬼な性格らしく、遠慮はしないがよくわからん拒否はするようになった。ちよつとツンデレ地味ているが、後で自分の発言を後悔している姿が可愛い。

一番面白かったのは、少し前にした約束で、旅の途中に川の付近で大寸胴鍋で風呂に入る度に、何度か順番で女性陣の背中を俺が流していたのだが、稟だけは拒否したので、よく考えればそれも当然かとあっさりオーケーしたところ、その後一人で哀愁漂わせて落ち込みまくりだった。仕方なく俺がもう一回やっぱり背中を流すか聞くと、めっちゃ素直じゃない感じに了承し、しかしいざとなったら妄想が止まらなくなつたのか、また見事な勢いで鼻血を噴き出し、うっかりお湯を血塗れにしてみました。

そのせいで風呂に入れなくなった後の人達に説教され、稟だけは背中流しを禁止にされてしまった時は、まるで娘にお父さんの後のお風呂入りたくないと言われた父親みたいな背中だったので、とても面白かった。個人的には年頃の乙女はそう素肌を晒すべきではないと思うので、別に良いのではないかと思うのだが（稟は関羽さん並みに理性が

危ないのもある)、女性社会は複雑だなど思った。なお星は新しい扉を開いてからぐいぐいくる上、叩いても喜びに換算されてしまうので、最近チャージャーシュー煮込むみたいに縄で縛って入れている。それさえもはあはあ言い始めたので、処女を拗らせると厄介になるなあと学んだ。早く一刀君に渡してあげないと。

関羽さんはなんかもう凄い感じだ。何とか常にくつついてくる。夜寝る時も、いつの間にか潜り込んでくるのではなく、当然の様にくつついて寝る準備をする様になった。何か着々と距離を詰めてくる姿にラージャンの性がハンターを幻視して、普通に怖い。

そんな関羽さんに感化されて、ちびっ子達、特に鈴々が一緒に寝る時は、率先して母親感を出してくる。いやお前姉役だろ!と突っ込みを入れたいが、いつの間にか鈴々・俺・愛紗と、星・俺・朱里雛里、風・俺・稟はそれぞれ家族の設定ができていた。

俺1人だけ使い回し感が尋常ではない。実際にいたらどれだけクソ野郎なのだろうか。というかそれぞれに家族設定があるという話なのに、どんな時も俺の隣で寝る関羽さんは一体何役設定なのか。非常に気になるが、それは同時にどれだけ俺がクソ野郎設定なのか知ることにつながるので、諦めて事件は迷宮入りにした。

最近では俺たちの移動形態はとてもおかしなことになっていて、背中の大寸胴鍋に朱里、雛里、風の3人。肩車で鈴々、お姫様抱っこで稟（

常時貧血）、その腕をそれぞれ愛紗と星が固める。正直に言つて非常に歩きにくく、側から見たら滑稽を通り越して怪しい集団である。実際にこの姿で賊と賊に追われる人に遭遇したが、まさかのどつちも逃げた。ぶつちやけ死ぬほど恥ずかしいので、全力で頼み込んで人里近くでは勘弁してもらつた。

そうこうしてゐるうちに劉備さんのいる村についてしまった。なんでも途中聞いた噂では天の御使いとかいう怪しい存在がいて、何か1人の少女が宗教的な感じのことをしているらしい。と言うか今早速右の頬を叩かれた左の頬を差し出せば万事解決！とか言つてるおっぱいプルンプルンのものもいろへアーのねえちゃんがいる。よくわからんけど明らかに変な格好の青年が、凄いわかりやすく棒読みでなるほど！とかやるしかない！みたいな明らかかなサクラをしている。

どうしよう、探し人見つかったけど全力でお近付きになりたくない……。

長い旅路を終えて辿り着いたそこは明らかかな魔境だった。帰つてもよろしいだろう

か。こんなんが国のトップとシンボリックに重鎮になるのか。・・・滅んだ方がいい気がしてきた！

続く。

14話 鍋焼きうどんには玉子を落としたい派

やあみんな、なんだかんだ自力で身に付けた技術で食っていける気がしてきたオーク系転生者の俺だよ！

「私は姓は劉、名は備、字名は玄德で、真名は桃香！桃香って呼んでね！」

「俺は北郷一刀。みんなと違って字名や真名はないんだ。そういう国に生まれたから。強いて言えば一刀が真名だけど気にせずに呼んでくれ。」

・・・いや、呼ばないけど。いきなりぶつこんで来たから先に言いたいことがあるが
良いだろうか。

「え、呼ばないのか・・・？とりあえず聞くよ。何かな？」

うちの娘と結ばれたいなら最低10年は清い付き合いを約束してもらおう。これを拒む場合と、破った場合は問答無用で貴様が関係する全てのを一切合切容赦無く打ち砕き、叩き割り、その痕跡が何一つ残らぬ様に丹念に擦り潰す。分かったな？さあ契約

書に血判を押せ。さもなくばお前を切り刻んでやる……!!

「いきなりなに!? ちよちよ待てまてまて! 怖い怖い! 桃香助けてー!」

「きやー! ご主人様が大変な事に! ま、待ってくださーい!」

黙れ小僧! お前にあの子が救えるか!?

「美輪さん!」

いや、ネロだ。あれ、ホロだっけ? 違うモロかも。

「いい加減にしなさい、羌毅。話が何も進みません。」

あいまむ。仕方ないな。あ、でも今の脅しじゃないから。ガチで心に刻めよ。「羌毅

!」ぬう、仕方ない。

さて、いきなり過ぎて何がなんだか分からないと思うので、簡単に前回の続きを説明しよう。

結論として、何故か既に一刀君が劉備さんの元にいました。理由はよく分からないが、この近くに落ちて来たらしい。もつと荒野だった気がするが、蜀の主要メンバーは

だいたい俺の近くに居たので、そうしないと最初の3バカで詰むとかそんな理由で修正でもされたんだろうたぶん。もうこの世界はよくわかりません。良く考えたら一刀君が蜀ルートなら無印なのだろうか。いや龐統いるしな。あれ、無印からいたんだっけ？ 訳わからん。

ちなみに前回の似非宗教は、「劉備さん！君の助けになりたい！↓でも何故か関羽も張飛も居ないぞ！↓ならば劉備さんのカリスマとか人格で人を集めよう！↓ならば教祖だ！」な流れで行われたらしい。脳みそ膿んでんのか。

確かに良く知る2次創作の劉備さんは大体怪しい宗教の教祖みたいだが、だからっていきなりそこから始める奴があるか。見ろ！あそこで劉備さんの家に仕えてるらしいおばさん達が嘆いてるだろ。自分に尽くしてくれる人を泣かすとか最低のやつがする事だぞ。お前そんなんで国起こすとか言ってるの？謝って！まずあの人達に謝って！

「ご、ごめんなさいみんな！私は大丈夫なんです！心配させてごめんなさい！！」
ベネ。

とりあえず許す。

ああちなみに冒頭のあれは旅人の俺たちをいきなり宗教に勧誘して来た2人が、俺たちの名前を聞いて、「関羽、張飛、趙雲に、諸葛孔明に龐統!!さらに郭嘉に程昱!やったよ桃香!きみの仲間がいつぺんに!」「本当ですかご主人様!じゃあ仲間なら自己紹介

しなきゃ！」って実に頭のおかしい流れで起きたやつです。

頭おかし過ぎてウチの頭おかしい筆頭趙雲でさえ固まっている。ちびっ子軍師なんか情報処理が追いつかないのか、それぞれはわわとあわわを交換してしまっている程だ。壊れたスーフアミみたいじゃないか。どうする気だこのカオス。

ん、どうした娘よ。お腹すいた？そっかー、じゃあご飯にしよつか。よしじゃあみんな、その怪しい人達は放っておいて、飯屋探そうか。あ、なに関羽さん。ふざけすぎ？いやだつて明らかにヤバくねあれ。関わっちゃいけないやつだよねあれ。あ、ハイ。すいません真面目にやります。

まあ仕方ない、その怪しい2人。詳しい話を聞いてやるからこの村で美味しい飯屋連れてけ。無ければ自分で作るから宿へ案内頼む。

そうして話を聞く事になったのさ！

・
・
・

とりあえず、あの後飯屋で自己紹介の続きをした。

一刀君が天の御使いだとか、関羽さんや張飛ちん達が劉備さんの仲間である歴史とか、そんな話もした。みんな半信半疑だったが、一刀君の語る未来知識、通称天の知識について色々聞いた軍師組が、とりあえずこの時代の人間じゃない事を認めたため、その辺は理解したらしいですよ？

で、現在は明らかに存在が意味不な俺を除いて、みんなを熱心に勧誘している一刀君。流石にいきなり過ぎて困惑中らしい。まあ当たり前か。ん？なに関羽さん。どうしますか？つて、あー・・・ふむ、とりあえずみんなは理解が及ばないみたいなので、ここまでにしようか。

おい少年ストツプだ。何か色々あるのは分かるが、いきなりそんなこと言われても理解できん。しばらく滞在する予定だから、そう話を急がんでもいいだろう。そんな感じの事を言つて遮る。一刀君的には誰だこいつつて感じなのだろうが、俺の言つてることでも理解してくれたらしい。劉備さんが後日私の家に来ませんか、みたいな事を言つたのでとりあえず了解しておく。

あ、ちなみに宿は村にあるだろうか？うちに来い？もう少し仲良くなつたらね。貸家がある？どこで交渉をすればいいの？あー、あのでかい家な、了解。みんな行くよー。

とりあえず借りた家の中を見てみる。予想外に綺麗だ。先にここを使った商人が発つて間もないというのは本当だったか。軽い掃除ですぐ使えるな。箒は何処かな、と。ん？なんだ風。どういふことですか？何が？

「・・・貴方は本当は何者ですか？この辺鄙な村に来た目的は、あの人達でしよう？」さて、なんの話かな。俺はただの蛮族だし、ここに来た最大の目的は桃が食べたかったからだ。特にここには蟠桃があるらしいぞ！仙人が食べるつてアレだ。潰れた桃みたいな形してるらしい。是非食べて見たいな。なんだ、稟。どうした。変？俺がか？いつもこんなもんだと思うが。・・・むう、お前ら全員か？鈴々まで。俺、そんなに不自然か？

「いつもの道玄ならば、あんな怪しい人間を、私達に近付ける筈がありません。」

「ましてや、2度目の約束など。変だと叫んでいるようなものでしょうや。・・・我が主人は、何がお望みかな？」

「さ、最大の目的が桃、というの嘘ではないんでしょうが。」

「ほ、他に目的がない、とも言つてない。という事だと思いません。」

「よくわからないけどおとーさん変な感じだったのだ！」

「貴方は私達に殆ど何も語りませんが、それでも分かります。それだけの時間を、私達は貴方と過ごして来ましたから。」

「まあそういうわけなので、ちやつちやと話して下さい。」

・・・むう。バレないつもりだったのだが。意外とみんな俺を理解してて困る。まあ、ここらが潮時だし、いいか。

真面目な話は苦手だし、キャラじゃないから、詳しくは語らん。だが、此処が1つ目の分岐路だ。自分達でしっかり選べよ。此処から先は、自分で考えて、悩んで、進まなければならぬ。差し当たってはそうだな、先程の劉玄德の想いを聞いてからかな。

「・・・どういうことですか?」

まあ、みんなで和氣藹々も此処までかもしれないと、そんなところだ。選ぶのもお前達次第だけだな。まあ、しばらく此処に滞在すれば多分分かるさ。先ずは掃除を手伝ってくれ。滞在できん。ん、何かな? 愛紗。

「1つだけ・・・1つだけ、答えて下さい。道玄、貴方は・・・貴方は、何処にも行きま

せんよね？」

・・・さて。どうだろうね？あるいは・・・、いや、何とも分からないね。まあ、色々悩んでくれ。それが答えになるよ、きつと。

そう言つて俺は話を打ち切つて掃除を始めた。何か言いたそうな気配がするが、俺が語る気がないと分かるらしい。みんなも掃除を始めた。さて、俺の旅もようやく大詰めかなあ。

・ ・ ・
・ ・ ・

あれから一週間経つた。

よく分からないながらも、みんな劉備さんの夢や理想、想いを聞いて、考えたり悩んだり、感化されたりしてるようだ。馴染めないものも、やはりいるがね。

ちなみに俺はこの一週間ずっと死にそうだった。原因？それはね……。

一週間前に厨二極まりない話をしたからだよ！

ぐあああー！なんだあの語り！誘導がバレたからってテンパリ過ぎた！みんな俺の無表情と、自分らで作った真面目な空気に流されてくれて助かった！あんな意味不なキャラとか前世の友人達なら秒で突っ込み入れてくるわ！あつぶねえ、鈴々におとーさん頭大丈夫なのだー？とか言われたら俺自殺するとこだよ！良かったみんな流されやすくって本当に助かった！

さて、それは置いて、やはり結構みんな悩んではいるが、概ね本来蜀のメンバーは、劉備さんの理想に感じ入っているところがあるようだ。鈴々なんか五分で懐いた。やはり魅力チートは凄い。俺でさえあのおっぱいは目で追うからな。そのあとレイプ目をした関羽さんに執拗に目潰しされたけど。眼球までチートで良かったまじで。

意外にも風は嫌ってない模様。良く考えたら魏ルートじゃ一刀君のヒロインの一人

だもんな、一刀君さえいれば意外と劉備さんでもいいのかもな。だが、稟はやりちよつと相容れないようだ。曹操さん大好きつ子だから、まあ仕方ない。彼女が無理な時は、曹操さんの下まで送ってあげよう。

地味に悩んでいるのが愛紗だ。とはいえ、劉備さんの思想には共感を示している。時間の問題かな？まあ、長かった関羽さんとの旅が終わると思うと、少し寂しいが、これが正規ルートだし、仕方ないだろう。

・・・で、人がせつかくしんみりしていると押しかけて来た北郷くん、何かな？何であれうちの娘が大きくなるまでは清い付き合いを。これは譲らないよ。

「い、いや、それは大丈夫なんです。俺には桃香がいるし・・・。そうじゃなくて、羌毅さんにはみんなの説得を手伝って欲しいです。」

え、断る。それを決めるのは彼女たち自身だろう。俺は口出しは一切しない。

「そんな！だって彼女たちは本来桃香と！それに貴方は何故かみんなに信頼されている。貴方が言えばみんなだって・・・！」

お前さんのいた国の歴史の話か？それとこの国の歴史や登場人物はは寸分違わずに一致しているのかな？・・・してないよな？そもそも君から見たら過去の話だ。確認す

る術もない筈だ。そんなものを根拠に彼女たちのあるべき道を断言されても困る。ほんの一週間で、君は彼女たちの何を知ったつもりでいるのかな？

「それは……！でも俺は、桃香の夢を叶えたいんだ！その為には彼女たちの力が必要だ！」

ふーん。で？それで？

「それでって……。」

え、本当にそれだけなのか？浅っ！今日日大きな夢を持つてるのが劉玄德だけだと思ってるの？つーか彼女たちの力を求めるのに彼女たちの夢も願っても興味ないのか？力だけ寄越してあとは勝手にしろってそういう事？自分の夢は叶えてもらうのに？劉備さんの夢以外は どうでもいいって事かな？

「……！」

悪いが、そう言うつもりならむしろ俺は彼女たちを止めるぞ。一年に満たない間だったが、大事な仲間だ。彼女たちと敵対しても、俺は彼女たちが幸せになれると思う方に行つて欲しいと願っている。

……なんか黙ってしまった一刀くん。本当に劉備さんの事しか考えてなかつたらしい。まあ良く知らんが、たぶん原作なら始まったばかりだ。空回りしちゃうのは仕方な

い、のかな？

なんて原作主人公を上から目線で評価したら劉備さんが顔を出した。どうも聞いていたらしい。変な顔してる。あれ、なんかみんな一緒だ。話でもしてたのかなー。ん、何劉備さん？

「羌毅さんは、やはり私の夢に賛同してはくれませんか？」

んー。何を持って劉備さんが賛同とするかは知らないが、正直それ以前の問題だと思っではいるかな。

「えつと・・・それはどういうことですか？」

んんー、本当に分からないかな。分からないかあ。それだよそれ。

「・・・ごめんなさい。分からないです。」

正直説明めんどくさいけど、仕方ないな。簡単に言えば、劉備さんってまず相手に答え聞くよね。どういうことかって。なんで？自分の言ってることが正しいと、理解できない方がおかしいとでも思ってるの？

「それは私の理想がおかしいということですか・・・？」

？俺そんな事言っていないけど、なんでそう思ったの？聞きたくないなら言わないけど。やめる？そう、じゃあ続けるけど。まず劉備さん、君の理想は大層なものだとおもうけど、その理想が叶った時ってどんな状態かな。そもそもなんで今はその理想の状態

じゃないと言えるかな？

国が腐ってる？ 賊が多い？ 人が貧しい？ なるほど、その通りだな。じゃあ君の理想が叶えばそれらは全て解決すると、そういう事かな？ なるほど、じゃあそもそも君の理想と違って、「みんなで一緒に笑いたくない人」はどうなるのかな。

そんな人はいない？ 何故？ 居るよ。だって実際に国は腐ってる。国が腐ってると言えばあれだが、実際に腐っているのは人間だ。そういう人達は、自分だけが笑いたいからその他の人間を苦しめ、自分だけいい思いをしている。違うかな？ なんだ北郷少年、いきなり。そんな奴らは居なければいい？ 君たちの言う理想は「全ての人が手を取り合つて心から笑い合える世界」じゃあ無かつたかな。そこからあぶれる人はどうでもいいか？ そもそもそのどうでもいいって人間の定義は何かな。君たちが決める善人かな？ どうやって判断するんだ？ 君らの勘とかなしだぜ。

ああ、まだ分からないかな。

じゃあ次だ。今の話を全部ほっぽって聞くけど、君たちの理想の為に、俺の仲間をどうしたいのかな。まずは力？ そうだな、その通りだ。力は何にだって使えるからね。まあ一つ聞くけど、君たちは相手と手を取り合つて笑う為に武器を持って行く気なのかな？ それは脅しだと思うんだが、君らはどう思う？ 脅してみんなで笑い合うつもりかな。とてもシユールな光景だね。ところでそれは心から笑い合っているのかな。

・・・説明口調飽きた。まあ長くなつたからそろそろ纏めるわ。まず土台からしてお前らが言つてゐることは矛盾だらけだつて、それは大丈夫か？分かるな？

だがまあ、正直俺はその辺どうでもいい。

あん？何不思議そうな顔してんだ。今の話は単にお前らの理想簡単に穴が見つかりますよつて話だろ。俺が言いたいことはそこじゃない。黙つて聞け。

1番俺がふざけんなつて言いたいののはな、お前らがそのご大層な理想を人任せでなんも考えてないことだよ！

なんでこんな簡単な矛盾さえ気付かない。いいよ、分かる。何も考えていなかった。ただそれだけだ。お前らの理想は確かに立派だが、肝心のお前らはそれを人に叶えて貰おう、それしかない。だから頭のいいあの人がいれば、武力はあの人がいれば、なんて話しかしない。

・・・自分らの理想は、集めた人が叶えてくれる？舐めてんのか。別に誰かを頼るなつて話はしてねえ。自分にできないことを誰かに協力してもらうのは当たり前のことだ。トツプになるなら誰よりも仕事しろつて言うつもりもない。でも、お前らの理想を、お

前らが誰よりも分からなくてどうすんだ。お前らが誰よりも理想の結果を考えなくてどうすんだよ。

それとも何か、もし理想が叶わなかった時は、協力してくれた奴のせいにもするの
か？

「っ！そんなつもりはありません！」

じゃあもつと考えろよ。そもそもお前の夢に武力が必要なのに、お前自身が鍛えてないのは何故だ。知識が必要なのに、お前自身が学び続けていないのは何故だ。天の御使
い、という確証のないものの言葉に全て従っているのは、何故だ！言ってみろ劉玄德！
お前が俺の仲間を求める理由が、他力本願ではないと、証明してみせろ！

・・・できないか？まあ知ってるよ。

俺がそれ以前の話だというのはそれだよ。はつきり言っただけのお前の理想には、お前
自身の覚悟が微塵も感じられん。それこそ一週間前にお前がやってた似非宗教と同じ
で、甘言で人を操ろうとしてる様にしか見れんよ。

・・・なんだ、お前ら。あん？劉玄徳の理想は正しくないと思うか？またか。つーかお前らもか。はあ、まあいいや。答えるよ。

個人的に、理想は正しいとか正しくないとかじゃないと思ってる。だから、お前達にはこう答える。

正直、嫌いじゃない。

・・・何だよ。なんかあるか、劉玄徳。あん？だからお前らは理想以前の問題だって言ってるだけで、お前の理想が間違ってるとは一言もいってねえだろ。

俺としては、本人達のやる気が感じられないから手伝えって言われたら断固拒否するが、理想としては素晴らしいと思うぞ。矛盾だらけで、全く現実的じゃないし、正直実現は無理だと思うが、「全て人が手を取り合って、心から笑える世界」実現できたら、確かにいい世界だと思うよ。無理だろうけど。

何驚いてるんだ北郷少年。俺はずっとお前らの理想を否定してないだろ。理想から否定してたら、みんなを連れてくるかこんなところ。その時点で終わっているなら、騙

されるだけだろその話。大事な人をそんな与太話に巻き込ませたりしねえわ。

・・・なに、お前ら何でそんなニヤケてんの腹立つんだが。

あん？何だよ程昱。「結局、何故ここに私達を連れてきたのか？」・・・散々2人に言つてんだから少しは読み取れ。

お前達にも、考えさせるためだよ。お前らどうも俺を主人にしたがるが、まず本当にそれで良いのかって話だ。俺以外の人を見てどうだ？劉玄徳の理想を聞いてどうだ？お前達はまず、本当に俺で満足か？風や稟に至つては元々曹孟徳に会いたかつたんじゃないのか？会わずに俺と決めてどうする。

なんども言うが、俺は所詮蛮族で、1人でも生きていける分、現状に結構満足してる。だから上昇思考なんてないし、劉玄徳の理想を素晴らしいとは思うが、必要だと全く感じてない。愛紗や星の様に、自分の武を人の為に使おうって気もない。

俺は俺の為に俺の力を振るう。

お前達を助けたのだから、別にお前達の為じゃない。俺が何となくお前達を見捨てたくなかつたからだ。正直今まで殺してきた賊と、お前達が逆の立場なら、俺はお前達を殺していた。分かるか？はつきり言つて俺は別に高潔でも何でもない。蛮族だからな。

そして俺はお前達じゃない。お前達が俺についてきても、その望みを叶えてやれない

かもしれないし、もしそうだった時、責任なんてとつてやれない。

お前達の道はお前達自身で選んで、お前達自身で責任を負わなければならないんだ。

だから、俺がお前達の命を助けたとかそういう恩返しとかを理由に、俺に自分の人生を投げるな。そんなもんは自殺と変わらん。自分のしたい事、しなくない事。なにが嫌でなにが好きか、全部引つくるめて悩んで考えろ。

以上。話は終わりだ。・・・柄にもない真似をした。

後は好きにしなよ。劉玄德と行くもよし、別の主君を探すもよし。何ならお前達で旗上げしてもよし。良く考えて、選べよ。

んじや、俺は戻る。

そう言つて俺はみんなに背を向ける。ふ、決まった。何か凄い語つてしまったしとつとと逃げよう。何か凄い悲しそうな関羽さんが気になるが、今は恥ずかしいからとつとと逃げよう。今の話の穴に気付かれても困るし。すたこら「待つてください。」な、何かな風。1つだけ聞きたい？正直君鋭いから良くないけど、何かな？あれ、凄い笑顔。あんな顔初めて見た。嫌な予感！

「自分で悩んで良く考えた結果なら、誰についていってもいい、今の話はそういう事ですすよね？」

ギクツ！え、えーと、人は選んだ方が良いとは思うよ、うん。あ、ヤバイ鈴々が今の一言で閃いた顔した。マズイ！鈴々を止めあ、コラ星貴様こういう時だけ！

「じゃあ鈴々はおとーさんと一緒にいいのだ！」

しまった！散々煙に蒔いた選択肢が！ああ！凄惨な関羽さんの顔が光を取り戻した！ぬ、何だ星、抱きつくくな！

「私は散々悩んだ結果、我が主人と行くことにしたので、よろしくお願いします。」ニヤニヤ

貴様っ！分かってて笑いおつてからに！いいか、そんな簡単にだな！

「私達は、もう道玄しやんの娘なので！」

「親子は一緒にいるものだと思いますしゅ！」

あ、コラちびっ子ども！その設定をここで出すか!?ほら見ろ、一刀君に凄惨な顔されたぞ！あの一刀君にだぞ!?

いや待て、稟と風はどうした！と思つたら、何か目の前で苦笑いしてる稟と、してやったりの顔した風。

「というか、私は元々まだ主君を決めていないので、普通に道玄殿について行きますよ。ひよっとしたら一生かも知れませんが。」

「風はおにーさんに決めてしまいましたから。やる気ない主人にやる気を出させるの

も、家臣の仕事です。」

ぐぬぬ、さてはこいつら俺の思惑をとくに理解していたな！くそう、これだから頭いいやつらは！頭悪いなりに頑張った作戦をあつさり読みおつて！

何か凄い負けた気がする！そう思っていると関羽さんが抱きついてきた。ああ、こんな時でもおっぱいに反応する自分が憎い！でも嫌いじゃない！

「……ずるいですよ、道玄。」

おつと関羽さん、何のことかな。私は何もしてないよ！ホントホント！

「あわよくば、私達を置いて行くつもりでしたね？駄目ですよ。」

バレテラ！あ、抱きしめる力強くなった！おっぱいの感触ががが！あ、星。君は別に何も感じないから強くしても無駄だよ。「!?」

あれ、何か凄い関羽さんが嬉しそうにしてる！嫌な予感！

「嘘つき。だからもう許してあげません。ずっと、ずっとどこまでもついて行きますよ。2度と、離れてなんかあげません。」

ぎにやー！あんたまでそれ言ったら蜀ルートががが！

オウフ。どうしようこれ。まさか俺が蜀ルートを始まる前から壊してしまうなんて。

いや知ってたけど。関羽さんがうっかり俺に惚れてるの知ってたけど！だって普通思わないじゃん！こんな化け物みたいな奴に惚れるとかさ！ちよつと仲良くなれば偶にこんな美人と酒飲んだり出来るかな、くらの気持ちだったんすよ！というか一刀君にしかシSTEM的に惚れないと思つたんすよ！

・・・待てよ？化け物？

これだ！まだこの手があつた！待てお前ら。まだお前達は知らない事がある！きつとそれを知れば、お前達も考えを改めざるを得ないはずだ！ククク、お前達が慕う俺はなあ、実は人間じゃないのさ！見よつ！変ツツツ身ツツ！！

見よつ！これが人外オーク系クリーチャー！俺つ！さあ驚け怖れるがいいつ！

・・・あれ。何その顔。俺が知ってる驚愕と違う。

「何かと思えば・・・。隠してるつもりだったんですか、道玄。」

フアツ!?

「何を驚いているのですか我が主人・・・。え、まさか本気ですか？朝とか時々その姿で

鍛錬していたではないですか。」

「誰にも見られてないつもりだったんですか？あんなに派手に音なつてたのにく？」

なん・・・だと・・・？

「鈴々は初めてあつた時から知つてたのだ！起きた時に教わつたのだ！」

「そもそも、以前に貴方が賊を拠点ごと殲滅した時はその姿だったでしょうに。」

「はわわ、むしろよく私達を叱る時とか、短いけどツノ生えてますよ？」

「あわわ、ワザとかと思つてました！」

(。D。)

お、思った以上にコントロール出来ていなかったでござる。いや、だって鏡ないから逐一確認できないんですよ！

い、いや。まだ最後の壁がある。見せられないけど、まだ愛紗の想いには答える事が出来ない理由が！それは！

「あの、ひよつとして・・・ゴニヨゴニヨの、事ですか？その、大きさ、とか？」

・・・(。ω。)

・・・何故知つてるのでせう？

こればかりは気をつけてたはず．．．!?

「簡単なことでありましようや、我が主人。」

「朝、貴方より早起きすれば誰だつて分かります．．．。」

え!?!

いや待て待て、確かに分からんでも無いけど、ここ最近ずっと朝立ちなんて!．．．あれ、朝立ち? そもそもなんで朝立ちが起きない? 生理現象だぞ? 良く考えたら途中から俺全然溜まった覚えが無い。最初の頃は隠れて娼館行こうとしてたのに! この状況で溜まらないなんて、それこそあり得ない筈なのに――!

「我が主人は一度寝ると、本当に起きないですからなあ。」

「そ、その、道玄のが、あまりに辛そうだったので．．．。」

「御立派でした。」

「まさか、あれほどとは．．．!」ダクダク

「本物は、凄いでしゅ!」

「愛紗さんが、いつも独り占めしようとして．．．困りましゅ。」

「何かみんなに内緒にしろつて言われたのだ―!」

．．．いつそ一思いに殺してくれ(^ ω ^)

思わず膝から崩れ落ちる俺。死にたい。

何だい北郷少年、あれだけ偉そうな事を言った俺を笑いに来たのか？

いいぜ、むしろ笑ってくれよ。こんな情けない俺をよ。

・・・ガシッ！

「・・・大丈夫です。俺も桃香にヤラれました。」

一刀君・・・！君もか・・・！

この世界の女性は、肉食系だった。

私は自分が襲う側だと信じて疑わなかった。だがそれは間違いだった。

・・・私はオークはオークでも、このすばのオーク♂だった。

何だか無性に切なくなった。一刀君はただ俺を慰めてくれた。

初めて出会ってからわずか一週間。

・・・俺たちは、親友になった。

「・・・その、私っ、頑張ります！」

違う、そうじゃない。

続く!?

15話 伝説の料理、牛の丸焼き。

やあみんな、実は捕食される側だった見た目性豪オーク系転生者の俺だよ！

何はともあれ、取り敢えずみんなと寝室は別にしました！というか締め出した！凄いい批判がきたし、鈴々が泣きながら謝ってきた時は凄いい心が揺れたけど、鈴々さえ毒したどこぞのメンマをキツく叱って心を鬼にする。何か関係が進展すると思つてたらしい愛紗がそんな！って悲鳴をあげたが無視。こんなところにいられるか！俺は自分の部屋に戻るぞー！

そんな感じに俺は1人の夜と当たり前の生理現象を取り戻した。

それから2週間が過ぎた。

鈴々が俺に嫌われたと泣いたが、そんなことはない。なので夜は一緒に寝ないが、これから朝は鈴々との触れ合いを増やした。他の人らとの時間は減らしたけど。あいつ

ら日に日に視線がヤバくなる。マジ怖い。愛紗とか俺の腕を取る一動作でさえ何か既にやらしい。潤んだ瞳でこちらを見上げてきたりする。教育によくないのでダツシユで鈴々抱えて逃げた。

星と風はもつと直接的に迫ってくるようになったが、こちらは普通にあしらえば問題ない。稟はなんか天邪鬼発動しがちなので、逆にこつちから誘って本人に断らせる。後でやたら落ち込むが知ったことか。ちびっ子2人は風呂の時にまだ一緒に入ろうとしてきたので出禁にした。ビックリするぐらい食い下がってきたが、理由を考えたら変態でしかないので容赦はしない。食事と鈴々との時間だけが救いになってきた。

・・・刑務所かここは。

そんなギスギスした人間関係になり始めた女性陣とは裏腹に、一刀君とは普通に仲良くなった。

とうか俺は誤解していた。彼は劉備さんに惚れて劉備さんの為に動き始めたのではなかった。いや、今では惚れているらしいので間違いではないのだが、正確には劉備さんに迫られて関係を持ってしまったため、責任を取ろうと躍起になっていたらしい。

一刀くん・・・っ！君はっ！君と言う奴は・・・ッ！

原作でハーレムを築きあげる男はやはり、顔だけでなく心までイケメンだった。

しかもあの俺がした上から目線のクソ説教から、真面目に反省してしまい、「俺が桃香を守るように成りたい！いや、ならなくてはいけないんだ！」と、わざわざ俺に鍛えてくれと頭を下げてきた。何だこいつ本当にイケメン。正直そこまで深く考えてなかった俺の方が申し訳なくなるレベル。ゴメンよ！

つーか、幼女から熟女まで、国を跨ってハーレムを築き上げる稀代の種馬主人公は、本当に次元が違うわ。ヤバい。そりゃいきなり戦乱の世に落とされても生きていくわ。凄すぎる。

なので最近は鍛えるついでに一緒に山で狩りとかします。食べられる山菜とか、獲物の解体とかも教えました。また、取り敢えず武器には矛を渡しました。え、剣道部？いやだつて武器の扱い俺も分からないので、教えられる奴らの得意とする武器を渡すしかないでしょう。

現在は鈴々と一緒に愛紗や星に技術と基礎を。俺がスタミナ、筋肉などの基礎体力、あとは生き延びる力として気配の消し方と、逃げ足を鍛えている。恐ろしいことに、この世界で見たら大したことではないとはいえ、前世なら既にアスリート並のレベルになった。わずか2週間でだ。原作主人公マジチート。熊はまだ無理だけど、並の賊なら5人くらい何とかできるつて星が言つてた。成長チートにも程がある。

一方で、劉備さんもなんか進化を始めた。

覚悟もなしに協力を求めた事を反省し、まずは何が足りないのかを知りたいと、ウチの軍師組に毎日話を聞いている。あと逃げ足のトレーニングだけは一刀くんと一緒に受けるようになった。この時に揺れる彼女の胸は、俺や一刀君だけでなく若い村人全て

の視線を独り占めである。まあ、星や愛紗の稽古は早過ぎて見惚れる余裕がないからな。何より2人より大きいし。頭がパツパツパーでなければ普通にモテモテな見た目だし。

なお、この時に俺は注意していないとならない。愛紗たちにバレると訓練中の事故と称して龍牙と青龍偃月刀が降ってくる。しかも執拗に目を狙ってくるので本気で怖い。あと、それが鈴々にバレた時は自殺を考えた。ジト目とかそう言うのではない。凄いい心配するような顔で、鈴々がしてあげようか?とか言ってくる。本当に、本当に死にたくない。精神的ダメージが尋常ではない。

・・・まあそんな風にして日々を過ごすうちに、地味にこれからの事を考えた。

正直まだ誰に仕えようとか、旗上げしようとかは考えてないが、このまま彼らと一緒
に蜀を立ち上げるにしても、自分で旗上げするにしても、もう少し武将が欲しい。あと
拠点強化と武装強化がしたい。

なので、まだ曹操さんに仕えてなければ三羽鳥の楽進、李典、于禁の3人を引つ張れないかと考えて、地味に稟だけ連れてそろそろ旅に出ようかと思っている。他の子らは鈴々が凄い悩みどころだし、愛紗を放置するのはちよつと怖いが、連れて行かないつもりだ。稟はほら、会えれば曹操さんに会わせてあげたい。

鈴々にも、俺がない生活させておかないと、やがて独り立ちをしないといけないし。独り立ち、しないと……独り立ちさせなくても良いかな。一生俺が娘を守る！あ、何劉備さん。駄目？そっかあ。

……愛紗はほら、アレよ。俺が製作を依頼した一人用テントを、出来上がるたびに壊しちゃうから。逃げ道無くしまくりだから。ぶっちゃけ理性もたないから。

……あと地味に俺楽進と李典好きなキャラだから。うん。仕方ないね。

今のうちに劉備さんからたくさんの桃を仕入れておき、村人にも熊肉などと物々交換で卵と鶏をたくさんもらっておいた。これで旅の間にケンタツキーを作りたい。

書き置きは稟に書いてもらうとして、今度村に来ると劉備さんが言つてた商人さんか、欲しいものあれば仕入れて、ふふふ、次の満月の夜に決行だ！すまぬ鈴々！とーちやんちよつと出かけて来るよ！お土産たくさん買って来るからな！

・
・
・

その満月の夜。

俺は出発どころか、部屋に縛り付けられていた。

「たった今まで意識を失って居たので、どう言う状況かさっぱり分からない。というか、俺を縛り付ける？ハイパーパワーチートの俺を？何で結ぼうとしても、たとえ孫悟空の様に大岩に埋め込まれて居ても、岩を粉碎して抜け出せる俺を？」

そんなバカな！

と、思ったらどうにも力が入らない。何これ毒？いやいやまさか。俺はラージャンンでありハルクだ。どんな強力な毒物でも、一時的にしか効果はないし、時間も長くて数分である。いつから眠らされて居たかは知らないが、そんな長々と俺の体を侵し続ける薬物なんて、それこそプール並に飲まなきゃあり得ない。

・・・マジで何が起きている？ていうかここはどこだ？弱弱しい光があるのは分かるが、逆にそれが視界を奪う。僅かな闇が、見通せない。ヤバイこれ、愛紗達は無事なのか？

そう焦った瞬間に声がかかる。愛紗だ！良かった、無事なんだな！なんとか声の方に顔を動かす。動かして、

・・・動かして後悔した。そこには嘗てないレベルで暗い瞳をした愛紗の姿が！ヤバイヤバイ超怖い！

服装は肌に張り付く様な、薄く白い襦袢のようなもの。右手に持った灯から、僅かに照らされたその身体が見える・・・し、下着着けてねえ!?

「・・・道玄。また、私を置いて行こうとしましたね?」

「フアツ!?馬鹿な、何故バレた!・・・ハツ!」

愛紗の瞳から光が完全に消えた。あ、これやらかした。

「ふ、ふふ・・・やはり、ですか。私は言いましたよね。2度と、離さない。もう・・・許してあげません。」

そう言つて灯を燭台に置くと、何処からか香炉を取り出した。あれっ、何この匂い！凄いくラクラする！まさかっ!?

「身体が動きませんか？・・・そうです。この香です。貴方に毒は効かないようすが・・・。興奮剤など、体の調子を良くするものは一定の効果を發揮する。違いますか？」

いや知らんけど！俺の身体の構造なんて俺も全く知らんけど！

でも言われてみれば確かにハンターも毒無効とかでも鬼人薬とかは効果あった！飲み続けられぱずつと狂走状態になつてられた！いやでもこれは全身から力が抜けている、どうして・・・！

「ふふ、不思議ですか？・・・この香は、男性の一部分だけ、元気にするそうです。副作用として、それ以外に力が入らなくなるそうですが、ね？」

え、何そのエロゲに使われそうなアイテム。あ、そういやここエロゲ世界だった！・・・待て、じゃあその一部分つてまさか・・・！！

「ふふ・・・。とても、元気ですね・・・？」

うっぎやあー！俺の息子がビッグガイまで成長してる！スーパータフネスしてる！待て待て待て！！これはマズいよ！ダメだつて！このままいたら18歳未満禁止にされるよ！閲覧禁止だよ！

「私を置いて行くこうとするから……道玄、貴方がいけないですよ? ……みんなもほら、我慢できないそうです。」

「!?」

そう言われて初めて鈴々を除く全員か居ることに気付く。ば、馬鹿な。この俺が気付かなかつた上に、みんな愛紗と同じ顔してると! ヤバイこれは……生贄フラグ! に、逃げない!

「逃がしませんよ……。先に、謝罪しておきます。……ずっと。ずっとずっと、我慢してましたから、手加減できないかもしれないです。」

ちよ、それどっちかというと男側のセリフ!! あ、待つて上に乗らないでヤバイヤバイ! そ、そうだ愛紗! 見るこの大きさ! まず怪我するぞ! 今日は辞めとこう! なつ? それが良い! はうっ。

「……これで大丈夫ですね?」

ば、馬鹿な! 何故この時代にローヨンが!? ていうか準備良すぎだろどう言うことだ! いつこんなものを仕入れた! え、こないだの行商? ウツソだろおまえ……。

ギシリ、と俺を縛り付ける鎖が音を鳴らす。俺の上に跨る愛紗が、闇を湛えた瞳で、俺

を射抜くように見詰める。

パサリ、と音を立てて、着けていた薄衣が落ちた。自然と喉がなった。愛紗の手が、結ばれた髪を解く。

風呂上がりくらいしか見ない、髪を下ろした姿の愛紗。両手を俺の胸について、顔を唇と唇が触れるギリギリまで近付けて、言った。

「………覚悟、して下さいね？」

私以外見れないようにしてあげます。

……アツ！

・
・
・

という、夢を見たんだ！何故か起きたら3日くらい過ぎてて焦ったけど、いや、本当に何もなくてよかった！本気で何度か死ぬかと思った！夢で本当に良かった！いやマジで！

「いや、羌毅さんそれ・・・いえ、やっぱり、なんでもないです。」

ん、どうした？北郷少年。なんか気になることでもあったか？

え？密かに旅に出る話？ああー、アレな！なんかみんなにバレてて断念した。どうも

俺が食料とかたくさん仕入れてるのとか、密かに行き先の情報を集めていたのが、軍師組に察知されていたらしい。結局みんなで行くことになった。参ったね！

あ、そーいやさ、最近劉備さんとうちの女性陣がやたら仲いいんだけど、理由知ってる？なんか俺の知らないうちに世話になってたみたいで、場所の提供がどうか、薬の用意がどうかお礼言ってたんだけど、俺何も知らなくてさー。

よくわかんないけどお礼言っておきたいから、知ってたら教えてよー。

「い、いや、その必要は無いんじゃないかと・・・？」ヒクヒク

んー？そうなん？まあ確かに、何でも俺が口出さないでもいいか。あいつらも子どもじゃないしな！

あ、出発は3日後になったから！どうなっても一度戻ってくるから、自分らのことサボるなよ！こっちはこっちで、できる限りやつとくからさ。

じゃあ、俺一旦帰るわ。旅の用意しなきゃ！またなー

「き、記憶どころか人格が変わっている・・・！」

続く！

16話 味付き玉子を極めると飯がめっちゃ進む。

やあみんな、力を出せないパワーキャラってカスでしかない事に気付いてしまった
オーク系転生者の俺だよ！

劉備さん達と離れて2週間が過ぎた。

結局俺は変わらずみんなと旅を続けている。とはいえ、蜀ルートを拒否った訳ではなく、一応仲良くなつてしまったので、蜀の新しい仲間探し、という体で新たに旅をしている。

なので基本的にやらねばならない事は軍師組が2人に徹底的な指導とマニュアルを用意してあげて、あと自分達だけで最低限の事をできるようにしてもらおう、というような若干スパルタというか放任主義的なやり方で協力しているようだ。

もつとも俺は単に観光気分というか、お気に入りのキャラとお近づきになれたらいいなー、くらいの気分である。これはガチだ。じゃないと両脇を抑える前衛2人が俺を枯らせにかかる。だから本当にそれだけだ。それだけでなくとも脳内に留めておくだけ

にしておくので、それぐらいは許して欲しい。駄目？

「駄目ですね。」

「だめですね。」

「諦めて下さい。」

あ、ハイ。ウチの人は厳しい。

あれから「いつの間にか」俺はみんなと関係を持つてしまっていた。正直サイズの無理だろ！とか、初体験の記憶が妙に臆げであるとか、さも当然の様にみんなと関係を持つている、とか、色々不思議な事はあるものの、色々な問題をなんであるのか不思議な未来アイテムで乗り越えてしまい、どうやら本当にほぼ全員と関係もつているというか毎晩持たされている。

なお、鈴々にはギリギリ手を出していない。と言うか手を出すギリギリで意識が覚醒して何とか踏み止まった。娘に手を出すゴミ屑野郎にはギリギリになっていない。鈴々は非常に残念そうだったが、流石に洒落にならな過ぎるので説得した。なお、同じ娘であるちびっ子軍師2人はむしろ計画の主犯だった。恐ろしい変態になってしまい、水鏡塾では何を教育したのか是非物理的に問い正したい。

また、意識が覚醒した際に、やれ薬がどうか、暗示が切れたとかほざいていた連中全てに厳罰を課している。だが約一名それにさえ対応し始めてしまったので、頭を抱え

ているところだ。

鬼畜異種姦系ボコオは現実にはやったら頭おかしいと思うのだが、何故かウチの連中は平気らしい。エロゲのキャラって理不尽だなと思う。

最近では朝一のテント内は着衣率が非常に低くなっており、性の乱れを嘆きたくなるこのごろである。

とはいえ、1つだけ良いこともある。稟の事だ。最近では彼女の妄想が現実になったと言うか、妄想を超えてしまったので、最初の頃は流血沙汰になり過ぎて俺が常に運んだりレバーを用意し続けたりしたのだが、今では耐性がついたのか、鼻血をほとんど出さなくなり、日常生活が非常に楽になった。いい事である。

ただ1つ懸念もある。それはぶっちゃけ避妊である。流石に色々と都合主義な恋姫世界といえど、避妊に関するアイテムは1つもなく、彼女達はもうすぐ活躍を控えている未来の武将・軍師なので、できる限り控えたいのだが、誰一人聞き入れてくれない。勝手に避妊する権利は俺に与えられてないらしいので、やたらと妊娠に強気な彼女達に何とか自覚を持ってもらいたいのだが、一夫多妻は本来女性に有利な制度と言うのは本当だなと日々実感する羽目になっている。

閑話休題。

さておき、今は稟の憧れであるかの乱世の奸雄、曹孟徳さんの領地を目指している。と言うのも、この世界が真か無印かは分からないが、どちらにしてもまずは曹孟徳さんの領地付近に行かねば三羽鳥の所属する義勇軍、もしくは村に行けない、というわけである。

なので、村や街、果ては行商人など、あらゆるところで、軍師組にはなるべく曹孟徳さんの領地付近での義勇軍などの情報を常に仕入れて貰いつつ移動している。

今はとりあえず、もうすぐで曹孟徳さん直々に収める街、の少し手前にある村を目指して歩いている。相変わらず荷物籠代わりに使われている大寸胴鍋には、いつも通り3人の幼女が乗って楽をしている。鈴々だけは知らない景色が楽しいのか、少し先を歩きながら時々止まっては、嬉しそうにはしゃいでいる。新しい散歩コースを見つけた犬みたいで非常に可愛い。

愛紗と星は最近ではあまりくっついて来なくなった。いい意味で余裕があると言わべきだろうか。まあ星の方は見た目だけで、進化し過ぎた性癖を満たすため、見た目普通で中身は変態極まりない状態なのだが、不用意に詰ると逆効果な為、諦めて放置している。

稟は妄想癖に耐性がついてから、地味にチヨロチヨロ動く鈴々のお目付役をしてくれていて非常にありがたい。お母さん役らしい愛紗よりお母さんみたいなので、一度それでふざけて鈴々と3人でままごとをしたら、愛紗に目撃され、夜のテントの中で非常に激しい物理的行為を伴った叱責を受け、2度と言わないという誓約とともに、発言を撤回させられた。二瓶さんの言う通り、女は恐ろしい。そう思った。

そんなこんなで村に着いたのだが・・・。何故だか非常に物々しい空気である。なにあれ、防壁に居るのは、正規兵？しかもかなり居るな。あんなにいる兵隊さんを見るのは地味に初なので、ちよつと感慨深い。

「どうやら、軍がいますね。」

「それも私達の目的である曹操の様ですね。あれは噂に聞く、夏侯將軍の旗です。どちらかは分かりませんが。」

ぬぬ？まで。なんかそれどつかで聞いたことあるイベント！これひよつとしてアレじゃね？ひよつとして、三羽鳥の義勇軍が、夏侯淵と協力して村を守る奴じゃね！よし、早速行こう！

・・・と、思ったら検問で止められました☆

なんかもう久々過ぎる扱いです、ま た 俺 で す
!!

もうね、最近美人と関係持ったりしたから忘れてたけど、俺の見た目蛮族なんだよね。蛮族であつて山賊ではないので勘違いしないで欲しいのだが、この時代的に、蛮族とか人間に襲いかかる言葉の通じない野生動物的存在であるので、むしろ山賊よりもチエツク敵しいのさ！本当にごめんよみんな！色々ガチで忘れてた！

まあ、流石にみんなも慣れて来たらしい。苦笑いして許してくれた。しかし地味に時間が掛かっている。なんか念の為に責任者呼んでいるらしい。あれ、どつかでみたなこのパターン。

「貴方達ですか、村に入りたいという旅人は？」

楽進キターー!!うわ、本当に傷だらけだけど可愛い！テンションアゲアゲ！是非話をしてみたい！そして気の使い方とか教えて欲しい！よしおね「道玄？」あ、ハイ。すいませんなんでもないつす。ごめんなさい。

なんか俺たちのやり取りをみて困惑している楽進さんだったが、普通に中に入る許可をくれた。ただ、近々賊が再び攻めてくるので早めに出た方がいいとの事。ふむ。

「どうしますかな、我が主人？」

無論、参加だ。たまには暴れるのも良からう。と言うか、駄目と言っても参加しただろ、星。可愛くバレましたか、とか言っても駄目だぞお前。処女じゃなくなつてからタダの痴女だからさ。普通に色々下品だな。笑顔とか。

「!？」

あ、余計に興奮すんなめんどくさいから。ああ駄目だまたやつちまった。最近のこの変態マジめんどくせえ。ああ申し訳ないうちの変態は放置して大丈夫ですよ可愛いお嬢さん。と言うかこの人数ですが俺たち意外と強いので手伝っちゃおうよ！

そんな感じの交渉を風がしている間に、防壁の中に入って星を物陰に連れ込み、ちよつと落ち着けてから戻る。最近はここまでしないと治らないので、変態は本当にめんどくさいなと思う。DMクルセイダーを御せるカズマさんは相当なやり手だと本気で思う。

そうこうしているうちに交渉完了。なんか派遣されて来ている武将の下まで案内してくれるらしいのでみんなでついていく。

「お前達が協力してくれるという旅の者か？なるほど、腕が立ちそうだな。感謝する。」

そこにいたのはやはり夏侯淵さん！きやー、クールビューティ！あ、ごめんなさい。話し続けてください。

とりあえず、義勇軍の主だった人達と、夏侯淵さんを交えて自己紹介したあと、どのような形で防衛するかの話し合いが始まった。正直俺自身は興味ないので、とりあえず参加はするけど、話はみんなに任せて同じく話に参加しないで眠ってしまった鈴々をあやしている。可愛い。あと李典さん本当にナイスオツパイ。劉備さん超えたんじゃね、これ。素晴らしい。あ、こつち見た。チカン認定される前に誤魔化しとこ。ていうか許褚ちゃんいるし。もう荀彧さん仲間になっちゃったか。仕方ないね。

ふと見てしまっただけ感だして何事もなかったかの様に視線そらしておいた。そろそろご飯の時間だ。今日は以前何故か遭遇した野牛でも使って料理しよう。ハンバーグがいいかな。そのままじゃ硬いしね。ソースだけ種類増やせば、みんなで楽しめるし、よしこれで行こう！

「羌毅殿はどうしますか。意見を聞きたいのですが？」

フアツ!?

急に声かけられてビビる。なににない？あれ、どしたのみんな。軍議中？ああごめん忘れ

てた。で、なんぞ？作戦？ああ好きにしたら良いよ、従うし。それじゃ駄目？マジか。えーとごめん雛里、話聞いてなかった。

「ふざけているのか、貴様。」

あ、なんか夏侯淵さんがオコだ。メンゴメンゴ。頭脳労働を俺に頼まれても正直困るけど、今から真面目にやるから許して下さいな。で、朱里、相手の数は？7千？そお。随分いるな。風、こちらの戦力は？夏侯淵さんの部隊が五百？で、許褚ちゃんの率いる百、義勇軍が二百。なるほど。許褚ちゃん既に兵率いてんの？すごいなー。稟、勝利条件は？曹操さんの本隊がもう直ぐ到着？なるほど持久戦な。オツパじゃなかった李典さんや、街の門つてこの見取り図のとおり？了解、ありがと。

門の数は北門と南門だけか。運がいいな。で、地形的にはどうなん雛里？門の前の道幅は変わらないけど、山に潜伏する賊だから、山側である北門の方が賊が来やすいのね。了解。ふーん。あれ、これ策必要か？まあいいや、うーん、とりあえず土塁と柵と逆茂木の設置はしてある？無いならそれやったら楽でしょ。堀は面倒いし時間的に無理だな。あー、これなら、ウチの連中連れてここで軽く後ろ殴れば動揺誘えるんでね。．．．あれ、どしたのみんな。

「質問しといてなんです、羌毅殿の見た目でこう言った会話はやはり違和感あります

ね。」

「ボクなんかちよつと驚いちゃったよー！」

「すまない、真面目な話もできるんだな。」

「見た目と違つて意外と頭いいんやなおいちゃん。」

「こゝ、こゝら真桜！す、すいません。」

よろしい、ならば戦争だ。久々にキレちまつたよ・・・！

凄いいみんなに止められました。仕方ない稟、お前だけはお仕置きな！

で、何だっけ。ああそうだ。1つ聞きたいんだが、これ賊完全殲滅しなきゃ駄目なやつ？とするとちよつと周りが悲惨な感じになつちやうのであと片付けがつて、自分で持久戦つて言つてたわ。今の無しで。

「待て。それはどう意味だ？まさかこの人数でこの数の敵を増援が来る前に何とか出来ると言うことか？」

あ、いや出来るけど増援があるなら待つた方が楽だし気にしないで。と言うか忘れて下さい。さ、みんな防護柵作り手伝いに・・・あ、やつぱ駄目？ん、なに愛紗。武器を使うのか？いやあ、あれば良いけど、あの時サイズはなかなか無いからなあ。やるなら

別な道具を使うかな。

「興味深いな、説明してくれ。出来るなら実行の許可を出す。必要なら協力しよう。」

しまった。自分でめんどくさい事にしてしまった。仕方ないな、アレですあれ。あれ使つてこう・・・ぐるつと。やります。あれ、何か凄い呆れ顔ですね夏侯淵さん。出来るわけない？まあ普通はそうですね。じゃあそう言う事で普通に・・・何かな許褚ちゃん。本当に出来るのか？・・・まあやってやれないことはないよ。ただ、色んな意味で被害が出るけど。主に道とあと片付けする人に。

「嘘ではないのだな・・・？まあいい、やってみる。出来たら確かに華琳様のお手を煩わせずにすむ。」

えっ。何かやりたい訳じゃないのにやることになった流れ？嘘だと言ってよバーニイ！あ、やめてみんな、その頭おかしい奴見る目！ちつくしよう、いいさ見てろよ！こうなつたらガチでやってやる！

「いや、さすがにそれは・・・。」

「出来たら普通に人間じゃないのー。」

「本当に出来たらウチの胸揉ませたるで！」

・・・何とな？今の話二言は無いな。よし、ちょっと行ってくる。あ、愛紗、今回は俺悪く無いぜ！またな！

！
後ろから何か色々聞こえるけど無視だ！ヒヤッハー！魏一のオツパイが目の前じゃ

・
・
・

さあ！現在の俺は村が襲われているのを山から見下ろしています。

何とか道具の加工もうまくいったし、いつでもいいな。下に見える村をもう一度みる。んー、地味にウチの子達が居るから結構持つているけど、やはり多勢に無勢だ。まあ仕方ないね。あの時とちよつと似てるが、今日の俺は一味違うぞ。何故なら、オツパイが待つてるからな！ベネツ！そろそろ行きますか！

眼下に見える喧騒を尻目にとり「それ」に手で触れる。それと同時に俺の皮膚が明確に色が変わる。それだけ、たったそれだけが、今の俺は極限ラージャン3・5体分だ。ズブリと当然のように手を差し込んで、一息に持ち上げる。足に力を込めて：跳ぶっ！そのままみんなが闘う戦場の後方を目掛けてぶん投げた！！

どっ・・・せいっっ☆

ドツガアアン!!!

直後、大地を揺るがす激震が、飛来した轟音と共に戦場を爆砕した！

「「「「「」」」」」

・ ・ ・ 全ての戦場で、動きが止まり、その光景を皆が見た。

そして、破滅の歌が鳴り響く。

びび〇びびるびびるびびるび

びびるびるびる〇びるびるび

なんでも出来ちやうバット、えすか○ぼーるぐ

魔法の擬○で人生、やり直してあげる

はい！つというわけで賊のみんな！みんなの人生纏めてやり直させてあげるスーパ―撲殺天使系オークの羌毅さんだよっ！

なんか凄いみんな唾然としてるけど、今日は賊のみんなにハッピーなお知らせだ！
まったくもって君らのこと知らないけど、賊なんかやつてるくらいだから色々あるよね。でも大丈夫！全部俺に任せておけ！

ーこの即席バット、穢磨狩墓流愚でみんなやり直すといいよ！

そう言つて地面に突き刺さった「それ」をぶっこ抜く。

とはいえ、大したものではない。ただの岩だ。ちよつと加工して若干石柱みたいになつているが、所詮岩なのでみんな安心して欲しい。

ただちよつと長さとか厚さとか大きさが村の門より3倍くらいあるだけだつ！

「ちよつと待てえつ!!」

待たない。だって戦場で止まるとかすなわち死を意味する。つまり止まつてる君らは死んでるつて事だよねつ！喰らうがいい、ガチで10000トン石柱ホームラン！相手は死ぬ。安心してくれ、生き返らせる機能は付いてないが、死ねばそのうち新しく生まれくるのでそのうちたぶん転生できる！だから嘘じゃ無いよつ！何か凄い阿鼻叫喚の地獄絵図だが、むしろ、ここからが本当の地獄だ・・・！

喰らえつ石柱ラージャン投法つ！

えるしつてるか　ラージャンが柱を投げると転がつていく！

ズガァン！

投げた石柱は轟音を振りまきながら敵陣へ吹っ飛んで、容赦なく人を轢殺しながら進む。止まったら反対側へ向かってジャンプ！喰らえつ必殺かつこいっポーズ！・・・からの、飛鳥文化アタック!!

回収したら今度は石柱を再び敵陣投げてまた飛鳥文化アタック！あ、門の前で戦ってるみんな！巻き込んだらゴメンね！まあ巻き込まれてもたかが死ぬだけさっ！ふざけんなとか聞こえるけど無視無視。悲しいけどこれ、戦争なのよね。

あ、なんか突出してる楽進さんが囲まれてる。今行くぞ！ミストルティーン、キーツク!!そう言って巨大石柱を叩きつける。何かそれキツクじやないとか言ってるけどならばこう返そう。いつからキツクじやないと錯覚していた・・・？

まあそんな感じで地面ごと楽進さんの前方の賊を丸ごと爆破。ついでに震動で楽進さんごと周りの賊の動きを止めたところでラージャンスステップで賊を吹き飛ばしながら楽進さんの元へ。無事ー？無理は良くないよっ！なんか凄いキョトン顔の楽進さん。まあ前がいきなり岩で見えなくなっちゃったからね！仕方ないね！分かりやすくサイズを言うなら50m×50mくらいの大石柱だからね！

まあ楽進さんやっぱ可愛いなと思ったら焦った顔をする楽進さん。あ、このパターン知ってる！

「危ないっ！」

大丈夫だ、問題ない。案の定後ろから5人くらいに一齐に攻撃されたが、今の俺は極限状態ラージャンである。適当に攻撃したところで極限弾きされるだけである。カア

ンと音をたてて大きく弾かれる5人。理解不能なものを見る楽進さん。可愛い。とりあえず後ろの連中はバックステップで木っ端微塵にする。知ってるか、ラージャンのバックステップは装備ありハンターでさえ半分近くダメージを受けるんだ。賊何かじゃ一撃だねっ！

飽きたのでとつと終わらせよう！あ、楽進さんひとつだけ良いですか！

「えっ？はい、なんでしようっ？」

後で気の使い方を教えて下さいっ！

そう言っつて俺は再び石柱をぶん投げた！

・
・
・
はいつ。戦闘終了ですよ。

あれから結局1時間くらいで北門の賊は壊滅した。だいたい一回石柱投げるときに200人くらい戦闘不能になるからね。寧ろ気を使って門と兵に被害が無いように戦うのに疲れました。

あ、もちろんその後直ぐに南門も行ったよ！ただ、北門は俺がいるから良いやつてウチの子達が全員南門に居たのと、北門より若干賊の数が少なかったので、3回くらい投げたら南門の賊は降伏してしまった。早く終わって良かったね。おかげでこの時間にご飯の用意ができるよっ！

・・・あれ、何みんな、なんか問題ある？

あつ、俺の攻撃で一切使い物にならなくなった門の前の道とか拾うのが悲惨なくらい木っ端微塵になった賊の死体とかの片付けなら断固拒否する！許可した夏侯淵さんと

その部下の皆さん頑張つて下さい!

「いや、ソレは確かに困るが、それは構わないというか・・・」

じゃあいいや、とりあえずご飯作らなきゃ。許楮ちゃんも食べるかってあれ、何かみんなすごい顔してるけどどうした。ん、何だ風?

「話には聞いてましたが、実際に見るとアレはドン引きです。」

えっ。何が。効率的で無駄の無い戦闘だったと思うけど。だって兵の被害とかゼロだし。道は悲惨だけど。

「相変わらず貴方が武器を使うと、現実感が消えますよね。」

「というか、普通はあの大きさの岩を武器とは言いません。」

・・・?何をいうか。自分でもってふって、相手が死ねば何だつて武器だろ?

「・・・これはあかん。本気で言つとる顔や。」

「流石のぼくでもあれは頭おかしいと思うよ。」

ええ、許楮ちゃんまで。おつかしいな。鈴々はおとーさん凄いのだ!つて褒めてくれたんだが。まあいいや。楽進さん、後で気の使い方教えてね。

「えっ。必要ありますか?」

何を言う!必要に決まつてるさ。俺も気弾飛ばしたいし。まあ直接殴つた方が威力

あるかもだが。あ、そうだ。李典。心の準備はいいか？

「なんのこつち・・・ハッ！」

そう、約束だね！だがしかし私は鬼ではな殺気!?

「道玄・・・？」

あ、待って愛紗、違うよ？今回は本当に違うよ？話を最後まで・・・あ、駄目だこりや。

・・・そのまま関羽さんに酷い目にあわされたよ！

続く？

17話 酔豚にパイナップルがどうか以前にまず酔

豚が駄目

やあみんな、賊を蹂躪する時死んだプロテスタントだけが良いプロテスタントだ！つてやろうとして伝わらないことに気付いてやめたオーク系転生者の俺だよ！

あれから2日経ちました！

なんでも今日の昼頃曹操さんが到着するらしい。へー。意外と遅いんだな。

「いや、途中で賊退治完了の連絡を入れたのもあるが、普通にお前の殲滅速度が頭おかしいだけだ。」

そう言つて呆れた顔をする夏侯淵さん。ちなみに今彼女が食べているものは俺の手作りの出汁巻である。夏侯淵さんは甘い玉子焼きより、若干濃いめの出汁味が好みの様だ。鈴々や許楮ちゃんは甘い玉子焼きが好きで、星は醤油味の玉子焼き、愛紗は甘い炒

り味噌玉子が好きだ。

というか失礼な。まるで俺が頭おかしい人扱いされている。俺がおかしいのではない。特典がルナティック過ぎるだけだ。選んだの俺だけだ。

「おにーさんお代わり！特盛りでお願いつ！」

「おとーさん鈴々もお代わりなのだー！」

ああはいはい、ちよつと待つてな二人共。元気よく争う様によく食べる鈴々と許緒ちゃん。なんでも2人は仲が悪いらしく、こういつたご飯をどつちがたくさん食べられるか、みたいな事とかで良く競争する。正直俺的には娘に喧嘩友達が出来たみたいで非常に微笑ましい。なのでついつい2人共甘やかして食べさせまくっている。・・・このふたりだけで1日イノシシー頭分くらい肉食ってるけど気にしない気にしない。ちびっ子はよく食べて大きくなるのが仕事だしな！ちなみにふたり共これで15杯目だ。正直、毎日大寸胴鍋を使う日が来るとは思わなかった。

「あの、すいません兎殺さん、毎度私達まで・・・。」

そんなすまなさそうな事を言いながらも、俺の作った激辛フライドチキンの皿を独占するのは楽進さん。彼女はここ2日の間に激辛料理を作つてあげたら仲良くなった。まさか四次元袋に入つてたけど今まで一度も使つた事のないデスソースを使う事にな

るとは思わなかった。が、本人が喜んでるのでよしとしよう。

なお、彼女の食べている辛さは、以前俺が無理だから止めろと言ったにも関わらず、味見をする、といつてつまみ食いした鈴々がマジでガン泣きしたレベルである。そんな鈴々を鼻で笑って余裕ぶって食べた許楮ちゃんも泣き叫んでのたうち回った。2人共お馬鹿可愛い。そのまま見ていたい気もしたが、可哀想なので、村人からもらった牛乳を使ってキャラメル擬きを作って慰めた。

「にいさんにいさん、昨日言つてたのはこんな感じでええんか？」

「このチャーハン美味しいのー！」

そう言つて俺お手製中華丼を食べながら、カラクリのことで仲良くなった李典が何やら振動する玉子みたいなものを渡して来る。出来が完璧過ぎる。さすが李典、お前は最高だ。あ、すいません関羽さん、そういう意味じゃないんで物陰連れてこうとすんの勘弁して下さい。え、一番は私？知ってますが。

于禁さんが食べてるのはうちのメンバーも好きな豚バラチャーハンだ。決め手は俺が作った醤油ベースの特製ダレだ。彼女は地味にちびっ子軍師たちと仲がいい。腐の道に行かないと良いが。

この間李典さんに約束の代わりにとある提案を持ちかけようとして、勘違いした関羽

さんに凄い絞られてしまったが、その後何とか彼女達を引き入れたい事を理解してもらい、こうして一緒に食事や稽古などを行う様になった。ちなみに夏侯淵さんは許褚ちゃんをついでに俺が誘った。地味に手料理を気に入ってくれたらしい。美人が美味しうに食べてくれて嬉しいです。あ、みんなが1番なので両側から抓ろうとすんのやめてつて風、変なところ触んな食事中だぞ！

なお、他意はないと言ってるのだが、地味に信じてもらえてないのか、彼女達との食事の際は、みんなが俺の周りを囲み、こうして監視されている。ちよつと信用無さすぎじゃなからうか。心配しなくても俺みたいなゲテモノ選ぶのお前らだけだと思おうよ。え、前科？何それ俺知らないんだけど。あ、ハイ。もちろん興味ないつす。

そんな感じで曹操軍の本体の皆さんが来るまで、みんなで和気藹々と過ごしました。

・
・
・

「綺麗な黒髪に、力強い瞳、そしてその高い武力。……気に入ったわ。関羽、貴女私のものにならない？」

「すみませんお断りします。私はこの人の女ですので。」

はい、ただいまようやくやってきた曹操さんに呼び出されて、楽進さん達とみんな曹操さんに謁見中です。曹操さんの周りには夏侯淵さんと許褚ちゃん他に、夏侯惇さんと荀彧さんが並んでいます。なんか2人共、曹操さんに活躍を見せたかったのに既に戦闘が終了していたので、原因である俺たちに敵意むき出しです。あ、ちなみに今楽進さんや俺たちが協力した事を、夏侯淵さんに報告された曹操さんが、入った瞬間から怪しい目で見ていた関羽さんをナンパして秒殺されました。

あ、なんか荀彧さんが嫉妬して関羽さんを馬の骨扱いした。猫耳じゃなかったら説教してるね。夏侯惇さんは関羽さんが曹操さんの誘いを断った事にご立腹です。あんたそれ受け入れたら受け入れたで文句言うだろうに。ウケる。

あ、なんか関羽さんやみんなと話してた曹操さんがこちらを見た。どうやら全員勧誘して断られたご様子。お、なんか見下されてるぞ。

「お前如きにこの美しい娘たちは勿体無いわ。私に譲りなさい。」

「寝言は寝て言えお嬢ちゃん。」

あ、イカン思わず反射的に。仕方ないね。あ、案の定夏侯惇さんがブチ切れて剣を抜いた。曹操さんも許可を出す。

ふむ、だがな。

「キサマアツ！」

そう言つて全力で剣を俺の首目掛けて打ち付けて来る夏侯惇。はは、おいおい。

ガキーン！

極めて硬質な音を立てて弾かれる夏侯惇の剣。本人どころか全員が目を見開いて驚愕を露わにするが、止まらず直ぐにもう一度首を狙つて来る夏侯惇。それを左手で刃の部分を抑んで止める。馬鹿な、と呟く夏侯惇の目の前で、その武器を握り潰す。今度こそ固まった。左手で軽く薙ぎ払う。一瞬で壁に激突して突き抜けた。まあ多分死んでないだろ。

突然の事態に全員が固まるが、俺が曹操に向かつて歩きだすと、すぐさま覚醒した夏侯淵が俺を狙つて矢を放つ。コメカミに当たるが普通に弾かれる。驚愕する夏侯淵を置き去りに許褚が破壊の鉄球擬きを振り回し、俺の頭に叩きつけて来る。頭突きで鉄球を破壊して、残つた鎖を抑んで夏侯淵に許褚を叩きつける。こちらはだいぶ手加減した

ので直ぐに起き上がって来るだろう。

ゆっくりと歩く。曹操の前に出て庇おうとした荀彧が、足を纏れさせて転ぶ。震えているようだ。緊急事態だと察した李典の螺旋槍が脇腹に突き刺さるが、ドリルは摩擦力と鋭さで、まず相手の皮膚を貫かねばその力を発揮しない。結果皮膚で止められて空回りする螺旋槍。無視して歩く。

バシン、と急な衝撃が体にくるが微塵も効果は無いので当然無視だ。チラリと視線だけ向けると震えながら驚愕を隠せない楽進。まるでダメージがないのと、恐怖を拭えないのだろう。

一歩一歩ゆっくり近く。

当然だ。何故なら俺は今少しだけ「怒っている」。

かの世界の竜種は全て圧倒的な力を持つ。その力の前にはハンターでさえ、出会い頭に恐怖を隠せない。それは、圧倒的な力の差が生み出す本能に刻み付けられた原始的な恐怖。死への恐怖そのものだ。

ラージャンを宿す俺が、その敵意を、怒気を向ける。それはつまり、かの世界で竜種と相對するに同じ。怯えて当然だ。

もつとも、抑えてはいるが見た目も多少変わってるはずだから、単純に顔が怖いのか

もだが。

曹操の目の前まで辿り着く。其処には強い瞳でこちらを射抜く曹操が、武器である漆黒の大鎌を手に携える。

「愚かな。私の手で直接引導を……っ!」

そう言つて鎌を振ろうとする前に右腕だけ完全に変身させて、爪で鎌を切り裂く。一瞬でバラバラになる大鎌。当たり前だ。ラージャンの爪は本来、鋼鉄を容易く砕く強大で強固なモンスターたちの甲殻を容易く引き裂く。ラージャンより強い力で俺が振るうのだ。所詮鉄で作られた武器が耐えられる筈もない。

武器を失つてなお、気丈にこちらを睨む曹操。しかしその足は若干震えている。一歩進む。彼女の足が、一歩下がった。

一歩進む。また一歩彼女の足が下がる。

「華琳様っ、お逃げくださいー!」

叫ぶ夏侯淵と、許褚の2人と、武器を捨てた李典と楽進、于禁が俺を引き止めようと体にしがみつく。まるで意に返さず、更に一歩進む。同じ様に曹操の足がまた、一歩下がった。

繰り返す。やがて壁際に追い詰められる曹操。こちらの視線から、顔を逸らさない。

更に一步進んで、見下ろす。俺の身長は230センチ。それは曹操よりも身長が頭1つ高い夏侯淵達でも、俺の胸に届かない高さだ。曹操には余計に大きく見えるだろう。曹操の顔に汗が浮かんで滴り落ちる。やがて膝をついた。しかし目を逸らさない。体の震えが徐々に大きくなってきた。

俺を抑える5人は息も絶え絶えだが、無視してしやがみ、曹操の顔に自分の顔を近付ける。まだ、視線を逸らさない。だから言った。

「お前、齒に青のり付いているぞ。」

「・・・はっ?」

唐突な言葉に曹操達全員が惚けた顔をして、しかし急に羞恥が湧いたらしい曹操。一気に顔を染め、しかし張り詰めた気が緩んだのか、顔を逸らしてしまった。同時、鼻がアンモニアの匂いを察知した。バサリと、毛布を取り出し彼女の下半身に掛けてやる。

不思議そうな顔を向ける曹操の頭に、手をポンと置く。ビクツと肩を震わせる曹操だったが、気にせず俺は優しく頭を撫でた。

「・・・何故?」

疑問を隠せない曹操さん。まあそりやそうだ。だが説明してやる気はないから、忠告だけしておく。

「この俺の前で、目を逸らさぬ強き心、見事なり。流石は王の器、ということか。まあ、今はまだ未熟のようだから、今回は見逃すが……。次に俺の最も大切な女達を物扱いするなら、一切合切の容赦無く、貴様を滅ぼす。」

よく覚えておけ。そう締め括って立ち上がり、惚けた曹操さんを放置し、しがみついている5人を頭を撫でながら優しく剥がす。何やらずっと驚愕した顔だから、しがみついている事を忘れているのだろう。

あ、荀彧さん、もう怒って無いので安心しておくれ。未だ呆然とへたり込む彼女の頭を撫でて、べつ甲飴を口に入れてやる。

さて、じゃあ帰ろうかみんな。あ、稟お前は どうするって……何みんな、その顔。やたらニヤケてるが。

「我が主人よ、もう一度先の言葉をお願いします。」

あん？何をだよ星。良いから帰るぞ。あ、皆さんちなみに夏侯惇さんは手加減したので打撲くらいはしてるとは思うが、無事なので手当てしてやってね。そういうと夏侯淵さんが曹操さん放置して、今思い出したかのようにアネジャアア！って叫びながらすっ飛んでいった。おお、めつちや早い。ん、なに愛紗。

「初めてですね、貴方が私達の事を言ってくれるのは。・・・嬉しいです。」

・・・？ん？ああ最も大切なつて奴？そだっけ。そうなのかー。ん、なに稟。お前それよりも曹操さんともつと話さなくていいのか？え、もういい？そか。なんだ幼女ども。もしかして先程怒つたのは私達の為ですか？そんなわけないだろ。

「俺は、俺の愛する女を物扱いされた事に怒っただけだ。断じてお前達の為ではない。」

さあ、良いから帰ろうぜ。気不味いよここにいんの。なんかさつき凄く大物じみた喋り方しちやつたし。なんだよ見事なりつて馬鹿か。言つたの俺だけど。つて、なんだお前ら。何か凄く嬉しそうな顔して。あれ、何急に手を掴んで。え、早く帰ろう？い、いやそれは良いけど何で急に？え、なに星。ー・・・子宮が疼く？

え、ちよ！待つてそれは、我慢できなくなるつて愛紗、いや待つてお願い、今日は朝までつて雛里、お前今まだ昼ー！な、何かな風？え、止まらないから覚悟しろつて！？

ちよ、本当に待ってここ最近毎日やってああー！

・・・そのまま宿に連れ込まれ、みんなが俺を解放してくれたのは翌朝どころか夜になつてからだった。

俺、そろそろ本当に死ぬかもしれない。

続く？

18話 地味にミカンの缶詰美味しいよね。

やあみんな、本当のことを言うところそろそろ海の魚が食べたい見た目的に生肉食つてそうなオーク系転生者の俺だよ！

俺が曹操さんの前で荒ぶるラージヤンをしてから、1週間が過ぎました。とりあえず抗議とか暗殺者差し向けられたりはしてないです。

そして俺は今、食材を買いに村の小さい商店街もどきと言うか、ただ店屋が集まっただけというか、そんな感じのところに来ています。

初日こそ俺が大量の賊を蹂躪したため、皆さんに恐れられていましたが、毎度鈴々や許褚ちゃん、ちびっ子軍師2人などを肩車したりして歩いたり、大量に食材を仕入れたりする内に仲良くなりました。

今ではそれぞれの店主どころか、その客の皆さんも気さくに声掛けてくれるので嬉し

いんです。みんな中々俺の見た目に慣れてくれないからね。ちびっ子なら何故か1時間で仲良くなれるんだが。

あ?なに八百屋のおっちゃん。あんな美人と毎日お盛んで羨ましい?あー、また宿のおばちゃんか。あの人の手の話好きだからな。まあ確かに毎日しているが。というかお前ら、人の女で妄想すんなよ。あん?狡いだと?やれやれ、お前らなあ。気楽にいうんじゃないよ。・・・なに?モテる奴の台詞だあ?

・・・お前らそれ、毎日1人で、1人につき5発、計30発を要求されても同じ事言えんの?

みんなの顔が一瞬で蒼白になった。同時に化け物を見る目で俺を見る。馬鹿野郎、俺だつて辛いよ。特典のラージャンとハルク、両方に高い精力があつて本当に良かった。無ければ俺は既に腹上死してる。ちなみに、曹操さんの前で暴れたあと宿に連れ込まれた時は1人につきその倍を要求された。終わった頃には生きてる事を喜んだものである。

どうやら俺の苦勞を分かってくれたらしい、店主達はそれぞれの扱い食材で、精力のつくものや栄養価の高いものをたくさんおまけしてくれて、お客のみんなは凄く可哀想なものを見る目で頑張られて声を掛けてくれる。あれ、何だか凄く悲しくなってきた。

これを一刀君は本来俺の5倍くらい同時に相手取ったと考えると、ちよつと頭おかしすぎるので、やはり彼についたペルソナはマール様には違いない。今は劉備さんだけが、やはりこのあと各国にも子種を振りまいたりするのだろうか。子だくさんで素晴らしいと思うが、継承権で泥沼になる気もする。

・
・
・

トントンと、扉を叩く音がする。

どうやらお客さんのようだが、今ちよつと立て込んでるので待つて欲しいと声をかける。

「失礼するわ。」

おっと普通にシカトされた。誰かと思つたらやはり曹操さんだ。とうかこないだ暴れた時にいたメンバー全員いる。あ、夏侯惇さん意外に元気だ。大丈夫だとわかつてはいたが、あれ並の賊なら重傷なんだけど。さすが魏の大剣、意味不明な耐久力だ。あれ、皆さん顔赤いよ。どしたの。

「貴方ねえ……何なのかしらこの状況は。」

凄いジト目の曹操さん。その視線の先にいる俺たちは全員衣服を纏つておらず、と言うか今まさに俺の上に馬乗りする関羽さんがいた。いや、待てつて言つたのにシカトしたのそつちじゃん。つーかこう言つては何だが、声漏れてた筈なので分かつて入つて来たんじゃないの？

そういうと罰が悪そうな顔する曹操さん。意外にも顔真つ赤な夏侯姉妹と荀彧さん。いや、何で？お前らは曹操さんで慣れてるだろ。あ、許褚ちゃん後は後ろ向いてなさい。楽進、于禁、お前らは手の隙間空きすぎだろ興味津々じゃねーか。李典、楽しそうにすんな。

え、男の見るのは初めて？あー。なるほど。荀彧さん、そんな怯えないで大丈夫。俺

のサイズは普通にはいないから。それを入れてるこいつらがおかしいから。ていうか関羽さん、目の前に来客いるんだから動くのやめよーよ。え？私が誰のものかよく見せつける為？いや、俺が言ってるの羞恥心とか子供の前とかそういう倫理的な問題の話をしてるんだけど。えっ、なにこれ俺がおかしいの？

おいやめなさい鈴々、許褚ちゃんに自慢しようとするな。いまでさえ俺結構許したくないんだからな。・・・なお、鈴々は本番こそしてないが、以前既に俺の味を知っていることと、幼女軍師達が普通に参加していること、こうして全員ですると鈴々が1人だけ仲間外れになってしまうこと、そもそも旅の途中はテントが1つしかないこと、さらには俺以外の厚い推薦もあって、仕方なく最近は参加を許可している。いやだって仲間外れにすると泣かれるのだ。性教育の一環と考えることにするしかないじゃないか。娘の涙は父親の精神にバーストエクストリームするのだ。

・・・いや、やっぱり俺がおかしいなごめん。

・・・というか、皆さん何の用？あと、恥ずかしいから1番後ろの楽進さん、扉閉めてもらえる？

とりあえず、みんなで服着て匂いが色々とやばい部屋から出る。何か李典がはあはあ言いだしたので相当やばかった筈。場所を移して話があるらしい曹操さん達と、共に席に着く。

で、なんぞ？え、こないだの謝罪？いいよそれはもう。最後に許すつて言つたじゃん。気が済まない？そう。じゃあとりあえず受けとくわ。とはいえ俺は謝らないけど。え、なに夏侯惇さん。もつと強くなつて次こそ俺を斬る？あ、曹操さんに怒られた。

まあ頑張つて。そう言うのと驚く皆さん。なによ。良いのか？別にいんじゃね。あれまだ全力じゃないし、あの段階で無理なら一生無理でしよたぶん。て言うか俺は俺の女をふざけた扱いしないなら、俺自身は何言われようと割とどうでもいい。だからそんな怯えないで他の男みたいに悪口言つてもいいよ荀彧さん。え、何で知つてるつてそりや分かるよ男嫌いな事くらい。まあ、正直荀彧さんより優秀な男は少ないから、その悪口もあながち間違いでもないしね。頑張つてくれ王佐の才さん。

そういうとまた少し驚いた顔をする皆さま。何かもう慣れてきた。なに曹操さん？私は王の器かつて？ああうん。まあまだ未熟極まりないと上から目線で言つてみる。

あれ、冗談なので真面目な顔してないで怒って良いよ？なにが足りない？いや知らんよ。自分で考えて下さい。強いて言うなら、気に食わないからという理由なんかで誰かに剣を振り下ろすなら、行き着く先は王は王でも暴王だとは思うよ。今の腐った領主と変わらないね。そう夏侯惇さんを見ながら言ってみる。

そう言うで一瞬みんなが驚き、しかし曹操さんは目を瞑って深呼吸し、肝に銘じるわ、と力強くこちらを見つめて言った。いや、あくまで個人的な意見なので精々参考くらいでいいと思うよ。

ていうかそれで終わり？じゃあ飯でも。あ、まだあるのね。何でしょ。予想つくけどドウゾ。

「厚顔無恥を承知で言うわ。羌毅、私は貴方に仕えて欲しい。」

え、美味しいご飯を毎日三食と個室付きで、週休7日の昼寝付きならいいよ。

そういうと断われたと感じたららしい曹操さん。今の私では駄目という事？とか聞かれる。いや冗談ではないんだが。ああ、やっぱり働きたくないの駄目だろうか。駄目かあ。

とりあえず、今はまだやることもあるし、誰かに仕える気はないと伝える。凄く残念そうだが、今回は引くわ。でも諦めない。そう言ってくれた。まあ別に曹操さんは嫌い

じゃないので、自信が出来たらいつでもどうぞって言っておいた。何か嬉しそうだ。

まあいいや飯でもあ、まだあんの？え、賊退治の報酬？あー。完全に忘れてた。みんななんかある？なんか今ならできる限り聞いてくれるらしいよ。普通に金でいいの？じゃあそういうことなんで。それで。あ、金額も正規の金額でいっすよ。

「・・・欲がないのね。本当にいいのかしら？」

んー、ぶつちやけ道を散々壊しちゃったし、曹操さんや夏侯惇さんの武器も壊しちゃったから、それで相殺つてことで。そう言うと、一瞬呆れた顔になった曹操さん。だが直ぐに苦笑いになって分かったわ、と言った。そしてそのまま爆弾を落とした。

「では、私のことはこれから華琳と呼んで頂戴。」

・・・なに言ってるのこの人。あまりに予想外だったのか、周りのみんなが固まっている。撤回するなら今だぞ？見ろ、後ろの荀彧さん驚きの余り乙女として他人に見せられない顔になってる。あんたのせいだぞ。

「桂花、後でお仕置きね・・・。撤回はしないわ。貴方は貴方の尊厳を軽んじた私を、それでも私の尊厳を護ってくれたわ。そのことに対する感謝と・・・後は、私の今の正直

な気持ちよ。貴方には、私のことを覚えていて欲しくなつたわ。」

さらに爆弾を投下する曹操さん。ああ、そんな言い方するから関羽さんが警戒心露わにし出した。ほら落ち着いて、みんなも。あつコラ曹操さん煽るな！今は預けておくとか言うんじゃない！あとで俺が大変になるだろやめろ！つていうか明らかに遊んでるだろ！

・・・はあ。俺はただの蛮族でね。姓も字名もないが、それで良ければ応じよう。名を羌毅、真名を道玄。君を忘れないと誓おう、未来の霸王よ。

そう言つて返す。

ーととても嬉しそうに、彼女は笑つた。

くつそ、正直可愛い。あ、やめて愛紗。後で謝るからここでズボンに手を掛けないでゴメンって！ん？なに許楮ちゃん、僕は季衣だよつていいの？ご飯美味しかったから!?

ウツソだろ、ま、まあ季衣ちゃんが良いならいいけど。あ、俺のことも道玄でいいよ。え、お兄ちゃん？構わないけどってほら鈴々むくれるな。あ、夏侯淵さんなに？え、秋蘭？真名？ちよつ、貴方はまずいよ！ああほら星まで加わったしあんた確信犯だろ！くつそいいよ好きに呼べよ！よろしくな！

その後華琳さん達は帰っていった。なお、夏侯惇さんと荀彧さんは固まったまままだつたので引きずられていった。

そして何故か残る三羽鳥。あれ、行っちゃったけど良いのだろうか。え、たまたま宿の前で一緒になっただけ？話があつた？嘘やん、今まで待たせてごめんよ・・・！！

というか、3人とも曹操さんに仕えるのかと思った。確かに勧誘はしてたの俺だが。いやほら前回結構あれな事しちやつたし。

「いえ、あの時、曹操様達を前に自分を押し通した羌毅さんの姿には、正直な話、驚嘆しました。何より、その強さに憧れて・・・あ、いえ、忘れてください。とにかく、私達も貴方について行かせて欲しいです。」

「ウチはなー、正直にいさんと一緒にいれば色々な閃きが湧くし、絡繰談義できるの嬉しいし、にいさん強いし優しいしで、元々誘いに乗る気やつたんやー。義勇軍が曹操様に兵として召し抱えられてウチらも身軽になったし、良ければ連れて行つてくれんかー。」

「紗和は正直2人が行くなら着いてくのー。あと、軍のご飯よりおにーさんの料理の方が美味しかったのー!」

：：いや、元々勧誘してたの俺だし、3人とも好きだし、良いんだけどさ。于禁エ：：

まあいいや。非常に嬉しい。これからよろしくな、3人とも。ん?どうした李典?・・・序列最後に良いから交ぜろ?正直興味がある?いや、俺も李典のその巨乳には並々ならぬ興味がハツ!殺気!

「・・・毎度毎度、良い度胸ですね、道玄?」

「我が主人は、余程我らだけでは不満と見える。」

「じゃあ、手加減抜きですね。」

「女将さんには2週間分のお金を渡しておきますね。」

「はわわ!容赦なく行きましゅ!」

「あわわ、徹底的に搾り取ってあげます!」

「おとーさんは鈴々のおとーさんなのだー!」

・ ・ ・ まあ待て、みんな落ち着こ? ほら、ジョークだよジョーク。これから一緒に行くんだし、仲良くやる! 的な挨拶: あ、駄目? ほ、ホラ李典、君からも何かこう、えつ、真名は真桜? ウソだろこの状況で? そのうち慣れる? バツカお前今でも限界ギリギリ、あつ、馬鹿やめろ楽進誘うな、いや領くな楽進! 嫌なことは嫌ってハッキリ言っている! ・ ・ ・ なに? 郷に入つては郷に従え? いやいいよ気にしないで! なに言っちゃつてんの? 真名は風? ・ ・ ・ ブルータスよ、お前もか。あ、于禁お前どこ行く! え、今日はとりあえず見学? 違う、そうじゃない! この2人を何とかあ、待つてみんな! 謝る、謝ります! だから今日はもう勘弁、え、もう宿延長した? 嘘だろ!?

・ ・ ・ ま、まさか本気で2週間とか、言わないよね? さ、流石に冗談ですよ? はは、流石にそうだよ。良かった。 ・ ・ ・ あれつ、なにその顔。えつ

一ヶ月? はは、御冗談を。 ・ ・ ・ あの、御冗談、ですよ、ね ・ ・ ?

無言のみんな。モジモジしてる楽進と、全力でニヤニヤしてる李典。全員が一斉に俺

を捕まえ、宿に向かつて歩き出す。ちようど飯時になり、昼食を取りに来た馴染みの連中が、売られて行く子牛を見るような目で俺を見る。

ちよつおまつ！待って待ってアツー！

続く？

19話 豚肉の塩漬けは、ドリップ処理が1番重要。

やあみんな、どちらかと言うと女騎士にくつころさせられる側になつてきたオーク系転生者の俺だよ！

みんなに1つ言いたいことがある。

無事・・・ツ！

俺は無事・・・ツ！

ギリギリ・・・ツ！本当にギリギリ・・・ツ！

思わずカイジになるくらい毎日がとても肌色な日々が続いだけれど、なんとか俺は無事だった。

というか、流石に一ヶ月は冗談だった。・・・2週間はマジだったが。とはいえ、本当に死にそうな程だ容赦なかったのは最初の3日だけです。ああいや、関羽さんだけは

5日間くらい容赦なかった。うん、昼は貞淑な妻、夜は娼婦、どこるか5日間ずっと娼婦だったけど、そう言ったら間髪入れずに「貴方にだけです。」って言われて何か俺の方が張り切つてしまい、ほぼ一日中関羽さんに掛り切りになり、5日目の終わりには関羽さんをダウンさせる事に成功しました。・・・まあその後他のみんなに特別扱いを怒られて、1人1日ずつ俺と2人きりの日を作る事になったわけだが。俺だけ休み無しである。人外特典は精力の回復力もチートで本当に良かった！

なお、李典と楽進さんは意外と積極的で、アニメでファンだった俺としては非常に嬉しくはあったのだが、何故俺なのか、本当に俺で良いのかと凄い心配になり、最後まで説得を続けたところ・・・。

途中で星と朱里に媚薬を飲まされた楽進さんがすごい事になり、李典は軽いノリで気に入んな！って感じで股を開いたので、アツサリ俺が陥落し、2人とも仲良く頂きました。

なんだかんだ楽進さんはむつつりスケベでややMのケがあるのか、普通に後悔もないそうなので良かった！あとで聞いた話では、楽進さんは傷だらけの体を気にしており、

気にせず俺が反応しまくりで嬉しかったと言ってくれた。風可愛いよ風。その後の関羽さんの勢いが強くなっただけ。

あ、ちなみに于禁は本人の意思で不参加です。まあ本番だけですが。途中で鈴々の相手もしてくれたので、非常にありがたく感じます。是非彼女の要望通り新しいテントを用意しようと思えました。とゆうか、「普通に好みじゃないのー。」って言われて安心したのはこれが初めてです。そのままの君でいて下さい。

で、最後の方は地味にみんなの生理が来て、ようやくお開きになった。なお、俺はその時久しぶりに外に出ることができた。何故だか涙が出て来た。転生後初の涙だった。宿の食堂に行くと、飲みに来ていたみんながお勤めご苦労様でしたって慰めてくれた。何だろう、人の優しさが非常に染みるよ……！

・・・正直、鈴々と三羽鳥以外が、生理が始まった瞬間、心底残念そうに「今回も外した」って言った時、かつてないほどの恐怖を味わった。ありとあらゆるダメージがほぼ通らない俺にも恐怖させる方法があるんだなって知った。

・・・女は恐ろしい。

閑話休題。

とりあえず色々あつたが、仲間三羽鳥を加えて、再び旅に出発です。あ、ちなみに曹操さん達は3日前に道の清掃や修理などの後片付けを終え（放置してた巨大石柱だけは片付けさせられた。目の前で実際に持ち上げたら、何故か季衣ちゃんと夏侯惇さんが悔しがってた。）、陳留？よく覚えてないけどそんな感じなところに帰って行きました。

その際に、近くに來たら寄るようにも言われたが、言われなくてもこの辺りじゃ1番発展しているとか賑わっているらしいので、必ず寄ると言っておいた。華琳さんが強気な顔で嬉しそうに待ってるわ、と言ってくれたが、最後に「私だけ貴方の料理を食べてないわ。」って要求してきたので、彼女の舌を満足させなきゃいけないフラグにちよつと泣きそうである。

ちなみに、今は季衣ちゃんの親友、典韋さんのいる村に向かっている。理由はそんなにない。強いて言えば美味しい料理が食べたい俺が、秋蘭さんに陳留に良い店がないか聞いたところ、近くにいた季衣ちゃんが、華琳さんと典韋さんの料理が1番！とか言い

出し、その時になって典章さんに何も言わずに出て来た事を思い出して慌ててたので、この子は本当にお馬鹿可愛いなあって思った。あ、話がずれた。季衣ちゃんが可愛いすぎるのが悪いね。鈴々が柴犬なら季衣ちゃんはポメラニアンな可愛さである。まあどっちも腕力だけなら熊並みなのだが。

まあそんな感じで、特に行き先を考えてなかった俺が季衣ちゃんのお願いで、メッセンジャーとして典章さんに季衣ちゃんの手紙を持って行く事になった。ついでに依頼料を彼女の料理（食材持ち込み）にして貰えるよう手紙に書いてもらった。原作設定でも確かなレベルと噂の典章さんの手料理・・・イイね！

と、思ったが良く考えたら、こんなオークみたいな大男が、店を持ってるわけでもない少女の元に突然やって来て、貴方のご飯が食べたいですって言う絵面を想像したら、予想以上に事案だったので、凄く今焦っている。もう季衣ちゃん居ないし、手紙も預かってしまったので、行くしかないのだが。

ちなみに、華琳さんの料理を選ばなかったのは、「私に仕えるなら三食私が作るわ。・・・まるで夫婦みたいね？」ってみんなを挑発したので、華琳さんルートは自然消滅しました。正直それなら仕えても良いかなと思ったのだが、察知した愛紗が凄く悲

しそうな顔をしたので、諦めて俺が主夫になる事にした。正直すっかり骨抜きにされてしまった。そう伝えたら出発出来なくなりかけたので、言うタイミングは気をつけようと思った。

そんなこんなでゆったり歩いてる。最近はずっといつも背中に乗ってる組が、体力なくなり過ぎたので、容赦無く歩かせる事にした。女性だけで10人を超える大所帯だが、こないだの大量虐殺と、今から向かう村付近の賊は例の荀彧さん加入イベントでほぼ殲滅されているので、すっかり静かな旅になっている。

少し前まで3日に一回遭遇してたのが嘘のようだ。まあ、軍師組が仕入れている情報では、他のところは相変わらず賊が増えてるそうなので、もう少ししたら黄巾の乱イベントが起きるだろう。・・・正直もう割とどうでも良くなってきたのだが、かの有名な呉のおっぱいを見に行きたい気持ちもある。そして一刀君を嗾けて、やがては劉備さんとの修羅場にげふげふ、天下三分の計の礎にしたい。

まあいいや、もう2日ほど行けば季衣ちゃんが言った村に着くと思うし、体力がないちびっ子軍師達が死にそうだし、今日はこの辺にしようか。見えるところに川もある

な、あそこで今日は野営しよ、みんな。

了解をもらったので、ちびっ子軍師組は最後の一踏ん張りをさせて、他の子らには今のうちに薪拾いをお願いする。今日は数日ぶりに大寸胴鍋で風呂にしよう。季衣ちゃんと鈴々が揃うと、大寸胴鍋を使わないと料理が足りないため、風呂が自然と無しになるのだ。

地味に三羽鳥は初めてなので良くわかってないみたいだ。まあ村ではほぼ耐久セツ○ス状態だったので、体拭いてるだけだったし、仕方ないな。是非存分に楽しんで欲しい。

さて、じゃあ愛紗と星、真桜でテントの設置任せた。稟、鈴々、沙和の3人は、川辺の石を積んで、拾った薪と一緒に火の準備を頼んだ。ちびっ子軍師どもは：：うん、いや寝てろ。そして、凧！俺と一緒に料理担当な！

そう、なんとこの傷だらけ系職人タイプ美人である楽進さん、とても可愛らしい事に、将来の夢はお嫁さんらしく、料理や裁縫の勉強をしていて、俺の旅初の共同料理人が出来たのだ！非常に嬉しい。あまりの俺の喜びっぷりに、本人は赤面し、関羽さんは例の如く嫉妬したが、料理が出来ない自覚はあり、ぐぬぬっ！って唸ってた。うーむ、やはり凧はできる女だった。素晴らしい。

ちなみに、本人は自分の傷だらけの体を地味にコンプレックスにしている。花嫁

に憧れたり、可愛い服が好きだったりと非常に女の子らしくて可愛いのだが、最後には必ず自分には叶わぬ夢ですが・・・みたいな事を言う。分からなくもないが、俺としては関係ないので、そんな感じのネガティブ発言した日は必ずベッドの上で褒めちぎる事になっている。・・・なんか俺も随分女性に積極的になったものである。調子に乗って踏み台転生者にだけはならないようにしよう。

さておき、今日は川が目の前なので魚でも、と思つたが、川に鴨の群れがいたので、それを狩る事にしよう。さて、めんどくさいから手っ取り早く行くか！あ、凧は泳げる？

「あ、はい。故郷の村の近くにも川がありましたので・・・。ですがどうするんですか？ 私達の中で弓を扱う者はいませんし、泳いで近付くと逃げてしまいますよ？」

あ、それは大丈夫。ただ集めるの大変だから気をつけてね。あ、真桜、集めるのに便利な網とかない？お、サンキュ！良しじゃあ、ちよつととつてくるから、みんな耳塞いどいてね。聞こえてるか幼女どもー？おっけおっけ、行こつか凧。あ、凧も耳塞いどいて。

不思議そうな顔の凧に、回収用に真桜から借りた網を渡して、川まで歩く。辿り着いて、軽く殺気を出し、一斉に鴨が逃げ出した。

「!?」

驚愕する風を無視して、俺は深呼吸する。そして、一気に吐き出す!

「グウルルオオオアアアア!!」

僅か10m程まで飛び上がった鴨が、一斉に落ちてきて、水面に叩きつけられた。

バインドボイス。

かの世界で強大な竜種が良く使う、威嚇行動の一種で、音量の大きさもあるが、何よりも根源的な力の差による死の恐怖を思い出させ、一時的にハンターでさえ身を竦ませる咆哮攻撃だ。当然ラージヤンも使う。

ラージヤンは咆哮が強力なタイプではないが、俺は特典で強化されているし、かの世界でクンチュウやブナハブラ、ガプラスなど、この世界の生き物より比較的強靱な生き物さえ、一時的行動不能にし、宙に浮いていれば落としてしまうので、普通の鴨程度では耐えられないだろう。

ちなみに、わざわざ一度鴨を逃したのは、このバインドボイス、一瞬の麻痺効果はあるが、ティガレックスのように、別にダメージが入るわけではないのでそのまま使うと、

すぐに回復して逃げられてしまうため、高いところで麻痺させて、墜落ダメージを狙う必要があるからだ。

鴨などの鳥は空を飛ぶため、比較的骨が脆いので、これだけで気絶ないし殺すことができるのだ。もちろん全てが高く飛んでいたわけではないし、落ちても怪我がない場合もあるため、成果もマチマチだ。何よりラージャンの咆哮の効果範囲は強化されても若干狭いからな。

などと説明しながら風と落ちた鴨を拾う。かなりの数が居たが、下が川だったせいも意外と取れた数は少ない。それでも15羽は居たので、手早く処理をする事にする。あ、風よ、いい加減そのやべえ奴見る目やめて。正直自覚あるけど傷付く。オイ、そのちびっ子ども、とうとう声だけで仕留め始めたとかコソコソ話すな聞こえてんぞ。鈴々を見習え。見ろ、目をキラキラさせながら俺の真似してるだろ。俺の娘超かわいい。

とりあえず、体力ない系ちびっ子どもには羽むしりを手伝わせた。最初の頃はこんな作業もおっかなびつくりだった頭脳派幼女どもも、今ではすっかり顔色1つ変えずに羽を筆る。その動きはベテランのレジ打ち並みにスムーズで、可愛い子には旅させよつて

言うけど、ここまでワイルドになるとは彼女達の家族も思うまい。もし会うことがあれば、この子達はワシが育てた！ってドヤ顔しよう。いや、よく考えたら彼女達の家族からすれば俺は幼女に手を出した性犯罪者なので、どう考えても通報される。なかつた事にしよう。

転生してから急激にレベルアップしたサバイバルスキルと調理スキルを駆使して、一気に解体し、一部は燻製などのつまみにするため、大きな葉に包んで四次元袋へ。あ、三羽鳥にも四次元袋の秘密は共有済みです。裸の付き合いまでしといて今更秘密もクソもないし。

大鍋に水を張って、ガラと頭で出汁をとり、醤油、酒、みりんでシンブルな味付けをする。そこにネギやキノコ、白菜に、川縁に生えていた芹、小麦粉を水で練って耳たぶくらいの柔らかさにした団子もどき・・・つまりすいとんと、薄切りにした鴨肉を入れる。地味にみんな俺の影響で、白米が好きになっちゃったので、鈴々の分も考慮して大量に炊く。

残った鴨肉と、旅の途中で採取した野草などを、片栗粉をつけて、多めの油を引いた鍋で、あげるように焼く。こちらは以前俺が作っておいた藻塩と、同じく特製の甘辛タレを用意した。

さらに、村で仕入れておいた豚肉を、角切りにして串を刺し、火の回りに並べる。この時代の豚肉は、イノシシみたいな臭みが若干あるので、基本は味噌だれだが、風の分だけ激辛味噌だれにする。なお、この時風の流れに気を付けないと、風に乗った強烈な香辛料が、地味に粘膜にダメージを与えてくるので、クレームになる前にみんなに声を掛けておく。

サラダは今回は無し、代わりに季節なのでたくさん仕入れた果物類を盛り合わせにしてデザートにする。

こんなものだろうか。野営の準備を終えたみんなも待ちきれないようなので、早速食べる事にした。

じゃ、いただきます。

閑話休題。

食事が終わり、現在は後片付けをしている。ちなみに、ウチでは料理しないものは食べ終わった後の食器洗いなどを担当するルールがある。今までは基本的に俺以外全員

だったが、今は俺と風なので、風呂の準備だけして、2人でゆったりティータイムだ。ちなみに俺が作ったゆず茶である。今更ながら砂糖使い放題で便利だなんて思う。めっちゃ美味しい。もう少し辛くても、とか頭が沸いてるとしか思えない事を言い出した風はスルーしておく。デスソースを所望されたが徹底してスルーだ。

やがて後片付けが終わって、戻ってきたみんなに所望され、それぞれにゆず茶を出す。星だけは再び酒を所望してきたが、夕飯時も飲んだので却下する。最近は何チ何チ文句を言う様になってきたが、2週間メンマと酒抜きにしてやれば、酒家のある村に辿り着かねばガチで手に入らないので、やがて泣きついてくる。食材と物資を管理する俺に、この手のことで勝てるはずもないのだ。

で、2人くらいずつ交換で風呂に入る。少し前まで頻繁に俺と入ろうとしたみんなも、普通に体を重ねるようになってからは別々であることを気にしなくなった。最も、今でも俺と入ると始まってしまったため、基本的に俺は1人か鈴々で固定である。たまに愛紗が乱入する場合もあるが、俺も彼女の裸にいい加減耐性がついてきたので、上手く新婚さんゴッコなどで切り抜けられるようになってきた。正直成長したと自画自賛したい。まあ、うっかりスイッチが入ると止められないのだが。

今回初の三羽鳥は、なんと地味に風呂自体が初らしい。そういや、いくら非常識な恋姫世界でも、まだ風呂は偉い人の娯楽扱いなんだってさ。原作の画像で普通に入ってか

ら知らなかったよ。

なので特別に俺を含めて4人で入る。余分にお湯は用意しておいたので、贅沢に使って体を洗って入る。唯一俺と交わってない沙和も、お互いの裸は見てるので、今更騒いだりはしない。むしろ風の方が未だに照れている。傷が恥ずかしいらしい。うい奴め。特別に全身手で洗ってやった。

なお、かなりの広さと大きさを誇る大寸胴鍋だが、流石に俺が入るとキツイので、洗い終わった頃から風呂に浸からせる。慣れてないのかすぐのぼせ掛けた沙和と真桜を先に上げらせ、みんなに預ける。

風と2人で入ったが、まあ俺がデカすぎて若干キツイ、くっついて入った。風は恥ずかしそうにしてたが、可愛かったので良しとする。風はどうやら2人よりも耐性があるらしい、俺と2人でゆったり風呂を楽しんだ。

その後は併設されたテントに入って寝る。まだ大半が生理中なので、今日は無しだ。と言うか誰か1人でもしようとする生理中でもみんな参加しようとするため、基本的に禁止にした。比較的みんなの時期が近いこともあり、前ほどがつつく奴もいないので、みんな割と簡単に了承してくれた。なお、まだ初潮がきてないらしいちびっ子軍師達がグダグダ言ったが、ウツカリそんな幼女に自分が手を出している現実を直視して死にそうになる。ちなみに、その辺の意見は愛紗が封殺した。

滅多にない静かな日、こんな一日が毎日続いたらいいと思う。寝ぼけ眼の鈴々を抱いて、布団を被る。おやすみなさい。

次の日、目覚めた俺が初めて見たのは、剥き出しの俺の逸物と、その周りにいるみんな。ガツテム！たまには休みがあつたと思つたらこれだよ！

なんなの？1日も我慢できないの？なに？入れなければ問題ない？それは君達の話だろ！

俺に貯蓄は許されないようだ。

続く！

20話 タコ焼き食べたくてもタコがない。

やあみんな、最近地味に将棋を作っているのだけれど馬車じゃないからファンタジー転生みたいにみんなでやれないことに気付いたそもそも文化を持たない見た目のオーク系転生者の俺だよ！

さて、唐突だけど典韋さんの村に着いたよ！

あの後も比較的のんびり穏やかな旅が続いて、個人的には毎回こうなら良いなって思ったよ。まあ途中で尻尾が蛇のダチヨウ？みたいな鳥に遭遇したり、歩き疲れた真桜が、大寸胴鍋を持つ俺に乗せると言ってきたので、普通に背中に乗せようとしたら何故か下半身裸になって、ウチが抱きつくから支えてな！として入れようとして来たりと大変だった。本人的には俺は歩きながら処理できて、自分は移動しながら気持ちいい、画期的な案やで！みたいな事を言つてて戦慄を禁じ得ない。なんかそんな感じのAVみたことある。流石時代を先取りする技師チート。思考が1800年ほど未来に生きてる。先取りし過ぎだ。

まあまだ生理中の愛紗と星が規定を理由に止めてたが、そんなこと言われずともやらないので安心してほしい。絵面的にどう考えてもただの変態である。だからちよつとみんなその手があつたか！みたいな顔やめてもらえないだろうか。

そんな旅の回想はさておき、何か典韋さんと思われる利発そうな顔のちよつとそれはダメじゃね？と言いたくなるスパツ履いた女の子が、籠を持って歩いていたので話しかける。明らかに怪しい蛮族なのでめつちや警戒されるも、丁寧な季衣ちゃんからの手紙を手渡したら、とりあえず家にご招待いただいた。そして手紙を取り出して読み始め、彼女が固まってから早10分ほど。

何かあつただろうか。え、許褚ちゃんがどうしてるか？あれ、季衣ちゃん手紙に書いてないの？

俺が許褚ちゃんの真名を出したら驚く彼女、何故かと聞くので美味しいご飯のお礼らしいよ、俺もちよつと理由それで良いのか分からないけど。って感じに答える。あ、頭を抱え始めた。何か苦労人の気配がするね。え、何？手紙読めつて？良いのね。はいはい。あつ、俺読めない！雛里、読んでおくれ。あ、雛里も固まった。なんて書いてあんの？

流琉（典韋さんの真名）！私すごい人に仕えることになったよ！村には暇が出来たら戻るね！みんなによろしく！あ、手紙持つてくおにーさんにご飯食べさせてあげてね！
バイバイ！

・・・お分りいただけのだろうか。これで全文であるらしい。ちよつとこれでは何にも分からないと思うのだが、どうだろうか。当然典韋さんも全く季衣ちゃんの状況とか分からないと思われる。えつと、説明します？

すごい疲れた声でお願いします、と絞り出すように言われた。く、苦勞してるね・・・？といったら分りますか？と涙目で返された。べっこう飴をたくさんあげた。甘いものは疲れが取れるから、よかつたらお食べ、あまり慰めに何ないかもだけど。

ありがとうございます、とべっこう飴を食べる少女。地味に美味しそうに食べてくれる。古今東西、女の子は甘い物好きだ。傍目には涙目の幼女に飴をあげる大男の図。2
1世紀なら奥様方が通報するレベルである。

とりあえずそのまま季衣ちゃんの近況を伝える。とはいえ何故曹操さんに仕えるこ

とになったとか経緯は知らないので省く。最後に俺たちにご飯を作る話とかもちやんと説明しておく。典韋さんはその理由に呆れつつも、街に行つた彼女が今も自分の料理が一番だと言つてくれたことに喜んでゐる様子だった。

説明が終わると、手紙を持ってきてくれたお札にと、本当に食事を用意してくれるという。良かった、のこのこやってきた俺が言うのも何だが、まさか本当に作つてくれるとは。そう言うのと彼女は苦笑いしていたが、わざわざ遠くから自分の料理を食べにきたと言うのは悪い気はしないそうさ。ありがとう。

とはいえ、食材がないので取りに行くと言い出した典韋さん。うちの娘が季衣ちゃん並みだと伝えたせいだ。それには及ばないと、先ほどの尻尾が蛇のダチヨウ擬きや、味噌などの調味料、その他野菜や肉などを大量に差し出す。余つたら食べてください。

・・・あれ、何か問題あつた？え、このダチヨウ擬き？ああ毒は処理してあるから安心して。え、どうやって倒したか？蹴爪も蛇の牙にも猛毒があつて、大きくて素早いから罨でないと取れない？いや普通に首絞めてだけど？毒とか効かないし、まず爪も牙も刺さらないし。そう言つたらドン引きされた。

さておき、どうやらこのダチヨウ、この辺りでは希少な食材らしく、張り切つて作つてくれるそうさ。あと、狭いけど今日はうちに泊まらないかと言われた。親御さんとか

良いのだろうか？え、季衣ちゃんと二人暮らし？親くない？ごめんよ、無神経で。つかその状況で何も言わずに出て行ったのか季衣ちゃん……。あ、典章さんがすごい落ち込んだ。ま、まあまあ、全く関係ないけど俺も親くないし、頑張つて！

何かそう言ったら少し心を開いてくれた感じがする。仲間だと思つてくれただろうか。なお、この手の話で鈴々は出さない。理由は色々あるが、1番は最近おとーさんがいる！つて言ってくれるようになったからだ。あんなに嫌がつてた子供扱いも、俺にやら許してくれる。ただしお詫びとして抱つことかナデナデを要求されるが。うちの娘が本当に可愛いすぎる。

さて、お言葉に甘えて今日は泊めてもらうことに。みんなにお礼として、薪割りや洗濯などの雑務を担当してもらう。典章さんは恐縮してたが、当然の対価なので気にしないようにいう。ちなみに俺は典章さんと一緒に料理番だ。何でも味噌や醤油などの調味料は、典章さんでも使ったことがないそうで、興味はあるがきちんと味を知つてからにしたいとの事だったので、せつかくだから俺がいくつか使用例を見せようということになった。なお、この家の調理場は典章さんの城なので、俺の調理場は外に作つた。

それでも彼女とはちよいちよいお互いの技術を盗みあい、俺は彼女の豪快かつ繊細な鍋の扱いや、流れるような包丁捌きを、典章さんは俺のミリ単位で正確な解体技術や、全

く同じ見た目で全然違う食感を生み出す抜群の火加減を、お互いに賞賛し合う。あまりの事態に俺と典章さん2人のお手伝いである凧がオロオロしてた。凧可愛いよ凧。まあ正直俺たちだけ料理バトル漫画みたいな世界観だったからな。みんなを置き去りにしたことを典章さんと顔を見合わせてお互いに苦笑い、少し反省する。

なんか既に宿敵と書いて友と呼ぶ仲になりつつある。しかし傍目から見たら幼女と幼女に襲いかかりそうな蛮族である。何故か村人が外にいないくて良かった。

調理中、さらに話をする俺と典章さん。季衣ちゃんの話の聞いたり、俺の旅の話をしたり。普段は意識して無口キヤラなので、こんな連続で会話するのはこないだの華琳さんの時以来だろうか。まさかの展開だが、典章さんと話が合いすぎる。いつの間に俺は料理人になったのだろうか。後ろからきちんと会話できる俺に唾然とする空気が流れているが無視だ。

途中、季衣ちゃんにおにーちゃんと呼ばれている話のおり、彼女がふざけてでは私にとつてもお兄様ですね、なんて言ってきたので俺も新しい妹ができたな、なんて返して2人揃って笑う。良く考えたら表情筋が死んでる俺がこんなちゃんと笑うのは久しぶりである。やだこの子本当に良い子や。後ろで笑わない俺が笑った事で戦慄が奔ったようだが、もちろん無視だ。

そのまま調理しながらお互いに真名を交換する。お互いに目線も合わせない。調理が山場だからだ。なお、俺の真名交換までの速度は彼女がぶつちぎりで最速である。まるで調理しながらお互いの時間を高速で埋め合わせているようである。後ろのみんなは最早作業の手を止めて声も出ないようだ。華麗に無視する。

やがて調理が終わると、2人同時に視線を合わせる。数秒見つめ合って、やがてまた同時に手を差し出す。俺と彼女には物凄い身長差があるので、絵面としては酷いものだが、お互い最早そんな事は気にも留めない。目線だけで意思の疎通を済ませ、互いに手を取る。

「見事な腕だ。やるな流琉。」

「こっちの台詞ですよ、お兄様。」

再び、2人同時に笑った。

「いや、なんでやねん!!」

真桜の見事なツツコミで、意識が追いついたみんなから様々なツツコミや質問などが飛んだが、今の僅かな時間で積み上げた俺と流琉の絆は本物だ。にこやかに笑って流琉と、同じく無表情に戻っておおなり流す俺。最早生まれてからずっと一緒に生きてきた兄妹並みの一体感である。夜、体に聞きますと言うみんなに、ここは人の家で、御前達は生理中だと軽く言い返す。すると流琉が私とお兄様の仲じゃない、水くさいよ、と言ってくれたので、笑ってありがとうと返しておく。

またもみんなが愕然とするが、料理が冷めるので早く食べようと促す。しぶしぶながら大人しくみんなは席に着いたが、鈴々だけは無言で俺の膝に乗ってきた。寂しそうな目で見上げてきたので、苦笑いして久しぶりの羌毅さん式ナデナデをお見舞いし、鈴々が楽しそうに笑い出したところで食事が始まった。

ようやく我に返った流琉がなんか恥ずかしそうだったが、初めての味に真剣な顔をして食べ比べたあと、気に入ったらしい。調味料は多めに置いておくから好きに使ってくれ、そう話すと、嬉しそうに笑って頑張ります！って言ってた。非常に可愛い。ちなみに彼女の夢は自分の店を持つ事だそうで、この前世で行った大人気料理店並の技術を考えたらさもありなん、な話なので、絶対通うよって言っておく。すると流琉が嬉しそう

に笑って、しかし「一緒にやっってはくれないんですか？」って返してきた。それも良いかもしれない。そう言って再度2人で笑ったのだった。

なお、いい加減プチ切れたみんなのあーん攻撃でようやく空気が元に戻った。ただし星、てめーはダメだ。ワカメ酒なんて初対面のちびっ子の前でやるんじゃねえ。見ろ、流琉が顔真っ赤にして視線を高速移動させてんじゃねえか。第一お前の色はワカメ色じゃねえ。

・
・
・

食後、みんなで後片付けをしていると、なんか感じ悪いおっさんがやってきた。村長らしい。あらやだ、挨拶忘れてた。するとこちらには目もくれない村長さん。流琉に一方的に話して去って言った。なにあれ普通に感じ悪い。なんぞ？

流琉に聞くと物心ついた頃からあんな感じらしい。ちびっ子相手に？正直ちよつと腹立つけど、流琉が困った顔をするので矛を納める。

そしてちよつと行ってきますとデカイヨーヨーみたいなのを背負つて完全に陽が沈んだ外に行こうとしたので理由を聞いてみる。すると、驚愕の真実が明らかに。

なんでも、華琳さんが荀彧さんイベントで大幅に削った賊だが、殲滅させる事は出来ず、未だにちよこちよこ村の作物を盗みに来るのだそう。なので夜はこうして流琉がこうして見廻りをしてるらしい。え、子供なのに？ 1人で？

そう言う前は季衣もいたんですけどと苦笑い。いや、両方子供じゃん。何言つてんの？ え、私達しか戦えるものがない？ ・ ・ ・ へえ、なるほど。戦う気がないの間違いだらう。

とりあえず流琉が外に行きたそうだったので、みんなを残し俺がついていく。なんかあつたら殲滅を許可して置いた。歩きながらさらに詳しく話を聞くと、どうも流琉と季衣ちゃんは戦争孤児で、家は家族が残してくれたものの、当時、と言つても2年ほどだが、子供2人だけで畑のノウハウもほとんどなく、食料など、他の村人の世話になつていたらしい。特に、季衣ちゃんはそんな状況でもわりとノーテンキにやらかして、村長さんに怒られたり、肩身が狭かつたとのこと。やがて2人揃つて豪腕が発覚したあとは腫れ物扱いされながらも、恩返しのためにこうして乱雑な扱いをされても頑張っているのだそうだ。

そこまで聞いて、ようやく俺は合点がいった。今日初めてあつた時、昼を大きく過ぎていたにもかかわらず、彼女がそんな時間に籠を持って畑に向かおうとしていた理由がずっと分からなかつたのだ。仕事を始めるには遅すぎるし、一度戻ってきたなら手足に土が付いてない理由がわからないからだ。

そう言うとき、彼女は苦笑いして、季衣が居なくなつて一人で見廻りをしてるから、どうしても寝るのが遅くなつてしまふと言つた。明け方近くまでは村の老人も起きないで、賊が来てしまふんだそうさ。

正直に言えば、子供にそんなに夜遅くまで働かせておいて流琉の畑の手伝いもしてないのにはわりと真面目に腹立つが、流琉自身が耐えているのに、俺が怒るわけにもいかない。我慢する。季衣ちゃんが出て行つた事を恨んでいるか、と聞くと首を振る流琉。彼女が元気ならそれでいい、そう言つて寂しそうに笑う。優しい子だと心底思う。

なんとかしたくなつて、つい一緒に来ないか、と聞いた。何なら季衣ちゃんの主人である曹操さんに、店を出す協力をお願いしてもいい。そうも言つたが、賊が居るうちはこの村を見捨てられない、どんな形でも、お世話になつた村だからと、彼女は俺に謝つて、そして礼を言つた。

夢はどうするんだ？ 賊が完全に居なくなるのは難しいぞ。自分の店を持ちたいんだらう？

「大丈夫です。確かにだいたい先になってしまいかもしれませんが、諦めないで、いつか大人になって叶えます！」

健気に笑う彼女。その顔を見て決意する俺。厨二も厭わないよ！

よし、じゃあ要するに村がもう賊に襲われなければ良いんだな！任せろ。そう言つて彼女にはもう戻るように言う。みんなに伝言お願い、なるべく早く戻らつて伝えてくれ。突然の事に困惑する流琉。良いから良いから、あと俺やつとくからお戻り！子供は寝る時間です。そう言つて無理矢理帰らせる。

彼女が困惑しながらも帰つて行つたのを確認すると、完全変身した。何気全力出すのは初めてだが、早めに終わらせたい。賊のみなさんには覚悟して貰おう。鼻の機能全開で匂いを嗅ぎ、目当てのものを見つけた。

思いっきり、跳ぶ。一瞬で村が小さくなった。

さあ、義理の妹の為にお兄ちゃん、頑張っちゃおうよ！

・・・その夜、村付近一帯の山で轟音が鳴り響いた。

・
・
・
オラよ。そう言つて無造作にそれを投げ渡す。

流琉を叱りつけていた村長が悲鳴をあげた。どうも昨日の見廻りをサボった事についてのような。誤解なので、証拠品を投げてあげた。

見ていた流琉や村人たちも息を飲む。ウチのみんなは何か我慢していたらしい。流琉が耐えていたからだろう。

何だこれは！そう叫ぶ村長に、一言で返す。

「このあたり一帯の賊、全ての首だ。」

その数約200。意外と残っていたが、隠れ家自体は3つほどだった。元々大きくか

たまっていた名残だろう。地味に首を残す力加減大変だったから、褒めていいぞ。もうちよよかったが、残念ながら頭が消し飛んでしまったので割愛する。

ともかく、これで賊の心配はないし、流琉が街に行っても問題あるまい。

あつ、と短く驚く流琉。驚愕の表情で俺を見る。まさか、一晩で……？と呟くが、その通りですが何か。

で、文句ないよな村長。お兄ちゃんとしては妹の夢を応援したいんだけど。あとこの村の環境にはお兄ちゃんとして大いに不満があります。

何か怯えながらも今までの養育費がどうかほざく村長に、こないだ賊退治の報酬として華琳さんに貰ったぶんを丸々投げ渡す。正直要らないって言ったのにかなり多めに手渡されて困ってたんだよね。街での生活でも1家族が一年持つ金額だ。小さな農村では子供二人分だとしても充分に足りるだろ。まあ、流琉を金で買うみたいで気分は良くないが。

呆然と金と俺を交互にみて、やがて金を奪うように拾って好きにしろ、と去っていく

村長。困惑した顔で流琉が言った。

「どうして、そこまで・・・？」

嫌だったか？首を振る彼女。ならばいい。だから俺も一言だけ返す。

「お兄ちゃん、だからな。」

彼女の目から、涙がこぼれた。

その直後、俺は説明もなしに飛び出したことをみんなに死ぬほど説教された。

・・・上手くいかないものである。

続く！

21話 お好み焼きには鉄板が必須。

やあみんな、好きな食べ物は？と聞かれたら、肉と米って分類を答えるオーク系転生者の俺だよ！

あれから三日経ちました。

正直にぶつちやけると、その場のノリとテンションであんまり関係ない賊を撃滅してしまつた事に気付きました。あれ、これ劉備さんのところにいられないフラグ。ヤツベやつちまつた。

というか、流琉に意思確認ほとんどせずに逆に彼女の逃げ道を奪つた形になつた事に気付いたのが2日前。その頃既に村を出る準備をしていた流琉。あ、これ逆に行かざるを得なくなつたやつだと理解し、同時に全力で謝罪した。かぼちや切りバサミで蜂の巣の中にいる幼虫をくのだりで相手の環境を勝手に他人が判断してはならないと学んでいたのにこの体たらく……ツ、

ちよつと取り返しをつかないやらかし具合である。本当にすまぬつ！そんな感じで全力で謝っていたのだが、当の流琉はクスツと笑ってなんだそんなことか、と俺を許した。というか、全然気にしてないどころか、感謝してると言った。

「本当はずつと不満でした。どうして私ばかりつて、なんでも思いました。季衣なんて、村のことなんてつて、ずつと思つてた。でも季衣を嫌いになんてなれなかつた。突然いなくなつた時も、心配で仕方なかつたけど、帰つてきた時に家に誰も居ないのはつて、ずつと待つてた。」

流琉は、懐かしむように、思い出すように語る。

それは少女の独白。彼女の本音だった。

「本当はこの村を出て、探しに行きたかつた。でも家を、村を守らなきゃつて、私にできることがあるならつて。．．．でも結局私は村を出る勇気がなかつただけなんだと思います。なのに、ふふっ。」

「お兄様が、そんな私を、私の世界を、撃ち壊してくれました！私、今本当に清々しいっ！だから、ありがとうございます、お兄様っ！」

．．．なんかもう真面目な描写めんどくせえ流琉可愛いよ流琉!!

何かどうでもよくなったのでめつちや流琉を撫でまくつて猫可愛がり。すごい流琉可愛い！俺の妹が可愛すぎる！流琉はきやーきやー言いながら、笑っている。喜んでるし良いだろ。見た目は少女に襲いかかる蛮族の凶だが。

義理の妹とのイチャイチャは、義理の娘がヤキモチで頬を膨らませてフライングボディプレスで乱入してくるまで続いた。

まあそんな感じで、流琉が付いてくるようになった。とはいえ、とりあえずは華琳さんと季衣ちゃんがいる陳留？だがそんな感じのところまでだ。幼女盛りだくさんで忘れたが、俺は今どことも目標の定まらない根無し草的旅の最中だ。流琉に武力があるらしいのは知っているが、彼女の夢を考えるとその手をこれ以上汚したくない。原作だからかなら華琳さんの親衛隊かなんからしいが、今は俺の義理の妹だ。何か俺の義理の家族多過ぎわろた。いや、とにかく流琉のやりたいことがやりやすい場所を探してあげたい。

ちなみに、村人たちは流琉の旅立ちに一人の見送りに来なかつた。腹ただしいが、流琉は逆に嬉しそうに笑っていた。いわく、逆に見送りがいたら心残りになる、とのことだ。

流石にこの流琉の健気な強さには、俺と仲良すぎであまり好ましく感じてなかったらしいみんなも認めざるを得ないようで、口々に流琉を褒めていた。流琉可愛いよ流琉。そんな感じだ。

・
・
・

そうして流琉を連れて旅に戻って早4日。

流琉はそのよく出来た子っぷりを超絶に発揮して、すっかりみんなと仲良くなった。ちよつとよく思っていないなかったらしい鈴々も、楽しそうに話している。うむうむ。仲良きことは良きことかな。

ところで、流琉の持つ特大ヨーヨー、正式名称電磁葉々、でんじようよう、と読むらしいこれ、まさかの絡繰仕掛けである。正直真桜の螺旋槍と言いつつ、中々に浪漫が溢れすぎではないかと思う。今は真桜と俺と流琉で、このでんじようようを強化できないか模索中である。ふむ、どうせ高速回転するなら刃を付けるか？流琉の手も強化必須だが。

「駄目や、掴み損ねたらそのまま死ぬで。むしろ複製して二個繋げるとか。単純計算では倍やで。」

「それはちよつと・・・使い方が分からないです。2つ作れるなら、別なものに出来ませんか？」

別なもの・・・はっ!?待てよ真桜、お前の螺旋槍、穂先を今の10倍にできるかっ!?あと流硫の武器をあと3つ複製することはっ!?

「できるけど、どうすんねんそんなに。重くて普通は持てへんで?」

違う、良いかこうして、流硫の武器をそれぞれ2つずつ、平行にこうして、ここをこうして、大きな螺旋槍を前面におけばっ!どうよ、全自動螺旋戦車の完成だっ!こことここを鉄板で補強して、大軍に突っ込めば・・・?

「全てを貫いて、走り抜ける螺旋・・・!ええやん最高やん!兄さん流石やなあ!」

「流石お兄様です!でもこれ、どうやって動かし続けるんですか?」

・・・その辺は真桜に任せた!

「なんでやねん。」

めちやくちや流硫に呆れられた。

閑話休題。

さて、もう少しで陳留、そんな感じのところまで川を見つけたので、今日はここで野営です。

流琉は今日がお風呂初体験の日です。なので、今日は先輩ぶって鈴々が一緒にはいつてあげるのだー！と張り切っている。ウチの娘むっちゃ可愛い。

テントを2つ設置する。実を言うと、既にみんなな生理が終わり、ここ最近虎視眈々と俺を見つめる目がメツチャ怖い感じ。これまでは村をでたばかりの流琉を氣遣って、いや多分流琉まで参加して欲しくなかっただけなんだと思うが、それは俺も同じだから構わない、とにかく俺、流琉・鈴々、愛紗（絶対にここは譲らなかつた。ヤキモチ焼き可愛い。）の4人と、その他で寝てたのだが、そのせいで俺も発散出来ず、とうとう流琉に見つかった。流琉は顔真つ赤だつた。原因はむしろ、寝てる俺のを普通に処理しようとした鈴々（断固俺は教えてない）のせいかもだが、もしかするとこれがウチの普通とか馬鹿なことを教えた星の責任かもしれない。

とにかく流琉は出来る子なので、空気を読み始めてきた。なので先手を打ってみんなの真似をする前に、俺が沙和と鈴々と一緒に寝てもらおうように言っておいた。流琉は少しガツカリしていたが、ホツとしてもいた。いや、お兄ちゃんは変態じゃないので、妹と出来なくて全然良いです。

それよりも心配なのは、みんなの方である。いつもなら生理が終わってからここまでみんな我慢しないので、もうちよつと落ち着きがあるのだが、今はふとした瞬間に目を潤わせてこちらを見つめたり、やたらと俺の体をさすったり巻き付いてきたり、なんかちよつとすごい発情期の猫みたいになっている。本人たちが言うには最近流琉と寝ていたせいで朝一のもの飲んでないのも欲求を不満の原因らしい。麻薬のような中毒性がある？知るかそんなの。

……正直、野生の獣である俺より性欲強いつてどうなのって気もする。が、まあ色々我慢できない事を想定して、テント離して設置した。

まあ結論として、みんな全然まったくこれっぽっちも我慢できなかったです。

いくら俺の気配察知が優れているとはいえ、前と違ってテントは今は2つだ。常時の

真つ最中に賊にでも襲われたら、こっちはともかく、少し離れているテントの中の鈴々たちが危ない。いや、武力で負けることはないだろうが、寝ている場合は危ない。だから正直声とか色々もうちよつと抑えてほしいのですが皆さん駄目ですかね。ホラ、凧も真桜もなんでこないだまであんなに初々しく・・・いや、真桜は最初からそうだったけど、凧は最初の頃の恥じらいとか忘れすぎやで、マジで。あ、ハイ俺のせいかすみません。

えつ、待たせ過ぎ？見せつけ過ぎ？あれ、俺が悪いのだろうかこれ。出来たばかりの義理の家族とのスキンシップを優先して悪いことではないはずだ。だから『僕は悪くない』。なんだ雛里？・・・元からの家族とのスキンシップが足りない？お前まだ俺の娘設定だったの？したら俺幼女に手を出すクソ野郎な上に、更に自分の娘に手を出す近親相姦クソ野郎が加わつちやうんだが。え、逆？娘に手を出されるお父さん？いや、嬉しくないからな朱里。まさかそれフォローなの？嘘やん・・・。

で、一応駄目元で聞くけどさ、隣のテントとかに気を遣って、声を抑えたり、回数とか色々抑えたりする気は・・・あ、無いですよねやつぱり。うん、知ってた。だから愛紗に星、せめて、夜のうちに終わらせてね。・・・保証しかねます!?ちよ、待つて、流石に流琉には見せたくないってアッー！

・・・最近ちよつと人数が多過ぎると思うんだ。贅沢な悩みかもしれないが、とりあえず今まででの回数で人数だけ増えられたら俺の負担が溜まり過ぎるうえに一晩では時間が足りない。野営中にそれやってたら、次の日の出発がすごい遅れてしまうし。みんな、2組に分かれて1日交代する気は・・・ない、ですね、ハイ。なに、風。孕ませた分だけ1日の人数が減る!?ばっ、バーロー!できるかそんな真似!拒否権はないつて稟!?ちよ、今休憩したばかりいいー!

事が済んだのは明け方になってからだつた。

そして朝食の用意をと起き出してきた流琉に声を聞かれた挙句普通に覗かれ、顔を真っ赤にした流琉に「いつまでやってるんですか!もう朝ですよ!馬鹿なんですか!」って感じに全員無茶苦茶説教された。いいぞいいぞ!もつと言つてやれ!「お兄様は早くしまつてください!」あつ、ごめんなさい。

そのままもう完全に朝になってしまい、テント内が臭い!と流琉にみんな追い出され、流琉がテントを掃除している間、全員朝風呂を義務付けられた。あの、朝ごはんは・・・?風呂と掃除が終わるまでお預け?あ、はい、早く風呂沸かします。

流琉の村を出て1週間が過ぎた。

そろそろ華琳さんの治める街に着くだろう。ところで、最近みんなの様子が怪しい。なんかどうも画策してる様な空気だ。変なことを仕出かさなければ良いが。

実は最近、冬になってきたのか、俺はラージャンでハルクなのであんまり関係ないのだが、みんな朝と夜が非常に寒くて辛い様なのだ。一応、なるべく風呂に毎日入ったり、布団の枚数を増やしたり、暖をとれる様に対策はしてるのだが、断熱材なんて入ってないテントである、雨風防ぐくらいしか効果などない。かと言ってそう広くないテント内で火など起こせば窒息してしまう。

一部激しく肌を重ねていけば寒さなど感じないとかほごくメンマや幼女軍師達もいたが、1番簡単なのはみんなで寄り添って寝ることだ。なのでなるべく寝るときはみんなで布団をくつつけるのだが、ここにきてテントが2つある事がネックになった。ぶつ

ちやけた話、デカくて体温が高い俺がいる方が圧倒的に暖かい。なので、一緒に寝れない組が寒いのと、なるべく人数が多い方が暖かいので、俺がいない方が人数が多くなるようにするのだが、すると俺と寝る組しか参加できないので、2つの意味で不満が増えるのだ。

それなら、と流琉の発案で真桜がテントを改造し、くつつけて張れる様にした。なので俺を中心に寝ればみんな暖かく寝れるのだが、流琉が居るので、みんなセツ○スが出来ない。たまに俺が寝ている時に我慢できなかつた愛紗達がいつの間にか俺のを啜えてたりするのだが、俺は一度寝ると敵意や危険がないとなにしても目覚めないが、流琉は普通に起きる。寝れないと流琉が怒り、最もな話なので俺がみんなで寝ている間は禁止にした。

そんな日々がしばらく続いたころ、事件は起きた。

その日の夜は珍しく、本当に珍しく夜が明ける前に俺が目を覚ました。一度寝付くと次の日の朝まで起きない俺としては非常に珍しい事態だ。

そんな珍しい状況で、寝惚けた俺の股間あたりから何やらピチャピチャ音がする。なんだと思つたが、また愛紗達か、と直ぐに考えた。同時に、流琉がまた怒るぞ、とも。しかし不満が溜まって来ていた事は気付いていたし、不満が溜まるとその後の俺にデカイフィードバックがくる。好きにさせよう、覚醒してきた頭でそう考えて、しかし異変に気付く。何か凄い初々しいというか不慣れな感じがする。本番以外は後学のためにと参加する沙和や、非常に残念な事に断りきれずに本番以外は参加を許した鈴々でさえこここまでではない。

不思議に思つて目を開けると、流琉だった。

・・・ファツ?! ルル!! サン!! ナンデ? ルル!! サン!! ナンデ!?

流石に不意をつかれすぎて思考が一瞬停止する俺。俺の目が覚めた事に気付いてないらしい流琉が、一生懸命俺のを舐めている。え、マジで分かんない。何事これ。

と、思つたが、落ち着いて考えたら流琉が普段しないことをしている時点で、他の人間の関与が伺える。冷静に周りを見渡すと、案の定流琉の後ろに星や軍師組がいる。そして後ろには一人猿轡で暴れる愛紗とそれを抑える鈴々と三羽鳥がいた。

いつものパターンだが、非常に頭を抱えなくなる。とりあえず起きて説明を求める。

流琉を巻きこんだのだ、事と次第によつちや厳罰である。

俺が目覚めた事に全員が驚く。しかしそんな事はどうでもいいから早よ説明しろ。怒るぞマジで。久々に身内に怒鳴りたい気分である。

そんな俺を察して及び腰になるみんな。そのみんなを庇うように声を出したのは流琉だった。

で、話を纏めるとどうも元凶は星や軍師組で間違つてないようだが、流琉本人の意思でもあるようだ。というのも、ウチの女性陣は、新入りである流琉以外、なんだかんだ俺の味を知つてたり求められれば処理が可能だ。個人的には未だに幼女組が可能な事に文句を言いたいが、本番をしてないだけで沙和にも鈴々にも可能なのは事実である。一度として俺がみんなに頼んだ事はないが。

特に仲の良い鈴々にさえ経験のある事に、ちよつと疎外感を感じた流琉。やたらお節介なお母さん気質も関係したのか分からないが、自分も、義理の兄である俺の下の世話がしたいと思つたそうだ。いや、その流れはだいたいぶおかしそ我が妹よ。正直お兄ちゃんとしてはいつか恋人にでもやってあげてほしい。ちなみに流琉と付き合いたければ兄の俺より強い事は最低条件で、結婚を前提としたお付き合いがしたければ、その上でかなり高い生活基盤を要求する。

とにかくそんな感じでちよつと危ない思考に走り始めた流琉を、流琉さえ染められれば今までと同じ様に夜にできる様になると考えた星たち欲求不満の淫乱どもが、寝てる間の俺になら何でもできると入れ知恵し、前から混じりたがってた鈴々も焚き付けて協力を取り付け、今に至るらしい。

よし、お前らちよつと後で説教な。逃がさないから覚悟しろ。

どうしても駄目ですか、と泣きそうな顔の流琉。聞けばみんなが羨ましいとのこと。鈴々もみんなズルいのだ！と駄々を捏ねる。ぬぬぬ！

・・・はあ。非常に、非常にっ！不本意だが、お兄ちゃんとしては義理でも妹の涙はみたくない。娘も同じく。家族のお願いは出来る限りお願いも叶えてやりたい。犠牲になるのは幸い俺の世間体と良心だけである。何でも風達の話ではそれなりの家格の家では近親婚もない話ではないとのことだし、ましてや俺たちに血の繋がりは無い。何より普通に2人のことは好きだ。・・・性の対象としてみる気はなかったが、仕方ないな。

最近必要無くなってきたので、使われなくなつたとあるヌルヌル滑りが良くなる菓を取り出し、これ使つて駄目だったら身体大きくなるまでは諦めるよ。そう言つて2人の顔を見る。嬉しそうな彼女達が抱きついてきた。正直俺はかなり崖から飛び降りた気分だが、あ、愛紗。企みに乗らなかつた君だけ参加を許す。他はしばらくお預けです。どうしてもつて場合でも1人でやつて下さい。凄くブーイングが上がるが無視。

大喜びの愛紗が飛び込んでくる。抱き留めてみんなで服を脱ぐ。・・・2人は初めてなので丁寧にしっかり気を遣つて、出来る限り思い出にのこる様にしてあげたいが、もう朝だ。これは今日先に進むのは無理だな。

この後、滅茶苦茶セツ〇スした。

・・・結局次の日、我慢できなくなつた残りが雪崩れ込み、華琳さんの治める街に着いたのは2日ほど遅れてからだつた。

続く！

22話 鳥ささみのねぎわさPON酔は日本酒派

やあみんな、実は待機形態はそんなに大きくないオーク系転生者の俺だよ！

前回とうとう鈴々と流琉にまで手を出してしまい、完全に言い訳できなくなってしまうクソ野郎、それが俺さ！色々分かってたつもりだけど、やっぱエロゲキャラの大きさに対する耐性値ハンパないね！もう諦めたからみんな俺を外道くんと呼べばいい！ここまでの外道は見たことなからう！未確認少年外道だよ！ネタ分かった君は僕と握手！

さておき、霸王こと曹操さんが治める街に着いた。予定より2日ほど遅れたが、単純に街の近くでみんなと盛ってただけだと言うしよーもない理由なのが悲しい。1人本気の流れに乗れない沙和が自棄つばちで参加すると言い出さなければもう少し遅れたらう。ギリギリ沙和の純潔は無事です。良かった良かった。

現在は、街の検問の近くに備えられた兵の駐屯基地みたいな所にいる。相変わらず止められたので、三羽鳥と流琉がメツチャ焦ってたが、他のみんなは慣れたもので、どのくらいかかるかで、街で食べるかここで作るかまずは時間を兵に聞いていた。うむ、慣れって怖い。

とはいえ、今回は俺が蛮族だから止められたわけではない。どうも曹操さんから俺が来たら報告するよう通達があつた模様。てか、検問にいた兵達は、俺や三羽鳥と一緒に戦つた元義勇軍と偵察先行していた夏侯淵こと秋蘭さんのところの兵らしく、俺の事を覚えていた。今隊長である夏侯淵さんと呼んでいたので待つて欲しいと言われた。いや、そんなに偉い人呼んで来なくていいのに、と思つたが、流琉の事もあつて季衣ちゃんには会いたい。会わせてくれそうな人が来てくれるのだ、ゆつくり待つとしよう。

それにしても、やたらと丁寧な接客をされる。そんな心配しなくてもうちの女性に手を出して来なければ暴れたりしないよ？つて感じのことを言うと、貴方に暴れられたら元より全兵を集めないと抵抗もできないので、今更そんなこと気にしてないそうだ。な

んか俺ゴジラかモスラみたいな扱いでワロタ。

単純になるべく高待遇でもてなせと言う命令があったのと、かの防衛戦で世話になったから、と言うことだった。ならないか、と思い、素直に接客されておく事にする。

「兄様、私と会う前になにをやったんですか・・・？」

兵の俺に抵抗のうんぬんのくだりを聞いて、何かまたやらかしてんなコイツ、みたいな顔で聞いてきたのは、肌を重ねてから一層固さが抜けた流琉だった。失礼な、ちよつと乱暴な手段で賊の方々を転生させてあげただけである。

「あれはそんな生優しいものではなかったと思いますか・・・。」

「明らかに理不尽と暴虐の塊だったの。」

「あれならまだ嵐とかの大災害に巻き込まれた方が生き残りが出るとおもうで。」

「まあ、貴方の戦闘はだいたい理不尽、というか、貴方がまず理不尽そのものですから仕方ないかと。」

おかしいな、三羽鳥や稟の評価がまるでデストロイヤーとゴジラの戦いそのものみたいな表現である。個人的にはまだ未熟な撲殺天使見習いなだけだと思うのだが。風がおにーさんは意思を持った天災みたいなものですし、とか完全に人間扱いしない感じで流琉に説明している。まあ物理的に人間じゃないので、否定できないのが悲しいところ

だ。あ、流琉、その優しい顔やめて。人間に優しい化け物見てるような目やめてください傷つく。鈴々を抱っこして癒される事にする。鈴々可愛いよ鈴々。

そうこうしてたらやがて夏侯淵さんがやってきた。

「久しいな、道玄。華琳様がお前に会いたいとのことだ。すまないが着いてきてくれ。」
なんか準備しているらしい、挨拶もそこそこに着いていく事になった。歩きながら秋蘭と話す。流琉を紹介して、季衣ちゃんに会わせて欲しいと言ったら、華琳さんと一緒に待っているとのことだった。やったね流琉。流琉も嬉しそうで何よりだ。ところでお前達、普通に恥ずかしいから、離れてくれない？嫌？ああそう・・・。

何かみんな秋蘭に警戒してるのか、劉備さんの村に着く前みたいな状況になっている。稟に至っては貧血でもないのに俺に横抱き状態であり、視線だけ陰しく眼鏡をくいくいさせながら秋蘭を睨んでいる。正直非常にカッコ悪いし、街中なのでたくさん人がいてむっちゃ恥ずかしい。降ろしていいだろうか。もう少し？良いけどお前のポジションも愛紗達もやりたいらしいから、あとで交換してやれな。あ、秋蘭や、明らかに冗談なのは分かるが、混じろうとするな。俺が後でとばっちりを受ける。え、それが楽しい？やな奴か！

そうして城に着くと、謁見の間みたいな所に通される。中では曹操さんの他に、夏侯惇さんや荀彧さん、季衣ちゃんとがいた。お付きの兵さえ居ないが、信頼の証なのだと思ふ事にする。あ、季衣ちゃんが流琉に大喜びで突撃した。華琳さん放置で良いのかこれ。あ、華琳さん笑つて頷いてるので構わないみたいね。

「久しぶりね、道玄。待つていたわ。」

まるで恋する乙女のような口調。横の夏侯惇さんと荀彧さんが凄く顔で睨んでくる。安心して欲しい。明らかに演技だ。だつて君らがその顔した瞬間にニヤニヤしてるもんこのドクロちゃん。

つれないわね、なんて世間話が始まった。とりあえずまだ仕える気はないと先手を打つてみたら、それはまだいいとのこと。何でも私はまだ貴方に相応しい主人ではない、とか言い出した。いかん、これはプレッシャーだ。ただの蛮族なので買い被りは勘弁願いたい。あと横の2人の顔が普通に怖い。美人さんだから気をつけよう……。

話の流れで、季衣ちゃんと再会を喜ぶ流琉を紹介する。流琉はめちゃくちゃ緊張したが、季衣ちゃんが流琉は僕と同じくらい強いんですよ！とか言つたので華琳さんが物欲しそうな目をし始めた。流琉が怯えるのでやめてください。

「貴方の周りは可愛い娘ばかりでズルいわ。貴方がくれば全員来てくれるのかしら？」
知らんよ。みんなに聞いて、と言おうとしたら、万が一そうなれば、私は彼に着いていきますと間髪入れずに愛紗が言い、他のみんなも続く。やだ、嬉しいけど時と場合を考えて！華琳さんの目が鋭くなった。ほら、ならますます貴方を諦めるわけにいかなくなつたわね、みたいな事を言いだした。止めてあげなよ、ガチトーンで言つたせいで横の2人が視線だけで人が殺せるレベルになつて来たぞ。

ついでに流琉のことで、賊の残党を200くらい始末したので大丈夫だとは思うが、余裕があつたら村の周りに兵を送つてもらえないか聞いてみる。いや、クズみたいな村だが、それでもまた被害に会えば流琉を逆恨みするだろうし、流琉も気にするからな。そんな話をしたら流琉が兄様ありがとうございませう！と言つて来たのでお兄ちゃんとしては当然だとカッコつけておく。季衣ちゃんが流琉の兄様発言で目を丸くしてるが、原因君だからね。

「まだそんなに・・・感謝するわ、道玄。後で褒美を取らせましょう。受け取つて頂戴。」
兵を出す約束をしてくれた。ありがたい。今回は素直に金を受け取る。いや、全然後悔してないけどこないだ貰った金は使っちゃつたので、街に滞在するにはちよつとこの人数では心許なかつたのだ。すると流琉が申し訳なさそうな顔したので頭を撫でて気

にしない様に伝える。実際俺は気にしてないし、みんなも同じな筈だ。そう言えばみんな顔いてくれた。何か不思議そうな顔する曹操さん達に、流琉が説明しだした。季衣ちゃんいるけどいいのかね、この話。

「そんなことになってたなんて・・・僕全然知らなかった。ごめん、ごめんね流琉。」

案の定季衣ちゃんは落ち込んだが、流琉は朗らかに笑って許していた。むしろ俺に着いてこれたからと逆に季衣ちゃんにお礼を言ってる。なにそれ凄い嬉しい。流琉可愛いわ流琉。でもお兄ちゃん的にはそのスパッツはやめて欲しいな。鈴々みたいなのにしない？しないかー。

ふとみたら、荀彧さんや夏侯惇さんが少しだけやるじゃねえか、みたいな顔で見てるので兄として当然、とドヤ顔してみた。兄、のあたりで荀彧さんが汚い物を見る目をしたが、事実なので素直に受け止めておく。俺・・・未来に戻れたら自首するんだ・・・！華琳さんや秋蘭も感心した、みたいな事を言ってくれる。何かいい雰囲気なので、ついでに流琉の夢である店のことと、冬の間この街に滞在したいのだが、借りられる物件は無いか聞いてみた。したら何か急に涙目になる流琉。あれっ、なんか駄目だっただろうか。みんな呆れた顔で俺を見る。華琳さん達どころか、り、鈴々に季衣ちゃんまで、だ
と・・・！

「にいちゃん、それは流琉が可哀想だよ。」

「兄様、私は兄様の側には駄目ですか・・・?」
「風が言つてたのだ!おとーさんは朴念仁なのだ!」

「フアツ!お、お兄ちゃん的には嬉しいけど、料理人になりたいならこつちの方がいいと思うんだ。冬の間はみんなが大変だから滞在するが、一旦劉備さんのところに戻ると、すぐまた旅に出る。そうなれば物理的に店は無理だ。そう言うのと、それでも構わないから、一緒にいいと言う流琉。ちよつとチョロすぎて正直不安になるレベルだが、お兄ちゃんも流琉と一緒にの方が嬉しいので、来たいと言うなら止めないが、大変だぞ?え、私がいなくて逆に生活が不安?まともに旅が進まない!・・・人数が増えたから否定できねえ。みんなも心当たりがあるらしい、言葉が詰まっている。うん、有り難く着いて来てもらおう。抱き着く流琉を、優しく抱きしめて、頭をなでておく。ん?華琳さんなに?俺はもうちよつとやそつとの犯罪者扱いにはメゲないぞ!」

「いや、少しは反省すべきだと思うけれど、それはまあいいわ。ところで道玄、劉備とは誰かしら?」

もしかして仕えているのか、と睨んでくる。それは無いから大丈夫である。ただ、ちよつと放つて置けないから軽く協力しているだけだ。そう言うのと興味を持つたらしい華琳さん、どんな人物か聞いてきたので、少し悩んでから答える。

底抜けに明るいわ人好しで、全方位天然なちよつと頭足りない感じの、大き過ぎて絶対無理だろつていう夢を持つてる現実見えてない様な女の子かねえ、今はどうだか知らんが、少なくとも会つた時はそうだったな。

「それは・・・控えめに言つても駄目だと思ふんだが、大丈夫なのか？」

困つた顔で言つてくる秋蘭。んー、まあそのままなら駄目だろうけど、そのまま終わる様な器じゃ無いと思つてるよ、俺はね。馬鹿で夢見がちな少女みたいな奴だが、俺は結構嫌いじゃない。やがては華琳さんと並ぶかもしれないと勝手にみているよ。そんな感じの事を言つておく。まあ歴史的にはそんな感じだった気がするし嘘は言つてないよきつと。すると華琳が興味を持ったようで、覚えておくわ、と言つた。貴方を譲る気はないけどね、とも。何か凄く求めてくれるのは嬉しいが、この人の所は忙しそうなので、それさえ改善してくれたら正直仕えてもいい気がするのだが黙つておこう。

「ところで、この街に滞在するなら、軍の宿舎に貴方達の部屋を用意するから、滞在期間中だけでいいから、ウチの手伝いをする気はないかしら？」

ちよつど新しく宿舎を増やしたし、当然給金も出すわ、と華琳さんが言う。何でも風達が率いてた義勇軍や、希望する兵を新たに雇い入れたので、宿舎を大きく増やしたらしい。これからも兵を増やすつもりなのだと言う。

む、あわよくばこちらの何人か取り込みたそうだが、それは正直心配してないし、もしそれを本当に望むならそれはそれでいいから、構わない。まあ無いだろうけど。確かにちやんとした軍や政治に関わる仕事を経験するのもウチの軍師組にとつてはプラスだし、武将組もその辺の野盗ばかりでは腕が錆びるし、ウチの中だけでやるよりは新鮮な空気を味わえるだろう。乗ってもいい気がするが、どうだ？

聞いてみると、俺と一緒にの部屋にすること、余り無理な事をさせないのが最低条件だそうだ。そう言うのと、さすがに12人全員が入る部屋は無いが、少し狭くても良いなら演習などの会議をするための部屋を使って良いそうだ。後者は無理だと思う場合は素直に断って良いとのこと。だつてさ。ならいい、とみんなが言う。オーライ。じゃあ、華琳さん、そういうことをお願いします。細かい事はウチの軍師組と詰めてください。頼んだ少女達と稟。

「嬉しいわ。では僅かな間だけどうぞよろしくね、みんな。」

そう言つてニツコリ笑う華琳さん。相変わらず可愛い顔で笑う人だ。

じゃあそういう事なんで、と言つたら待つたが掛かる。なんぞ？

「ちようどいい時間だし、私、貴方の料理が食べたいわ。約束したし、頼んでも良いかし

ら？」

・・・ついに来てしまったか、この時が。原作は知らないが、数々の恋姫2次創作を読み漁って知識はある！自身の料理の腕もプロ級で、その味覚はとある料理漫画のゴツトタン並みで、評価の厳しさもそんな感じだともっぱらの噂！

俺は調味料こそ未来のアイテムなので大抵の人は喜んでくれるが、その味そのものは正直一般家庭のそれ、華琳さん達を満足させるには足りないだろう。しかあしっ！それは過去の話だ！あれから俺は研鑽を積み、進化したっ！なによりもっ！

「え、私ですか？」

この流硫がいるっ！この二週間くらいずっと凧と一緒に俺の調理のサポートをしてくれて、すっかり味噌や醤油の未来調味料になれ、様々な料理を生み出し、俺の料理スキルを遥かにレベルアップさせ、凧のお嫁さんレベルをいつでも嫁に行けますな感じに完成させたスーパーな舌と技術をもつ自慢の妹だ！おかげで街の飯屋に寄るとみんなからブーイングの嵐！原作でも華琳さんに認められたスキルを持つとかそんな話だし、これで勝つる！

行くぞ、流硫、凧！お前達の力を貸してくれ！このスーパーゴツトタン華琳さんを喰らせてやろうぜ！

「兄様・・・私、頑張りますっ！」

「え、私もやるんですかっ!？」

当然です。行くぞ2人とも！俺たちの戦いはこれからだっ！

・・・結果として、ギリギリ喜んで貰えました。味噌や醤油の色合いの、見た目は結構文句言われたけども。うう、ゴツトタンっおいお。

なお、早速泊めてもらった部屋で朝までやってしまい、近くの兵達の苦情が殺到したのは割愛する。

続く？

23話 サンドイッチは一枚肉なら鶏肉が1番。

やあみんな、最近女騎士がオークを襲う系の話があるけど、あれってケモナーみたいなものなのか疑問なオーク系転生者の俺だよ！

曹操さんに雇われてから約一週間が経ちましたよ！

武将組と沙和は夏侯惇さんや季衣ちゃんと一緒に兵の調練など。

軍師組は荀彧さんや夏侯淵さん達と内政や軍務に関わる仕事たくさんのあれこれなど。

流琉は城の食堂へ。真桜は兵器製作などを。

そして俺はちよつと思ふ所があり、許可をもらって風を連れて街へ。

皆働く時間も場所も違うけれど、終われば同じ部屋に戻ってきて、その日の報告や共有をします。そして一緒に寝てまた、それぞれの持ち場へ向かう、そんな生活を続けて

1週間です。

そしてこの1週間やってみて、みんなの感想はと言うと。

「納得できません。」

「「「「同じく!!」」」」

「風だけずるいのだ!」

「兄様、私もずるいと思います。」

「ウチは絡繰好きなだけ弄れてそこそこ満足やで。」

「沙和も街で遊びたいの!」

これです。文句だらけだったよ。

やだなあみんな、まだ1週間だぜ。我慢が足りないよ我慢が。何が不満なんだね?

あ、沙和と真桜は除く。つか沙和、遊んでないよ?サボりは駄目だ。ブーたれるな。

「何故、風なのですか?」

「あわわ、私達では駄目な理由を教えてください!」

「鈴々もおとーさんと一緒にいいのだ!」

んー、色んな理由があるけど、風が1番条件にあってるからかな。あと鈴々、仕事は遊びじゃないし、我儘は駄目だよ。というか昨日の休みの日に一緒に遊んだら?

「条件、ですか。具体的には？」

「兄様、一昨日私も非番でしたよ？」

ほら鈴々来なさい、抱っこしちやる。寂しがりな鈴々可愛いよ鈴々。流琉は季衣ちゃんと遊びに行つたんだろ？季衣ちゃん今度の非番、流琉と遊びに行くつて張り切つてたからな。邪魔しちや悪いかな、と。

そう言うつとむう、とむくれる流琉。

で、条件だが。まあ簡単に言えば一番身軽なのと、容姿が訳ありに思われやすいからだな。凧にや悪いが。

「訳あり、ですか？それはやはり傷あとですか？」

まあな。凧には嬉しくないだろうが、その辺分かりやすいのが欲しかったんだよ。すまん、凧。

そう言うつと、大丈夫です。と短く返す凧。ありがとうよ凧。でも顔赤いよ凧。バレるから思い出しちや駄目よい。

「道玄、詳しい説明を要求します。」

ぬう、長いからめんどくさいが、愛紗が嫉妬してますつて顔だ。あれ放置し過ぎると後が怖いからな。ただでさえ昼間一緒じゃないから夜激し過ぎて、近隣の兵全員移動しちゃつたし。荀彧さんにぶち切られたし。

しゃーない、1から説明しよう。簡単に言えば、俺は街を見回ってた訳だが、見回ってた最大の理由は、治安調査だ。1週間前にこの街来た時そこそこガラ悪いのがいたのと、流民が多いのが気になってたんだ。

「はわわ、確かに怖そうな人たくさんいました!」

「しかしそれを調べるなら、私達軍師の誰かの方が都合が良いのでは?」

いや、流民の理由が知りたかった訳じゃない。つーかそれは日々の報告でなんとなくわかる。周りが酷いのと華琳さんが凄い良いものの、相乗効果だな。

そう言うのと分かっていたのか、領く軍師組。よし、続けるけど、流民が多くてガラが悪い、それはつまり、治安の悪化が起きる訳だ。それは当然だからまあ仕方ない。華琳さんや荀彧さん、御前達軍師組次第でいくらでも改善される。ただ、改善には時間がかかり、どうしても犠牲になる民がでるだろ?」

「だからすぐに捕らえられるように、ってことなの?」

いや、それもあるが。それは今やつてることの次だな。俺が字を書けないから補佐してくれてる風にかわりに起案書描いてもらつてる。華琳さんに出す前にお前達に見せるから、その時確認してくれ。

ともあれ、カタチとしてはその前段階として、どんな犯罪者とその予備軍がいて、どの辺りに集まっているのか。これを調べたかったんだ。

金がなくて盗みばかりする奴らとか、もつと大きく人身売買とか、後はクスリとか賭博とか。そんな感じ。まあ極たまにもう潰したのあるけど。

「それが何故風なのですか？確かに軍師達では荒事に向きませんし、鈴々、流琉では舐められてしまうので向かないとは思いますが。」

私でも構わないはずだ、そう目で語る愛紗。まあそこは確かに愛紗達で代えがきかないわけではないが、要するに俺が危ないやつって印象持たれたかつたんだよ。風の見た目は言っちゃなんだが傷だらけだから、壮絶な過去を持つてる様に見えるだろ？で、ちよろつと娼婦っぽい格好してもらって、如何にも俺が連れ歩けば、その原因は俺で、より一層悪人に見える。そうすりや流れて来た悪人つてことで悪人擬きや悪人に話聞きやすいからな。悪人達に聞くのは、蛇の道は蛇つてやつだ。

で、どうしても作戦上荒っぽいから、武器なしでも戦いに慣れてる風がよかったのさ。まあ他にも理由もあるけど。

「ほう、他にも理由があるのね？興味あるわ。」

ファツ!?急に違う声が聞こえて驚く俺、曹操さん達だ。いつから聞いてたの？納得できませんから？最初からやん……。まあここ確かに食堂だから誰でもくるけどさ。え、とにかく続ける？あと報告書よこせ？ああ、もうちよい待って下さい。俺文字書けないんで副官風をお願いしてます。あ、副官風でみんなピクつてした。とりあえずスルーし

よ。

正直に言えば、さっきの理由プラス消去法みたいなものだ。最低限の自衛が出来る武力を持たない軍師組は、そもそも内政や軍務の経験を積ませるために入れたから、そこは外せない。人手も足りてないし、実際かなり役に立ってるはず。荀彧さんに確認すると、悔しいがかなり助かっていて、ずっと残って欲しいくらいだそう。まあ駄目だけど。

次に武將組は、星や愛紗、鈴々達に武將としての経験積ませたかったのと、純粹にお前達が風より武將に向いてるからだ。武力でも風より上だし、基本無口な風よりも指揮もしやすい。まあ風が向いてないとは一切言わないが。沙和は武器なければほとんど戦えないのが選ばなかった主な理由かな。あとは沙和の調練は沙和にしかできん。

それは皆同意した。サンダース軍曹みただしな。

真桜は出来ないわけではないが、普通に物作らせた方が、よほど為になる。真桜の発明はみんなの戦いと生活両方の役に立からな。で、鈴々と流琉はさっきも言った子供だからと、俺が人間の悪いところばかり見せたくなかつただけです。異論は認めぬ。

そんな感じに色々条件に消去法重ねたら風しか残らなかつたんです。だから風なんです。文句ないな。よし、仕事しに行くか。

「お待ちください我が主人。」

「それだと道玄、お前自身が行く理由がないだろう。」

秋蘭と星が待ったをかけた。いや、お前らは気付けよ。逆に聞きたいんだが、それ以外で俺何すんだよ。読み書きできないから文官なんて無理だぞ。流琉手伝うくらいしかないぞ。まさか俺に武将ができると思ってるの？

「はあ？あんた武将じゃないの？その筋肉は飾り？うちの馬鹿を瞬殺したこと、忘れたとは言わせないわよ！」

「私は瞬殺などされていない！」

ああ夏侯惇さんはスルーするとして、荀彧さんや、俺、武力はないんだよね。戦闘力はあるけど。違いわかりにくいかな、荀彧さんは武人じゃないしね。愛紗達なら分かるだろ。俺いつもお前達全員相手にするとき、大体攻撃しないから。

「確かに、見えてはいるけど付いて来てるか、と言われれば違いますな。」

「正直、最初はワザと避けないのかと。」

まあどうせ効かないから避けないのもあるけど、俺にはスピード無いからな。一人二人ならともかく、お前らクラス5人はついていけない。雑魚ならともかく。

簡単に言えば、武術を修めてそれを元に戦うのが武力。生まれ持った身体能力で力任せに戦うのが戦闘力、くらいに考えてくれ。分類するなら、ウチの星や愛紗、秋蘭が武力で鈴々や季衣ちゃん、夏侯惇さんがやや戦闘力よりかな。俺の分類は純粹に戦闘力

だ。

武術を修めてないから、フエイントとか交えられたら普通に反応するし、駆け引きはできない。武術の達人連中は経験で攻撃を予測するから、ただの拳はなかなかあたらん。当たり前そうになっても逸らされる。

俺がそんな相手を倒すには、相手が対応できない速度で攻撃するか、予測出来ない攻撃するか、相手の動きを止めるか、それが必須。しかし俺に速度はちよつと難しい。

こちらの攻撃は当たれば死ぬが、殺してはならない模擬戦なら確実に怪我させない為には、刃物や鈍器で傷を負わない俺は、受け続けて体力切れ狙うのが1番だ。でも、この戦法は普通は無理だ。人間なら刃物で切れて死ぬし、鈍器で殴られて無傷もあり得ない。

ではなぜ俺に戦闘力があるかと言えば、簡単に言えば俺を殺せないのと、相手が確実に避けられない上に当たれば死ぬ攻撃方法を持つているからだ。星や愛紗なら俺がどうやって大量の賊を殺して来たか分かるだろ。俺は速度もなければ、敵に攻撃を当てる技術もなく、読み合いも出来ないが、そもそも大抵の攻撃が通らないし、何人でかかっても力で俺には勝てない。そして力と装備で速度や命中率、技術なんかを文字通り力技で潰せる。だから結果的に強い、みたいな感じ。

ここまで言えば理解できるかな、将として教える武を持たない俺は兵の訓練には参加

できん。元々他者が追及出来ない生まれついでての身体能力で戦うから肉体鍛錬さえまともに教えられん。更には俺の戦闘方法ゆえに、長く巨大で超重の武器を使うせいで、馬に乗れず、歩兵も近寄れない。近くにいたら仲間でも死ぬ。俺は武将というよりは一兵士で、しかも完全単独じゃなきや使えない独立兵だ。武将なんかやれぬ。

「指示だけ出す指揮官、という手もあるのでは？」

いや風、逆に聞くが、俺が武器持つて突つ込むのと、仲間巻き込まないように指揮だけしてるの、どっちが効率良いよ？

「それは……。」

「まあ、確かにお前が突つ込んだ方が早いかな。」

せやろ。ん、何華琳さん。私は見た事ないわつて、秋蘭から報告いったでしょ？あれは鵜呑みにできるほど現実的な内容じゃない？むう、否定はしないが。ちゃんと戦つたよ、俺。

「華琳様、残念ながら私もこの目で確かに非常識なこの男の戦闘を見ました。もはや冗談であつた方がマシの様な、正しく地獄絵図。賊から見れば悪夢でもここまで酷くない、そんな所業でした。」

おい秋蘭こら、やめろ。それは認めてるけどその話だと俺悪魔よりひどいやつ。あ、苟彥さん、あんた使えないのねつて、そんな事実だけど……まあ、そんな感じだし

て、出来ることを探してやってるんです、はい。

・・・あの、華琳さん、無言が怖いっす。

「・・・生まれ持った才だけで、誰の手も必要とせず、ただ1つの個でありながら、大群を粉碎する。なるほど、風達の言葉の意味がよく分かるわ。正しく貴方は理不尽ね、道玄。」

貴方を将として扱うなら、兵は要らないわね。なんて笑う華琳さん。いや、それは一兵士と何が。兵士が単独で敵に突撃する様な軍は軍じゃない？ぬ、確かに。というか風と真名交換したんすね。え、武将以外全員？おお、凄いな。

「で、そんな貴方がわざわざ街の治安に目をつけた理由は何かしら。私としては政策の手が回らぬ恥部を見られている様で良い気分でもないけど、目を逸らすわけにはいかない。そして貴方は学が無いだけで頭が悪い訳ではないわ。なにを企んでるのかしら？」

・・・いや、何も企んでなんかいないよ。本当に。だからその見透かす目やめて。

「・・・道玄様は、本当に何かを企んでいた訳ではないと思います。いつも、困っている街の人々のところに行ってましたから。たぶん、単純に街を良くしたかっただけではないでしょうか。」

え、風さん何いいだしてんの！それh：何してんの皆さん。え、黙つてろ？いやちよ、それきつと俺の恥ずかしいやつ！

「道玄様はこの街をいい街だと、言つてました。まだまだ手が回つたとは言い難いが、皆曹孟徳の善政の下に、笑顔で働いている。そんな街だからこそ希望を求めて人が来る。それがやがてまた希望を作ると。何より今、子供が笑つていと。だから良い街だ。」
「だからこそ、今この街に理不尽があつてはならぬと。自分だけが利を啜る為に他者に一方的に押し付ける理不尽は、この街に不要。しかし、そういった悪は、影に潜むもの。どこから見ても、建物の中に隠れて仕舞えばわからない。夜の闇では余計に。だから直接誰かが行かねばならぬ。地道で面倒だが、やらねば今笑うあの子が明日には泣いている。それは駄目だ。それだけは駄目だ。この街に相応しくない。そう言つて人々に迷惑をかけるような罪人を見つけては大元を辿り、捕まえて、街の人の安全を守ろうとしてました。」

やめてー！それちよつと大物つばい雰囲気で言つたやつ！ちよつとカツコつけたかつただけの奴！とかいうかいつもそんなに喋らないだろ風!?何なの暴露なの？俺の黒歴史を人前で読み上げる気か！あと良く覚えてんな！

「道玄様はこう言いました。曹孟徳とその臣下は確かに素晴らしい。どんなにたくさん

の民も受け入れるだろう。足りなければ大きくなるうとするだろう。今はその時だ。だからこそ今は足下を見ている余裕がないのだ。だが運が良い、偶然にも俺たちがいるぞ。曹孟徳は運が良い。これも乗りかかった船だ、よし行こう風、ちよつと行つて仕事をしよう風。」

え、それ語り？まさか語りなの？なんで語りに入つてんの!?待つて待つて、お前本当に風なの？てかなんでみんな聴き入つてんの？嘘だろ馬鹿野郎、いつの間にか普通の兵まで居るし！やめて！風さんやめてくださいおねがいします！貴女それキャラじゃないでしょ！

「地道で面倒だし、目立たぬ仕事だが、仕方ないから俺たちがやつてやろう。何、分かりにくいが良い仕事さ。ほら見ろ風、あそこで泣く子供が、今俺たちがちよつと働くだけで、明日には笑っているかもしれないぞ。それはきつと良いことだ。それはきつと素晴らしい事だ。想像して見ろ、今よりもつと素晴らしい街だろう？だから早く、早く片付けよう風、今なら誰より早く、今より良くなつた街が観れるぞ！きつと気持ちが良いぞ！そう言つて道玄様は街に出て民に混じり、街に潜む悪意を見つけては、1つ1つ潰して回つてました。だからきつと「止める、風。」

それ以上は死んでしまいます。恥ずかしさで死ぬ。羞恥心で死ぬ初めての存在になる。違うんや！ちよつと魏ルートの一刀君みたく警備隊的なことしてみよう思つただ

けなんや！ほんであまりに遊び過ぎて風（ふう）にジト目で見られたからちよつと良いこと
言つて誤魔化（ごまか）したら、予想外（ごうがい）に後に引けなくなつただけなんや！だつてたまたま入つた
ボロい酒家（しよか）が人攫（ひとさら）いたちの本拠地（ほんきょち）とか思われないじゃん！地下室（地下室）とかさういうの無しに
いきなり縛（ば）られたちびっ子（こ）いるとは思われないじゃん！だからみんなそんな顔（かほ）で見るな
！ちやうんや、若氣（わかし）の至（いた）りなんや！ちよつと厨（く）二（に）が炸裂（さく）しただけなんや！

「道玄（みちげん）、貴方（あなた）は．．．本当に、」

ダツ！

華琳（かりん）さんにトドメを刺（さ）されそうだったので、最後まで言（い）われる前に逃（に）げた。まさか一
般（いぱん）の兵（へい）まで含（こ）めた衆人環視（しゆじんわんし）の中で、こんな辱（は）めを受（う）けるとは！風（ふう）．．．恐（おそ）ろしい子（こ）！厨
二（に）をバラすとかメンタル弱（よ）ければ引きこもりになるぞ！良い子は用法用量（うぽうりやうりやう）を守（まも）つて
使（つか）つてください！うおおお！俺（おれ）は後（あと）ろを見（み）ないぞ、ジョジョー！

．
．
．

あれから逃げ続けて、今俺は街のとある安宿に来ていた。今日はもう帰らない。絶対にだ！

全く、なんでいきなり凧さんは語り出したのか。明らかに俺を羞恥で殺す算段を立てていたレベル。

しかし、やっぱそこまで情報収集能力に長けた犯罪組織、なんて中々ないか。1週間前あれだけ目立ってた俺と凧を普通に流れ者の悪党、で通ってしまうあたり、残すほど価値のある悪党いないなあ。武力はともかく情報収集能力はあつた方が色々楽になると思うんだが。

1から作るか？無理よな、時間がかかり過ぎる。流石にそろそろ劉備さんたちの方が心配だし、軍務の方に居る雛里が言うには、各地にて黄巾が増えるボチボチ乱が起きるはず。

とりあえずその前には帰らなきやならないから、曹操さんには起案書だけだしておくしかないか。やれやれだ。

やることの多さにゲンナリしながらも、食事のために一階に降りる。ここのモツ煮は辛くて美味しい。酒はなんか失敗した甘酒みたいでゲロマズだが、ご飯は用意してある。辛めのモツ煮とご飯、ありだな！なんて考えながら降りる。ここは良く凧と街のパト

ロール中よく寄つたのだ。夜泊まったことは一度もないけど。

「遅かつたですね、道玄。」

「先に始めておりますぞ、我が主人。」

「道玄様、すいません……。」

なん……だと……？

バカな、くるのが早過ぎる。お前たちにも仕事が！……押し付けて来た？華琳さんに許可もらつた？この場所は風から聞き出した？ぬぬ、しかし、まだ帰つてやらな、え、それはどうでもいいの？聞きたいことがまだある？

な、なにかな？

「道玄が私達や朱里達とも一緒じゃない理由は分かりました。風を連れてく理由もまあ、まだ理解できます。ですが……風の首筋のアザは、どう言う理由ついたのですか？」

何をバカな、目立つところに着けるはずなか……あゝつ

「語るに落ちましたな、主人。やはり風とだけお楽しみだったご様子。……さて、どんな埋め合わせがしてもらえるのでしょうかなあ。」

「……ど・う・げえん？」

しまった鎌かけられた！いかん星と愛紗が殺意の波動に目覚めそうな勢いだ！くつ、

折角最近嫉妬エントを避けていたのにここで再び食らつてしまうのか・・・ッ!?

いや、まだだ！まだ、終わらんよ！

な、何を怒るお前たち。それぞれ似たようなことした覚えあるだろ！愛紗は夜の兵舎裏で、星はこないだの野外演習の時の川で！

そう言うのと、2人は違いにハッ！と睨みあう。勝った！第3部完！よ、よし、俺が何度も同じ失敗を繰り返すと思うなよっ！意識を逸らしてる今のうちに・・・！

「・・・道玄様、どちらへ？今の話の説明がまだですが。」

風に乗まった。な、なにをするダー！?つて、な、風が愛紗みたいなオーラを纏つてる、だと。マズイマズイあ、2人がこつちに気付いた。

「とりあえず、先ずは3人で如何かな愛紗。」

「仕方ないな。今は逃がさない方を優先する。」

「他にも余罪がありそうですね。追求してみましよう。」

そう言つて出口を塞ぐ3人。うん、こりゃ詰んだ！

3人ともせめて明日の朝には帰りたいんだけど・・・あ、駄目ですよ。知つてたー。

この後、滅茶苦茶搾り取られた。

続く？

24話 豚肉の角煮は甘過ぎないのがベスト

やあみんな、不死身系ラスボスが負ける時ってどんな気分が分かる様になってきた本来雑魚のオーク系転生者の俺だよ！

あの後3人に搾り取られたあとまさかのメンバーチェンジが起きて更に倍プツシユされた俺は、キノコ大好きハンターにマンドラゴラ使われるモンスター気分を散々味わいました。でも最終的に五月蠅いと女性陣を一喝し、お開きにしてくれた宿の女将さんが一番の豪傑。きっと昔はバルバレでアイテム売ってたに違いない。

そんな俺強制羞恥事件から、3週間が過ぎた。

いつの間にか義に熱いやつの評価が広まってしまい、一部兵士達に普通に声をかけられる様になった。以前は周りに綺麗所を囲い過ぎて男の敵扱いされ、囲いの中に幼女がいる事で女の敵扱いもされ、凄い倦厭されていた為、非常にありがたいのだが、未だに正義のヒーロー扱いされている為、非常にむず痒いと言うか申し訳ない気分になる。

それと、何故か俺の街中作業を色々な人達が手伝ってくれた。

実を言うと、流石に情報収集能力の低い悪人集団でも、数を潰せば流石に俺と風の特徴は広まる。俺や風は比較的悪党連中に混じりやすい外見だが、それぞれ分かりやすい特徴がある。特に俺にいたってはいかに広い街と言えど、230センチもの身長は中々いない。余裕で浮く。

最初は風に一人で動いてもらったりしていたが、風も顔を覚えられてしまつてからは中々上手くいかず、やむなく当たり前だけつけて人海戦術を取るしかないかと華琳さんに話を持っていくと、何故か華琳さん本人が既に制圧部隊を編成しており、ウチの軍師組も使つて更に細かい調査を済ませていた。準備良過ぎじゃね、と思ひ話を聞いた所、

「確かに今は流民の増加は止まらず、しかし軍の拡張も何もかもやらねばならない事は多いわ。けれど、ここはこの曹孟徳が治める場所。余裕がない、なんて理由で臨時の者だけに全て任せるなんて、我が覇道に掛けてあり得ないわ。」

貴方達が注意を引いてくれたお陰で調査が楽だったわ、なんて不敵に笑う華琳さん。何でも風が俺と風の2人だけでは全て潰す前に行き詰まると、別に調査員を組織することを提案し、稟がさらに俺たちを囮にする事を提案、雛里が制圧部隊の事前編成をするべきと提言し、華琳さんが即決。即時愛紗と星の2人を中心に制圧部隊を編成した。

更にそう言った犯罪者及びに組織の再発を防ぐ為、風に書いてもらった交番などを参考にした警備システム（恋姫2次で良くある一刀君のアレ。パクリ）を元に、荀彧さんと朱里がよりきちんとしたものに精錬し、秋蘭が専用部隊の調練を担当し、俺が華琳さんに協力を要請しに行った時には既に街の各所に駐在所が用意され始めていた。

正直その手際の良さに軽く引いたが、ウチの軍師組が頑張つて必要な処理を通常の仕事と並行して行い、風の語りを聞いて俺たち2人に街の平和を任せてられんと荀彧さんと秋蘭、更には多くの兵士がやる気を天隈突破したからこそその結果だそうである。

「流れ者の貴方が気付いた街の闇と、民の危機。私を含めて皆がそれを恥じたわ。どん

な理由があろうと、この街は私達を守る街。そこに住む人々の安全を私達が蔑ろにしていいわけがないわ。だからこそ自分達こそやらねばならぬと、皆が全力を尽くしたのでしよう。」

貴方と風には感謝しているわ、なんて可愛く笑う華琳さん。実際俺たちが行き詰まったその後、駐在所の用意が終わり、兵が配置された直後に街の犯罪者達を一斉に制圧部隊が強襲し、多くの犯罪者が逮捕され、それぞれ罪の重さで分けられ、強制労働や懲罰部隊へ振り分けられた。更には流民達への雇用対策など、様々な政策も同時に展開され、街の治安は一気に解消。華琳さんは為政者として更にその名声を跳ね上げた。結果的に悪人以外全員万々歳の素晴らしい結末となった。

やつとこさ見つけた仕事が僅か一ヶ月でなくなった俺を除いてな！

なんなの？馬鹿なの？解決されちゃったら俺できることねーよ！せめてその後の警邏隊に配属してよ！お前の働きはもう十分だ、あとは私の部下に任せてくれ、じゃねえよ秋蘭！アホか！

くそう、いずれこの形になるにしてもまさか自分達で出した警備システムなのに、配

属させられないとは思わなかった。警邏の振りして街で遊ぶ予定だったのに！程の良い隠れ蓑にする予定だったのに！両さんの立ち位置になって、遊びながら給料貰える素晴らしい仕事の予定だったのに！

しかもあまり俺のやる事を詮索せず、余り語らない凧を勝手に副官にして好き勝手しようとしたのがバレて、他のみんなの怒りを買って、凧だけは警邏隊の隊長に配属されたし！俺のやろうとしてた事を一番理解してるからって理由だったけど、それなら何故本人を除け者にしちゃうのか。このままでは俺だけプータローである。いや、この世界が恋姫である以上、男より女の方が稼ぎが多いのは当然だし、ヒモも別に珍しい存在ではないのだが、俺のプライドと家長としての威厳にかけてそれは出来ない。関係を持つてしまっても、俺の中で鈴々と流石は未だに娘と妹である。あの2人に養われるくらいなら俺は自ら火口に身を投げる。

故に早急に新しく軍での仕事を見つけねばならない……のだが。

空を見れば雲ひとつない晴天。しかし一度視線を落とせば、目の前に広がるのは一分の隙もなく展開される槍と剣。ズラリと並ぶ丁寧に揃えられた軍靴。一斉に見つめる視線の先には俺。遙か後方の高台で楽しそうに見つめる華琳さんと、その横で誇らしげ

に胸をはる夏侯惇さん。少し離れてこちらも面白そうに見つめるウチの女性陣。夏侯惇さんが叫ぶ。

「さあ、我が夏侯惇隊の精強なる兵達よ！我等が曹孟徳様の御前だ！日々の鍛錬の成果を余す事なく發揮して、その豪傑さをご覧にいれる！相手はたった1人だが、遠慮はいらん！容赦なく叩き潰すがいい！」

ウオオオ!!!

その目を血走らせて叫ぶ兵達。彼らは夏侯惇隊の一部にしてその数500。同時に、俺が囲う女性陣のそれぞれに懸想する独身男性兵だけで構成された部隊。通称嫉妬隊。

そんな彼らに対するは、この俺ただ1人。

やれやれ、と思わずため息をつく。何故こんなことになったのか。

事態は遡ること3時間ほど前、俺が流琉と一緒に調理をし出した時に遡る――・・・。

・
・
・

華琳さんやみんなが想定外に頑張ってしまった俺は、とりあえず日ごとにみんなの仕事場を回り、何が必要か、何が出来るかを探していた俺は、今日は食堂で働く流琉の元に来ていた。

流琉はその聡明さと調理技術などを十分に発揮して、既に兵食の発注から必要人事の全てを管理していて、今日は街の外で大きな野外演習がある為、食堂を部下に任せて演習の為に炊き出しをしようと言うので、それに俺は同行し、一緒に調理をしていた。

するとやがて一時休憩となり、兵食を配る俺と流琉に気付いた鈴々が部隊を放置してやって来て、それに気付いた他の武将組も集まり、大方の配膳も済んだので、部下に任せて珍しく昼を一緒に取ろうと集まって丁度良い木陰に座り、みんなで食事をしていった。

すると演習を視察していた華琳さん達5人と、ウチの軍師組、その護衛として警邏隊の一部を連れた風。更には製作した兵器の様子を見に来た真桜と全員が集まり、折角だからと久しぶりに全員で昼食を取ろうとする俺たちに、華琳さん達も俺と流琉の個別料

理目当てに合流した。

やがて全員が食事を終え、皆で談笑していると、食事が終わり、部隊の再整列が済んだ事を、秋蘭さんと夏侯惇さんの部隊のものが伝えに来た。そして俺を見るなり舌打ちし、何故ここにお前みたいなのが居るのか、などと文句を言い始めた。

ぶつちやけ俺はその時、鈴々と流琉を両膝に乗せててそいつの言葉を完全に聞き流していたのだが、俺の周りの女性陣は聞いていて、全員が怒った。するとその事が一番納得できなかったのか、今度は女性陣に向かって彼は「何故貴女達の様な素晴らしい方がこの様な男とうんぬんかんぬん。」と説得を始めた。その時でさえ膝上の2人に特製デザートであるプリンをあーんして俺は普通に聞いてなかったが、それで腹が立つたらしい彼は、何かの線が切れたのか声を荒げて俺を腰抜け扱いし、更には急に愛紗に向かってプロポーズ。そして俺にお前がふさわしくないと決闘を挑んで来た。その後ろでは秋蘭の部隊の者が彼を全力で止めていたのが印象的だった。なんかあの人マジで刃物通らないんだって！とか聞こえた。

その時になって華琳さんが急に声を上げ、面白い、と笑った。そして彼に1人では無理だ。お前と同じ思いを持つものを今すぐ集めよ、と命令し、俺の方を向いて言った。

「賭けをしましょう道玄。貴方は初めて私と会った時の様な変身は無し、武器の持ち込み禁止。それでいてただ1人で、彼らを殺す事なく制圧して見せなさい。出来なければただ1人を選び、あとはウチに置いていって貰うわ。」

正直俺にメリツト皆無過ぎて乗る理由が全くないが、星がそれくらい我が主人なら楽勝ですな、とこちらを見ながら言った。顔を見るに笑っていたので、からかつてるつもりなのだろう。更に華琳さんが逃げても良いけど、己の女を賭けた戦いを逃げるのかしら？と逃げ道を無くして来た。ウチの女性陣の何人かも何故か乗り気で、俺にやらせようとしてくる。大分めんどくさい。

やがて仲間を集め終えたらしい彼が帰って来て、俺に勝ったら女性陣を自分のものにして良いと華琳さんが宣言し、ウチの賛成した女性陣が、俺に勝ったら考えても良いと保証する。既に俺のことは置き去りである。そしてやる気になる彼ら嫉妬隊。何故か全員夏侯惇隊だったので、後々聞いて見ると、俺の戦闘を一度も見たことない隊は、夏侯惇隊しかなく、その中でも俺の戦闘を信じない程度には傲慢な連中らしい。

しかし夏侯惇は、嫌いな俺を排除するかのような華琳さんの提案と、それに乗る人間が全て自分の隊のものだったことに気を良くして、嬉々としてこれでお前も終わりだ、と

俺に宣言し、部下を激励した。

流石に腹が立つてきたが、華琳さんが変身は無しだと言った筈よ、と釘を刺し、ウチの賛成組も似た様な事を言つて煽る。完全に楽しんでた。賛成しなかつた鈴々と流琉、風や愛紗が、俺の怒りを悟つてみんなを諫めようとするが、俺が止める。

曹操、殺さなければ文句はないな？

俺がそう言つと、先の条件を抑えていれば文句はないと言う。そうか、なら夏侯惇、先に謝つておく。

「ほう、なんだ？負け惜しみか！」

今日の前にいるお前の兵、全員使えなくなるから新しい兵の訓練頑張つてくれ。

そういうといきり立つ夏侯惇と兵達。どうでもいいので、シカトして曹操へ顔を向ける。賭けによる俺の対価がまだだったな。

「勝てば好きに望みを言いなさい。」

そうか。ではいつてくる。とつとと始めよう。

・・・そうして、今この現状な訳だが。

集まる連中は口々に俺の女の誰かの名前を叫び、俺のものだと宣言する。思わず頭を触って見るが、角はない。別に変身するつもりはないが、未だにコントロールが上手くいかない時があるから、念のためだ。うっかり変身してしまつて、反則負けは面倒だからな。

開始の銅鑼がなつて、一斉に兵達が襲いかかつてきた。

ガギイン！

そして弾かれる、すべての刃。しかし他の兵から聞いていたのだろう。休む事なく波状攻撃をしかけ、俺の行動を抑えつつ、俺を封殺するつもりのようなのだ。

俺は静かに、しかし盛大に気を練り、同時に息を吸い始める。

気。

いつか風に教わり始め、何とか自分のもの出来ないか、とこの世界で初めて俺が

行った武に関する事だった。

初めは闘気硬化があるので余裕だと思っていたが、そんなことは全然なかった。つか、闘気硬化は闘気、とつくものの、実際のところ単なるパンプアップだったのだ。道理でこれを行ったラージャンの足の肉質が落ちる訳である。要するに念能力で言うところの硬みみたいに、一点集中しているようなものなのだろう。気の習得は困難だった。

しかも風のように外部に放出するような才能は無く、俺のかめはめ波や気円斬、舞空術は夢と消えた。

しかし幸運にも、俺は内部で気を扱う才能があった。内部で気を高めれば身体能力は高まり、俺の高い身体能力は更に高まった。ラージャンの毛皮が無くなった代わりにハルクの銃弾を弾く皮膚が余計に強化されたのか、俺の体は元々風のように全身を気で覆って防御する必要はない。内部を強化すれば如何なるものもその身に通さないこの体は気の内部操作とすこぶる相性が良かった。

やがて気を内部で圧縮しながら循環させる方法を身につけた。すると更に俺の身体能力は高まり、更には内臓など身体機能の強化まで可能になった。

つまり俺は、より化け物に進化したのだ。

やがて疲れた兵が、一瞬波状攻撃の手を緩めた。その瞬間に気を圧縮して強化した肺に、更に気を使って圧縮した膨大な量の空気。それをこの世界で初めて本気で込めた殺意とともに、一気に吐き出した！

ーーーグルオオオオオオオツツ！！

まるで爆発したかのような轟音と衝撃波が周囲の兵を一斉に吹き飛ばす。一斉に吹き飛び、しかし軽傷ではないが重傷と言うほどでもないはずの彼らは、しかし誰一人として動かない。それは、今俺が放ったバインドボイスで鼓膜が破裂したり、恐怖で動かなくなった直撃した連中以外も同じだった。バインドボイスの効果範囲の外にいる者どころか、遙か後ろで見ていた参加してない他の兵達さえ凍りつく。時が止まったように演習場が静まり返る。

当たり前だ。今、俺は全力の殺意を込めて、この場に立っている。

俺の本性は怪物を超えた怪物を更に怪物と掛け合わせて生まれた、本来人間と相入れる筈のない、途方も無い巨怪獣である。

それを無理矢理圧縮し、人の形にしているだけだ。普段は面倒だし、おれを害せる存在がいないから、こんな本当の殺意を向けるような、「威嚇」の必要など無い。だから使わない。だが。

それが俺の大切なものを奪おうとするものなら、容赦などない。

「曹孟徳との約定故に、命を奪うことこそしないが。

———。精々呪え、俺の前に立ったことを。」

明確な殺意を持って、俺の拳は大地を爆砕した。

・
・
・

まあ、それで終わったんだけどね！

あの後、気を全力で圧縮、強化された俺の一撃は、人間状態にも関わらず極限ラー ज्या

ン2体分の力を發揮し、大地を粉碎した。

かの世界なら極限ラージャンがぶん殴っても、大岩を引きずり出してもすぐ元に戻るほどの頑強さを持つ大地だが、恋姫世界ではやや脆かったらしい。巨大な1枚岩を真ん中から砕いたみたいに地面は陥没、隆起し、俺の濃厚な殺意もあつて一瞬で全ての兵が恐慌を起こして逃げ出した。

俺は一応全員気絶くらいはさせないと制圧したことになるかと思ひ、追いかけてうとしたが、すかさずその瞬間銅鑼が鳴り響いて華琳さんが俺の勝利を告げ、終了を宣言した。

ちなみに、今は華琳さんが逃げ出した兵と共に夏侯惇さんを叱っている。いわく、兵を鼓舞するのはいいが、増長は良くない。絶対に勝てない相手を貴女が見極めなくてどうするの！とかそんな感じだ。分かっていたが、どうも華琳さんが俺を褒めるから、嫉妬で中々俺を認められない夏侯惇さんと、同じく俺の強さを知らないその部下の不満を丸ごと片付けるための芝居だったみたいだ。俺が負けた時の補填を一切考えてない辺りが非常に彼女らしい。

で、俺の前では、俺の怒りで項垂れる賛成組の姿が。さて、俺の言いたい事、分かるかお前ら。

「はわわ、じ、実はこれには理由が」

黙れ朱里。言い訳はきかん。というか理由はだいたい分かる。俺の為だろ。

そう言うのと驚く賛成組。何故って、いや分かるわ。どんだけお前らと一緒にいると思ってるんだ。あの様子だとあいつら、俺の前でこそ初めてだが、お前達には初めてじゃないだろアレ。というか、結構な数やっていた筈だ。俺が必要以上に目立ちたがらないことを知ってるお前達が、わざわざ俺の実力を見させるために、俺が嫌がると分かきつてて自分を餌にするくらいだからな。

たぶん、純粹に俺が舐められてるのを払拭したかったんだろ？ ついでにちよつとだけ俺をやきもきさせたかったとか、その辺だろ。

すると荀彧さんや秋蘭さん、季衣ちゃんまでもが驚いた顔をした。この様子を見ると、どうも夏侯惇さん以外にもグルっぽいな。道理で荀彧さんはともかく、秋蘭や季衣ちゃんがあの時兵を諫めない筈だ。俺が女性陣の物扱いを嫌がると知ってて、それで実際に大変な目にあつた2人が、華琳さんの発言でも何も言わないからおかしいとは思っていたが、思つた以上に茶番だつたな。

「それはどういう意味だ、道玄！ 星達はお前のことを思つて私達に頭を下げてまでこれを頼んできたんだぞ！ それを」

だからそれが茶番だ、秋蘭。わざわざ俺に黙つて周囲を巻き込んで、こんなことしな

くても、俺に直接言えばよかったんだ。そうすれば力の証明なんぞいくらでもしてやれる。例えば、

「俺一人でこの街全てを壊滅させる、とかな。」

幾ら何でも全軍俺一人に滅されれば馬鹿にした連中も文句などあるまい。そう言うのと凍りつく秋蘭達。何か勘違いしてるようだから言っておくが、俺は一度愛した女の為に結構何でもやるぞ。それが昨日まで仲間だった奴でも、必要があれば殺すことに躊躇いはない。奪おうとするなら例え帝でも縊り殺す。その程度には独占欲が強くてね。もつとも、今回程度の事でそこまでやる必要は感じないが。

「道玄、今のは不敬罪になるわよ。」

後ろから華琳さんが言った。どうやら一旦説教をやめたらしい。俺の帝を殺す、という発言のせいだろう。しかし知ったことか。俺はただの蛮族だ。たまたまこの国の女を愛しているだけで、この国の帝を崇めた事はない。文句があるなら好きにすればいいが、手を出すならば容赦はしない。帝だろうが神だろうが、その国ごと更地にしてやる。

・・・試して見るか？

そう言って笑ってみる。するとその場の全員が息を呑んだ。しかし華琳さんだけ直ぐに溜息つくと、やめておくれ、と言って苦笑いする。懸命だと俺も笑って返した。周囲はまるで笑わなかったが。

まあ、そんなわけで、もうちよい信じてくれないか、お前達。不安にさせたり色々不満もあるだろうが、少なくとも俺は、この国全体と天秤にかけてもお前等を選ぶくらいには愛しているよ?・・・ちよつと毎夜全員相手にするのは手加減して欲しいが。

そう言う全員が飛び込んできた。ちなみに星が一番だった。なんだかんだこいつが一番俺至上主義だからな。今回もたぶん主犯だろうし、いつだって俺の周りの女に俺が一番だと自慢して、理解させる為に媚薬とか使ってまで俺を体験させたがる。人が増えて結局嫉妬してるのは何かアホだなとは思うけど。ある意味それも俺の為なんだろう。心配してるのは俺だ。正直愛を試されるのは好きじゃないが、まあ・・・多めにみよう。

なお、みんなが飛び込んできた瞬間に、一気に周りの視線がキツくなった。早くも爆発しろと言わんばかりである。だが残念、城くらいの大きさのタル爆弾でも俺は死なん

ぞ、たぶん。せっかくだし、見せ付けておこう。そう考え、俺と戦った嫉妬隊を見る。すると全員が一気に腰が引けて、視線を逸らした。叩き込んだ恐怖が正常に働いているな。よしよし。これでもう俺の前では役に立たないだろう。正直あの後死なない程度に痛めつけるつもりだったから、早く終わりすぎて焦ったんだよね！いやあ、夏侯惇さんにあれだけ啖呵切ったから、きちんと心を折らないとね！

だから傷口に更に塩を塗り込むぜ！精神攻撃なら容赦も手加減も特に縛りを設定されてないしな！

なので容赦なく嫉妬隊の連中の前で、俺の女全員と一人一人、見せつけるようにディーブなキスをする。あ、最愛の妻を間男に寝取られた夫みたいな顔になって全員膝が砕けた。もうちょっと見せ付けてやろうかと思っただが、さっきの発言と相まって何人か目が潤み始めてる流石におっ始めるのはマズいのでこの辺にしとこう。あれ、どした沙和。え、お前も？この軍に好みの奴いない？とりあえずナンパウザい？あ、そう…。流石についてで駆逐される沙和ファンは可哀想だが、まあ仕方ないので沙和ともキスをした。沙和が鍛えた兵は嫉妬隊以外にもいたようで、そいつ等まで膝が砕けたように崩れ落ちた。えっと、流石になんか申し訳ない。すまん、一応沙和は俺の女じゃないので

頑張れと心の中だけで祈っておく。

さて、予想外に長くなつてしまつたし、そろそろ帰ろうか、流琉。夕食の準備しなければ。そう言つて帰ろうとしたが、華琳さんから待つたが掛かる。なんぞ？賭けの賞品？あー。じゃあとりあえず貸しで。今特に欲しいもんじゃないし、こつちの方が華琳さん嫌だろうしね。元々の発端はウチの女性陣だが、俺が許すと踏んだ上であえてあんな言い方して俺を試したんだ、ちよつとくらい嫌がらせを受けろ。

そう言うと、あら、分かつてたのね、なんてクスクス笑う華琳さん。わからいでか。どうせ俺がどれだけ皆を理解しているかとかその辺を知りたかつたんだろ。その具合によつては離間計か、もしくは、将を射んと欲すればまず馬を射よ、つてところかな。誰か残れば俺も残るか、少なくとも俺と敵対はしないもんな。流石によく見てるよ、未来の霸王様は。

「そこまで私を理解している貴方も、やはり流石ね。ますます欲しいわ。」

今なら私の他に4人が付いてくるわよ、なんて言い出す華琳さん。荀彧さんと夏侯惇さんが絶望的な顔をし、季衣ちゃんは不思議そうで、秋蘭はこつちを見てニヤリと笑い、

目だけでお望みなら構わんぞと言ってくる。当然それをキャッチした女性陣が俺にキツく巻き付くの見越したイタズラだ。相変わらずタチが悪い。

肩を竦めて鼻で笑って返してやる。これ以上増えられてたまるか。物理的に時間と精力が足りなくなるわ。

そう言つて今度こそ踵を返し、流琉を連れて歩き出す。が、みんな付いてきた。華琳さん達もだ。いや、仕事しろよ。え、もう今日は無理？誰かさんが盛大に演習場を破壊したから？あー。一撃も耐えられない地面が悪いよきつと。

そう言つて後片付けを兵に任せ、俺たちは城へと戻るのだった。

・・・なお。余談になるが、

その日の夜、いつもより燃え上がる女性陣にいつも通り絞られていたら、華琳さんの罰で涙目の夏侯惇さんが俺たちの部屋にやってきた。全裸で。すったもんだの末丁重にお帰りいただき、彼女の体の代わりに真名を預かったのだった。

続く？

25話 デカイビーフステーキは硬めの方が素敵。

やあみんな、いつだって厨二の後に後悔するオーク系転生者の俺だよ！

精々呪え、俺の前に立った事を。

ぐああああ！やあーめえろおおおお！！

さて、前回ちよつとカツコつけたら瀕死になつて俺だよ！なんかいつの間にか俺の厨二が一部の兵達と鈴々と季衣ちゃんの間で大流行りした。たまにこの国を壊滅させてやろう、とかもやっててちよつと正直死にそうです。しかも彼らには悪意はなく、まるでヒーローに憧れる少年のような瞳で楽しそうに真似している。非常に怒りにくいし、止められない。うう、みんなもう止めようよ……。

とりあえずその辺の事は見なかった事にして、今日の俺は非番なので、同じく非番な

風と流琉を連れて、街に買い出しに来ている。地味にそろそろ冬も終わりだろうから、旅立ちの為の食材や、日用品その他諸々を仕入れよう、という事だった。

2人を連れて来たのは、もちろん非番な事もあるが、彼女らがこういう時かなり心強い存在だからだ。風は全般的な交渉に、流琉は食材に限らず全ての品物の目利きができる。本音も言えば稟も居た方がいいが、彼女は今日非番ではないので諦めた。はわわとあわわはいつの間にか変な本買ったたりするので、元から連れて来る気は無い。

「兄様、仕入れる食材はいつも通り、野菜、果物を 中心に、肉は鶏肉と豚肉を多め、で大丈夫ですか？」

そだな。あ、でも肉は安いのが中心でいいや。確か豚肉が高くなつて来てるって話だし。冬に移動した商団が途中の村に卸すつてまとめ買いしていったとか肉屋のじっさまがこないだ言つてた。ああ、それと乾麺があつたら少し仕入れて欲しいかな。残りは任せた。好きなもん買つてくれ。

分かりました！と元気よく駆けていく流琉。彼女が向かう先は最近完成した大規模集合販売店・・・まあ要するにスーパーだ。ウチには鈴々が居るので、大量に食材が必要だ。だから1店舗だけだとその店の食材全部買つても足りない。なので手分けして

買いに行く必要があり、目利きは出来ても交渉が一切出来ない俺には風が付いてくれる。流琉は一人で出来ちやうので一人だ。治安が最近良くなったので、気にせず行かせてやれる。俺だけなんか保護者がいるようでどっちが大人か分からないが、気にしない事にする。

ちなみに、先ほど上げたスーパードが、わかると思うが、あれを提案したのは俺である。とはいえ、出来たのは非常に偶然と偶然が重なったというか風が吹けば桶屋が儲かるというか、まあまぐれだ。一応説明するが、まぐれだ。

そもそもな話、街に流民が増え過ぎて、人口に対して就業率が下がる・・・つまり雇用が足りなくなってしまうのがはじまりだ。華琳さんや軍師組が公道整備などを行い、一時的に雇用を増やしているが、どうしても回らないところはあるし、元々流民が他の領主達の圧政に苦しみ逃げた者達や、賊に村を焼かれて行き場を無くした者達がほとんどだったのも問題だった。

前者はまだ働き手が残っている場合が多いが、後者は母と娘二人だけとか生活力的にかなり厳しいところもある。貧富の差、なんてレベルどころか街に居ながら普通に冬を越せなくてもおかしくない。冬に移民して来たものにもかかわらず、である。

流石にそれでは街に死体になりに来たようなものだ。意味が無いし、手間が増えるだ

けだ。なのでその辺何とかしないと悲惨な事になりそうだったので、せつかく犯罪者掃除して開いた建物や土地がたくさんあるし、公共の事業をこちらで主導して増やし、やがては民営化を促すにしても、その他一連の流れで雇用も増えて経済の発展も出来るし、いんでない？ 軍師組の手伝いした時に提案したんだが。

まあ普通に荀彧さんに却下された。

理由は金。後人材不足。世知辛いが無いとどうにもならないやつだった。俺が提案した事業やシステムは、どこも軍師組の修正が必要ではあったが、確かに効果はありそうだと荀彧さんでさえ褒めてくれたが、いかんせんそう言った事業を起こすにも金はかかるし、なまじこの時代では最新のため、ノウハウを知って任せられる人間もまだ居ない。

軍師組なら誰でも担当できたらうが、軍師組の誰か使うということは、その分その他に滞りができるという事でもある。やらねばならないことがそれだけでない以上、軍師組の誰かを置くわけにもいかず、例え置いて行つたとしても利益として帰つて来るのは大分後の話だ。今に間に合う筈もない。

この場所に腰を落ち着けてやるならやがては何とかなるが、そのつもりはないし、言つては何だがそこまでの責任感も愛着もない。つーかまず俺に完全な内政チートは無理だ。よくあるファンタジーの農業知識チートとかもちゃんとは出来ないしな。て

なわけで幅広くやるのは諦めた。一応荀彧さんが案を補完して保管して置き、可能になれば順次試行してみると言っていたので、無駄ではないと思う。

そんな風に失敗なんかしてたところだ。この時、軍の一部兵達と俺は仲良くなっていた。少し前に嫉妬隊と喧嘩して、大部分の兵からイツクレイジー！な扱いをされていた俺だが、街の治安問題が解決したあたりから俺を軽いヒーロー扱いしていた者達は余計にフレンドリーになっていて、俺も彼らとはたまに武将組の付き合いで訓練に参加したりした後一緒に飯を食ったりしていたのだ。

やがてそれが発展し、非番の日に飲みに行く様になるまでかなり早かったと思う。実はこの時、メインに出来る仕事のない俺は、ウチの女性陣の部署を回りながらも、常識と基礎知識は21世紀のものだった為に、結構改善点を見つけたり新システムも提案したりして、なんちゃってアドバイザー的な状態だった俺は、華琳さんの許可のもと、新しい発見と発想の為という名目で、割と好き勝手やっていた。

そのせいで街の様々な人間や軍関係者とかかなり顔が広くなり、俺がどこかに行けば必ず誰かと遭遇するような事態になっていた。それが誰かを連れて歩くようになれば、更に人の輪は広がっていく。やがて流民の夫を亡くした母子家庭（治安対策時子供と仲良くなり、ついで親とも仲良くなるアレ。残念ながら風邪の監視付きの為、そこからの発展はほぼ無し）とかにまで輪が広がった時、結構な数のキューピッド的な事をやるように

もなった。見た目獅子目言彦が恋仲をとりもつとか冗談であつて欲しかったが、ガチである。

そこでこう考えた。アレ、そういや軍つて独身多くね？と。

先にも触れたが、流民の中には女性しか居ない家庭も多く、そうでなくても情勢が不安定な中、希望を求めて曹孟徳の納めるこの街にきた者達である。当然安心と安全を求めていたし、そう言った時に恋人という存在は結構な安定剤になりうる。逆にそれはいつ死ぬかもしれない軍人も一緒であつた。恋人や家族という存在は、その場所を守ろうとする意欲や、向上心にも繋がり、兵達からすれば帰る場所というものがあることもとても重要なことだつた。

その為、仲良くなつた兵達を中心に警邏隊の炊き出しを大規模に参加させ、合コンとまでしっかりしたものでないが、独身兵と女性が交流できる場を用意してみた。さつくり言つて、結果は大成功だつた。

まあ言つては何だが社会的にも将来的にも不安を抱える女性達だ、いつ死ぬかも分からないが一応軍人という安定した仕事に就く男たちはそこそこの優良物件だつたし、曹孟徳の下で厳しく規律と共に鍛えられた兵達は質実剛健で実直なものも多い。安心できる存在に見えたのだろう。

そんなこんなで既婚者が急増した軍部で、問題が起きた。住居である。まあ新婚者に

兵宿舎に住めというのも可哀想だし、潰した犯罪組織の建物や土地を使って仮設集合住宅を提案し、それぐらいならと認可もおりた。急ぎ彼らに住処を用意するためと、雇用のために多くの人夫を雇い、人海戦術で高速で建てられた仮設集合住宅には早速使われ、様々な問題を持ちながらも好評だった。

転機が訪れたのは仮設集合住宅に集まる人間目当ての移動商団が街に訪れてからだ。彼らにとつて新規の家庭は結構な鉢脈であり、次々訪れる彼らは元々賑やかな街を更に賑やかにした。

するとまた問題が起きた。商人が集まりすぎたのだ。増える流民とはつまり需要であり、今も増えているわけなので、冬の間にも関わらず商人が集まった。やがて販売するスペースがなくなり、街に売りにきた商人が立往生するという停滞が起きた。

しかし街はその間にも発展する為、急遽華琳さんや荀彧さん、俺と軍師組でそれを解消するための方策を考えていた時、ふっと俺の脳にアイデアが降りてきた。

個別にスペースの用意が無理ならまとめちゃえばいいじゃん。

元々冬の間でも精力的に活動する商人は、よほどやる気があるものでない限り、余裕がなくて小さい個人の行商が殆どだった。それはつまり扱う品物に一定の傾向と云うか、食料なら食料、布や染物、武器に防具、など、だいたい似たようなものを取り扱っ

ていたという事だった。

待機中の商人達に、大量に増設を始めた仮設集合住宅の1つを各階毎に区切りをなくしたワンホールフロアにしてもらい、階層毎に取り扱う商品で分類し、そこで好きに店をさせる。いってしまえばバザーだが、1つの建物に全部揃えることで、商人達の競合が起こり、安くなって貧しい人たちも買いやすくなった。

するとやがてそう言った建物を街の大商人に売り付けて、大商人は中で店を開きたい行商人から幾ばくかの使用料をとり、行商人達は個別にお客を取る、お客は好きなものを買う。もはやスーパーと言うかシステムのにはデパートだが、これが非常によくハマって一気に評判になり、街にスーパーが受け入れられていった。

…説明してみても何だが、場当たり的に対処してたら結果的にみたいな形でスーパーができてしまっているな、これ。カッコ付けてワシが作った！とは口が裂けても言えねえ。とゆうか長いな出来るまで。

そんな事を考えながら、風と二人で買い物をする。こちらは疎らに存在する昔ながら

の肉屋とか八百屋を巡り、出来る限り食材を買い集める。これだけ広い街だと、個人経営でもそれぞれ数店舗あるので、買い占めない程度にそれぞれ大量に購入する。卵があればそれもだ。いやあ、穏やかでいい日だなあ。

「ところで最近朝帰りが増えたおにいさん、わざと触れ合いを減らしている模様です。が。補填の方はどうお考えで？」

ギツクウ!

な、何のこともかな風、俺は兵のみんなとのコミュニケーションをだね、優先・・・あ、やつぱり駄目? えつ、もうみんな気付いてる? 兵士達からも尋問と情報収集完了済み! え、えつと、俺明日からまた仕事だからさ、・・・仕事もう3日先まで終わってる? 臨時休暇華琳さんに申請受理された? いや、もうこれ4回目だぞ、許し過ぎでしょ華琳さんや・・・。

くそう、せっかく男友達が出来たから、友達付き合いなら仕方ないよね、の体で毎日の子作り回避していたんだがなあ。みんなこの調子ならすぐ孕んでしまう・・・。どう

にかせんと、外出しとかそろそろ認めてくれないだろうか。いや、何をやっても愛紗が突破出来ない。そして愛紗だけと言うのは他のみんなが許さない。ぬぬ、近藤さんがあればいや、俺のサイズは流石に無理か。自分で言うのも何だがガチで馬みたいだしな。ゴムの近藤さんさえキツそうなのに何だかんだ平気なウチの女性陣マジエロゲキャラ。

楽しい楽しい非番の日が一瞬で憂鬱になってきた。ん、何だ風？この後のもてなし具合では私と流琉は手加減する？・・・さて、お嬢様、行きたいところは御座いますか？無ければ僭越ながら私のスペシャルデートコースが御座いますが。コースの満足度？それはもう皆様大好評で・・・ハッ！

「なるほどー、既にたくさんの人が経験なされたんですねー。一体誰なんでしょうねー？・・・果たしてそれは私達の誰か、何でしょうか？」

え、笑顔だけど雰囲気がるで笑ってない！畜生嵌められた！ここはどうか誤魔化して、あれ、流琉いつの間に・・・？私も詳しく話を聞きたい？はは、何を急につてあれ、風、なぜ君もここに？え、警邏隊の隊員からタレコミ？馬鹿な、アイツまさかハッ！

「休日には終了ですね。」

「予定を前倒しです。」

「兄様、逃げようとか駄目ですからね。」

ま、まて違うんだ！本当に軽く一緒に歩いただけだ！熱心に頼まれたからちよつと買い物付き合っただけで、本当に何も無いんだ！えつ、二人きりな時点で駄目？・・・は、判定厳しくない？

この後の滅茶滅茶尋問された。

・
・
・

そんな目にあつたんだが、どう思う？明らかに狙つてた人よ。

「あら、浮気した貴方が悪いのよ？それに私は日々頑張つてくれている貴方達に、お礼として休暇を与えただけよ。」

堪能したでしょ？と笑う華琳。まず浮気なんかしてねえよ。単に愛紗達のためのデートコースを探してただけで。ふざけて宿に入ろうとしたのはその性悪だ。珍し

く協力してくれるといったかと思えばこれだ。最悪のタイミングで告げ口までしやがって。何だ俺から誘ったって。間違つてないけど間違つてる！俺はちゃんと断つたよ！

「お前が悪いぞ道玄。あんなに素晴らしい思いをさせておいて、最後の最後で女に恥をかかせるから。当然の報いだな。」

言葉だけなら最低なやり方で袖にされた女性なんだがな、そのニヤケ面隠す努力してから言え秋蘭。そう言うとな彼女は笑つて隠す気ないから仕方ないな、なんて言った。やるじゃない秋蘭、と褒める華琳。二人が顔を見合わせてまた笑つた。こいつら・・・！

あのもはやおきまりのパターンになつてきた休日を終えた次の日の夜。俺は華琳に話があると時間を貰おうとしたら、この時間に部屋に來いと呼び出され、来てみればバスローブ擬き（俺考案。城には風呂が普通にあったので真桜に作ってもらつたら、ウチの女性陣を通して広がつた。）を着た秋蘭と華琳さんが待つていた。じんわり水滴が付いている事から風呂上がりなのだろう。そして何故か酒とツマミが用意してあつた。

色々な思惑は取り敢えず無視して、言われるままに席について酒を飲み、世間話をしていたがそろそろ話を進めようか。なあ、華琳。

「聞きたくないわ。」

「野暮だぞ道玄。」

あほ、魂胆は分かるが、前々から言つてた事だろ。それにすまんがもう用意も完了した。みんなが引き継ぎを済ませたら、ここを発つ。今日はケジメを兼ねて、それを伝えなかつたんだ。長くても今月末までだ。

「・・・本当に残るつもりは無いのね？」

無い。この数ヶ月、此処にいて決意した。少なくとも今は、俺は劉玄德の元へ戻らねばならん。

「そんなにも素晴らしい人物なのか？お前がそこまでするとは・・・。」

さて、未だウチの連中と文を交わしているが、どうか。期待はしているが、もし誰かに仕えるとなつても個人的に言えばあいつより曹孟徳の方が肌にあつてはいるな。

ならば何故、と問う秋蘭を手で制して、こちらを見つめる華琳。

「この際だから聞いておきましょう。道玄、貴方何を見ているの？」

嘘や誤魔かしは許さないわ、そう言つて彼女は射抜く様な瞳で俺の目を見る。初めてあつた時と同じ目だ。如何な恐怖にも屈しない、強固な覇者たる精神を宿す瞳。特典が

なければ俺など目の前にいる事さえ出来ないだろう。

・・・分かつているだろう？直（じき）に世が荒れる。曹孟徳、お前の様な者達が立つ、国と全ての民を巻き込む大きな時代のうねりさ。後の世にきつと乱世と呼ばれるだろう。

きつと本来ならば、化け物たる俺は、人々が作る時代の流れに混じつてはいけないだろう。だが、それでも。俺の愛する世界は人の世にある。故にその果てが何処であろうと、何があるうと、俺は俺の愛する世界を守り抜く。俺の縄張りに手を出すならば、全て撃滅する。その為に、必要な事をしなければならぬだけさ。

そう言つて華琳を見る。彼女は答えになつてないわ、と呆れた様に言つた。当たり前だ、今はまだ答える気はない。だけどまあ、どうなるかは分からないが、またここにも戻つてくるさ。ひよつとしたらその時こそお前に仕えるかもしれないぞ？まあその時までに理想の主人が見つかつてたら分からんけど。そう言つて笑つてみる。2人も笑うが、直後に顔を引き締めて、言つた。

「それは嬉しいけれど、少し曖昧過ぎるわ。一度手元を離れるのは諦めるけど、今のうちに完全に私を主人としてくれないと。」

「華琳様の仰る通りだ。万が一お前が敵に回るのは厄介どころの話ではないし……何より、私自身としても何処かに行かれるのは気に食わない。」

そう言つて2人は立ち上がる。パサリと、バスローブ擬きが落ちて、いつの間にか水滴が乾き、2人の美しい裸身が露わになった。思わず美しい、と声が漏れた。2人が妖艶に微笑む。

俺は座つたまま体勢を崩さない。2人が俺に近付いて、触れる。華琳が耳元で、虜にしてあげると囁く。秋蘭が俺の手を掴んで、自分の胸まで持つていく。愛紗達と肌を重ねる前なら、この感触だけで虜にされていたらうな、なんて考える。秋蘭は何時も俺をからかう時の様な目で、しかし決定的に違う情愛を宿した目で見つめる。

首筋に華琳の舌が這う直前で、溜息ついて俺は言つた。

……窓の隙間と、部屋の扉の隙間から、死にそうになつてゐる2人が可哀想だ。その辺にしてやれ。

その言葉と同時に扉と窓から物音が聞こえた。はっ、と驚く2人。動きが止まつて、その瞬間扉から苟彘さんが、窓から春蘭が、出てきた。恐らく話は聞いて、しかし男嫌いの2人は手伝えないから、せめて邪魔しない様に命令されていたんだろうなあ……。やれやれだ。

華琳さんや秋蘭が凄いジト目で2人を見る。2人とも凄いバツが悪そうな顔をして、何時も俺の前で威張りちらす時とは別人の様に肩を竦ませ縮こまっている。案の定華琳さんと秋蘭が2人を怒り始めた。

2人も感情はどうあれ、命令に背いた事は悔やんでいるのだろう。シユンとして大人しく説教されている。とはいえ、少し声が大きいな。このままでは誰か来かねん。

俺はあられもない姿のまま説教を続ける2人にバスローブを掛けなおし、取り敢えず宥めてから扉を閉める。ほら、取り敢えず一旦座れよ。話はそれからだろ？

・
・
・

「いつから気付いていた？」

席について仕切り直し、さあ話し合い続行という所で春蘭から問われる。最初からだ馬鹿。俺の鼻と耳の良さはお前も知ってたんだろ。荀彧さんに至っては気配もダダ漏れだ。そこらの人間ならともかく俺に気付くなって方が無理だぞ。食堂みたいに人でごった返してない限り。

・・・もつとも華琳さんや秋蘭は緊張して気付かなかったみたいだな。

「・・・それも分かるのね。」

不貞腐れたように呟く華琳さん。珍しい表情なのでちよつと面白い。秋蘭もバレていた事を少しだけ悔しそうにしている。分かるよ、あんな慣れてる感じ出してたけど、男との経験はないだろ2人とも。処女拗らせてた頃の趙雲みたいだったもん。無理して身体張つてんのバレバレ。

そう言うのと2人とも悔しそうな顔をする。まあ、分かっても手を出しそうになるくらい綺麗だったぞ、と一応フォロ。何故か春蘭と荀彧さんが誇らしげだ。だからこそ、どうせなら下心抜きにして欲しかったがね。

「それなら本気で虜にされたかも知れん。」

そう言うて笑つてやる。まあ実際それくらい綺麗だった。春蘭が混じつてたらヤバかったな多分。まあでもそんな理由で手を出したら俺の未来は誠ボーイになる。nice boatされる。

とはいえ、秋蘭の身体は何度か見ていて良かった。耐性ついてないと誘惑は外せなかつた。いつもいつもからかう為だけに風呂場に乱入して来てくれてありがとう。毎度毎度お前のおかげでみんなに搾り取られて大変だったが、ようやく意欲返してきた

よ。

「しまった、こんな形で過去の自分に足を引つ張られとは……！」

悔しそうな秋蘭。ウカカカ、ざまあ！毎度毎度身体を張った誘惑を兼ねたイタズラだったが、おかげで効果靨面だったよ馬鹿野郎！何日寝台に縛り付けられたと思つてんだ！

「ほう、それは私だけでは満足出来なかつたと、そういう事かしら……？」

凄くない機嫌そう華琳さん。いやあ綺麗だったよ？ただ誘惑というなら何時だかどつかのだれかさんが送り込んで来た春蘭の方が強烈だったな。涙目で可愛かつたし。

なっ！忘れろお！と詰め寄る春蘭を片手であしらつて華琳さんとはある部分を見比べる。視線に気付いた華琳さんが何時の間にか握つてた大鎌を振るうが、空いた片手で掴んで受け止め、奪い取つて床に深く刺しておく。危ないからね。あ、さつきよりも悔しそうだ。わろた。

まあとにかく、次こんな事をするなら、つまらん思惑抜きで頼むよ。確かに俺は肌を重ねた女には殊更甘いから、俺を手に入れるならやり方は間違つてないと俺も思うけど。だけどそれでも、抱くなら下心抜きで俺を想ってくれる女がいい……というか、そういう女に俺はクソ弱い。ウチの女達みたいにな。

そう言って立ち上がる。華琳さんの邪魔をしたことを喜んだり反省したりでさつきからしよんぼりしてる苟彥さんにはべっこう飴をあげて、未だ騒がしい春蘭の頭を撫でる。そして最後に惚けた顔の2人を見て、まだ直ぐにお別れではないので、気まずさ回避のためにおやすみとだけ言って部屋を出た。やれやれだぜ。

はあ、と溜め息をついて部屋に戻ろうとして、その前に声をかけておく。

だから言つたら？俺はそう軽い男じゃないんだよ。文句ないな、愛紗。そういうと、彼女は物陰から顔を出した。やはり俺が彼女達の身体に絆されないか心配で様子を見るに聞いていたらしい。

バツが悪そうな顔で抱きついて来て、いかにも不承不承な感じに、許してあげます、なんていった。小さな声で貴方は私のものです、と聞こえたが、聞こえなかったフリでもしておこう。

俺は愛紗の頭を撫でて、ゆっくり歩いて2人で部屋に戻る。

そしてちよつとだけ勿体無かつたな、なんて悔やみつつ、みんなと同じ部屋で眠りにつく。さあ、明日も頑張つて、出発できるように仕事終わらせないと。

・・・そんないい感じで終わつたと思つたら、翌日の朝には全裸の秋蘭が俺の上で寝ていた。起きたみんなにブチ切られる俺を見て笑つていたので、リベンジなのだろう多分。口の周りについた白い液体は見なかった事にした。小さい声でこれで文句はあ
るまい、なんて言つたのも、もちろん聞かなかつた事にした。

くそつ、卑怯だぞ。可愛すぎだ馬鹿。

続く？

26話 君が望む焼きイカ

やあみんな、秋蘭相手に起きなかつたことでみんなにそれから毎日搾り取られた性奴隷オーク系転生者の俺だよ！

「久しぶりなのだー!!」

「やっとなつたのー!!」

あれから陳留をたつた俺達は、一カ月をかけてようやく劉備さんと一刀君のいる村に再びやって来た。元々村にしては広い所だったが、今は其処彼処に人がいる。おそらく手紙にあつた劉備さん達が集めた義勇軍だろう。沙和が久しぶりの徒歩の旅（曹操軍では武將は大体馬に乗る。）でめっちゃ疲れているが、理由はそれだけでもないので、グレープフルーツ味（陳留に何故か売つた。理由は不明。）のスポーツドリンク風飲み物を渡して労つてやる。軍師組は体力が無いのに加えて、春先でまだ若干寒いので、普段は歩いている稟を含めて俺の背中の大寸胴鍋の中である。結構な広さがあるが、流石に

4人ではやや狭い。途中で1人ずつ運動を兼ねて歩かせていたが、村に近くなったら面倒なので俺が全員運んで歩いた。

ちなみに、陳留を出る時は大変だった。仲良くなつた兵達は、仕事があるので事前に挨拶をしてそれで済んだが、出発の日、早朝に発つから見送りは要らぬと言つたが、華琳を筆頭に夏侯姉妹や季衣ちゃん荀彧さんと勢揃いだった。

鈴々と流琉は季衣ちゃんとそれぞれニユアンスが違うものの、また会おうぜ！的なお別れをしていたものの、俺達、というか俺が大変だった。

荀彧さんが最後の最後で若干デレて、ま、また来なさいよ！と言ってくれて、ちよつと懐かない野良猫が初めて膝の上に乗った様な感動を覚えた俺は、思わずたくさんのべっこう飴をプレゼントした。するとそれを羨ましがる季衣ちゃん。当然季衣ちゃんにも大量にプレゼント。すると残りの3人もプレゼントを要求して来たが、べっこう飴を切らしてしまった。その上で飴などの菓子でない方が良いと言う華琳さん。後ろでえっ！みたいな顔してる春蘭は放置の方向みたいだ。

んな事言われてもそんな都合の良い物はあるまい。仕方なく俺の毛(変身後の長い金髪。めつっちゃ頑丈。)を編んで作ったミサंगा(基本切れないので、ミサंगाとして

は失格)をあげた。なかなか抜けないし切れないから御守り?としてみんなの分まで作ってたのだが、全員分揃えるまでみんなにもあげてない激レアアイテムである。多分闘魂か本気のどっちかプラス5くらいする。髪飾りと合わせればきつと挑戦者とか発動する。ただしスロットも無ければ防御力も高くないネタアイテムだ。

「・・・道玄?」

私の分も当然有りますよね?今の愛紗のはそういう意味だ。あんまり完全変身してない筈なのに、なんであれが俺の髪だつて分かるんですかねえ・・・。ああ目敏く星と雛里が愛紗を見て察しやがった。一気に全員からの催促になる。すまん、全員分ないから、出来たら渡すから勘弁。あつ!秋蘭ダメエ!これ見よがしに愛紗達より先についてにやにやすんな!華琳、お前も愛を感じるわ、とかワザとだろ!?!少しは春蘭みたいに、:いや春蘭、それチョーカーじゃないから足首か手首に巻きな?苦しいって当たり前だからね。何俺お前に首輪プレゼントする男だと思われてんの?嘘だろ?つーかなら付けんよ・・・!

案の定、性急な製作を要求された。さらに今日の夜は覚悟して下さいね、と愛紗が腕にキツく絡みつく。反対側は珍しく風だ。その後ろで出遅れた星が悔しそうにしてる。あ、鈴々と流琉が両肩にライドオンした。鈴々はともかく流琉は珍しい、あ、流琉分かった。分かったから無言で耳引つ張るのやめて。すぐ作ります。と言うか君にはそのリボンプレゼントしたやん。え、手作りは別物？ええー。

昨日は出来なかつたので今日はこの分含めてしつかり追及します、と風。君本当遠慮なくなつたよね。それはいいけど夜は手加減；、駄目かあ。真桜、今からでもええでつてコラ！脱がそうとするな！朱里、稟、賛同すんな出発出来なくなるだろ！

いつも通り過ぎる俺達。クスクス笑つてた華琳達がとうとう声を上げて笑つた。ぬう。こやつめ。まあ、可愛いから許したる。じゃあそろそろ行くわ。ほれ、ちびっ子共、最初は歩けよー。ん、なに秋蘭。耳を貸せ？なんぞ？

彼女に耳を貸すには体を曲げねばならない。ググツと曲げて彼女の顔に自分の顔を寄せる。両手を俺の頭に添える秋蘭、耳元に口を寄せてきて、囁く。

「次は逃さないぞ? 覚悟しておけ。」

言葉の意味を理解するより早く唇を奪われる。ああっ!と周りで悲鳴が上がるが、気にせずそのまま舌が侵入してくる。抵抗したいが、肩から背中に移動した2人がいる。余り激しくは動けない。ちよつと動きも緊張してる感じするし、仕方ないのでこつちから軽く答えてあげよう。フツフツフツ、秋蘭よ、お茶目のつもりかもしれないが毎晩のようによられてる俺の技術が、女同士しか経験してないお主に負けると思ってたか!!

「?!~~~~ツ!!」

たつぷり時間をかけて腰砕けになるまでやってやった。今の俺はビツチ先生に教わった渚くんくらいはテクがあるのさ! 最初はしてやったりって顔してたみたいだが、今はちよつと涙目だ。ふ、勝った。あ、勝利の余韻に浸りたいので、愛紗さん、責めるのは後でお願いします。え、それよりも上書きが先? あ、ちよ、

結局愛紗の後全員としました。沙和、お前は並ばんでも……。流れに乗ってみた? ああそう……。つーか秋蘭二度目ってお前。え、負けた気分? 負けたやろしつかりと。あと華琳さん、貴女は混じらせないぞ。ズルい? 後ろの2人を説得してからで頼む。全員すればとか言うな。さつき折角デレた荀彧さんがもうこちらを殺す目になっちゃった

だろ。

そんな感じでグダグダな出発になった。出発して華琳さん達が見えなくなったら即刻制裁、否性裁が待っていた。いつかの真桜考案のアレをやらされた。周りに人が居なくて本当に良かった。

しかしそれからが大変だった。華琳さんが治める土地から離れるほど頭に黄色い布を巻いた連中が其処彼処にいて、テントを張る前に襲ってくればいいのだが、テントを張って、やり始めた頃に襲って来ると、どうしても中断する。俺が必ず察知するので、誰かの体を賊に見られる様な事は無かったが、さすがに毎度毎度邪魔されるとするどころではない。移動中に数人ずつ真桜考案のアレで処理はしてるが、どうしても処理できる人数に限りがあるし、移動優先の為、1人付き一回が限度である。普段最低五回はして女性陣に足りるはずもない。あまり関係ない沙和と鈴々さえ不満が溜まっているのだ、愛紗達の不満の溜まり方は尋常ではない。

原因たる賊をわざわざ探す事はしないが、出てきた瞬間口上さえ聞かずにこちらから襲い掛かる。地味に今まで完全にしない日が続いた事はあっても、一回だけ、という日

が続いた事は無かった。どうも逆に不満が溜まってしまふみたいなので、移動中にするのは止めようかと提案してみたが、それはそれで嫌だそうだ。その辺りは彼女達次第なので、大人しく従う他ない。多分毎度襲い掛かってくる者達は黄巾つてだけで、そこまですぐ関係はない筈だが、ウチの女性陣に今逆らうのは無理だ。賊の皆さんのご冥福を祈るしか無かった。

そんなフラストレーションの溜まる旅になってしまったので、劉備さんの村に近づくと、ほど皆の移動速度が上がった。途中で何度も軍師組を俺が乗せたくらいだから、みんなの急ぎ具合を察してほしい。

そんな感じでようやく着いたのだが、肝心の劉備さん達に会う直前で問題が起きた。なんか2人の家（村で一番大きな屋敷。拠点代わり）に入ろうとしたら門番が居て、挨拶にと説明したがそんな話は聞いていないの一点張りで拒否される。ならばと名前を出して確認してくれと頼んでも拒否される。どうも女子供（超がつく綺麗どころ）をたくさん引き連れた蛮族たる俺が気に入らないらしい。何時もなら仕方ない、となる皆が、溜まった不満の所為で俺への侮辱を受け流せなくなっている。これはヤバイ。

仕方ないので挨拶を後回しにして、先に前回借りた貸家を借りようと諦めて踵を返し

た時だった。

「羌毅さんっ!？」

ちようど一刀君が外から帰ってきた。久しぶりと挨拶し、何故こんなところに、と聞かれたので、門番の彼等が入れてくれなかったと説明する。一瞬で青い顔になる門番達。一刀君も見た目で判断するなど怒っている。星が必要ですか、と龍牙を構えかけたので頭を叩いて辞めさせる。流石にやり過ぎだ。もう少しの辛抱なので、我慢しろと言い、渋々従う皆。ああ、これ後で宥めるの俺なんだよなあ。

とりあえず彼等もやり過ぎだが、職務を全うしようと張り切り過ぎただけだと軽く取り成して、まず劉備さんに挨拶させてくれ、と頼む。一刀君が直接案内してくれるので着いていく。それにしても一刀君や、きちんと鍛えてたんだね。偉いぞ、見違える様じゃないか。

「やっぱり分かりますか!自分で強くなったと思ってたんですよ!」

嬉しそうに力瘤を作る一刀君。実際体は一回り大きくなっているし、両手はマメだらけで、手にした槍は新しくなっているので、前に渡した訓練用が使い潰されるくらい訓

練に励んでいるのだろう。見事である。俺には絶対無理だ。

星や愛紗が面白そうにまた稽古をつけてやる、と言った。どれだけ強くなったか楽しみなのだろう。一刀君もよろしくお願いします！と元気に言った。流石原作主人公、爽やかである。

「それである、美毅さん、其方の方達は・・・？」

そういや自己紹介まだだったので、互いに自己紹介してもらおう。一刀君はウチの新規女性陣の名前を聞くたび驚いていた。なお、その際に沙和に耳打ちしてみる。どうだ？意外と好み？そかそか。

あのルックスに厳しい沙和がオーケーするレベル。流石一刀君、イケメンである。とうとう三羽鳥が別つ時かとも思うと何だか感慨深い。うむうむ、頑張れ一刀君！

俺の迷惑を一切知らない一刀君は不思議そうな顔をしてたが、女性陣はちよつと微妙な顔をしていた。何だ？ん、なに星？そんなに上手くいけば良いが？う、うーん。原作主人公だしイケルイケル！

「皆さんお久しぶりです！お待ちしました！」

・・・お、おう。久しぶり？劉備さん、ですよね？

当たり前じゃないですか、やだなあもう。そんな感じにお淑やかに笑う劉備さん。・・・誰だこいつ。

思わず一刀君を見る。目だけで会話する。なんか変なもん食ったのかアレ？いやいや、気持ちはわかりますが。頑張ったんですよ桃香も。そうは言っても見た目と声以外別人だぞ。いや、アレで意外と桃香は桃香ですよ。

「もうっ！ご主人様も羌毅さんも失礼だよ！本人の前で！陰口なら聞こえない様によってよ！」

あ、本当に劉備さんだ。つかあれ？声に出てたか。ついうっかり。

一刀君と2人でテヘッてやっちゃまったなーと笑いあう。劉備さんめんごめんご。それにしても上手い猫被りだったな！良いぞ良いぞ！てつきり、やつほーみんな！久しぶりー！って頭悪そうな感じに迎えられるのかと。

「き、羌毅さんが私をどういう風に見てたかよく分かります・・・。」

ご主人様あー、と一刀君に泣き付く劉備さん。良かった良かった。成長はしてるけど

本質は変わってないね。ベルダンデーみたいな女神になったかと思つたけど、まだまだティアーユ先生になれそうとかその辺だわ。雰囲気だけだけど。

なんか呆気にとられてる新規組み。まあ元々の劉備さん知らなきやいきなりダメになつたカリスマだからな。仕方ない仕方ない。とりあえず皆、もっかい自己紹介しようか。

そして全員が終わつたところで、一刀君に情報を集めているか聞いてみる。そかそか、商人から集めてるか。朱里、風、2人に手紙で黄巾の連中の動向は教えてたんだよな? うん、なら良し。じゃあ2人とも、俺たちが帰つてきた理由は分かるよな?

「大きな乱が近い・・・ですよね?」

「兵は集まつてきてます。訓練はまだまだ足りませんけど。」

よか。じゃあ明日から俺らも加わろうか。

まあでもすまん、とりあえず明日からでいいか? 前借りたところ借りれたら借りたいんだが。何故つて? 劉備さん、よくウチの女性陣見てみ。一刀君、君は分かるだろ?

「な、なるほど。理由は分かりませんが、何が起きてるかは分かりました・・・。」

「だ、大丈夫です! 朱里ちゃんから手紙で先に家を抑える様頼まれてあつたから、もう今

からでも入れるよ！ハイこれ鍵！」

頑張つて下さい、そう憐れみを込めた目で一刀君が俺を激励する。すまん、多分下手したら明日も無理かも。見られたら見たやつが危険だから、近寄らない様に厳命してくれ。

分かりました。こっちは気にしないで下さい！そういう劉備さんは、ちよつと苦笑い気味だが、女性陣に楽しんでねつて手を振る。心を込めてお礼を返す皆。ハハッ、それ俺のこと考えてないやつ。

仕方がない、一刀君、マジ近付けないでね。ここに来るまで賊に散々やられてメツチャ気が立つてるから。下手したら兵がいなくなるよ。

「厳命します。絶対に近寄らせません！」

ありがとう。・・・無事また会えたら、酒でも飲もう。良い酒があるんだ。羌毅さんと涙目の一刀君と別れを交わす。

「道玄、良いから早く行きますよ。」

「我が主人、これ以上は酷と言うものでしょう。」

「はわわ、早くいくでしゅ！」

ああ、待て心の準備がまだ、あ、あああー！

・・・この後滅茶苦茶ハツスルさせられた。
俺が解放されたのは5日後だった。

続く？

27話 あなたが愛した舌平目のムニエル

やあみんな、あの後一刀君と義兄弟の盃を交わしたどう見ても兄弟ではないオーク系転生者の俺だよ！

ワイワイ、ガヤガヤ。

目の前には人、人、人。あちこちに立てられた牙門旗と、多種多様な天幕。そして目標が小さく見えるくらいに離れたところには黄色い人々。規律に厳しかろうがそうでなからうが、兵士もこれだけ居るなら雑多な町並みと変わらないくらい騒がしい、そう思った。

まあ、そんなわけでサクツと時間飛ばして黄中の乱イベント決着戦ですよ。どうも歌勝負とか意味不明な展開はなさそうで一安心です。たくさんの牙門旗の中には公孫瓚さんや曹操さんのところもあります。あれから8ヶ月ほどしか経ってませんが、何だ

か懐かしい気もします。

とはいえ、我々は着いたばかりなので、曹操さんよりも先に挨拶しなければならぬ人が居るらしく、劉備さんと一刀君は其方に軍師組を連れて歩いていきました。

あれから実に時間が早く過ぎたと思います。まあちよつと色々あつて腎虚になりかけたなりして大変でしたが、結果として女性陣が多少は控える事を覚えてくれたので本当に、本当に良かった!!

思わず喜びがまろびでるくらい本当にありがとう良かったと思う。それに合わせて、割とうろ覚えな性知識を元に把握した生理周期から、彼女達の危険日を割り出し、何とかその辺を避ける事を了承してもらい、今のところは何とかなっている。正直うろ覚えだったし、俺（人外）の精子が人間と同じ様に死ぬかも分からなかったが、結果は問題無いのでよしとしよう。そもそもが人外なので人と交わるかも分からないのだが、その事をうっかり漏らしたら星が試みましょうとかほざいて態々危険日を狙ってきたので、それからは誰にも言っていない。星はちよつと彼女の進み過ぎた変態欲求を満たす事で、とりあえずしばらくは見逃してもらおう事になった。

その後は、義勇軍を武将組で鍛えて、軍師組が色々整備したり整理したりと大変だったが、何とか形になった。なお、今回も小規模だが、俺が女を侍らざうことに不満たらた

らの奴らが居たが、面倒なので村の外れにある良くないものを封印してるとか曰く付きの巨大岩を目の前で軽く粉砕したら、何も言わなくなりました。

まあその後に出てきた曹操さんの城くらいあるでかい亀（多羅須玖とかいうらしい。村の文献にはそんな記述があつたとかないとか。角の生えたデカイワニガメみたいな感じ。）を素手で殴り殺したからかもしれないが。亜竜の一瞬とか言つてたので、角とか牙とかだけ採取して、あとは普通に肉とかは食べた。毒があるとかで毒袋の処理は大変だつたが、毒の効かない俺が完全変身して一気飲みして（何故か可食量が超増える。グルメモンスター並）終わり、甲羅は頑強なのだが、固過ぎて加工できないとの事だったので全部四次元袋に押し込んで置いた。

ともあれそんな感じで兵との結束を高めたりしながら、やがて各地の賊退治の為村を出て、劉備さんの知り合いとかいう公孫瓚の下へ。公孫瓚という方は非常に面白い方で、出会いがしらに「うわっデカっ！何だこいつ！」と言われた。あまりのストレートっぷりに俺は一瞬で気に入ったが、割と常識人らしく、俺がたくさんの女性を囲つて居た為、最初はあまり仲良くはなれなかつた。まあ女性陣の監視のせいもあったけど。

というか、すっかり忘れてたが、本来ならこの頃この人の下には星が居たはずで、俺が取ってしまった分非常に苦労していた。領地にいる賊も結構野放しなくらいに。何

か申し訳なかったので、いつもは義勇軍の経験の為に部隊を率いる女性陣に賊退治を任せていたのだが、今回ばかりは俺も出陣し、さっくり周辺の賊を壊滅させてやった。

さすがに数が多く、地味に異民族の被害もあつた為、手分けして行つたのだが、武将組にはそれぞれ軍師組や劉備さんや一刀君が付いたが、俺は地形とかさっぱりなので面倒くさがつて公孫瓚さんについて行つた。女性陣の説得に2日掛かつて、出陣が遅れたのは余談である。

その際に何回か公孫瓚さん窮地（賊と異民族に挟まれたり、山で落石だつたり）を助けていたら、真名を預かる事になり、なんだかんだ仲良くなつた。まあなんか私は軽い女じゃないぞ！とその辺の警戒を解く気はない！みたいな事を言われたけれど、やることなす事いちいち男らし過ぎて俺も完全に男友達的に扱つたので特に問題は無かつた。

強いていうなら一度山で異民族と戦闘中に大雨に降られて、転んで川に落ちた白蓮さんが兵と逸れるという事件が起きた際に、さっくり助けてずぶ濡れの服と冷えた体を乾かす為に服を脱がし、軽く看病したりしてたのだが、色々一切気にせず作業したため、白蓮さんがやたら落ち込んだくらいだろうか。襲われたい訳ではないけど、全く動じられないのも腹立つ！と言われたが、あえて上から下までガン見してから鼻で笑つてやつ

た。ついでに普通だなんて言ったら剣を叩きつけられたが、案の定剣の方が折れて超悔しがってた。以来なんか2人で酒飲んだ時とか偶にどうだ?とかお色気の術的行為をしてきたが、毎回駄目出しを細かくしてあげている。それでもメゲないあたり、タフな根性をしている。

そんな白蓮の下から一部兵を吸収したりして、独立したのが少し前。劉備さんの軍は2000程になっていた。とはいえ、元々ただの村人が多いので、ウチの女性陣が鍛えて実践を積んでも、まだまだ曹操さんのところなどと比べたら質は劣る。まあ武将の質と量で圧倒しているので、そこまで酷い差は無いと思う。数は何処にでも惨敗だが。

「おとーさん、お腹減ったのだー!」

「沙和もごはん食べたいのー。」

いつの間にか鈴々と沙和が来ていた。お腹すいた、とは言うものの、今はちようど兵

達が食事の準備をしている時間である。劉備さんのところでは、流琉を鈴々のサポートに付けているため、糧食は普通の軍とそこまで差はない。その為美味しくないから逃げて来たのだろう。

流琉本人が鈴々を心配して言い出したので鈴々に付けているが、その分の被害は結構甚大だ。不満を減らす為に俺たちだけの時以外流琉は部隊でも料理はしない。だから白蓮のところに行った時みたいに物理的に離れてない限りは、舌の肥えてしまったウチの女性陣は無理矢理俺の元に集まって食事をとろうとするようになってしまった。まあ流琉も俺がいる時だけはちゃんと作ってくれるからな。兄様の為ならって言ってくれる俺の妹超かわいい。

とはいえ、昼食時だけとはいえ、部下を放置して将が来てしまうのはちよつといただけない。真面目な愛紗や稟や凧さえも来てしまうので、一度叱ろうかと思つたのだが、そもそも劉備さんと一刀君が普通に来てしまうので話にならない。いつの間にか兵達の間で、昼食時は武將会議の扱いになってしまったので、最近諦めている。いや、まさか君らと同じメシが食いたくないだけ、なんで説明できんし。まあ、一般的な糧食だが、基本的には俺と流琉で改良してある。他よりはだいぶ味が良いので我慢して貰おう。

なお、沙和だが、一刀君のお付きにしようとしたのだが、残念ながら出戻りした。俺が一時期腎虚になりかけたのは、彼女がガチで参加し始め、周りがそれに触発されてしまったからでもあるのだ。

まあ簡単に理由を述べると、一刀君に非常に申し訳ないのだが、率直に言つてサイズである。実は沙和は、前は未使用だが、みんなとこれだけ同じく後ろは既に俺で開通済みだった。前が未使用なら大丈夫、それが俺と沙和の共通見解だったのだが・・・。

とある日に、劉備さんを言葉巧みに誘導し、酒の力を借りてあっさり一刀君と交わることに成功した沙和だが、それから数回して後ろでと一刀君に頼んだらしい。どうも散々後ろで経験したので、後ろの方が好きになってしまったとのことだが、後の事を考えると、単に前に慣れてなかっただけである。

とにかく一刀君と後ろでやり、しかし俺で慣れてしまったせいも物足りない。それが2月ほど続いた時だった。白蓮の元に着く直前の野営の夜、その日は愛紗と凧と真桜の3人（とうとう人数制限ありのローテーションが採用された！やったね！）でいつも通りしていたのだが、珍しく沙和が来たので、一時中断しようとしたらそのままパンダイブで飛びかかって来た。何事か理解出来なかつたので止めようとしたら、3人に相手してやれと言われて何が何だか分からないまま相手をして、沙和の求めるまま前にも入

れた。するとまあ乱れること乱れること。

やがて、起き出して来た皆（人数制限ありでローテーションが決まっても、何故かテントは同じである。正直寝れないと思うが理由は不明。）が、沙和を見て然もありませんと苦笑い。やはりこうなったかと口々にいう皆。

「二度我が主人の剛槍を受けてしまったら、他で満足できる筈がありましたよや。」

とは星の弁だが、正直俺しか知らないくせになんだこいつやり手みたいなさ言い出したぞ、と考えていた俺はあまり信用してなかったのだが、どうやら正しかったらしい。沙和本人が半泣きで愚痴っていた。俺としては人外の俺にサイズや精力で勝てたらそれこそ化け物なので、それは仕方ないと思うのだが、とにかく申し訳ないので、一刀君には菓子折り持って謝りにいった。

一刀君は軽く落ち込んでいたが、結局笑って許してくれて、さらには、お互いその手の技術も共有しましょう、と言った。俺もその辺は割と手探りだったので快諾、結果的に更に仲良くなった。原因たる沙和は他のみんなと違い、下手に比較対象を得たせいか一時期これまでが嘘の様に張り切っていて、他の皆が嫉妬して、夜以外にも各所で求めて来たくらいである。

白蓮の部隊について無理矢理離れるまでの間、約1ヶ月……あの時は正直地獄であつ

た。まあそのせいで腎虚になりかけたりしたが、結果的に今が楽になっている。悪い事だけ、良い事だけ、どちらか一方だけという事はないのだな、と思った。

閑話休題。

あれから少しして、結局軍師組以外全員集まってきたので、仕方ないので俺たち専用の天幕（諸事情によりどこよりも離れている）に行つて食事を作ることにした。最近本当に料理が上手くなった風、もはやプロ級の流琉と3人でやればすぐ終わるだろう。だから決して鈴々に甘いわけじゃない。毎度毎度鈴々がおとーさんと一緒に食べる！と言うから用意しているとかそんな事はない。

あ、2人と、なんか増えそうなので多めに作ろう。多分増える。四次元袋に大寸胴鍋鍋の半分サイズあつたよな、こないだ作ったやつ。あれならたぶん50人前くらいいけるよな？鈴々が2人いても30人前くらいだし、これならなんとかなるだろ。ん？なんだ流琉。そうそう、勘だがたぶん季衣ちゃんもくるよ。来なきや夜も食べれば良か

ろ。じゃあ風、多めに研いで置いた米、袋から釜ごと出しとくから火にかけてくれ。流琉、鍋頼んだ。俺はこないだ大量に取った鮎と岩魚を串に刺して塩焼きにする。

そう言つて少し遅いが昼食の準備に取り掛かる俺たち。武将組には、俺と流琉特製のチマキを渡して繋ぎにしてみらい、天幕内の掃除と整理を頼んだ。天幕自体は少し大きいだけで周りのものと一緒なので、設置は兵がしてくれるが、主に俺のせいで贅沢に慣れた俺たちは中身も変えるので、内部だけは自分達でやるのだ。

そうして用意を始めてから1時間。あえて時間を遅らせて焼き上げた魚も焼き上がり、鍋とコメも準備完了だ。量が量なので多少時間は掛かったが、他の兵達も同じくらいに終わったみたいなので、ちょうど良いくらいだろう。そう考えていたら、少し離れたところから軍師組の匂いと気配がする。案の定劉備さんや一刀君、さらに華琳さんたちまで一緒の様だ。さらに知らない匂いもあるが、まあ足りるだろ。良いタイミングだ。

しばらくして、劉備さんが手を振りながらこちらに声を上げる。華琳さんや秋蘭が笑っている。あれ、白蓮もいるなあ、とおもったら、その横をなんか劉備さんじゃない桃色走り抜けた。遠目でわかるくらいの良いオツパイさんである。あ、さつき感じた

知らない匂いの人だ、そんな感じにブーツと見てたら、なんか鬼気迫る顔で剣を持ったのが見えた。なんだ？ 後ろになんかいるのかな。そう思っただけを振り向く。何もいねえよ？

ガキイン！

顔を戻した瞬間斬りかかられた。え、俺なの？ マジかよ。まあ効かないから良いけどさ。斬った本人は弾かれると思わなかったのだろう、鬼気迫るその顔を、苦虫を噛んだ様に歪め、しかしそのままさらに切り掛かってきた。あ、曹操さんたちも走ってくる。「雪蓮ツツ!!何をしてるんだっ！」

あ、さらに知らない匂いの人だ、と思つたら、見たことのある感じっていうか周瑜さんだ。前世で俺が一番好きだったキャラだ。ていうかじゃあこれ孫策さんか。どうりで良いオツパイなわけである。良かった、孫策さんが居るなら今更だけど真の方だろう。安心した。

「貴様つ、何のつもりだ！」

あ、愛紗が正気に戻って乱入してきた。その後次々と残りのみんなも乱入してくる。それどころか夏侯姉妹や季衣ちゃんも入ってきた。まあみんな落ち着けよ。あ、何か怒

りで話聞いてねえ。いかななこれは。

あ、周瑜さんが孫策さんらしき人を取り押さえた。何をしている！って怒鳴っている。白蓮も周瑜さんと一緒に抑えに入った。そのすぐ側にお怒りの曹操さん。そして事態についていけない劉備さんと一刀君。ちよつと和む。とはいえ、俺もよく分かってないけど。

「離して冥琳っ！こいつヤバいわっ！ここで殺さなきゃ！」

おっと、初対面でヤバい扱いされましたー！まあ実際剣弾してるから否定はできんなつ！なんて俺は面白いけど、どうやら皆さんがキレまくりである。効いてないから気にするなよー。あ、白蓮と周瑜さんを振り解いた。皆が一斉に構えたので、それより先に前へ出て制す。皆はそれで止まったが孫策さんは止まらない。ガンガン切りつけてくる。

このままかどうかの全員が孫策さんを殺しかねないので、執拗に斬りかかる孫策さんの武器、南海ナンチャラを素手で掴む。孫策さんと周瑜さんが同時に驚愕するが、気にせずそのまま折らない様に優しく奪い取って遠くへ投げ捨て、片手で首を正面から掴んで、そのまま地面に引き倒す。傷つけない様に優しくだ。そして、軽くだけ喉を圧迫し、口が空いた瞬間特大べっこう飴を放り込む。これなら飲み込めないだろ。・・・さて、落

ち着けよ虎娘。

暫くフシャー！つて感じだったが、やがてべっこう飴の甘さと、地面の冷たさを感じるくらいには落ち着いてきたらしい。あ、周瑜さんが華琳さんと白蓮に武器を突きつけられて動きを止められた。劉備さんと一刀君は未だに理解できてないみたいだが、軍師組が追いついた頃、孫策さんはやつと沈静化し、寝たまま力を抜いて両手を上げた。まあ、もう良かろう。あつさり手を放してやったが、孫策さんもみんなも動かない。すると、

「さて、どういう事が説明してもらおうわよ、孫伯符。」

周瑜さんに武器を突きつけたまま、華琳さんがそう言つて孫策さんを睨んだ。

ちなみに未だに劉備さんと一刀君はオロオロしてた。ウケる。

・
・
・

要約すると、本能がコイツはヤバいつて言つてた！気が付いたら身体が動いてた！そんな感じらしい。思わず笑つた俺は悪くない。

「道玄、お前なに笑つてんだ！状況分かつてるのか？」

お前殺されかけたんだぞ！」

白蓮がそう怒つてきた。皆も後に続く。愛紗や星は今にも縛られた孫策さんを殺すそうである。周瑜さんが何か言い訳したが、流石に今の理由では無理なのかすぐに諦めて頂垂れた。孫策さんも言い訳はしないわ、好きにしないわ、とか言つてる。その後ろには冷たい目で華琳さん達が武器を構えている。まあ落ち着けみんな。ほら、笑つて笑つてー。あれ、劉備さんも珍しく顔固いよ？どうした。

「羌毅さん……。すいません、私が孫策さんを連れてきたから……！」

ああ、そんなことか。別に良くね？気にすんなよ。ほら皆も。せつかくの飯が冷めるぞ。華琳さん達と白蓮も、食いにきたんだろ？そちの黒髪美人と虎娘も腹減つてないか。量多めにしたから足りるぞ、たぶん。

「なっ!?!まさか、不問にするというのか!?!……馬鹿な、私達が言うのもなんだが、首を

斬られてもおかしくない事だぞ?」

なんか驚く周瑜さん。いや別に完全に不問にはしないから安心しろ。ぶつちやけ不問でも構わないんだが、不問にしたらうちのがブチ切れちゃうから、少しだけ我慢してな?」

あ、ああ、と頷く周瑜さん。理解できてないみたいだが、とりあえず殺されないとしつつホツとしたらしい。うむうむ、美人が悲しそうな顔は良くないよね。ホラ、虎娘解いてやるから大人しくしてろよ。あん? 何故殺さないのか? むしろ殺されたいのかお前? 違うんならいいだろ別に。ん、なに華琳さん。

「道玄、貴方がいいと言うなら止めないけれど、こういった芽は早めに摘んでおくべきだと思うわよ?」

そう言う華琳さん。劉備さんは止めたいみたいだが、実際俺に被害がいったので言いたくても言えないようだ。いや、そんなに言うならやつてもいいけど、後悔しても知らんよ華琳。

「・・・それは、どういう意味かしら?」

どういう意味も何も。これ、お前の大好きな英傑つてやつだぞ。その桃娘と並んで、いつかはお前さんと覇を争うことになるかもしれない器だ。まあ今のうちに摘みつきやその方が楽だとは思いますが、そんな楽したい奴だっけ、お前さん。

・・・あれ、何みんな驚いてんの？なんか久しぶりだなこの空気。え、何一刀君。何故わかるか？いやだって凄いぞこいつ。なんとたつて俺に向かつてきた。

え、意味が分からないって荀彧さん。いやまあ荀彧さんは武人じゃないから仕方ないか。簡単に言えば、こいつ華琳でさえ初見じや見抜けなかった俺の力量を、本能だけで見抜いたんだぞ。本能的に動く鈴々や春蘭さえ出来なかつたぞそんなこと。俺が力を隠しているのにもかかわらずだ。さらには、勝てないと分かつた上で喧嘩を売つてきた。大したクソ度胸だ。

まあ喧嘩売つてきたのはどつちかというと、破れかぶれみたいだが、逃げないだけ大したものだ。今一経験不足みたいで、見極めが下手だが、それさえ積みれば誰もが軽くは見れん存在になるよ、きつと。

「へえ・・・貴方がそこまで言うなら確かなのね。なら、こんな形で決着は確かに勿体無いわ。」

貴方の言う通りにしましょう、と華琳さん。うむ、良かった良かった。ほら皆も、いいじゃないか誰も怪我してないんだから。ほら、いつまで驚いてんだ虎娘。黒髪美人も

！いい加減にしないと乳も、あ、いやなんでもないです愛紗さん。俺愛紗さんのおっぱい大好きです、ハイ。

・
・
・

そんなこんなで漸く遅めの昼食が終わりました。

あれだけぷりぷりしてた皆も、ご飯食べたなら笑顔になります。結構多めに作った料理も、予想通り季衣ちゃんと鈴々が半分以上をくらいい、残りをちようどみんなで綺麗に食べきりました。周瑜さんと孫策さんも最初は固かったが、途中から素直に舌鼓を打つようになり、サービスで出したお酒で一気に砕け、自己紹介するくらい打ち解けました。「本っ当ツツ！に、うちの馬鹿が申し訳ない！この上なく感謝している！助けてくれてありがとう！」

「なによおー、もう散々謝ったしいいじゃない。それよりお酒お代わりない？」

雪蓮お前つてやつはー！と怒る周瑜さん。まあ俺以外じゃ流石に殺されるから反省しろよ、孫策。あん？俺以外じゃ最初の一撃で死んでる？まあ確かに。あれ、どしたの

一刀君。え、本当に刃物通らないんですねってあれ、見たの初めてだっけか。そーよー。ドン引きの一刀君。失礼な、ラカンさんだって同じだし気にすんなよ。まあ俺もラカンさんはチートだと思っうけど。

あ、ところで朱里、風。こないだ会った華佗のやつの方、把握するように言った筈だが、きちんと把握済み？流石！じゃあこの戦い終わったら会いに行くから、馬で誰か連絡させといてくれ。

「華佗？確か最近有名な医者だったか？どうしたんだ、道玄。誰か怪我でもしたのか？」お前が何かあるとは思ってないが、そう言う秋蘭。なんだそれツンデレなのか？まあいいや、俺じゃねえよ。おい孫策、周瑜さん、さっきの罰の話だ。聞け。

「なによ、言っとくけどお金は無いわよ。身体で払えつてんなら、それでも良いわよ？」雪蓮、なんでお前はそう強気なんだ。すまない、羌毅殿。如何なる要求も出来る限り応えよう。ただ、こんなんでも大事な主君なんだ、命だけはどうか勘弁して貰えないか。」
「こんなんつてなによー！と怒る孫策だが、今んとこ事実なのでみんな白い目である。まあ安心しろ、さっきも言ったが命なんか要らん。しかしそうだな、じゃあ孫策の言う通りに身体で払ってもらおう。ただし周公瑾、お前だ。この戦いの後しばらくついてきてもらおうか。」

「・・・はっ？わ、私か!？」

そうだけど何かつて痛い痛い、こら止めるお前ら、髪引つ張るな。秋蘭も春蘭も耳を引つ張るな！なんだこら、止めるお前ら！言つとくけどこれには理由がつてうるさい孫策！少し黙つてろこの無駄乳！私にしる？お前みたいな元気いっぱい虎娘なんかどうするんだ馬鹿か！周瑜もなに照れてんだ違うよ！あ、愛紗さんごめんなさい、お願いだから話聞いてください。

「はっ・・・、そう言えば羌毅さん、好みのタイプは長い黒髪の理知的で巨乳な女性だつて・・・。」

あつ、馬鹿一刀君！それ秘密のひっ！

「ほお、通りで我が主人が愛紗にだけ甘い筈ですなあ。」

「黒ければ、良いんでしょうか？」

「それはウチも初耳やな。詳しく聞きたんやけど。」

「まあ、私が1番なのは分かっていますけど！」

「い、いや、私が文句言える立場ではないし、気持ちは嬉しいのだがっ！」

「お前、私は理知的じゃないっていいたいのかー！」

「あわわ、詳しくは身体に聞きましよう！」

「なるほど、では私は髪を伸ばせばだいたい文句ないな？」

いかん、場が一気に俺への制裁を決める弾劾裁判みたいになってきた。な、何とか納めねば！つか秋蘭と白蓮は黙ってて下さい。まあ待て皆落ち着け！とにかく話を最後まで聞け！あ、こら風と星、ズボンに手を掛けるな！稟、薬用意するな！朱里、流琉、耳を舐めるな！華琳、ちゃっかり混じろうとするな！

良いから話を聞け！とにかく周瑜、一時的で良いからついて来い！

「お前の病気の話だ。」

そう言った瞬間、漸く皆が止まった。孫策に至っては目を見開いているが、それは良いや。周瑜さんの顔が一気に悪くなった。あ、なんか驚いてるやがるぜ！

「・・・なんの、事か分からないな。私は至って健康体だ。」

何言つてんだ、胸：いや肺かな？まあよく分からんが、かなり前からだろ、それ。そのままいつたら死ぬぞお前。つーか順当にいつても10年はもう持たないのお前なら分かるだろ。呼吸に血の匂いが混じってるし、発作も一回や二回じゃあるまい。違うか？

何故？知るかなんでも良いだろ。とにかくこの戦の後で良いからついて来い、こないだ狩った竜の角があれば大抵のことは治せるって言ってたし、華佗の下まで連れてくから。文句ないだろ孫策。治ったらちやんと返すよ。

詳しい説明は後でな。とりあえず言いたいことは分かったな。んじやまずは、つてなに？伝令？今から軍議だから各代表集まれ？あー。

とりあえず諸々の詳しい話は後にするしかないか。

まあ皆も、それでいいな？劉備さん、ほら行つてきな。

黄巾の乱、その最終局面の始まりだ。

続く？

28話

僕と私の鴨南蛮。

やあみんな、よく考えたらアイドルの追っかけが黄巾の乱を起こしたって世も末過ぎ
て国が減んでも仕方ない気がしてきたオーク系転生者の俺だよ！

さて、あれから混乱する皆をとりあえず軍議とやらに行かせて、残る武将組に色々問
い詰められたのを何とか躲して宥めてすかして、帰ってきた劉備さん達に先陣になった
と言われ、さあ布陣する事になったよ！

ちなみに俺たちの後ろには総大将だかなんかの袁紹さん達の大軍がいます。全員金
色で、あいつら全滅させたら鎧だけでいい金額になりそうだなって感じで結構嫌いじゃ
ないです。何より遙か後ろから高笑いが聞こえてきてウケる。あ、なんで後ろに袁紹さ
ん達かと言えば、なんでも食糧や兵を借りたんだそうです。その代わりに自分達の前で
肉壁やれよ、と、そんな感じみたいです。

本当はウチの軍師組が曹操さんに伝手があるので、曹操さんから借りる予定だったんですが、其処になんか袁紹さんが乱入してきたとか何とか。曹操さんよりウチの方が余裕がありましたよっ！というノリで強制的に押し付けられてきた拳句肉壁扱いなので何事って感じなんですけど、まあこの黄巾の乱討滅軍の中で一番勢力を誇る袁紹軍、逆らっていくのは仕方ないでしょう。

「あ、いえ、そういうわけではなく。」

「正直お兄さんがいれば何処でも関係ないかな、と。」

「むしろ周囲に被害を考えたら最前線が1番ですっ！」

「容赦無くやっちゃって下さいっ！」

全然違う理由だったでござる。むしろ軍師組はあえて厳しい条件を出させて、より多くの補給と同時に最前線を勝ち取ってきたとか。完全に俺任せでわりっしゅ。まあいいけど。

なお、一応孫策さん達の軍が、険しい山を越えて、ちやうど黄巾党の砦の後ろあたりから奇襲を仕掛けて、あのデカイ門を開けてくれるそうですが、成功するとは限らないし、待たなくてもいいとか。まあ成功するのは知ってるけど、待つのも面倒だしとっとと片付けるのが1番だよな。

あと嬉しい事に、荀彧さんが門を黄巾党に自ら開けさせる策とか教えてくれた。本人は軍師組がこんなつまらないことで死ぬのはもったいない、とかそんなことを言っていたけど、顔赤くしながら、曹操さんに内緒できたみたいだったので、これはデレと判断して問題ないな！可愛かったので俺と流流共同新作お菓子のカステラをあげた。まあ策は気持ちだけありがたくもらっておいだ。いやだつて難しい策とか口頭で説明されても分からんし。

で、現在言われるままに最前線に陣取っているわけですが、何だろこれ、攻撃していいのかな。向こうも睨んで弓を構えてるだけだからよく分かるのだが。

「ふむ。で、どうする気ですか。我が主人よ。流石にこの人数であの門を破るには、破城槌もない我々には厳しいと思います。」

「確かに、あの門破るのは難しそうですね。釣りだそうにも後ろにはこちらに向けて弓を構えた袁紹軍がいます。」

「あの壁を登るのは大変なのだつ！登ってる間に矢でやられちゃうのだつ！」

え、なんかもう皆やる気満々で驚くんですが。なんていうか舌戦？的な口上述べたり

しないの？ 賊相手にしない？ マジか。じゃあ開戦の合図とかも？ どっちかが仕掛けたら？ そうだったのか……。じゃあちよつと門開けてくるわ。

「えっ!? ちよ、ちよつと羌毅さん？ そんなちよつとコンビニ行つてくる、みたいなノリで言われても!!」

「そ、そーですよ。よくわかんないけど策とか!」

いや、策を考えるべき軍師組があとお願いしますつてほら、比較的安全そうなあたりまで流琉と数人の護衛連れて離れちゃったし。

そういうと劉備さんと一刀くんがええっ!? て驚いて指差す方を見る。其処には比較的 안전한場所です手を振る軍師組の皆さんが! 一応後方、と言うか袁紹軍を警戒して、最後方ではないが、念のため真桜と沙和の部隊もつけとこう。

「了解や!」

「分かったのー。」

まあそんな訳なんで、俺が門開けたら皆突撃よろしく。それくらいしかやる事ないし、いいでしょ。あ、足の速い凧と星は両脇から兵の上の弓兵達よろしく。鈴々と愛紗は一刀くんと劉備さん連れて行つてあげて。ん、何愛紗。1人で行くのか? まあ1人で行った方が返つて邪魔にならないだろうしね。大丈夫大丈夫。行つてきます。

後ろから一刀くん達がなんか騒いでるけど、放置して、俺は一人巨大な門へ向かって歩く。一人抜け出した俺に黄巾党の視線と、後方に展開する部隊からの視線が集中するが、一人で何が出来るといった雰囲気皆さん。黄巾党の方々は扉の上から指差して笑い始めた。

まあさつくりシカトして、無言で門の前に立つ。黄巾党の連中がニヤニヤ見ているのが分かるが、まあ良からう。改めて門を見る。どうやって作ったのかは分からないが、大きな大きな門だ。20メートル以上ある。たぶん厚さも相当だし、枠として取り付けられた金具も相当な量の鉄を使っているだろう。職人凄いな、と感動しつつ、門に触れる。

門に触れた感じからどうも門も掛かっているみたいだが、まあいいかと、そのまま手を押し込む。まるで柔らかい粘土のように手が埋まるが、埋め込んだ部分から広がる亀裂がそうでない事を物語る。

そのまま皮膚の色がくつきりと変わる程度に変身し、闘気術で臂力を強化する。これで現在の俺の力は極限ラージャン6体分だ。そのまま二歩下がって引つ張る。

バギイ！

門が持つ重厚さと頑強な見た目からは想像も出来ないような軽い音と共に、あっさり
と門が根元から外れた。

「……………えっ。」

なんか全体が呆然としてるが、シカトしてそのまま門を持ち上げて、邪魔にならない
所に立てかける。もう片方もない方が広いかな。おっと、門がなくなつて今気付いた
が、門の前に何故か固まった黄巾党の皆さんが居たのでとりあえず笑つて会釈し、同じ
様に門を外すと、また邪魔にならない所に立てかけて、劉備さん達に声をかける。入っ
ていいよー。

「……………ちよつとまでえー！」

黄巾党どころか全軍から盛大なツッコミが入ったが、うちのみんなが突撃を始めたので、無視しよう。なんか一刀くんや劉備さんもツッコんでいた気もするが、まあ無視だ。よっしやあ行くぞ！粉砕！爆砕！大喝采！！

この後めちやくちや突撃した。

．．．
．．．
と、言うわけで黄巾の乱が終了した。

あの後、思ったより黄巾党の皆さんが沢山いたので、俺がめんどくさくなつてちよつと本気で殴つたら砦の一部が崩壊するハプニングが起きたり、波才さん？と張なんちやらさんとかをうちの女性陣が討ち取ったり、後ろからくる袁紹軍が多過ぎて鬱陶しので、シレッと途中から撤退して戦闘押し付けたり、だいたい終わった頃に孫策さん達が

入ってきたりして色々あったけど、まあだいたい終わって今は降伏した連中の処理とか後片付けとかそんな感じの、戦後処理中である。

なお、現在俺たちは天幕に戻って風呂を沸かして、順番に入ってます。流琉と凧だけ先に入って飯の準備をしています。あ、もちろん一刀くんは追い出したよ！と言うか劉備さんが慌てて連れてった。いやあ、性的暴力に訴えないだけ優しいな劉備さん。流石人徳の王。ていうかなんでウチの女性陣はこんなになっちゃったのか。俺に攻撃が効かないから？言葉で解決しようよ……。

「道玄。反省が見られないようですが？」

「そんなにお望みなら幾らでも搾り取ってあげましょう。」

あ、ごめんなさい。許してください。

はい、俺だけ料理に参加してないのとおかしいと思った？そうです正座中です。いや実はちよつととうっかり強めに殴って砦の一部が崩壊した際、実は塀の一部も崩れちゃつて、恐慌起こした黄巾党の奴らがそこから一部逃げ出しちゃったんだよね。故に説教されてます。

まあ袁紹軍が邪魔で入れなかつた曹操軍が素早く対応してくれたので問題はなかつただけだ。もう少し気を使へつて事らしい。まあ確かに周りに友軍いたら危なかつたし、素直に反省しよう。

「まあその辺にしてあげなさい。関羽、稟。そのおかげで私達にも功績が手に入ったわ。」

「いやっ！もつと言うべきよ！そいつのせいで私達の苦勞が水の泡になったのよ!?納得いかないわ！」

なんか上機嫌の曹操さんと、憤慨してる孫策さん。2人ともお付きの武将を連れてウチの天幕まで来てます。曹操さんのところはいつもの面々ですが、孫策さんのところは知らない人が2人。いや前世知識では知ってるけどね。たぶん黄蓋さんと甘寧さんだ。甘寧さん本当にパンツというか禪見えてるんだが良いのだろうか。呉って本当に露出過多だよ。良いぞもつとやれ！ん、なに華琳さん。

「ひとつ気になっていただけけれど、何故門をわざわざ外したの？貴方なら粉碎も可能だったでしょう？」

その言葉に黄蓋さんや甘寧さんがビククリしているが、まあしようと思えばできたよ。つーか別に門に拘らなくても、やろうと思えば何処でも壊せるし。

「そうなのか!?!...では、本当に何故じゃ？」

そりや黄蓋さん決まってるだろ。粉碎したら破片が歩く時邪魔になるじゃん。転んだりしたら大変よ。

・・・あれ、なんか変な事言っただろうか。なんか凄いなに言っただこいつ、って感じで見られてる。え、なに周瑜さん。頭痛そうだけど大丈夫？

「誰のせいだと・・・いや、いい。ではもし門を外してる際に中の賊に襲われたらどうする気だったんだ？動けないだろう。」

その時は後片付けが大変なことになるけど、仕方ないから門を賊の皆さんに向けて倒したかな。ただ、かなり厚い門だったから、兵のみんながわざわざ登らなきゃいけないからあんまりしたくないんだよね。どうしたって速度落ちるしさ。

なんか余計に周瑜さんが頭抱え始めた。大丈夫だろうか？あれ、なんでみんなも頭抱えてんの？風邪？体調管理はしっかりしないとダメだよ。

「まあ、私が言うのもなんですが、道玄は存在が常識外ですから、気にしたら負けですよ。」

「おにーさんは、非常識そのものです。」

「そういうものと、諦めが肝心でしゅ！」

あれ、ウチの女性陣それフオローじゃなくない？酷くない？色々兵のことを考えた優

しい気配りだったと思うんだけど。え、そういう問題じゃないの？そっかあ。せつかく2次創作とかでも省略されがちなところを細かく考えて気を遣ってみたんだけどなあ。

そんな感じで一頻り俺が説教された後、漸く解放されたので、みんなになににきたたのか聞いてみた。どったん？

「それよりも、私達もお風呂借りていいかしら。血塗れだし、山を越えたから泥だらけだわ。」

なんだ、そんなことか孫策。いいよ。ただ入る前に体拭けよ？湯が汚れる。そう言つて女性陣の方を見ると、ちようど最後の愛紗と鈴々が出たところだ。俺は後で入れればいいや。

そう言うのと、やったー！と喜ぶ孫策。周瑜さんや甘寧さんも慌てているが、嬉しそうだ。まあ実際仕事終わった後の風呂は格別だしね。あ、おい孫策、入るのは構わんがまだ脱ぐな俺がいるだろ。気にしない？バカかお前、お前が気にしなくても他の人が気にすんだよ党首なら気を使えバカ。普段から露出し過ぎて羞恥心みんな持つてないとか勘違いだから。・・・あれ、だよね？

「当たり前だっ！」

あ、良かった甘寧さんは禪丸見えだし、周瑜さんも黄蓋さんも露出過多だから実は孫

策と同じかも思つて焦つた。もし呉がそんなところなら一刀くん連れて2人で観光行つてた。

そういうと甘寧さんが怒り、周瑜さんは原因の孫策を叱り、黄蓋さんは儂は別に構わんど、と笑つた。あ、それは良くない。ホラみんな目付きが鋭くなつた。心配しないで、入らないよ。だから服きてていいよみんな。だから愛紗、青龍偃月刀を置くんだ。いいね？あと秋蘭、態とらしく絡みついてくるな。狙いは分かるが落ち着け、ここで戦闘はめんどくさい。

・・・再び説教された。

閑話休題

「さて、ところで道玄。貴方がわざわざ私達の元へ届けたあの3人はなんなのかしら。」
呉の連中がウチの天幕で風呂に入っているの、ちよつと出て離れたところでそんなことを華琳さんに聞かれる。あれ、本人たちから聞いてない？聞いてないらしい。一刀

くんたちもなんかあったのか、みたいな顔してる。

ああ、実は砦の一部粉碎した際、とある人間を3人捕まえたんだけど、ウチでは使えなさそうだから、曹操さんにあげたんだよ。塀を破壊した時助けてもらっちゃったし、お礼ってことで。

「お礼？あの娘等3人がか？」

あ、春蘭。分かってないな、あの子達凄いで。だって首謀者って言われている張角、張宝、張梁の張三姉妹だし。たぶん首を献上するだけで凄い功績になるぞ。まあもつたいないからオススメはしないが。

「ハアツ!？」

あれ、どしたみんな。張角達は死んだ？あれ偽物だよ、男だったし。なぜ分かるかって、黄巾党はそもそも、張角達の見た目とか歌とか踊りに惹かれて集まった、ただの追っ掛けというか、熱心なファンみたいな連中だし。そういう情報あつたら一刀くん。

「えっ！いいや確かにあつたけど、あれ正直噂というかデマじゃないんですか？つていうか羌毅さんが何故ファンって知ってるんですか？」

細かいところはおいといて、彼女等が活動した場所付近でいつもの賊の団体発生して、何人か尋問したら彼女達がこの世界を変えるとか言つてたし。まあ名前とか正体に関わることは言つてなかつたあたり、ファンの鑑よな。賊は賊だから普通に退治したけど。

いや、細かいとかそういう事じゃなくて！とか言う一刀くんはシカトするとして、そんな訳だから好きにしなよ華琳さん。

「首を切るのもつたいたい、と言つたわね。何故かしら。そもそも自分達で使えなくても、首を切れば最低限の功績にはなるはず。何のために私達に譲る？ 貴方の利は？」

いや、利は特にないけど。強いて言うなら美人だから殺しにくいくらいかな。後は彼女達が賊とはいえ、最終的に集めた人数は20万。ただ功績にするには惜しいと思わない？ でも劉備さんの所じや彼女達を上手く使うには権力も場所もないだよな。バレルだけで火種になり兼ねない。だから使えそうな曹操さんに預けようと思つて。それだけですよそれだけ。

「……正直に言え、道玄。いい加減そんな言葉で騙されるほど、私達も甘くないぞ。」

……失礼な、華琳さん達へのお礼なのは間違つてないぞ。どう転んでも、華琳さん達にとって利益になる。まあ、確かに死にたくないつて言うチビっ子が泣くから安請

け合いしたのは認めるけど。華琳さんなら、使えるものがあるのに、無駄にするとは思わなかったし。

「アンタ、華琳様以外が反対するとは思わなかったの？」

したとしても、最終的に華琳さんが決めたことには逆らわないだろ。華琳さんが決めたことならそれが正しい。華琳さんにはそう思わせるだけの実績があるし。それに、荀彧さんに華琳さんにも内緒で策もらったのに使わなかったし、お詫びも込めてね。

「へえ、それは初耳ね。どういうことかしら、桂花？」

あ、荀彧さんが気まずそうな顔に。待つんだ華琳さん、荀彧さんは俺たちを心配してくれたのももちろんあるけど、華琳さんのお気に入りである女性陣がこんなことで死なないようにと気を遣ってくれたのだ。怒ってはならぬよ！

誰があんた達の心配なんか！と顔を真っ赤にして怒る荀彧さん。あ、カステラ美味しかった？まだ食べてない？そかそか。まだあるから気に入ったら取りにおいで。まあそんな訳だから許したって華琳さん。え、カステラ？聞いてない？まあ新作だしなあ。荀彧さんの反応見てから華琳さんにも、って思ったんだけど。いいよ、後で渡すわ。

「道玄様、私達も色々初耳なのですが。」

いや風よ、理由はさつきも言ったけどさ。ウチじゃ彼女達殺すくらいしか出来ないし、何よりも女の子連れ帰ったらみんな怒るじゃん。人助けだったとしても容赦しないじゃん。

「当たり前です。」

「にぃさんはもうちよつと控えんとあかんで。」

ちよつと厳しすぎると思うんですがそれは。あ、はい何でもありません。一応みんな納得してくれたらしい。良かった良かった。じゃあそろそろみんなでご飯食べようか。そつちも話は終わったろ、孫策。

振り返ると、ちよつと天幕から出てくる孫策達だ。全員浮かない顔だ。

「……気を遣わせたみたいね。その事で、聞きたいことがあるわ。」

いいよ。何でも聞ぐがいいさ。まあそれよか先に飯だ。話は飯を食いながらでも出来る。何よりお前らがそんな顔してたら、兵は喜べん。曲がりなりにも勝ち戦だ、もうちよつと元氣よく行こうぜ。酒もあるしな。

・
・
・

と、言うわけで、周瑜さん連れて華琳さんのとこまで医者にかかりに行くわ。よろしくね。

「良いでしょう。貴方もすでに兵をやったみたいだけど、こちらもその華佗という医者を引き留めておきましょう。皆もくるのかしら？」

あー、どうなんだろ。劉備さん達は無理かな。ウチのはどうする？正直残ってあげないと大変な気もするけど。あ、ついてくるのね。了解。孫策達は？

「私が行くわっ！冥琳をあんた達だけには任せておけない！」

いや、お前はダメだろ何言ってるんだバカ党首。お前が居なくて誰が周瑜さんの代わりに働くんだよ。妹がいる？仕事したくないだけだろ。甘寧さんとか駄目なの？

「思春は本来その策殿の妹、孫権殿のお付きじゃ。ちよつと無理じゃのう。もちろん策殿は論外じゃ。よつて儂が行く。」

何でよー！つと駄々をこねる孫策。煩いぞ露出痴女。見ろ、甘寧さんも困ってるだろ。あれ、何で俺を睨むの甘寧さん。え、無礼な？いきなり勘で切りつけてくる女をどう敬えってんだよ。まあよろしくね黄蓋さん。あ、酒を期待されてもあんま出さないからよろしく。

なんじゃと!?つて驚愕する黄蓋さん。いや当たり前やがな。あんなガブガブ水より飲みやがって。星と2人で好き放題飲ませたら幾らあつても足らねえよ。あ、飲みたいからって色仕掛けしても無駄です。何故なら酒の管理は流琉だから。俺が美人に甘いのを周りが知らないとも思ったか!!残念だったな。

んー?何周瑜さん。本当に治るか?いやそれは知らんけど。でも死にたい訳じやないんだろ?じゃあ良いじゃん。とりあえず試して見なよ。俺を信用できないかもだが、正直襲うだけならこんな間怠っこしい事しないし。

「それはそうだが・・・私を助ける理由がないだろう。みんなにも隠していた病に気付いたのは凄いが、黙ってる方が得だ。お前のいう通りならいずれ私達は敵になるはずだから。そして何より、対価はなんだ?」

理由!?理由ねえ・・・前世でファンだったとか駄目かな?駄目か意味不明だしな。対

価値とかも考えてなかった。うーむ、セクハラは愛紗達に怒られるしなあ。あ、じゃあ美人の喪失は世界の損失だからとか駄目だろうか？駄目かあ。あ、では対価に真名とかどうだろうか。正直なんでもいいのだが、それなりに価値ないと気にするだろうし。

「本当にそんな事で良いのか？・・・そうか、変な奴だな。」

お、周瑜さんが笑った。やはり美人の笑顔は良いね。好みのタイプだと尚更だつてあれ、どしたのみんな。戦の後の宴？いや、今やつてるじゃん。え、天幕内で？いやいやいやいや！

「ついでに、しばらく甘やかし過ぎてまた誰にでも色目を使い始めた誰かさんへおしおきです。覚悟して下さいね、道玄。」

ファツ!?ちよ、それ誤解だよ愛紗さん！もちろん俺はみんなが1番だよ！え、誰が1番か？いやそれは・・・選べないけど。それも駄目？1人に決めるまで全員でする！待つて！それは待つて！あ、さり気に混じるな秋蘭！

あ、待つて待つて、ようやくせつかく回数が減ってきたのに！あ、ちよつと待つ

この後滅茶苦茶搾られたよ！

続く？

29話 鍋はつけちやいけないキムチチゲ

やあみんな、大規模戦闘では必ず頭おかしい奴扱いされるオーク系転生者の俺だよ！

さて、あれから周瑜さんの病を治しちやおうぜ隊として、曹操さんの軍に引っ付いてきた俺たちだが、何故か劉備さん達も一緒だ。なんでもあの村は拠点代わりに使っていたが、元々本拠地として扱うにはだいぶ手狭なんだそうだ。そして今回の戦での功績上、領地は確実らしいので、いつそのこと上からの使いがくるまで曹操さんのところで勉強したいと曹操さんをお願いして見たところ、その間曹操さんの下で働く事を条件にオーケーもらったとかなんとか。

それは正直ありなんだろうか。というかさも当然の様に俺たちも一緒に働く契約だったのだ、それは断っておいた。なんでえ!?!とか言われたけど、治ったら周瑜さん達を呉まで連れてく約束なんで無理です。

「じゃ、じゃあ軍師組のみんなだけでも！」

「いい、いや武將組1人でも！」

だそうだが、誰が残るか？ 実際厳しいのは事実だと思うけど。ていうか曹操さんのところで兵の糧食どうすんの？ え、袁紹さんからのので2ヶ月はいける？ どんだけもらったんだお前ら。負けたら全部回収される予定だった？ ああなるほどなあ。どうりで最後袁紹さんから睨まれるわけだよ。まあいいや、で、結局どうする？ 俺は呉にも行ってみたいから行くけど。

「私は兄さまと一緒にいいな。」

「おとーさんと一緒に行くのだ！」

「私は道玄と行きます。」

あ、3人は決定と。他のみんなはどうするのだろうか。するとどのくらいので期間あけるのか聞かれた。周瑜さんどうなの？ 一月くらいだそうだが、往復とか色々考えて3ヶ月くらいかな。1週間以上なら全員ついてくるのね、ブレないな。という事らしい、すまんな。

なんか悲しそうな劉備さん。めんご。まあまた帰るから頑張つて準備しておいて。たぶんまた直ぐに戦争だから。つてあれ、言つてて気付いた。俺等周瑜さん送つてく余裕あるかな？ 割と直ぐに反董卓連合なかつたつけ。やべ、下手したら会場集合かも知れ

んな。とりあえず周瑜さんの治療にどれくらいかかるのかな。まあ最悪反董卓連合の後でも良いか。

「……今更だが、その、重くないか？」

いや、全然。だから気にしないでゆったりしてて。そう言うとありがたいがとう、と返す周瑜さん。まあ分かると思うが、現在彼女は俺が背負う大寸胴鍋の中にインしている。理由は出発してから3日後の夜、彼女が吐血したからである。発見当時本人は隠そうとしてたが、血の匂いに反応した俺が即発見し、そのまま寝かしつけて看病体制に入つてやつたら観念した。

俺が居なくなつた事に気付いた愛紗や星がみんなを連れて駆け付け、その時に黄蓋さんも来て驚いていた。なんでも血を吐いているところを見たのは初めてらしい。改めて気付いた事に感謝された。なら有名な黄蓋さんの手料理を食べたいとお願いしていた。呉に来たら是非用意してくれるらしい。やつたね！

現在は曹操軍の後ろの方をゆったり歩いてる。単純に行軍に合わせて歩くのが面倒だったのと、普段大寸胴鍋に入ってるちびっ子達が、運動不足を兼ねて歩いているため、どうしても遅れるからだ。なお、劉備さんと一刀くんは、義勇軍を連れて曹操軍について行っている。行軍中にも速度や隊列、補給など、学ぶことは多い。きちんと自分

達で実践しているのは流石である。

そんなこんなで、途中の川で軍が野営準備に入ったので、俺たちも軍より大分先に進んだ上流辺りで野営する事にした。近くで野営すると、ウチだけちゃんとした料理を作るので、匂い等で文句を言われるのだ。まあ、その文句ついでに飯を食つてく上層部にまず疑問を持つべきだと思うが。

今の時期は寒くなつて来ていて、動物達がぼちぼち冬眠し始めているのと、行軍による大量の人間の匂いと気配のため、ほぼ野生動物に遭遇しない。なのでこうして少し山の中に入り、俺たちの分をある程度確保しなければならぬ。毎度毎度鈴々と季衣ちゃんのを用意するのは結構大変なのだ。まあ喜んでくれるからにはやるけど。俺は親バカの自負があるので、最早なに言われても平気です。

ここ最近、初の遠距離攻撃持ちの黄蓋さんが狩りに協力してくれるのでかなり効率も良い。今日も雉三羽、シギ五羽、ウサギ2羽、鹿一頭と大漁である。2人での狩だが素晴らしい猟果だ。ホクホクで功労者である黄蓋さんに酒を二合約束する。黄蓋さんも嬉しそうだし、これぐらいなら流石も怒るまい。そんな事を考えてたら、黄蓋さんに真面目なトークを持ちかけられた。

内容は呉に仕えないか、という事だ。なんでもここ数日一緒に過ごして問題なしと思つたらしい。何より劉備さん達にはもつたいたないとかなんとか。まあ否定はしないがお断る。別に黄蓋さん達が嫌いなわけではないが、今はまだあの場所を離れる気はない。

何故と言われても。あの場所ではかできないことがあるからかな。え、今なら黄蓋さんと周瑜さんがついてくる？わあ、びつくりするぐらい魅力的な話！でもそれ周瑜さんに話通つてんの？通つてたー！やばいすごい心惹かれる。ダメ押しで黄蓋さんが自分の胸に俺の手を持つてった。素敵な感触やで！これは確かに行つても良い気がして来た！

「お主がウチに来るなら、この身体、好きにするがいい。」

若い者にはまだまだ負けんぞ、と耳元で蠱惑的に囁く黄蓋さん。流石に年季が違う。秋蘭や星などと違つてガチでエロい。これはもうやられてもいいな！

だが、断る。

何故じゃ！つてあーた。まずそういう話は無事に周瑜さんが治つてからにしてくれ。

それに周瑜さんと黄蓋さんだけで了承もらっても仕方ないし、気持ちは非常に嬉しいがね。あと、呉にも美味しい特産品をお願いします。うちの劉備さんには桃と、その桃の廃棄品を使つて育てられる桃豚と桃鶏があるのよ！

「まさか、食い物を求められるとは……！というかそんな理由で劉備の下におるのか?」
え、そうだけど。というか、色仕掛けとか危ないからやめた方がいいよ?何を言つてるのか分かつてない顔の黄蓋さん。いやみんな勘違いするんだけどね、というか俺も勘違いしてたけども。うちの女性陣は、正確には俺が囲つていゝのではなく、「俺を」囲つていゝのよね。

シユン、と音を立てて黄蓋さんの後ろに突き刺さる矢。そしてでて来る秋蘭。……いや、なんでやねん。

思わず普通にて来て来た秋蘭にツツコミを入れる。さも当然のようにでて来たが、お前ウチの女性陣の中に入つてないよ!俺ドヤ顔しちやつたじゃんにしてんの!というかみんなはつて気付いたら武将組が武器もつて俺と黄蓋さんを包囲していた。よく見ると何故か春蘭と華琳さんも居た。何事だよ。いいや、とりあえず誤魔化しておこう。

とりあえずなつ?とか言つて計画通り感を出しておく。黄蓋さんは一瞬呆氣に取られた後、笑つてなるほどな、と言つた。なお、俺の腕には愛紗と星がいつの間にか絡みついて居て、めつちや脇腹をどついて来る。いや、俺悪くなくね。え、2人きりの狩時

間が長い!き、きびしいな。

あと、華琳さん達までなんでいんの? 食事の準備が遅い!あれ、さも当然の様にウチで食う気なんすね。まあいいや、愛紗、野營の準備と風呂の準備は終わった? そか、じゃあ急いで戻ろう。黄蓋さんのおかげで材料も盛りだくさんだしね。だから華琳さん達、あんまり私に黙っていい度胸ね、とか黄蓋さん虐めちや駄目だよ。

閑話休題

さて、そんなこんなで何故か劉備さんや一刀くん、華琳さん達全員が合流する食事は終了しました。ちなみに今日の食事はいつものちゃんこ鍋と、たまたま発見した平べったい空洞のある石を使って作ったピザです。米は久しぶりに炊いてません。何故か行商が売ってたチーズを買い占めておいて作りました。デスソースたっぷりのは風専用です。なんか一刀くんが何故ピザがここに、とか言ってたけど無視しました。そんなこと言ったらこの時代に麻婆豆腐やら肉まんがあることにツツコミが必要です。ていうかかなり離れているのに、わざわざ馬使ってまで来たよこの人達。

今は風呂の最中です。ウチは綺麗どころしかいないので、行軍中の兵士が覗きに来るので、曹操さんが黒く染めた大きな帆布をくれました。ありがたく使わせてもらい、周りから見えない様に隠します。どうでもいいけどこの準備の良さ。明らかに狙っていましたね。確かに行軍中に風呂入るなんて俺たちくらいだけでも。

さておき、俺は周りで見張りをしている。見せたくないのもあるけど、女性陣がやると兵士殺しちゃうからね！華琳さんが入ってる時に来た兵士なんか春蘭が容赦無く切りかかったからね。まだ覗きする前だったのに。止めなかったら彼は頭から真つ二つだったよ。自軍の兵士だけどな！

ところで、風呂入らなくていいの、周瑜さん。

「後でいただこう。だが先ずはお前と話がしたい。」

ぬ？なんぞ。なんか話があるらしい周瑜さんに、とりあえず暖かいゆず茶を用意する。というかなんで周瑜さんも黄蓋さんもそんな薄着なの。うちの女性陣だつてそろそろ厚着始めてるのに。・・・持つて来てない？呉が暖かいからここまで寒いと思わなかった？ええー・・・。

正直早くいいなよつて思った。しょうがないので、とりあえず今は手持ちの毛布（特

別製ビッグサイズ。俺が2人は入れちゃう！基本は折り畳んで使う。）を周瑜さんに掛けてあげる。女性陣が出たら、黄蓋さんと共に服を貸してもらおう。それまで待つてくれ、そう言うのと、なんか不思議な顔をした後、ありがとう、と周瑜さんは微笑んだ。

「・・・なあ、羌毅殿。私は本当に治るだろうか。」

知らんよまたかよ、と思ったがどうやら続きがあるらしい。黙って聞く。そのまま彼女の独白が続く。それは彼女の過去であり、仲間との築いた時間であり、同時に病という恐怖と孤独に耐えてきた、長い戦いの歴史だった。

彼女が言うには、かなり昔には病に気付いていたそう。元々幼い頃は病弱で、寝たきりの日も多かったという。自然と書にのめり込み、元々家の教えもあって、外に出ずただただ知を積み上げる日々。やがて父親の仕える主君、孫堅に会い、その娘である孫策にあつて初めて、「自分の知を誰かの為に使いたい」と思ったそう。孫堅も孫策も、2人揃って勝手気まままで奔放で、でもこの人の為に尽くしたい、そう思える様な不思議な魅力で満ちていたと言う。

今思えば、それこそが英傑の持つ覇気、と言うやつなのだろう、と周瑜さんは苦笑す

る。もうちよつと孫策は普段から英傑らしい振る舞いをしてほしい、などとも言った。

そんな風な人達に仕えていたからこそ。孫堅が死んだ時は信じられなかったという。しかし、そんなことを嘆く暇などなかった。何故なら自分の父親も孫堅と共に亡くなり、国の中心が2人同時に居なくなつて、求心力はガタガタ、それでも家臣と民の為に孫策は立ち上がらなければならなかつたし、そんな孫策を支えなければ、と思つたのだと言う。

それからは苦勞の連続で、むしろ今だつて袁術なんていう我儘小娘の下でいい様にされながら必死に孫呉の再興の為に頑張つてきた、いつの間にか未熟だつた自分も、孫呉に欠かせない存在になつた。その自負もある。だからこそ、病が治らないと知つた時に、隠さねばならないと思つたのだと言う。その理由は

「怖くなつたんだ。自分の積み上げて来た全てが、やがて全て消えてしまふ気がして。やがて使い物にならなくなる自分は、この場所に居られなくなるんじゃないかつて。」

孫堅が力を持つて手に入れ、力を持つて治めてきた土地だからこそ、孫堅という力を失つた土地から、協力してくれた人々は去り、規模は縮小し、今まで苦勞しながら建て直して来た。

そして自分達が力をつけて来たからこそ、新たに人が増え、再びここまで大きくなった。まだまだ苦しいけれど、もう一度孫呉を取り戻すのも、夢ではなくなってきた。

だからこそ、そう遠くない未来に死ぬ自分が、力を喪う自分が、この場所にいる意味は無い、そう思われることが怖くなった。

そう周瑜さんは言った。だから隠れて受けていた様々な医者 of 診断も、誰かに気付かれる前に辞めたのだと。皆に気付かれない様に、病を隠して来たのだと。

「本当の事を言えば、こうして医者に会いに行く許可を貰ったのさえ、自分が必要とされなくなった気がして少し不安なんだ。・・・流石に卑屈過ぎると、分かってはいるんだがな。」

そう言って力無く笑う周瑜さん。本当に不安だったのだろうか、初めてあった時の気丈な彼女を考えると別人の様である。だが、とりあえず俺の今の気持ちを表すならこうだ。

重いよ!! 重過ぎるよ周瑜さん! 会ってそんなに経ってない蛮族に語る内容じゃないよ! あんた無印の時、孫権さん達にさえそんなに心境語ってなかっただろ! と言うかこういうの一刀くんの役目だろ! どこ言った原作主人公!

．．．どうやらない様なので、諦めて俺が話すしかないようだ。えーとそうだな、先ずは勘違いから解いて行こうか。

「勘違い？それは一体．．．？」

そもそもな話、周瑜さんが死んだところで周瑜さんの築いたものはなくならないし、周瑜さんがやがて死ぬから意味は無い、なんて事もないよ。そんな事ないって？じゃあ君の言う孫堅さんとやらが死んだ時、何故呉が滅びなかつた？答えは簡単だ、孫策や周瑜さんみたいに、後に続く存在を築いたからだ。違う？

「そ、それは．．．。」

周瑜さんの話が事実なら、周瑜さん達が築いた今の呉には、君が教えた家臣もたくさ んいる筈、この時点で最悪君が死んでも意味はある。そして、これはある本の受け売り だけど、やがて失われるものに価値がないならば、それは俺も君も一緒だよ。病か時か、 はたまた刃か。ならば今すぐ死ぬかな？意味がないからと、全てを放り出してしまおうか な？

「．．．ッ！」

同じことだと俺は思うよ。だから周瑜さんがどうなろうと、君が築いたものは消えな

いし、その意味がなくなる事も無いと思うよ。まあ、ここまではいいかな。よし、じゃあそもそもの話しようか。

「そもそもの、話？それは、どういう・・・？」

ああ、簡単だよ。周瑜さんはもし孫策さんがある日突然何も出来なくなつて、寝たきりの生活を送ることになったら、彼女の全ては意味がなかった、なんて思う？もう必要ないなんて言つちやう？

「そんな訳がない！例え何が起きようと、どうなろうと、雪蓮は私の親友で、戦友で仲間だ！戦えなくなつても、天下を取れなくても、寝たきりでも、それは絶対に変わらない！」

うん、じゃあそういう事ですよ。周瑜さんがそう思つてるなら、少なくとも周瑜さんがそう思う相手は皆、周瑜さんがそうなつても同じ様に考へてると思うよ。それとも周瑜さんは、孫策さん達がたかが不治の病にかかった程度で仲間を見捨てる様な奴らだと、そう言いたいのか？

「……ッ!？」

違うでしょ？初対面で斬り付けられた俺でもある程度分かるよ、君達の仲の良さも、絆の深さも。今だつてついて来てる黄蓋さん、彼女だつて本来一人でポンポン護衛に使つていい人物では無いはずだ。ましてや本当に要らないと思われてるなら尚更ね。周瑜さんが自分なんかの爲につて拒否しなければ、一軍ごとついて来たんじゃないやね？それが出来ないから可能な限り信頼できて、最高の戦力を持つ黄蓋さんが来たんでしよう。寧ろ誇つていいと思うよ？君は確かに、孫策が作る孫呉に欠かせない人物なんだつてね。

「……では、私の今までの苦惱は、一体？」

んー、非常に申し訳ないけど、唯の杞憂かな。むしろもつと素直にどうしようつて皆に相談してたら、こんなに悩まなくて済んだと思うよ？俺がわざわざ説明しなくても、孫策なら行動で示した筈だし。まあ、強いて言うならそうだなあ。

「もう少し、仲間を信じてやれ。大切な仲間なのだろう？」

そんなところですかね。

周瑜さんは色々と考える様にしばらく無口になったあと、やがてぽつりと、眩くよう

に言った。

「そうか・・・信じていなかったのは、私の方か。」

馬鹿だな、私は。俯く彼女の頭を撫でて、ちゃんと治して、帰ってから謝れば許してくれるよ、君ならそうするだろうしね、とそれっぽい事を言っておく。正直真面目な雰囲気続き過ぎて疲れてきた。シリウス美毅さんは1年に一回くらいで十分だと思うんだ。

というか、明らかに近くで何人が聞いているんですけど。しかも1人は多分黄蓋さんなんですけど。これ以上シリウス続くなら変わってほしいんですがマジで。

いつの間にか周瑜さんがこちらにもたれかかってきてるし、なんか凄い頭撫でにくい。もうやめても良いだろうか。シリウスな雰囲気頭を撫でて誤魔化すとやめどき分からなくて困る。なんでやってしまったんだ俺。

・・・そろそろ毛布有りとはいえ、冷えてくるな。どうも風呂には皆入ったみたいだし、俺たちも入って寝よう。そんな感じの事を言って立ち上がる。いや、俺たちよりも盗み聞きしてる連中が風邪を引きかねないしね。毛布被つてもないだろうし、風呂上がりなら湯冷めしてる頃だし。

すると周瑜さんにズボンが掴まれる。見るとこつちを見上げる周瑜さん。なんぞ？

「冥琳だ。これからはそう呼んで欲しい。」

えっつっ。それ治療成功した時の報酬なんですけど。なんで急に。ていうか急過ぎで盗み聞きしてる人達の方から殺気が漂ってきてるんですけど！いい、いや、ちゃんと治療成功してからにしよう、ね？約束はきちんと護るべきだよ！

「それだと治療が成功しなければ、永遠に私が真名を呼んでもらえないじゃないか。それとも、死ぬかもしれない人間と真名を交換するのは嫌か？」

そう言つて不安そうに見つめる周瑜さん。・・・いや、卑怯だよこれ。この顔でこんなこと言われたらカズマさんだって断れないってマジで。仕方なく、道玄だ、よろしく冥琳。と返す。一層殺気が強くなつたが勘弁してください。無理だつてこれは。見ろこの笑顔。あのお堅い女教師みたいな周瑜さんがこんなに嬉しそうに笑つたら、だれだつてまあ良いかつて思つちやうよ。

とりあえず、女性陣から上着を借りておく約束をして、周瑜さんを風呂に送り出す。彼女が黒い帆布の裏に消えた辺りで、声をかける。えつと、今回ばかりは勘弁してください。・・・駄目？

「駄目ですな。」

「駄目だな。」

「駄目です。」

「駄目に決まっています。」

「駄目よ。」

「いや、まあ儂としては寧ろ本気で感謝してるんじゃないが・・・まあ、頑張ってください。」

そこにはやはりというか何というか、黄蓋さんと愛紗と星と凧、何故か秋蘭と華琳さんがいた。ていうか、秋蘭と華琳さんはなんで居るの!? 凧も飯も終わつたなら自軍の天幕帰りなよ! つーか黄蓋さん謝る前に変わってくれよ! なんでポツと出の蛮族な俺にこんな大役投げるんだよ! 馬鹿なの?

「良いから行きませすよ、道玄」

ガシツと愛紗に腕を掴まれる。反対の手は凧だ。いや待て、せめて秋蘭と華琳さん達は混ぜるなよ! え、それは大丈夫? それ以外の全員でするから?! ちよ、まさか星が居なくなつたのつて皆を呼びに行つたのか? ま、待つて待つて、秋蘭達ついてきてるよ? やめどこ? 明日も早いしき! え、何秋蘭、一口で大丈夫? 何をだよ馬鹿だろ! 寝坊したら引きずつていくつて華琳さん、ちよ、なんか慣れてきた自分が嫌だ! アツク!

この後無茶苦茶朝まで絞られたよ！

・
・
・

そんなこんなで陳留に着いて華佗に再開したよ！

「久しぶりだな、道玄！」

久しぶり華佗。聞いているとは思うけど、お前に見て欲しい患者がいる。頼めるか？
そう訊くともちろんだ！と熱く答えてくれる華佗。なんてええやつなんや。早速周瑜さんを見てもらうと、やはり難しい顔をされた。やっぱりキツイか？

「かなり進行しているな。気の力だけでは患者の体力が足りないかも知れない。薬が必ず要だ。・・・ただ、材料が特殊でな。」

ああ、龍のツノだっけ。ハイこれ、亜龍で毒持ってた龍のなんだけど大丈夫かな？
そう言つて2メートルくらい龍のツノを渡す。

「うおっ!?どこからこれを・・・いや、それはとにかく、毒は大丈夫だ。角に毒がある

わけではないし、亜龍とはいえ角だけでこのサイズなら、生命力も効能も龍に負けないはず、と言うかこのサイズの亜龍なら並みの龍より効能が高そうだ。けど良いのか？ かなりの金額になるぞ、この角。」

良いよ別に。命が変わる金なんか無いし。ああ、余ったら好きに使ってくれ。お前なら有意義に使ってくれるだろ。ん？ なに周瑜さんに黄蓋さん。良いのか？ 良いって良いつて。どうせ持っても俺たちには使えないし。人の役に立つならそれに越したことはないさ。ていうかもう一本あるし。

「分かった。ならばありがたく使わせてもらう。その代わりに、彼女は絶対に救ってみせる!!」

頼んだ。あ、もしも一本が必要なら言ってくれ。あ、必要ないの？ 了解。

…その後、俺の渡した龍の角と様々な薬を使って、いにしえの秘薬的回復薬を作った華佗は、それを周瑜さんに飲ませたあと、彼女の体に鍼を刺して、元気になれえー！ と大量に気を送り込んだ。

薬のおかげもあって無事に治療は成功し、今周瑜さんは寝台で寝ている。体力を消費しただけで、暫くすれば目が醒めるとのことだ。但し、しばらくは安静にして、栄養をたくさん取らなきゃならんそうだが、その辺は俺と流琉が居れば大丈夫だ。食料もたく

さんあるしな。

だいたい1ヶ月と言われたし、それまでは陳留にいて、それから呉に向かわねば。食料とかの準備もだが、それまでに反董卓連合収集されないと良いけど。まあそれは考えでも仕方ないか。

とりあえず、眠る周瑜さんの看病を流琉に任せて外に出る。差し入れに果物でも買っておこうと思ったのだ。すると黄蓋さんに出くわしたので、一緒に街へ買い物に行くことになった。

「祭じゃ。お主に預ける。」

ファツ?!いきなり何?商店街に向かって歩いてたら、急に真名を預けられたでござる。もつと大事に扱おうよ、神聖なものだろ!

とりあえずそう言つて拒否つてみたが、感謝の気持ちだと言つて譲らない黄蓋さん。何でも、周瑜さんの病と悩みを解決したお礼だとか。それなら周瑜さんにもらったよ、

真名。

「本来なら、儂等が気付かねばならない事じゃった。だが情けないことに、病も悩みも、何にも気付いてやれなんだ。周瑜はお主の言う通り、これからの呉に欠かせない存在じゃ。だから、感謝と信頼の気持ちじゃ。受け取ってくれんか？」

「むう、そう言われたら断りにくい。諦めて道玄だ、と短く返しておく。すると彼女は嬉しそうに笑って、俺の腕に絡みつく。うっわこの人笑うと可愛い。ていうか胸押し付けないで下さい。え、本気で呉に来ないか？んー、考えてもいいかな。美味しいものあれば。」

「儂等以上に美味しいものなど無いぞ、ほれ。」

ぬぬ！そうきたか！思わず確かに！って力強く頷きそうになったわ。危ない危ない。流石呉の熟オツパイ。簡単に陥落しそうになった。だが負けないぞ！何故なら後ろからついてくる気配がたくさんあるからな！

その後何とか誘惑を乗り切り、果物を買って帰った。そして、待ち構えてた皆には寧ろ自分から全員で誘う。何気に初挑戦だ。

初挑戦の甲斐あつて見事にうやむやになった！ふふふ、俺も成長してるんだぜ！

そんな感じで珍しく嫉妬エンドを避けた俺。次の日に全裸で乱入してた秋蘭に台無しにされたのは、余談だろうか。

続く？

30話 甘い焼きトウモロコシ生活

よあみんな、桃は菓子にしたりするより丸齧りが一番だと思うオーク系転生者の俺だよ！

陳留に着いてから2週間が過ぎた。

なんだかんだ言いながら、結局俺たちも劉備さん達と一緒に再び曹操さんの下で働いています。路銀の関係ですね！ちなみに今回は長くない予定の為、凧と一緒に警邏隊だ。凧を言葉巧みに騙くらかして、凧とサボろうとすると、何故か星が嗅ぎつけてくるので、大変だ。

とはいえ、流琉と黄蓋さんは周瑜さんの看病の為に残している。

周瑜さんは着いたその日に治療を受けてからも、しばらく華佗に診てもらっていたが、最近になって後は完全に養生するだけ、と言われたようだ。栄養たっぷりとして軽い運動をしろ、と言われたので、俺がいない時でも流琉が張り切って薬膳料理を作っている。

周瑜さんの運動にと、日々陳留を散歩しているのだが、何故か黄蓋さんがいるのに俺も付き合わされている。基本は財布役だが、時々荷物持ちだ。

また、前と同じ場所を借りて住んでいる。何か完全に俺たち専用になっっているらしく、同じ階層には兵が一人もない。なので真桜が壁を壊して広くしてしまい、俺が荀彧さんに怒られた。解せぬ。

ちなみに、下の階には周瑜さんに黄蓋さん、それと劉備さんと一刀くんがいるが、俺たちと同じ階は愚か部屋の下にも皆入ろうとしなかった。自覚があるので感謝しておく。

最近是一刀くんが俺がアドバイスした組織とかシステムなんかを見て、どうしてこれを？とか聞いてくるが、フリーリングとか言ってテキストに誤魔化しておく。俺と違ってちゃんとした知識がある彼は、俺のアイディアを穴埋めしてちゃんとした形にするので、曹操さん達も結構気に入って来てるようだ。良きかな良きかな。

まあそれで勧誘された一刀くんが劉備さんに泣かれたりして非常に面白いんだがね！劉備さんは劉備さんで勧誘されてたけど、きっぱり断ったみたいだ。とりあえずいつもニヤニヤしながら見ている。

「貴方がウチに来てくれれば、北郷を諦めても良いのだけれど。」

「華琳様、私はどちらにも反対ですっ！男なんて要りません！」

「む、むう。道玄なら考えなくもない。」

「おにーちゃんとは流琉は良いけど張飛が要らないっ！」

「だそうだが、いつ正式に仕えるんだ？」

予定は未定ですね。後秋蘭、お前そろそろ全裸で朝に布団の中に忍びこむのやめろ。いい加減寒くなって来たし、風邪引くぞ。毎度毎度愛紗に怒られる身にもなれ。っーかどうやって隣で寝てる愛紗に気付かれず侵入してるんだ？

「お前が暖かいから平気だ。あと、愛の力に不可能は無い。」

ニヤケ面で言わなきや喜べるのに。春蘭が秋蘭！って泣きそうだが、もうめんどくさいので、本人達に解決して貰おう。長居すると疲れそうなので、頼まれていた俺と流琉特製のカステラケーキを渡して、彼女達のお茶会を後にした。最近俺の調理スキルがプ口級になっててわろた。

・
・

「こんな感じでどーやろ？」

そう言つて真桜に見せられたのは、円形のベンチだ。水に浮かないタイプの木材で作つてもらつたもので、風呂代わりにされる、大寸胴鍋や、つい最近完成した風呂専用大石釜の中に沈めて使うもので、これはその風呂専用大石釜用に作つてもらつた。うむ、完璧である。流石だな。

「にひひ、ほな報酬の方、忘れんといてや！」

了解だ。そつちも頼むぞ？

そう言つと、真桜は皆には内密にやな？任せとき！と笑つた。実は今回、俺のとつておきの場所、周りからは見えない様に木の生えたとある山の頂上で、満月を見ながら風呂に入つて月見酒と洒落込むつもりなのだ。しかも、相方は愛紗だけ、という皆にバレたら最低でも朝までコース確定案件である。

何故愛紗かと言つと、ここ最近彼女と一緒に時間が取れず、彼女の不満が溜まりつつあるからである。

というのも、陳留での日々の生活では、夜以外は何かと愛紗と俺が被らないのだ。俺は基本警邏隊だが、警邏隊の仕事として軍師組の警護として華琳さん達の視察なんか

引っ付いて行ったりするので、自然と凧、稟、凧、朱里、雛里、は仕事にもよく会う。流流とは周瑜さんの看病の為に休憩時間にほぼ毎回会うし、鈴々と沙和は非番が重なりやすいので良く一緒に出掛ける。真桜とは良く昼食を一緒に取り、星はよく書類仕事をサボって街にいたので、警邏隊の仕事で、一緒になったりする。

その他にも曹操さん達の誰かや、黄蓋さんや周瑜さんと一緒にいる事が多い最近では、ひたすら愛紗だけが一緒にいる時間が少ない。まあ、あくまで昼の話で夜は皆一緒に寝てるんだけどね！とはいえローテーションがあるから愛紗を抱かない日もある。昼間会えないのに夜も、となると、鈴々よりヤキモチ焼きな愛紗が不満を貯めるのも仕方ないのかもしれないな。

そんな訳だから、今回こんな危険を冒して、真桜には口止め料を積み、何とか手筈を整えているのである。とはいえ、これが最後のピースなので、明日の満月の日に愛紗を誘って行けば完璧である。まあ雲が出ないことを祈ろう。

「にしても、にいさんはほんまに愛紗に甘いなあ。」

羨ましいなあ、とこちらを見る真桜。物欲しそうな顔をしている。報酬の上乗せ希望だろうか？

と、思ったが違う様だ。何となく何を求めているのかが分かったので、ベンチを周り

から見えないように四次元袋にしまうと、真桜を抱き寄せる。真桜が顔を上げて目を瞑つたのに合わせて、唇を重ねる。地味に身長差のせいでやり難いが、幼女達と比べたらどうということはない。途中から舌を絡ませて、濃厚な接吻を交わす。

やがてお互いの唇から糸を引きながら顔を離す。真桜の顔がとろける様に赤い。満足か？

「んー、このまま最後までねっとり愛してくれたら満足するかもしれへん・・・。」

そんなことを言いながらしなだれかかる真桜。しかしそれは無理だな。なんでや、つてお前ここ何処だか忘れたのか？お前の仕事場だぞ。

ハツと周りを見渡す真桜。余裕で周りから見られてる事に今気付いたらしい。さつきとは別の意味で顔が赤くなつた。キスしてた時なんて砂糖吐きそうな顔で睨まれたからな。今はまだマシな方だ。嫉妬隊を一度叩いてから、この状況でも文句言う奴は居ない。良いことである。

とにかく、報酬忘れんといてや！と、先ほどまでかかっていた仕事に走って行つた真桜。うむ、可愛い。星なら見られてる方が、とか言い出すからな。後でたっぷり続きをしよう。そう考えて、工房を後にした。

・
・
・

真桜の工房を後にした俺は、その足でそのまま愛紗を誘いに行く。ちょうど今日の調練が終わって、兵達が帰ってくるのが見えたからだ。

そのまま兵の流れを城壁の上から見、鈴々や星と話しながら戻る愛紗を発見。ぬぬ、星はマズイな。あいつのこういう時の勘は妙に強い。本人は女の勘です、とか言っていたが、あんな強力な勘を女性全員が持っていたら、浮気する男はとつくに絶滅している。さて、どうしたものかを見ると、星が秋蘭に話しかけられてそのまま何処かに行った。よし、今がチャンス！行くぞー、とう！エリア移動ジャンプ！

遙かに高いところまで飛び上がり、そのまま移動中の愛紗と鈴々の前辺りを狙ってラージャン着地する。俺、参上！

「あ、おとーさんなのだ！」

「道玄?! 貴方はもう、何処から現れているんですか。」

何、ちよつと高い所から急降下しただけさ！とか笑って誤魔化しつつ、抱きついてく

る鈴々を抱っこしてあやす。うちの娘本当に可愛い。なんか周りを歩いていた兵が俺の登場を見て一気に距離をとつたが、好都合なのでそのまま愛紗と鈴々を連れて兵の流れから出る。

何か用が？と尋ねる愛紗に、軽く顔を寄せてひそひそと内緒話をする。その間、鈴々は耳を抑えながら髪をわしゃわしゃして誤魔化す。にやはは！と笑つて楽しそうにしているのので聞いてないだろう、たぶん。

話終わった瞬間、本当ですか!?!と声を上げそうな愛紗の口を塞ぐ。周りを見てから、指一本口に当てて、シー、とバレてはならない事を強調する。愛紗も直ぐに理由に思い当たつたのだろう。直ぐに自分の口を抑えて視線だけ動かして周囲を確認した後、コクン、と頷いた。

なお、その間は何かの遊びだと思つたのか、俺と同じ様にシー！とやつてる。俺の娘本当に可愛い！あんまりに可愛いのでそのまま肩車してやる。おー！と声を上げる鈴々マジ可愛い。

それはともかく、では明日な、と言つて愛紗から離れる。愛紗もはい、と答えて兵の流れに混じる。顔が若干赤いが、まあ何とか誤魔化すだろう。周りに勘付かれる訳には

行かないので、あえてここは離れたのだ。

よし、じゃあ鈴々飯食うか。こないだ流琉と開発した豚骨醤油ラーメン、鈴々盛りで作っちゃる!

「本当なのだ!?!直ぐ行くのだー!!」

わーいわーいとはしゃぐ俺の娘本当に可愛い。そんな娘に手を出している事を思い出して思わず死にたくなつたが、今は鈴々が優先なので、何とか頭から振り払って、俺たちの兵舎まで歩いて行つた。

・
・
・

兵舎にて、鈴々にたつぷりのラーメンを作つて、美味しそうに食べる鈴々を見たあと、鈴々は流琉と用事があつたらしく、周瑜さんの食事を終えた流琉と2人で出かけて行つた。この後は鈴々に仕事はないそうなので、街にでも出掛けたのだろう。

俺はどうするかと食器や鍋を片付けて、考えていたら、周瑜さんと黄蓋さんが歩いてきた。日課の散歩だろう。もう少ししたら武器を持って戦闘鍛錬も始めるらしい。それがある程度済んだら送って行く予定である。

「道玄ではないか。何をしておるのじゃ、こんな所で。」

そうこうしてたら黄蓋さんに声を掛けられた。気付いていたらしい。鈴々と遅い昼飯が終わったところだ、と返し、遅れてきた周瑜さんに挨拶をする。向こうも朗らかに挨拶をするかと思いきや、笑って距離を詰めてきた。

「こんにちは、道玄殿。」

なんかやたらと名前を強調される。なんぞ？よく見たら顔が笑顔で固定されてる。あれ、なんか不機嫌だな。

すると黄蓋さんもくすりと笑って俺の腕を取ると、今は儂等だけじゃぞ？とイタズラっぽく言った。いちいち仕草が蠱惑的で困るが、それで漸く理解した。前にもこんな事あったな。

「すまない。こんにちは、冥琳、祭。」

そう言うのと漸く許してくれたのか、周瑜さんも笑ってああ、と言った。

2人を普段真名で呼ばないのは、2人が俺以外とは真名を交換していないからだ。真名は神聖なものなので、知ってる人しか居ない場所でない限り、人前ではあまり出さないのか俺ルールである。

にも関わらず、うちの女性陣や華琳さん達を真名で呼ぶのは、それが彼女達の要望だからである。何でも嫉妬隊の一件から、俺との仲を他人にアピールしよう、との事であ

る。それまでは心の中ではともかく、人前では基本的に真名を使わないようにしていたのだ。

なお、一刀くんとは真名を交換済みだが、劉備さんとはしていない。劉備さん自身が、俺に認められたらにしたい、と言いだしたからだ。なんか俺が凄く奴扱い過ぎて笑いうだが、本人が満足するまではそれに付き合おうと思っている。ちなみに一刀くんが俺の真名を呼ばないのは、劉備さんが認められてないなら、俺もまだまだだ、と自重する方向らしい。2人だけで酒飲む時はたまに漏らすけど。

「今から散歩に行くんだが、一緒に行かないか？」

そう問いかけてくる周瑜さん。んー、嬉しい誘いだだが、少し前まで周瑜さんや黄蓋さんとの接触が多過ぎて、愛紗達が容赦なく夜に荒れ狂う為、ここ最近は見病時以外は自重している。なので申し訳ないが断ろう、そう思って声を掛けようとして、しかし強引に腕を引っ張られた。意外な事に周瑜さんだ。

珍しい、と言うか何故？と思ったが、周瑜さんが良いから行くぞ、と歩き出す。またなんかちよつと不満げである。

ちよつと困惑気味に歩いていると、黄蓋さんが反対の腕に絡みつくとかラカラ笑いな

がら言った。

「お主が最近朝と夜の少ししか逢いに来ないから、ずっと文句を言うておったぞ？ま、男の甲斐性だと思つて付き合つてやるんじやな。」

文句は言つてない！と周瑜さん。しかし確かに露骨だったかと反省する。如何なる由があれど、真名を交わすほど信頼してもらえたのだ、配慮が足りなかつたな。そう思つて謝罪する。

すると腕の締め付けを強くする周瑜さん。これからできる限り散歩に付き合う事で許すと言うので、了承しておく。黄蓋さんが儂はなるべく酒に付き合つてくれれば良いぞ、と楽しそうに言う。いや、あんたの酒に付き合つてたら肝臓が死ぬよ。毎日じゃん。そういうと儂の誘いを断るのか！と怒られた。

するとそのやりとりを見て周瑜さんが笑い、黄蓋さんも笑つた。両手に花の状態だが、そのまま歩いて行く。考えてみたら、今はあれだが、いずれは敵対する相手の縄張りに味方が2人だけというのは結構プレッシャーなのかもしれない。これからはなるべく気を遣わねば、と思つた。

・・・とりあえず今はこの状態をウチの女性陣に見られないように祈つておこう。

余裕で見つかって、夜酷い目にあいました☆
まさかの速度アツプ要求とは・・・orz

・
・
・

次の日の夜。

すでに秘密の場所の準備は完了し、後は愛紗を連れて行くだけだ。なので俺は皆にかつて仲良くなった兵達と飲んでくると言って抜け出し、今は待ち合わせ場所の城壁の上で愛紗を待っているところだ。

しばらくすると息を切らした愛紗が、周囲を警戒しながらやってきた。
「すいません、遅れました。風に勘付かれまして・・・。」

誤魔化して逃げてきた、と言う愛紗。珍しく白いワンピースの様な服を着ている。相変わらずこの世界の服飾職人は生きる時代を間違えていると思うが、よく似合っているので褒めておく。でも上着は着て来いよと思う。

「ありがとうございます、と頬を染めて嬉しそうに言う愛紗。相変わらずこういうやりとりは照れるが、まあ喜んでいるから良いとしよう。」

「それにしても、道玄がこんな風に誘ってくれるなんて珍しいですね。」

いつも他の誰かと一緒なのに、とジト目で見る愛紗。心当たりが多過ぎるので、視線を逸らしておく。着替えは持つて着たか？あからさまに話を逸らした俺に溜息を吐いて、諦めた様にええ、と答える愛紗。今日はその分頑張ったんで多めに見てください。

「そう言えば、言われるままに着替えを持つて着ましたが、こんな時間にどうするんですか？」

そう言つて周りを見る愛紗。まあ、夜だしな。とりあえずちよつと寒いだろうと、珍しく着ていた上着を愛紗に渡して着てもらい、そのまま抱き上げる。無論お姫様抱っこである。

「きやつ、どうしたんですか道玄、急につて・・・完全変身？」

今からとつときの場所に案内するから、よくしがみついてくれ。あ、舌嚙まない様に気をつけろよ。

困惑しながらも、とりあえず俺にしがみつくと愛紗。離さないようにしっかりと抱きし

めると、足に力を込めて一気に跳んだ。

「ちよ、道玄!」

一瞬で小さくなる街の灯りに、愛紗が声を上げるが、無視する。距離的にもう2回くらいかな。

・
・
・

「(い)は・・・?」

仕込みを済ませたとある山の頂上、そこに愛紗を連れて着た。

周りには俺が新しく作った新型の風呂専用石釜と、普段俺達が使うテント、そして朝から必死こいて作りまくった愛紗の好物と、この日の為に手に入れておいた酒を並べてある。そして、上には。

「・・・綺麗。」

大きく輝く満月が。

正直満月を狙ったがここまで綺麗な日になったのは運だ。嬉しい誤算である。雲も雅な程度に残っている。素晴らしいね。

街でも見えない訳ではないが、街の灯りの中では感動は半減だろう。と、いう訳で、ここが俺のとっておきだ。連れて着たのは愛紗が初だぞ。

「嬉しいです……。こんな、素敵な場所だなんて思いませんでした。」

でもちよつと似合いませんね、と笑う愛紗。うるせいやい。

それよりも寒いし、早速だが風呂に入ろうじゃないか。見よ！この力作新型風呂専用大石釜、湯つたり君だ。見てわかる通り、風呂に入りながら酒や食事が楽しめる、超特大の羽板付きだぞ！見所はお湯が溢れても決して料理スペースには行かないこの構造と、お湯を沸かしたり鍋を温めたりできる別離式火鉢がついてるところだ！

この日の為に無駄に力込めて作った！あ、風呂入りながら食事は行儀悪い、とか無しな。なるべくツマミ系に収めたので、ゆつくり月見酒しながら露天風呂といきましょう！

「道玄……。ひよつとして、ここ最近コソコソやってたのはこれですか？確かに凄い作りますが。」

バレたか！元々この場所に愛紗連れてこようと思ってたのさ。だってほら、いつだったか2人だけの時、こうして満月見ただろ？もう随分前の事だけど、あの頃は2人だけだったけど、なんか懐かしくなってるな。また2人だけで月が見たくなつたのさ。

「道、玄……。」

ぎゅ、と抱きつく愛紗。喜んでくれたようである。うむうむ、頑張った甲斐があつたな。そのまま暫く抱き合っていたが、やがて寒くなってきたのか、愛紗が少し震えたので、軽いキスをして離れ、風呂に入ることにした。

お互いに服を脱いで、軽く掛け湯をして風呂に入る。なんとこの風呂専用石釜、階段付きです。俺の無駄なやる気が滲み出ています。そうして2人で風呂に浸かり、杯を取って月を見上げながら乾杯する。

「美味しい・・・これはまた、随分良いライチ酒ですね。」

これまたとっておきだ。恋姫世界でもこの時代は薄いどぶろくが基本だが、何故か焼酎やワインなどもある為、こうした果実酒も存在する。中でもこれは旅してる間に仲良くなったとあるじつさまが作る秘蔵のライチ酒で、あまりの美味さに酒好きの星にも飲ませたことの無い、鈴々が初めておとーさんと呼んでくれた時とか、そういう本当に良いことがあった時にしか飲まないスーパー秘蔵酒である。

今回は特別に愛紗の思い出に残す為に出してみた。愛紗が実はライチ酒が結構好きなのも関係している。星ならガブ飲みするから出して無いのもあるがな。

「そこまで本気で・・・？何かここまでくると逆にちよつと疑わしいですね。何か隠しごとがあったりしませんか？」

それはちよつと失礼だぞ！確かに自分でもここまで力込めたの初めてだけど！・・・まあいいや、とりあえずツمامミも勧める。基本は愛紗の好きな味噌味のものが、この場所と風呂の都合上、冷めて美味しいものがメインだ。唯一の例外は愛紗の好物であるモツ煮込みだろうか。こちらは別離式火鉢の上で保温するくらいの温度で火にかけてある。あつたかいまま食べられる様にだ。

なお、最新料理はこのきゆうりだ。梅干しは無いので、塩でつけた杏を代わりに叩いて、ゴマと和え、カチ割りにしたきゆうりと混ぜてある。梅じゃないがカチ割り梅きゅ

うりである。すっぱしよっぱい、ではなく、甘酸っぱい感じだが、返って濃いめの味付けの口直しにちょうどいい感じである。このサツパリ感を出すのに非常に苦労したのだ。

「凄い、どれも美味しいです！．．．初めて会った時から今まで、道玄の料理はいつも美味しいですけど、今日は何だか格別ですね。」

ちよつと悔しいですけど、と笑って言う愛紗。愛紗が作ると食材か食材でなくなるからな、と言ってからかうと、むう！とむくれる愛紗。可愛い。

しかし、何度見ても綺麗な身体である。そしてその豊満な胸を見て傷が残らなくて本当に良かったと思う。いや、結果的に一刀くんではなく俺がもらってしまったが、例え傷があつても一切気にしたりはしない自信がある。だが、やはりこの綺麗な身体には傷がつかなくて良かったと思ってしまう。

そうして想いに耽っていると、不意に愛紗がこちらに身体を預けてきた。その動きで体に当たる、長湯でできる様にあえてぬるめにしたお湯が気持ちいい。が、愛紗の身体の温もりと柔らかさには勝てんな、と苦笑する。

「もう、人の身体をジツと見たと思つたら急に黙って．．．何を考えていたんですか？」
いつも見てるでしょう？と微笑む彼女に、先程感じた事をそのまま話す。すると、貴方の愛のおかげですよ、と嬉しい事を言ってくれる。正直その頃は下心でしつと言つた

ら怒られそうなので、黙って抱きしめる。更にそのまま唇を重ねてより有耶無耶にする。

「・・・道玄。」

艶っぽい瞳でこちらを見る愛紗を、しかしまだ流石に早いのもう少し月見酒を楽しもう、と笑って身体を離す。

案の定むっ！とむくれる愛紗だが、その次の瞬間にはため息を吐いて、身体を再び預けてくる。そのまま仕方ありませんね、と杯を持ったので、ならいいかと俺も片手で彼女を抱く様に支え、もう片方の手で杯を持つ。

2人でそうしてしばらく月を見ながらゆっくりと酒を楽しんだ。

・
・
・

その後、酒やツマミが一通りなくなるくらい時間が経ってから、湯の中で軽く一回愛し合った。

しかし流石に冷えるので、俺はともかく愛紗が風邪を引く。続きはテントの中で、という事になり、今は2人して身体を拭いている。ああそうだ愛紗!

「はい?どうしました、道玄。」

どうせならこれを使ってくれないか?そう言つて髪留めを渡す。これもプレゼントだ。

「これは・・・?」

お前達がいつも肌身離さず付けてくれている、ミサंगाと同じく俺のお手製の髪留めだ。流石に多少真桜に協力して貰ったが、俺の完全変身時の髪を使って作った紐と、純銀を使って作ったんだ。いつも同じ髪留め使ってるから、良ければどうかな。

「えっ・・・。」

たぶんこれで挑戦者あたりが発動する、などとふざけた事を考えつつ、見ると何か髪留めを両手で胸に抱く様にして涙目の愛紗。

・・・あれ。何かもつとこう、嬉しい!ありがとう!的な反応を期待していたんだが、好みじゃなかったかな?やつちまった系ですか、これ。

と思つたら愛紗が抱きついてきた。しかもこれはあれだ、寂しい時の抱き付き方だ。なんでや、と思いつつ、まだ裸なので風邪引くぞ、とバスローブもどきをかけてやる。

どつたの？嫌だつた？すると頭を、擦り付けるように首を振る。あれ、じゃあなんで？

「道玄……また、私を置いて何処かへ行こうとしてませんか？」

……ほえ？あまりに予想外な質問である。予想外過ぎてまるで一瞬固まつてしまった。なんでそんな考えに至つたのか。そもそも考えた事が無いわけではないが、今まで愛紗を置いて何処かへ行くとかした事はない。計画しても途中で露見したし、俺は女性陣には隠しごとは無理だと諦めている。

理解出来なかつたので聞いて見ると、あまりにも今日の俺は優し過ぎるので、急に不安になつたとのこと。……なんじゃそりや。普通に杞憂なので安心してくれ、との頭を撫でる。本当ですか、と涙目で見上げてくる愛紗。少なくとも今望まれない限りは離れるつもりはない。

「本当は、いつも不安なんです。目を離してしまえば、貴方が何処かへ行つてしまう気がして。流琉の為に一晩帰つて来なかつた時も、公孫瓚の下で、別々の部隊だつた時も……。」

その気になれば、簡単に私から離れていける貴方だから。

そう言つてより強く俺を抱きしめる愛紗。その身体が震えているのは、寒さのせいだ

けではないのだろう。

・・・正直に言えば、ここまで想ってもらえるとは思っていなかった。彼女と身体を重ねるまで、何処かゲーム感覚であつたのも確かだ。だが、この想いに言い訳は出来な
いと思つた。

「愛紗、聞きたい事がある。」

「・・・?なんででしょうか。」

お前や星は、他者の為にその武を振るいたいと言つたな。他者の役に立ちたいと。だがその武を振るえなくなつても、俺とともにいたいと、そう思つてくれるか。俺と一緒に、生きてくれるか。

どういふ事ですか、と愛紗が問うてくる。俺は少しだけ迷つて、でもちゃんと答える事にした。

「恐らく、俺はやがて山に帰らなければならなくなる。」

抱きしめる力が更に強くなり、しかし何か言おうとする彼女より先に言葉を放つ。

やがて禍いがくる。この中華全土を襲う、放つておけば全てを喰らい尽くす、黒く大きな禍いだ。

驚く愛紗を置いて、話を続ける。最初はどうでも良かったこと、黒い禍いでは自分は死なないこと、禍いの前に争う人々を遠くから見ただけのつもりだったこと。

だが、愛紗達を愛してしまった。だから、愛紗達のいる中華を守ろう決めたこと。

「黒い禍いの前では、誰が1番とか、そんな小競り合いをしている場合ではない。どんな結果になった所で、全て台無しになる。」

そして、俺が全力を出しても、薙ぎ払える数には限りがある。横をすり抜けるものは自分達で対処してもらわねばならぬ。だからその時、恐らく俺はこの本性を晒して戦うだろう。

お前達は俺の本性を知った上で好きだと言ってくれるが、それでも俺は人理の外れた場所に生きる獣だ。^{ケダモノ}全力を振るう俺は畏れられる。それは、人の世に生きられなくなるという事だ。

過ぎたる力は個人が持つべきではない。それが人であるなら余計にだ。核ミサイルを好きなように打てる個人、が居たとしたら普通は怖いだろう。何かの拍子に打たれてしまったら目も当てられない。それが故意かどうかなんて些細な問題だ。打てるかどうか重要なのだ。

実態のある脅威として認識されれば、やがては排斥される。一緒にいる彼女達も巻き

込んで。そんな事で俺は死なないだろうが、人間である彼女達は別だ。どんなに強くともやがては力尽きる。そうなれば俺はこの国全てを破壊する悪鬼になる。それは駄目だ。それでは意味がない。

今だってそうならないのは、たくさんの人間がいる大規模戦闘では一時的に皮膚の色が変わる程度の、簡易変身までに抑えて、その上で敵を全滅させているからだ。

俺はお前達が好きだ。だからお前達が生きるこの大地を護る。だが、お前達を護るには、やがて人から離れなければならないと思う。

だから、その時が来れば俺はきつと山に帰る。そして人が知らぬ場所で、やがて静かに死のうと思う。

「それでもお前達は着いてくるか？人の為に磨いた武を捨てて、俺とともに人の居ない場所に来るか？」

そう言って彼女を見る。なんとやっていいかわからない顔だ。当たり前である。いきなりこんな事言われても訳わからん筈だ。そもそもこの世界で、五胡襲来があるかどうか微妙なので、現時点ではただの厨二である。

まあ、断られたら三日三晩落ちこもう。うん。

すると、散々悩んで居たような愛紗がおずおずと切り出した。

「ええと、色々何を言うべきか悩みますが・・・とりあえず一つだけ。そこはお前達ではなくお前は、でしょうが!!」

バシン!

そう思いつきり頬を叩かれる。そこかよ!?!と驚愕する俺を無視して、叩いた手をヒラヒラ振る。どうやら逆にダメージがいったらしい。なんかゴメン。

「全くもう、ここまで御膳立てしておいて、最後の最後に梯子を外すんですから!せつかく幸せだったのに・・・!」

ぷりぷり怒る愛紗。いや、あーた結構不安そうだったり色々してたよ。怒られるから言わないがな!

大きいため息をつく愛紗、あ、これ呆れた時の奴だ。そう考えた瞬間愛紗が飛びついて来た。俺の首を抱えるように抱きついて、唇を重ねる。舌は入れない。そのままです。たつぷり10秒は重ねて、離れる。

「・・・前からずつと言っているでしょう。貴方は私のものです。何があっても絶対に離してあげません。」

そう言つて笑う愛紗。月の光が柔らかかに彼女を照らす。

．．．駄目だこりや。敵いつこねえ。

嗚呼、俺は本気でこいつにヤラれてんな。そう心底理解してしまった。なあ愛紗。

「?なんですか。」

「愛している。」

そう言つて彼女を抱きしめ、熱いキスをした。

．
．
．

熱いキスをした後、流石にずっと裸で抱き合つていたのですつかり湯冷めしてしまい、これはいかんともう一度風呂に入って温まってからテントに入ることにした。

詳しい話は今度する、と約束させられたが、愛紗もとにかく今は身体を重ねたいのだろう。珍しく俺もだいたいぶヤル気なので、さあしつぽりやろう、そうテントを開いたとこ

ろで、

「遅かったですな、我が主人。」

「全くだ。待ちくたびれたぞ、道玄。」

何故か全裸の星と秋蘭が居た。……ファツ!?

馬鹿なっ!? どうやってここが……。いや、それ以前にどうやってこの計画を察知した。真桜がバラす筈はない。何故なら次は彼女の番だからだ。

「……どういふことですか、道玄?」

一気に不機嫌になる愛紗。待て、落ち着け! 確かに俺は愛紗と2人のつもりで準備した!! というか、そうでなくても星はともかく秋蘭は呼ばないわ! お前仕事どうしたんだよ!

「……確かに。どういふことだ、2人とも。」

そう言つて怒気を溢れさせる愛紗。これは俺でも怖い。しかし星は鼻で笑つて、武器もないのに強がつても無駄だと切り捨てる。秋蘭は珍しく春蘭に仕事を投げたらしい。あ、春蘭これは死んだな。普段春蘭の分まで秋蘭が仕事してるからな。今頃真っ白になつているだろう。

「いや何、昨日主人が愛紗とコソコソしているのを目撃しましてな。最初は昼食の誘い

かと思つたのだが、わざわざ誘いに来た割にはそのまま別れていったのでこれは怪しいと思つたのですよ。」

「城壁から愛紗を見る道玄を見つけてな。どうも様子がおかしいから星を呼んで聞いてみようと思つたら、見計らつたように降りて来たからこれは何かあると踏んでいたんだ。」

なん・・だと・・！あの瞬間から気付かれていた？い、いやそうだとしてもどうやってこの場所を！

「朝方太陽が出てすぐ抜け出した主人の後ろをこつそり追いかけてました。」

「大変だつたぞ。匂いで気付かれないように、常に風下に回りながら離れて追いかけてたのに、街の外に出たら一気に跳んで行ってしまふから。まあ幸い目的地付近までは目で追えたから助かつたが。」

とはいえ、離れた山の頂上だから来るのに苦勞したがな、とニヤニヤ話す秋蘭。星もニヤニヤしながら主人が必死に料理したり、私も知らない風呂釜を出しているときは思はず今すぐ出て台無しにしてやろうかと思いましたが、などと言う。

「しかしまあ、愛紗がここ最近割を食っているのも事実。なので、流石に邪魔をするわけにはいかない。だから一番良いところは愛紗に譲ろうと、溢れる嫉妬を抑えて我慢し、最後だけ混ぜて貰おうと思ったのですよ。」

「私はどさくさに紛れて今日こそ最後まで出来ないかな、と。」

そこで今日は引こう、とならない辺りが流石である。というか、なんか凄い不機嫌だな。あ、秋蘭、お前は帰れ。

「べつつにー？我が主人は愛紗だけ特別扱いだな、とか、愛紗には普段しない話もするんだな、とか、愛紗には素敵な贈り物があるんだな、とか不満に思っていたり、怒ってもないでありますよー？」

「断る。華琳様にもしばし時間を貰ったし、人数が少ない今日が好機。逃す気はない！」
いかん、珍しく星がマジ切れである。目が全然笑ってない。メンマを誰かに横取りされてもここまで怒らなかつたのに。キャラが変わるレベルでキレてる。秋蘭は本当にどうして良いか分からない。どうしてこんなになるまで放っておいたんだ！

「いい加減にしろ、星！珍しく道玄が私のためにここまでしてくれたのだ。今日は最後まで道玄は私のものだ！絶対に譲らない！分かつたら帰れ！」

「断固拒否する。もう十分楽しんだらどう？ここからは私が我が主人を独占させてもらう。」

そう言うが早いか、星は愛紗を突き飛ばして俺に飛び掛かってくる。そのまま唇を奪われ、寝台に引き倒される。愛紗がなあッ!と叫ぶのが横目に見えた。

そのまま舌を絡ませて、太い糸が引くほど唾液を交換したあと、情欲と嫉妬に燃える瞳でこちらの目を見つめながら、俺の上にまたがる星。

「我が主人の愛紗鼻肩には困ったものです……。こうなったら愛紗よりも私の身体が良いと認めるまで、許してあげませぬ。覚悟してもらいましょう。」

ちよつと展開について行けないんですが。思わずボケつと流されてしまった。あ、裸のまま愛紗が返せと星にしがみついた。2人が争っているあいだに、素知らぬ顔で秋蘭がやって来て、俺の唇を奪う。あの時と違つて今回は舌の動きが滑らかだ。上手く主導権を取れない。やがて糸を引きながら唇を離すと、艶やかに笑つて言う。

「ふふ、相変わらず愛されてるな。妬けてくる……。ところで道玄、覚えているか?前回別れる前に言ったことを。」

今までふざけていた彼女の目が、急に獲物を狙う蛇のように鋭く、深い情愛が込められた瞳に変わった。しまった、ここまで全て演技か!?

「さあ、もう逃がさないぞ?。……。強制的に私のものにしてやる。」

いつの間にか力が入らない!?まさかこれ、あの時のお香?!マズっ—ツ!

逃げないと、そう思った瞬間、身体押さえつけられる。誰だ！

「何処に行こうと言うのですかな、我が主人？今日という今日は許さないと、そう言ったではありませんか。」

「駄目ですよ、道玄。こうなったらここで改めて私だけを選んでもらいます。いえ、それ以外選ばせません。」

さあ、覚悟して下さい、と3人の声が重なる。あつ、これなんかアレ、思い出したくない記憶が蘇って来たぞ！待って待ってやめてちよつと乗らないでストップストップ！！あ、ちよ

・・・アツー！

31話 夏の人参帳

やあみんな、中の人の写真とか好きな漫画がアニメ化した時の完全にイメージが合わない声とか、知らなかった方がいいこともあると思うオーク系転生者の俺だよ！

さて、関羽さんとデートしたその日から、色々あって3日ほど経ってから街に帰ってきた俺たちは、現在・・・

「この落とし前は、どうつけてくれるのかしら？」

「納得のいく説明を要求します！」

「納得いかなければ極刑です。」

「道玄様、お覚悟を。」

「にいさん、これはやり過ぎとちやう？」

「おとーさんどこいったのだー？」

「お兄さんずるいのー！」

「兄さま！また何も言わずに何処行ってたんですか!？」

「まあだいたいあの想像はつきまますので、」

「極刑で良いと思いましゅ！」

「あんたいい大人が仕事をサボって良いと思ってるの？」

「秋蘭！何処行つてたんだ！心配したぞ！」

「羌毅殿・・・？言いたい事、分かりますか？」

「羌毅さん、流石に庇えないです・・・。」

「もうっ！3人とも何してるのー!!」

「お主・・・、大変じゃのう。」

無茶苦茶怒られています☆

しかも何故かほぼ俺だけっていうね！どちらかと言うと遅れた原因は星と秋蘭なんですけど。もう一日経ったから、とか言つて乱入してきたの2人なんですけど。あつはい、ごめんなさい。

地味に黄蓋さんだけ労ってくれた。助けてはくれないけどな！

そんな理不尽に巻き込まれながらも、とりあえず頭を下げる俺。正座させられてる足が辛いです。ちなみに両サイドには一緒になって怒られてるはずなのに、足を崩して女

の子座りしてる星と愛紗。2人とも俺の腕をとってニコニコしてる。秋蘭は後ろで立ったまま、にこやかに春蘭の相手をしてる。なんかおかしくない？

ああほら、案の定余計に皆怒りだした。反省しよーよ3人とも。

「ふふ、そうですね、道玄。」

「仕方ありませんなあ、主人。」

「全く、道玄ときたらこれだ。」

ご覧下さい、この笑顔。話をまるで聞いておりません。

ほら見ろ、皆の額に血管が浮いたぞ。はは、どうせ俺だろ？分かったよもう。ごめんなさい、許して下さい。

この後滅茶苦茶説教されたよ！

・
・
・

あれから、やたらと俺だけ説教され、女性陣全員の要求を飲むことを義務付けられま

した。何故か春蘭や荀彧さん、周瑜さんや黄蓋さんまで要求されたのは納得がいきませんが、反論は許されないらしいので、俺に人権なさ過ぎわろた。あ、良く考えたら人間じゃねえや俺。

とりあえず許しては貰えたから良しとしよう。とりあえず今は2人に街の案内をしなれば。今更ながら視察らしいよ！ちなみに俺ら警邏隊はこうして要人の護衛ともやつちやうんだぜ！

で、なんか大事件が起きたとか何とか。なんぞあつたんや？はい劉備さん、教えてくださいな。え、私ですかって君です。ちゃんと情報収集してるかなと思つて。

「ええと、何でも十常時と何進大將軍との政争で、何進大將軍が暗殺され、董卓さんが天子様をお助けしたとか・・・？」

なんか物凄いわれな情報だけど、だいたい何が起きたかは分かつたから今はいいや。とりあえず後で朱里詳しく教えてくれ。あ、劉備さんも後でちゃんと聞いてね。いや、判断下す君が情報ちゃんと知らなくてどーすんの。テキトーに聞いてちゃあかんで。あ、一刀くんも念の為聞いてときー。

「あ、はい。分かりました。・・・えっと。」

やたらと戸惑う一刀くん。まあ理由は一目瞭然なので、気持ちには分かる。はあ、とため息ついて、もう何度目か分からないが、その原因に声をかける。

なあ、愛紗。はな「嫌です。」

どうよ、最後まで言わせてさえ貰えないぜ！

そう、あの後なんだかんだ許してもらい、秋蘭や星なんかは、上機嫌なまま、というか上機嫌過ぎてサボった分の仕事をしに行つた。のだが、何故か真面目というか真面目すぎる筈の愛紗は、ずっと俺の右腕にしがみついたままだ。いや、仕事しなよ。

「嫌です。まだ絶対に離れません。というかももう離れません。」

なに言ってるんの貴女。キャラ崩壊してるぞ・・・あれ、これサービスし過ぎのせいだろうか。いや、まさかな。

というか、一刀達どころかすれ違う街の人がやたらとこつちを振り返る。ガチの美女と野獣なので仕方ないが、物凄い注目度である。其処彼処で出会う知り合いやちびっ子達が、また女連れかよー！と笑いながら通り過ぎるので、正直恥ずかしい事この上ない。なお、子供達に余計な言葉を教えた奴らには、彼らの元キューピッドとして、彼らの奥

様方に、みんなで娼館に行こう！という彼らの計画を暴露しておいた。別にこれは奥様達と彼らの仲を思つての事だ。小さい子供になに吹き込んでんだこのヤローとか、他意は一切ない。無いつたらない。

つーか、同じ警邏隊の風の無言のジト目がやたら辛い。さつきから俺の腕を取るついでに執拗に足を踏んでくるし。いや、痛くはないんだけどね。アイコンタクトで夜は覚悟して下さいと伝えられる。ああ、せつかく許して貰えたのに・・・orz

「えと・・・頑張つて下さい？」

劉備さん、助けようって考えはないの？ないかー。え、女の人をたくさん侍らせてるから駄目？ふふ、それは多分そのうち言えなくなるよ、きつと。何せ君の男は超絶イケメン北郷一刀だからな。黄巾討伐戦の時、孫策とかと仲良くなつてたし。

「えッつ、羌毅さんそれ内緒・・・っ」

「・・・どういふことかなあ、主人さまあ？」

はっはっは、一刀くん。かつて最悪なタイミングで俺の好みをバラした事、俺が忘れ

たと思っていたのか？これでチャラにしてあげよう。まあ大丈夫、劉備さんは優しいから。

そういう問題じゃない！って叫ぶ一刀くんだが、劉備さんに物陰に連行されて行った。ナムナム、と手を合わせたところで、劉備さんってこんなに嫉妬深いキャラだったか、と疑問が湧く。まあいいや、きつと最初から独り占めだったから独占欲湧いたんでしようたぶん。ふふふ、一刀くん。君はいい友人だったが、君がハーレムエロゲ主人公なのに一途でいようとするのがいけないのだよ。

決して修羅場経験者の同士が欲しかったとか、そんなことは全くない。なので物陰から聞こえる叫びは聞かなかったことにしよう。

閑話休題。

あれから、視察もとりあえずひと段落したので、みんなで飯でもという事になったの

だが・・・風以外の警邏隊連中が逃げた。劉備さんと一刀くんもだ。

原因はこれだ。

「風、気をつける。道玄が私達に優しい日は、1人にしたらすぐ他の女を引つ掛けてくる。」

「御意。片時も離れません。」

「羌毅殿が動き辛そうですよ、2人とも。食事時くらい離れるべきでは？」

「あの周瑜がここまで・・・お主、やるのう（笑）」

やるのう 笑 じゃねえよ！もうちよつと納める手伝いしようよ！

儂にはいいツマミじやなあ、と笑う黄蓋。その言葉通りに実に楽しそうにニヤニヤ酒を飲んでいいる。実に絵になる姿で、偶に一緒に飲むときもそうだが、この人は本当に美味そうに酒を飲む。それだけなら実に魅惑的な美人さんなんだが・・・ちよつと星や秋蘭みたいに、事態を面白くしようとするところがある。困った美人さんなのだ。

あ、ハイ。もちろん2人の方が美しいヨ！察知された。こいつら普通に心を読み始めたぞ。見聞色の覇気に目覚めたか！

どうしてこうなった・・・？えーと、そう。飯でも食いに行こう、と話が纏まったま

では良かったのだ。

警邏隊のヤロー共もコブ付きとは言え、美人と一緒に楽しそうだったし、俺のおすすめという事で劉備さんや一刀くんも楽しみにしていた。未だ俺の腕に絡みついて離れない愛紗と、真面目に仕事をしながらもふとした瞬間に俺の足へ攻撃してくる風を除けば特に問題は無かった筈だ。

問題は、その飯の目の前で、日課の散歩中だった周瑜さんと付き添いの黄蓋さんに出会ってからだ。

別に出会った事は問題はない。何故なら2人にここがオススメと教えたのは俺だ。うちの女性陣は、風を除いて辛い物が好き、という者はいない。別に嫌いなわけではないし、風みたいに舌が麻痺するレベルの辛さでなければ皆普通に食べる。しかしこの2人というか、呉という国がそうなのは知らないが、いわゆる辛口（風は超激辛、みんなが食べるのはやや辛口）が2人は好きだ。

これから行く店は、前に俺と流琉が入り浸って色々口出しというか、夏の暑さを楽しく乗り切る辛い物が食べたいとか前に居たの冬なのに散々力説しまくったりした結果、辛口なのに辛い物が苦手な人でもやめられない止まらない、娼婦風スパゲティー並の料理がたくさんある様になった店だ。だから2人も好きだろうと思つて俺が教えておいたのだ。

が、2人と出会って、みんなで挨拶し合った直後。周瑜さんが俺の合いていた方の手を何気なく取ってせっかくだから一緒に食べよう、そう言った瞬間だった。普通に俺が了承、と返す前に、

「凧！防御陣形その二！」

「御意！」

と急に臨戦態勢になった2人が何故か周瑜さんを振り払って俺の両腕を固めた。防御陣形？なにそれ初耳。

呆気に取られる俺たちや黄蓋さんをおいて、周瑜さんを睨む2人と苦虫を噛み潰した顔で舌打ちする周瑜さん。えっ、なにこれ。急展開すぎるんですけど。

しばし3人の間で無言のやりとりが続き、その間に何かを察した劉備さんが、あつよく考えたらお城で仕事あったんだー、とやたら棒読みで逃げ出し、一刀くんもあ、俺もだーと同じく棒読みで続く。隊員達に至っては、あれだけタダ飯と喜んでいたのに、何事もなかったように休憩時間終了ですな。昼メシ食い損ねたーと去っていった。当然だが、劉備さん達の仕事はこの後も街の視察であるし、隊員達の休憩は時間でいったら五分前に始まったばかりである。

一瞬で人が居なくなり、残されたのは睨み合う3人と、事情を把握したらしいニヤケ面の黄蓋さんと、逃げられない俺。そして店の中から心底関わりたくなさそうにして

る、馴染みの店主だ。

とりあえず誰かを巻き込む為にそのまま店に入ってやった。反省も後悔もしていない。

そして先ほどのやりとりまで戻る。

??

やたらと続いた3人の争いも、おっかなびっくりやってきた店主が、評判の料理を持ってきた辺りで一旦落ち着いた。食べ始めてからは普通にいつも通りにこやかに話している。うむ、美味しいものは偉大である。

「この腸詰、辛いが美味しいな。羌毅殿、後で話がある。」

「タコの激辛炒め、美味しいです。道玄様、皆にも伝えておきますね。」

「流石道玄と流琉の手が入った店だな。この豚肉と野菜の辛旨炒めは癖になる味だ。・・・道玄、逃がしませんよ。」

「プークスクス、こんな大男が弱い女子の尻に敷かれておる！笑いが止まらぬのう！」全然落ち着いてなかった。これ後回しにただけだ！

待って皆、俺悪くないよ！黄蓋、テメーは後で泣かす。

「ああ、やれやれ……。いいや、一旦全部忘れよう。とりあえず全部置いといて、ちよ
うど2人に話があつたんだ。周瑜さん、体の調子はどうか？」

「ん？そうだな……。正直に言えば、絶好調だ。華佗に言われてのんびりしているが、直
ぐに戦闘ができそうなくらい体が軽い。」

それがどうした？そう問い返してくる周瑜さん。嘘を付いてる匂いはしないし、実際
に絶好調なのだろう。つーか最初の方は何もしなくていい日なんて久しぶりだ、なんて
感慨に耽りながら部屋で悠悠自適に過ごしていたのに、最近はやることがない、と愚
痴っていたくらいだからな。ワーカーホリックなんだから。偶に話し相手になれ
と言われて長々捕まったりするんだよなあ。しかも9割が孫策さんの愚痴と惚気だか
ら困る。

「少し出立を早めたい。」

「……。それは構わないが、何かあつたのか？」

「そうじゃな、せつかくこんな公的に仕事を休めるというに、わざわざ台無しにする理由
はなんじゃ？」

もう少し余裕があつた筈だ、とそう暗に指摘する黄蓋さん。ふざけた言い方して周瑜

さんに睨まれてるが、あれは華佗の言う周瑜さんが完治する時間をしっかり守って、できる限り周瑜さんの体の後顧の憂を断ちたいとかそんな感じだろう。分かりにくい子が子を守る母みたいな目つきをしてる。

両サイドの2人も何故?とこちらを見ている。まあ俺も今日入った情報で決めたからね。言つてないし仕方ないよね。ごめんよ2人も。

ええと周瑜さん達には出来る限り朱里達が情報を渡してると思うけど、十常時と何進の争い聞いた?何進が暗殺されて、帝は董卓さんが救い出してつて奴。

「ああ、それなら昨日の夕食中に聞いたな。誰かさんは居なかったが、典韋が夕食を作ってくれてみんなで食べたんだ。その時にな。」

「確かにそんな話があったのう。最近の夕食は薬膳でないから周瑜が喜んで典韋の飯を食べていたし、お主が居なくて皆つまらなさそうだったから良く覚えておる。それがどうかしたか?」

・・・2人とも事あるごとに嫌味挟まないで下さい。こちら側だつて風はまだ地味に怒ってるんですよ!ほら、愛紗だけニコニコし始めて、風がまた机の下で俺の足踏み始めたのだろ!

て違う違う!直ぐに話が横にそれそうになるな。とにかくそれだ。たぶんまた乱が

起きるぞ。まあ正確な時期は分からんが、ここからだといは一月掛かるって話だし、早めに出た方がいい気がするよ。

「乱……？確かに大事件だし、これでまた国へ不満や不安が溜まるだろうから、またあちこちで賊が出るだろうが……そんなに急ぐ様な事か？」

んー、たぶんそれもあるだろうけどね。もつと面倒で大きな事が起きるよ、きつと。まあ現時点で起きると決まった訳では無いのだが。

「まだ確定では無いのか？それならそう簡単に大規模な戦が始まる訳もないし、幸い周瑜の療養も後2週間程度なのだから、待つても良いと思うが？」

うーん、俺も正直に言えばたぶん大丈夫だと思うのだが、相手が予測つかないからなあ。確かに周瑜さんの身体が第1ではあるんだよな。どうするか……。

「読めない相手？道玄様、心当たりがあるんですか？」

ん？んーまあ確定ではないけどね。あるよ。

全員が誰だところちらを見る。まあ今の所確定ではないぞと再三前置きしてから、袁紹だと告げる。皆が驚き、少し考えて周瑜さんが理由が無いから大丈夫ではないか、と言った。うーん。まあでも確かにそんな直ぐに起きないとは俺も思うんだがなあ。

うーむ、では念の為文だけ出してもらえるか？最悪の場合周瑜さん達抜きで部隊とか編成することになるかも知れないし。

そう言うのと、未だ半信半疑な二人だったが一応了解してくれた。まあ良しとしよう。とりあえず話は終わりなので、そのまま食事の続きをしてその日は終わった。

：まあ、風の宣言通り、夜は大変な目にあつたが。正直そろそろ慣れてきた。ふつ、いつまでもやられっぱなしの羌毅さんじゃないんだぜ！

あつ、嘘です。調子に乗りましたごめんさい。だから皆手加減して下さい。つていうかなにシレットと秋蘭混ざつてんだよ止めろよ！お前が混じつてるから唯一ご機嫌なはずの愛紗まで荒ぶつてるだろ！あつやめて！また腎虚になつちやう！

．．．ローテーションなど無かつたんだ。

．
．
．
はい、そんなこんなで三週間が過ぎました。

アレから直ぐに劉備さんに太守だかなんだかの辞令的な奴が下り、ここから少し離れた所とかで、ちやつちやつと出立していった。何でも食糧とかの備蓄的にギリギリになりそうだとかで、曹操さんから給料がわりに物資を支給してもらつて凄く恐縮していた

劉備さん。

2人が笑顔でどちらが天下をとるか勝負よ！みたいな事言つてて青春だなぁって見てました。というか城もつの遅くねとか思つてたんだが、良く考えたらメイン武将と軍師を俺が取っちゃって初動がやたら遅れた以上当たり前だった。流石に申し訳ないので、周瑜さんを送つたら合流を約束した。ものっそい待つてますからね！つてプレッシャーかけられた。これで俺があのかの村の桃園を占拠したらどうなるかな。いや、やらな

いけど。
で、現在。俺の前には頭の痛そうな華琳さんと、驚愕する周瑜さん達。原因はこれ、袁紹さんが送つてきたという檄文だ。

「天子様がかの逆賊董卓に囚われ、董卓は都洛陽で天子様の権力を勝手に使い悪政をしいていますわっ！天子様もお救いするのは我々臣下の役目、皆さん高貴なる私について来なさいおーほっほっほ！」

なんか雛里に読んでもらった内容を思いつきりざつくりまとめるとこんな感じだ。色々突っ込みどころ満載だが、とりあえずわかる事、それは。

はい来た反董卓連合編ですよっ！

・・・だから早く行こうぜって言ったじゃんさあ。

続く？

3 2 話

味付けは塩だけで美味しい焼き豚

やあみんな、優柔不断は時代を間違えれば死ぬと知ったオーク系転生者の俺だよ！

さて、あの袁紹さんの雑な檄文から、一カ月。俺たちは汜水関に到着した。色々問題があつたので、幾つか紹介しよう。

まずは周瑜さんと黄蓋さんだ。結論から言つて2人は帰るのを諦め、俺たちと一緒に戦場であるここ汜水関まで付いてきた。

理由はまああれからすぐ出てもこの戦が始まるまでに間に合わないからだ。呉に着くのに一カ月かかる時点で、呉に着いた時に大部分は戦に出発しているし、それぞれの調練などの下準備の時間も無い。

前回俺が頼んで出してもらつた手紙に、念の為こういつた緊急事態の事も纏めてあつ

たらしく、追加の手紙だけ出してあつさり現地集合を決めた。ちなみに手紙は早馬で出したので、2週間くらいで着くとのことだ。なお、この早馬で周瑜さん達が帰らなかつたのは、1日ずっと馬に乗り続ける必要がある強行軍だからだ。本人はいたって絶好調でも、病みあがりには違いないので、大事をとって諦めた。

というか、黄蓋さんが諦めさせた。周瑜さんだけならやりかねないというかやろうとしてたが、何のためにここに来たのか忘れたのか！と超激怒して周瑜さんを鎮圧した。流石である。

まあその後ちよつとだけギクシヤクした2人の仲を取り持つため、俺が散々2人の酒に付き合う必要があつたがな！あいつら酒強すぎ！何なのウワバミかなんかなの？無駄に酒に強い鈴々や星より強いぞ。肝臓が死ぬかと思つたわ！

二つ目の問題だが、これが大問題だ。いや、この世界的にはそうでも無いんだが、原作的には少なくとも大問題だ。どんな問題かって？心して聞いてくれ。

加 決 定 !! 劉 備 軍 反 董 卓 連 合 不 参

お分かり頂けたでしょうか。大事な事だからもう一度言おう。

加 決 定 !! 劉 備 軍 反 董 卓 連 合 不 参

大事な事だから二回言いました。さて、何故そんな事になったかだが、ちよつと前話を思い出して欲しい。劉備さん達は檄文がくるほんの三週間まえに領地を得て、曹操さんの下から去つていった。場所が曹操さんの街である陳留から結構離れていて、普通に行くとは2週間程かかる位置にあるらしい。行軍だからもう少しかかるだろう。

それはつまり、檄文が曹操さんの下に届いた頃によくやく街に着任したくらいだと、

そういう事だ。そもそも曹操さんの下に檄文が届くにも1週間程かかっているはず。つまり檄文が書かれた時期は劉備さん達はまだ行軍中である。

皆さんも想像して欲しい。現代でも、まだ住所が確定してない人間に手紙が送れるだろうか?・・・当然否である。そもそも袁家が劉備さんの存在を把握してない疑惑。

まさか俺が将を取ってしまった結果がここに繋がるとは。正直マジ申し訳ない。しかし、早馬で手紙だして事態を知らせても、まだ着任して一月も立たず、街に元々いた兵達の訓練や糧食の準備も何も出来るとは思えない。ウチの軍師をフル活用しても時間が足りない。なので皆で話し合っ、あえて伝えないことになった。

そして三つ目だが、これは大した事ではない。ちよつと華琳さん達に前回飲まされた条件というか落とし前を使われて、曹操軍として一緒に行く事になったと言うだけだ。曹操さん達にとつても急な話なので、有能な人手が欲しかったのだろう。

軍師組は俺たちを自軍扱いして既成事実的な外堀を埋めに来たのでは、と言っていたが、まあぶつちやけどどうでもいい。というか冗談でいつそ傭兵団でもやるか？って話をしたら皆乗り気でちよつと困った。原因は星が、組した側に確実な勝利をもたらす傭兵団・・・いいかも知れぬな！とか妄想した所為だ。何か恋姫のキャラって地味に厨二好きだよ。まあ厨二極まりない武力あるから仕方ないかも知れないけど。あれ、実現できると厨二って厨二なのか？

まあそんな事が大体この1ヶ月で起きた問題だ。それはさて置き、そろそろ目の前の空気がちよつと辛いんですけど。あいつら放置して飯食わね？

するとウチの女性陣全員から賛成が出たのでコソコソ離れる。今回は曹操軍として来てるので、曹操軍の天幕寄りの離れた所に自分達の天幕を設置してもらったのだ。ちなみに、曹操軍として付いてく事が決定した時、華琳さんが俺たち専用のちよつと大きいサイズの天幕を用意してくれた。数が2つなのは明らかに片方は風呂を用意しろという事だろう。あの、水源近く無いと厳しいんですけどそれは。

「冥琳っ！逢いたかった・・・！寂しかったわ！」

「雪蓮……ああ、私も逢いたかった。」

後ろから未だ続く百合百合しい空気は全力でスルーだ。最初は呉の他の将達とか孫策の妹の孫権さんとかも居て、なんか久しぶりに再会した家族、くらいの和やかな空気だったんだが、孫策が無言で周瑜さんに抱きついた瞬間からああなつた。呉の兵士も目を見開いて凝視するレベルで卑猥になつて来てるが忠告とか一切しないでそそくさと離れよう。関わりたくないからな！

・
・
・

さて、ちよつと着いたばかりでやる気が湧かないので、時間的にも昼よりちよつと遅いので、夕飯に気合いを入れる事にして、今回はあつさり、というか簡単に美味しい麺類で行く事にしよう。付け合わせのスープは風に投げる。珍しく朱里と雛里が風の手

伝いに入った。あれ、てかお前ら料理出来たの？え、水鏡塾では自分達でやってた!? 風や流琉が入る前の俺の苦勞は一体……。

気を取り直して麺だ。使う麺は頑張つて試行錯誤して再現したちゃんぽん麺擬きだ。俺は海系の乾物を使った海鮮塩焼きそばを、流琉は豚骨味噌味の焼きラーメンを大量に作る。俺の海鮮塩焼きそばは例によつて四次元袋に入つてた海鮮XO醬を使ったコク深い香りと味が特徴で、流琉の焼きラーメンは脳髓を直撃する豚骨の香りと味噌の旨味が特徴だぜっ！

相変わらず流琉の巨大な中華鍋（真桜特製。鈴々や季衣ちゃんの分を纏めて作るには小さい鍋じゃ時間がかかり過ぎるため。大きさにも関わらず均等に熱が入る業物。）捌きが見事である。なので何時ものように調理が終わつたら頭を撫でまくりながら褒めておく。

なお、これをやると風がチラチラこちらに視線をやり出すので、風が作るスープの味を確認する際、風にもやる。地味に頭を撫でられるのが好きらしい。したで私達も手伝いましたっ！つて抗議する幼女にも一応ちゃんとやる。実際珍しいからご褒美にべっ

こう飴もあげる。無意味に特大である。

え、なに風。飴が切れた？またかよ、ハイ新作金太郎飴。俺の手作りを喜んでくれるのは嬉しいけど、お前糖分取りすぎだぞ。もう少し控えないと制限するからな。あん？頭を使うと甘いものが必要？お前俺の元でちゃんと軍師した事何回あったよ……。

そんなこんなしているうちに、挨拶ついでに軍議に出てた華琳さん達がやって来たので、さあ食事にしようか、と言う所で、孫策が周瑜さん達を伴ってやって来た。あれ、久しぶりの再会だから気を遣って離れたのに、そつちでとらないで良いの？

「それも考えたけど、冥琳がお世話になったから挨拶ついでにね。」

「こんな口調だが、一応ちゃんとお主に感謝しておる。許してやってくれ。」

「策、人前で気軽に真名を呼ぶな……。そういうわけだから羌毅殿、ご相伴に預かっても良いだろうか？正直に言えば、ちよつとこれから自軍の糧食に戻るのが憂鬱でな。」

すつかり2人の手料理に慣れてしまったからのう、と黄蓋さんが周瑜さんと笑いあう。まあこんなこともあろうかと、量はかなり多めに作ったから構わないけど。華琳さんの方をチラツと見ると頷かれた。同席しても構わないらしい。問題のある話は無いらしいな。

そんな訳で流琉と凧にも食器を配るのを手伝ってもらい、料理を配膳し、遅い昼食が始まった。あ、季衣ちゃんに鈴々、夜豪華にするから、今はほどほどにな。そう声をかけて、残念そうな2人には俺の特製人形べっこう飴を渡す。それぞれ人の頭サイズで、鈴々には虎、季衣ちゃんには春蘭の形をした細部までこだわった職人級の業がひかる一品である。愛紗が甘やかし過ぎです、と呆れるが、俺は親バカなので何も問題は無い。見ろ、カツコイイのだ！って鈴々が目をキラキラさせて大喜びだ。うちの娘が可愛過ぎる件について。

え、なに苟彘さん。どの形でも作れるのか？まあ俺が詳細に想像つけばって、ああ華琳さんの作って欲しいのか。それなら舐めたらやがて服が無くなって生まれのままの華琳さんが出てくる仕掛けに、え、言い値で払う？いや冗談だから本気にしないで。作れるとは思うけど。なら作れって春蘭まで。いや構わんけど、まず後ろで呆れ顔の華琳さんに許可貰ってくれ。

そんな風にわいわいやりながらも、何処か穏やかな空気の食事風景。ここが戦場とは

思えないね。地味に一刀くんが居ないので、男一人なのが少し辛いが、まあ慣れたものだ。

そうこうしてるうちに酒は無いのか、とか言い出す星と黄蓋さんと孫策を俺と流琥と周瑜さんと嗜める。俺の言葉には反発する星と黄蓋さんも、流琥には逆らえない。胃袋を握るウチの料理長は最強なので、出しても夜だと断言され落ち込む2人。そして周瑜さんに夜にまたくればいいだろうって諭される孫策も渋々頷く。

いや、お前ら自軍でやってやれよ。大事な将が帰って来た宴を自軍放置してここでやるのは兵が可哀想だろ。ならウチで料理作れ？やだよ流石にそんな分の食材用意してないわ。ウチは特殊だから自腹で用意してるんだぞ、これ。

ブーたれる孫策だが知ったことか。そんな事をしてると、周瑜さんが残りの呉の将達を紹介してくれた。まあ紹介されなくても知っているが、黙って聞いておく。甘寧さんは知ってるので飛ばして、やたら孫策に似た孫権さんに、スーパーパーおっとり巨乳陸遜さん、くノ一みたいな周泰さん、ついでにここに来ないが呂蒙さんという方もいるらしい。全員美人さんだ。

黄蓋さんがどうじゃ？とか色々含めた言葉をニヤニヤしながら投げってくるが、甘い。確かに俺は美人に弱い、周囲をウチの女性陣が囲うこの状況で頷くと思つたのか！見ろ、紹介が始まつた時点でウチの女性陣が既に俺の周りに集結してるこの状況を！幼女達に至つては乗つてるからね！ライドオンだからね！

むしろこれが目的だったらしい黄蓋さんがケラケラ笑い、流石じやのう（笑）とほざく。ハハツ、こやつめ。周瑜さんは何かこちらを睨んでいるが見なかつた事にしよう。

そんなやり取りをしていると、何故か驚いてる他の将の方々。不思議に思つていると、随分仲良が良いんですね、と周泰さん。どうでも良いが俺も猫好きなんだ、これをあげよう。一刀くんと2人で作つた猫耳だ。君の猫好きは黄蓋さんから散々聞いたぞ同士よ。あと黄蓋さんの酒癖なんとかしてくれ。

ほああ！と目をキラキラさせて良いんですかありがとうございますと大喜びの周泰さん。最後の話は一切聞いてないくさい。黄蓋さんがこんな美女と飲めるのだから感謝しろ、と上から目線でほざくので、さて、俺の周りには美女しかいなくてね、とウチ

の女性陣をよいしょついでに特別感皆無やで、と暗に返す。案の定良い度胸じゃ、といラつとした黄蓋さん。ふふんと余裕アピールしとこう。

というか孫権さんが髪長くてビビる。髪切った孫権さんしか知らなかったけど、そう言えば最初は長かったんだっけか。よく分からないが睨まれた。何かしたかなと思いつつ、ご機嫌とりにべつこう飴をプレゼントしておく。甘寧さんが何か騒ぐ前に彼女の口の中へべつこう飴を放り込む。ピタリと止まって甘い、と呟く彼女。まあ甘味は貴重だからね、一応。

周瑜さんにも好評なんだぞ、というのと恐る恐る食べて、同じく甘いと喜ぶ孫権さん。周瑜さんにも1つ要求されたので上げておく。あ、空気を良くしようとしただけで、ナンパじゃ無いのでみんな怒らないで！ちなみに黄蓋さんには酒のツمامミに向かんなと不評だ。なんで飴が酒のツمامミ評価なのかは分からないがちよつと悔しい。

そんなこんなで食事が終わると、黄蓋さんが孫策に何事か囁き、そうね、と急に真面目になる孫策。すると何故かキリツと表情が変わる呉の人たち。孫策から覇気が流れ始めてちよつと驚く。話には聞いていたが、真面目な顔出来るんだなあとしみじみ思

う。

空気が変わり過ぎて華琳さん達までキリツとして、華琳さんの下に武將達が集まった。ウチの女性陣も一応手を止めて、俺の周りに集まる。あれ、これ俺どうしたら良いのだろうか。一応華琳さんの後ろにいた方が良いかな？とか悩んでいたら、華琳さんを無視して何故か俺の前に来た。

「羌毅殿、此度の一件、我が臣下、周公瑾の命を救っていただき、誠に感謝致します。孫家が当主、孫伯符が孫家並びに臣下一同を代表し、御礼申し上げます。」

そう言つて両手を体の前で合わせて、頭を下げる孫策。他の呉の將達も続く。華琳さん達がこつちを見る。一瞬で厳かな空気に包まれる。

．．．いや、誰だこいつ。

そんな空気の中、こんな事を考えた俺は絶対に悪く無いと思う。

いやだつて急に雰囲気変わり過ぎだし。ただの畜族にはついていけない偉い人がやる感じの御礼だし、非常に対応に困る。どつたらいいのこれ。ていうか助けたの俺じゃねえし華佗だし。世話になったとかさう言う話なら華琳さんにも言うべきだし。そもそも食事の後片付け中にやられても前後の空気違い過ぎて順応できん。

そんな風に困っていると、華琳さんが道玄は作法を知らないから困っているわ、とクスクス笑いながら助け舟を出してくれた。すると俺の代わりに稟が臣下的な感じで返してくれた。おお、2人ともありがとう！でも1つ言うなら礼言う相手間違ってるぞ孫策！華佗にやってくれ、そういうの。俺は医者まで連れて行っただけだ。

「いいえ。そもそも貴方が気付いてくれなければ、私達は誰一人冥琳の病に気付かなかつたわ。もちろん華佗にもお礼はするけれど、貴方が居なければ誰より大事な臣を失っていたかも知れない。孫家ではなく、私孫策個人としてもお礼を言わせて欲しい。」

本当にありがとう、という孫策。正直照れる。とりあえず恥ずかしくなったので、華琳さんも協力してくれたよ！的な事を言って場を濁そうとしたが、ニヤニヤした華琳さんが、大したことはしてないわ、と言ってバツサリ切る。あ、コイツ楽しんでやがる！

くっそう、何か良く見たら黄蓋さんや星とかもニヤニヤしてて非常に腹ただしい。こうなったらなんか真面目な感じの事言って誤魔化そう！

「近いからこそ、気付けぬ事もある。だが、恐れず言葉を交わせば、わかる事もある。遠くとも近くとも、常に相手を知りたいと思うこと、知ろうとすること、これからは忘れない事だ。」

それが絆になる。とかそんな感じのそれっぽい事を言ってお茶を濁す！孫権さんが何か驚いた顔してたけど、いいや勢いで押し通そう。ウチの女性陣が誇らしげなのは完全に無視しておく。

「…ええ、肝に銘じておくわ。私も大切な仲間を知らないうちに失いたくはないもの。」

ベネツ！何か勝手に納得したからもう大丈夫！後は適当にノリで誤魔化せるな。とか考えてたら、じゃあ真面目な話はここまでにしましょ！と孫策さん自ら空気を変えてくれた。センキューー！

すると何か興味深そうな顔してた華琳さんが口を開いた。

「さて、ではそちらの話は終わりかしら。

では道玄、明日の事で軍議を開くわ。

後で私の天幕にいらっしやい。」

え、それ俺が行く必要あるの？軍師組や武将達だけじゃダメ？ダメかー。真面目な空気の場所嫌いなんだけど。

仕方ないので了解ですと伝え、後片付けを再開する。水源が地味に遠いので大変だ。まあ面倒だから大寸胴鍋にたっぷり汲んであるんだけどね。では後でなと声を掛け、食器を持って背を向けたところで、ちよつと待つてと孫策に止められる。なんだね？言っておくが真名とか要らんど。勧誘も拒否だ。お礼はもう受けたからな！

「雪蓮。私の真名よ。貴方に預けるわ。あと、冥琳達から聞いたわ、まだどこにも仕えてないんでしょ？ウチに来ない？」

話聞いてんのかテメー！

ああホラ、一瞬でウチの女性陣が俺を睨み出した。鈴々だけだぞ、こういう時真名くらしい誰と交換してもいいと思うのだ！つて笑つてくれるの。つまりウチの娘は天使。華琳さん達も受ける気じゃないわよね、みたいな目で見てくるし。

思わすため息を吐くが、拒否ったら拒否つたで甘寧さんあたりが怒りそうなので、道玄だ、とだけ返して士官は拒否する。ウチは選り取りみどりよ？と笑いながら食い下がる孫策に、身分が違うし、お前の後ろの女性陣が怒りそうだからヤダ、と叩き切る。あ、華琳さん、私達がいるから当然ね、とか言うな。別にあんたらが理由じゃないよ！

「なんじゃ儂等じゃ不満か？」

「私と黄蓋はそれでもいいぞ？」

あ、からかおうとしても無駄だぜ。俺にはこいつらが居るからな！とドヤ顔でウチの女性陣を前に出す。ふ、これなら女性陣も怒らない！いつもいつも、怒られてばかりの俺だと思ふなよ！と、思ったら女性陣がジト目で見てくる。アレツ、なんか期待してた反応と違う！なんでや！ちゃんと拒否つただろ！誘惑に打ち勝つたやろ！

「まず相手にあそこまで言わせたのがもうダメです。」

「少なくとも貴方にされても良いと思われる仲、という事ですね。」

「さて、いつの間にそこまで仲良くなったのですかな、主人。」

「ひ、火の無いところには煙は立たないんでしゅよ。」

「にいさん、相変わらず手が早いなー。」

なん、だと・・・？ちよ、ちよつと判定厳しくない!?最近みんな厳しくない?・・・と思っただけど、良く考えたら彼女がいるのに他の女と2人で酒飲んだりは普通にダメだった。いかん、周りに女性が多過ぎて感覚狂いまくつた。深く反省しよう。みんなすまぬ!

根本的な事に気付いたので、だいたい皆今回は許してくれました。良かった良かった。愛紗だけまたひつつき虫になってしまったが、これはいつもの事だ。だから愛紗、ちよつと力緩めて。あ、なんでもありませんごめんなさい。

まあそんな感じどうやむやにしました！

■
「先陣を切る事になったわ。」

あれから華琳さんの天幕で軍議的なあれです。何か本来なら袁紹さんの所が頑張つて汜水関の門を開けようと頑張つて居たのだが、いかんせん強固な汜水関、優雅に雄々しく華麗に突撃ですわ！な感じの全軍突撃しかしない袁紹さんが、散々に兵だけ失つて、損害がウチだけでは許せませんわ！とかそんな感じの軍議だったらしい。

実際に時間の無駄なので、華琳さんが先陣を買つてたとかそんな感じの話だったらしいよ。だから袁紹さんに貧相な身体つきの貴方には無理ですわ！とか言われたのは多分関係ないんだろう。凄い愚痴ってるし物凄い不機嫌だけど、本人がそう言ってるからそうに違いない。あ、春蘭、その華琳様はそのままでも最高とかフォロワーになつていから言わない方がいいよ。あ、もう怒られてたか。めんごめんご。

「まったく・・・。だが実際に汜水関は強固な砦よ。だから本来なら相手を釣り出すのが望ましい。」

「確かに、それが一番ですわ。本来なら。」

「ええ、その為の策もご用意してます華琳様。ですが……。」

何か思わせぶりの会話をする華琳さん達。周りもみんなああ……とため息を吐く。なにになに、何か問題でもあんの？舌戦で釣り出すのが華琳さんの趣味じゃないとか？

「そんな訳ないでしょ！……あんだ、黄巾討伐の時みたいなことできる？今回の砦の方が門から何から大きいし強固だけど。」

荀彧さんがおそるおそる聞いてくる。何だろう、出来ないといいなあって顔だ。まあできるけど。というか、門を開くだけならいつでもできるし。

そう言うとはあ、とため息を吐く荀彧さん。あれ、出来ない方がいい感じ？無理にやらなくてもいいよ。何なら後ろで寝てるよ、俺。

「いえ、出来る以上やらない手は無いわ。……ただ、何というか、

ある意味厄介ね、道玄。」

「真面目に策を考えるのが馬鹿らしくなるわね、あんだ。」

「流石に私もどうかと思うぞ。」

「稟や風が言ってる意味がよく分かるな。」

あれ、おかしいな、何故か責められてるぞ。春蘭にまで呆れられたし！なんや！みんなの仕事を楽しむ有能なラージャンやないか！何が文句あるんや！と、文句言いたい

所だが、良く見るとウチの女性陣も深く頷いている。鈴々と季衣ちゃんまであー、と苦笑いする。味方は居ない。

そのままとりあえず俺が門を開けることは決定し、あとは相手の出方に合わせて軍師組と華琳さんが指示出すらしいです。了解。

さつくり軍議が終わりました！

・
・
・

朝。

ちよつと戦の前ということで軽く昂ったみんなに朝方近くまでやられて、みんなで寝坊して苟彘さん達に叱られました。だけどその中に秋蘭が混じってたので、凄いや、凄いや、頭痛そうにしてた。いや、俺はむしろ止めたんだよ？

とりあえずご飯食べてみんな所定の位置につき、何か舌戦的なあれの為、春蘭を伴って2人だけで門の前に来たのだが、キヤラ的に大声で喋れない俺はついて来ただけだ。

そしたら隣で大声出してた春蘭が普通に口喧嘩で負けて悔しそうにしている。いや、

お前じゃ頭の回転的に勝てる訳ないだろ。埒が明かないので、ちよつと春蘭に俺の代わりに相手に伝えてもらう。

「何だ道玄、私はいまって、なに？代わりに話せ？声が出ない？なんだ情けない、仕方ない、代わりに言つてやる。なんだ？よし。」

良く聞けお前達！今から門を開くので挟まれないようになるべく離れている！あぶないからな！

つてなんだこれは！何言わせてるんだキサマツ！」

上出来である。あとは任せろ。そう言つて春蘭の頭を一撫でし、サムズアップして一人門まで歩いていく。後ろでちよ待て！とか聞こえるけど後ろ手に手をヒラヒラ、大丈夫だから帰れと歩きながら言つておく。

「なんだたつた一人か！笑わせてくれるな曹操軍！やれるものならやつてみる、そして何があつてもここは通れぬと思ひ知るがいい!!」

上から華雄さんの叫び声がある。デカイ声だなど思いつつ、チラ見すると張遼さんも確認。遠目だがニヤニヤしている。やれるものならやつてみるってことだろう。

うむ。ならば遠慮は要らんな。門のちようど真ん中に立ち、左右それぞれの門に手を置く。そのまま肌の色がくつきり変わるくらいに弱変身。更に最近だいぶ上達してきた闘気術で、全身の力をアップする。これでだいたいいけるだろ。なるべく貫かないよ

うに優しく、全体に圧力かけるように触れて。一步踏み出し、思い切り手を突き出した！

よい・・・せつ！と。

ドガアツ！！

次の瞬間、内側に向かつて門が両開きになる。勢いが強すぎて、門が壁にめり込んだ。門は粉碎され、開かない方向に開いた門が、根本からへし曲がった。さらに門がめり込んだ衝撃で砦自体に大きな亀裂が入り、その震動で上にいた兵達がパラパラと落ちてくる。

あ、良く見たら門の前に兵達がいたらしい、両開きだから真ん中の兵だけちよびつと残っている。あらやだなむなむ。あれ、何か固まつてる。まあいいや。えーと上に続く階段は、あ、あった。お邪魔しまーす。おーいみんな先行くねー。

「「「「なんだそりゃあつ！！」」」」

うおつ、なになに急に。あ、春蘭と鈴々が突撃してきた。鈴々頑張れー！心配だけど過保護は良くないよね、おとーさんは先行きます。

下はみんな任せて階段をとことこ登り、門の上に出る。その瞬間に強力な攻撃が降ってきた。パンプアツプもとい元祖闘気硬化ー！

「死にさらせつー！」

「喰らえつー！」

ガキインツ

鉄と鉄がぶつかるとような音と共に弾かれる武器。相手が息を飲んだ気配が伝わって来たが、気にせずラージャンばんちつてああ！

確認せずに殴ろうとしたら張遼さんと華雄さんだった。ギリギリ皮一枚で止めたのでたぶん気絶しただけで済んだが、拳圧で2人が塀の外に吹っ飛んだ。ヤベツ！

2人が落ちて行くのを目で追いながら固まる兵を飛び越え、躊躇することなく俺も跳ぶ。ズボンで見えないから下半身だけ色が変わる程度に弱変身、2人を掴んだらラージャン着地出来ないからね。

空中でギリギリ2人をキヤツチ、あんまり離れて飛んでなくてよかった！とか思いつつ、2人が地面に触れないように肩に担ぐ。その頃には地面が目前に！

ふ、秘奥義！猫の着地術ツ！！

あ、俺ラージャンだから使えないや。

ドガンツ

高いところから落ちたので凄い音を立てて着地した地面が割れる。2人はどうかな、と意識を向けると、脈拍も呼吸もあるし、無事らしいな。よかよか。さて、何か突撃中の愛紗の部隊の真ん中に落ちてしまったが、咄嗟にみんな避けてくれて良かった。そう思ってた周りを見ると。

「「「「「「」」」」」」」

．．．あれ、どしたのみんな。ホラホラ戦場で止まるのは死を意味するんだぞ動け動け。と、思ったら門の上にいる兵含めて、見える限りの全員が止まっている。あれ、ど

した。

「道玄ッ!!」

何か慌ててやってきたなってあ、愛紗だやつほー。何かみんな止まってんだけど。チャンススだぜ突撃しよう。そう言ったら俺の肩の上の2人を見て、その2人は?と睨む愛紗。あつ、これは違うぞ!新しい女とかそーゆーのじゃないぞ、何か上にいた華雄さんと張遼さんだ!間違えて上から吹き飛ばしちやつたから捕まえて落ちてきただけだよ?動かないのはちよつと気絶してるだけで俺が乱暴した訳じゃないよつて、してた!気絶したの俺のせいだった!ま、待て愛紗、本当に違うぞつてあれ、何そんな疲れた顔して。

はあー、と盛大にため息を吐いて、愛紗が叫んだ。

「敵将ッ、華雄、張遼!捕らえたりッツ!!」

その瞬間、わああああ!と湧く曹操軍と、一気にヤル気を無くして膝をつく敵軍の兵達。そしてついていけない残りの反董卓連合の皆さん。

・・・あれつ。

それから3時間もしないうち汜水関の兵達が降伏し、戦闘が終了してしまった。実質
ほぼ曹操軍だけで勝った。とりあえず俺は華琳さんに呆れ顔でさすがねえ、と褒めら
れ、荀彧さんに無言の蹴りをもらったのだった。

・・・解せぬ！

続く！

33話

ビーバーの尻尾焼きは珍味やで。

やあみんな、何か最近頭おかしい奴扱いされ始めたオーク系転生者の俺だよ！

ギヤアギヤア、と騒がしかった野生のダチヨウを森に追い込み、無事に五羽ほど狩った。近くの小さい沢が有ったので、そこで羽を雀つて解体する。内臓を取り出し、綺麗に洗い、最近作成した石箱に部位別に放り込む。足や頭は今回は残して、周りの獣にお願いしよう。

ついでにまだ残ってた野生のえのき茸を採取、肉を入れた石鍋と共に四次元袋にしまう。こんなもんか？まあ途中何故かいたやたらデカいワニも狩ったし、これならまたしばらく持つだろう。そう判断して戻ることにする。

行き先は虎牢関の手前、曹操軍の陣営である。

??

あれから3日が経った。

あつという間に落とした汜水関とは違い、現在の虎牢関では中々攻略が進んでいない。メインで攻めまくってる袁紹軍と、袁術軍がどうにも力押しばかりで攻めきれず、たまに外に出てくる呂布さんに散々蹴散らされているみたいだ。

孫策軍も袁術軍に、肉壁的に結構駆り出されているが、呂布さんをうまくやり過ぎたりしてなんとか頑張っている。偶に孫策が暴走して周瑜さんが天幕内で酷い目にあったり、孫策が呂布さんにぶっかけてあわや死にかけたりと大変だ。

僅か数日で周瑜さんが自陣を抜け出して酒持ってウチにくるくらい疲れていて、つい3日前くらいにうちの女性陣以外に2人きりで酒飲んだりしないと決めたのだが、むしろ女性陣から付き合ってやれと指示されるレベルで顔が死んでいる。お、お疲れ様です……

なお、曹操軍は最後方に移動させられ、虎牢関ではほぼ戦闘に参加していない。やる気が無いとかではなく、俺が前回汜水関で開始10分で敵将である張遼さんと華雄さんをつぶらえて、戦闘を早期に終了させてしまい、汜水関での功績がほぼ曹操軍で独占してしまったからだ。なんでもこういった攻城戦では、固い城門を開く、将を討つ、などな

ど、色々功績が分けられているらしいのだが、まず前者2つの段階で俺が独占してしまつた。

目立ちたがりの袁紹さんなんかは自分が出来なかつた事を、自称ライバル的な存在の曹操さんにあつさりやられてしまつたのでそりやもう嫉妬しまくりで、ふん！ご苦労様ですわ、これからは私達だけで充分でしてよつ！と、最大戦力、総大将権限フル活用されてこんな端っこに追いやられてしまつたのだ。

なので一応華琳さんには謝つておいた。問題無いわ、もう必要なものは手に入れたもの。と上機嫌だつたからたぶん大丈夫だろう。春蘭と荀彧さんは未だに文句言われているけど。

あ、騎手のいない馬発見！どうやら戦場から騎手が死んだかなんかで馬だけ逃げてきたのだろう。後ろ足に二本矢が刺さつているので動きがおかしい。ササつと近寄つて鉞で首を切る。特に助けたりとかはしない。戦場では似たような馬が多過ぎてキリがないからな。

あとで文句言われない様に馬具はその場で廃棄、水が無いのでやり難いが、簡単に血抜きし、そのまま担いで行く。いやあ、予定外の獲物だが食いでがあつてラツキーだな！ちなみに、ウチには馬は大切な友だから食べちゃいかん、とか言う人間は居ません。俺がその辺容赦ないので、昔は野生のリスを見て可愛いと喜んでいたみんなも、今では

すっかり食料として発見したら俺に報告してくれる様になった。うむうむ。

思わぬ収穫にホクホク気分で俺たちの天幕に帰る。例によって少し周りから離れているので、とても分かりやすい。今は戦場に出ないので武将組が退屈して外で鍛錬したり模擬戦している。春蘭も交じっている様だ。

天気が良いので軍師組も外にいる。曹操さんに荀彧さんも来ているが、いつものことなので気にしない。彼女達は最初は武将組の鍛錬見たり読書したり、討論したりしていたが、今は将棋にハマっている。

象棋ではない、将棋だ。いっぞや俺が作っていたあれだ。あまりに暇そうだったうちの軍師組にルール教えてやってみたら、初体験の雛里に2戦目でもう負けて、周りで見ているルールを理解した他の軍師組には初戦から勝てなくなった。そこに合流した華琳さんと荀彧さんにも同じ流れだ。

あつちゅー間に俺が追い出されて、彼女達が独占した。今では総当たり戦とかしながら、互いに分析したり評価しあったりしてる。コツコツ作っていたが、全部で2つしかないの、1つは華琳さんに奪われた。

打ち方にそれぞれの癖が出てて面白いとか何とか。荀彧さんは俺の弱さを散々詰つ

たあと、ゲーム自体はよく出来てると褒めてくれた。すごい嬉しいが、ゴメン、考えたの俺じゃないんだ。

「おっ！道玄おかえりつて何だそれ！どっから持ってきたんだ！」

お、白蓮よつすよつす。これ！何か狩りの帰りで死にかけだったの捕まえた。今日は桜鍋だな！

ええ、馬食べるのか・・・？と複雑そうな白蓮。白馬何ちやらとか言う騎兵で有名な白蓮の軍では、某顔が同じでやたら足が長いキャラがたくさん出るサッカーマンガの主人公にとつてのボールみたいに、馬は友達的なアレなので、馬を食べるのに抵抗があるの
だろう。

無理に食べなくてもいいよ、めちやくちや美味いけど、みんな大喜びするくらい美味しいけど、無理に食べなくてもいいよ。そう言つて優しく白蓮を気遣う。うがー！とキレ出す白蓮。あれ、気を遣つてるのに怒られたぞ 笑

ちなみに前回黄巾討伐のあと、何か忘れていたと思つたら白蓮に挨拶をして帰るの忘れてた。それはもう完全に忘れてた。

2日前に虎牢関で声かけられるまで、まるで気付かなかつた。何なら反董卓連合にい

た事さえ気付かなかった。

正直に言ったら今みたいにぶち切れた白蓮に斬りつけられたが、傷一つなかったの
余計にキレられた。ちよつとキレやす過ぎるので、きつと生理中なんだろう。仕方ない
なあ白蓮は。なんてふざけまくってたら怒り過ぎて顔が真っ赤になってきたので、羌毳
さん式ナデナデッ！相手はリラックス！

そんな感じでイチャイチャしてたらみんなに怒られました。うう、白蓮が弄りやすい
のが悪いんだ！

さておき、俺が帰ってきたので、武将組から凧と流琉が手伝うため外れてきた。うい、
じゃあ俺この馬解体しちゃうから、2人は汗拭いたら手洗いして、流琉は野菜切つてく
れ。久しぶりに桜鍋にしようと思う。凧は米頼んだ。

2人が領いたのを確認し、ナイフを取り出す。関羽さんと会ったばかりの頃、初めて
の街で購入したこのナイフも、だいぶ使い込んでるので痛んできた。まだ三年経つて
ないんだがなあ。思い出深いアイテムなので、後で真桜に再利用出来ないか聞いてみよ
う。あ、白蓮こつちで食うなら副官に伝えてこいよ。

「あら、今日は馬をとって来たのね。なら桜鍋かしら。」

「私は山賊焼きが食べたいです。串焼きもお願ひします。」

振り向くと華琳さんと稟が居た。どうやら2人は対戦が終わったので一足先に抜けて来たご様子。いつもいつもウチで飯を食い過ぎて食材で料理の予測が可能になってきた華琳さん。そろそろ金とるぞこらー！手を止めずに華琳さんにぎつつらいと、稟に了解と伝えて、他の軍師組にももう少ししたら飯だからそろそろ終わりにするよう伝えてもらう。

「お帰りなさい、道玄。」

「むっ、馬だど？久しぶりに食べるな。」

「なんや華雄、涼州出身のくせに馬食うたことあるん？」

ただいま愛紗。手を止めずに返して、霞と華雄にはそろそろ汗拭いてこい、と伝える。ちなみに霞は張遼の真名だ。華雄はなんと真名が華雄らしい。名前は捨てたとかなんとか。ちなみに馬と共に育ち、馬と共に生きる涼州だからこそ、生活の全てに馬が関わっている。当然食用肉にもなるんだそう。ちよつと意外だったが、言われてみたら当たり前だった。羊飼って毛を取る遊牧民だって羊食うもんな。

「む、分かった。」

「了解や、団長。」

よし、ああそうだ愛紗。汗拭いてからで構わないから、そろそろ残りの武将組にも飯

だから終わりにしろって言っておいてくれ。

分かりましたと答え、天幕に入って行く愛紗を見送り、大まかな解体が済んだので、精肉作業に取り掛かる。やれやれ、この人数の食事の準備は大変だ。とはいえ、流疏や鈴々などちびっ子組が食べ盛りなので、安易に糧食などには頼らない。俺は最高位の親バカだから栄養面にも気を使うのだ。鈴々が酒を飲める歳とかそう言うのは無視だ。

そうこうしてるうちに白蓮が帰って来て、休憩として軍を下げてきた孫策達もやってきた。取り敢えず埃まみれで血まみれの孫策が興奮状態なので、頭冷やしてこいと風呂用天幕に行かせる。今は沸かしてないから水風呂だが、体拭く分には問題ない。周瑜さんがいつもすまんな、と苦笑いしながら孫策に着いて行き、孫権さんと甘寧さんがぺこりとお辞儀して続く。黄蓋さんと陸遜さんは一緒に軍師組の対局を観戦する様だ。

・・・やれやれ。そろそろ言っちゃうぞ？

何がどうしてこうなったっ!?

話は2日前に遡る。

ちよつとやり過ぎて最後方に左遷されたその日、俺を発見した白蓮にお前、あれはなにぞとグチグチ言われながら、取り敢えず頭を撫でながらべっこう飴をあたえて誤魔化す。顔を赤らめてコロコロべっこう飴を舐めると静かになるあたり、相変わらずゲロチヨロである。

そのまま華琳さんの天幕へ白蓮を案内していく。もう顔パスなので、親衛隊を素通りして天幕にはいると、そこでは昨日から続く光景が繰り広げられていた。

「お断りや。」

「断る。」

「2人とも強情ね。嫌いじゃないわ。」

コレだ。よく飽きないもんであるが、一応来客なので華琳さんに声をかけるが、華琳

さんは2人に夢中なので白蓮を一瞥するとけんもほろろに後にしろと言われる。ドンマイ白蓮。そんな君が俺は嫌いじゃないよ。

「……こんな適当な慰めで救われた気分になる自分が嫌だ。」

怒ったり喜んだり落ち込んだり、忙しい奴だな。取り敢えず元気になる気がする金太郎飴を白蓮の口に刺しとく。長いから味に飽きる頃にはどうでも良くなつて元気になるだろう。

さて、今どんな状況かと言えば、簡潔に言つて華琳さんが張遼さんと華雄さんの2人を勧誘して失敗続き、というところだ。

華琳さんがこんな最後方に回されて俺を怒らないのは、華琳さんの欲しかったものというのが張遼さんと、2人が率いる精強と名高いらしい董卓軍の兵達だからである。華雄さんが地味におまけ扱いでカワイソス。2人は俺が捕まえたが、降伏した大多数の董卓軍兵士は、最後方に移る代わりに華琳さんが全部貰ってきたらしい。これでまた軍が強くなると華琳さんは大喜びだ。

実際、捕虜である投降兵は割とアツサリ華琳さんの軍門に下ったが、昨日の夜に目覚めたばかりの将2人には袖にされ続けている。華琳さんはともかく、張遼さんはなんでもかなと思っただが、よく考えたら春蘭に一騎打ちで負けてないので従う理由が無かった。こんなところでも地味に原作ブレイクしてしまった。すまん華琳さん。

見るとウチの女性陣も含め、曹操軍の主要メンバーも何故か揃ってる。どったのお前ら。

「兄さま！いえ、私達は春蘭さんや季衣と訓練してて……。」
「風たちはみんなでお茶しようと思ひましてー。」

なるほど。どうやらそれぞれ武將組と軍師組で集まった様だ。ちらりと見るが、熱心に華琳さんは勧誘中だし、春蘭達もその手伝いみたいだ。ふむ。忙しそうだし、いいか。よし皆、俺たちは飯にしよう。まだ金太郎飴を舐めながら落ち込む白蓮の首根っこを掴み、そのままみんなで天幕を出ようとする。

「ちよつと待てつ、貴様！」

「ちよい待ちい！」

すると絶賛勧誘されてる2人から声を上げた。たぶん俺のことじゃないな、さて、今日は何作るかなー。あ、やっぱ駄目？はいはいなんざんしょ。飯の準備があるから手短かにね。あ、華琳さん、邪魔してるわけじゃないから睨まないで。

どうやら話を聞くと、2人とも素手で俺が2人の攻撃を防いだ事が疑問らしい。俺サイキョーだから。刃物通らないからと適当に説明すると、ふざけてると思われたのか、納得してないご様子の2人。実際ふざけているが、だいたい嘘は言っていない。

面倒だから春蘭に攻撃させ実演。ガキンガキンと弾かれる剣を見て驚く2人と、ぐぬぬ！と悔しがる春蘭。実はこれ闘気術使つて内側固くしてるんだがな。そろそろ通常人間状態じゃ危ない。言わないけど。まあいつものことなので適当に頭撫でて誤魔化す。あ、余計悔しがってる。

まあだから俺に負けたのは野良犬に噛まれたと思つて忘れな、とそそくさと帰ろうとしたら、張遼さんが急にブツ込んできた。

「ウチ、あんたになら従ってもええで。」

だから暇な時相手してや、と獰猛な目で笑う張遼さん。何言つてんだあんた。はあ？ 強いものと戦うのが趣味？ 春蘭で我慢してなよ。俺はやだ。ええやーん、と楽しそうな張遼さん。あつさり前言を撤回した張遼さんに驚く華雄さんだが、自分に勝つたやつならウチは文句あらへん、という張遼さんの言葉に、むう、一理あるな。と悩み始める華雄さん。いや、悩まないでいいよ。まず俺が断る。

しかしこれをチャンスと判断したらしい、華琳さんがなら羌毅の下に付けるわ、とここぞとばかりに攻め始める。欲しいものが手に入りそうなのでとてもいい笑顔だ。しかし次の瞬間、まさかの横槍が入った。

「あ、その場合ですとウチの傭兵団には加入しないので、期間が過ぎたら曹操軍に再編されますよ。」

「それが嫌なら我らが傭兵団、緑鬼の剛腕に入隊と言う手もありましゅー！」

「詳しい雇用条件などの説明はいつでも受け付けてますっ！」

・・・え、なんて？

ちよつと理解できない言葉が聞こえてきたので、思わず聞き返してしまつたが、誰一人として答えず、軍師組が2人に入隊条件、雇用条件などを説明し始める。武将組は愛紗だけ不満げだが、星や鈴々が仕方あるまい、みたいに慰めている。あれっ？なんか知らないの俺だけ？どゆこと？

「・・・道玄、説明してもらえるかしら？」

「ちよつとあんた、今度は何やらかす気？」

めっちゃ不機嫌な華琳さんと、失礼極まりないこと言い出す荀彧さん。待つて待つて、俺も聞いてないといふかなんも知らないんだけど。ガチで初耳ですよ！というか緑鬼の剛腕つて名前なの？全力で嫌なんだけど！何その恥ずかしい名前!?考えた奴頭膿んでんだろ！

突然の事態に理解が追い付かない俺。しかしそんな俺を不思議そうに見る女性陣。え、なに？

「何を慌てているのです主。傭兵団をやる、と言つたのは主ではありませんか。ほら、ほんの2、3週間前に。」

・・・何とな？

星の言葉を聞いて思い出してみる。えーと・・・あつ。

あれか！あの華琳さんについて来いって言われた時のか！ああ、なるほど。つて、いやあれ冗談だつて言つただろ!!なんでも当然のように立ち上げてんの!?!てか立ち上げるなら俺にも説明をしろよ！イジメかよ！

「・・・言われてみれば、兄さま居ませんでしたね。」

「そーいや、そうやったかも？」

「て言うか夜に話してましたからね、しない日は道玄は夜起きてませんし。」

「おとーさん寝てたのだ！」

「我らも盛り上がっていたからな！名前を決める時とか。」

「白熱しましたねー。稟ちゃんも久しぶりに鼻血出したりー。」

「私は今でも暴虐の鉄槌を推してます!!」

「朱里ちゃん舌噛みすぎて泣いてたのー。」

「はわわ、凧さんだつて白熱して星さんと殴り合いました！」

「だって、雛里と星が金色の激震はダサいって言うから・・・。」

「あわわ、結局愛紗さんがゴリ押ししました！」

くっそ、何か凄え楽しそうで悔しい！その場にいたら絶対潰してたのに！そしてどれも恥ずかしい名前過ぎて笑うしかない。

つか、それ話聞いてないから俺やらないで良いかな。そんな恥ずかしい名前やだよ!! え、なに秋蘭、私は碎山鬼王を推すぞ？お前も参加してたのっ!?!っーかセンスなっ

・・・どうしよう、ちよつと事態が俺を置いて先に進み過ぎてる。もう俺単身呉に仕えようかな。あ、華琳さん、ちよつと最近の秋蘭は春蘭より酷いぞ。気をつけてね！

「・・・誰のせいだと思ってるのかしら？」

凄いい頭痛そんな華琳さん。え、まさか俺のせいだと言いたいのだろうか。そんな馬鹿な。元から秋蘭はあんな感じだったよ・・・？あれ、違うかも。あ、春蘭、怒るな怒るな。余計ややこしくなる。苟彘さん、待って。俺だけ現実においていけないで！

そうこうしてるうちに軍師組と2人の間で合意があつたらしい。何かお互いに握手している。おい待て、俺はやらないぞ！やるならお前達だけでやれよ！

「駄目ですよ、道玄。貴方が団長なんですから。」

「もう街を出る前に牙門旗の作成を依頼してありますぞ。」

「牙門旗の印章も頑張って考えたのー！」

「張遼や！これからよろしゅう、団長！」

「華雄だ。出来れば馬が欲しい。よろしく頼む。」

俺は膝から崩れ落ちた。隣の白蓮が啞えてた金太郎飴を差し出し、元氣出せ、と慰めてくる。

．．．なんだろう、無性に優しさが心に染みる。

でもお前の舐めかけはちよつと。正直に言ったら白蓮に激怒された。

．

．

．
．

．．．と、まあそんな事があつたのさ！どうだい？酷い話だろ？

．．．いやホント、酷い話だよ。

おかげで華琳さん達からむっちゃ愚痴られる。正直俺なにもしてないしなんなら貴女の隣で済ました顔してる青髪弓使いの方が戦犯だと思っよ？

桜鍋をみんなでつつきながらそんな話をしていると、秋蘭がお前のものが私の心まで貫いてしまったのが悪いのさ、とニヒルに言う。いや、お前の言う俺のものってチ○コだろ。本当にチ○コに心貫かれちゃったのお前。ただのエロ堕ちじゃんそれ。しかも自分から貫かれたからただの淫乱じゃん。あ、凄い華琳さんが頭痛そうな顔した。

ちなみに、張遼さんと華雄さんとは傭兵団の正式入隊時に真名の交換をします。華雄が真名らしい華雄さんとは交換と言っていいのか微妙だけど。正式入隊もただの宴だったし。酒で真名許す張遼さんもと霞って、やってる事季衣ちゃんと一緒なんです。がそれは。いや、頭が痛くなるので深く考えないようにしよう。そうしよう。

「なんと言うか、団長とは大変なのだな。」

私にできる事があればなんでも言ってくれ。そう頼もしい事を言ってくれる華雄。うう、2次創作で散々な扱いの華雄さんがこんな良いやつだなんて、2次創作知識って本当に当てにならない。ありがとう華雄！大好きだつてハイ、もちろん愛紗が1番です。

・・・いかなときでもこの手の話題は秒で察知するな、愛紗。おつかねえ。

閑話休題。

「私達も出るわ。」

華琳さんが軍議から帰ってきて言った。あれ、良いの？

「問題ないわ。各諸侯に泣きつかれたのはこちらだもの。最初は文句言ってた袁紹も、自軍の五分の一を失っては、流石に強気に出て来なかつたわ。」

普通なら大敗で即時撤退してもおかしくないわ、と華琳さん。えーと、袁紹軍の2割って事は・・・二万!?!うわあ、劉備軍が10回全滅するくらいやられてんのか。呂布さん強すぎイ!

そんな事を考えていると、霞と華雄が俺の袖を引っ張る。申し訳なさそうな顔をしているので、何か言う前に今回は参加するなよって先に言っておく。仲間にすぐ刃は向けられ無かるうとかそんな感じの事を言ってみんなからも了解を得たし気にすんな。2人に礼を言われた。ちよつと照れるので、頭撫でて誤魔化した。

「・・・ところで道玄、呂布の相手は任せてもいいのかしら？」

軍議を真面目に聞いているそぶりして鈴々や流琉を連れて海行きたいなあとか全く関係ない事を考えていると、唐突に華琳さんに話しかけられた。改めて見ると、何かみんなに注目されていた。え、なにになに？あ、呂布さんか。

うーむ、まあ何とかなるよたぶん。やってみないとわからないけど、負けはしない筈。

そう言うのと華雄と霞が驚き、華琳さんは楽しそうな顔をした。では任せるわ、と言われるので、全部任せておく。すると愛紗が側にきて、大丈夫ですか？と不安気。どうやら1人で2万を屠る呂布さん相手だと心配してくれるらしい。大丈夫大丈夫、俺人外だから。

そう誤魔化して、見るとウチの女性陣全員が心配そうに見てた。笑って大丈夫と安心させておこう。星が念の為に子種を、とかほざき出したので、みんなが同じ事を言う前に封殺しておく。

だいたい軍議もまとまったので、霞と華雄に後で話がある、と耳打ちする。2人が不思議そうな顔をするが、了解してくれたのでいいや。あ、愛紗よ、特に何も無いから擦

り寄つて来ないで。怖いっす。

??

さて、早速の虎牢関最前線、なのだが・・・ちよつと問題が起きた。俺が出てきた瞬間に相手の兵が一部動揺したのだ。

「頭おかしいのがきたぞおおお！」

「引けえ！門から距離をとれええ！」

「よせ門を閉めるな！余計に被害がでるぞ！」

「あいつ刃物通らないんだけど！どうしろってんだ！」

「門を開けろ！全員で包囲すればまだ可能性がある！たぶん！」

・・・えつと。どうやら汜水関で俺の戦鬪を見た一部の兵がこちらに逃げてきたらしいな。でもちよつと怯え過ぎじゃない？あ、星。なに？出てきただけで阿鼻叫喚ですな？嬉しくないよ馬鹿野郎!!

ちよつと熱烈な歓迎に驚いていると、大きな門がゆつくりと開いた。中から真紅の牙門旗と呂の文字。呂布さんの登場です。後ろの方には陳宮さんもいる。

呂布さんの騎馬隊がゆつくりと歩いてくる。その堂々とした姿に、圧倒的な威圧感に、散々やられた周りの諸侯がソワソワと及び腰になり、ウチの英傑しか居ない武将組も固唾を飲んで見守る。

やがて俺が1人前に出ると、呂布さんも馬から降りた。あれ、乗ったままで良いよ？「馬がいると・・・全力、出せない。それに、巻き込むと死ぬ。」

真紅の触角を僅かに揺らしながら、呂布さんが静かに呟く。過大評価で困るが、動物好きの呂布さんの前で大事な仲間の馬さんを巻き込むのもあれだし、素直に感謝しておく。

・・・これ以上ふざけると死ぬな。俺の中の野生の勘が激しく鳴り響いてる。

そうか、と呟いて、俺は両腕を元祖闘気硬化、全身に闘気術で内部闘気硬化を施す。呂布さんは左足を前に出し、身体を半身に、手にした方天画戟を構える。次の瞬間！

ドガアツ！

轟音。

正しく目に映らない速度で振るわれた呂布さんの方天画戟。巨岩が爆砕したような音が、防御した左腕から鳴り響く。足に力を入れて、力を抑え込む。

それでも俺の身体が5メートルは右に流された。6メートルを超える巨大イノシシの突撃も、武将組全員の同時攻撃を受けても、微動だにしない俺の身体がである。

攻撃を受けた左腕が痺れている。G級ハンターの溜め三を容易く弾く激昂ラージャンの闘気硬化した腕、それも二体分の頑強さを誇る俺に弾かれることなくダメージを叩き込み、かつ彼女の武器には刃こぼれ一つない。・・・G級どころか一級フロンティア装備並だ。闘気硬化も何もしなかつたら、今ので腕一本無くなつてたな。

「・・・ッー！」

離れたところで愛紗が息を飲む。まあ気持ちもわかる。これは駄目だ、完全に化け物だな。まさか数万の兵を相手どり、更に孫策達英傑を同時に相手取って尚無傷の呂布さんが、あれでまだ全力でないとは誰も思うまい。俺も思わなかった。今の一撃、当たる範囲に入れば人間は1000人同時に死ぬぞ。

「・・・お前、強い。」

はは、お前こそ本当に人間かよ。

射抜くような鋭い目でこちらを睨む呂布。これで可愛い女の子だからこの世界は困る。呂布さんの後方から陳宮さんの声が響く。だが彼女は微塵も目を逸らさない。やれやれ・・・。

肌の色がうつすら変わる程度に超弱変身。闘気術も相まって、これで極限ラージャン
3. 5体分だ。同時に身体の機能も上昇し、痺れていた腕が元に戻る。さて。

一歩で彼女の前に飛び込み、潰すつもりで上から打ち込む！

ズガァン！

打ち込んだ拳が巧みに流され、地面に激突、巨大な亀裂が大地を割り、一部の兵が亀裂に落ちて、虎牢関まで響く震動が辺りを揺らした。

全軍がバランスを崩す震動、されど間近にいた彼女は止まらない。ヒラリと蝶のように舞い、されど隼のような一撃が、正確に首を狙って振るわれた！

ガキーン！

今度は動かない。より硬質な音を立てて彼女の武器が弾かれる。その衝撃に逆らわず一緒に飛んで、距離を取る呂布。しかしその顔には驚愕が浮かぶ。俺は周りで見守る皆に、心配ないぞと指し示す為に、首に残る衝撃を無視してニヤリと笑う。

「・・・今、何かしたか？」

「……ツツ!!」

その言葉を合図に、本当の闘いが始まった!!

??

ガギギギイーン!

全力の連撃。並の兵士なら一発で100回は死ぬる攻撃が、嵐を通り越して津波の様に襲い掛かる。

頭にくる攻撃だけなるべく防御して、前に詰める。攻撃が速すぎて俺の周りに壁ができた様だ。舞い上がる砂埃も、巻き込まれた兵士も、鋼鉄の武具も何もかも、粉碎する暴力の津波。俺じゃなかったら10万回は死んだな。

つーか速すぎて全然当たらない!手加減とか捉えるとか以前の問題だよ馬鹿野郎!なんやねんこいつ!

公式武力チートマジやばい。どの2次創作でも中々オリ主が呂布さんに勝てないわけだよ!つーか勝てたら人間じゃないわマジで!俺は人間じゃないから何とかかなってるけど!

しかし、まあ何とかかなりそうだ。既に戦闘を初めて30分が経過し、殆ど動いてない俺に比べて、常に全力疾走状態の彼女では、当然スタミナが切れるのは彼女が早い。俺途中から攻撃さえしてないしな！

ズザア、と呂布さんが距離を取る。しかしその呼吸は荒く、両手は震え、武器を持つのがやつとだ。まあ上位とはいえ、古龍素材まで使ったこの地上最強シリーズをポロポロにするのだから本気でおつかない。風を教わってにおいて本当に良かった。あ、膝をついた。

・・・まだ、やるかい？

「はあつ、はあつ、・・・まだ、負けてない。」

そうかい。ではそろそろこちらからもって・・・あん？

唐突に降り注ぐ矢の雨、みると向こうの方で陳宮さんが恋どのー!! って叫んでいる。やれやれ。静かに息を吸って・・・

「ねね、駄目ッ!!」

グルオオオオオオオオツツ!!

久しぶりのバインドボイス。俺に当たりそうだった矢が全て衝撃で弾かれ、矢を放つ

ていた兵達全てが恐怖で蹲る。後ろの方で味方も身を竦ませてるがそれは無視。本能が人間より強い騎馬たちが恐慌を起こし、乗っていた兵士が落とされる。それは指示を出していた陳宮さんも例外ではない。

「ねねっ!」

叫ぶ呂布さん。しかし疲労で直ぐには動けない彼女。陳宮さんが落ちて、暴れる馬に踏み潰されそうになる。よつと。

「・・・ッ!あれ?」

痛くないのですぞ?と不思議そうな彼女が一瞬で驚愕するも、叫ぶ前にべっこう飴を放り込んで鎮圧する。まあさつきまで離れたところにいた敵が急に自分抱き抱えてたら驚くよね。俺は大人な男には優しく無いが、女子供には優しいタイプのオークさんなんだね。

そのまま彼女を呂布さんの前まで連れて行き、彼女の前で降ろす。不思議そうな顔で、しかし恋どの!と呂布に駆け寄る陳宮さん。へたり込んだまま陳宮さんを受け止めた呂布さんが、呆然とこちらを見る。

「・・・なんで?」

さあてね。それより、まだやるかい？

彼女の疑問に答えず、逆に問いかける。すると彼女は周りを見渡し、やがて言った。

「……皆には、手を出さないで。」

約束しよう。手を出す奴は味方でも俺が殲滅する。

そう言うとう味方の軍が全員後ずさる。おいおい、安心しろ、嘘じや無いよ。

「……分かった。ならいい。……恋の負け。」

そう言うって彼女は武器を放り投げた。同時に董卓軍全員が膝をつき、反董卓連合全員が雄叫びを上げた。この戦い、俺たちの勝ちである。

……いや、つーかお前ら何止まってんだよ！俺が呂布さん抑えてる間に虎牢関攻めるって話だろ！サボってんじゃねえよ馬鹿野郎！！

俺は一騎打ちなんか受けてないぞ！そんな空気だったけど！

??

さて、周りが騒ぐ前にサパツと呂布さんと陳宮さんを担ぎ上げ、忘れずに方天画戟を拾つてスタコラサツサと自分の天幕まで撤退してきた。

2人を降ろす。なんかお前なんか怖く無いぞ！と怯える陳宮さんにはチュツパチャプス風べっこう飴を口に刺し、羌毅さん式ナデナデっ！相手は落ち着くう！やがて緊張が解けた陳宮さんがやめやがれですっ！と言いながらも美味しくそうに飴を舐める。ふ、ちびっ子の相手をさせたならこの俺の右に出るものは居ないっ！！あ、呂布さんもいる？つてなんで服脱いでんの？

「・・・違うの？」

どうやら自分の天幕まで連れてきた理由を誤解されたらしい。まあ普通の兵ならそうなんだろうが、俺は貴女に勝った時点で普通じゃ無いので違います。まず種族から違うんだぜ！

とりあえず彼女にもべっこう飴をあげて、脱ぎかけの服をもつかい着させる。すると呂布さんのお腹から凄いい音が鳴った。

「・・・お腹空いた。」

そういやこの子燃費激悪だっけか。あれだけ動いた訳だし、飴なんかじゃ無理か。よ

しよし、じゃあおいちやんが飯を作つてあげよう。そう言つて頭を撫でる。キョトンとする彼女達。まあそりやそうだ。

「道玄ッ！」

「主人ッ！」

「恋、ねねっ！」

「無事か2人とも！」

そうこうしてゐるうちに愛紗と星が俺に飛びついてきて、呂布さん達には霞と華雄がやってきた。心配しなくても怪我しても無いしさせても無いよ。そうして宥めながら、更に皆んなが来るのをボヤーと見る。いかん、転生して初のガチの命を賭けた闘いしたからちよつと疲れているな。

全員が集まったところで、流琉と凧に食事の準備の手伝いを頼む。時間が微妙なので、2人が不思議そうな顔をするが、ギョルルと大きな音を立てる呂布さんを見て納得したらしい。直ぐに分かりました、と言つてくれる。うむ、流石である。

よし、じゃあ皆、疲れたから食事にしようか。それと呂布さん、君にも働いてもらうから、ご飯食べたら用意してね。

「なっ、恋どのは疲労困憊ですぞ！それを急に！」

「ねね、いい。・・・分かった、何をすればいい?」

ん? 道案内。華雄と霞にも頼んだけど、一緒にお願いな。あ、陳宮さんはお留守番ね、危ないから。

「・・・? 何処を、案内すれば良いの?」

洛陽。賈コウさんと董卓さんを助けるのさ。案内してくれ、反董卓連合が洛陽に着く前に、とつとと連れ出さず。

そう言つて笑う俺。事情を説明した2人以外が驚愕する。だが気にしない。本来なら一刀くんがやることだが、俺のせいでここに居ないからな。代わりにやりましょうじゃありませんか!

さあ、張り切つて参りましょう。まずは腹拵えからな!

続く?

34話

洛陽に珍味を求めるのは間違っているだろうか。

やあみんな、傍目から見たら暴力で押さえつけた女の子を攫って餌付けする犯罪者なオーク系転生者の俺だよ！

コトコト。

女性陣が交代で風呂に入る中、俺、流琉、凧の3人は絶賛料理中である。

天幕前には合計10になる鍋と焚き火、これ全てウチの天幕内で消費されるとは思えない。今だって女性陣が風呂に入っているから、今まで使った事のなかったネタアイテム、大寸胴鍋パート2を四次元袋から引っ張りだして使っているのだ。この大寸胴鍋、高さにして約2m、直径にして6mのアホみたいな巨大鍋なのだが、今はそれに満タンにちゃんこを作っている。出しは2日前に狩った野生のダチヨウのガラと、少し前からせつせと作り貯めしておいた各種キノコの乾物だ。ダチヨウのガラだけで100キロ近い量があるが、鍋に使う食材の量を考えれば可愛いものだ。

今だつて大寸胴鍋を調理に使つても、ここまで満タンに作つた事はない。一般人なら100人以上作れるからな。流石に使いにくすぎて半分くらいの高さの鍋を作つたくらいだし。

しかし今回は2次創作に名高い超絶大食いの呂布さんがいる。まだ来てないが、どうせいつも通り華琳さんと一緒に季衣ちゃんもくるだろう。そうなれば恋姫世界の三大食いしん坊が全員揃う事になる。いつもの量よりちよつと多く、で足りるはずもない。なので珍しく鍋調理を俺がしている。デカすぎて俺じゃないとこの鍋使いにくいといふだけだが。鍋かき混ぜるだけで結構な重労働だからな、これ。

風には地味に難しい米の炊き込みを全部任せた。給食センターにありそうな巨大釜を2つ炊いてもらっている。火加減間違えると釜1つ台無しになる予断の許されない大事な作業だ。最近上手くコメを炊けるようになって来たので、今回も任せてみた。

流琉は今日一番ハードだ。その他の料理を全てぶん投げた。いつもなら俺も手伝うのだが、今回は彼女1人だ。その上でとても楽しそうなので、いつか彼女に店をもたせてあげたいと思う。今だつてこっそり貯金してるしな。エンゲル係数のクソ高いウチではなかなか大変なのだ。稼ぎが稼ぎなのであとちよつとはあるが。

そうこうしていると、孫策達と白蓮がやって来た。またかよお前ら、いい加減自軍で食えよ。食費請求するぞ？孫策が間髪入れずにツケで、とほざき、黄蓋さんが身体で払

うと笑い、白蓮が今度持つてくる、と真面目に返す。白蓮にだけ繋ぎの金平糖をあげることにした。何気に新作タイプである。

ぶーたれる孫策は周瑜さんにぶん投げ、黄蓋さんにはいう通り早速身体で払ってもらう。ほう？と楽しそうにする黄蓋さんに、ギリリと俺を睨む2人だが、誤解はすぐに溶けるから無視だ。流琉、必要な作業黄蓋さんに割り振って。食材切らせても皿洗いさせてもいいよ。他国の武将？気にすんな、本人が言ったから良いんだよ。

なっ！と驚く黄蓋さんだが、頑張れば特別に二合付けよう、というとやる気を出した。さらに私にはー？とほざく孫策を、孫権さんにぶん投げて、調理続行である。

すると華琳さんたちもやって来た。特に戦ってないはずなのに、荀彧さん達が疲れているが、たぶん俺のせいなので、最新作のチョコレートを渡して労う。何故かカカオが売ってたから、前世知識を頼りに作ってみたのだ。単純なミルクチョコだが、牛乳の質がそこまで良くないので、前世で一般的な板チョコまでは及ばない出来だ。今は流琉と品質向上研究中である。

とりあえずまだ時間がかかるので、風呂に入っってこい、と指示すると、何故か春蘭と孫策が複雑な目で見てくる。なんだよ？

「べつつにー？私があればだけでも勝てなかつた呂布に、あつさり貴方は勝つちやうんだつて思つただけよ。不満とかあるわけじゃないわ。」

「ぬう、私では服さえ傷一つつかなかつたのに……！」

あれを勝つたと言つていいのかは疑問だが、2人は呂布と俺の戦いに不満があるらしい。むしろ相手が疲れて負けを認めただけなので、ボクシングの試合なら俺の反則負けな気がする。まあ知つたことではないので、頑張れとテキトーに返して、2人を風呂に追い払う。

あ、やっぱ待つた春蘭。なんだ？と振り向く春蘭の頭を両手で挟むように持ち上げて、顔を近付ける。こんな事しなくても分かつていたがノリだ。なっ！と赤くなる春蘭を無視して、彼女の目を見る。やはりちゃんといつている。確か本来張遼と虎牢関での一騎打ち中に片目を失う筈だから、俺が汜水関で張遼を捕らえてしまったから無事だったのだろう。

無意識というか完全な偶然だが、例え本人が気にしないとしても、潰れないで良かったと思う。ファン的には大事なトレードマークなのかもだが、俺にとつては馬鹿だが大事な友人だ。一生ものの傷は負わない方がいい。とりあえず確認はすんだので頭を撫でて、もういいぞ、と風呂に追いやる。なんだ貴様！と春蘭が喚くが無視だ。

さて、料理再開と振り向く。メツチャジト目の流琉と風。ヤベツ、忘れてた。案の定、どういう事ですかと2人に問われるが、まさかこの戦で本来片目を失う筈だった、とか言えるはずも無い。どうにか誤魔化し（最終的に2人と一緒に風呂に入る、と言う条件を飲んだ。地味に最近だと愛紗以外一緒に入ってない。）、調理の仕上げに取り掛かる。

調理が完成したところで、風呂上がりの女性陣が卓や食器なども並べてくれたので、盛り付けて準備は完了である。いつもはだいたい俺の隣に愛紗と鈴々が陣取るが、鈴々の代わりに湯上りでちよつと髪がまだ湿ってる呂布ちゃんと陳宮さんが座る。尚別に鈴々は離れたところに座ってはいない。さらにズレて俺の膝の上に来ただけだ。普段は行儀悪いから愛紗が許さないが、今日はフル人数にプラス2人なので、ちよつと狭いなので特別だ。鈴々が俺を見上げてニパーツと笑う。うちの娘マジ天使。

後から来た華琳さんや孫策達も席に着いたので、号令をかけて食べる。今ではいただきますとごちそうさまがちゃんと根付いている。良きかな良きかな。ちなみに使い始めたのは一刀くん、ということにしてある。その前から使ってたけど、何も問題はないな。

鈴々や季衣ちゃんはいつものこととして、最近加わった華雄や張遼も、結構食べる。

流石に鈴々達程ではないが。2人も孫権さん達も、俺たちの味付け（忘れがちだが味噌や醤油はまだない設定。）に早くも慣れたようで、美味しそうに食べている。うむうむ、と大家族のお父さんの立ち位置で見ていると、陳宮さんと呂布さんが手をつけてない。どした？毒は入ってないぞ。

「・・・食べていいの？」

ここに座らせて食器まで用意してあるのに駄目だという筈ないやん。食べ食べ。ちゃんとたくさん用意してある。好きなだけ食べなさい。あ、陳宮さんは好き嫌いしちゃ駄目だよ！

「ねねは子供じゃないですよ！」

はは、そうだねー。子供はみんなそういうけどそうだねー。適当に流して頭を撫でる。やめるのですぞー！とわちやわちやする陳宮さんは可愛い。その隣では呂布さんが霞と華雄に大丈夫だから食べ！と勧めている。うむうむ、もう大丈夫だろう。

やがてゆつくりと箸を持った呂布さんは、一口食べたと思ったら、そのまま一度も止まらず食べ始めた。もぐもぐ、みまみまと常に頬袋がパンパンのまま次々と料理を口に入れていく。すごいなアレ、どんな原理だろうか。

その圧倒的食事は見るものも圧倒する。季衣ちゃんと鈴々で慣れてる流琉でさえ驚いているが、俺はたくさん食べてくれるので大喜びである。美味いか？

「みまみま。」コクン

ならいい、あそこの大鍋の中にあるちゃんこと、あつちの釜のご飯はお代わり自由だ。好きなだけ食べなさい。ほら、陳宮さんもお食べ。おつきくなれないよ！

ねねは子供じゃないですぞ！と再びブンブンな陳宮さんだが、呂布さんがちんきゅー、これ美味しい、とあーんしてからちゃんとお食べ始めた。なんだかんだお腹空いてたらしい陳宮さんもよく食べる。よかよか。おや、呂布さんいい食べっぷり。ウチの鈴々や季衣ちゃんより食べるんじゃね？

「むっ！負けないのだー！」

「僕だってまだまだ食べられるよ！」

なんか2人の闘争心に火がついたようで、2人も食べる速度がアップした。流琉が2人に溢さずゆっくり食べて！と言うがまるで聞いていない。良いじゃないか流琉、美味しそうに食べてくれてるし。

「はあ、兄さまがそうやって甘やかすから2人の行儀がよくなるんですよ。」

おっと、藪蛇だった。笑って誤魔化しておこう。ははは、あれ、流琉が呆れ顔だ。

「ちよっと、なんで祭だけお酒ついてるのよ！私には？」

孫策が黄蓋さんを指差して愚痴ると星もそうだと言いだした。うっさい黙れ、黄蓋さんは調理手伝ったから良いんだよ。俺は調理を手伝うもの以外の要求は聞かん。それ以外は完全に俺と流疏の独断と偏見でだします。あ、もちろん凧と流疏は好きなことだって良いからね。

調理しない連中が一斉にぶーたれるが無視だ。凧と流疏だけ苦笑いでありがとうございませぬ、と返す。あ、ごめん前言撤回。愛紗、お前だけは材料次第で聞くから料理に手を出すなよ。どうしても作りたいときは俺と流疏と凧、三人の厳正な監視の元で頼む。

「それはどういう意味ですか、道玄。」

そのままの意味だ。お前が作った自称ホイコーローと自称麻婆豆腐という2つの暗黒物質を忘れたとは言わせん。あれのせいで俺と一刀くんは丸一日寝込んだからな。キングゴブラを毒腺ごと食って無傷な俺がだぞ。あれで散々鈴々に泣かれたんだぞ俺。

「ぐっ！・・・」

「あの時はおとーさんが死ぬかと思ったのだ！食べ残しを捨てたらその時だけ野良犬が生ゴミに寄ってこなかったのだ！」

うう、と愛紗が落ち込むが、この時ばかりは俺たちも慰めない。最近入った霞と華雄、

孫策達は知らないだろうが、他のメンバーは愛紗の料理の威力を知ってるからな。ぶつちやけ俺を寝込ませた事実を鑑みるに、呂布さんの全力より攻撃力が高い。それすなわち食らったら終わりということである。

そんな風に和氣藹々としてたら、先ほどからモジモジしてる孫権さん。トイレかしらと気にしないようにしてたら、それに気付いた孫策が、どうしたの蓮華?と聞く。ああ、デリカシーない奴、と思つたら俺が間違つていたらしい、唐突に羌毅殿!と声をかけられる。おう?なんで?

「ちよ、調理を手伝つたら、本当に好きな料理をお願いしても良いのだろうか?」

その言葉に甘寧さんがなっ!と驚く。なんか騒がれる前に構わないと言う。その時の材料次第だがね。なんか気に入つたのあつた?チャーハンの上にふわふわの卵とエビの入った白いタレがかかったやつ?んん?あー、思い出した。エビマヨソースのチャーハンオムライスか。3日前にノリと気分で作つたやつな。美味しいもの3つ合わせたら最強、とか流琉と2人で作つたなそんなの。あれならまだ材料あるし良いよ。

孫権さんが本当かつ！と喜び、甘寧さんが孫権様いけません！と止めるが、甘寧さん以外が全員賛成に回った。というか黄蓋さんがそれならお主も手伝え、と笑って言い、孫策と周瑜さんが正式に命令したので断れなくなったらしい。ガクリ、と肩を落とす甘寧さん。御愁傷様です。

クイクイ、とズボンを引っ張られたので見てみると、呂布さんがこちらを見ている。ん？どしたん？

「・・・それ、恋も食べた。」

良いよ。その時は一緒に作ってあげよう。そう言うと、彼女は嬉しそうに微笑んだ。表情の変化こそ僅かだが、俺には分かる。彼女に尻尾があればとても勢いよく振られていた筈である。うむ、実に可愛い。

あ、愛紗、あくまで小動物の意味なんで、気にしないで。愛紗の方がもちろん可愛いよ。

「貴方も懲りないわねえ・・・。」

懲りないんじゃない、学習出来てないだけだ！と胸を張って華琳さんに返すと余計に呆れられた。ふふふ、もうその程度のジト目じゃ落ち込まないぜ荀彧さん。

「・・・お前は、ねね達を殺さないのです?」

ほえ? 食事中にいきなりなに陳宮さん。孫策といいそんなに殺されたいの? え、違う? ならいいじゃん。俺も約束破る気はないよ。え、なに孫権さん、孫策がどうしたつて? なんだ皆言つてないの? そいつ初対面で会話もしないうちから味方のはずの俺にいきなり斬りかかってきたんだぜ。それで失敗したら殺せ! つて喚いてたんだ。後で理由聞いたら勘とか言つてさー。

ちよ、なんでバラすのよ! と慌てる孫策に、姉様・・・? と俺を叱る時の流石みいたなオーラで詰め寄る孫権さん。いいぞー! やれやれー! ん、なに陳宮さん。約束? いや呂布さんとしたじゃん。皆に手を出さないつて。砦にいた全員と君ら含めて手を出さない、つてことじゃろ? 嘘はつくけど約束は守る男よわつちは。ちゃんと砦の兵も華琳さんや白蓮が引き受けてくれたっばいし、安心しなさいな。

「お前・・・! さては分かつててなにも言わず逃げたな!? めちやくちや大変だったんだぞあの後!!」

良いじゃないか、人手足りなかつたんだら白蓮。華琳さんも董卓軍の精強な涼州騎兵

が欲しいって言ってたし。ちよつと事後処理ぶん投げただけじゃないか。元々俺にそう言う処理できないしまた桜鍋作ってあげるから許しておくなまし。

「え、ホントか……って止める！お前の料理のせいで騎兵の馬が食べ物に思えちゃうようになつたんだぞ?!」

ははは、知つたことか。ああでもかの有名な白馬義従？だっけ？それが壊滅した理由が美味しかったから、だつたら爆笑だな。色んな意味で後世に残るぞ？挑戦してみないか白蓮 笑

するわけないだろ！と怒る白蓮を馬肉のたたきを差し出しつつ宥める。みんなもそれぞれ楽しそうに会話している。うむうむ、和やかで良い雰囲気だ。どこか呆然とする陳宮さんの頭を撫でて、そのうち慣れるよ、と笑う。

だから今は分からなくても大丈夫、安心してお食べ。そう言うと彼女は俯いて、また食べ始めた。うむうむ、ちびっ子は深く考えなくても良いのだ。ん？なに白蓮。ああそれうまいっしょ。ポン酢も良いけど、ごま油と塩で食べてもうまいぞ。え、何の肉かって馬肉だけど。

「うがー！またやられたあああ!!」

はは、わろす。

??

夜。

華琳さん達や孫策さん達が帰り、粗方の処理が終わった諸侯も、僅かな寝ずの番を置いて、全ての天幕が、静まりかえっている。

当然の様にやってきた秋蘭は、少し前に一対一で相手してもう返した。他のみんなには我慢させる形になるので、街に着いたら頑張ることを約束させられた。うう、自業自得とはいえ厳しいなあ。

「団長も大変やなあ。あ、ウチは愛紗と一緒に時だけでええで。」
「大丈夫か？ 私には何もできんが、無理をするなよ。」

霞、慰めるふりして更に追い討ちかけるの止めろ。あとしないぞ。今の面子だつて愛紗妬いちゃうからな。お前と一緒に何か何されるかわからん。というか別に強制じゃないし参加しなくて良いです。華雄、ありがと。お前本当に良いやつだな。

何やてー！と憤慨する霞を黙らせて、そのまま抱えて大寸胴鍋に入れる。中には既に

呂布さんがステンバイイしていて、華雄さんも乗り込んだ。ちゃんとその縄で身体固定しとけ、落ちたら洒落にならんからな。

「道玄、やはり私も……。」

愛紗が俺の腕を掴んで言うが、すまんと謝る。流石に道案内の武将3人（武器持ち）と、救出予定の2人のスペースを考えたらこれ以上は乗せられない。我慢してくれ。

「本当に行くのですか、主人。いえ、主人を信じてない訳ではないのですが……。」
「流石にいきなり董卓さんが善人だから助ける、と言われても……。」

まあ信じられんのも分かるがね。さつきも言ったがたぶん間違っていないよ。事実洛陽からくる商人は全員、袁紹さんの言う暴政なんてことを知らなかったし、霞や華雄もデタラメだ、と言っている。更に他の諸侯が内通しようとしたら全員に突っぱねられたって話だし、本当に暴政悪政の犯罪者なら董卓軍のあの忠誠の強さはあり得ない。何より、袁紹さんが胡散臭い。

「?それはどういう……?」

たぶん、袁紹さんがこの戦を起こした理由というか、きつかけは分かる。あの単細胞っぷりと、目立ちたがりな性格を考えると、帝の関心を得て、自分より民に人気のある董卓さんが妬ましかったとかそんなだろう。普通にクソな理由だが、そんな彼女だ

からこそ彼女が反董卓連合なんて考えつくとは思えん。名家である自分の血筋と権力を誇りに思う彼女なら、こんなわざわざ他人を巻き込んで功績を奪う機会を与えないはずだ。

実際のところはともかく、袁紹軍が全軍を出せばそれだけで董卓軍と張り合える人数が集まるはずだし、こんな丁寧な各諸侯を集めたのもおかしい。嫌いな筈の曹操さんや、端つこの方の白蓮さえ巻きこんでいる。いくら何でも細かすぎだ。彼女にできる芸当じゃない。

というか、董卓さんが帝を助け出して匿い出したのはここ2ヶ月も経ってない筈だぞ。しかも反董卓連合の連絡が来たのは董卓さんが帝を助け出してから三週間くらいのはずだ。何故もう悪政の噂が流れる？政はそんなに直ぐに結果が出るほど楽じゃないぞ。1ヶ月かそこらで民が反発起こすような悪政なら、もつと噂が聞こえて来てもおかしくないのに、悪政の噂は流れて来ても、その中身は流れてこない。何を持って悪政とした？

「確かに、言われてみれば不自然な点だらけですが……。では結局、誰が董卓殿を悪だと言ったのですか？理由も不明です。」

だからそれが黒幕だろう。わざわざ袁紹さんに入れ知恵してまで他の諸侯に董卓さんを討たせたかった……。それはつまり、自分では董卓に勝てず、それでいて董卓が帝を擁護していると都合が悪い人物……。誰だか分かるか。

「まさか、十常時……!？」

たぶんな。誰だかは知らんし、どうやったのかも知らんが、そもそも帝の権力を使われて困るのは、元々使った連中だけだ。その理由で行くと十常時以外には帝本人と何進くらいしかいないはず。その何進は十常時との争いでもう居ないとすれば、後は十常時だけだろう。帝本人に董卓を討つ為の力が用意できるくらい自由があるなら、董卓さんが無茶な悪政働くくらい好き勝手できるとは思えんし。

そこまで話したところで、周りが静かな事に気付いた。見ると全員がこちらを呆然と見ている。先ほどからあまり口を挟まなかった軍師組や、あえて黙ってた張遼さん達もだ。

……。あれ、なんだ? どうかしたか?

「ああいえ、分かっては居るのですが……。」

「おにーさんがまともな考察すると違和感ありますー。」

「はー、団長意外に頭も回るんやなあ。」
「兄さま、ちゃんと考えてたんですね。」

・・・ひさびさに受けたなこの扱ひ。もういいけどさ。

いいやもう。説明めんどくさい。行くぞ。あ、呂布さん、君の家族である動物達は曹操さん達に頼んだから、すまんがもう少し待ってくれ。街に着いたら曹操さんがそれとなく保護してくれる筈だ。流石に数が多いから今回は無理だが、必ず全員連れ出すから。

「・・・大丈夫。今はゆえとえいが優先。」

「にしても、どうやって街に入るのだ？ 私達をこの鍋に入れて運ぶのは分かったが、街の検問で見つかるぞ？ 無理矢理突破するのか？」

「それに、賈コウたち達が素直に街にいるかなー？ もう逃げ出してるかも知れへんで？」

大丈夫大丈夫。跳んで行くから。もし董卓さん達が見つからない場合は、彼女達の私物を探してくれ。それから匂いを辿る。

何言ってるんだこいつ、という顔をする2人の前で完全変身、月明かりを俺の長い金髪が反射して、俺の周りを薄く照らす。陳宮さんが大声を出しそうになって、鈴々が口を

押さえた。驚いて声も出ない3人に手を上げて、内緒な?と頼む。

さて、じゃあ3人共縄に掴まれ。武器の固定は忘れてないな。よし、行くぞー?

「道玄。」

ん、なに愛紗。そう返す前に口付けされる。お前な、嬉しいけど完全変身時は止める。牙が危ないだろ。

「道玄になら平気です。．．．ちゃんと帰って来てくださいね。」

安心しろ、朝までには帰るよ。あ、他のみんな、続きは帰ってからな。じゃ、行ってくるわ。

そう行つて3人が乗った大寸胴鍋を背負い、虎牢関の方へ走り出す。あ、そうだ3人共。

「なんや!」

「なんだ?」

「なに?」

舌噛むから口閉じてろよ!そう言つて地面を蹴る。一瞬で虎牢関を遥か飛び越え、少し先の街の明かりが見えた。

「~~~~ツツ!!」

3人が驚愕するのが分かるが、気合いで武器を放してないようなのでよしとしよう。この分ならちよつと助走すれば後二回で何とかなるな。

よつしや、張り切つていきましようかね！

・
・
・

なるべく人気のない暗い裏道に、今日は両手も使えるのでラージャン着地!!これなら音もあんまり出ない。周りの住宅の人間が不思議に思うかも知だが、そのまま止まらずに走つて離れたので大丈夫だろう。完全変身を解いて、大寸胴鍋を下ろす。着いたぞ、3人共。

「・・・驚き過ぎて、死ぬかと思った。」

「まさか本当に外壁を跳び越えて入るとは・・・。」

「・・・ちよつと楽しかった。」

2人に比べると呂布さんは元気だ。うむ、流石は万夫不当。やりおる！

そんな事考えてたら、その呂布さんがジツと見てくる。なんぞ？

「・・・やっぱり、あの時本気じゃなかった。」

あれま、分かった？じゃない、一応本気だったよ？全力じゃないだけで。

「嘘。あの時ずつと当てる気無かった・・・。」

ぬう、流石は万夫不当。渾身の演技がバレてしまった。ん？なに華雄？何のためか？・・・さてね。大した理由じゃない事だけは確かさ。いいから行くぞ、ほら案内頼むよ。多分城にまだいる筈だし。

無理矢理ぶった切って促す。まだ何か聞きたそうだが、状況を理解してる3人は、走り出した。黙ってついて行く。

流石に慣れている3人は、夜にも関わらず人気のない道を選んで進み、直ぐに城の裏門へとたどり着いた。

「・・・流石に、見張りがいるか。」

「あれ、うちの兵士とちやうな。装備が違う。張讓の兵やろか。」

「・・・扉、越える？」

というか張讓さんで誰？え、董卓さんを疎ましく思ってる十常時の人？多分反董卓連合の黒幕？知ってたんなら教えてよ・・・。

とりあえず見つからないようにさっくり城壁を飛び越える。で、董卓さんと賈コウさんの部屋は？

「部屋はあそこや。あの光があるところ。」

ふむ、なら外から行くか。3人共掴まれ。それで理解した3人が大寸胴鍋に乗ったところで、足だけ弱変身。音を立てないように、優しく跳ぶ。下を見ると見回りの兵が氣付いた様子はない。そのまま音を立てないように静か部屋の近くまで跳び、近くまで来たら壁を登る。なあとラージャンの身体能力があれば余裕です。

そのままヤモリのように壁を登ると、部屋の明かりのを、そつと覗き込む。ちようど女性2人と、よくわからんおっさんが話してた。

あ、これ大寸胴鍋入らん。よし、3人共、俺を伝つて中に入れ。1人知らないおっさんが居るけど、対処任せた！そう言つて窓枠にぶら下がり、彼女らに俺の体を登つてもらふ。

「分かった。」

そういうが早いか、2人を置き去りに呂布さんがしゅぱつと侵入、2秒後にはぐえつと喘ぐ声が聞こえて、女性2人の声がきこえた。

「恋さん!!」

「恋！無事だったのね！」

喜ぶ2人に助けに来た、と言う呂布さん。やだ、この子ヒーローじゃない。と感動する俺を乗り越え、華雄と霞も部屋へ入る。

「華雄、霞まで！汜水関で捕まったって・・・！」

「運が良くてな、助けられたのだ。陳宮も無事だぞ。」

「陳宮も!?!良かった・・・って待って、誰によ?」

「んー、うちらもよくわからんのやけど、とりあえず団長やな。」

団長、ですか?と不思議そうな董卓さんに、呼ばれた気がしたのでレッツ☆侵入!周りに人居ないからゆつくり入れれば大丈夫、窓は崩れるけど大きな音は立たないさ!とゆーわけで、私が、窓を壊して来た!

「なっ・・・!あんだ誰よ!」

不本意ながらその2人の団長さ!知らない内に傭兵団の団長にされた可哀想な蛮族の羌毅と申す。宜しく、月一で超絶不幸な眼鏡っ娘よ!

「何であんたがそれを知って・・・?あんだ達が?」

「えっ、いやウチは教えてへんで!華雄、お前は?」

「私も言っていないぞ。恋、どうだ？」

「恋も、言っていない……。」フルフル

そりや聞いてないもの。知っていただけさ！それはさておき、始めまして董卓殿。君が悲観する未来を壊しに蛮族が来たよ！安心してくれ、君の意見は聞いてない！もし悲観とかして無かったら普通に壊しに来たよごめんね！

「えっ……えっ!？」

慌てる董卓さんを無視して、大寸胴鍋鍋を下ろすと、3人に大寸胴鍋に入るように言い、董卓さんを脇から掴んで大寸胴鍋に入れ……入れようとしたがちよつと服が長くてヒラヒラ鬱陶しい。なんかもつと簡素なのないの？

「ちよつと！あんたいきなりなにすんのよ!?!月に何かしたら許さないわよ！」

ああはいはい、分かったから騒ぐな。ちよつと静かに。人が来ちやうでしよ。見つかつたら面倒だし黙って乗りなさい。董卓さん助けたくないの？つてああ、君董卓さんの代わりに疑心暗鬼になるとかそんな話なんだっけ？まあいいや、俺を信じろとは言わないから3人を信じて乗りな。心配しなくても、君らの首が必要ならわざわざこんな真似はしないよ。というかそれなら1人で乗り込む。

ついていけない賈☒さんは服装的に問題ないので普通に大寸胴鍋に放り込む。董卓

さんの服は？いいや諦めた。はいはい乗って乗って。

「ま、待つてください。私は責任を取らないと、私が」

皆目知らぬ。言っただけで、君の意見は聞いてない。反省も後悔も何もかも後にしろ。俺はただの蛮族なので、見つけた可愛い女の子2人を攫うだけです。3人共、乗ったな？よし、城出たらさっすり跳ぶから、2人を宜しく。・ ・ ・霞、華雄、なにか？

「団長、それがあかんのやと思うで。」

「不本意だが、霞に同意見だ。」

・ ・ ・わつつ？ジト目で文句を言われたので見てみると、何だか顔を赤くする3人。んんー？あつ！え、あの程度で駄目なの？ナンパ耐性低すぎだろ!?!っていうか呂布さんは何故って、そういうや戦場から攫ったわ。まあ可愛いのは事実だし、訂正は面倒だからいいや。

結果的に大人しくなったから無視していつきまーす。舌噛むなよー？

レッツ！アイキャンフライ!!

その後、洛陽に金色の髪の鬼が少女2人を空を飛んで連れ去ったとか何とか、そんな噂がが流れたらしい。

続く？

35話 湯豆腐に鶏肉を足すと幸せ。

やあみんな、最近は良く女の子を攫う普通にオーク系転生者の俺だよ！

とうつきー！

あれからさつきり2人を攫って戻って来た俺が最初に思った事は、3人も道案内いかなかったなー、だった。連れてったの俺だから言わないけど。

あの後陣地内の天幕に戻ると、全員が起きて待っていた。連れ帰って下ろした瞬間、呂布さんに抱き着く陳宮さん。正直そこは董卓さんじゃないのか、と思っただけ、その後2人にも抱きついてたから良しとしよう。華雄と霞も嬉しそうだった。

ちなみにそれを横目に見ながら俺は全員にキスしました。愛紗とだけして後で、と行ってしまったので、約束を守る為には仕方ない。それが済んだ後、ここが反董卓連合の陣地と知って大声を上げそうになる賈コウさんを羌毅さん式ナゲナゲと特大べっこう

飴のコンボで無理矢理宥めて、天幕に連れ込んだ。ここだけみたら完全に事案なので思わず周りを見渡してしまったぜ。

その後、2人に変装してもらい、偽名を適当に決めた。変装といつてもそこまで大したものでは無い。2人の如何にも仕立ての良い服を、背丈の同じくらいな幼女組の予備に変えてもらい、髪型を変えて貰っただけだ。・・・予想外に賈㊦さんの胸が大きくて苦労したが、沙和と真桜が元々の服を材料にぎつくり手直ししてくれた。身長鈴々と変わらんのに、凄い人だなと思った。

今となつては有名人とは言え、董卓さんと賈㊦さんの姿を直接見たことがあるのは元董卓軍の兵士と、何か偉い席で一緒になつた事があるらしい袁紹さんだけだ。さらに元董卓軍の兵達も、武將達ほど間近で見た事があるのは限られている。ならば割と雑な変装でも意外とバレはしないものだ。まあできる限り人目につかないようにはするけど。

そんな説明を軽くして、2人にこれからの身の振りについて説明する。

とりあえず、しばらく2人にはウチの傭兵団の雑務をしてもらいます。身の回りの世話とか調理の手伝いとか掃除とかそんな感じ。もつとも落ち着くまでな。とりあえず2人は死んだ事にして、有耶無耶になつたら好きにして良いよって事で。

「み、身の回りの世話って何よ！まさか月に情婦になれってこと！？絶対にさせないわよ！」

「じよ、情婦!?!?!えう。」

「……道玄?」

んなわけないだろ馬鹿か。そのままの意味だよ。ウチの傭兵団は軍師がたくさんいるので経理から何からぶん投げられるのは良いが、肝心のパートさん……なんて言ったら良いかな、んーと後宮における女中というか、まあ使用人かな。それが居ないんで、それになってもらう。まあ普通にやりなれない仕事だと思いが頑張ってくれ。あと愛紗、過剰反応し過ぎ。お前らがいるのにいちいち情婦が俺に必要なだと本気で思ってるのか。

むう、と愛紗が俺の腕を抱えてむくれる。やれやれ、相変わらずヤキモチ焼きである。仕方ないな愛紗は、なんて言って星が反対の腕を取り、鈴々が愛紗は嫉妬深いのだ！と言つて俺の膝にのる。でも気持ちは分かります、と風が後ろから首を抱え込むように抱き着いた。そして女性陣全員が俺の側に立つ。……あれっ？

「実際おにーさんはからからし過ぎですー。」

「また女の子連れて来たし、全く説得力無いの！」

「にーさん、この戦だけで何人女を増やしたか数えてみいや。」

「道玄様、流石にそろそろ反省して下さい。」

あれっ。愛紗を嗜めるんじゃないやなくて俺が怒られてる!? というか待て、霞と華雄を入れたのは俺じゃないし、呂布さんも陳宮さんもまだ入った訳じゃないぞ! だから実際俺が連れて来たのはこの2人だけだ!

「だんちよー、恋達一緒じゃ・・・駄目?」

「こらー! 恋どのをいじめるなですぞー!」

うぐっ! 何て目をするんだ・・・! まるで雨の日に捨てられている子犬の様! くう、流石は万夫不当、精神的攻撃力も尋常じゃねー。ぬぬぬ、駄目とか言えない! 俺は雨の日に捨てられた子犬を拾ったけど全然出会えないうちに死んだ前世を持つ男! これを拒否したら俺は俺じゃねえ! 朱里、雛里、2人にも入団手続きを!

「主人、意思が弱過ぎますぞ・・・!」

「私が言うのも何だが、それはどうなんだ?」

うるせー! あの目に真っ向から向き合ってから言え! 無理だから! 出来たら悪人だから! できる奴は俺が手加減なく殴れるから!

「・・・まあ確かに、恋のあの目はちよつと。」

「ウチでも断れんなあ・・・。」

霞と華雄もやられた経験があるのだろう、苦笑いしている。朱里と雛里が呂布ちん達に説明しているのを横目に、未だ信用し切れてない顔の賈☒さんと向き合う。まあ直ぐに信じろとかは言わないけど、2人で逃げ続けても無理があるのは分かるだろ？とりあえず霞や華雄を信じて、しばらくはここに居たら？

「・・・分かった。正直まだ理解出来ないし、あんたを信用した訳じゃないけど、行く当ても無いのは確か。とりあえず皆もいるみたいだから、お言葉に甘えるとするわ。」

よか。まあ気に入らなきゃ好きにして良いよ。その時は呂布さん達も協力してくれらるだろうし、信じられそうなところ行きな。・・・さて、賈☒さんはこう決めたが、君はどうする？董卓殿。

「私は・・・。」

未だ悩む董卓さん。賈☒さんが何かと説得しているが、やがて決意した顔をする。

「あの、私やつぱり「戻って責任を取ります、か？」・・・え、何で・・・？」

え、分かるよ？そんな顔してるもん。まあどうしてもつていうなら止めないけど、そ

んなに死にたいの？

「それは！……そんな事は、無いです。でも、私が生きてると、皆に迷惑がかかります。詠ちやんだって、私がいなければこそそそしないでも生きていける。だから！」

「何言ってるの月！そんな事私は望んでない！私は月が生きていてくれればそれでいい！だから気にしないでいいのよ！」

でも、だって、と言いかう2人。そこに霞や華雄、呂布ちんや陳宮さんも加わって説得に入る。ウチの女性陣は何か言いたそうだが、霞達に遠慮して、黙っているようだ。鈴々を俺を見るだけで何も言わない。うむうむ、鈴々も大人になってくなく。嬉しいけどちよつと寂しい。まあもうちよいだけ待つか。くあ、と欠伸がでる。眠い。呂布ちんとの戦いの疲労が残ってるくさい。初めてダメージ入れられたからな。完全変身の影響で完全回復してはいるけど、精神的な疲れは取れてない。

ううむ。眠いからばちばち介入しよ。おおい、董卓さんや。君が死にたい理由を教えてくださいよ。埒あかねえ。

「ちよつと何言ってるのよあんた！」

「わ、私は死にたい訳じゃ……！」

あん？じゃあ生きていたくない理由でいいよ。違いはわからんけど。お前さんが言う迷惑とやらは本人達が大丈夫だつて言つてんのに死のうとするなら、あれかな、矜持つてやつ？

「ち、違います。本当に私は死にたくなんか・・・。」

じゃあ何でわざわざ必ず死ぬ責任をとろうとしてんの？言つとくけど周りに迷惑かかるから、は駄目な。周りが良いつていつてんだから、それでも嫌だつて言うなら単にお前さんの自己満足だし。で、なに？俺が納得出来たら好きにして良いよ？

「ちよつと良い加減にしなさいよあんた！何てこと言うのよ！」

「団長、言い過ぎや。そこまで言わんでも・・・。」

「そうですぞ、酷すぎますぞ！」

黙れ。それが余計にその娘を傷付ける。分からんなら分かっていいからちよつと口閉じてろ。何より、俺が質問してるのは董卓だ。

なつ！と怒る3人を恋と華雄、星達が止める。邪魔が居なくなつたところで、もっかい聞くけど。何で死にたいの？

「わ、私は本当に・・・！」

・・・やれやれ。じゃあ質問変えるわ。そんなに自分が嫌い？思わず死にたくなるく

らいに。

「「「!?」」」

その場にいる全員が驚愕し、息を飲む。董卓さんが目を見開いて何故、と呟く。いや、匂いで強い自己嫌悪してるのはわかってたし。ほら、答えろよ。・・・答えられない? 仕方ないな、じゃあ当ててあげよう。・・・誰かに助けられているのに、その人達を助けることも傷付けて生きている自分が嫌い。どうよ?

「・・・なんで、なんで分かるんですか?」
さてね、勘かなたぶん。

月、と信じられない様な顔で董卓さんを見る賈コウさん。霞達も驚きを隠せない模様。
「・・・ずっと、ずっと思っていました。どうして私はこうなんだろうって。いつも誰かに助けられて、護られて、でも私は皆に何も返してあげられない。

せめて他の誰かを助けたくて、困ってた天子様を助けようとして、それすら皆に助けてもらって・・・。いつの間にか妬まれて、皆に何も返せないまま、貶められて殺される事になっちゃって。

そんな私を、何も出来ない私を、それでも皆が助けてくれる。詠ちゃんは何日も寝ないで、色々なところに掛け合つて、手を回してくれて、兵士たちは笑つて私を守ると言つて、民ではなく私の為に戦場について、私の為に死んで……!

それでも私は、何も……何も出来ない。一緒に戦うことも、天子様を見捨てることも、戦う皆を守ること、本当に何も出来ないまま、全てを放り出して、また助けられた!

生きてるだけで、誰かに迷惑かける! また、私の為に誰かが代わりに死ぬ!!

……そんなの、そんなのもう嫌です。私が死ねば、私が居なくなれば、誰ももう傷付かない。だから、だから私はここで死ぬべきなんです!」

隠していた少女の苦悩、それを聞いて皆が黙る。賈コウさんでさえ、何か言いかけて、結局何も言わずに俯いた。

……はあ。で? それで終わり?

「・・・えっ?」

え、本当に終わりかよ。ほぼ私が、しか言つてねえし。いやまあいいけどさあ。でもそれだと・・・

「本当にお前の為に頑張つた連中の努力と命が無駄になつたな。」

「ツ?!」

俺の言葉で息を飲む董卓さん。いやいや、大した自己中つぶりである。賈コウさんどころか全員が睨みつけてくるがはん、と鼻で笑つてやる。

だつてそうだろ? お前を守る為に賈コウさんは何日も寝ないで頑張つて、霞や華雄、兵士たちは自分達より圧倒的に数が多い敵と戦つた。2人がやられて、呂布さんと陳宮さんはそれでも虎牢関を何日も護つた。当然何人も兵士たちは死んだらうさ。

それでも、それでも皆が守りたかつたお前の命を、お前自身は要らないと言う。これが無駄でなくてなんだ? ほらなんだ? 言つてみる。

「そ、それは・・・!」

はは、言えないか? 言えないよな。実際無駄になるからな!

正直に言わせて貰えば、今更何言つてんの? つて話だな。誰かが死ぬ前にお前が死ん

「だなら、確かに全て解決しただろうさ。」

でもちんたらしてたから、お前を護りたい人間が死んだ。いいか？その時点で、お前が死んで責任を取る、ということとはもう出来ないんだ。お前が辛かろうと苦しかろうと、責任を取りたいのならば、お前は生きねばならない。

「つーかハッキリ言って決断が遅すぎる。お前は今まで何してたんか本当に。誰かがなんとかしてくれるのをただ待ってただけか？何も出来ないって言い訳してただけか？その賈コウみたいな連中に、甘やかされてただけか？」

「なつーあんた本当にいい加減に！」

うるせえな今は俺が喋ってんだろ黙れ。お前はそうやって護ってるつもりだろうがな、そのせいでその娘は何も出来ないって嘆いたまま死のうとしてんだよ。まだ分かるのか？お前がそうやって甘やかすから、何も出来ないと思ひ込んだまま、こいつは今までやってきたんだよ。」

「……えつ。」

腐敗して権力と地位だけの名家で我儘放題に育った子が、それしか取り柄のない愚物になるように、人は何もかも与えられたところで落ちぶれるだけだ。弛まぬ努力を続けるから武は磨かれる。鍛錬無しに今より強くなれるか？書を読まずに、書の知識を学べるか？分かるだろ、お前なら。

さて、董卓。そこで質問だ。お前、何故その立場にいるんだ？人々の明日を決められる立場に、何故お前は立った？争いごとが嫌いなら逃げるなり、それが出来ないなら才能なくても戦うなり、自分でやらなければならぬ事があつたはずだ。さあ何故だ、答えろ董卓！

「そ、それは……。何も、何も自分で考えて来なかつた……。から。」

そうだな。お前は自分で考えずに、誰かに任せつきりにしてここまで来た。自分の生なのに、だ。だから、今こうして何も出来ないままここに居るのは自業自得、そうだな？

「……はい。その通りです。」

よし、じゃあこの話は終わりな。では話を戻すけど……。って何だよお前ら。何驚いてんの？

「えっ、だつて今私を責めていたのでは、罪を認識させようとしてたのでは……。？」
「ボクと月を叱つてたんじゃ……。？」

はあ？いや全然違うけど。なんか董卓さんがみんなの為に死ぬ！みたいなパチこい

て私が死ぬのが正しい、とか最もらしいこと言い出したから、ムカついて自業自得だろって論破しただけです。特に意味はない。

なんか呆然とする董卓さん等に、言いたい事は今から言うのでちゃんと聞きなさい。と言う。

ぶっちゃけた話、兵士たちは自分達で決めて戦場に行ってます。いい大人が自分で決めた結果なら全て自業自得です。誰かの為とかそーゆーのは他人の自己満足でしかないです。えーとつまり。

「自分が死にたい理由を誰かの所為にするな。どこまで行っても、お前が今死ぬのは責任ではなくただの自己満足だ。」

それで救われるものなど、お前しかない。

・・・うん、途中から自分でも何言いたかったか忘れたけど、だいたい辻褄合ってるから大丈夫でしょ！とにかく董卓さん納得させておかないといつまでも寝れないからな。むしろ眠すぎて途中ほぼ寝言みたいなもんだったけど、なんかみんな黙って感じ入ってるし、勝手に自己完結したでしょ！

「・・・私は結局、皆の所為にして逃げていただけなんです。詠ちゃんや、恋さん達、

兵士のみんなの頑張りに、泥を塗ろうとしてた。」

「違う！それは違うよ、月！確かに月は楽になりたかつたのかもしれない、だけど！月は天子様を手放さなかつた！世間はそれを強欲だと言うけれど、十常時のいる後宮に帰るのを恐れた天子様を守る為に、天子様を返せば、責められることも無かつたのに！それは月が優しいからだ！そんな優しい月が大好きだから、みんな頑張つてくれた！そんな優しい月だから、みんなが自分のために死ぬのが耐えられなかつたの！」

・・・なんか2人が人生の重要イベントしてる。あの時彼女の言葉があつたから私はーつてのちに語られる奴やこれ。うーむちよつと見てたい気もするけど眠い。四限目に体育でマラソンやつて、昼休みにたくさんご飯食べて、五限目に心地よい陽の光と、爽やかな風を浴びながら、滑舌悪い上に声も小さい先生に、古文の授業受けてるくらい眠い。

・・・うん、これ無理。

もういいや寝よう。あとみんな任せた。華琳さんとかにはテキトーに言い訳お願いします。

「だんちよー。眠いの？」クイクイ

誰かに服を引っ張られる。やめなさい。今俺の服はボロボロなんです。俺の体でか
いから替えたくないんです。分かったら離して、そして寝かして呂布さん。

「恋でいい。なら恋も寝る。一緒に寝よ？」

あーハイハイ、いいよー。おいで恋ちゃん。

もはや七割寝た頭でゴソゴソと毛布を取り出し、横になる。すると腕の中に入ってきたので、傷付けない様にゆるーく抱き締める。うむ、温い……。

なんか皆が怒鳴る声が遠くに聞こえる……。

も……無理……。

おやすみなさい……。

そのまま俺は眠りについたのだった。

続く。

36話 僕のスーパーマカダミアナッツ

やあみんな、毎回長い説明すると途中で何言ってるか自分で分からなくなるオーク系転生者の俺だよ！

さて、昨日うっかり寝落ち？した後、どうにも昼まで寝てしまつたらしいです。朝ごはんを取り忘れしました。娘達や育ち盛りの子達、そして華琳さん達と孫策達の分は流石と風が頑張ってくれたみたいです。

俺の方は、一応虎牢関最大の功労者と言うことで、疲れていたのだろうと何も言われませんでした。まああながち間違つてもないので助かります。董卓さんと賈コウさんは、流石に一晩で2人増えたら怪しすぎるので、朝は隠れていた様です。

昼からは虎牢関から洛陽まで移動の為、天幕を引き払つたり捕虜を一足先に陳留に連

れてったりと忙しいので、今日は皆流琉と凧が作ったおむすびを弁当として持つて行つたとか。俺いなくても2人だけで二食を回すなんてやるなあ、なんて成長を喜んだりしました。

え、今何してるか、ですか？それはね。

「……反省していますか？」

大絶賛説教中さ！もちろん正座だよっ！

いやあ参ったね！目が覚めたら目の前に何故か呂布さん、もとい恋がいて、周りを見渡すとちよつと涙目の愛紗がうつつ、と唸りながら俺の腕を掴んでいるし、星がレイプ目で枕元に立ってるし、凧や流琉なんて包丁片手に佇んでるし、俺の上に乗って寝てる鈴々以外はとにかくブチ切れてて、軍師組に至っては有無を言わさず俺を正座させ、弾劾裁判を始めたし。しかも弾劾裁判満場一致で有罪で即極刑が確定した。開始5秒で閉廷の超スピード可決だった。

そのまま現在まで右腕に愛紗、左手に星、後ろから凧、そして膝の上に凧を乗せた状

態でずっと説教が続いている。途中軍師組に用があつた華琳さんがやってきて、ちらつと覗いてそのまま帰つて行つた。つまり普通に見捨てられました！

どうにも最後の方はよく覚えていませんが、恋が言うには、寝落ち間近だつた俺は恋と一緒に寝よう発言にオーケーを出した挙句、そのまま真名を預かり、恋を抱え込んで寝たそうです。そしてその事に気付いた愛紗達と恋を取られた陳宮さんがブチ切れ、慌てて起こそうとしたそうですが、前から言つてる様に、一度寝た俺は明確な危険や殺意がない限り起きません。しかも信じた人間なら尚更です。

俺がグースカずっと寝てる、と言うことは、董卓さん達をもう信用しきつてると言うことなので、余計にブチ切れる皆。特に愛紗は部隊が別とか飲み過ぎ朝帰りとかでない限り、基本的に寝る時俺の隣を誰かに譲つた事はありません。ローテーション外の時でさえ隣で寝ます。なので、その後はもう簡単に想像が付きました。うん、恋との戦いでボロボロだつた地上最強シリーズが完全にお陀仏してたからね、何が起きたかも想像出来ようというものです。

霞や華雄、董卓さんに賈コウさんなんかは、とぼちちりを恐れて離れて様子を伺つています。恋は陳宮さんと流流が作ったご飯をもぐもぐしてます。どうも動いた量に比例

して食べるようなので、昨日の夜みたいに明らかに自分の体積を超える量を食べる様子はありませぬ。家計的には大助かりですな。

とりあえず今は、皆に謝りましょう。ごめんなさい！

深く反省してみたけど、結局軍が移動する時まで説教は続いたぜ！

・
・
・

次の日。

死ぬかと思った。

昨日は結局、最後まで愛紗達の怒りが治らず、元董卓軍の人達には俺たち個人のテントを設置して寝てもらい、街まで我慢出来ない皆による性裁が、俺に対して執行された。さらに昼は仕事で説教に参加できなかった秋蘭も途中からレイプ目で参戦。起きた時からずっと唸ってる愛紗が首筋に噛み付いたまま抜かず三発してきたり、幼女組が5

人がかりで攻めてきたり、途中で霞が覗きに來たりと大変だった。とにかく本当にずつと刺激を受け続けた俺の息子は未だになんかちよつと違和感がある。なお、霞は女性陣の妨害に遭い、最後まではしてない。ちよつと飲んだくらいである。

明け方になってようやく終わった性裁はしかし、続きは街で、と稟の一言共に既に次回が決定している。とゆうか距離的に今日だ。ちよつと本気で死にそうである。

今は全員風呂に入って眠りについた。たぶん出発は俺たちだけ昼を過ぎるだろう。俺は昨日頑張ってくれた流琉達の代わりに華琳さん達や孫策達を相手しなければならぬ。体質的に寝ないとキツイが、仕方ないので頑張る。今は董卓さん達の食事の準備もあるしな。

さて、俺一人で恋（戦ってないから比較的低燃費。それでも大食いの春蘭2人分は食べる。）と季衣ちゃんを含む17人分を用意しなければならぬ。ちよつと手の込んだものは作ってられないので、困った時のチャーハンと、付け合わせのスープで行こう。

それぞれを同時に作成しながら、途中で起きて來た元董卓軍の皆に顔と手洗いをして

くるように言い、戻つて来た彼女らには卓や食器などを並べてもらう。

今日のチャーハンは匂いを抑えたキムチチャーハンと、もはや定番豚バラ醤油チャーハン、ちよつとチャレンジのエビピラフ風チャーハンだ。最後のは普通にエビピラフ作つても良かったのだが、無駄にチャーハンで再現してみた。それぞれ大皿に盛り、卓の真ん中に並べて、ああそうだ、恋。

「・・・?なに、だんちよー。」

「道玄だ。」

どうにも預かつただけで渡してなかったからね。一応ね。すると目をパチクリと一瞬かせた恋はコクリと頷き、その後何故か陳宮さんを前に出して来た。うう、と唸る陳宮さん。なんだなんだ?

「ねねは音々音なのです!仕方ないからよろしくしてやるのですぞ!」

何かと思つたら真名だった。無理に預けなくても良いのに、そう思つたら恋がふるふる、と首を振り、だんちよー、これから世話になる人。礼は尽くさなきや、駄目。と言う。予想外に礼儀正しくて思わず撫でてしまった。偉い偉い。なので俺も音音に真名を預けておく。うむうむ。いつの間にかうちの傭兵団が原作最高戦力を保有してる件について。

そのまま流れて董卓さんと賈コウさんとも何故か真名を交換、と言うか2人は偽名では

なく改名？するらしい。一度死んだ事になるから、生まれ変わるつもりで名を全て捨てて、真名だけで生きていくのかなんとか。え、それでいいの？

「良いんです。ずっと、ずっと未来のことなんて考えられなかったけど、貴方に嗜められて、もう一度皆と話し合つて・・・ふふ、もう一度全力で生きようつて、そう決めましたから。」

「散つていった皆の願いを叶えるためにも、月と一緒に一度全部捨てて、始めからやり直すわ。大丈夫、今度は皆も一緒にいるし辛くないわ。」

これからよろしくね、と爽やかな笑顔の詠さん。なんかもはやキャラ違うレベルで穏やかだ。どうも俺がした説教のせいで2人がよく話し合つたりできたとの事で、霞や華雄にまで礼を言われてしまった。どうしよう、正直眠かつたから何言つたかほとんど覚えてないとか言えない雰囲気。とりあえずノリと勢いでなんか語つたのは覚えている。言われてみれば説教したような気もするが、半分は眠かつたから当たりが強くなつただけの気もする。

・・・うむ、とりあえずそれっぽい感じで流してなかつた事にしよう。

内心冷や汗かきながら話をする。幸いすぐ華琳さん達がやって来たので、うまく乗り切れた。いやあ、人間睡眠時間取らないで頑張るよりも、僅かでも寝た方が失敗少ないねマジで！

??

さて、華琳さん達の後すぐ孫策達や白蓮も来たので、早速食事にしよう、と言うことになった。・・・なったのだが。

「羌毅殿？昨日の呂布の事でお話しがあつたのですが……。まず、何故増えているのか説明していただけるだろうか？」

「お主、儂の誘いを袖にしておいて、毎度毎度これはどういう事なんじゃ？んん？馬鹿にしておるのか？」

「貴方、私の秋蘭に手を出しておきながら、更にこんな可愛い娘達にまで……。少し、欲張りすぎじゃないの？ズルいわよ？」

「貴様ツ、華琳様と私には手を出さなくせに……。っ！」

「お前なあ、本当にいい加減にしろよ？なんでそう新しい女を求めるんだ。．．私だつて傷付くんだぞで？」

何故かまた怒られている俺。どうにも月達全員手籠めにしたと勘違いされている様なので、月達の設定捏造ついでにただの団員と新しく雇った侍女だ、と説明する。実際そのつもりで俺はいるので嘘はついてない。霞？あれは向こうが手を出して来た上に未遂だからセーフセーフ。

最近学んだこと！それは必死にアピールするより本当に何も知らない感を出せば意外と乗り切れることもある！ということだア！と思つてたら恋がブツ込んで来た。

「え．．．、だんちよー、恋と子作りしない、の？」

．．．なんとな？

一瞬世界の時が止まった。間違いないわ、ザ・ワールド使われたよ今。

えう、と月が顔を真っ赤にして、詠が恋！あんた何言つてんの!?!と怒鳴り、ねねが恋どの!?!と驚き、霞が恋、やるやないか！と笑い、むう、私も混ざるべきか？と華雄が悩

み、最後により強いオスがメスと交尾するの普通。とか野生の獣みたいな発言する恋。まさにカオス。

その一方で俺の目の前に並ぶ修羅の方々。よく見ると孫策や陸遜さん、周泰さんなどは自分の分を持って卓ごと離れている。あれ、おかしいな、と思つたら孫権さんと甘寧さんも周瑜さんと黄蓋さんの隣に並んでいた。華琳さんの隣には荀彧さんも並んだ。あ、白蓮が剣を抜いたぞ！

何故、と問う暇もなく、またしても俺は正座させられ、朝食に手をつける事なく再び説教が始まった。

なお、最後まで俺は飯にありつけず、原因である筈の恋は皆と一緒に美味しそうにご飯を食べていた。

ふええ、理不尽だよお。

あその後、いつの間にか説教からウチの傭兵団の専属契約に関する交渉になり、とりあえず俺を誘惑できた方が勝ち、みたいなあやふやなルールでもとも壘惑的な交渉が孫策達と華琳さん達の間で繰り広げられた。とても眼福ではあるのだが、TPOを考えようよ。というか団長は俺なのに、俺には決定権ないのでこの交渉が全て無駄であつたりする。とりあえずおっぱいが柔らかいから何も言わない。悲しいけどこれ、本能なのよね。

おかげで月はずっと顔を赤くしてチラチラコッチを見てたし、詠はそんな月に見ちやダメ！と言いながら同じく顔を赤くしてガン見してた。白蓮は頑張つてだけど恥ずかしくてうまく混じれなかつたので、胸のボタンに手をかけたところでオーバーヒートしてた。

そんな風にちよつと俺が頑張つて鋼の精神で耐えたりやられかけたり色々していたところ、とうとう起きてきたうちの女性陣が発見し即ガチギレ、危うく大乱闘スマツシユシスターズが勃発するところだった。

途中、自軍の将である彼女達に指示を仰ぎに、何人も兵士が来たが、一緒に即発の空気を察して即逃げていった。そして必ず全員俺に向かつて口パクで爆発しろ、と言つていった。変わつてやろうか？巻き込まれたら即死だけだな！などと言えるはずもなく。

その後決着がつかずに時間がかかり過ぎだったので、最終的に洛陽に着くまで決着はお預けになった。まあ後回しになっただけなので、俺は普通に助かっていないがな！

その証拠に、道中もウチの女性陣全員が俺の周囲を完全に固め、曹操軍に前方を、孫策軍と公孫賛な軍に後方を抑えられてしまった。いつになく全力で逃げ道を封鎖されている。こうなつては誰か一人口説いて逃避行、という最終手段さえ取れない。普通に詰んだ。

・・・売られてく子牛つてこんな気分なのかなあ。

閑話休題。

羌毅さんとー、その仲間達がー、洛陽でー、美味しいものに、出会った．．．！

と、いうわけで洛陽に入国です。月と詠は普通に幼女組と一緒に俺の背中の大寸胴鍋にライドオンしている。まさかわざわざ脱出させたのに何事もなかった様に帰って来るとは思うまい！ドヤツ

なお、董卓さんが普通に善政を敷いてた事がようやくここで発覚し、その為董卓さんが居なくなった原因である反董卓連合は全体的に歓迎されてないどころか迫害されます。総大将の袁紹さん達がむっちゃ石投げられて草。

え、俺たち？入国後しれっと一般人ツラして買い物しに抜け出したけど何か？いやだって軍についていったら今度は城の庭園でテントになるだけだし。街中では軍隊がついてこれないから普通に逃げた。それに軍としては人数多過ぎて枯渇しちゃうから食料の買い出しもあんまできないし。街の中では宿に泊まりたいよね、普通は。それに洛陽は仮にも帝のいる都だ。食材も色々集まっているはず！流琉と協力して鈴々が喜ぶ料理を作らねば！

「ちよつと！本当にこんな変装で帰って来て大丈夫なの!?」ヒソヒソ

大丈夫大丈夫。月が普段城からあまり出ないシロコモリだったおかげで、一般人は月の事よく知らないし、バレたら処理するし、ダメな時は昨日みたいにさつくり跳んで逃げるし、追っ手が来たら殲滅するし。とにかく問題は無い！

「し、シロコモリ？・・・えう。」

おっと、月どーした？今更不健康生活だったことに気付いた？大丈夫、多分そのせいで身長同じくらいなのに詠に発育で負けてるんだとは思うけど、ある意味そのおかげで街を楽しめるよ！一長一短だね！

この後無茶苦茶詠に怒られた！

??

夕方。

運がいいというか、流石にこの人数が同時に泊まれる宿はなかったが、詠が月のもの時の為に、誰にも言わず密かに用意しておいたという秘密拠点を教えてくれた！

秘密拠点と言う割には別に隠れているわけではない。普通に街に設置されていて、見

た目はちよつと大きめの石作り三階建ての商店だ。大富豪の商店ではなく、手堅く稼いでます！それくらいのおちよいどいいサイズの普通の商店だった。訊わからない？察しろ。とにかくちよつとおおきな普通の商店なんだよ！

地下室と至る所にある秘密の通路が無ければな！

何ここ浪漫の塊だわ。男の夢見る秘密基地！つて感じのところ！秘密の通路が街のいたるところに繋がっていて、更には街の外にも出られる素敵仕様！なんでも謀反が起きた時や、万が一街中で敵に襲われた時逃げ込める様に作つたらしい。本人シロコモリだからあることさえ知らなかったらしいが！

正直それは意味あるのだろうか、と聞いてみると凄く顔ごと目線逸らして、だ、だから万が一に備えたのよ、と震える声で詠がいう。なるほど！おい月、お前が外に出るの万が一だと参謀に思われるくらい城に引き籠もつてたの？流石に引くんだけど！視察しろよ為政者。

えうつ！と胸を押さえて蹲る月、どうやらショックを受けたらしい。詠が慌ててフォローに入った。月、大丈夫よ！ボクは貴女が素晴らしい為政者だつて知ってるわ！詠ちゃん……！と2人の世界に入り始めた。いやー、青春ですね！まあ素晴らしい為政者が街の視察もあまりしないとかあるのだろうかと思わなくもないけど、月が可愛いか

ら問題ないとかきつとそんな感じだろたぶん。

しかし良い間取りの場所だ。流石に緊急時の駆け込み寺的建物なので、そこまで大きくないが、二階と三階は居住スペースとしても十分な広さだ。流石に全員に個室は無いが、どうせウチの女性陣は寝る時はだいたい一緒なので、三階にある大部屋を俺たちの部屋にして、二階の大部屋は元董卓軍の皆に使って貰おう。各小部屋は好きに使ってもらうとして、一階のカモフラージュ用商店が勿体無いな……。半分は居間みたいな昔ながらの駄菓子屋みたいな作りだ。保管庫である蔵もあるし、地下室もあれば裏庭もそこそこの広さだがある。井戸もあるし、ううむ。

はっ！いかん余りに少年の心が擦られ過ぎて無駄に考えてしまった。駄目だな、こういう秘密基地的場所は幾つになっても男の中の少年が目覚めます。実際使うには若干この人数では窮屈だし、ここを拠点にするにはちよつと無理が……。待てよ？良く考えたら元董卓軍の皆はこの洛陽が拠点なわけで、城に住んでた月と詠以外は自分の家を持つててもおかしくない。というか恋は持つてみたいと話だったはず。

見つかつたら不味いのは月と詠だけだし、月と詠だけこっちに住んでもらつて、後は自宅出勤的形にすれば意外といけるか？ヤバい、なんか楽しいなこういう妄想！秘密基

地楽しい！

「・・・だんちよ？」

「道玄様、どうかしましたか？」

おっと、俺と一緒に買い物荷物持ちを手伝ってくれた2人が不思議そうな顔で見えた。いかんいかん、とつと荷物置いてしまおう。まだ不思議そうな顔の2人にはそろそろ拠点を持つても良いかも知れないと考えていた、と話す。

拠点ですか？と返す風に、さつき考えたこの場所の即席拠点計画を話しながら地下の食料庫から出る。基本的に食料は俺の袋に入れてしまえば痛んだりしないので、旅の途中はそうするが、そうすると袋が俺にしか使えないので、俺がいけない時とかは面倒だ。だから大規模戦闘の野営時、または街に逗留する時など、移動しない時には、こうしてすぐ使う分は置いておくのだ。まあ地味にまだ元董卓軍組に四次元袋の事を教えてないのもあるけど。

どうもこういう話は前世の少年時代を思い出す。あの頃は必死になってダンボールとかで作ったつけ。途中で材料の竹を切ったらノコギリで手を切って、それからしなくなっただけ。今の俺ならノコギリなんかじゃかすり傷さえつかないからな。

珍しく饒舌な俺にどう反応したら良いか分からないっぽい風にな、今一良くわかってない恋。とりあえず恋は自宅出勤、の辺りは即拒否された。居間に着くと、早速料理の準備を始めている流琉。今日は曹操さんや周瑜さん達の軍を撒いてここに来てしまったので、恐らくウチの傭兵団以外追加はないだろう。

久しぶりに俺がまんじゅうとかの普通中華を食べよう、と話をしたら、流琉がなら今日は1人で作りたい、と言いだしたので、流琉に今日は全部お任せです。きつと俺の好きな青椒肉絲は出てくるので楽しみです。

外を見ると真桜と沙和が、華雄に薪割りをしてもらいながら、天幕と帆布を設置している。風呂を沸かすつもりのようなのだ。一応壁があるので、外とはいえ見えなと思うが、念のためだろう。

鈴々は霞と星と模擬戦、軍師組と月、詠は部屋の掃除だ。ほんの数ヶ月前までは定期的に管理人が掃除していたようで、せいぜい埃などだろうが、掃除など家事がほぼ初めての月と詠は、月は楽しそうに、詠は苦戦しながらも、頑張っている。意外と朱里と雛里がメイン戦力で、話を聞いたら水鏡女学院塾は基本的に身の回りのことは自分達でやるのが普通だったから慣れてるとか。なぜ普段はやらないのか・・・。

ってあれ、愛紗は？と、思ったら腕に愛紗が絡みついた。たぶんトイレにでも行っていたのだろう。キツ、と涙目でむくれながら腕をキツく抱きしめる愛紗。そう、愛紗だけは性裁後でも、決着が後回しになっても、まだ許してくれてません。かといつてご機嫌とりに色々サービスすると、他の女性陣が怒るので、下手な真似もできない。

とりあえず撫でようとしたら、反対側に風が絡みついた。風は今は装備を外した状態なので、珍しい感触があつた。おお、素晴らしい。夜いつも揉んでるけど、これは初のシチュエーションでちよつと楽しい。って、あ。

案の定反対側で愛紗が俺の足を踏みながらよりキツく抱きついて、更には腕にかじりつく。やっちまった！と思わず反省する。この状態の愛紗は身内でも容赦なく嫉妬するので。うーっ！と唸る愛紗。いかんアレから愛紗がほとんど人語を話してない。そんなに俺が恋と一緒に寝てたのが嫌だったんだらうか。それとも愛紗が寝てる間に他の女に誘惑されたからだらうか。

とりあえず言葉で謝るが、全然許してくれない。どうしたものかな、と考えてたら、こうしましょう、と突然風がズボンを下ろした。

・ ・ ・俺の。

ファツ!? 風の酷いセクハラにビビる俺。しかし無視して風が前にしやがみ込む。待て! というより早く愛紗が乱入、私のものです、と睨みあう。あれ、ちよつとまつて事態についていけない。なにこれ!

ふと赤色が躍り出た。恋だ。その姿を確認すると同時にここが居間であることを思ひ出す。ちよちよちよつちよつと待て!! おねいさん!!

「・・・恋も。」

止めてくれるかと思つたら更に乱入が増えた。待て、ここはまだ皆が居るぞ! つていうか流琉がもうすぐ飯だつて、いや本当に待つて!?! あれ、ていうか今気付いたけど風実は怒つてる?! 実はめちやくちや怒つてる?!

普段は本当に匂い嗅がない様にしてくれてるんですね、ありがとうございます、と風が啞えたまま喋る。ちよつそのまま喋らないで! と言う瞬間に根元を思いつき握られる。ぐああ! それは反則!

「激怒しています。私達が寝てる間にあんな・・・。今回ばかりは許しません。街に着いたことですし、秋蘭さんの分は仕方ないので他の人に協力して貰います。・・・お覚悟

を。」

ひつ！よく見たらいつの間にか皆んながこちらを見ている。いかん、あんまり普段怒らないから忘れてたけど、本来一番怒らせてはならない奴を怒らせた！

凧は未だ怒る愛紗に、もうこれ以上悪さできない様に子を授けてもらいましょう、と真面目に怖い事を言い出す凧。その言葉で一氣に怒りを忘れて、その手があつたかと嬉しそうな愛紗。こいつ、愛紗の扱いをマスターしているだど!?

子供、という単語に反応した恋が10人作る、と更に恐ろしい事を言い出した。外でにいた武將組や、室内で掃除していた軍師組が、それぞれ元董卓軍組を連れてやって来た。霞はニヤニヤ笑いながら、華雄は神妙な顔で、月と詠と音音は顔を真っ赤にしながら、凄惨な笑顔のうちの女性陣と一緒に俺を囲む。唯一いつも通りの鈴々が天使過ぎて辛い。そこに流琉がたくさんのお椀を持って現れた。

しめたつ！これはチャンス！そう思つて流琉に食事が出来たのか!?!と訊ねる。食事を理由に一旦止められないかと思つたのだ。そんな俺に流琉はニコリと笑つた。ああ、流石我が妹！おにーちゃんの味方なんだね！

「ええ兄さま、私特製の超絶精力増強薬効汁、全員分完成しました。」

ブルータスよお前もか。

その言葉を合図に軍師組がニタアと笑って、門や各所の戸締り完了です、と告げる。これで邪魔は入らん、と真桜。え、なにこれ嵌められた!?!俺が秘密基地にワクワクしてる間に包囲されてた!?!

「流琉、食料はどのくらい持ちますか?」

「鈴々と恋さん次第ですが、順当に行けば2週間くらいです。」

「それならー、余裕を見て途中で買い出しに行きましょう。」

「では、2週間でしゅね!」

「初めての人もいるから、それくらいが妥当なの。」

「ウチはそれでいいで!」

「うむ、初めてだがやってみよう。」

「うう、恋どのがやるならねねもやりますぞ!」

「えう、詠ちやあん・・・!」

「だ、大丈夫よ月、私も一緒よ!」

女性陣の会話にさっと血の気が引く。い、いや、無理してやらないでいいと思うんだ、俺。ほら、月達も初めては大事にしなきゃ!

「主人、問答無用です。」

「道玄、抵抗しても無駄です。」

「大丈夫、恋も頑張る。」

ちよ、ちよっと待ってお願いします!この人数は本当に無理だって!ごめんなさい!許して!

「道玄様、(新しい)お命、頂戴します。」

いやそれはマジで洒落にならないって!!話を聞いておねアツ!

どうげん の めのまえ が まっくらに なった。

続く?

37話 カレー味の焼肉は、カレー粉だけでは出来ないから気をつけろ！

やあみんな、最近危機感知能力が仕事してくれない野生のオーク系転生者の俺だよ！

みんな知ってるだろうか？ハーレムが辛いつてことを。

腹上死を男の夢とか、理想の最期だと思ってる人たちに告げる。

ガ チ で や め と け !!

真面目に辛いから。本当にいつそ殺してくれって思うから！

・・・おっと、失礼。少々取り乱した。ええそうです。何とか生きてます。

予想通りというか当たり前というか、あの人数は普通に無理だった。2週間経つ前に俺の意識がなくなつたので、詳しいことは分からないが、目覚めた時に目の前にいた華佗が言うには、濃い灰色の俺の髪が完全な白髪になっていたらしい。ギリギリで俺の自己治療機能が命を繋ぎ、さらに鍼の通らない俺に薬に気を込めて飲み込ませ、何とか回復したと華佗が言った。

どうやら華佗が居なければガチで死んだかも知れないヤツだったらしい。愛紗の手料理、恋との戦い以外で初めて死にかけてたという事実には心底びびった。ありがとう華佗。本当に助かった。正直最後の方は意識がほぼなかったからな。意識を失う前、愛紗が安心してください、私達が精一杯看病してあげます、って抜かずの10発目をしながら言ったのは何となく覚えている。

「気にするな、患者を救うのが俺の使命だ。・・・だが、流石に気をつけろ。本当に危なかったぞ。たまたま会った張飛が念の為に俺に言わなければ、お前は彼女たちに看病されたまま安らかな眠りについてた筈だ。」

何せ看病と称してまだ楽進と関羽が上に乗っていたからな、と華佗が至極真面目な顔で言った。背筋に氷柱でも刺さったかのような悪寒が俺を襲う。あいつらそんなに俺を殺したいの？ちよつと真剣に怖くなってきた。鈴々だけ連れて逃げるべきかな？

「正直それを推したいところだが…逃げられると思うか？いや、逃げたとして、捕まったらどうなると思う？」

あの熱血な華佗が、酷く冷静に話し、俺にだけわかるように指で扉を指す。チラリと目を向けると、僅かな隙間から覗く瞳。なにあれめちやくちやホラー。

どうやら華佗と鈴々がやり過ぎと叱ってくれたらしいが、全然反省してないらしい愛紗達が、扉の隙間から覗いているようだ。治つたらならまたすると言っていたぞ、と華佗が言う。正直ガクブルなんですけど。

というかあいつらあれだけやってなんで平気なんだ？途中から買い出しに出てた風と風が秋蘭拾ってきて更に人数増えたとはいえ、愛紗など日に7回は失神してるはず。いくらローテーションがあると言っても1週間以上してなんで平気なんだ…！

てか、可愛かったけど月も音音もなんで入るんですかね。詠に至っては途中から月や霞よりも感じまくりいきまくりで、ノリノリだった。その分詠が可愛過ぎて張り切ってしまう、更に怒った愛紗と星と風と後に酷い目に遭わされたが。1番体力無なのが華雄

でちよつと意外だったなあ。というか、人外である俺が半分くらいで死にかけなのに、なんで一刀くんは倍以上相手できるのか。あれつ、ひよつとして俺の知る人間とは違う種族のことだったりするのだろうか。

などと回想していると、華佗が次の患者が、と言つて席を立つ。ありがとう、次は普通に飲みにも行こうじゃないか。

「それは良いが、お前それ、俺や一刀以外に言うのそろそろやめておけ。せめて自分の女だけにしておくんだな。」

もしくはせめて鍼が通る身体になれば、助けられん、と言つて去っていく華佗。心なしか呆れているようだったが、正直お前も勘違いしているぞ。俺が今までガチで自分で飲みに誘つた女は4人だけだ。・・・誘われたらホイホイついて行つたのは事実だが。

だからきつと俺は悪くない、と自己弁護していると、華佗と入れ替わりで愛紗達が入ってきた。思わず身構えた俺は悪くないはず。

ちよつと癒やしが欲しいが、鈴々と流琉の姿が見当たらない。どこへ行つたのだろうか

か。ん？買い物に行った？マジか、ありがとう真桜。あ、愛紗、星、凧、お前から近寄るな。しばらく真桜と鈴々と音音以外は俺との接触を禁ずる。まさか本気で腹上死しかけると思わなかったからな。

そんな！と叫ぶ愛紗達を無視、ちよつと今回は本気で死にかけたので厳しい対応をしたいと思います。ん、なんだ恋。音音がいるなら恋も？駄目。初めてだったはずなのに、お前も容赦なく絞りにきたからしばらく寄るでない。そんな雨の日の子犬みたいな顔しても無駄だ、同じ顔した幼女どもに散々絞られたからな。

そうして寝台の上に乗ろうとした全員を振り払う。腕を掴んでいた愛紗や凧も同様である。とりあえず今日1日は、安静にしろつて話だし、寝ることにしよう。ほらほら星、離れなさい。あ、真桜はちよつとおいで。

なんや？と言つてやつてくる真桜を布団に引きずり込み、そのまま抱き枕代わりにする。真桜のちよ、にいさん!?!という言葉は無視だ。ついでにそれなら私が、と入ろうとする愛紗を無視、布団を被る。真桜、お前さんが1番優しかったとはいえ、原因の一端でもあるので抱き枕の刑に処す。今日は絡繰いじりは諦めて俺と一緒に寝るがいい!

ふははは！

「ど、道玄！わ、私も一緒に．．．！」

「主人、それは真桜には荷が重い、私が変わりましょうぞ。」

動揺した顔で言ってくる2人。他のみんなも似たような事を口々に言う。あ、秋蘭お前はダメだろ。華琳さんのところへ帰って仕事してこい。なんだ真桜？トイレと食事はとりたい？その時言ってくれ。あ、なんなら2人で飯食いに行くか。

乗った！という真桜と抱き合って寝る。うむ、温い。あ、月、詠、霞、音音の4人は初めてで無理し過ぎだ。どんな理由があるにせよ、とりあえず今日は華雄みたいに休めよ。まさかあいつが1番体力がないとは意外だったが、無理が良くないのは確かだな。恋、お前は元気余ってるみたいだし、流琉の食料調達手伝ってやってくれ。残りはこいつら巻き込んだ罰だ、片付けやら掃除やらなにやら、必要な事をやってこい。

横暴でしゅ！と幼女どもが叫び、風が布団の上から乗って抗議して来るが、当然無視である。今日は優しくなどしてやらぬ！でも1番真面目に働いた奴は見直すかも。今日頑張ってたらひよつとしたら明日には許してるかも。

「も、元はと言えば、道玄様が．．．！」

「そうです、貴方があんな事をしなければ私達も……。」

アホ、俺はなにもしてないわい。向こうがべたべたしてきただけで、俺は手で触れるどころか座っていただけだ。華琳さんが雇い主命令で動くと言わなきや素直に逃げたつつの。ていうか思い出した！秋蘭、お前が夜にしれつと混ざるから俺華琳さんの命令逆らえないんだぞ！文句あるならお前が華琳さん止めるよ！

「断る。私は華琳様の臣下だからな。だが私以外に惑わされるのは許さん。黄蓋殿や周瑜殿達もそうだが、華琳様や姉者にもだ……！」

えっ華琳さん達まで駄目なの？なら以前華琳さんと一緒に誘惑してきたのはなんだったんだ。それはそれ、これはこれ？お前……どうしてこうなっちゃったんだ……！初めてあつた時はクールビューティな美女だったのに……!!今はまるで姉のようだ。

「おい道玄、いくらお前でも姉者の悪口は許さんぞ！」

ほう、お前は春蘭のようだ、を悪口だと思つたんだな？なるほどなるほど。春蘭に伝えておくわ。

「構わんぞ？涙目の姉者もまた可愛いからな。」

うわコイツめんどくせえ。ていうかお前冗談抜きでそろそろ帰ってやれよ。合流してからもう一週間近く経ってんぞ。お前の姉が仕事で死ぬってか流石に連絡くらいはしたんだろうな？・・・おい、何で目を逸らす。おいちよつと待て秋蘭オイ!!

「い、いや問題ない、大丈夫だ。仕事の方はちゃんと部下に預けてきた。・・・ただちよつと華琳様にお前達を探せと言われて出てきたのを忘れてただけだ。」

・・・フアツ!?

お前それ全然大丈夫じゃないだろ馬鹿か！何日前の話だよ馬鹿！見ろ、お前の周りにいる軍師組でさえ嘘だろって顔してるだろ!!霞や音音に至ってはこんな奴らに負けたのか、みたいな顔になっちゃったじゃないか！あの星でさえ言葉を失ってるぞ。おい愛紗、お前も何か言ってやれ！

・・・あれ？愛紗？

まるで愛紗から反応が無いので疑問を覚える。まだ俺の腕掴んでるからそこに居るよな。ってか急にみんな静かになったな。そう不思議に思いながら振り向く。腕の中でにやにやしてた真桜もどしたん？って不思議そうにして居る。

「うう~~~~つ。」ポロポロ

え、ガチ泣き!?

振り向くと俺の腕を掴んだままガン泣きしている愛紗がいた。ちよつと理解ができないんですがどしたのこれ。つか皆が静かになった理由これかよ!

すると、上に乗ったままの風が呆れたように駄目ですよおにいさん、と言う。え、これ俺が悪いの？

「愛紗ちゃんがおにいさんに強くでるのはー、そうすればおにいさんが優しく構ってくれるからですからー。そりゃ冷たくされたら泣いちゃいますよー。」

そうなの!?!え、そんな理由で今まで俺怒られてたの?嘘やん……。い、いやでも今回は明らかにやり過ぎだし!華佗がドン引きするくらいだし、許してはやらんぞ!俺はそうそう甘い男ではないのだ!。。。でも何か凄い罪悪感が!

「おーよしよし、泣くな愛紗。そーだな、主人に冷たくされるの悲しいよな。その上目の前でこれだものな？私も泣いてしまいそうぞー。」チラツ

「元氣出してください、愛紗さん。私も道玄様に冷たくされて悲しいですが・・・。」チラツ

星と風がこれ見よがしに愛紗を慰めにいった。否、あれは慰めたフリしてこちらをチクチク責めているな！ま、負けんぞ！今回ばかりは負けんぞ！何せ死にかけてたからな！せめて食事休憩くらいちゃんと取らせてくれればもう少し何とかなったのに、ひたすらおじやみたくないものを誰かに口移しで食べさせられながら、ほぼ寝る間も与えられずヤラれたからあんな目にあつたんだからな！トイレさえまともに行かせてもらえなかつたし！何が道玄のなら平気ですだ馬鹿か！羞恥心で死ぬかと思つただろ！

思い出したら腹立ってきた！よく考えたらこれ完全に俺殺す気だろ！ちよつと泣いたから何だ！むしろ俺の方が泣きたいわ！よし決めた！お前達が謝るまで許さない、絶対だ！そんな目で見ても無駄だぞ！少なくとも今日は許さない！しっしっ、去るがよい！

そう宣言すると、改めて真桜を抱きしめ、愛紗に背を向けて今度こそ寝る体勢をとる。

絶対に振り向かないぞ！振り向いたら許しちゃうから絶対に振り向かないぞ！固い決意を胸に、風を上から退かし、ええんかなー、という顔の真桜を気にせず抱き枕にする！ふ、精々嫉妬するがいい！

「嫌、嫌あ……。道玄、道げん……。」

こつち向いて、と泣きながら言う愛紗。よ、幼稚になり始めた！嫉妬暴走状態だ！これはマズい、こう言う時の愛紗はガチで庇護欲そそる、言うなれば可愛さの化身！ま、負けないぞ！罪悪感がもりもり高まるけど、絶対に振り向かない！ここで振り向いたらまた何かあつた時性裁が酷いことになる！心を鬼にするんだ俺っ！素数、素数を数えろ！素数は自分と一以外で割れない孤独な数字！この孤独な状態の俺に力を与えてくれる！いち、に、あれ、一って素数だっけ!?

「私の、私のどうげん、わたしのお……。！」グスグス

……うん、無理 ☆

この後滅茶苦茶慰めた！

・
・
・

と、言うことがあったのさ！いや参ったねホント!!

そう明るく言ったのだが、もの凄い顔で見えてくる華琳さん。おっとお？やはり誤魔化されてくれないかな？

ここは洛陽の中にある城、元は月とかがいた場所の、玉座の間だ。本来なら総大将だった袁紹さんが座っている筈の玉座は、華琳さんが今座っている。なお、別に袁紹さんを追い払ったりしたわけではない。

「当然でしょこの馬鹿！あんたね、洛陽に入ってから今まで、どれだけ忙しかつたと思つてんの!?!袁紹の馬鹿は天子様が居ないと分かった瞬間何も言わず逃げ出して、総大将の責任もとらず、民の不満だけ擦りつけて行くし、董卓達はとつくに逃げ出して、政策やら何やら、資料分析して現状を調べることから始めなきやいけないし、1番功績を残

したあんたがいけないから武功賞を皆に渡せないし、人手が必要なのにあんたの軍師組もいないし、仕方なく秋蘭を探しに出せば帰ってこないし、秋蘭の代わりは男だし!!しかもその上秋蘭が帰ってこなかった理由があんたと乳繰り合ってたからあ?!ふざけてんじゃないわよこのチ○コ!性獣!! 種馬!!」

おうふ、華琳さんの前に荀彧さんにガチ切れされた。でも待つてほしい。袁紹さんが逃げ出したのも、秋蘭が帰らなかつたのも俺は別に悪くないはずだ!いや、寧ろ俺は被害者だ!何故春蘭じゃなくて秋蘭だつたんだ!明らかに戦後処理は秋蘭を残すべきだろ!!

「うっさい!その秋蘭があんたが急に居なくなつたせいで大変だつたのよ!散々人を心配させといて何文句言つてんのはっ倒すわよ!!」

あつはい、ごめんなさい。

何か荀彧さん激おこである。あの日だろうか、と思つたが流石にそれを聞くのはやめとこう。とりあえず素直に謝しておく。すると玉座に座る華琳さんがもの凄い頭痛そうな顔で長い溜息をつく。そのまま、俺の右側に目をやって、疲れたように口を開いた。「色々言いたいことはあるけれど・・・とりあえず、何故その状態かは理解したわ。今回は一応私達も原因の様だし、仕方ないから不問にするわ。その代わり、その分しっかり

働きなさい。」

おお、良かった。自分で言うのもなんだが、許してもらえとは思わなかった。何たってまだ俺の右腕に愛紗がしがみ付いたままだからな!!

この部屋に入った瞬間に殺気が飛んできたからな!

絶対ふざけてるのかと思われたんだろう。まあ俺でも玉座の間にこんな感じが入ってきたらブチ切れる。仕方ないとはいえ、こんな情け無い経緯を説明しないといけないなんて……泣きそうです。

まあつまり、あの後ガン泣きの愛紗を宥める事に何とか成功したのだが、そのままいつもの様にひつつき虫になってしまったのだ。そこまではいつも通りだが、今回は流石に絞られ過ぎて身体でお詫びが出来ず、また中途半端に厳しくしたものだから、いつもよりも頑固なひつつき虫になった。

この頑固っぷりがまた強力で、いつもなら流石に食事中やトイレタイム、風呂時くらいは離れるのに、今回はその間すら離れない。あれから2日経ったが、離れる気配が全然無いので、仕方なく今日秋蘭に連れられて、愛紗を引っ付けたまま登城したのだ。ま

るで1人で留守番しろと言われたちびっこみたいな引つ付きツぷりに正直困っているのだが、皆に諦める、と言われては諦める他ない。というか剥がそうとすると涙目になって全力で嫌がるので、ちよつと俺には剥がせそうにない。

関羽さんはもうちよい気丈なイメージだったんだけどなあ……。これも俺がいるせいなのか、それともそういう世界線なのかは分からないが、とりあえず可愛い。可愛い過ぎて蛮族には対応に困る。鬱陶しいとかはもう慣れたので大丈夫だけど、何かここまできると依存入ってるので少し心配だ。

正直なんでこの人ここまで俺に惚れたのかがよく分からない。確かに割と劇的に命救った形になったのは認めるけど、結構愛想つかされてもおかしくないことしまくってると思うんだけどな。・・・実は俺の体からなんか麻薬的なもの出てるとかないよね？

まあ考えても仕方ないか。とりあえず仕事をサボってしまった形になるので、これから一旦戻って月と詠以外を連れてくるつもりだ。ああいや、武将組は書類仕事できる奴らだけで良いか。2人の護衛もあるし、流琉の手伝いもある。その分の人出は残さないと。・・・というか、傭兵団って何をすれば良いのか。軍師組に丸投げしたいけど、軍

師組も仕事あるんだよなあ。

そんな風に悩みながら華琳さんに一旦辞去すると伝えたところ、華琳さんが思い出した様に言った。

「そう言えば道玄、私は許してあげるけど、他の者達は知らないわよ？自分でなんとかなさい。」

・・・えつ。他のつて何それ初耳。華琳さん達以外に俺怒られる可能性あったの？春蘭とか？

「貴方ねえ・・・。春蘭もそうだけど、公孫賛に、孫策や黄蓋達も怒っていたわよ？特に周瑜が激怒していたわ。」

あゝっつ・・・!!

いかん、完全に忘れてた。い、いや待てよ。華琳さんが袁紹さんの代わりに洛陽を治

め始めてからもう2週間。流石にそれだけの間無駄にここに残る筈もないし、次会うときは何時になるか分からない、その間にきつと怒りも風化するに違いない！ならば俺がしなければならぬのは春蘭含めた曹操軍のみんなだけ、そのはず！

「ああ、公孫贇はあれで意外となんでも出来るから、誰かさん達の代わりに仕事を手伝って貰っているわ。流石に維持費があるから、軍のほとんどは部下に任せて領地に戻した様だけ。」

・・・だ、大丈夫大丈夫、白蓮ならげろチョロだから、ちよつと一緒に酒に付き合ってもすればなんとかなる。だからまだ大丈夫！まだ慌てる様な時間じゃない！

「孫策達もまだいるわよ。軍は良い機会だからつて経験を積ませたい一部の将校に指揮を取らせて返したみたいだけど、少なくとも孫策と周瑜、黄蓋はまだ残っているわ。さつきまで憂さ晴らしに春蘭と模擬戦していたもの。」

ついでに言えば、貴方が見つかった事は全員に通達済みよ、と悪魔の様に笑う華琳さん。嘘だと言つてよバーニイ!!・・・えつと、実はもう次の予定があるから、洛陽を出

ようと思つてゐるんですが……あ、やつぱり駄目？

てかあれつ？何か華琳さんの怒りの感情が、匂いではつきり分かるくらいなんですけど！えつ、許してくれたんだよね!?不問になつたんだよね！

「ええもちろん。貴方が街に入つた途端今まで姿を眩ましたことはもう怒つてないし、それについて言及することは誓つてもうないわ。」

……けれど、貴方がまた女を増やした事をまだ許したとは誰も言つてないわ。ただ、街まで決着を預けただけよ。」

まさか忘れた訳じゃ無いわよね？と途轍もないオーラを出しながら華琳さんが言う。ま、待て！あれつて最後の方は単純に傭兵団の雇用問題に変わつてた筈だ！ちよつと俺が卑猥な接待受けてただけで！それにどんな形であれ、ウチに入つた団員をどうこう言われる筋合いはないぞ！

猛抗議だ！断固俺は悪くない！理由は知らないが彼女達は納得して俺と交わつたし、そもそも俺は襲われたことはあつても、自分から襲いかかつた事などないぞ！同意がなければ犯罪だが、同意があればいくら女が増えても問題はない筈だ！俺自身は同意して

なかつたけどな！

「へえ？・・・私の臣下である秋蘭にだけ手を出しておいて、春蘭や桂花、主人である私には何もしない・・・。なのに、他の女には手を出す。それはつまり貴方はこう言いたいよね？私は臣である秋蘭よりも、あの新しい娘達よりも、貴方が手を出す魅力がないと!!」

いい度胸ね？

そう言つてとんでもない殺意を叩きつけてくる華琳さん。ちよ、ちよつと待つてくれ！それは逆恨みだと思うんですが！だつて華琳さんに手は出せないじゃん！出したら士官決定じゃん！というか秋蘭にだつて別に俺は手を出してないぞ！薬使つてまで襲いかかつて来られたのは俺の方だよ！

「弁明は全員が揃つてから聞いてあげるわ。・・・乙女の誇りを傷付けたのだから、逃げられるとは思わない事ね？」

全員の時間が揃えば呼び出すわ。そう言つて去つていく華琳さん。ちよ、俺が何をし

た!?

えっ、なに愛紗? 何もしなかったから駄目?! いやいや、だってなんかしてたらお前絶対許さなかっただろ!

「当然です。私以外に手を出すなんて絶対に許しません。出したら厳罰です。」

ギリギリとしがみつく俺の腕をさらに強く締め付けながら言う愛紗。いやそれどころって言うんですか! え、そもそも興味持たれたのが駄目!? 最初に興味持たれたの貴女だからね!? あの人が俺に食ってかかってきた原因、貴女だからね?!

「とにかく駄目です。．．．道玄は、私だけ見ていればいいんです。」

ちくしようっ! こんな時だけでも可愛い! 文句言えねー!

あれ、何苟彘さん? なんか凄い複雑そうな顔をしてるけど。あ、なんか疲れてる? 迷惑かけたからな、疲労回復用の甘酸っぱい飴いる? 何気に最新作やで。

「そうじゃないわよ! ．．．でも飴は貰っておくわ。」

? よく分からん。とりあえずハイこれ。疲れの取れるクエン酸系果物飴。言っても

分からんだろうから適当に舐めてくれ。だいたい効果は同じはず。あ、愛紗も食べる？
これなんかオススメだぞ。杏子味だ。

「・・・華琳様は、変わったわ。」

え、なに急に。まあ確かに初めて会った時とは別人の様に丸くなっただけ。今では愛紗達じゃなくて俺ばかり勧誘してくるしね。

「それは単純にあんたを認めただけよ。悔しいけど、実力を認めた者に華琳様は寛大だし、対応も相応しいものにするわ。」

正直認めたくないけど、実際にあんたの実力は功績で証明されてるし、私も異論はないわ。」

おおっ！なんかよく分からんけど珍しく荀彧さんに褒められた！愛紗、愛紗！凄いな
んかめでたいぞ！今日はご馳走にしよう！なにがいい？トマトハンバーグ？任せろ！

「・・・はあ。本当にあんたは馬鹿なのか大物なのか。訳が分からないわ。どつちかにし

なさいよ、もう！」

「いや、きつと道玄はどちらかでなく、馬鹿な大物、が正しいのだろう。恐らく。」

え、そこは素直に大物って言ってよ愛紗。なるほどって荀彧さんまで！……まあ蛮族なんでね。頭悪くても仕方ないよね、うん。

「何が蛮族よ。困ったら蛮族って言えば済むと思つて……いい加減はつきり言つておくれど、あんたが蛮族出身だつて話、皆嘘だと気付いているわよ。」

そろそろ別の嘘を考えなさい、と荀彧さん。隣でうんうんと頷く愛紗。な、何を言う！この蛮族スタイルを見よ！どう見ても立派な蛮族だろうが！

「何を言いだすかと思えば……。そもそも蛮族と呼ばれる異民族には、まず基本的に言葉が通じないわ。」

よしんば通じたとしてもあんたみたいに私達と同じ様にこの国の政治の話なんて出来るはずが無い。向こうには国としての形態も成り立ちも何もかも違うのだから当然よね。

「というか、向こうに国家と呼べるほどの文化があるなら、国としての交流があるはずだもの。それが無い以上、そもそも向こうには国が存在してない可能性だってあるわ。」

「なのに、あんたは常識を知らない割に国という概念を理解していて、政治というもの
の知識があつて、何が必要で何が不要かを知っている。挙句の果てには私達でさえ気付
かなかつた改善点を見抜いてくる。」

「まるで今より良い形を知っているかの様に。．．．．．
遣いとかいうブ男も不思議そうに言つてたわね。なんでもうこの発想があるのかつて。
自分のいた世界ならもつと後の筈だつて。」

「．．．私が却下した、あんたの残した政策のことよ、これ。」

「あらやだ、凄く偶然もあるんだなあ。天の世界ではきつと俺はもつと後に生まれたん
だな！いやあ、不思議なこともあるもんだわ！」

「．．．まあいいわ。私はあんたが何者かなんてどうでもいいし、華琳様にも余計な詮索
は無用と命じられてるもの。ただちよつと、本当に本当に少しだけ．．．私はあんたに
感謝しているわ。」

ほう？聞いたか愛紗、あの荀彧さんが俺に感謝だよ。これはもう俺、喜びの舞を踊るしかないかな！いいよ、踊っちゃおうよ！熱いビートを刻んじやうよ!!

「茶化すな！はあ・・・本当になんであんたは・・・華琳様は、あんたに会ってから、楽しそうよ。笑ったり怒ったり、呆れたり叫んだり・・・」

もちろん以前の華琳様だって素敵だったわ。苛烈なまでの強さと志を持ち、理想の世界を作るために日々己の覇道を邁進していた。それが素敵じゃない訳がない。私はそんな華琳様に憧れて、あの方に仕えると、生涯全てにおいて支えると決めたのだから。

・・・でも、ずっと何処か寂しそうで。今も変わらず私達を可愛がってくれるけれど、それでもあの頃はもつと華琳様と私達には壁があったわ。まるで、自分は一人で居なければならぬ、そんな想いがある様だった。

それでも、私達は変わらず全身全霊で尽くしたけれど、皆何処かで必ず、あの方の心を埋められない事に、未熟な己を嘆いたわ。」

そう語る荀彧さん。まるで、何かずっと後悔していたような、悔しさが滲むような口調だ。よく分からないが、彼女なりの葛藤と言うやつだろうか。なんにしても、それを俺に語るなんてどうしたんだこの人。

「なのに、あんたと出会ってからの華琳様は、あんたと真名を交わしてからの華琳様は、以前の強さも志の高さも、気高さも、何もかもそのままに、以前よりずっと優しく美しく、ずっとずっと素敵なお顔をします!!

・・・まるで宝物を見つけた様に、幸せそうに笑う!!

悔しいけれど、私達では華琳様をあんな風に喜ばせられなかったわ。だから、色々迷惑もかけられたし、正直今でもあんたみたいな節操なしの男なんて好きじゃないけど！それでも、

それでも、私はあんたに感謝している。」

そう言って、まるで胸のつつかえが取れたように、すつきりとした綺麗な笑顔を浮かべる荀彧さん。正直そんなこと言われても俺が特に何かしたわけではないので困る。とりあえず左様か、と短く返しておく。つーか何を言えればいいんだこれ。

まあいいや、とりあえず早いとこみんな呼んで来ないとまた怒られそうだ。一旦戻るぞ、愛紗。あ、荀彧さん、みんな連れてきたら何処に向かえばいい？

「桂花よ。」

．．．えっ。

「何呆けた顔してんの？私の真名よ。あんたに預けるわ。．．あ！勘違いするんじゃないわよ？これはいつまでも私だけあんたと真名を交わしてないと華琳様が気にするといけないから、特別に！特別にだからね！！別にあんたを認めたとか、そう言うんじゃないんだからね！忘れるんじゃないわよ!？」

．．．．．。

「ちよつと、なんなのよ？私が真名を預けてあげてんだから、早くあんたの真名を寄越しなさいよ!．．．ま、まさか私と交換したくないとか言うつもり!？」

．．．．．えっ？

ええええっ!?!だ、誰だお前!。さては荀彧さんじゃないな!貴様本物の荀彧さんを何処にやった!?!あの人のいつも悪口ばかりの困ったちびっこだけど、あんなんでも華琳さんの

霸道に欠かせない大事な大事な王佐の才だぞっ!そして俺の友人だぞ!さあ吐け、事と次第によつちや女子供でも容赦しないぞコラア!?

「はあっ?!あんた何、ふざけたこと言ってるのよ!私が偽物だとも思ってるの?こんな可愛くて頭のいい女が2人もいる筈ないでしょ!!」

ぬぬっ!確かに本物みたいな発言だがな、嘘をつくな!あの人が華琳さんの命令でもないのに男と真名を交わすかっ!!あの人の男嫌いは筋金入りだぞ!一刀くんにさえほとんど見せないツン九割、略してつんくだぞ!!許さん、あの春蘭とともに華琳さんの犬を自称する、本物我が友人を何処にやった!大事な可愛い友人なんだぞ!!

「華琳様の犬は私だけに決まってるでしょ!!ぶっ殺すわよこの原人が!!」

あれ、本物だ。え、じゃあ本当に俺苟彘さんに真名預けられたの?マジで?やっべこれ明日隕石落ちてくるかも。愛紗、ちよつと俺の思ってた災いと違うのがくるみたい。ちよつくらぶん殴ってくる。マジで。

「・・・落ち着いて下さい、道玄。気持ちは分からなくもないですが、これは現実です。」

目を背けないで……いえ、やっぱり背けてていいです。だからこれ以上女性と真名を交わしてはいけません。」

「あんたも何言ってるのよ!」

ぬぬ、どうにも信じがたいが、愛紗の嫉妬が本物だし夢じゃないらしい。ちよつと未だに信じがたいが。

「あんたねえ……そんなに私が信じられないかしら。」

うーん、あれだけ日頃のお詫びと言つて落ととし穴に落とされたらなあ。そう言うとうぐつ!と言葉に詰まる荀彧さん。心当たりがたくさんあるので、何も言えないようだ。まあ、それはいいや。とりあえず腕を彼女に差し出す。

「道玄だ。桂花、改めて宜しく頼む。」

「……ふん。まあ精々華琳様の為に頑張りなさい、道玄。」

そう言つて腕を取る桂花。おお、本当に握手してる。奇跡だ!奇跡が起きたんだ!宴じゃ!宴の準備じゃ皆の者!

……嬉し過ぎてそうやってはしゃいでたら顔を真っ赤にした桂花に玉座の間を追い出されました!

??

帰り道。

みんなを呼びに戻ってるだけなので、これは帰り道と言つていいのかどうか。そんなことを考えながら、隣で無言で腕に抱きつく愛紗が怖いです。やっぱりアレか、桂花と真名交換してはダメだったか？

「違います。いえ、正直不満ですが、今更ながら彼女と真名を交換したのはいいことだと思います。付き合っても長くなってきましたし。」

え、じゃあどつたの？やたら暗いけどなんかあつた。

「それは……。」

……あの、道玄？」

ん、何かな愛紗。

「彼女達がそうした様に、私も……いえ、私達も貴方が聞かれたくない事は聞きません。興味が無いわけではないですが、貴方が言いたくないならそれでもいいと思います。」

・・・ただ、ただ1つだけ教えて下さい。何処にも、何処にも行きませんかよね？何も言わず、何処かに居なくなったり・・・しませんよね？」

そう言つて俺を見上げる愛紗。目は潤み、腕がぎゅうつと強く抱き締められる。震えているのはたぶん、寒さのせいでは無いのだろう。

前にもこんな事聞かれたな、と思い、あの時はなんと答えたか、と考える。思い出せないな。

本当の事を言えば、その答えを俺は持つていない。確かに俺は自称神様に転生させて貰ったが、好きにしろと言われただけで、何故俺が転生させられたのか、どうしてこの世界なのか、何も知らない。

いつまで生きられるのか、そもそもいつまでここに居られるのか。正直考えたこともなかった。言われてみれば、原作の一刀くんの様に、ある段階で消されてしまつてもおかしくは無いなあ。

なんとも言えないことに気付いたので、何も言わない事にした。

足を止めて、腕にしがみ付く彼女を腕ごと引き寄せ、頭を撫でる。まあ誤魔化しだが、

しないよりはいいだろ。

すると愛紗が俺の身体に手を回す。ぎゅうつと抱きしめながら、離れません、と小さく呟いた。

そんな愛おしい彼女と、最後まで一緒にいたいな、そう思つて空を見る。天に届けと軽く願つて見る。

・・・まあ届くわけないよなあ。

そうして雪が降り始めた空に、苦笑いしたのだった。

続く!

38話

何故アンパンマンの親友にミルクマンが居な

いのか。

やあみんな、ヤマタノオロチが美女を求めた理由がよくわかる化け物なオーク系転生者の俺だよ！

ギイン、と春蘭の持つ剣が右腕ごと弾かれる。

そうなるのと知っていたから、春蘭は弾かれた腕に逆らわず体を後ろに倒し、そのままの勢いで振り子の様に左足を蹴り出す。

効果がないと知っている筈だから、こちらの体を蹴って距離を取るのが目的だろう。そうは問屋が卸さんと、その足を掴もうとして、その瞬間には手と足の間に矢が二本飛んできた。

カン、と軽い音を立てて当然弾かれる矢だが、元から春蘭を捉えさせない為の牽制だ。2ミリ間違えれば春蘭の足を射抜く軌道を何の躊躇いもなく完璧なタイミングで射抜いて見せるあたり、流石は秋蘭と黄蓋さんだ。

二本の矢が弾かれ、間一髪で春蘭が退がると同時に二本の龍を形どった矛が左右から迫る。愛紗と霞だ。迎撃しようとして一歩踏み込んで、背後からの殺気を感じ取る。

刹那ほどの時間思考し、更に二歩踏み込んだ。直ぐに突きから切り払いに切り替えた2人の刃が背後から迫り、しかし体を返す勢いのまま、刃を反対の手で掴んで交差、武器ごと後ろに放り投げる。

一瞬で感知した2人は、掴まれた瞬間大地を蹴って、武器ごと飛ばされた。ちよつと手加減ミスって春蘭を飛び越えてしまったが、2人なら怪我はないだろう。

両腕が2人を投げた拍子に万歳の状態になる。その隙を逃さず、二本の朱い刃閃が肉迫する。一本は剣、一本は槍、星と甘寧さんだ。

迫る刃は同じだが、当然2人にはリーチの差があり、身体ごと飛び込んで来た甘寧さんの刃の方に体当たりするように自ら一歩踏み出して、刃ごと甘寧さんを弾き飛ばす。同時に、自然にズレた形になる星の槍を腕を下ろして脇に挟み込み、愛紗たちと同じ様に、星ごと持ち上げる。

そのまま、春蘭を飛び越えて向かって来ていた孫策に投げつける。空中の孫策は避けられないが、多少手加減したので星の方が対応した。武器と武器がぶつかる音が響いたので、うまく武器同士ぶつ合って回避しただろう。

視線は動かさず、すぐに左右から迫る大質量……流琉と季衣ちゃんだろう攻撃を、あえてそのまま受ける。

轟音。

直撃し、されど俺にダメージは皆無だ。2人には怪我をさせないように、優しく武器を投げる。彼女たちの武器は柄が無い、距離にさえ気を付ければ、彼女たちまでは飛ばない。

ドゴオ!と、流琉たち2人の武器先端が落ちる。同時に短い悲鳴。こちらに向かって来た白蓮と沙和の足下に着弾し、2人が慌てて跳び退いたのだ。

流琉と季衣ちゃんに怪我がないのを流し目で確認しながら、先ほどからずっと気を溜めていた風へ向かう。一步踏み出し、同時に踏み出した足の指に矢が直撃し弾かれた。再び黄蓋さんと秋蘭の牽制だ。実に嫌なタイミングを狙ってくれる!

出足を挫かれて、その瞬間に風の特大気弾が完成する。だが、そんなものが今更効くか！と無視して迫ろうとして、しかし目の前の地面に着弾する。

何故、と思うより早く、舞い上がる土と砂埃。目潰しかつ!!

刹那の舌打ち、咆哮で吹き飛ばすと決断、一瞬で大きく息を吸い・・・

ズバンツ!

目潰しである土砂を引き裂きながら、華雄と真桜が飛び込んで来た! 驚愕で呼吸が止まり、同時に下から掬うように2人の武器が直撃する。当然ダメージなど無いが、不味い、これは・・・体勢を崩す為のっ!

意図に気付いたその瞬間、正しく刹那の瞬間に、頭上に膨大な威圧感! 同時に2つの影が差す。これは・・・鈴々、恋!!

この状態でこの2人の同時攻撃は流石に不味い！仰け反る体を臂力で無理矢理押し止め、反動で弾かれる2人が驚愕するが無視する。元祖闘気硬化ーっ!!

「これで終わりよ。」

カァン、そんな音と共に膝が落ちる。同時に両脇を走り抜ける2つの影、春蘭と華琳!
!?

無理矢理戻した、若干不安定な体勢の1番脆い部分、その膝裏を正確に攻撃された！このタイミングで膝カックンかよ!?

膝が抜けるように地面へと落ちながら、同時に安定を再度崩された上半身が、後ろへと倒れこむ。自然に上を向く視線、そこにはすぐそこまで迫る強大な双刃ーっツツ!!

・・・やれやれ、ここまでか。

「ーっ変身。」

ダガアンツツ!!!

その直後、大気を切り裂く轟音と共に、大地を粉碎する2つの剛撃が、同時に俺に直撃した!

・
・
・

「ねえ。」

ジャアア

愛用の特大中華鍋が、心地よい音を立てて食材に火を通す。

くい、と手首の力だけで持ち上げると同時に軽く引いて、炒められている食材が宙返りする。三度繰り返し、全体に火が通ったら、特製のソースを回しかける。

「ねえちよつと。」

ジュワアア!と水分が蒸発し、同時に芳しい匂いが辺りに充満する。もう少しで完成だ。

「ちよつと、聞いてんの!?!」

一旦手を止めて、かなり深めの大皿を取り出す。最後に一回宙返りさせて、大皿に盛り付ける。糸唐辛子をちよろつと盛り付けて、ピリ辛回鍋肉の完成だ。・・・で、なんだよ孫策。つか調理中は近付くな。お前髪の毛長いし万が一燃え移ったら危ないぞ?」

「あ、ごめんなさい・・・じゃなくて!!」

あん?だからなんだよ?

「納得がいかないわっ!!」

知るか馬鹿。

そう短く返して、俺は再び調理に戻ろうと、水の溜まった大きな盥(洗い物用)のでかい水桶。鍋が特製サイズなので、普通のシンクでは洗えない為、兵士が汲んでおいてくれる。)に使った中華鍋を浸す。火に掛けた直後なので、凄いい音がして水が蒸発する。

ああ、これ鍋痛むから嫌いなんだよなあ、と思いつながらちやつちやと鍋を洗う。何時もならこんな真似しないが、今回は鍋が全てフル稼働中だし、状況的に冷めるのを待つ時間もない。仕方なくささっと洗って、濡れたまま再び鍋を火に掛け……なんだよ。

「納得がいかん！」

「そうよそうよ！」

「濃も納得いかんぞ。」

「ウチもや。」

「私もだ!!」

騒ぐ5人。知らんがな。やれやれ全く鬱陶しいなあ。

はあ、と仕方なく手を止めて、納得がいかん、と騒ぐ5人——、春蘭、孫策、黄蓋さん、霞、華雄に向き合う。チラツと周りを見ると、概ね全員不満そうだが、騒いでいるのは5人だけで、他はとりあえず文句を言う気も、5人を止める気もないようだった。

やれやれ、とため息を一つ吐きながら、仕方なく聞いてやる。で、何が納得いかないって？こちとら敗者の罰ゲームでお前らの料理で忙しいんだけど。

「「それだ！」」

あん？何が？

「なんでアレで終わりなのよ！まだ決着はついてないわ!!」

ビシイ、つと指を差す孫策。だから何度も言ってるだろ？

「どれだけ僅かでも、変身したら俺の負け。そう言う約定だ。」

文句は決めた華琳さんに言ってくれ。そういつて彼女の方を見る。いつもは自信に満ちた笑顔が、今は悔しそうに、苦虫を噛み潰したように歪んだ。いや、なんでやねん。決めたの貴女じゃないですか。

やれやれ、どうしてこうなったのやら。思わず、天を見上げる。
当然ながら、室内では星も月も見えはしなかった。

??

そもそもの始まりはアレだ、孫策と春蘭だった筈だ。

前回、荀彧さんと真名を交換するという素敵イベントをこなし、謎にしおらしくなった愛紗を慰めつつ、ちよつといちやいちやしながら隠し拠点に戻り、また愛紗ばかりと怒る女性陣と愛紗の戦いをなんとか収め、再び城に戻り、サボり扱いの時間分を取り戻すためみんなで働いた。

その後、言われた通り華琳さんに呼び出され、部屋に向かえば、孫策達（周泰さん、陸遜さんは大部分の軍とともにお帰りになったらしい。まあ軍の引率必要だしね。）と、白蓮が額に血管浮かせて待っていた。

特に周瑜さんのお怒りは果てしなく、思わず土下座しようと思った程だった。尚、あの蠱惑的な勧誘がまた行なわれるのでは、と警戒した女性陣も一緒に来ていたのだが、普通に説教だと判断してからは弁護どころか一緒になって俺を叱り出した。正直、俺を閉じ込めたのお前達なんだが、と思ったのだが、例によって何も言わせてもらえなかった。

その後、しばらく正座で怒られながら、何故か事態は宴へと変化し、更に変化して俺

への愚痴大会みたいな感じになった。

ウチの女性陣も、月と詠の警護の為に置いてきた鈴々と、遅くなりそうだったので早めに帰したちびっこ組を除いた何時もの面子だ。最近思うんだが、お前ら仲良いよな。まだ天下三分の計が成ってないのにこの状態。これが後で殺し合いになるとか武人って本当に頭おかしいよね！

なんか喧々轟々とわちやわちや騒ぐ酔っ払いと、酔っ払いの服が肌蹴て艶っぽくなつた姿を、いつの間にか愚痴をやめてニヤニヤ見るはおーさま。普通にカオスなので、軽くツمامミを作ったら下がる。関わったらめんどくさそうだ。

割と最近死にかけたので、俺も今回は酒を控える事にした。酒よりも飯を要求する恋と2人で隅っこに移り、2人で俺特製焼肉丼を食べる。恋の方は、丼と言うよりは御釜丸ごとなので、もはや釜飯かもしれない。

もきゅもきゅみまみま、とひたすら食べ続ける恋はとても可愛い。まあ食べる量を除けばだが。いつかはいい、ははちみつクマさん、いいえ、はぼんぼこタヌキさんを仕込めばもはや敵なしだな！きつと牛丼が好きになるに違いない。

いやホントよく食べる。その辺鈴々や季衣ちゃんて慣れてる俺は、つつい甘やかし

てしまい、どんどん食べ物を追加する。殆ど表情の変わらない恋が、若干嬉しそうに食べるのが実に嬉しい。まあ前にうっかり季衣ちゃんの春巻きまであげてしまい、季衣ちゃんに涙目で怒られたりもしたのだが。ついでに食費使い過ぎて流琉にも怒られる。

そうして2人で黙々と食事をとると、いつの間にかウチの女性陣が俺との惚気話を始めやがった。正直恥ずかしいので止めたいが、あの中に加わる勇氣はない。食事を終えて少しうとうとし始めた恋に膝を貸したら、そのまま頭を載せて、というか俺の太ももが太過ぎて抱きつく様にして寝始めた。

なんか想定と違うけどよしとしよう。珍しく愛紗が惚気に夢中で隣に居ないので、右側が少し軽い。ちよつと違和感あるがたまにはこういうのも良からう、なんて思ってたら、愛紗が居ない隙をついて星が代わりに右腕に巻き付いてきた。

片手に酒を持ち、反対の手にはメンマを壺ごと（俺特製のラー油を使ったピリ辛味。）持つて、上機嫌にしなだれかかる星。寝ている恋を見て、こんなところで寝たら風邪を引くぞ、とクスクス笑う。これが愛紗なら膝で寝る恋にも嫉妬を始めるので、気が楽である。

皆の意識がこちらに向いてないのを確認し、四次元袋から毛布を取り出して恋にかけ

る。實際冬になったばかりで寒いしな。もちろん部屋は火鉢で暖められてはいるけど。「ふふ、相変わらず主人は優しいですなあ。」

そういつて笑いながら、猫の様に俺の腕で顔を擦り付ける。やたらとご機嫌だ。どうやら愛紗を出し抜いて右側を取ったのは初めてなので、感慨深い何かがある様だ。

いつの間にか惚気話から夜の話にチェンジし始めた宴が、完全に下ネタになってきたので、幼女達を帰してよかったなあと思う。いや、悪影響とかじゃなくてウチの幼女経験済みなので、話に普通についていっちゃうから、絵面が酷いことになるのだ。そして俺が凄い目で見られる。

孫権さんが顔を赤くしながら興味津々という顔をしながら、真桜や沙和の話に食いついていて、隣の甘寧さんが同じく顔を赤くしながら慌てて孫権さんを止めに入っている。おい止めろ、俺のサイズとか事細かに教えるんじゃない！

秋蘭が楽しそうに黄蓋さんに俺との初体験を語る、と言うか騙る。お前盛り過ぎだぞ！秋蘭が語るようなラブロマンスなど一切無かった。まずそもそも俺が手を出したのではなく、特殊な薬というかお香で俺を動けなくして俺に襲いかかったのだ。カケラもあっていない。

愛紗が幸せそうに何時ぞやの月見風呂の話を中心に聞かせている。聞いている華琳さん達は若干苦笑いだ。まあ隣で全く違うことを話す秋蘭の、現実の行動を聞けばさもありなん、だな。ちなみに今愛紗が笑い話としてあの時の秋蘭の行動を話せるのは、あの後俺が頑張ったからです。

「ううむ、身体の大きさを考えれば、なんとなく凄いのは想像つくんじゃないか、あやつのはそんなにか？」

「私も2人しか知らないけど、桁というか次元が違うのー。」

「あー、ウチはにいさんしか知らんからなあ。普通じゃないのは賊を見て知つとるけど。」

何か黄蓋さんに沙和と真桜が要らんこと吹き込み始めた。隣で風がウンウン領いている。これはマズいな、絶対に面倒な事になる。そう判断した俺は、とつとと撤退する事にした。ちょうど酒が切れたようで、徳利を床に置き、メンマの壺に蓋をする星。お前は？と目で聞くとお供しましょう、と笑顔で返す星。

じゃあ行くか、と親指立てて手だけで指示する。恋を軽く揺する、眠りが浅かったよ
うで、直ぐに気付いた恋に、帰るぞとアイコンタクト。恋が頷いて、両手を伸ばしてき
たので、背中におぶり、毛布を恋に被らせる。さて、すたこらさっさー
「あら、もう帰るの？」

バレた。気付いたのは孫策だ。相変わらず無駄に気配に敏感な奴である。駄かお前
は。俺は駄だけでも。

孫策の声で全員がこちらを振り向く。むう、教室で先生に難しい問題を急に当てられ
た時みたいだな。何かちよつと圧迫感あるよね。とりあえず、そうだ、と返そうとして、
あぁっ！という愛紗の声に掻き消された。

ようやく星が何時もの自分のポジションにいる事に気付いたらしい。わなわなと震
えだす愛紗に、更に上機嫌になってふふん、と嘲る星。これはマズい、絶対に俺にとばつ
ちりがくる。

愛紗が怒る前に愛紗の名前を呼び、帰るぞ、と星の居ない左手を差し伸べる。2人の
間では右か左かで重要な違いがあるらしいが俺にはよく分からんし、とりあえず差し伸
べておけば大丈夫だろう、たぶん。

案の定バツ、と音がする勢いで左腕を抱え込むように飛びつく愛紗。ちよつと前世の飼犬を思い出す。家に帰るとよく飛びついてきたなあ、とちよつとセンチになる。その姿を愛紗と重ねて、今度一刀くんと犬耳作ろうと決意した。とりあえず愛紗可愛い。

反射的に飛びついたらしい愛紗が、数秒だけ嬉しそうに笑い、直ぐに不満げな顔をした。やはり左が嫌らしい。右と左にどんな違いがあるというのか？さつぱりわからない。まさか神の右方とか言いださないよな。個人的には後方のアックアが一番好きなんだけど。

さて置き、一応病みあがりなので帰る。あまり遅くなるなよー？そんな感じに女性陣に声を掛けておく。酒好きの霞辺りは絶対にまだまだ残るだろうし、三羽鳥もいつもと違う話し相手がいて嬉しいのか、稟と一緒に孫策達と盛り上がっている。邪魔するのも悪いしな。

尚、華雄は幼女組と一緒に帰った。月達の護衛には同じく幼女で酒を飲ませたく無い鈴々や流琉を残したが、先に帰らせた幼女組の護衛と、ちびっ子だけでは不安なんだそうだ。地味に面倒見のいい奴だ。華雄隊の兵から人気があったのも分かる気がする。

「待たんか。話の主役が途中で帰るとは何事じゃー！」

「そうよ道玄、せっかくだから本人の口からも聞きたいわ。」

アホ、猥談の主役と言われて嬉しい奴がいるか。孫策に至っては只の痴女だぞ。痴女なのは服装だけにしとけ。周瑜さん、後任せた。

そう言つて孫策のバカをいつも通り周瑜さんにぶん投げる。彼女なら何とかしてくれるだろうと全幅の信頼を預けてみる。ふ、と仕方ないな、みたいな出来る女の微笑みを浮かべる周瑜さん。流石だ、コレは勝つたな！

「策、どうやら羌毅殿は話して欲しければ酌をしると言いたいらしい。注いで……いや、直接飲ませてやれ！」

わあ素敵、普通に信頼を裏切られたぞお。

それなら私が注ぎましょうか、と隣から星が言う。アホ、と目だけでツツコミ、仕方がないわねえ、と立ち上がる孫策の足下にいる風が目配せする。コクンと頷く風。

「わきやあー！」

短く悲鳴をあげる孫策。ニタリと笑いながらこちらに歩き出した孫策の膝裏を風が軽く打った。まあ膝カツクんだ。綺麗に決まったな、流石だ風。

そんな事は、と謙遜する風だが、頬が赤いのでたぶん照れてる。酒のせいかもしれない。なにすんのよー!と起き上がる痴女はシカトだ。ほれ行くぞ2人とも。恋が俺の背中に涎を垂らす前に戻るぞ。

「まあまあ、我が主人。宴の席ですし、少しくらい付き合っても良いのではありませんか?」

「駄目だ!そんな必要は無い。」

歩き出した瞬間にそんな事を言う星に、即座に切り捨てる愛紗。どうやら苛立っているらしい。どんだけ左が不満なんだ。嫌なら離していいぞ?っていうかさつきまであーた彼処に居たのに冷たいのね。

「離しません。．．．だって、増えたら困ります。」

．．．ブレないなあ愛紗は。てか相変わらず俺の信用の無さよ．．．。おかしいな、酔った勢いでやらかした事なんて無いはずなんだが。まあいいや、愛紗の心配は杞憂としても、病みあがりだから酒は飲めんし、酒が飲めない宴はつまらん。また今度にしようや。

「しかしですな主人、この辺で彼女達の欲求を多少は満たしてやりませんか。後がしつ

こいですぞ。」

あん？いきなりなんだ。どつから出したその理由。根拠でもあんの？

「決まっているでしょう、我が主人。何故彼女等があんなにも我々の話に興味津々だったのか！それはつ、我々の傭兵団と違い、彼女等の軍には不満を解消できるほど優れた男がおりませぬ。つまり、彼女等は男日照りで欲求不満なのです!!」

ピキ、と世界が止まった音を聞いた。なんてこと言うんだこいつ。酔ってるのか？てか男ならたくさんいるし、流石にないだろ。

一瞬のザ・ワールド。解除されれば当然如くブーイングが飛んできた。誰が欲求不満だコラア！と荒ぶる孫策達と、男より華琳様が一番だ！とベロンベロンの春蘭。それに比べてうちの女性陣のこの落ち着きよう。欲求不満かはともかく、うちの女性陣に余裕があるのは確かだな。

「だあれが欲求不満じゃ！……全く、少し調子に乗っておるな。どうにも悪い男に浮かされているようじゃのう？おい、道玄。あんまり生娘相手に調子に乗っていると、大人の技で躓てしまうぞ！」

おい、怒ったふりしてからかいかくるの止める、祭。わざわざこんな時だけ真名を呼

びやがって。つーか華琳さん達はともかく、お前は欲求不満であつてるだろ。陳留で散々俺を酒に付き合わせた時、碌な男がおらん!とか愚痴つてたじゃん。

「なあつ!!お、お主今それを言うか!元はと言えば、誰のせいでもそんな事を言つたと思つてるんじゃない!!毎晩毎晩盛りのついた猿のようにヤリおつて!女2人で来てるこちらのことも考えよ!」

馬鹿、それはウチのみんなと華琳さんに文句言えよ。華琳さんが面白がつて俺を誘つたりするからウチの女性陣が毎日容赦してくんなかつたんだぞ。しかも本人の目的は俺じゃなくて、過剰反応する春蘭と桂花つて言うね。スーパー迷惑。

あ、それとお前と周瑜さんが俺を連れ回すから余計に大変だつたんだ。あれ、お前自業自得じゃん。むしろ俺被害者じゃん。謝つて!ほら誠意を込めて謝つて!

「たわけ、誰が謝るか!そもそもお主がちゃんと儂の誘いに応えていれば良かったんじゃない!」

「あら、桂花とも真名を交わしたのね、道玄。別に私は貴方が誘いに乗つてくなくても良かったのよ?」

なんでだよ。さも当然の様に女がいる男誘うな馬鹿たれ。つーか欲求不満とかお前

なら選り放題だろ。無理矢理修羅場にしようとすんな。後華琳さん、秋蘭だけで手一杯なんで。丁重にお断りしますね。

そんな事を言ったら華琳さんまで切れ始めた。ああもう酔っ払いうるさいなあ。お孫策、お前だけ周瑜さんと乳繰りあつてないで祭にも相手探してやれよ。不満溜めすぎだぞ。

「祭って私のお母様と親友だったせいか、昔から面倒みて貰つてたのよね、私達。．．．言わば叔母みたいなものなんだけど、あんたならそんな人のお相手探しとかできる？」
．．．正直すまんかった。

想像したら完全に無理だった。すまん祭、頑張れ。そういうと一周回って落ち込み始めた黄蓋さん。孫権さんと甘寧さんが慌てている。すると、考え込んでいた星がおもむろに言った。

「むう、仕方ありませんね。流石に憐れなので、一回くらい主人を貸してあげたい気もするのですが．．．ああいや、申し訳ない黄蓋殿。よく考えたら黄蓋殿では無理でした。我が主人のそれは正しく剛槍でしてな、若く未経験なら順応も出来ましようが、熟練で経

「験豊富な黄蓋殿では流石に我が主人の相手は無理かと思われませう。」

「慰めるかと思つたら星が真顔で喧嘩売つた。あ、孫策達の血の気が引いた。どうやら相当な地雷を星が踏み抜いたらしい。周瑜さんさえ慌てている。つて言うかお前勝手に俺を貸そうとするなよ。愛紗に切れられんの俺なんですけど。」

「・・・それは、どういう意味かの？」

「どうもこうも、その辺の粗末なものに慣れてしまった上に若くないですからなあ、今更この大きさは無理でしょうや。」

ズル、と唐突に俺のズボンとパンツが降ろされる。・・・はっ？

ぶるり、と勢い良く飛び出る俺のマイサン。俺の脳があまりの急展開にフリーズし、全員の視線が集中する。

「なあっ!」

「なん・・・じゃ、とっ..」

「んなあっ!?!」

「あれおかしいな、さっきまで黄蓋さんがブチギレてた筈なのに、いつの間にか俺のストリップになつてるぞー?」

スパアン！

脳がようやく稼働した瞬間に星の頭を引つ叩く。むぎゅ！と星が倒れこむと同時に、愛紗が私のだ！と前に出て壁になり、一瞬で愛紗の隣に来た凧も壁になってみんなの視線を遮ってくれた。何するのですか主人！と喚く星に無言でさらに優しく拳骨を落とす。ため息をつきながらズボンを持ち上げた。

・・・お見苦しいものをお見せして申し訳ない。そう心を込めて謝る。見るとぷりぷりしてた華琳さんまで固まっついて、声を上げられたのは春蘭と白蓮、祭だけで、後は声すら出ないようだ。孫策が絶句しててちよつと笑う。

地味にガン見の孫権さんが鼻血出ててめちやくちや怖い。あれだけ殺意全開だった祭が及び腰になつてる。ううむ、なんか本当にごめん。でも1つだけいいかな、どう考えてもこれ俺が1番割食つてるよね。

星のせいで大変な事になった。なんか楽しそうだった宴が完全に沈黙した。華琳さん達まで顔が赤い。というか春蘭に至っては倒れそうだ。なんかちよつと意外で可愛い。あんな、あんな大きいのが・・・？と呟いている。その隣で照れてる姉を見て変態な顔で笑う秋蘭。あいつは曹操軍の中で唯一見慣れてるから余裕の表情だ。ウチの女

性陣もだけど。

「しゅっ、秋蘭!!大丈夫なのか、あんな・あんな!?!」

「怯える姉者も可愛いな・・・大丈夫だ姉者、道玄のアレはまだ本気じゃない。本気ならあの3倍はある。まだ怖がる必要はないぞ。」

「アレでまだ本気じゃないのか?!?!」

うあああ!と錯乱状態の春蘭。おい秋蘭、姉をからかって遊ぶなよ。被害俺にくんだよ。そう言つて嗜めると、にこやかにあに、ちよつとした牽制だ気にするな、と返す秋蘭。視線が華琳さんや周瑜さんに向いている。余計なお世話だが、確かにウチの女性陣以外全員がちよつと戸惑っている。まあ僅かでも無茶が減れば俺の被害は結果的に減る。あえて訂正はすまい。

「うう、き、貴様!私の秋蘭になんてことするんだ!私と秋蘭は双子だからつまり私にも入った事になるんだぞ!?!責任をとれ!」

落ち着け春蘭。いくら双子でもそれはない。てか俺はされた側なので、文句は秋蘭に

頼む。責任は取らなくて良いけどもうちよつと常識を覚えさせてくれ。

「貴様ツ！秋蘭に不満があるというのか!?それはつまり私に不満があるという事かっ！
け、決闘だー！」

なんだこいつメンドくせつ！ハイハイ分かった分かった。明日な明日。もうお前は水飲んで寝とけ。そういうと、酔っ払い扱いするなー！と喚く春蘭。ああもう秋蘭、お前本当に碌なことしねえな！

「何を言う、こんな姉者も可愛いではないか。」

駄目だこいつ話通じねえ。どうしてこんなになるまで放つて置いたんだ！そんな感じに困っていると、星が気絶したので右側を取り戻して上機嫌な愛紗がではその後私もお願いします、と言う。あんまり愛紗達とやらないから、たまにはいいか。了承。

「あ、それなら私もやりたい！私も混ぜて！と言うか混ぜなさい！それで私が勝つたらウチに来なさい！」

孫策が復活して言い出す。だが断る。2人以上は面倒だからヤダ。そう言うとなんでよー！と喚く孫策。うっさい、俺にメリット皆無やろ。そもそも俺は基本鈴々だけとしかやらないのだ。娘とのスキンシップ以外でわざわざ戦うか。鈴々は凄いいお父さん

！な感じを出せばめちやくちや喜んでくれるからやるけど。おとーさん頑張っちゃうよ！

すると、いきなり肩を揺さぶられる。見ると恋が起きていて、恋もやりたい、と短く言った。えええ・・・正直全力でやりたくないが、食事以外で初の恋のおねだりだ。普段はいい子だから余計に断りにくい。対応に困ってたら、クスクス笑いながら華琳さんが良いじゃない、と言った。いつの間にか復活していたらしい。

「思えば、私はあなたが敗れたところを見てないわ。この際だからこの男がどれだけやるのか、みんなで試して見ましょう？明日は希望者全員対貴方で模擬戦しましょう。

・・・それだけでは面白くないから、貴方が最後まで勝ち続けたら参加者全員好きにして良いわ。負けたらそうね、参加者全員が満足するまで専属料理人にでもなってもらいましょうか。ああ、変身は禁止よ。僅かでもしたら反則負けにするわ。」

何人まで持つか楽しみだわ、と笑う華琳さん。ちよ、恋が入ったらそれは正直厳しいんですけど！と言うか勝っても俺にメリットねえ！ウチの女性陣だけでも厳しいのにそれ以上なんて要らないし！てか欲しがったらみんなにキレられるし！

「・・・全員聞きましたね？」

「はい。全力で勝ちましょう。」

「ウチはそれはそれで面白いと・・・冗談やごめん。」

「これ以上増えても部屋が狭くなるだけなのー。」

「鈴々達にも伝えなあかんあ。」

「・・・頑張る。」

ほら見ろ気合い入っちゃったじゃないですかやだー。くつそこいつ俺が勝てないの分かっててこんなふざけた提案しやがったな！勝った時と負けた時の対価が釣り合っていないのもそれが理由か！汚い、流石霸王汚い!!

華琳さんは嘲笑って負け犬の遠吠えね、なんて言ってた。ふざけんなー！

??

まあ、そんな感じで冒頭の戦闘に繋がる訳である。

戦い始めてすぐ気付いたが、俺の気の総量が明らかに増えていた。理由は推測だが、死に掛けたからじゃないかなと考えている。ほら、シャーマンキングにせよターちゃんにせよ、あるいはドラゴンボールにせよ、死に掛けると強くなるし、たぶんそんな感じ。

もしかしたら単純に今のままじゃ死ぬと本能が察しただけかもだが。ともかく、おかげでタイムマンでは余裕ができてたんだ。正直ラッキーだったね。

さらに最初は普通に一対一だったんだ。ひたすら俺対誰かで、普通の模擬戦だった。俺だけ休憩なしのな。しかし最後の最後に恋と戦い、中々決着がつかないから、少しづつそれまで戦った相手も加わっていき、最終的には孫権さんと周瑜さん以外の全員対俺、というアホ極まりない戦闘に発展した。

途中で面倒になって降伏も考えたが、鈴々がイキイキしながらおとーさん流石なのだ！凄いのだー！って褒めてくれるので、ついうっかり粘ってたら、段々武将達の負けず嫌いというか戦闘狂的なあれに火がついてしまった。華琳さんは途中から指揮を取り始めたし、孫策に至っては血を見てないのに興奮しだして凄いな面倒だった。

やがて模擬戦の筈がガチの戦いみたいになり、みんなが全力で俺を倒しに来たので、頑張って俺もラスボス感だして戦った。

最終的には俺は追い込まれ、簡易変身をさせられてしまったので、素直に敗北を認めた。のだが、負けた瞬間も、変身した俺は背中を地につけてなかったし、当然無傷だった。え？体勢が崩れた上に2人の剛撃？気合いとパワーっすわ。鈴々におとーさんすごいのだ！って言われる為なら単身城落とすよ俺。つまり父は娘に負けてはならない。これ常識な。

ともかく、そのせいかは分からないが、戦闘でハイになってた彼女達は誰も武器を下ろさず続行しようとして更に襲いかかってきた。幾ら何でも変身してからでは流石に手加減してもみんなが危なかったもので、俺がラージジャンプ式エリア移動ジャンプで無理矢理距離をとってお開きにしたのだ。

その後は俺を理不尽と断ずるウチの女性陣はそれですぐに落ち着いたが、新入りである霞や華雄を含め、先の5人はまだ勝ってない、まだ戦えるから終わりじゃない！と戦闘狂全開で、飯時になってもまだうだうだやってる訳である。ウダウダやってるヒマはねえっ！じゃない、いつまでたってゴネてんだ5人も。勝ったんだからいーじゃんよ。華琳さんも何むくれてんの？宣言通り終わりになったじゃん。

「あんなの勝ちじゃないわ！明らかに手加減されながら、最後まで結局無傷の相手に負けを認められて、それで勝ったと言っているのは子供の遊びだけよ！」

「その通りだ！何より私の剣で結局お前に傷を負わせてないぞー！ちゃんと切られるー！」

「団長、頼むからもう少しやってーな！あんな不完全燃焼じゃ欲求不満になってまうで

!!」

「別にむくれてないわ。想定していた終わりとは違ったから、私もまだまだだと反省してただけよ。別に貴方の存在が卑怯とか思っていないわ。」

いやお前ら、模擬戦の意味わかってる？お前らの要求だどどつちか死ぬんですけど。試合どころか死合なんですけど。華琳さんに至ってはもはやただの我儘である。どうも彼女たちのには試合に勝って勝負に負けた的感覚の様だ。そもそも模擬戦は試合の方だと思っただがどうだろうか。

やれやれ、ほら好物作ってやるから機嫌直せお前ら。春蘭にはこれ、チーズインハンバーグデミグラスソースな。孫策はキクラゲと玉子と鶏肉のオイスターソース炒め、霞はせせりとニンニクの芽の辛味噌炒め、華琳さんは真鴨と五種の野菜のテリリーヌ、お待ちですよ。発音しにくい？もうなんでもいいよ。おかわりはそんなに無いが許せ。材料補給する間もない無茶振りしたのは華琳さんです。

ええと、黄蓋さんと華琳はなんだつけ。ああ、黄蓋さんは味玉6種盛り合わせだったか。あまり玉子食べすぎるとなよ。華琳は？恋が言ってた焼肉丼？ああ昨日のか。あー、流石にあの量の飯は炊き直さないとないな。御釜丸ごとだから時間かかるけど：え、そんなに要らない？そか、じゃあすぐ作るから待ってる。ん？何鈴々。ああラーメンのお代わりはもうちよつと待って。麺茹でるから。丼はそこに置いといて。

「むう、これでは儂等が駄々を捏ねてるみたいではないか。」

違うつもりだったのか？やれやれ、相変わらず妙なところで子供な奴だな。飲んでる時みたいにあんまり無茶言ってくれるなよ？これからは俺いないんだからな。他の奴が大変だ。

「む、そうか……。もうそろそろそんな時期か。」

「なにそれ、どういう意味よ？」

俺たちの雇用期間が切れる。ようは曹操さんの所をそろそろお暇するんだよ。まあちよつと色々あつたからすぐじゃ無いがね。仕事終わらせないと。ああ、すまんが先約あるから次そつちは無理だ諦めてくれ。周瑜さんと黄蓋さんも現地集合になつちやつたけどちゃんと五体無事に返したし、そろそろ劉備さんのところ行かなならん。

聞いてないわ！と騒ぐ孫策。大丈夫、お前以外にはちやんとやつてあるから。華琳さんも終身雇用にしても構わないわ、と言い出すが、なんか凄い胸騒ぎがするんだよね。劉備さんが何かやらかしてる気がするんだよね。だからすまん、また今度な。

そういうと、ため息ついて早く帰ってきなさいよ、と華琳さん。あれっ、何かいつの間にか帰属先になってる?・・・まあいいや、深く考えないようにしよう。

そんな感じでしたんみりする話をしながら料理をしてたら、やたら覚悟を決めた顔でこつそりやつてきた周瑜さんが、密かに耳打ちしてきた。きちんと周りに聞こえず、誰の意識もこちらに向いてないタイミングだ。何かこれスパイのやりとりみたいで楽しい。ふむふむ、なるほどって、え、マジ?ちよつとそれは・・・うーん、大事な話、ねえ。まあ仕方ないな、少しだけだよ?

「感謝する。ありがとう、道玄。」

にこり、と笑う彼女。やっべこういう笑顔が似合い過ぎだろ。ていうか急に真名呼ぶな照れる。え?祭と孫策だけズルい?むう……。まあ仕方ないな。誰も聞いてないしいいだろ。

じゃあ、また後でな。本当に早めに頼むぞ?遅くなると愛紗に搾り殺されかねん。「ああ、そんなに手間は取らせないさ。」

そうやって俺たちは密約を交わした。何でも俺に話があるらしい、正直ハニトラだったら困るのだが、大事な話らしいのでイマイチ断りにくい。・・・まあ流石に今更誘惑もなからう。あれだけ散々袖にしたし。あれ、だとすると大事な話って何だろ。まあいいや、聞けば分かるでしょ！

・
・
・

そんな訳で夜です。場所は何かよくわからんけど洛陽の隅っこの方にある酒家だそう。洛陽の酒家に詳しい霞でさえよく知らないくらい辺鄙な所にあるらしい。

なお、最近搾られ過ぎて死に掛けたばかりなので、愛紗達には素直に周瑜さんと飲むと言つてある。いやあいつらこういう時の勘半端ないし、隠すのは無理だから。というか次こそ殺されかねん。

愛紗辺りが付いてくる可能性があつたので、周瑜さんに言い訳も用意してたんだが、予想に反して誰も付いてくるとは言わなかった。どうも話を通っている様だ。駄々を

捏ねそうな愛紗は、寂しそうに今回だけです、と言い、抱擁を求めてきたので、しっかりと愛紗が好きな強さでやってあげた。早く帰って来てください、とも言われたので、なるべく早く帰ろうと思う。



・・・たぶん、ここかな？

本当に端っこの方にある店だな。まあ特徴的な形の屋根過ぎてすぐわかったけど。なんで屋根だけトルコ宮殿風やねん。

まあいいや、突撃、粉碎、勝利なのだー！ってか。とりあえず扉を開けて中に入ると、中は普通でターバン巻いたりした従業員はいなかった。確か個室をとってる、とのことだったので、周瑜さんの名前を出すと、案内を申し出てくれたので、とことこ付いていく。

ううむ、いくつか個室があるタイプの酒家なのか、結構色んな客が入っている。地味に豚の丸焼きが美味そうなので、注文できたら頼んでみよう。にしても、随分先行くな。この調子だと一番奥にある高い系の奴かな。入った事ないからどうなるかわからないけど、前世の知識には漫画とかでそういう設定が多いらしいし、こりや相当大事な話みたいだ。本当に何だろう？

やがて一番奥まで辿り着き、階段を上がる。つーかここ広い酒家だな。ひよつとして密談とかに使われる系の奴なんだろうか。あらやだ浪漫溢れる店だな！いいぞもつとやれ！

そんな事を考えながら歩いていたら、とうとう従業員がこちらです、と扉を手で差した。お、ありがとうよ。そう言うと、ではこれで、と従業員が帰って行く。その姿を見送った後、軽く三回ノックすると、周瑜さんの返事が返って来たので扉を開けて入る。

そこには、月の光に照らされた、美しい光景があった。

月の光が優しく天井から降り注ぎ、ちようど大理石で作った様な丸テーブルには、所狭しと料理と酒が並び、そこには灯りもつけずに周瑜さんと黄蓋さんが、いつもとは違うゆったりとした白地の服を着て、悠然と席についていた。大きな寝台には天幕が付き、まるで貴族になった気分が味わえる。

なんとも優美な部屋だ。かなり良い値段のする部屋だろう。結構な地位の人間が宿泊する部屋なんだろう。

．．．．．そう、部屋だ。どう見ても宿の一室だ。間違つても飲み屋ではない。

宿付き酒家かよ!!いや酒家ではあるけど!

何か凄い嫌な予感がする!この凄い嗅いだことのあるお香とか!2人の脱ぎやすそうな服とか!えつと、すいません部屋間違えました!

「よく来たな道玄。待つておつたぞ。」

「何処へ行く道玄、間違つていないから座つてくれ。」

ぐつ、捕まった。いやしかし最悪ここから出ればつて扉が勝手に閉じた!しかも一瞬見えたあのマフラーみたいなの・・・甘寧さん?!真面目な奴までグルだと!?!は、離せ!

「落ち着け、別を取つて食おうとは思つてないさ。」

「そうじゃぞ。ほれ、いつか約束した儂の手料理じゃ。お主が来るのを待つていたらいつになるか分からんから用意した。感謝して味わえ。」

ぬう、これが噂の!ぬぬ、ぬぬぬ!ま、まあこのお香も今となつては耐性ついたのか、だいぶ効果無くなつてきたし、ちよつとだけなら大丈夫だろう。ちよつとだけなら!

ちよつとだけ、と決めて、席に着く俺。2人も仕方ないなあ、みたいな大人っぽい苦笑いをして席に付き、祭のお勧めめどと言う酒を注いで乾杯する。いただきます！

ぐいつと一息であおると、喉を焼く強烈な酒精と、芳醇な香り・・・ブランデー？な
んであるんだこれ。本当に訳わからんなこの世界。

まあ美味いからいつか！祭に勧められて料理も食べる。料理自体は別段珍しくもない中華料理だが、味付けがかなり濃い目で、何故か後引くこの味は、正しく酒飲みの味！美味い！いやあ、流琉と華琳さんに続いて恋姫三大食べてみたい料理をついにコンプレイト！感無量ですな！

実に気分良く料理を食べる俺に、2人も何処かご機嫌で、楽しい時間が始まったのだった。いやあ美人に挟まれて美味しい酒に美味しい飯！転生ものの醍醐味ですね！毎日してるけど！

そうして、上機嫌なまま夜が更けていった。

・
・
・

深夜。

綺麗な月が真上に来た頃、あれだけ騒がしかった人の気配も殆ど無くなった。時間にして深夜一時とかその辺だろう。電気のないこの世界じゃ、人の就寝時間はかなり早いので、今はスーパード深夜だろう。まあ酒好きならまだ飲んでるやつもいるだろうが。

そんな時間になると、流石に料理も酒も減らなくなり、3人で窓から見える月を見ながら、ゆったりとしている。・・・いつの間にか2人が腕に抱き付いてて、服も前がはだけている。正直非常に目のやり場に困るし、帰りたいたのだが、2人ががちり腕を掴んでいて動けない。

というか、2人の顔がさつきから非常に艶っぽいと言うか上気してると言うか：：発情した雪蓮みたいな雰囲気。あれ、ちよつと!?

「ふふふ、流石だな道玄・・・このお香に耐性がついてきた、と言う話は星から聞いていたが、酒や料理に混ぜた媚薬も効果が無いなんて・・・。」

「まったくじゃの・・・。儂等ばかりやられて、本当に不公平じゃ。」

媚薬? そんなものまで入れてたん? ならもしかしてお前らの状態ってそれが原因か? 馬鹿だろ!?!・・・あれ、今星って言った?

ちよつと予想外な何かが起きているようで、ただ逃げる、という訳にはいかないようだ。2人がゆつくりと服をずらしていく。前がはだけているから、簡単に肩から滑り落ちていく。

「それでも無いさ。お前のものが相手なら、これくらいは準備しないと、流石に私達も怖い。」

「まったくじゃ。流石に儂もあんなの初めて見たぞ？しかも皆あれから更に大きくなると言うし、愛紗も秋蘭も初めては相当な痛みだったと言うからな。準備し過ぎ、という事はあるまい。」

あれつ、まさかの愛紗の名前まで!?え、何処まで話を通つてつていうか、なにこれどゆこと?

ヤバイ本当に理解できない!月明かりが2人の肌を照らす。綺麗に焼けた肌は月明かりの下でも美しく艶やかに映える。

「詳しい話は後でも良いだろう?正直、ここまで媚薬の効果が強いと思わなくて、我慢が、もう……っ!」

「儂もじゃ、後でちゃんと説明するから早よう抱いてくれ。……それとも、ここまでしても何も感じないか？ そんなに儂等は魅力ないか？」

色々考えていたが、祭の言葉でとりあえず切り替える。もういいや後で考えよう。ほら俺オークだから。性欲の権化だから。こんな美人2人に迫られたら誘惑に負けても仕方ないよね！ どうもウチの女性陣な許可があるっぼいし！ 許可あるっぼいし！ 大事な事だから2回言いました！

2人をいっぺんに抱え上げる。そのまま寝台に運ぶ。見ると例のヌルヌルな薬も用意してある。準備良すぎだろ！ いつから計画してたのだろうか。

まあいいや、これから全部身体に聞く。冥琳も祭もなるべく優しくするが、自分から来たんだ、ある程度は我慢しろよ？

「ふふ、望むところだ。」

「誰に言うておる。虜にしてやるから覚悟せい。」

はは、言ったな2人も。なら覚悟しろ。珍しく本気で相手してやる。そう言つて服を脱ぐ俺。ズボンを下ろせば、全開のマイサンが自己主張をしに飛び出した。息を呑む

2人の肩に手を掛け、ゆっくりと身体を後ろに倒してやる。さて、では2人とも。「存分に、乱れるがいい。」

そうして俺は2人に覆い被さった！

・・・なお、この後の事については、2人とも最高だった、とだけ言うておく。

続く！

39話 カツ井は、余計な甘さのないソースカツ井派

やあみんな、化け物でも無理なもんは無理って知ったオーク系転生者の俺だよ！

あれから3ヶ月経った。

現在、俺たちは呉に向かっている。そう、傭兵団、緑鬼の剛腕（俺は未だに認めてない）全員でだ。今回は少し道を急ぐので、大寸胴鍋を四次元袋の中にしまつて全員馬と馬車を用意した。用意して改めて理解したが、流石に人数が増えてきたので、みんなで拠点を持つと相談中だ。

俺？俺は徒歩だよ。体のサイズの合う馬がないのと、俺の中のラージャンに反応するのか、俺が乗るっていうかある程度近付くと馬がめっちゃ怯えるからだ。良くある2次創作オリ主みたいにデカくて早いけど乗る人を選ぶ暴れ馬、なんてのは居なかった。

個人的には超デカイ驢馬（ラクダよりデカイ。）がいたので、それが欲しかったんだが、どっちにしても乗れないでしょ！と軍師組と詠に叱られたので、泣く泣く諦めた。ちなみに、野営時も馬から離れて寝る必要があり、非常にめんどくさい。

・・・え？劉備さんたちのところに行かないのか？行ったよ？僅か1ヶ月しか滞在してないけど。・・・というか。

その劉備さんのせいで呉に向かってんだよ馬鹿野郎！あいつ本当にやらかしやがった！！

確かに俺のせいで武將組も軍師組も居なくなっちゃって、その分苦労掛けるから協力はするけどさあ！なんぼなんでもアレはねえよ！劉備さんも人の上に立つ人的なオーラが身についてきてるし、一刀くんに至ってはウチの沙和に勝てるくらい強くなってる、凄い進化してるよ！凄いと思うし、素直に尊敬もしてる。でもあれはない！！マジでありえない！何考えてんだあのポワポワオツパイ！！

・・・ふう、失敬。取り乱しました。ちよつと思ひ出したら腹が立って来たので叫ん

だけど、もう終わった事なので我慢します。

みんな訳分かんないと思うから、前回の続きから説明しようと思う。少し長くなるが聞いてほしい。

そう、まずは冥琳と祭の魅力に負けて、2人に手を出したあの日からだ。

??

さて、やはりというかなんというか、冥琳も祭もエロゲキャラなだけあって、割と普通に俺のに対応した。まあ幼女組が平気なのでそんな気はしてたけど。

星は祭には厳しい、なんて言ってたが、確かに俺サイズは初めてらしく、ちよつと血が出ていたが、なまじ経験があるため、かなり早く適応したというかある意味適応し過ぎたというか、尋常じゃないほどハマってしまい、最後の方はもはや獣じみた嬌声を上げながらずつと痙攣していた。もしかしなくてもやり過ぎたかも知れない。

冥琳の方は、雪蓮とは何度も経験あるらしいが、男は初体験、という事で、媚薬で既になだいぶ出来上がっていた冥琳を更に焦らしながらじっくりねつとりたりたつぷり解し、2回ほど失禁させてから、更にいかせないようにねつとりしつかり弄り回し、その間祭だけ責めまくって嫉妬やら焦燥やら寂寥やらを溜めに溜めまくってから、最後の

最後に貫いた。

初めてなので血が出てたが、転生してから自信を持って言えるくらい劇的に成長した俺の性技の全てを使いこんでの挿入は、初めてで冥琳を絶頂させる事に成功した。まあ正直ほぼ媚薬の力な可能性もあるけど。

それからは調子に乗ってやりまくり、前世で一番好きだった周瑜さんを抱いている、という事実も相まってか、俺自身の出した回数はずっと少ないものの、最終的に冥琳が痙攣しながら気絶してしまったのは、昼になる頃だった。

気絶から覚醒しなくても、空いた手で弄り続けたせいで祭は目覚める度に絶頂し、そのまま気絶し結局2人とも昼には完全にノックダウン状態になってしまったので、俺もそこでストツプし、2人の体拭いたり寝台のシーツを変えたりしていた。

やがてそれらが終わり、夜のうちは寒いから出なかつたバルコニーなどところに出て、景色を楽しもう、と思ったら、バルコニーと部屋の陰になるところで、両膝を抱えて唇の端を噛み締めて血を流す、暗い瞳をした愛紗を発見。気配察知も嗅覚探知も仕事しろよ！と思っただけ、一瞬固まっただけで悲鳴を漏らさなかつた自分を褒めたいと思う。

どうやら明け方頃になっても帰ってこない俺を待ちきれず、やってきてしまったらしい。そしてウチの女性陣が何故か持つ俺限定の高精度センサーで位置を把握し、外から

このバルコニーに侵入しようだ。

ずっと座っていたせいか、ヨロヨロと立ち上がり抱き着いてくる愛紗を、優しく受け止める。見た瞬間は幽鬼のような状態だったが、何時ぞやに自分が星に邪魔された時を思い出してずっと我慢していたらしい。血が出るほとんど唇の端を噛み締めていたのも我慢の証のようだ。独占欲が強く、嫉妬深い愛紗にしては物凄い頑張ったのだろう。しつかりと抱きしめながら、頭を撫でる。

しばらく俺の腹（身長差的に）に顔を擦り付けながら寂しそうに抱き付けていた愛紗だったが、やがてぼつりと私はあそこまで丁寧にしてもらった事ないです、と声を震わせながら言った。まあ冥琳が初めてだったからな、と言うと、それでも嫌です、と涙目の愛紗。

「貴方が、他の女と寝るのも、他の女に優しいのも我慢します。．．．でも、1番は私です。道玄の1番だけは全部私でないと嫌です！．．．他の誰にも、それだけは絶対に譲りません。」

ギュツと、強く強く抱きしめられる。この言葉が嬉しいと思ってしまうあたり、俺も大概だよなあと思いつながら、次は同じようにする、と約束し、口付けを交わす。愛紗は下げた俺の首筋をギュツと抱いて、離すまいとするかの様に舌を入れて、長い間吸い付いていた。

やがて唾液が糸を引きながら離れた瞬間、星がでは次は私ですな、とスタンバイして、更にその隣には風が立っていた。今度こそ本気で驚いた。気配察知本当に仕事しろよ！

その後2人とも口付けを交わし、やがて落ち着いたところで冥琳と祭も起きてきたので、今回の真相を聞いてみた。いや、身体に聞く！とか言っておきながらすっかり忘れて言葉攻めしかしてなかったんだよね。いや祭が地味にMだったから楽しくてさ。最後の方は調教系のエロマンガみたいなセリフとか言わせるのに夢中になってしまった。反省も後悔もしていないけど。

で、皆によると、どうやらしばらく会えなくなるので、今のうちに関係もつとこ！という冥琳と祭の2人が、何とウチの女性陣にきちんと目論見を話した上で、許可を下さ

いとお願ひしに來たらしい。俺の知らないうちに、今後長く因縁になりそうな血の雨案件が起きてただけけどどういうことなの？ っていうか一旦会えなくなるだけじゃん、何で今なの？

「うちの事情もあるが、道玄は何だかんだ会いに来てくれなさそうだったからな。そのうちこの大陸の覇を競う戦いが始まれば、下手したら敵として戦うことになるかも知れないから、未練を残したく無かつたんだ。」

「それに、お主の女達に話を通さずに計画が成功するとも思えんし、儂等が完全に袖にされても、お主は変わらんじやろうが、話を通さなかつた場合はどっちにしてもお主の女達との因縁になる。お主の傭兵団と事を構えるのは儂どころか国として困る事になりかねん。」

お主の傭兵団、兵が全て武将な上、1人でも將軍並の猛者だらけじゃからのう、と祭が言う。ええ・・・じゃあ何故俺に話を通ってないんだし。っていうかうちの女性陣が断るとは思わなかつたのか。

「正直な事を言えば、素直にお願ひすれば許してもらえる気はしていたんだ。何と云つても、彼女達と私は同好の士、だからな。」

「まあ、そう言うわけで、正直腸が煮え練りかえりそんな想いでしたが、気持ちちが理解できてしまいましたな。色々条件を出した上で私達も許可を出したのですよ。」

「不思議な事に、愛紗さんが一番最初に承諾したので、私達も折れた形になります。」

ちよつと予想外。そうなのか。正直同好の士というお前らは絶対に男の趣味悪いと思うが、愛紗が一番に、ねえ。さっきの事といい、珍しいな。まあそれで折れるお前達もだが。

「・・・本当の事を言えば、相手が誰であろうと私以外が道玄と触れ合うのは嫌です。しかし、あの時の星や秋蘭を見て思ったんです。私が彼女達の立場ならどうだろうか、と。」

だから、今回だけ特別です、と言う愛紗。もう離す気は無いのか、俺の右腕にギュツと絡みついている。ちなみに反対側は冥琳だ。星と凧がちよつと不満気で見ている。それよりも愛紗と冥琳が俺を挟んで睨み合うのが凄く困る。てか、条件って何だったの？

「ああ、それはの。1、道玄が拒めば直ぐに諦める事、2、抱かれた後で、道玄の所有権

を主張しない事、3、終わった後は速やかに返却すること、4、結果を詳しく報告すること、の4つじやな。報告は全員にしないとならんのじやったか？」

「はい、拠点で皆待つております。」

なんか普通に俺がみんなの物扱いでワロタ。まあいつものことだけどね！ちよつと最近十常侍の傀儡扱いの帝さまの気持ちかわかる気がする！

つーか色々あつたが、結局俺普通に冥琳と祭の2人と関係持つてしまつたんだよなあ。いや、凄いい嬉しいのだが、あと1人で20人いつちやうんだよね。そろそろ嫉妬した男の念で爆発させられる気がして来た。この世界にキラークイーンか、ボマーの念能力者がいない事を祈ろう。

??

あの後は色々あつて拠点でうちの女性陣と更に仲良くなつたらしい冥琳と祭。途中で秋蘭も加わつて盛大なガールズトークになつた。余裕で近寄れないので鈴々と遊んでいたのだが、いつの間にか冥琳と祭もローテーションに加わつていたので、無理にでも止めるべきだつたと後悔している。

慈悲なのかそれとも上げて落とすつもりなのかは分からないが、とりあえず3日の休

養日を貰えた。4日目が非常に怖いが、とりあえず今を楽しむ事にしよう、と現実逃避してたら、4日目にローテーションが一度に3人から5人になったと聞かされ、更にノルマは1人4発になっていた。普通に絶望した。

一時期に比べればマシかと思うかもしれないが、ノルマはあくまで最低数であつて皆凄い元気なのでこんなもんで済まされぬ。組手をしなかつた時の体力有り余る霞や、何かに嫉妬した愛紗が夜激しくなるならまだマシな方で、仕事中に街で祭に出くわしたりするとそのまま物陰に連れ込まれたり、休日には拠点でゴロゴロしてたら妙にハマつてしまった詠がやたらと唾えてきたり、それらがバレた時の夜とか、非常に大変な事になった。

まあそんな感じで俺の性活は多忙を極めたが、生活の方も少しづつ変化してきた。

元々董卓さん達は俺が誘拐したりしてからまだ3週間くらいしか経っていないのに、よく分からん取り引きと密約によつてうちの傭兵団に加わると同時に俺と関係を持つてしまったので、正直結構扱い方がわからなくて大変だったのだが、それも直ぐに慣れた。

月と詠は最初に言つた通り、侍女的な感じで頑張つてくれている。華雄や霞は何やかんや武将組と鍛錬したり組手したりで仲良くなつており、特に霞と真桜は口調が似てる

からか、非常に仲が良く、2人一緒に居るところをよく見かける様になった。

恋はいつの間にかコーギー犬を連れてきていて、詳しく話を聞くと、元々飼っていたたくさん動物達の中で、一番の友達だったセキト君らしい。彼女の動物達は、多過ぎて連れて行けないので、華琳さんに頼んでサーカス兼動物園のところに全員就職して貰った。今では洛陽の新しい名所として、人気場所になり、阿蘇阿蘇にも掲載されて、立派に自分の食い扶持を稼いでいる。恋は暇ができたら俺を連れて一緒に行く様になった。大事な動物達が元気に過ごしているのを見て、安心しているようだ。

音音は最初は董卓さん達にしかあまり懐かなかつたのだが、いつの間にか俺に気を許してくれるようになり、鈴々や幼女組とも仲良くなって、無邪気に笑うようになった。そしてつい先日、寝ぼけて俺をちちうえ、と呼んだのでそのまま娘にした。意味が分からないとか犯罪とかそういう意見もあると思うが、娘が可愛いので文句は言わせない。最初は戸惑っていた音音も今では普通にちちうえと呼んでくれているので俺は満足している。鈴々と音音を肩に乗せて散歩するのが最近見つけた幸せである。え、幼女軍師組も娘?・・・娘はどうやったら俺を搾れるか日々研究しないと思うんだ。

そんな穏やかで忙しい日々を過ごしていると、朱里や雛里が劉備さんからの手紙を

持つてきた。何でも人が増えて大変になったらしい、こないだ聞いた話だと麿竺さんと麿芳さんという姉妹が仲間になったとか何とか、兵がついに2万超えたとか、楽しそうな内容だったはずなんだが。

どうでもいい事だが、劉備さんと言えば少し前に幽州に帰っていった白蓮を思い出す。何でも白蓮にも劉備さんから手紙が来ていたらしく、その事で落ち込んでいたので話を聞くと、どうにも一刀くんと惚気ばかりな上に、白蓮の相手がいない事を心配する内容だったらしい。正直それわざわざ手紙にする必要があるのか、と思つたが、軍師組としては世間話の体をした近況報告兼情報収集が目的だろう、と言つていた。そんなスパイみたいな真似が出来てくらいあのぼわぼわきよぬーが成長したのかと思うと感慨深い。世間話で白蓮の精神にダメージを与えちゃうところは変わつてないけど。

とりあえず白蓮が可哀想だったので、拠点に連れて帰つて皆で酒を交えて慰めた。いつの間にか華琳さん達も含めた全員が集まつて少し狭かったが、そのぶん賑やかだったし問題はない筈。肝心の白蓮は女性陣と会話しながらやたらと俺をチラチラ見てたが、ひよつとして俺が「私への当てつけかこのヤロー！」と突つ込み待ちだったのに気づいていたのだろうか。

いやあ、せっかく劉備さんが白蓮の弱点を突いてくれたので、あえてイチヤイチヤして煽っていたのだが、反応が何時もより悪くてつまらなかつたのだ。恐らく、氣付いていたけど慰められている手前、突つ込むべきか悩んだんだろう。そこで元氣に突つ込み出来ないから存在感薄いんだよ、とは言わないでおいた。

まあ結局酔い潰れるまで飲んで、うちに一泊したら元氣になつてたし相変わらずげろチヨロな奴だ。ただ、何故か朝イチに顔を合わせたら真つ赤になつて逃げていったのだけがよく分からん。覗かれたかな、と考えたけど、その日は白蓮に付き合つて皆で最後まで飲んでいたから誰ともしてないし、精々皆と一緒に寝ていただけだ、それくらいなら朝イチの天幕でよく見てる筈だしな……。まあ桂花や春蘭もそんな感じだったけど、彼女達はだいたいいつもあんな感じなので問題はない。罵倒が入るか入らないかしか違いがないしな。

うーむ、強いていうなら星の奴が華琳さんと何か怪しい顔してたのが氣になる。問い詰めたら星のとつておきの濁り酒をご馳走したとか言つてたけど、俺が知らない内に星の酒で何かやらかしたりしたんだらうか？ううむ、言つては何だが、酒に弱い白蓮や春蘭達が酒飲んでやらかすのなんかいつもの事だと思ふんだがなあ。少なくとも俺個人

的には星の隣にいた華琳さんが美味しかった、と言ってくれた料理がどれなのか分からない方が気になるくらいにはどうでもいい。

ああでも、孫権さんや甘寧さんは何か風邪を引いたとかって急いで帰っていったから、ひよつとしてあいつら水でも被ったりしたのかな。もしくは酒を樽ごと飲んだとか？春蘭あたりなら樽に頭突っ込んで飲んで風邪引く、という可能性はある……いや、ないか。馬鹿は風邪ひかはずだし。

まあ、白蓮の事はいいや。帰るときにまた飲もうって約束したし、大丈夫でしょう。言いながら何故か顔赤くなってたけど。孫権さん達は後で果物持ってお見舞い行くでしょう。

それよりもそろそろ仕事が一と段落したので、華琳さんが拠点を陳留から洛陽に移すため、一旦洛陽に秋蘭を残して、引き継いでくる為に陳留に戻るとのことなので、俺たちもそろそろお暇せねばならない。孫策達も、よく分からないけど仕込みがすんだからそろそろ戻る、とか言ってたので、ちょうどいい時期だったんだろう。

そんな訳なので、ちやうど劉備さんの下へ行くつもりだったから、人が増えて大変でも、2週間保たせてくれれば何とかなるだろ。で、朱里。劉備さん何人くらい増えたつて？きつと劉備さんの事だから、またなんかやらかしたんだろ？その辺の孤兒集めて親衛隊でも作つて周りから輦蹙でも買ったか？

「はわわ、そんな生易しい事じゃありませんっ！」

「あわわ、緊急事態でしゅー！」

「流石に風ちゃんもこれはマズいと思うのですよー。」

あん？風がそういうレベルなの？いやでも最近の一刀くん達凄いつて皆言つてたじゃん。そんなヤバいことやらかすか？軍だつて2万に増えた筈だし、与えられた領地の賊が倒せないつて事も無かる？

「ええ、むしろその逆ですね。近隣にやつてきた黄巾の残党を、全て自軍に引き入れることに成功したそうですよ。」

え、稟それマジで？やるじゃん劉備さん。つーかまだ居たんだな黄巾の残党。数え役満しすたあずが曹操さんの下にいるから、皆そつちに流れたかと思つてたのに。流石は人徳の王、やるもんだ。で、何人くらい増えたの？2000人くらい？もしかして1万とか？まさかなー。

「8万よ。」

・・・・・・・・・・・・・・・・なんて？

「だから8万よ。朱里達が言うには元々2万いたらしいから、現在一気に10万に増えた事になるわね。」

・・・・・・・・えっ。何それ怖い。

え、詠よ。流石に冗談だろ？劉備さんのところがどんなか知らんが、着任してまだ3ヶ月かそこらだぞ。そんないきなり5倍に増えたら、糧食はおろか、住むところさえない筈だし・・・。

「というか、何処にそんな数があるねん……あれ、なんか聞いたことあるな。あれっ、ひよつとして虎牢関脱出したら恋たちが率いてくる10万の奴か？あれっ、どうしよう可能性出て来ちゃったぞ。い、いやまさかな！流石にそんな訳……」

「えう……ほ、ほんとみたいですよ？手紙にはそう書いてあります。嘘でなければ、ですけど。」

「ホンマや、豪気な真似すんなあ劉備さんとやら。ハハ、足りないから何とか都合付けとくれって書いてあるで！無理に決まつとるやん。なあ？」

「その、なんだ……大丈夫なのか？劉備とやらは。いや、冗談なら何も問題はないと私も思うんだが……冗談なら。」

「でも鈴々が、劉備はこんな嘘つかないって、言つてた……」

「いやしかし、これは流石に無茶な話ですし、冗談の可能性も……ちちうえ？どうしました？」

「そう言つて音音が心配そうな顔をしてくれる。良い子だ、おとーさん嬉しいよ。ちよつと血の気が引いて手が震えるけど、音音の頭を撫でて癒される。」

「愛紗、星……念の為、そう！念の為に確認しとくわ。手紙、なんて書いてある？」

「我が主人、残念ですが……」フルフル

「道玄、気持ちばかりですが・・・私が読んでも同じことが書いてあります。」

ははは、そうか。そりやそうだよなあ。劉備さん阿保だからそんな嘘つけないよなあ。一刀くんがいるからと言っても、エイプリルフールは四月だし、時期が違うもんなあ・・・。なあ真桜、念の為聞いてくわ。糧食が無限に出てくるカラクリとかあったりしない？

「すまんなあにいさん、ウチ絡繰作るんは好きやけど、仙術はちよつと使えんなあ。」

デスヨネー。ははははは・・・。

いかんちよつと膝の力が抜けそうになった。ガクブルである。流琉と鈴々が心配してくれてる。ありがとなー、鈴々、流琉。ああ、もちろん音音もな。

ふふ、嫌な予感はしてたが流石劉備さん。いつだって斜め上をいつてくれるなあ。ブツコロ。

「・・・風、沙和。」

「はいっ、何でしようか！」

「はいなのー！」

今すぐ華琳さんと孫策達のところへ行ってくれ。たぶんどちらも忙しいと思うが、俺が土下座するからお願いを聞いてほしいと言っているのを伝えてくれれば、どっちも場を設けてくれる筈だ。早ければ早いほど良い。頼む。

御意、と言つて2人がダツシユで外に出て行く。それを尻目に軍師組に指示を出す。

朱里、雛里。たぶんこれから俺華琳さん達に出来る限り物資を分けてもらうための交渉しなくちゃだから、ついてきてくれ。具体的な交渉と、対価の設定は任せたい。俺を使つて良い、頼めるか？

「はわわ、頑張りましゅー！」

「あわわ、任せてくださいー！」

風、稟。2人には俺たちの移動の為の準備を頼む。護衛は星、華雄、寄せた。

「御意。」

「了解ですー。」

「ふむ、任せられました。」

「了解した。」

月、詠。聞いての通りだ。たぶん準備が出来たら早々にここを発つ。この拠点を引き払うから、最低限の予備を残して荷造りしてくれ。いくらかは馬車に積むから、俺の四

次元袋に詰めるものと、馬車に積むものは別々にな。鈴々、霞、恋、音音！4人は月と詠の手伝いを任せた。2人にできない力仕事とか買い出しとかやってやってくれ。

「わ、分かりました。」

「分かったわ。何かあれば連絡する。」

「分かった……。」

「頑張るのだ！」

「え、本当になんとかなるん？」

「任されたのですぞ！」

何とかするんだよ、霞。あの馬鹿はともかく、80000人喰わせるために街全体が餓死とか笑えん。焼け石に水でも用意せにやならん。

真桜、流琉、2人はうちの分の食材買い出し。強行軍になるかもだから、量多めに。最悪のことも考えて保存食も用意しといて。後、出来る限り水樽用意してくれ。四次元袋に後で入れとく。

「分かりましたっ！」

「了解やでー。」

愛紗、お前は一旦ここで待機。月達の手伝いしながら、沙和と凧が戻ってきたら、2

人を連れてまあちじゃない田豊さんのところ行ってきて！確かまだ袁紹さんの尻拭いで街に護衛と一緒に残っている筈。こないだ華琳さんと飲んだ時会ったから間違いない。俺からのお願いって伝えて！あの人は顔良と並んで袁家の良心、必ず力になってくれる！

「・・・道玄？」

なんだ愛紗、質問か？悪いが俺も準備しなくちゃだから、手短かに頼むよ。あ、田豊さんは覚えてるよね？あの袁家の苦勞人その二の人だよ？

「ええ、それは大丈夫ですが。・・・いつの間に田豊殿と真名を交わすほど仲良くなったのですか？」

そりやこないだ2人で飲んだとき、に・・・おおつとー？

・・・あの、今の無し、とか駄目・・・ですかね？

「すまない皆、私は用事が出来た。あと、出来るだけ早く合流してくれると助かる。」
「了解や。」

「直ぐ終わらせます。」

「華琳様と交渉が終わつたら秋蘭さん呼んできます。」

「では私は冥琳さん達を。」

「片付けはさつさと終わらせましょ、月。」

「そうだね、詠ちゃん。皆んなもいいかな？」

「御意ですぞー！」

「直ぐ、終わらす。」

「では私達でついでに田豊殿の元へ行きましょ。」

「そうだな、具体的な話も聞いてこよう。」

一瞬で俺が指示した内容が覆される。この傭兵団に俺が必要ないのがよくわかるよね！

あ、いやま、待った！今はそんな事してる場合じゃないと思います！そう、8万人以上の人間が大変なことになるよ！罰なら後で受けるからさ？なっ？

「すいません、私は見知らぬ8万と貴方なら貴方を取ります。何故なら私は貴方を愛しているから。だから先ずは浮気の確認が最優先です。幸い大体の業務は皆が変わって

くれますので、安心してください。

ああ、無理して話さなくていいですよ？洗いざらい吐くまで身体に聞きます。」

ひえっ！ま、待って！話します。素直に全部話すから、ちよ、ちよっとお手柔らかに・・・！お願いします！

「そうですか。それなら尋問の必要はないですね。では残りは罰だけです。しつかり報いを受けて貰いますので覚悟して下さい。」

えっと、本当に何もなかったんですよ？ちよつと真名を交わしただけでね？ちよつと2次創作で知らない人だから仲良くなっても何も変わらないと思っただけか、地味に知らないキャラで偉い人初めて見たと言うか何というか・・・、だから、えっと・・・罰が優しく変わったりしないかな？

「変わりません。黙っていた事には変わりないですし・・・私を含め、皆もう胸の奥が嫉妬で燃えてしまいそうです。貴方のせいなので、責任とって下さいね。」

さあ行きますよ、と俺の腕を取る愛紗。何気ない態度に見えるが、滲み出る怒気は背中に豪鬼がいるかの様で……。無言で引つ張られて行く俺。やがて寝室に着くと、愛紗が飛び付いて来て、寝台の上に押し倒される。この時耐えて倒れずにいてはいけない。余計に酷い事になるので、神に祈りながら天井のシミの数でも数えましょう。

「さて……猛省して下さいね。」

でも流石に判定が厳しすぎると思うんだ！

まあそのまま問答無用で絞られましたよ！

??

そんなこんなで色々酷い目にあわされた俺は何とか華琳さんや孫策、田豊さんから物資の補給を取り付け、とりあえず2ヶ月分ほどの物資を持った部隊を護衛しながら慌ただしく洛陽を出た。劉備さんには早馬を飛ばして受け入れ準備しろ、と伝えてある。な

んだかんだ偉い人の知り合い多くて良かった、マジで。

なお、その際にそれぞれ俺に対する対価を求められた。正直劉備さんにツケたいところだが、今買ってるのも必要としてるのも俺なので、俺が受けるしかない。劉備さんは一刀くんの大切な女性だが、椅子に座れなくなるくらいまでお尻ペンペンの刑に処すと決意する。

対価はそれぞれ色々あるが、全員に共通するのは自軍と敵対しない事、だった。まあ敵に回ったら原作のキャラ半分が敵対する訳だしな。優秀な武将や軍師ばかりだし、これは仕方ない。万夫不当の呂布ちゃんがいれば数の差も覆されかねないし、加担した方がほぼ勝つよね、これ。傭兵団なのに戦えなくなつて来てるのがもうあれだけど。

その上で華琳さんは劉備さんにこれ以上の加担を禁止してきた。今回で最後にしなさい、と言われた。なんかあんまり優しくしても甘えて成長しないとか何とか。正直俺のせいで大変な目にあつてるので、ちよつと可哀想だが・・・確かに8万分の食糧をいきなり要求される様な頼みは何度も聞いてやれんなあ。うむ、まあ仕方ないね。つーかなんか劉備さんのお母さんみたいだね華琳さん。

田豊さんには緊急時の依頼を優先で受けて欲しい、とのことだった。と言っても戦いに協力しろ、という事ではなく、脱出を手伝ったりとか護衛とからしい。何が起きるか分からないから、最終手段になってくれとか言われた。なんかよく分からんウチにやたらと評価されてるが、今回最も物資を融通してくれた方なので、一も二もなく領いておく。あと袁家の領地に来たら必ず自分の下へくること、と言われた。理由はよく分からんがこれも了解しておく。なんか華琳さんと田豊さんが睨み合ってるけど、なんかあつたんだろわか。

最後に孫策は劉備さんの手伝いが終わったら直ぐにウチにくること、だそうだ。なんか近々大きな計画がどうか、周瑜さんと黄蓋さんの為にも何とか、色々な理由とかか建前を言ってたが、何か本当の事は言っていないみたいなので、一応用心だけしておこう。何は無くとも呉には行く予定だったし、特に問題はない。ちよつと強行軍になりそうなのがあれだが。周瑜さんと黄蓋さんが嬉しそうだし、俺も悪い気はしないしな！まあ秋蘭が凄い目で見てるけど、俺が決めたわけではないので許してもらおうしかない。

というか俺への負担が多過ぎだが、最終的に劉備さんには出世払いで何とかしてもらえないか。見てろよ劉備さん！週休7日三食昼寝付きプラス冷暖房完備の風呂ト

イレ別々で一軒家、小遣い付き、とか要求してやる！

…と劉備さんの所に着く前は思ってたんだが、着いて見たらそれどころではなかった。

いきなり8万も増えたものだから兵舎に空きなどあるわけもなく、天幕を街の外に張って陣を作って何とか雨風をしのいでいるが、増えた兵達の私物を合わせてもギリギリで、すし詰め状態の兵達。衛生状態は最悪で、更に少ない食糧を切り詰めているので栄養状態も最低だった。

それはトツプたる劉備さんや一刀くんでさえ同じで、何でも兵達に苦しい思いをさせておいて、自分たちだけいい思いはできないとの事だが、その状態で倒れたらそこで10万の兵である彼らは終了である。何馬鹿なこと言ってたんだ、と2人をひつ叩いて眠らせる。同じく寝れまくりだった糜竺さんと糜芳さん姉妹も無理やり寝かしつけ、流琉に栄養価の高い食事と看病をぶん投げた。

するとまず彼らが目を覚ますまでに2日、体調を戻すまでに2週間ほどかかった。かなり無茶をしていた事がよく分かる。お前らが倒れたらあいづらどうすればいいんだ馬鹿！と軽くだけ説教しておく。一緒になって働くのはいいが、一緒になって倒れてあと

知りません、はトップの仕事ではないのだ。

劉備さん達に手を出したことを新参の兵どもが何か切れてたので、大した人心掌握っぷりだな、と思いつながら面倒なので威嚇して黙らせる。昔からいる顔馴染みの兵を呼び出し、進行状況を聞くと、まさかの兵舎優先で蔵に手が付いていない。10万人分の糧食どうすんだよ馬鹿か彼奴ら！

とりあえずまず食糧を切り詰め過ぎて兵士たちが死にそうで役に立たない上に、劉備さんの所の民も食糧事情に協力してたらしく飢えてたので、物資を運んでくれた兵達に協力してもらって炊き出しをして、先ずは数日使って体力を回復させる。

元気になった連中から陣付近の衛生状態改善のため、色々なものの処理部隊を編成、即運用して処理させる。体力なさ過ぎてトイレ用の穴さえ掘られなくなっていたので、洒落ならんマジで。終わった後は近くの川で水浴びを徹底させた。これは俺が監督しながら、指揮そのものは劉備さんとこの古参の兵に取らせた。便宜上部隊の隊長として扱う。名前が胡軫とか何とか言う奴で、意外と有能なので途中から全部ぶん投げた。

その後は真桜を中心に人海戦術で食料庫たる蔵を一気に建設する部隊と、全然手が

回つてなかつた内政部分をぶん投げた軍師組とで団のメンバーを別けて、適宜指示しながらひたすら土木工事である。兵舎？屋根だけ作つて後回し！寝る場所は一応あるから優先順位を下げました。

流石と言うか何と言うか、こんなふざけた状態でも街の治安は割とよくて、民全員が一丸となつて協力する姿勢でいてくれたので、警邏隊などに人手を割く必要が無くて助かつた。元々賊だつた新兵達も、新しくやつて来て偉そうな蛮族たる俺には不満気だつたが、劉備さん達に文句は無いらしく、彼らが過労で寝込んでいても、彼らのために一生懸命働いてくれた。

やがて2週間が経つて簡易とは言え、人海戦術で無理矢理建設した蔵が乱立した頃、追加の物資が届き、ようやく安定して兵と民に食糧が行き渡り始めた。

その頃には劉備さん達もようやく復活して来たので、兵達の陣頭指揮をぶん投げ、山や付近の開墾をさせる。いや、このままじゃ再来年には結局死ぬから！いつまでも10万人以上物資があるわけないだろ！屯田兵だよ屯田兵、と一刀くんたちを説得し、一気に田畑を広げさせ、一大農耕地区を作らせる。人数多いだけあつてかなりこれは早く進んだ。まあ邪魔な岩や岩盤は全部俺が取ってしまったから、そのぶんもあるだろう。正

直いちいち砕いたり切り出したりしてる暇は無かったのだ。

流石に作付けまでは面倒見切れないが、農耕地区を作った際、川から水路も引いて、真桜に水車をいくつか作ってもらったので、麦を作るにしろ米を作るにしろ問題はないはずである。劉備さんも早速農家の民に協力してもらいながらやってたので、現在の食糧事情なら何とかギリギリで間に合うだろう。

この間で約1ヶ月ちよつと。俺がほぼ毎日チートをフル活用して木を引っこ抜いたり岩持ち上げたり地面に穴開けたりしてて、女性陣は女性陣で何かしら仕事をしてたので、まさかの初1ヶ月の貯蓄に成功したことに気付いた時は感動したものだ。

そうしてひと段落ついたところで、ちよつと奮発して宴を開き、頑張ってくれたみんなを慰撫する劉備さん。そしてノーテンキに助けてくれてありがとう、俺たちに笑った。

と、ここで更に次やりたい事などを語り出したので、みんなで足元固めてないのに何考えてんだ馬鹿！と説教する。一刀くんは流石にどんだけ馬鹿な真似をしたのかと反省してたので、うちの武将組が組み手で成長を確かめるだけで許したようだ。一応うち

の武将組では最弱、それでも百人くらいなら一人で片付けられる沙和に勝ったあたり、彼はもはや普通の高校生では無くなってしまった。

まあその後はあまりの忙しきで俺と触れ合えなかった他の女性陣にボコボコにされていたけど。恋がやった時は30メートルくらい吹き飛ばされたので、鍛えてて良かったな—と思う。あつたばかりの頃ならあれで死んでるよ、間違いなく。まあ恋もあれくらいなら大丈夫、と判断してからやってみたのだが。

そんな彼を尻目に、軍師組に説教されて涙目の劉備さんに、更に絶望をプレゼントしなければならぬ。何か非常に心が痛むが、こんな無茶を1ヶ月で何とかしたので許して貰おう。なあ、劉備さんや。

「はい？何でしょうか羌毅さん。はっ、ま、まさか羌毅さんもお説教・・・とかですか？」
ははっ、まさか！俺はこれを渡しようと思つて。中身はなんて事ない、今回物資や兵の融通をしてくれた協力者からの手紙だ。対価とか書いてあるから読んでくれ。ああ、多分取り立てはないから安心していいよ。

「づっ・・・。読まない、駄目・・・ですよね、はい。」

凄い嫌そうな顔する劉備さんだが、こればかりはねえ。劉備さんに会いに来ていた民や兵も、これだけの物資がタダな筈もないのが分かっているのか、話が出た途端にそそくさと去っていく。若干涙目で恐る恐る手紙を読み始めた劉備さんは、その後直ぐに大声でええー!と叫んだ。

その声に反応した一刀くんや兵達が何だ何だと集まってくる。一部の新兵が俺を見て眉を顰めるが、いつもの事なので無視だ。だから近くにいた軍師組の皆にも声を掛けて静止する。

「どうしたんだ、桃香。何か叫んでたけど・・・?」

「ご、ご主人様あ、こ、これ見て!!」

物資の対価に羌毅さん達の協力を禁止されちゃったあっ!!」

えええっ?!?と劉備さんより大きな声で叫ぶ一刀くん。すまん、そういう事なんだ。更に、読んでもらえれば分かると思うが、孫策からの交換条件でそろそろ呉に行かねばならぬのだ。建て替えた分は出世払いつて事でいつか払ってくれば良いから。

そんなあ、と泣きそうな劉備さんとマジかよ、と困惑気味の一刀くん。マジすまんな、と言おうとしたところで、一部の兵が金取んのかよ、とほざく。・・・はあ、当たり前

だろ。何言ってるんだ。

するとお前が勝手に持って来ただけだろ？と更に他の兵達が騒ぎ出した。どうも彼ら的には劉備さん達を守っているつもりらしい。まあ確かに傍目から見たら俺が虐めてるように見えるよなあ。まあ仕方ないっちゃ仕方ないか。だからお前ら、落ち着け。

助けに来た俺の苦勞を知るうちの女性陣が一瞬で殺気立ち、昔からいた劉備さんの兵達が、俺の怒りを買うかもしれないと青ざめる。それで鎮圧されないのは、増えた元賊の新兵の方が圧倒的に多いからだ。状況がマズいと気付いた劉備さんと一刀くんが宥めにかかるが、彼ら的には2人のためなので止まる気配はない。麿竺さんと麿芳さんはオロオロしている。

やれやれ、とため息をつきながら、そもそもまず俺は劉備さんから頼まれて物資を調達して来ただけで、劉備さんに仕えてる訳でもないから、代金を請求するのは当然である事、そもそも10万人以上の物資が一年分以上ある時点で、どれだけの金がかかり、それを俺という一個人が自分を対価に立て替え、かつ劉備さんから今直ぐ支払いを要求せず、金利も取らないのがどれだけの異常かということなどなど、丁寧に説明する。どれくらいの金がかかるか想像もできないようだったので、1人一食につきラーメン一杯5

錢だったとして、だいたい皆二食だから1人につき1日100錢、10万人いるから1日100万錢、それを365日分だ、払えるか？と言ったら全員が青ざめた。

まあそれでも今直ぐ要求しないんだ、感謝してくれ。俺にじゃなくて物資を出してくれた人達にな。あの人達は本来自国の身を削つてまで劉備さんに協力する義理はないんだからな。

「何を言ってるんや、団長がそもそも頭下げんかったら誰も応えてくれてへんで。曹操も孫策も田豊も、いくら大きな勢力かて、後先考えずに8万も兵増やして自滅する無名の領主になんかこないな大量の物資、融通するわけあらへん。」

「全くもつてその通りよ。しかもそれで回しきれずに過労で寝込んだ馬鹿の代わりに、このどうしようもない状況を立て直してやるなんて、お人好しも過ぎると思うわよ？ あんたこの1ヶ月、ほとんど寝てないじゃないの。」

あー、まあ、俺の事はいいんだよ。何か二週間目を超えたあたりで慣れて来たのか、意識はハッキリしてるし。元々体力だけはあるしな。だからそんな顔すんな、2人とも。好きでやった事だし気にしないでいいよ。ああでも流石にもうちよつと考えろ。今回

はこの程度で済んだが、たくさんの人を助けようとして、自分を助けてくれる人達も巻き込んで自滅、つてのは上に立つ者として最低だぞ。

そういつて落ち込む2人を嗜める。いや厳しい事言ってる自覚あるけどさ、見ろ2人も、あそこでこつちを見てハラハラしてるちびつ子2人とじつさまばつさまいるだろ？あいつら俺らがこの街来た時餓死しかけてだからな？

「!？」

驚愕する2人だが、実を言えばこの時代で餓死は珍しくないのです、周りの連中はそれがどうしたって顔をしている。この2人の下にいながらその顔してるのはどうかと思うので、続けよう。

自分たちの食う分削ってお前らに渡していたらしい。お前達が来てから、前の領主と違って善政をしいてくれる。困った時に一緒困りながら、助けてくれる。お前達が居なければどの道死んで居た筈だから、とか言ってたよ。俺が言いたい事、分かるか？

「・・・わ、私達、一度助けた人を自分で・・・？」

まあ、そういうこつたな。正直別にそれはこの時代、珍しい事じゃないし、領主初め

てな君らなら気が回らなくとも仕方ないとは思うが・・・、そういう領主に苦しんでいた民の助けになりたくて、君らはその立場そこにいるんだろ？忙しいとか、色々大変だ、とか分からんでもないが、それに甘んじちゃ駄目だと思ふよ。

そこまで言つたら何か落ち込みまくつてしまつた2人。やべ、ちよつと言ひ過ぎたか。でも俺らがこれから先協力できない以上、流石に今回みたいに甘やかせないのかつて欲しいと思ふ。

決してこのふざけた状況を肩代わりさせられた事を怒つてゐる訳でも、なんだかんだこの1ヶ月一切発散してない女性陣に付き合わなきゃいけない未来が確定してゐる事を文句言いたい訳でもなければ、鈴々や音音という娘達と戯れる時間がなかつた事への八つ当たりではない。無いつたらない。

さて、宴どきにいつまでもトップが落ち込んでゐるのも具合が悪い、無理矢理にでも元氣出させようと口を開いた瞬間に。

「じゃあお前がやればいいだろ。」

と、誰かが言つた。うちの女性陣が凍りつき、一刀くん達が顔を上げて絶句する。あ

らやだ、人の話聞いてない馬鹿がいらつしやるわ。

その言葉を皮切りに、新兵達がどんどん口々に無責任な事を言い出し、民にまで広がっていく。お前が代わりに働けば2人が楽に、とかお前が勝手に払ったんだからまたお前が稼げばいいだろ、とか聞こえる。やれやれ、流石元賊、言ってることが図々しい上に身勝手極まりない。まあ元々身勝手な理由で賊になった奴らばかりだし、仕方ないか。彼ら的にはこれも劉備さん達の為なんだろうな、とため息を吐く。

やれやれ……。とりあえず俺に全ての責任だけ押し付けたいらしい兵達のに言葉失つて、呆然とする劉備さん達。まあ、助けた奴らがこんな恥知らずだったらそうもなるよなあ。そんな感じに苦笑いしていたら、突如として轟音が鳴り響く。なんぞ?と思ったら恋が武器を地面に叩きつけていた。

見ると女性陣皆が鋭い眼で周りを見据えている。武将組は全員武器を構えているので、ムカ着火ファイアーしちやっただみだである。全員殺気立っていて、文句を言っていた新兵達や民までが怯え出した。やっべ、抑えんの忘れていた。慌てて宥めようと口を開こうとした直前に、愛紗が怒気を放ちながら言い放った。

「桃香殿……私達は貴女の人柄も、平和への想いも知っているから、貴女から助けを請われた時、助けに向かう為、無理をするこの人を止めませんでした。私達も貴女の力に

なりたかつたから。しかし……。

今は、貴女達を助けに来た事を後悔しています。」

「……ッ！」

あちやあ、と思わず額に手をやる。これは愛紗がガチギレしている。言われた劉備さんが泣きそうだ。まあ確かに助けた奴らにこうまで言われたらムカつくけど、劉備さんに当たるなよ。まあ責任取るべきは劉備さんだからなんだろうけど。

「主人、言われているのは主人ですぞ。流石にお人好しが過ぎます！」

「そうですね。少なくとも私達は助けを請われて来たのです。それをこの言いよう……いくら何でも舐め過ぎです。」

はあ、星、稟、他のみんなも落ち着け。俺は気にしてないし、お前達も気にするな。元々俺自身はこのアホ共を助けに来た訳じゃない。友を2人を助けに来ただけだ。どんだけ偉そうにしても、数しか頼りがない連中の粹がりなんぞほっとけ。ここで俺が敵対したら終わりだって事も分からの賊共だぞ。

「ああ？ テメエ何舐めた口聞いてんだ！ こつちやあその数を頼りに無理矢理言うことを聞かせてもいいんだぜ！ お前の女、無茶苦茶にしてやろうか!？」

・
・
・
・
・
・
はあ？

たつた今まで喚いていた馬鹿共が、一瞬で静まり返る。そのまま一気に怯え出し、近くにいた民も身を寄せ合って震え始めた。

10万から成る劉備軍の全兵と、一刀や糜竺さん達武将さえも、急に酸素が薄くなつ

たように荒い呼吸をくりかえす。

それどころか中華最強の呂布でさえ息を呑んで固まり、全ての人間の視線が一箇所に集まった。

視線の先にいるそれは、まるで恐怖そのもののような、絶望が形になったような、圧倒的という言葉さえ生温く感じる程の殺意を持って、ゆらり、と立ち上がる。

「今、俺の女に……何と言った？」

「ひいっ！」

一步。たった一步それが動いただけで、空気が水になったのかとを感じる程に呼吸ができなくなる、それ程に濃密な殺意。

恐怖が、空間を支配する。

それは、暴言を吐いた者の頭の手をおいて、静かに口を開いた。

「先ほども言ったが、俺はいい。お前達がどれほど囂つても興味は無い。助けに来たのはあくまで北郷一刀と劉玄德だけだ。お前達はあくまでその結果でしかない。」

ギリギリ、と音を立てながら、だんだんと手が下に下がっていく。しかし、押さえつ

けられた兵の足は、地面に沈んでは居ない。声にならない悲鳴が上がる。誰も目を離せない。

「だが、だからこそお前達が俺の女に手を出す、と言うのなら躊躇も遠慮もない。．．俺は劉玄徳の様に、罪を成した賊まで人間だからと助ける気はないからな。」

ギリギリ、と音が鳴る。やがて頭が完全に胴体に沈むが、不思議な事に血が流れないまま、そのまま鎧ごと、どんとどんと圧縮されていく。

ドスン、と重い音が鳴る。どうやったのか、一滴の血も流さないまま、人が、四角い箱の様な形にされてしまった。確認するまでもないが、生きていないのは明白だった。

そのまま元々人であったものを無視して、それは近くな岩に手をおく。田畑を拓いた時にそれが引き抜いた、街の門より高く大きな巨岩だ。

まるで小石でも拾う様な感覚で、片手でその巨岩を持ち上げる、それ。

そんな冗談のような光景を呆然と皆が見上げて、そして死を悟った。たつた今言葉を放った者を片付けた筈のそれは、こう言った。

「さて．．．俺の女に、何をするって?」

もう一度言ってみろ。

その言葉を最後に、相対する全ての者の意識が、闇へ消えた。

??

・・・まあ単に皆気絶しただけなんですけどね！

普通の民や、元平和な高校生である一刀くんは仕方ないにしても、闘うのが仕事の兵達や、糜竺さんや糜芳さん、劉備さんはダメだろ。ちよつとくらい頑張ってくれよ。

うちの女性陣だけじゃん、意識があるの。

「いえ、道玄様。それは正直酷な話かと・・・。」

「兄さまが襲つてこない確信のある私達はともかく、普通は無理だと思えます。」

「確かに。ウチらでも冷や汗止まらんかったで。そんな凄み出せるんやな、団長。」

「あんたが戦っている姿を知つて、あんたが普通じゃないって理解してる私達でも、別人に見えたわよ・・・。」

「心臓に悪いのでー、やるときはやるって言ってくださいー。」

おっと、じゃあちよつとやり過ぎだったか。個人的には一応全力で威嚇したからな、兵が全員気絶してくれて凄いい気分良い。霸王色の覇気を使った気分！まあ元賊の覚悟もない奴らが大半の、実践経験の乏しい劉備軍だから可能な奴だが。これが華琳さんの兵なら、効果があつたとしても精々新兵くらいかなー。まあ逃げるくらいはするだろうけど、気絶まではしない筈。

「はあ．．．やっぱり、ワザとですね？」

あら、バレちつた？どうも劉備さん達疲れてて納められそうになかったからさ。いやでもお前らの事で怒つたのは本当ですよ？

「それは皆分かつていますよ、主人。」

「おとーさん、ツノ出てたのだ！」

「まあ、一瞬だったがな。」

あー、やっぱり出てたか。どうも怒ると制御効かんつぽいなー。些細な事で怒つたりしないように気をつけねば。とりあえず劉備さん達だけ起こそかー。んで、事情説明してとつとと逃げるぞ。どうせ手伝えないし、これ以上嫌われ者が居座る必要もなかる。

何よりあちこち焚き火があつて人間だらけとはいへ、まだ寒い。凍死でもされたら面倒だ。

「なあ団長、なんでこいつにこんな肩入れするん？正直そんな価値ある人間に見えへんけど……？」

「同感だな。まるで兵が制御出来ていない。これでは賊と変わらん。」

あー、2人は昔の劉備さん知らんから分らんよなあ。それでも成長しまくりなんぞ。だってこの人、三年前までただの村娘だからな。それが今や言葉だけで8万もの賊を改心させた、徳高い領主様だ。制御つか甘つちよろいのと打たれ弱いのは変わってないみたいだが。

「確かに、言われてみればあの頃とは別人のような立場ですね。」

「性格はまるで変わってないですけどねー。」

だから良いんじゃないか。あの時の、絶対に叶うことのない理想を實現すると寝言言つてた劉玄德は、想いを変えることなくここに居るって証だ。俺は好きだぜ？馬鹿げてるが、カツコイイと思うね。並のバカならとつくに諦めてる筈だ。

そういうと、皆呆れつつも笑う。否定できないのだろう。いつの時代も、一芸に突き抜けた変人は人気者だ。誰だつてカツコイイと感じるさ。

さておき、皆、馬車とか持つて来て。荷物は荷解きの暇がほとんど無かったし、馬と馬車以外は俺の四次元袋の中に仕舞いっぱなしだ。さきつとお暇しよう。

そう言うのと、まず動物好きの恋が走つていった。それを追いかけて武将組と音音が行ったので、あつちは任せて大丈夫だろ。よし、劉備さんに一刀くん、おつきろー！

俺らも早いとこ呉に行かないとな。

??

あの後、一度起きた劉備さんがびっくりしてまた気絶するというハプニングはあつたものの、起きた一刀くんと劉備さん、ついでに糜竺さんと糜芳さんに謝られたが、正直気にしてないので笑つて気にするな、と言つておく。

それに、あれだけ民を怯えさせちゃつたから、華琳さん達との条件に関わらずもうここにはこれん。つまり物理的に手伝えなくなるから、君らには独力でやつてもらう他ない。本当にすまん。

「大丈夫です！もう十分助けてもらいましたし、これからは皆が居ますから。私の方こそ、恩を仇で返す事になってしまつて・・・」

ははは、それこそ今更だ。では頑張れよ、2人とも。一刀くん、君は強くなつたが、ま

だまだ上がいる。くれぐれも油断するなよ？

「分かつています。桃香の夢を叶えるまで、努力を続けるつもりです。」

ベネツ。じゃあそろそろ行くわ。桃を買いに全拠点にはちよくちよく顔を出す。伝えたいことがあつたらそこで頼むな。ああそうだ劉備さんや。

「はい？何ででしょうか。」

「道玄だ。」

君に預ける。一刀くんにはもう預けてあるから良いよな。これから先、君らにとつては茨の道だが、君達の理想が叶うことを願っている。

んじやな、と言つて歩き出す。馬に乗つた皆が早いので少し急がねばならんな。遠くから私は桃香ですつて聞こえた気がするが、振り向かずに手だけを振る。まあまた会うこともあるだろう。

そう思いながら、俺たちは逃げるように街を出たのだった・・・。

まあいいたいそんな感じだ。

あの時は忙しきで忘れてたけど、8万もの人間そのまま引き入れるってただの馬鹿だよ。まあそのまま戦つても負けてたと思うから、被害ゼロは凄いなと思うけど。

ああいや、その後街全体が一気に飢えてたから、被害はむしろ甚大か。あれっ、劉備さんやっぱダメな奴じゃね？むしろ危険人物な気がして来た。

・・・まあ、いいや。街も言つてはなんだがまだまだ発展途上だし、今んところ魅力は少ない。逃げるような形になってしまったが、早く次に行きたかったのも事実だしな。劉備さん達と街づくりも楽しそうではあったんだが。

そんな事を考えながら、そろそろいい時間なのでラージャン式エリア移動ジャンプをする。馬に乗つて皆と並走するの面倒だから、先に行かせてちよいちよいエリア移動ジャンプで一気に追いつく、そんな移動をしている今。

途中で獲物見つけてそつちいったらソツコー愛紗がやって来て怒られたので、しばらくはただの散歩でゆっくり行く事にした。

ああ、そろそろ町に着くな。街じゃない町だ。街よりちよつと小さいが、この近辺の商人たちの流通拠点だ。早い話が宿場町。今皆が凄い勢いでそこを目指している。

理由？はは、決まってるだろう？劉備さんのとこじゃ出来なかつたからな。今は人数増えて天幕じゃ入りきらないし。ローテーションを守るのは皆ないらしい。みんなも生理終わった直後くらいだからなあ・・・ははは、もうわかるだろう？

要するにただの欲求不満です。

この後俺の犠牲は確定である。ちよつと横道に逸れただけで愛紗が追つて来た事からご理解いただけれると思う。今は散歩して現実逃避しているが、時が来たら原因である劉備さんに呪詛を飛ばそうと思う。

ああ、空の青さが憂鬱だぜ・・・。

続
く
!

40話

焼肉はタレより塩胡椒派

やあみんな、馬に乗りたいけど乗せてもらえないオーク系転生者の俺だよ！

あれから二週間が過ぎました。

何とか貯蓄とトントンで済んだので、ギリギリ俺は無事です……。と言うよりは、どうも死にかけて気が増大してから、精力やら何やらの回復速度がアップしたみたいなので、そのおかげです。まあ今回は5日ほどで済んだから何とかなつたのもありますけどね！いつの間にか5日くらいなら平気になったあたり、やはり俺もエロゲ世界の住人には変わりないようですよ！

もうすぐ呉に着きそうです。それはいいんですが、ちよつと予定外な事が起きました。どうも袁紹さんがまたやらかしたらしいです。反董卓連合からまだ4ヶ月程しか

経ってないんですが、元気だなあと思って思います。

え？何故わかったか、ですか？ああそれは簡単です。

白蓮が途中で行き倒れてました。

・・・そう、あのスーパー巻き巻きチョコなしコロネ、もう幽州に攻めていたらしい。道中瀕死の馬の鳴き声にセキトが反応しなければうっかり白蓮が死んでいた。

流石に親友が死にかけと言うのは穏やかではないし、何より事情を聞いてちよつと袁紹さんを滅しに行こうと思っただんですが、田豊さんとの約束で出来なかつた。たぶんこれを見越していたんだろう。腹立つけど、伊達に主人に迷惑をかけられていないな。先読みは彼女が上だったという事だ。

無視して滅ぼす事も考えたが、目覚めた白蓮自身が戦場の習いと苦笑いして俺を止めるので、納得はいかないが、まあ我慢する事にする。幸い白蓮もその馬も、めちやくちや衰弱しているだけで、ちゃんと休養と食事を取れば問題はなさそうだ。臨時で真桜に台車を作ってもらい、藁の代わりに落ち葉をたくさん敷いて、白蓮の馬を乗せて恋達の馬に引いてもらう。白蓮は荷物番の詠と月と流琉が乗る馬車に寝かせて、看病しながら進む。

意識はすぐ戻ったし、食事やら何やらはしつかり取れているが、早いとこ街で休ませたい。いくら真桜がサスペンション作ってかなり振動を軽減した馬車でも多少は揺れるしな。いくら武人でも、揺れる床で寝てると、自分が思うほど休まらないものだ。

そう考えると急ぎたいところだが、白蓮はともかく、馬一頭分の重量は軽くない。元々少し急ぎ目で移動していたし、これ以上は馬が潰れるので無理っぽい。諦めてゆっくり行こう。地味に涼州出身者が多いから、馬を酷使すると悲しそうな顔するし。て言うか月も詠もあんななりで平然と馬を駆る。

涼州出身なら当然よ、と何でもないように言う詠。ぐぬぬ、尚更乗れない自分が悔しいです！まあ俺がでか過ぎて、乗るなら本当にあの巨大驢馬か、象とか持つてこないとなしいだろうけど。あ、どうでもいいけど、ウチの馬達が恋の説得と、ようやく慣れてきたのか、馬車になら俺も乗れる様になったよ！まあそれでも何か怯えてるし、速度出すために3頭引きにしても俺が重い（通常人間状態で500kg。トリコより重い。）ため、白蓮の看病が無ければ極力乗らないようにしている。

「私の白鶴なら、お前も乗れるんじゃないか？私が言うのも何だが、私が持つものの中で

唯一、誰にも負けないと胸を張れる凄いい馬だぞ。」

確かに体が普通よりふた回りは大きくて、賢く類を見ない良馬だから、俺を運ぶ力はあるにそうだが・・・俺が乗れないのは別な理由だからなあ。まあ、どっちみち今は弱っているし、試してみるにしても街に着いてからだな。それよりも白蓮、その真面目な顔似合っていないぞ。強張っててまるで武将みたいだ。

「私は武将だ馬鹿っ！・・・普段の私はどんな顔だと言うつもりなんだ、全く。」

え？流されやすそうなのに真面目っぽい顔。お前って常識人の癖に他者の主張を簡単に信じるよな。自分に自信がない感じ。やっぱりあれか、貧乳だからか？まあ確かに中途半端だが、需要が無いわけじゃないから安心しろ！

「お前本当にぶっ飛ばすぞ！・・・まあ、確かに愛紗や桃香みたいに胸大きく無いけどさ。」

はっはっはっ、あれに比べれば大体の女性が貧乳だよ。良いじゃん、普通くらいはあ
るよ。

「うるさい、私が普通って言われるの嫌いだって知ってるだろ、馬鹿っ！……だいたい、お前こそ今日はいやに絡むじゃないか。何時もなら女の尻追いかけてる癖に。」

はは、普通に身に覚えが無い件について。いやマジ無いから。カケラも追いかけてないから。だから愛紗、少しずつすり寄ってこないで。本当だから！俺はお前達一筋だから！……え、冥琳と祭？……ホラ、アレだよ。お前達の許可があったから……。

「道玄……お前そのうち刺されるぞ？ああ、刺さらないから皆で搾り取ってるのか。」

「まあそんなところです。一思いに一緒に心中も、簡単には出来ない男なので。」

!?

閑話休題

ムギユムギユ

「おい……おまへなひしてふんや?」

ん? 中々顔の強ばり取れないから、揉んだら柔らかくなるかなと。ほら、唐揚げの下味つけるみたいな?

そういうと、バツ!と俺の手を振り払い、お前の力じやそのまま挽肉だろ馬鹿つ!と叫ぶ白蓮。おお、少し元に戻って来たな。いい突っ込みだと褒めると、うがーつ!と吼える白蓮。それを見て笑ってたら、唐突に情けない顔してへたり込む彼女。

「: :ほんとに、今日は何なんだ、お前。いつもは、私の話なんか聞いてない癖に: :。」
何を言うか。いつもちゃんと聞いてるぞ? 聞いた上で無視してお前の反応を見ているんだ。面白いからな。だからお前が聞いてないと思つて恐る恐る言つてた話とかもちゃんと聞いて覚えてる。あれだろ? 小さい頃父親の変装した蛮族もどきにビビつて小大どっちも漏らしたんだろ? あとあれだ、髪が短かった頃、初恋の相手に男だと思われて失恋したんだろ?

「うぎゃあああつ! お、おまつ、よりによつて何てとこ覚えてるんだ! つていうか聞いてたんなら普通にその時返せよ馬鹿!」

御冗談を（笑）お前が普通が嫌いだって言うからこんな面倒なやり方してるんじゃないか。むしろ感謝しろ。

「会話が普通じゃないのはもう間に合ってるんだよ馬鹿っ！つていうか分かかってやってるだろ!!」

はっはっはっ、もちろん！と、大げさに返してやると、とうとう涙目でうう、いつもいつもからかいやがって・・・！と唸り始めた。

はは、ようやく白蓮らしくなってきたな。いつまでも強がって真面目な顔しやがって馬鹿たれ。お前は白蓮なんだからいつもみたいにわんわん泣いてればいいんだよ。

「強がってない！弱かった私が悪いんだ！何も文句なんかないっ！ただっ！・・・ただ、最後は仲間を残して逃げることしか出来なかったのが悔しいだけだっ！・・・仲間に私だけ逃してもらっておいて、お前がいなければ死んでいた自分が、そんな弱い自分が、笑えるくらい、情けなさ過ぎて悔しいだけだ・・・っ！

それだけだから、泣くわけないし、絶対に泣かない！・・・泣いたら、私の代わりに死んだ奴らに。顔向け出来ないだろ！」

はは、何言つてんだお前、最後の方意味不明だぜ（笑）．．．つか、こんな時わんわん泣くような、情けないけど部下の死を本気で悲しんでくれるお前だから、あいつらは命に代えてもお前だけは逃したんじゃないかねえ。俺はそう思うけど。

あいつら、私達の主人は凡庸なれど、誰より敬愛する優しい主人ですつて前飲んだ時言つてたし。

「!?．．．何だよ、それ。でもあいつら．．．? いやだつて最後まで笑いながら、普通の女と一緒に死ねないつて、それで、私を．．．!」

戦場から追い出した? まあ確かに普通の女の子過ぎて守つてあげたくなる、とか正直武力で勝てないけど戦つてるところ見ると気が気でない、とか言つてたな。ああでも、だからじゃね。普通に可愛い女の子だと思つたから、一緒に死地に行くよりも、生きて欲しかったんじゃないやね。男は好きな子には一緒に死んでくれるより、幸せになつてほしい生き物だからな。まあ、俺はあいつらじゃないから本当のところは分からんが。

とりあえず、お前が武将として頼りないから追い出された訳じゃないよ。あいつらはあいつらなりに、お前を護りたかつたんだろ．．．だから、そんな顔で必死に武将ぶ

らんで良いと思うよ？ぶっちゃけ今更だし。

「うるさい．．．うるさい!!何だよ急に優しくしやがって！私は武将だ！普通の女の子じゃない、あいつらの主君で、あいつらを守る者だ！私を護ってくれなんて私は言っていない！私は．．．私は守られるより、護りたかった。あいつらと一緒に、戦って死にたかった！」

はは、別に止めはしないが、それじゃああいつらは、ただの犬死になるな。あの世で今度こそ呆れられるな、たぶん。

そういうと、怒っていた白蓮は、何かを言おうとして、結局何も言わないまま俯いた。言いたいことは色々あるけど、他人の気持ちを考えてしまう白蓮なら、自分が正しいんじゃないコラア！って逆ギレはできないよね。知ってた！まあ俺なら知るかかって返すけどな。つーかむしろあいつらならあー、来ちゃったかって苦笑いする。

とりあえず白蓮の頭をポンポン撫でながら、何気なくキスする時みたいに顎を上げてやる。なんか一瞬ビクリして、何故か目を瞑った白蓮の口に最近作った眠気覚まし用激烈痛快飴を放り込む。これは飴とはほぼ名ばかりで、形を丸く纏めるためだけにしか

ぜびぜひと荒い呼吸の白蓮がガン泣きしながら何しやがる！と目だけで訴えながら掴みかかってくるが、辛過ぎて体に力が入らないので、掴みかかる、というよりは寄りかかる形で向かってきた白蓮を、胸に抱き抱える。

おつと、ついうっかり口にすると涙が止まらなくなる餡が白蓮の口の中に入っちゃまったぜ。いやあスマンな白蓮、それ舐めると涙が止まらなくなるくらい口の中が痛いよな。口の中が激烈に痛いんじやあ、泣いても仕方ないよな。あー、これはマジ涙止まらないわー。

「ぜいつぜいつ、お、まへ・・・はっはっ、後で・・・覚えて、ろよっ！」

はいはい、後でな後で。忘れなきや覚えているよ。白蓮の背中を摩りながら適当に返して、そのまま俺も激烈痛快餡を口にいれる。すっかり慣れてしまったが普通にクソ不味くて口の中が痛い。あーこれは涙でるわー。泣かない奴逆に凄いわー。俺泣いてないけど。あ、こら月、流琉、その幾ら何でも無理矢理過ぎるだろって顔止める。詠、なれてしまったから呆れた顔はもう効かないぜっ！

「くそつ．．．馬鹿、お前は本当に馬鹿だ！．．．なんでいつもこんな時だけ．．．あああゝもづつ、ぼんどのなみだがどまらゝないい．．．ツ。」

ははは、そうだね俺のせいだねー。涙止まらないのは俺のせいだから仕方ないねー。きつと気がすむまでは俺のせいで涙が止まらないんだなー。いやーそりゃ白蓮でも泣いちやうよなー。仕方ない仕方ない。

そのまま、飴の効果も切れても泣き止まない白蓮が泣き疲れて眠るまで、ゆっくり撫でていた。

まあ抱き着いたまま寝た白蓮が朝まで起きなかつたので、物凄い愛紗に怒られたけどな！

??

と、いうわけでしょうやく呉についたよ！普通に遠いなここ！しかも何かちよつと埃っぽい。荒野って訳ではないが、ちよつと熱帯みたいな感じというか何というか．．．僅かにサバンナみたいな感じ。

そう言えば最近検問に引つかからなくなった。軍師組は俺の存在が広まったから、と言っているが、正直それは嬉しくないなあと思う。だってこの検問なんて普通に俺見てヤバイやつが来たって言ったからね。伝令が即城に向かったからね！

尚、白蓮はあの後だいたい空元氣くらいは出せるようになったご様子。まあ2日も経ってないので、まだちよつときこちないけど。

にしても、そろそろ春になったばかりなのに結構日差しが強い。普通に気温も暑く感じるし、本当に亜熱帯みたいな場所だ。そのせいかは分からないけど、道行く人の肌は小麦色に焼けていて、非常に良い。前世の俺は褐色肌が好きだったのだ。まあ本音を言えば褐色になった部分となっていない部分のコントラストが好きだったので、むしろ日焼け跡のエロさが好きだったただけだが。

冥琳や祭が、ピキニ跡みたいな白い部分が残ってたら完璧だったな。恐らく誰よりも熱中したに違いない。それで嫉妬しまくった愛紗に絞殺されるまでがワンセットになるけど。

さておき、本当にいい色だ。おまけに暖かい土地柄だからか、雪蓮みたいに薄着で、結構スタイルの良い女性が多く、とても眼福です。でも見ていることが愛紗達にバレたらえらい事になるので、この体が持つ動体視力を全開で使つて、刹那の時間だけチラ見し、網膜に焼き付けたらすぐ視線を戻す。これなら流石にバレるまい！お、あの青い髪の人、凄いな、ナイスおっぱい！

「全員集まつて下さい。道玄の視界に女性が入らない様に陣形を組みます。」

「ちよつとあんた、頭下げなさい。いや、もう外を見るんじゃないわよ。」

「兄さま、ちよつとこつちに來てください。」

「あ、白蓮様、そちらの幌を下げていただけますか？」

「任せろ月。そつち頼むな？」

あれ、余裕でバレてる！何故だ！確かに分からない様にしたはずなのに！ハッ、まさかカマをかけられてる？お、落ち着け俺、それならまだ可能性がある！表情を、動かすな！

「無駄ですよ、道玄。……貴方が他の女を見て、私達が気が付かない筈がないでしょう？」

え、なにそれズルい！理由がないよ、もはや超能力じゃん。タネも仕掛けもないなんてちよつと卑怯だよ！やり直しを要求する！！

「却下です。覚悟して下さい。ああ、声を出しては駄目ですよ……余計に声を出させたくありませんので。」

!?ちよつ、ここ街中……!?

……酷い目にあわされた！

??

さて、俺が絞られてる間に、稟と風が城で宿となる借家の手続きをして来たらしい。いつの間にか街の外れにある大きめの蔵みたいな借家にやって来ていた。

今回はどうもそこまで怒っていなかったのか、単に時間が無かったのか、流石に遠慮

したのかは不明だが、1人一回くらいで許してもらえた。馬車の中がすごい臭いつてか、これしばらく使いたくないなあ。

「自業自得だろ……。人の目の前で盛りやがって。」

俺は悪くない。始めたのは愛紗達だし。俺は被害者や。あれっ、っーか良く考えたらお前なに被害者面してんの？止めるどころか出ていきもしないで普通にガン見しやがって！あん？手で顔隠してた？嘘つけ！指と指の間開きまくりだつたらうが！むしろそんなに開いて痛くないのってくらい開いてただろ！このむつつりスケベ!!

「だ、誰がむつつりだ！そんな事言ったらお前なんか獣だろ！しかも性獣だ！この変態！」

獣ですが何か？あと俺を性獣にしてるのは愛紗達であって、もし許されるのであれば、1日3回くらい的高校生に成りたい。いやマジで。まあこの辛さは処女や童貞には分かんか。

「ぐぬぬ……。私だって、私だっておま「白蓮殿、そこまでです。」。あつ、ゴメン。」

ぬ、何だ星、今のはちよつと怪しすぎだぞ。そーいや少し前もそんな顔してたな……。なにを企んでいる？洗いざらい話してくれたら、お前だけ特別なサービスが待っている

ぞ！

「む！．．．い、いや、はて？何のことだが分かりませぬな？何のことだかはさっぱりですが、特別、とは具体的にどのような．．．？」

「じゃあいいや。ところで稟、城に行つたなら孫策達に連絡は？あ、してないの？いや別に構わないけど、風と一緒に رفتらなら、城に泊めてもらつて経費節約くらいいつもならするじゃん。珍しいなと思つて。あ、星、もういいよ？

「なあつ、あ、主人！」

「まあ、色々理由はあるんですが．．．、城に居れば、好き勝手寄つてきそうですから。」
「ここは綺麗な人が多いですからねー。」

「英断ね。入つたばかりでこれだもの、城に居たら何が起こることやら．．．。」

あれつ、まさか俺が警戒されてる？そんな馬鹿な、俺にはお前達が居るから、そう簡単には誰も寄つてこれないはず。え、秋蘭と冥琳と祭？．．．さて、とりあえず風呂でも沸かすか。ちよつと汗とか色々匂うし。愛紗、一緒に入ろうぜ。えつ、特別つて何か？やだなあ、何も無いヨ？あ、星。お前は駄目な。

「!？」

「ではその後私も入りますー。」

「私も入ります。逃がしませんよ。」

「ど、どうしてもって言うなら私も入ってあげるわよ?」

おっと、残念だったな! 大寸胴鍋は3人以上入れないんだぜ! というわけですらば! ！ってあれ、愛紗? あの、行かないの? え、誤魔化されない? 特別ってなにつて言われても・・・何も考えて無かった! だつてあんないい景色のところ中々無いだもん! 精々俺が住んでた洞窟くらいしか・・・あ、やつぱなし。帰るの面倒い。

「主人、では全て話すので主人の家に是非。私だけに特別・・・でしたな?」

「道玄様、私も行ってみたいです。」

「・・・道玄?」

「兄さまの住んでた洞窟?・・・それは。」

「何か凄そうなのだ!」

あれ? 何か予想外の食いつき! いや、でも止めよう。良く考えたら食糧類はちゃんと持ってきたけど、結果的に整理しないで旅に出た形になってしまったから掃除してないし、何よりむっちゃ山奥だし。獣道しかないし。・・・決して連れて行きたくない訳ではないです。

ええいうるさい、ウチなんか知っても意味はないでしょ！いつか気が向いたら連れてつてあげるよ。気が向いたらな！

何故か俺が初めて住んだ洞窟に興味がある皆。まあ確かにちよつと秘密があるけど、所詮はそれだけの洞窟なので気にしないで欲しい。そんな感じに収めつつ、早く掃除するよ！と促す。まあ俺は風呂の準備だけでも。

すると、最後に愛紗が、いつかは連れて行ってくださいね、と言うので、それならまずお前らの実家を回るのが先だ、と彼女にだけ聞こえる程度に、短く返して歩き去る。言われた瞬間に固まった愛紗が、少しして叫んだのが聞こえたが、その時にはもう大寸胴鍋の設置をし始めている俺だった。

なお、その日はそれから寝るまでずっと愛紗がにこにこのご機嫌だったことを記しておく。

??

次の日。

朝ご飯食べたら雪蓮達に來たよって連絡しに行こうか、なんて皆の朝食を作りながら流琉達と話す。最近は流琉、風の他に、侍女である詠と月も料理を手伝ってくれるので、非常に何か楽しい。月は慣れてないだけで意外と筋が良く、そろそろ次のステップに行かせたいところだ。詠は逆にちよつと不器用なので、もう少し練習をさせよう。食材は切るところから既に料理は始まっているのだ。大丈夫、流琉と俺の手で詠もいい嫁さんクラスまでいけると約束する！

そう言えば特に言及して居なかったが、劉備さんの所にいた時、僅かな間を使って2人のメイド服を完成させた。非常に可愛くて素晴らしいと思う。調子に乗って劉備さんのところを出てからたまにご主人様といけないメイドごっこをしたくらい可愛い。ちよつとやり過ぎて愛紗に見付かり、メイドに手を出したことがバレた夫と、怒り狂う妻、みたいな修羅場になったけども。

まあその辺はいつも通り身体で解決したので問題はない。バレたのは奇跡的に愛紗だけだったので、巻き込むことで抑え込んだしな。とても楽しく興奮する遊びだが、街にいる間じゃないと、他の女性達に見付かる可能性の高い諸刃の剣でもある。だから

朝っぱらからはやめてね詠。今日はたまたま風と流琉と愛紗しか居なかったからいいけど。ローテーション外のメンバーが朝一に増えてるとか日常茶飯事だからな。

「うるさいっ！．．．あんたが朝から大きくしてるのが悪いのよ．．．．．団長の性処理は、侍女の仕事だもの。」

「詠、それは違う。それは私達の仕事だ。」

「みんなでやれば、よりきちんと処理できますよ?」

おいよせやめろ下さい。それは最終的にメイドさんとお遊びが禁止になるフラグ。せつかく風も入って猟犬メイド風になってるのに禁止は嫌だぞ、俺。俺たちだけの秘密だ、これは。そう言ってみんなを嗜める。うむうむ、無駄に他の女性達を巻き込まず、目の前の女性達を大事にしてる感が伝わったはず!

と、思ったらすごいジト目だ!月まで!何故だ!

「．．．道玄様、それはこの服に限った話ですよね。」

「あんた、他の女達とも似たような事してるでしょ。」

「流石に、すぐ分かる嘘はちよつと．．．。」

!? 何か酷い評価をされてるぞ!抗議だ!断固抗議をするぞ!!俺がこれ以上広めたくないのは事実だ!それにお前達が大切なのも嘘偽りはない!え、祭との昼下がりの団地妻(ごっこ)?

! さて、そろそろみんなが起きてくるな。とつとと料理を作らねばつ

「ちよつと月、少しだけ私のお願いしていい?」

「いいよ、詠ちゃん。終わったら私とも代わってね。」

「2人とも、私達の間も残しておいてくれ。」

「兄さま、料理中は動いちゃ駄目ですよ?詠ちゃんが危ないですから。」

ちよつ、詠!料理中はやめてつてズボン下ろすな!お前さつきもしたろ!?!え、流琉、俺中華鍋振つてなきやいけないの?なにそのルールつてやめ、舐めるな!や、やめろお!!

．．．飯の時間が遅れたの言うまでもないね！

．
．
．

朝食の時間。

なんだかんだあつて少し遅れてしまつたが、外で鍛錬していた武将達や、ぐっすり寝ていた軍師組もやつて来て、さあご飯の時間です。風、恋、寝るな！稟、音々、2人を起こせ。

「ふふ、相変わらず朝から元気だなお前は。」

「まつたくじやの。おおつ、今日は朝から緒武良好酔か！」

．．．何故居る。寧ろいつ来た？あとオムライスな。なんだその強そうなお酔は。

当たり前のような顔で平然と食卓に座る2人。そして当然の様に置かれている食器。

いや、何でやねん。飯食い終わったら行こうと思ってたのに。どういふことなの？え、さつき普通に来た？気付いてると思つてた？さつきまで普通にしていや何でも無い。何でも無いから気にしないで。」

「主人、どうせ汗を流すなら我らと共に如何ですか？」

「道玄・・・後で私にもしてもらいますからね。」

「・・・恋も、する。」

「そういうのは夜だけにしないか・・・？」

「なんや華雄、まだ苦手なんか？無理して混ざらんでもええんやで？」

「お前、私が白鶴の世話をしてる間に・・・！」

「相変わらず爛れた生活しとるな。・・・昨日儂等を仲間外れにしておきながら。」

「祭殿抑えて。・・・その分も今日して貰えば良いのですよ。・・・私も昨日楽しみに待つていた分は、しつかり上乘せさせてもらいますから。」

おつと秒でバレたぞ。むしろ華雄だけじゃ駄目かな？駄目？あ、はいごめんなさい。え、華雄の理由ですか？早く終わるかな、と。本当にそれだから待つて愛紗、私が一番とか関係ないのでズボン降ろさないでください。食事中だよ!?

はー、はー、なんで毎度毎度食事中にこんな疲れてるんだ……。えーとなんだっけ、そうだ冥琳、祭！昨日仲間外れにした訳じゃないよ！ちよつと色々あつて宿をこつちにしたただだよ！つていうかなんで来たこと知ってた？え、検問で俺たちが来たら即報告するよう義務付けしてる!?指名手配か！

「お前が待たせ過ぎなんだ。別れてから何ヶ月待ったと思つてる……。！祭殿など欲求不満で大変だったんだぞ？」

「おい冥琳、誤解されるような言い方はよさんか！儂はきちんと道玄に操を立てておる！おまこそ耐えられずに策殿と毎晩のようになしておつたではないか!!」

それは雪蓮の方からー、とかわいのわいの騒ぐ2人。あらやだ。つまり2人とも欲求不満なの？でもまだ4ヶ月くらいだよ？てかこれでも結構急いだんだが。……。二週間以内に來い？え、移動だけで1ヶ月以上かかる距離なんですがそれは。まあ、とりあえず今日は冥琳だけね。祭はもう少し焦らします。何故ならその方がいい反応が見れそうだから！

「なんじゃその理由は！わ、儂は本当にずっと待つておつたんじゃぞ?！」

「私は欲求不満ではない！……。だが、祭殿よりも優先されたのは、嬉しいな。」

いやだって冥琳、孫策と浮気してるやん。いやまあ、順番では言ったら俺が浮気相手なんだが、その辺は置いて。とにかく早急に上書きしてしまわないと。祭は他の男どころか、他の人間の匂いさえほとんどしないぐらい俺を待っててくれたみたいだし・・・今度、特別に丸一日時間を設けて、丁寧につつぷり、しっかりと満足させてあげよう。

そういうと、一瞬目を輝かせて喜ぶも、でも早くして欲しいのじゃが、と悩ましげの祭。逆に冥琳が浮気はしていない、と叫ぶが女性相手でも浮気です。それを言ったら俺は浮気ばかりなんだが、自分から手を出すことはほとんどないのでセーフセーフ。あ、愛紗なんだい？え、私も連れてけ？じゃあ別の日を・・・え、祭の日に!?特別扱いは許さない!?ちよ、俺にも選択の自由があっても・・・駄目かあ。

「お前本当に最低だな。もうちよつと慎みを持ったらどうだ？」

なるほど、確かに。ほらみんな、白蓮もこう言ってるし、少しくらい1日の回数減らしたりしない？特に愛紗。即拒否された。あ、余計なこと言った白蓮が追い詰められている。頑張れー。

助ける、と白蓮の目が言ってるが、いやあ残念な事に俺鈴々と恋のお代わりで忙しいから見えないんだよね。困った困った。

お前いつか覚えてろよ！とか聞こえた気がしたが、音々が嫌いなニンジンを食べたことを褒めていた俺は当然のようにシカトした。ウチの娘マジ可愛い。

??

さて、あの朝食の後、一応病みあがりの白蓮とその馬、白鶴を残し、更にその看病に流琉と月と詠、白鶴他、今回乗ってきた馬達の世話に動物好きの恋と音々を付け、ついでに買い出しに三羽鳥を出して借家を後にした俺たちは、冥琳と祭に連れられて、城に來ていた。

・・・のだが。

さっそく待ち惚けを食らっている。理由は孫策の馬鹿だ。

あの馬鹿政務をやらずに逃げたらしく、俺たちを迎えに冥琳と祭が来ていた分、大量の政務が滞ったまま残っているらしい。それを聞いた冥琳が怒って走って何処かに行き、祭が溜め息をついて部隊を集めに行った。そこまでするか？と思ったら、城にいないぞ！街に逃げた！と兵達の叫び声が聞こえて来た。この広い街に逃げるとか・・・アイツ鬼だわ。

とりあえず一部の文官？らしき人が客間まで案内してくれたので、暇潰しがてらみんなでお茶でも飲もうと、お湯をもらう事にする。あ、文官さんもどう？忙しい？じゃあこれをあげよう。はいこれ、羌毅さん印のべっこう飴だよ！見知らぬ人にあげるのは地味に久しぶりだが、とうとうロゴが飴に捺印されるようになったぜ！

なんとなくそんな気はしてたが、あれが党首ならきつと文官の負担は大きいだろう。甘い物は頭の疲労回復に効果があるから、遠慮せず持つておいき。あ、毒じゃないよ！

「あ、ありがとうございます・・・これが、周瑜様の言ってた・・・！」

うむ、その周瑜さんもお気に入りのべっこう飴さ。まあ文官みんな分けて食べると良いよ！じゃあお仕事ふあいとやで！んじゃね、呂蒙さん。

そう言うのと驚く彼女。あつてた？と聞くと、何故分かつたのか、と聞かれたので、祭や冥琳に話を聞いてたと答える。まあ一応嘘ではない。聞いたことがあるのは事実だ。実際に分かつたのは前世知識があるからだ。

とりあえずなんか驚いたまま去っていった呂蒙さん。本当に忙しいらしいので、そのまま見送る。さて、今なら目撃者居ないから四次元袋が使えるな……。みんな、茶受け何が良い？お勧めは最近流琉と2人で完成させた、芋羊羹だよ！

……つてあれ？何でみんな普通に武器構えてんの？室内じゃ危ないよ？

「団長、流石に今のはアカンよ。ウチでもむかつと来たわ。」

「主人、手が早すぎです。」

「私たちの目の前で堂々と……。良い度胸ですね。」

「おにーさん、何か申し開きはありますかー？」

「あつても無くても極刑でしゅー！」

え、なにに？俺なんかやったか？何でみんな荒ぶつてんの？ちよつと本気で分からない。なにこれ？

訳が分からず困っていると、呆れながらみんなが溜め息をつく。そして愛紗が武器を下ろさず、今貴方が口説いた女性は誰ですか、言った。口説いた？誰を？と思つたら呂蒙さんの事だった。言われてみれば彼女は女性だ。誰にでもべっこう飴あげてるから

忘れていた。確かに傍目から見たら口説いているように見えるかも知んない。

うーむ、ちよつとした親切のつもりだったんだが。駄目？駄目かあ。むむむ、価値観の違いって難しいね！・・・え、明るく言っても許さない？せめて借家戻ってからお願いします。それは大丈夫？良かった。

「今日は久しぶりに全員ですね。」

「き、期間はどうしますか？」

「食料の問題がありますのでー、とりあえず2日にしませんかー？」
「そうだな、それ以上は体も鈍る。落とし所だろう。」

おっと、全然良くなかったでござる。珍しく華雄までやる気だし！え、あれは私でも怒る？マジかー。

こうして俺の未来は確定してしまった。これ以上墓穴を掘る前に早く帰って来るんだ孫策！ただし冥琳と祭は振り切ってこいよ！余計怒られるからな！

閑話休題

相変わらず孫策達が帰ってこないの、暇を持て余した俺たちはそろそろ帰るか？などと相談しながらトランプで大富豪したりオセロしたりしてたのだが、ここで予想外な事が起きた。

「貴方が羌毅？ふーん・・・確かにおつきくて強そうだけど、そんなに危ない感じしないけどなー。」

なんか先ほど虎に乗って（比喻ではない。）来たピンク髪の毛のちっちゃなお嬢ちゃんがいきなり扉を開けたと思ったら、挨拶もなしに部屋を見渡すと、俺に狙いを定めてそう言ったのだ。

地味に女性陣はいきなり現れた虎に警戒しているが、その虎さんはたつた今お嬢ちゃんを振り落として俺に向かって臨戦態勢を取っている。ふぎやつ、とちびつ子が呻いた。ちよつとお馬鹿可愛い。ああ、虎さんは多分そちには行かないから安心してい

い。既に顔が逃げる顔だ。俺が視線を逸らしたらすぐどっか行くだろう。面白いから食い物！ってイメージで見つめてやると、明らかに怯え始めた。流石に可哀想なので、途中で顔ごと視線を逸らす。脱兎の如く逃げていった。

とりあえず顔から落とされたお嬢ちゃんを助け起こしてやり、顔を見るとちよつと赤くなっているが鼻血も出てない、特に問題はなさそうなので、軽くさすつてから口へべつこう飴を放り込む。ちびっ子は甘いもので簡単に痛みを忘れるよね。

いきなり乗り物に落とされた上に乗り物が逃げてしまったので、ちよつと混乱気味のお嬢ちゃん。鼻が痛いと言いながら、口の中が甘いと喜ぶ。たぶん俺のせいで余計混乱してるけど、あえてそのままにして、頭を撫でておく。喰らえっ久しぶりの羌毅さん式ナデナデッ！相手は強制的にリラックス！混乱したままリラックス！つまりとりあえずナデナデを受け入れるっ！！

「えへへ、頭撫でられるの好きー。」

はっはっはっ、見たかこの威力！ヤバいこのちびっ子可愛い！とかやってたら鈴々が俺の左手を持って自分の頭に乗せて来た。どうやら自分もやれと言う事らしい。ヤバいうちの娘可愛すぎる！！これは撫でまくらざるを得ない！行くぞスーパー秘奥義！猫

可愛がりの術!! 相手は撫でられまくる!!

2人ともしつかり撫でまくり、周りの女性陣が何をしていたか分からなくなったあたりで、ようやく孫策がやって来た。

「ハアイ道玄久しぶりー! 待たせたわね・・・ってシャオ!? 何してるのこんなところで。」

「あれっ、お姉様だ。何をしてるのって、それはもちろん・・・あれ? 私何しにここに来たんだっけ?」

雪蓮よつすよつす。このちびっ子はいきなり虎に乗って現れて、直後に振り落とされ顔面を強打、泣きそうだったのでとりあえずべっこう飴を与えて宥めていた。見た目のに親族だろ? 遅れたお詫びにちゃんと引き取れ。あと仕事はちゃんとしろこのアホ党首。

「道玄のせいで冥琳が朝から居ないから、私が仕事したくなくなるくらいの仕事が回ってきたのよ。私は悪くないわ。」

「シャオはちびっ子じゃないもん!」

やれやれ、自覚がない奴はタチが悪いな、と思いつながら溜め息をつく。そしてちびつ子を撫でていた手を離して雪蓮に任す。なお鈴々はまだ撫でている。うなああ！って笑顔で喜ぶうちの娘はマジ天使。これはもうアカン奴ですわ。これ俺がじいちゃんだったら何でも買つてあげちゃうレベル。

そんな感じで鈴々の可愛さを絶賛してたら、何故か雪蓮の下へ行かず、俺をジロジロ見てる幼女。なんぞ？つていうか雪蓮、うちの女性陣と挨拶するのは構わないが、お前冥琳どうした？お前を探しに行つたきり戻つて無いんだが。居なくても別に大丈夫？何言つてんだ、俺たちとの細かい契約内容についてお前が決められんのか？てか勝手に決めて激怒されても知らないぞ、俺。

「づつ、それは確かに……いやでも、今冥琳はちよつとマズイというか何というか……。」
……お前、まさか本当に冥琳達を撒いて来たのか。知らんぞ俺は。盛大に怒られると思うが、俺は庇わないからな。

ちよつと、私達の仲じやない!?とかほざく雪蓮にどんな仲だ？いきなりお前に斬りかかられた被害者と、いきなり斬りかかってきた加害者の仲か？と問うてやると、づ、それは……言い淀む雪蓮。はっはっはっ、残念だったな、1人で説教でもされてこい。

「嫌よ！冥琳が道玄の為に用意してた高いお酒飲んじやったから絶対にいつもより怒られるもの!!ねえ匿って！こんな美人が頼んでいるんだからほら匿って!!」

はっはっはっ、全力で断る。お前今俺の為に用意した酒飲んだとかほざいておいて、それで俺が許すと思うなよ。というか、もう遅いがな。霞、華雄、星、窓を塞げ。

「了解した。」

「了解やで。」

「了解です、主人。」

「?何よ急に、窓がどうかしたの?」

「助かる、道玄。一応外にも兵は配置したが、相手が雪蓮では絶対とは言い切れないからな。」

「まあ、普通の兵は党首に逆らえんからのう。・・・党首自ら政務を放り出す家も中々無いと思うがの。」

よっす2人とも、さつきぶり。

そう言ううと2人は待たせてすまない、と謝りながら雪蓮を見る。序でに幼女を見て何

故ここに、と不思議そうな顔をしながらも、後ろに隙間なく兵を展開する。窓をうちの女性陣が抑えている以上、逃げ道はもうない。見ると雪蓮が慌てた顔で嵌めたわね!と文句を言ってくるが知らん。おい冥琳、お前が俺の為に用意してくれたっていう酒、コイツが飲みやがったらしいので、しっかり叱ってやってくれ。

「ちよつと、それは流石に洒落になら「ほう?・・・どういう事かな、雪蓮。」ない・・・わよ?」

おつと、久しぶりにガチギレ冥琳だな。まあ仕方ないね!食い物と飲み物の恨みは怖いのだ。だから俺は助けない。そんな絶望した顔しても無駄だぞ、雪蓮。

「そんなつーじゃ、じゃあ祭、貴女からも何か言つてよ!冥琳に「のう策殿。策殿が飲み干した酒が、俺も協力して道玄の為に用意した酒と知っておるか?」・・・えつ。」

あ、お疲れ様です孫策さん。君のことはたぶん忘れない。

ちよつとー!?!と叫ぶ雪蓮だが、そのままガチギレな冥琳と祭に縄でぐるぐる巻きにされた雪蓮は、兵に担がれて何処かに消えていった。南無、と雪蓮の冥福を祈る。ヤムチャしやがつて・・・!

そんな事してたら、さつきからずつとジロジロ見てた幼女が、俺の袖を引っ張って、ねえ、と声を掛けてきた。何だね？

「お姉様をああも簡単に遇らう胆力といい、周々と戦わずに追い払う強さといい、この美味しい飴やその包容力。たくさんの女性を囲っているのもよーく分かるわ！顔はちよつと怖いけど、気にいったわ！シャオのお婿さんにしてあげる！」

「おやおや、何か可愛い事言い出したぞこのちびっ子。じゃああと10年したら考え駄目です。」られなかった。すまんが諦めてくれ幼女。あとみんな、落ち着け。子供の言う事だぞ。

「小蓮様、残念ながら道玄は儂の男でしてな。」

「祭殿、嘘はいけません。私のです。」

「おとーさんと結婚するのは鈴々なのだ！」

「おやおや、我が主人はモテますなあ？」

「誰が何を言おうと、道玄は私のものです。」

「団長、ウチは愛人でもええで！」

「私も愛人で構いませんよ。誰よりも愛してくれれば。」

「風ちゃんとしては側室を希望します。」

「私達は別に娘でも良いでしゅ！」

「娘と父の禁断の關係……あわわ！」

「わ、私は子種さえ貰えれば……いい、いややっぱり。」

おいよせ、止めろ。特に幼女軍師ども、お前ら闇が深過ぎるぞ！つていうか幼女の発言にマジになるな！落ち着け！何とかみんなを宥めようとするのだが、中々落ち着かない。すると幼女が急に俺の右腕に抱きついた。定位置を奪われた愛紗がなあつ！と声をあげる。ヤバいなこれは、おい嬢ちゃん、ちよつと離れなさい？

「お嬢ちゃんはやめて!!シヤオは孫尚香、真名を小蓮！シヤオって呼んでね、未来の旦那様!!」

流石雪蓮の妹だ、まるで人の話を聞いていない。常識が通じな過ぎてちよつと孫権さんに会いたくなってきた。

「……道玄？」

目の前には幼女の発言にヤキモチ焼きだした愛紗と、何故かガチギレしてる冥琳と祭。そして一見笑っているように見えて、目が闇色になっている星。

・・・何でこうなったんだろう。

呉について1日目、早速幸先が不安になる俺だった。

続く？

4 1 話 コーンスープはポタージュスープと混ぜて飲め!

やあみんな、最近生活が爛れ過ぎていると真剣に思う他称性獣のオーク系転生者の俺だよ!

呉に着いてから3カ月が経った。

初日から呂蒙さんナンパ疑惑とか、孫策の妹こと孫尚香と婚約疑惑とか色々あつてさつそく3日ほど絞られました。俺は何とか元氣です。

その後孫尚香こと小蓮、略してシャオちんの羨殺さんお婿さん宣言は何か強烈な圧力が身内から(冥琳、祭と誰か。もう2人くらい居るらしいが誰かは分からん。)掛けられ、うちの女性陣からも大人気ない猛烈な反発があつたため、10年後とかではなく、お友達と言う事になった。

正直俺は女性陣がちびっ子の将来のお婿さん話にガチ過ぎて引いたが、寧ろあの劍幕の女性陣からお友達なら、という譲歩を引きずり出したシャオに戦慄をしていた。

半分は我儘と泣き落としだったが、愛紗を筆頭に俺の正妻を自称する女性陣とは真つ向から睨み合いである。気合い入りすぎだ。

初対面の蛮族の為に何をそんなにやる気なのか、と思っていたが、どうにも引つ込みが付かなくなったただけだったみたいで、結果的に愛紗達が矛を収めた途端にへたり込んで情けない顔してた。かなり怖かったみたいで、少しアンモニアの匂いがしたのでさりげなく庇いながら、大人気ない女性陣を叱っておく。

ついでに、流石未来の旦那様、とか言いながらくつついて来ようとしたちびっ子とはひと際大きいべっこう飴で鎮圧する。ちよつと君は学習しなさい。俺が言えることじゃないけどな！

いつの間にか擦り寄ってきた恋が上目遣いで飴を要求してきたので、特大の桃まん型べっこう飴をプレゼント。いやー、恋は可愛いね！えつと何だつけ？そうそう、お前からちびっ子相手に大人気ないぞ！もつと大人の余裕を持ちなさいよ。

「相手が幾つであれ、私から道玄を奪うつもりなら等しく敵です。」

「それは主人が綺麗で新しい女を増やさなくなったら考えましょう。」
「全ては道玄様次第です。」

おっと、俺に飛び火したぞ。なのでこの話はここまでだ！そうやって有耶無耶にしたよ。まあ当然の如く散々怒られたけど、だいたいそんな感じだった。

ああそうだ、祭との一日デートもしたよ。あの熟女本当にエロい。そして大人の女っ
て感じだった。地味にあそこまで年上美人は初体験だったので、街では俺は終始リード
されっ放しだった。まあ最後の方、早めに宿に入ってからはずっと俺のターンだったけ
ども。聞だと意外と可愛いところもあるなーと思いつつ、つついやる気出して次の日の
昼まで、待たせた分しっかりしっぽり入念に満足させてみたら、何回気絶したか分から
ないくらい悦んでいた。

ついでに腰が抜けたとかで、帰りはお姫様抱っこ状態で帰った。当然の如く迎えに来
てた愛紗には怒られたが、祭自身は知った顔ばかりの街中と城の中をそんな状態で運ば
れて羞恥の限界を突破したのか、ずっと顔を真っ赤にしている、部屋について寝台に寝
かせたら布団を頭から被って儂はもう外に出れぬ、と半泣きだった。ちよつと萌えたの

で更に一発することも考えたが愛紗に察知されたので断念しました、

まあオチとしては我慢の限界だった愛紗にそのまま宿に連れ込まれた訳だけど。しかもさつきまで祭と泊まつた宿だった。宿の女将さんに凄顔されたが、愛紗が私が本妻ですので、と言うと俺に対する視線が3倍くらい強くなって、愛紗にこれで搾り取つてやんな！と怪しい薬を手渡しやがり、その後は普通に搾られた。途中で何処からか察知した星達皆んなもやって来て、酷い目にあつた。

まあつまりいつも通りだったわけさ！

・・・これがいつも通り、つて時点で色々あれだよなあ。

それはさておき
閑話休題。

それから、本格的に呉での仕事が始まった。

地味に白蓮はウチの傭兵団の客分扱いなのだが、気心知れた仲なのと、身体を動かした方が気が紛れるとの事なので、一緒に働く事になりました。

とはいえ、ウチの武將組は正直人数過多な上に、孫策もとい雪蓮のアホが仕事をサボりまくりなので、白蓮は軍師組のサポートについている。軍師組は冥琳や陸遜さん、呂蒙さんなどと一緒に政務などを手伝っているようだ。重ねて言うが雪蓮のアホがサボりまくりなので、こないだの桃香達のところほどじゃあないが、かなり忙しいみたいである。

武將組は何か戦闘狂の霞と政務を抜け出し常習犯の雪蓮、ついでに強え奴と勝負すつとオラワックワクすんぞ!の鈴々が仲良くなつたらしく、良く組手と称してゴリツゴリのバトルを展開している。時々そこに星や華雄、祭が混じって副官はおろか伝令の兵士達さえ近寄れないデッドゾーンになる。まあ最終的には仕事をサボって来てる雪蓮が、冥琳におやつで釣られた恋に即鎮圧されてお開きになるわけだが。

愛紗や三羽鳥は俺と一緒に街の巡回と、未だ近くにぼちぼち賊が出るので、下積み中の孫権さんと甘寧さんの手伝いでついで行く。ちなみにたまに周泰さんや陸遜さん、呂蒙さんも付いてくる。

尚、編成は俺と愛紗がいざという時の保護者役で、いつも俺たちの身の回りの世話の為に付いてくる流琉と月、詠の3人と一緒に、馬車で最後方に控えている。三羽鳥は場

合に寄るが、基本は周泰さん、陸遜さん、呂蒙さんなどの補佐に回している。まあ要するにほとんど保険だ。

今は盗賊の一大派閥だった黄巾党がほぼ壊滅している為、そこまで大きな賊の集団はあまりないが、地味にどつかの豪族とかの罨だったりして、たまにいきなり大軍に囲まれたりもする。言うても最大で1万くらいだが、賊の数はだいたい何時も数百程度なので、千人くらいしか兵を連れて来ていないため、結構大変だ。元々孫権さん達の練習みたいなもんだしね。

冥琳や雪蓮には手伝い程度にしてくれ、とは言われたが、あまり手助けしてはいけないのは賊が相手の時だけの筈なので、豪族とかの罨だと分かった瞬間にだいたい俺が鎮圧している。

何故か、といえば俺について来た流琉や侍女2人、そして何故かいつも肩の上に乗ってついてくるシャオが危ないからだ。本命は孫権さんらしいが、目撃者を逃すつもりもなく、彼等的には女子供から狙ってくるのはむしろ優しさとか何とか言ってたが、それで許されるのは俺が居ない知らない分からないの三拍子が揃っている時だけである。

最初はそれでも2人がギリギリ乗り越えられないレベルまで危なくならない限りは、

と愛紗と2人で黙って見てたんだが、一度流れ矢が詠の顔を掠った(幸い浅かったのですぐ完治し、跡は残らなかつた)為、女の顔に傷付けるとか死にたいんだなこのクソどもが!と俺が腹立ってうっかり殲滅してしまったのだ。しかもすっかり肉体言語で黒幕聞き出して本拠地丸ごとひっくり返して来た。

結果的に豪族の中でも結構大きな派閥が一族丸ごと一つなくなってしまう、裏切り者といえど雪蓮の部下であるのは事実だし、流石にちよつとやり過ぎた自覚もあるので、攻撃されて腹立つ前に滅ぼしてしまえば、とりあえず目の前の敵以外には被害がいかないだろうと考えた結果そうなのである。すごい場当たりの方法だが、被害が拡大したら相手が懲りないのが悪いよね!

最初こそちよつと危なくやられそうだった孫権さんと甘寧さん達(キレてはいたが一応ギリギリのところだ俺が救助した。そしてその後の殲滅にうっかり呉兵も巻き込みかけた。)だったが、俺が近くにいれば大丈夫だと考えたのか、二回目以降はだいぶリラックスして戦いに臨むようになり、最近では豪族達の罨も多少は自分達で殲滅できるように頑張っている。

というか、どうも孫権さん達は裏切った豪族の事を練習台か何かと見ているご様子。あえて襲われたことも報告せず、口封じにやってくる次の豪族さんを楽しみにしているようで、この前など周泰さん部隊と甘寧さん部隊をそれぞれ陸遜さんと呂蒙さんが指揮してどちらの策が効率的、効果的、などと競争していた。何故か勝った方には俺からのご褒美を要求されたので、周泰さんには近場で見かけた猫達をべっこう飴で正確に再現した近所の猫。シリーズをプレゼント。陸遜さんは何あげていいか分からなかったのだが、本が好きと聞いたので適当に流琉と2人で作った料理20品目ほどを纏めたレシピ本をあげてみた。但し字を書いたのは詠で、絵を描いたのは真桜で、俺は後ろで喋ってただけです。いや、日本語では書いてあるんだが・・・俺未だにこっちの文字読み書きできないのよね！

そして何故か孫権さんに弟子入りを志願されたが、俺に剣は使えないのでお断りした。なら今から無手を覚えます。とか言われたが、それなら槍か矛を持つてうちの女性陣に習った方が早いし、何より彼女の剣の師匠たる甘寧さんが可哀想だ、と言ったら、それら全部を纏めても、貴方一人に敵いません、とか言い出して、甘寧さんどころか孫策や祭も落ち込んでいた。

何気に容赦なくてワロタwと笑っていたら、ヤケクソ気味に孫策達に勝負を挑まれて大変だった。だって孫策の奴血を見ただけで発情しやがるんだもんよ。コンピネーシヨン失敗して軽く甘寧さんがかすり傷などを負うと、その血とかで凄い顔になる。肝心の俺には無傷だけど。というかお前ら、自分を置き去りにしてバトルが始まったせいで後ろで困ってる孫権さんは無視なの? ねえ無視なの?

・・・無視みたいです。なんか可哀想だったので、孫権さんには秘蔵のおやつ、素材から厳選した桃の蜂蜜ラム酒漬けをあげて慰めておいた。

そう言えば、その発情した孫策で一つ問題が起きた。発情状態の雪蓮は、今までだったら冥琳というお相手がいたわけだが、その冥琳が、祭が誰とも発散しないで我慢して俺とデートしたりした為、地味に羨ましいと思ったのか、最近では俺がここに留まる間は雪蓮とはしない、と決めたらしい。それ俺が呉に仕えたらそのままNTRですね、と思っただけど止めた。完全に俺が悪役ルート突入するフラグ。とりあえず確かに冥琳から雪蓮の匂いがしなくなったので、もう少し頑張ったらデートする事になっている。

まあとにかく雪蓮としては、発散相手が居なくて大変なわけだ。我慢とか苦手な雪蓮が騒がしいので、一人でしろ！と真桜特製アダルトアイテムも貸し出されたが、完全シカトで1日目にして冥琳もいるウチのローテーションに乱入し、当番だった恋に叩き出された。そして赤い顔で覗いてた白蓮が発見されたが、皆スルーした。手がびしょ濡れだったけど俺は何も見てない。白蓮でさえ見てないからその隣の甘寧さんと孫権さんをもっと見てない。しかしこここそ逃げていった星は見逃さないので覚悟しとけこのメンマ！

さておき、ちょうどその時のローテーションに入っていた冥琳は雪蓮を見捨てられぬいのか(祭は雪蓮殿でも譲る気はない！と断言した)、混ぜては駄目かと聞いて来たが、愛紗達がならば冥琳が交代で、と言ったら即諦めていた。俺としたら増えられると生命の危機なので問題はないが、冥琳はそれくらいで主君を諦めて良いのかと思わないでもない。

そんな可哀想な雪蓮は、そういう我慢に慣れていないのか、溜まり過ぎると非常に情緒不安定気味になり、出会い頭に唐突に冥琳を返しなさいよ！と怒ってきたりす

る。理不尽だし今まで色々迷惑な事があったので、ちよつと冥琳を連れて来て目の前で抱きながら俺とどっちがいい?とNTRイベントしてやろうかと思つたが、流石にこの2人の仲でそれをする、呉が崩壊しかねないので止めておいた。

実際俺の所為でもあるのは確かで、かと言ってせつかく俺の為に頑張っている冥琳に許可を出すのも違う気がする。色々悩んだが、転生してから欲求不満の女性の相手ですつかり慣れてしまった俺は、仕方なく冥琳の代わりに挿入無しの手と口だけで軽めにお相手してあげた。愛紗達にバレると怖いので、人気の無いところでちよつとだけだ。

それでも結構満足したので、まあちよつとは発散出来たのではなからうか。流れで雪蓮に唇奪われちゃったけど、誰も居ないしたぶん大丈夫でしょう。やたら艶っぽい顔で次はいつしてくれるの?とか言われたけど、今終わったばかりだよーと思ひながら、当てにされると俺の方が危険になるので、良い子にしてたらな、とか言つて有耶無耶にしました。

物欲しそうに俺の股間を見たが、それはガチで不味いので無視して去つた。うちの女性陣は俺のものの張りやら味やら濃度やら、色々な方法で浮気を看破してくる。許可

のあつた冥琳や祭みたいならともかく、ガチの浮気は性裁も一切の容赦がないガチ性裁になる。今の人数なら今度こそ死にかねんからな。

しかし、その後匂いや跡が残らないように入念に手を洗つて帰つたのにも関わらず、その時出迎えてくれた愛紗と凧に2秒でバレた。仮拠点の借家に帰つて2人に挨拶した瞬間に、途中までおかえりつて言いかけた2人がどこで女を引つ掛けましたか？とか言い出した時は驚愕で固まつてしまい、思わず何故？と聞いてしまつたくらいだ。半分は女の勘との事だが、俺以上に理不尽だと思うんだ。

ちなみに、残りの半分は、いつもより手が綺麗すぎる、だつてさ。色々あつて汚れたんだ、つて言つたら、本当に汚れているので私達が洗つてあげます、とか、他の女の体液で汚いです、とか言われて2人に風呂へ連行され、それはもう入念に洗われました。言い訳を挟む余地もなかった。その上で2発ずつ搾られて大変だった。その後普通にローテーションだからな！

それでもまあ、他のみんなには黙つててくれた事は感謝するしか無いなあ・・・。

??

そんな日々を過ごしていたこの三カ月。

地味に他にも色々あったのだが、だいたい何か問題が起きる↓呉の人達とより仲良くなる↓俺が皆から性裁を受ける、のパターンが殆どなので割愛しておく。色々な人と絆を深めると怒られる拠点フェイズとか難易度がルナティック過ぎる!

そんな感じにいつも通りの俺たちと違って、意外と世間は結構な動きがあったらしく、こないだ出来たばかりのウチの傭兵団総出でがつり救助した劉備さんの所では、新たに马超さんとかいう方達が仲間になったらしい。马超って誰かな? お漏らしの人? 太眉ならそうだと思うんだけど。まあ涼州って書いてあるしたぶんそうだろう。にしてもどっから現れた? とか思ったら続きに理由が書いてあった。

よく分からんが白蓮の幽州を落として良馬を得た袁紹さんは、もつと良馬を得ようとそのまま涼州まで攻めたらしい。その結果として涼州に居た马超さん達は敗北し、何とか逃げてきたところを劉備さん達に保護されたようだ。それはいいんだが、袁紹さんの距離とか色々なアレをすつ飛ばした発想がルナティック過ぎる。

まるで理解できずに冗談だろうと思つた俺に、雛里が劉備さんからの手紙を何度も読んでくれたが、何度聞いてもちよつと俺には何言ってるか理解できなかつた。きつと今

頃まあちさんが辻褄合わせという名の事後処理で死に掛けているだろう。白蓮の件でしてやられたので同情はしてやらない。誤解です！って電波が流れたけど気にしない。

とりあえず劉備さんの所は急に人が増えてしまったので、将が増えるのはいい事だと思ふ。俺としてはそれぐらいだが、劉備さんにはそれどころじゃやないらしい。手紙には一刀くんが浮気しまくりで怨嗟を込めた愚痴が延々と書いてあり、長過ぎて読んでくれる雛里が舌を噛みまくりで痛そうだ。無理はしないでいいぞ、と言ったら後で傷跡舐めて慰めて下さい、とか言われたが、それは単なるデープキスだと思ふ。あ、それが狙いなのか？珍しく迂遠な手段とるね。何時もなら有無を言わさず寝室に連れてくのに。偶には恋物語みたいな事がしたい？この流れでキスする恋物語があるとは思えないんだが……。

さておき、件の馬超さん達は馬超さん、馬鉄さん、馬休さんという三姉妹と、馬岱さんという従姉妹を合わせて4人いるらしく、どの人も見目麗しい女性何だそうさ。劉備さんには悪いが、糜竺さんと糜芳さん姉妹といい、一刀くんは姉妹丼が好きだなあと思わずほっこりした。決して今頃劉備さんに怒られてるだろうとか考えてにやにやしたわけではない。

・ ・ ・ ー、にしても何か忘れてる気がするが、何かな？

まあ、大した事じゃないだろうし、良いか。どうせ前世知識との食い違いかなんかだろたぶん。

とにかく、劉備さんの所はそんな感じらしい。

そして華琳さんの所からも手紙で近況連絡があつた。最近では荀彧さんが真名を交換してから、結構頻繁に手紙を出してくれる様になり、こまめに連絡を取り合っている。無論俺の代わりに風が返信してるんだがな！

それはまあ何時ものことなので置いておき、それによると華琳さんの従姉妹の曹仁さんと曹洪さんという方々が新しく仲間になったのが最近一番のニュースだ。華琳さんの従姉妹だけあつて2人ともとても出来る人物らしく、特に曹洪さんは金勘定やらせたら右に出るものはいないほどとかで、既に金庫番とか言われているらしい。曹仁さんは ・ ・ ・ 春蘭と季衣ちゃんと仲が良いタイプらしく、その部分からは桂花の苦勞が見て取れる。風にお疲れ様です、と書き足して貰おう。え、既に書いてある？ 流石やん！

あと、桂花は手紙に秋蘭の近況も一緒に書いてくれてあるのだが、どうも秋蘭は愛紗

や星達とも個別に連絡を取っているらしく、俺と皆の夜事情がダダ漏れしていて、手紙が届く度に機嫌が悪くなるので自重しろ！という言葉とともに、秋蘭がどれくらい怒っているか、詳細に状況を書いてくれている。最近では道玄と札が貼られた人型の毎日剣山状態になるまで弓の鍛錬をしているらしい。こないだの手紙では、同じく道玄と書かれた札が貼られた巻藁を剣で毎日滅多斬りにしていたと書かれていた。本気で怖いので勘弁してくれマジで。

最後に必ずいつ帰ってくるのか？と書かれている手紙の返事を書いてくれている風を膝の上に乗せながら、地味に華琳さん達が完全に俺を自軍の将兵扱いしているのは気付かない振りをしよう。うん。え？追伸に傭兵団の旗が出来たから取りに來いって書いてある？・・・本当に必要？必要かあ。

・
・
・

さて、今日も今日とて是非弟子に！とやってくる何か勘違いした孫権さんをあの手この手（美味しい食べ物とかその辺。何時も孫権さんと一緒に甘寧さんがなんだかんだ一番食べる。）で誤魔化しつつ、なぜか俺が1人になった瞬間に現れるシュレインガーさん並みの雪蓮が、今日はちゃんと政務したわよ、とかお酒飲んで無いわ、とか品行方正っぷりをアピールしながら何かを求めて来たりとか、冥琳が最近真面目な雪蓮に驚き過ぎて偽物かも知れないとか相談してきたりとか、程普さんという以前街で見かけたナイスおっぱいな熟女さんと仲良くなったら凄いい顔の祭がワシのじゃ！と乱入してきたりとか、シヤオと流琉と鈴々と音々を連れてピクニック行ってお父さんは幸せ気分を味わっていたら唐突に幼女軍師2人が愛紗を連れて（生き別れの父親と母親その娘達設定）乱入したりとか、色々あったけど、とりあえずたつた今それどころじゃ無くなった。

どうやら、とうとうあのチョコ無しコロネ（つまり無価値）が華琳さんのところへ出陣したようだ。

知らせを持って来たのは周泰さんらしい。それを受けた冥琳が主立った連中を全員集めて軍議を開き、何故か傭兵の俺たちまで呼ばれた。正直俺たち居ていいのか、と思っただが、ウチの軍師組が優秀過ぎて居ないと回らないくらい機密を知りつつある上

に、武将組は孫策含めて全員が敵わない恋や俺を筆頭に一騎当千の猛者ばかり過ぎて、誰からも文句が上がらなかつた。

というか文句を言いだした一部豪族は孫権さんを暗殺しようとした裏切り者と言うこともあり、さつくり孫策が首を切つた（実は俺が報告してただぜ！）。これから行う大事の前に、囀るだけの無能は要らないとか何とか。カツコつけたならその後物陰で要求してくんなと正直俺は思った。誰の血でも血は血？知るか馬鹿！

そんなこんなで肅清から始まった軍議では、どうも袁紹さんにひつついて袁術さん達も動くらしい（と言っても袁紹さんに協力する訳ではなく、漁夫の利狙いっぽい）という事が分かつた。この袁術さんというのが孫堅さん亡き後の呉を庇護してくれた恩人であり、その恩と物理的な上位の権力を傘にやりたい放題で、無理無茶を呉に飲ませまくり、非常に様々な恨みが籠もる大悪人であるとか何とか。見た目は、というか中身も非常にお馬鹿で幼女な袁術さんは正直我儘なだけだと思うが、張勳さん？とかいう天然系悪人と組み合わせると悪辣暴虐の大暴君になるらしい。それ反董卓軍結成の時の月の蔑称じゃね？そつから来てたのか。

で、その袁術さんの支配を抜け出して、孫堅さんがいた頃のような、呉の独立をさせるのが孫策の、ひいては呉の民全ての悲願なんだってさ。

それでまあよく分かんが、とにかくその袁術さん達が動くのに合わせて、命令された仕事サボって反逆しちゃおうぜ!的な作戦らしい。詳しい話は聞き流してたから分からん。後で軍師組に聞こう。今は話に飽きてうとうとし始めた鈴々と、最初は気合い入って私も頑張る! って言ってたのに同じくうとうとし始めるシヤオを膝に乗せてあやすので忙しい。まあさつきまでお腹いっぱいおやつ食べてたからね。この地域はあつたかいし仕方ないね。周りの呉の将とかが凄い顔で見てるけど無視だ。鈴々という時の俺は親バカ蛮族なので、娘が最優先なのだ。

と、思ってたなら聞き逃せない話が出て来た。どうにも劉備さんと曹操さんが同盟したらしい。ちよつと予想外の動きだが、反董卓連合に参加しなかったあたりからもはや予想外しか起きてないので気にしない。将が全てウチに集まっている分、確かに数もある程度揃ってないと勝てないよなー、とも思わなくもない。

俺らは前回の取り引きで袁紹さんや曹操さん両方に敵対出来ないから、今残っている

陣營で言えば袁術さんとか戦えない。こつから先の戦はだいたい見てるだけになりそうやな。とか考えてて気付いた。・・・あれ？なんかまた忘れてるな。

何だっけか？今回はなんか凄い大事な事を忘れてるような・・・？

何だろう、そもそも何かアレな問題がある気がする。なんだ？少し前にもこんな感じの悩みがあつたような・・・。

こういう時は整理だ。まず曹操軍と袁紹軍が戦つて・・・うん？劉備さんと曹操さんが・・・？うん？早速引つかつたぞ？なんだなんだ？えーと・・・。

・・・あれっ？そもそもなんで袁紹さんはいきなり華琳さんに向かつてるんだ？まず劉備さんじゃなかつたっけ？ていうか涼州攻めるの華琳さんじゃなかつたか？

んん？そーいえば2次創作では劉備さんが攻められて、みんなで逃げて華琳さんに愛紗を要求されたりするんだつたような・・・？何故？あいや、反董卓連合参加してないからか。劉備さんのところの兵がいきなり増えたの最近だし、それでも10万だ。現在50万くらいは余裕で出せるらしい袁紹さんなら、最近まで主立つた将も居なかつた劉備さんのところは、華琳さんを潰してからどうとでもできる、と見てもおかしくはな

いな。ていうか存在に気付いてない可能性が微レ存。田豊の話は聞かないらしいし。

これが大事な事か? . . . いや、違うな。もつと俺にとつて許せない何かがあつた気がする。いかなな、流石に前世知識を忘れて来てるなあ。なんだつけ。

「. . . つと、. . . てる?」

えーと、劉備さんが外に逃げて関羽さんかオリ主が要求されたり素通りを許可されたり . . . ? 劉表さんだか劉璋さんだかなんかそんな感じの誰かに助け求めたり国を乗っ取つたり? いや、違うな、圧政して民に嫌われたりもう逃げたりしてるから劉備さんが代わりに治めるんだつけ? いや、でもそこじゃない気がする . . . ?

「ね . . . ! ちよ . . . 、聞いて . . . ! !」

んん? 蜀であと足りない人は魏延と豪天砲とあとなんだつけ未亡人の . . . 黄忠さん? . . . ん?

ああつ! ちびっ子!!

そーいえば何か娘を人質に取られた未亡人が居た気がする！しかもそれ劉備さん達が逃げてからでないかと確か遭遇しない奴や！ヤバい、未亡人おっぱいも大事だが、恋姫におけるみんなの娘にして元祖天使が今も泣いてる可能性がある!? ヤバい、それはまずい！エロゲ世界である恋姫の中で唯一エロシーンがないという原作の良心が危険だ！ちびっ子が大人の身勝手で泣くのは良くない！助けに行かないと！よし、さっそく準備を、

ガキイン!!

「私のお話を、聞きなさいっ!!」

何か頭に軽い衝撃が来たな、と思ったら肩で息をする雪蓮が武器を抜いて立って居た。んん？何だよ危ないぞ、と言って気付く。何か皆俺を見ていた。

あれっ、どしたの？軍議しなよ。っていうか鈴々達が今の音で起きちゃっただろ。止めるよ大きな音出すの・・・え、さつきから呼び掛けてたのに反応しなかった？軍議を聞いていたか？あー、考え事してたわ。

「つまり？」

「聞き流した。」

がきん、と再び剣を叩きつけられる。斬るわよ、と雪蓮が額に青筋を浮かべて言った。もう斬ってるだろうよ。まあ斬れてないけど。というか気にしないで続けていいよ? 後で雛里か稟に分かりやすくしてもらってから聞くから。そう言ったら何か皆唾然としている。何故だろうか、と思つてたら冥琳と朱里が溜め息を吐きながら説明してくれた。

「道玄・・・聞いて理解できないわけではないのだから聞いてくれ。今雪蓮が結構一世一代の話をしてたぞ?」

ああ、それは聞いてた。あれだろ? 袁術さんの支配下から脱出するんだろ?

「はわわっ! そ、それはだいたい前に終わりました・・・。今は望む限りの対価を払うから、私達の傭兵団を正式に迎え入れたらって話をしたんですが・・・。」

俺が聞いてなかったと。あらやだ、そんな大事な話聞き流してごめんよ。だからこんな微妙な空気なのか。メンゴメンゴ。じゃあ今からやり直していいよ! 俺も今始まったばかりと思つて聞くから。さあどうぞ!

「やる訳ないでしょっ!・・・はあ。何か気が抜けちゃったわ。で、どうなの?」

ん？断るけど。

即断したら更に皆が唾然としてる。冥琳や祭がちよつと悲しそうだ。うちの女性陣だけはああやっぱり、とか言つて呆れ顔をする。特に愛紗は少しだけ理由を知ってるからか、言い方を考えてあげなさい、と軽く叱つてきた。そー言われてもなあ。

正直面倒です。頭をぼりぼりと掻きながら、どうしたものかと考えてみる。ふと、視線を下に向けると、いつになく鋭い目をした孫策が、おもむろに口を開いた。

「・・・一体何が不満なの？華琳も劉備も袁紹誰も彼も、貴方を求めたはず。きつと支払われる対価も、皆途轍もない対価を約束したでしょう？私達と同じように。

ずっと分からなかったのよ。

貴方は万夫不当、中華一と言われた武力を持つ呂布を含め、名だたる豪傑が束になつても敵わない程の力を持っている。尚且つ従える者達はその呂布を始め、皆が一騎当千の武將達か、神算鬼謀の軍師達ばかり・・・貴方の部下一人一人が、他で一国の大將軍、大軍師になつていてもなんら不思議はないわ。

貴方が旗を上げれば、何処よりも強力かつ絶対的な力を持った国が起きるでしょう。いえ、わざわざ起こさずとも何処だろうと簡単に奪い取れるはず。それが私達や曹操、

袁家だろうと例外ではないのは、もうみんな気付いているはず。そして知っているわ。今私達がこうしているのは、ある意味貴方の気まぐれみたいなものだって、ね。

にも関わらず、肝心の貴方は何もせずにはふらふらふらふら……。誰かに仕えるわけでもなく、自ら立つ気もない。富や名声にも興味は無く、それでいていつも必ず何処かの大きな勢力の懐にいる。

・・・正直に言つて不気味だわ。道玄、貴方は一体何がしたいの？何が欲しいの？」

台詞が長い。聞くのが面倒い。3行に纏める馬鹿。急に真面目な顔を始めた雪蓮にそう返して有耶無耶にしようとしてみたが、どうも雪蓮以外にも興味があるのか、全員が俺に注目している。ウチの女性陣さえもだ。この状況は正直だ。いぶ怠いので、どう誤魔化したものかと考える。

ううむ、何かうまいこと言おうと考えてみるが何も浮かばないので、さあ？特に何も。つて開き直つてみようとしたところで、愛紗が声を掛けてきた。

「何とか誤魔化そうとしているところ申し訳ありませんが、道玄。

正直、私達もそろそろ貴方が目指すものが何なのか知りたいです。私でさえ具体的な話は聞いていませんし。

・・・ああ、今更私達に特に何も無いとか、そういう嘘は通じませんよ?」

分かつているでしょう?と愛紗が言うと、星や風が当然のように頷いて、軍師組が口に出して当たり前です、と嘯く。どうやら他のみんなも同じらしい。三羽烏や流琉くらゐまでなら付き合いいからともかく、元董卓軍のみんなまで分かるの?あつ、真顔で頷かれた!・・・そんなに俺はわかりやすいだろうかと正直ちよつとへこむ。

「せやかて団長、實際何がしたいん?ウチとしては強い奴と戦つて酒が飲めればええから、今の状況に不満はないねんけど・・・。」

「ウチも絡繰弄りながら色々な場所いけるし、ご飯も美味しいし、にいさんも居るし特に文句無いけど、確かにこの根無し草を続ける理由は気になるなあ。」

「私は何があつても道玄様に着いて行くだけです、道玄様の目的が何であろうと構いませんが・・・まさか常に新しい女性を探しているだけではありませんよね?」

「流石にそれは無いと思いますが・・・というか、そんな目的なら今度こそ許しません。みんなで2度と閨から出さないようにします。」

「本当にそうなら風ちゃんも稟ちゃんも同意見ですが。流石にそれはないです。こ

ここに来たのだから呼ばれた、という以外にも目的があるみたいですからー。」

「そうだな。どうにも色々な女に手を出すのが早過ぎてそちらに目が行きがちだが、我が団長は語らないだけで何か大きな事を成そうとしているのは私でも分かる。」

「ちちうえが密かに恋殿と鍛錬してるの知ってるです!ねねの目を盗んで2人だけで行くです!ずるいのです!」

「そう言われてみれば確かに時々恋と主人を見かけ無い時がありますな……。いつもの抜け駆けかと思つてましたが。」

「道玄。それは私も初耳なんですけどどういう事でしょう。私との鍛錬はなんだかんだ理由をつけて断るのに、恋とはしてたと、そういう事ですか?」

おっと、いつの間にか俺の弾劾裁判になりかけてるぞ。とりあえず起きたちびっ子2人を下ろして愛紗を抱きしめておく。ついでに頭を撫でておけば愛紗はなんとかなる!近くに寄つて来た凧と星はどうにもならないけど。

凧と星が両耳を引っ張りだしたあたりで、孫権さんも寄つて来た。何か言いたげだったので師匠はやらんぞ!と先制したら、では貴方の望みを教えて下さい。もしくは私の夫になって下さい。とほざいた孫権さん。ファッ!?

「どちらを選んで頂いても構いません。望み聞ければそれを叶えて仕えて頂きますし、私の夫になっても同じです。」

こいついきなり何言つてやがる、と思つたら顔が真っ赤な上に、後ろの方で程普さんが声を殺して爆笑している。奴の差し金だな！奴め、こないだの仕返しのもりか!?!あんにやろ、部屋じゃ下着姿で酒飲んでる残念熟女の癖に！

「……道玄？」

ほら見ろ、腕の中でふにやふになつてた愛紗まで武器を持ちだした！甘寧さんも後ろから剣を突き付けている。あ、待つて冥琳、俺Mじゃないから鞭はやめて下さい。祭、顔、顔！怒りすぎだぞ！いくら何でも孫権さんに何かしたりする訳ないだろ！

「ほお。では何故粹怜の部屋着を知ってるのか、教えて貰えんかのう……？」

そつち?!……えーと。

「雪蓮、軍議は終了だ。私は用事が出来た。」

「雪蓮殿、儂もじや。心配するな、此奴の目的もついでに聞き出してこよう。」

「ちよつと2人とも、私も行くわよ！」

「雪蓮殿も……?主人、これはどういう事ですか？」

「そう言えば少し前に私達ではない女性の匂いをつけて来てましたね、道玄様？」

「ど・う・げ・ん……?これは色々余罪がありそうですね。流琉、貯蓄は？」

「一週間は問題ないです、愛紗さん。それよりも袁紹さん達の動き次第では期間が……。」
「大丈夫でしゅ!最低3日は余裕がましゅ!最悪交代で買い出しすれば私達に問題はありません!」

「となると、私達の方がマズイな。陸遜、呂蒙。程普殿と協力して準備を……おい、道玄。程普殿はともかく、陸遜のアレは何だ?」

ちよ、ちよつと待つて!俺を置き去りにしすぎやん!俺も急いでやらなければならぬことができたつてか、程普さんとは酒飲んだだけだし、陸遜さんに至つては本当に何も知らないです!あ、シャオ、君はあそこのひやわわつてる人と一緒に帰りなさい。なんでよ!とか言われても異論は認めない。

とにかく必死に弁明してみるがまるで収まらない。あ、男性武将の方々が唾吐いて部屋を出ていった。はじけろ!とか聞こえるけど待つて待つて、色々誤解ですよ!そ、孫権さん!みんなを抑えて下さい。甘寧さんも、つてあれ?……2人とも?

何か急に2人でここそし始めた孫権さんと甘寧さん。何だろう?ていうか話を有耶無耶にしてくれたのは嬉しいけどちよつとその後の收拾もつけて欲しいんですがそれは。

というか、袁術さんとの一世一代の戦いが待つてるだろ!こんなことしている場合

じゃねえ！と正論を唱えてみる。え、俺たちが居ればどうでもなる？うわあ、事実だけに反論できねえ。あ、待つて待つて！流石に昼間からはどうかと思うつてかそろそろこういうオチ何とかしたいと思うんだ！分かった、言います！ここに来た目的言います！！

「無理して言わないでいいぞ。身体で聞き出すから。」

め、冥琳!?目が据わってる!!いや、話します！話させて下さい！雪蓮の、孫策に関わる話なんや！

そう言うと、途端に周りが静まり返った。どういふことですか、と愛紗が不思議そうな顔で尋ねてくる。荒ぶりまくつてと冥琳や祭も、面白そうにしてた程普さんも、色々騒いでた雪蓮も、甘寧さんとこそそそしてた孫権さんも、ひやわわ軍師に連れられて行きそうだったシャオも、急に集まって来た。うーむ、正直突拍子もない話だから言わなかったんだが……。

「兄さま自身が突拍子もない存在じゃないですか。今更ですよ。」

グフツ、る、流琉……?お兄ちゃんちよつと流石に傷付くんですがそれは、あ、怒つ

てるのね。ごめんなさい。

さて、皆の注目を集めておいて何だが、流石に曹操さんが攻めて来たら呉側の差し金で、魏兵の一部が暴走して孫策が毒で暗殺される、とまで具体的な事はなんぼなんでも言える訳がないので、少し内容を考える。しかし考えても上手い言い訳思いつかないので、一刀くんのせいにしておく事にした。

ほら、あれだよ天の御遣いの一刀くん。彼によると、天の歴史ではこの時期に袁紹と曹操が戦い、次に曹操が呉に攻めてくる。そしてその時孫策が暗殺されるらしい。

誰がどんな理由で、つてのは諸説あり過ぎてわからないらしいし、彼の知る歴史と今が違い過ぎて、実際に起きるかどうかも分からないとは言つてたが、とりあえず可能性があるつて話だったから来たんだ。要するに念の為です。

とはいえ、一応警戒して雪蓮の食事やら何やらに毒とか混ぜられない様に毎日ウチで飯食わせたり、冥琳に頼んで雪蓮の酒の隠し場所とか教えてもらったり、必ず誰かしらが雪蓮の側にある様にウチの武将組をそれとなく使つて訓練場に縛り付けたり、雪蓮がよく行く酒家の人らに話通したりして常に行動を把握したりしてたんだが・・・ぶっちゃけどちらかと言うと孫権さんの方が狙われてたな。賊退治しに行つて外で敵に囲まれるのは良くあつたが、地味に甘寧さんが孫権さんの命令で離れた時とか、兵士に紛れた刺客が良く天幕に侵入しようとしてたりとか・・・つて、あれ?どしたの皆。せつかく

真面目に話したんだから聞きなよ。

何故か皆が唾然とした顔をするので文句を言ってみる。個人的にはこのまま性裁が有耶無耶になれば良いのだが、その為にはちゃんとこつちの話を聞いてもらわねばならない。嫉妬した愛紗とか問答無用だからな。

すると恐る恐る、という様な顔で冥琳が俺の名を呼ぶ。なんぞ？

「あの・・・道玄？まさか、この3ヶ月ずっと雪蓮を護つてくれていたのか？」

「?いや、違うが。」

どちらかと言えば孫三姉妹全員だ。あと一応冥琳も見てたな。て言うかそうでなければシャオをわざわざ賊退治に連れて行くかよ、俺達がいるとは言え、戦場だぞ?正直に言えば孫権さん達が賊退治で雪蓮と離れた時はどうしようか悩んだものだ。戦闘狂じゃなかったら大変だった。まあ何も言わずともシャオが付いて来てくれたのが一番助かったけど。

そう言ったら今度こそ皆が絶句した。あれ、呉の皆はともかくお前らは本当に分からなかったの?それとなく指示は出してただろ。鈴々は好きだけ遊べ、としか言っていないが、霞や華雄、星には訓練場でとにかく冥琳が来るまで雪蓮抑えておけって言って

あつた筈だ。恋には冥琳が来たならそれとなく付いて行く様に頼んでおいたし。まあ毎回雪蓮を捉える為におやつもらつてたみたいだけど。

「軍師組はとにかく全員で動けつて言つてあつたら? サポート兼護衛の為に白蓮には剣をもたせてあつた訳だし。まあ流石に城に直接はこないと思つたから、だいぶ警備そのものは軽めになつてはいるけど、地味に周泰さんや祭に兵の数やら護衛やらを数人増やして貰つてはいるし。何より毎日全員にもたせてる水筒のお茶は華佗に聞いて作つた若干の解毒効果を持つものだし。」

「あれそういう意味だったのか!？」

「わ、私でつきり俺の女に何かあつたら許さねえぞ! つて事だと思つてました!」

「孫策と鍛錬してより強くなれつて意味では無かつたのか・・。」

「はわわ、道理でちよつと苦いお茶だと思ひました!」

「あわわ、甘いお菓子に合わせて苦めなのかと思つてました!」

「となると、毎回お菓子を持たせてくれたのも・・。」

「はえー、おにーさん本当に色々考えてたんですねえ!」

おいお前ら。

少しは自分で考えようぜー? 特に軍師組は分かっているもんだとてつきり・・。詠は

分かつてたのに。お前らさつき孫策の言つてた神算鬼謀つてやつ今度から自分で訂正しろよ。

そう言つたら無茶苦茶怒られた。何故だ！

そんな事してたらようやく意識が復活し始めた呉の方々。何か色々質問されたので、適当に返していると、唐突に雪蓮がこんなことを聞いて来た。

「ねえ道玄、私達をずっと護つてくれたのは分かったけど、何で誰にも言わなかったの？理由は突拍子もないからつてわかるけど、それにしたつて貴方一人でやるよりは良いんじゃない？」

「確かにな。確かに天の御遣いの知識、というあやふやなものが根拠とはいえ、国に関わる一大事だ。暗殺そのものは今に始まつた問題ではないから、私達がきちんと話を聞いたかは分からないが……。」

「それでも、何も言わないのは流石にちよつと。他に何か理由があるのか道玄？」

・・・あー。そこに気付きやがるか。まあ理由は無くは無いが……。

厄介な勘だな相変わらず、と思ひながらちよつと言ひ悩む。ここまで来たら話しなさい、とうちの女性陣にも言われるが、んー、どうしようかな。正直、もうほぼ終わつてゐるから蒸し返したくないというか、知らなくても問題ないと言うか。ちらつと孫権さ

んやシャオを見る。雪蓮は大丈夫だろうけど2人にはなあ。

そうやって悩んでいたら、何かを察してしまったらしい孫権さんが、ハツとした顔で、私達の為ですか、と言った。甘寧さんが隣ではてな顔している。ううむ、そこで気付いちやうかー、孫権さんも雪蓮の妹だね、本当に。

「何よ蓮華、何か分かったの?」

「姉様……。もしかしたら羌毅殿は、私達が気に病むと思つて何も言わなかったのではないのでしょうか。」

どういふことかしら、と言いかけて、雪蓮も何かに気づいてしまったらしい……。ハツとしてこちらを見る。まさか、と一言呟いて、彼女は言つた。

「まさか、私を暗殺しようとしていたのつて……。孫静おば様なの? 一月前に、急に体調が悪化したつて言つて兵や領地をこちらに預けて隠居した。」

あちやー。やはりバレるかー。だから何も言わずにちよこちよこやつてたんだがなあ。

はあ、とため息を吐く。それと同時に孫策の発言に異を唱えていた程普さんや祭、冥琳までもが察してしまつたらしい。ちなみに孫静さんが誰かよく分かつてないうちの女性陣のほとんどはポカンとしている。鈴々が誰なのだ? って無邪気に聞いてくる。

ああ、うちの娘はどんな時でもかわいいなあ。

孫静さんってのは俺もこっちに来て初めて知った存在で、孫策達にとつては孫堅さん……つまり孫策達のお母さんの姉妹に当たる人らしい。詳しくは俺も知らないが、ちよいちよい孫権さんやシャオから昔話を聞いてよく出てくるから、かなり仲良かった人らしいと言うことは分かつてる。冥琳も雪蓮達と一緒に世話になってたと聞いたな。まあ、俺自身は全部で3回しか会ってないが、それなりに孫策達に似ていると思うよ。孫権さんより大人しそうな人だったが。

ふと見るとシャオが嘘だ、と泣きそうになっている。まあそりやそうだ。信じていた人が自分や自分の姉を殺そうとしてました、何て言われて信じられる訳もない。ましてやマセていてもシャオは子供だ。

とりあえずひやわわしてる姿と別人の様にキリつとしてる軍師さんからシャオを受け取って抱き上げる。頭を撫でながらリラックスさせて、振り向くと、険しい眼をした雪蓮が、何故?と聞いて来た。

「お前達では孫堅殿は越えられない、だそうだ。」

「……そう。」

まあ、俺としては見ているものが違い過ぎるので当たり前だと思ふし、何よりそれが理由なら何故きちんと孫策と話さなかったのかとか、何でそれで孫策を殺せば済むと思つたのかとか、突っ込みどころ多過ぎだったし、正直色々自分勝手過ぎたので同情はしないでご退場してもらつた。本人も失敗した時点で色々諦めたみたいだし、比較的穏便に決着したよ。

そう言つたら、孫権さんがどうして彼女の理想より今の私達を選んだのか、と聞いてきた。隣で雪蓮も妙な顔をしている。いやあ、質問の意味がわからんね。

「だって、孫静おば様はあのお母様の事を良く知つているし！そのお母様と比べて私達が駄目だと言うならそれは……！」

何を言いだすかと思えば……やれやれだぜ。思いつきり溜め息ついて呆れ顔してやると、予想外だったのかたじろぐ雪蓮と孫権さん。冥琳もちよつと驚いているが、無視して祭の方を向く。

おい祭、お前も孫堅殿の時代から仕える宿将じゃなかったか？そのお前が信じて仕えてるこいつらはお前の事は信じてないみたいだぞ？というか、城でほとんど見かけなかった孫静さんの方が、何時も城で頑張つてた程普さん達よりも信じてるらしいぞ。ど
んだけ信用ないんだ？

「ぬう、そう言われると胸にくるものがあるのう。」
「確かに。私達つてそんなに嫌われてたのかしら。」

2人がそう言うのと慌て始める桃色2人。そんなつもりじゃ、とか言うので、この2人は孫堅さんとお前らを比べて尚、ここにいる訳だが、2人の信頼では足りないんだろ？孫静さんじゃなきやダメなんだよなー？と言つたら意味が分かつたらしい。ハツと2人を見る雪蓮と孫権さん。

ついでに言うておくと、俺は孫堅さんを知らないけど、とりあえず居ない人よりはいる人の方がいいと思うし、2人とも言うか誰も孫堅さんにはなれないんだから、君らはそれぞれの理想を目指したらええんでない？

少なくとも、誰かに悪口言われたくらいで諦めてたら、孫堅さんに並ぶ事はおろか、超えるのは一生無理だろ。というか、お前らまだ孫堅さんが死んだ歳ににさえなつてないじゃん。もう自分の成長終わつた気でいたの？ウケるー！

そう言うて最後に煽つておくと、雪蓮は何ですつて！と怒り出し、孫権さんは苦笑い。とりあえず元気出たみたいだし、まあいいや。頑張つてなりたい王になりなよ。その時臣下も民も元気で笑顔だつたらお前達の勝ちだよきつと。そんでお母さんに胸張つて

報告したら良いき。

何か納得したみたいなので、話は終わりだ、とやや一方的に話を切って背を向ける。いつの間にかシャオが寝ちやつたので、そのまま抱えて行く。あんまりシリアスはガラじゃないのだ。部屋から出ようとしたところで愛紗と星が飛びついてきた。やれやれ、仕方ない2人だ。では帰ろうか。

「そうですね。上手く皆を誤魔化せたみたいですしね。」

「もちろん我らを除いてですがな、主人？」

ビクツと身体が反応してしまった! しまった、リカバリー!

な、ナンノコトカナ?

「惚けても無駄ですぞ、我が主人。そもそも今のは呉にきた理由であつてどこにも仕えない理由では無いですし。」

「というか、私達が怒っているのは道玄の浮気が原因です。貴方の大好きな暗躍は関係ないので、誤魔化される筈もないです。」

その言葉を聞いて冥琳や祭がハツとなる。あああ！折角上手く誤魔化したのに！パシツと勢い良く俺の首に鞭が絡まる。あぶなっ！シャオいるの忘れてないよね！？」

「心配するな。今なら目を瞑っていても外さない自信がある。」
「流石じやの。危うく逃すところじやったわ。」

そう言いながら祭と冥琳が心臓弱い人なら死にそうなレベルの殺気を振りまきながら、ゆっくりと近付いてくる。逃げようにも両腕にしがみつくと2人がいるし、いつの間にか扉の前に風と霞が陣取っている。か、囲まれた！

ちよ、ちよつと皆落ち着こうぜ！色々誤解なんやでほんま！実際程普さんとは本当に酒飲んだだけだし、そりゃ雪蓮とはちよつと可哀想だったから少しだけ相手したけど、誓って最後までしてないし！

「あら、私は別に貴方になら襲われても良かったわよ？」

ふふ、と笑いながらほざくヤツ！キサマツ、粋恰!!まだお前の誘いを袖にした事怒っているのか！どう考えても祭が羨ましい、とかの理由で俺がオーケー出すと思つたお前が馬鹿だらう！

「あんなの口実に決まつてるじゃない。祭や冥琳がいいなら私も良いでしょう？」

馬鹿！良いわけないだろ！なあ祭？

「う、うむ。そう言う理由なら仕方ないな。儂は許しても良いぞ。」

「騙されちゃダメよ、祭！だって今こいつ普通に粹悴って言ったもの！いつ交換したのよー！」

「・・・道玄？本当に色々私に黙ってやっていたようですね？」

ま、真名の交換くらい良くないですか？一応雇用者側と雇われた側だし、ほら、顔を覚えられるって大事じゃん？え、交渉役を全て軍師組に投げたのは俺？・・・えっと、团长らしいことたまにはしなきゃと思つて。駄目？

「駄目です。・・・これは、3日だと少し短いですね。仕方ないな・・・星？」

「そうだな愛紗。全く、流星は我が主人・・・最終手段を使いましょう。白蓮殿、穩殿、蓮華殿、思春殿！」

え。なにそれ。すげー嫌な予感がある。4人の顔が赤い!?ちよ、ちよつとまで星!?まさか4人を混ぜる気じゃないだろな!?!だ、駄目だぞ!100歩譲つて白蓮は良いけど、孫権さんや甘寧さん陸遜さんは駄目だ!雪蓮みたいに僅かでも関係があつたりすればともかく、まだまだ未来がある人達だぞ!ていうかまだ真名も知らない程度の間柄だし

！断固として断る！

「蓮華です。改めてよろしく願います。」

「・・・思春だ。蓮華様を泣かせたら許さんぞ。」

「穏といえます。あんな本を読ませておいてお預け何て酷いですよ？」

馬鹿っ！お前らもう本当馬鹿っ！とって付けたように真名を預けるんじゃない！

もつと自分を大事にしろよ！ていうか陸遜さんに至つては料理のレシピ本ですけど！？

「まあまあ我が主人、とにかく真名の交換が済んでいれば問題ありますまい。・・・きつ

かけさえあれば3人とも交換する気はあつたようですし。」

「道玄、貴方いつの間に蓮華や思春まで・・・？まさか、私が一番最後とか言わないわよ

ね？」

誤解だ馬鹿野郎！そもそも俺にもよくわからないのだぞ。それにシヤオに手を出す筈

がないわ！星、どうやって3人を騙したのか知らんが、未経験者を巻き込むな！白蓮

は・・・うん。毎回覗きにくるくらいだから、うん。

「あつ！お前今哀れんだな！？散々人の誘惑袖にしといて、あんな声毎晩聞かせておい

て・・・！」

「白蓮、落ち着け。その気持ちは聞でぶつけるんだ。」

愛紗がフオローに回った!?・・・どういう事だ。そう言えばさつきもこの状況を理解

していたような発言をした。あの愛紗が?自分で冥琳達に許可してやっぱり嫌だつて泣きついてくるほどの愛紗が?な、何が起きているっ!?

「ふふふ、こんな事もあるうかと、腑が煮え繰り返りそうな嫉妬を我慢して、それぞれ協力者を増やしておいたのですよ・・・!彼女達はある意味経験者なので、問題はありませんで、我が主人。」

あん?どういう意味だ。そう聞くと、星は協力者には自慢の濁り酒をご馳走している、と言った。なんじゃそら、と言いかけて気付く。おい、星・・・お前、その酒何処に隠し持ってる?俺の記憶が確かなら俺の袋の中には入れてなかつた筈だ。馬車にある酒に濁り酒は無い!あれは比較的に腐りやすいからな!

「ふふふ・・・漸くお気付きですか。そう、濁り酒とは隠喩であつて酒では無いのですよ。確かに苦くて美味くて癖になる味ですが、匂いはむしろイカのような・・・ここにたくさん詰まっている、私の自慢の濁り酒です。」

華琳殿にも好評でした、と俺の逸物を摩りながら艶やかに笑う星。同時に俺の顔から一気に血の気が引いていく。

まさか、あの時の華琳さんが言つてたのは料理のことじゃなく・・・?いや、それを

言うならあの時の白蓮は、既に巻き込まれて？

「ふふ……ついでに言うなら、あの時風邪と言つて帰つた蓮華殿達の顔が赤かつたのは、風邪のせいではありません。」

「更に言えば、春蘭や桂花が怒つて居たのは照れ隠しになりますね。」

?!

馬鹿な、と思わず振り向く。孫権さんと甘寧さんが顔を赤くしながらモジモジしている。ガチだった。嘘だろ、その話の通りなら華琳さん達も……!?
な、何故だ!? 愛紗や凧がこんなこと許す筈が、冥琳や祭だつて!

「もちろん嬉しくはありませんが……正直、貴方に好意を抱いた時点で、時間の問題です。」

「ご安心ください道玄様。嫉妬心が無くなった訳ではありません。むしろ、余計に煮えたぎっています。」

「儂等はそのそもそも横恋慕になるしの、文句を言える立場ではないのでな。……納得は出来んから、お主にその分は要求するぞ。」

「私としても許しがたいが、呉としてはお前を縛る鎖が増えるのは良いことなのでな。もちろん、責任は道玄にとつてもらおうが。」

なあああ!?

こ、これはまずい、流石に3日でもこの数はヤバい。と言うか孫権さん達はもつと自分を大事にしなよ!甘寧さんなんていつも孫権さんに近付くなつて怒つてたじゃん!

「蓮華、ですよ道玄殿……。」心配なく。私達はこの日を待つて居ましたから。」

「ふん……そういう事だ。覚悟してもらおうぞ。」

言葉が無い。絶句した俺の腕をポン、と叩く手。振り向くと凄いいい笑顔の程普さんが、にこやかにそういう訳だから、と言った。

いや待てお前は駄目だろつて待つてアツー!

……問答無用で搾り尽くされた!

続く！

4 2 話 あっさりだろうとこつてりだろうと山盛り食えば飽きる。それがらーめん。

やあみんな、最近出会った頃みたいに皆が誤魔化されてくれなくて辛いオーク系転生者の俺だよ！

酷い目にあつた。

こう言うのもう何回目だろうか。最初の頃色々我慢しながら愛紗達と旅していた時代が遠い昔のように感じる。あの頃はまだ星がただの残念な処女だったのに、今やどうしようもない変態痴女や。

とうるか毎度毎度どうして寝てる俺に悪戯しようって話に乗る奴がいるんだ。俺だぞ？ 忘れがちだけど見た目獅子目言彦系蛮族の俺だぞ！ 今まで言及するの忘れてたけど、虎牢関で史上最強シリーズを失つてから、服装まで獅子目言彦みたいになってきて殆ど完全な蛮族の俺だぞ。一刀くんならともかく。

華琳さん達はまだ分かる。最悪悪ふざけだったとしても、華琳さんがやれって言えばなんだかんだ言いながら桂花も春蘭も参加するだろう。だが、そんな、じゃない蓮華や思春、穩は何故だ。程普みたいに妬みや欲求不満じゃないだろ？ましてや白蓮みたいな理由でも無いはずだ。

理解できなかったたのでそう聞いてみたら、最初は純粋なそういう行為への興味とか、知的好奇心とか、酔った勢いとか：まあ、殆ど悪ノリみたいなものだったらしい。一応冥琳や雪蓮の俺を何とか誘惑して取り込んじゃおうぜ計画（本当にあつたのかそれ）のこともあつたようだが、話を聞く限りはオマケ程度の要素だ。

それが星に唆されて、実際にやってみたり飲んでみたりしたら、止められなくなつた？病みつきになつた？身体が疼く？・・・何それ俺の体液麻薬成分でも入つてんの？改めて自分の身体が未知の機能を持っているということを知つた。正直我が事ながら戦慄を禁じ得ない。まさか変なフェロモンとか出てたりしないよね？

兎にも角にも、またしても流されて更にたくさんの人と関係をもつてしまった。今回は作戦の都合上、2日程で済んだ（参加者が増え過ぎて軍の編成や準備に時間が掛かり

そうだったの、一日短縮されました。セーフ！)ので、比較的穩便に終わったが、初体験の4人の為に長く時間が取れたからの奇跡でもある。真面目に気を付けないと俺が死ぬ。いや、女性陣の殆どが戦国の世に生きる武将だからか、割と簡単にスピードアップ理論を実践できるんだ。故に1人1人に時間を掛けて逃げ切るのも難しい。

ちなみにスピードアップ理論の正式名称は心体速度加速理論って言って、いつだったか軍師組が考案したものだ。物理的に速度を無茶苦茶上げて、同時に脳の認識処理速度もあげれば早く、かつ、たくさん出来るじゃない！って言うどう考えてもニューロリンカー無しで加速世界には入って言うてるような頭膿んどしか思えない理論だ。ぶっちゃけ不可能だと思ってたんだが、言い出しつぺの軍師組の一部を除いて全員出来た。俺も何故か出来た。出来てしまった。この世界はもう駄目かも分からんね。

しかしそんな無茶な事を一日中してたので、何だかまた何かを忘れてしまった気がするが、思い出せない。大事な事だった気がするんだけどなあ。

まあ、とりあえず今は行軍中だというのに、完全に幌を閉じた馬車の中で襲ってきている蓮華と思春のお相手を真面目にしなれば。早く終わらせないと後がつつかえてくる。2人とも真面目なタイプだからハマってしまっただけからは酷いんだ。おまけに仲

が良いから、どつちかがきたらもう片方も必ずくる。おかげで愛紗が嫉妬して夜あんなに寝かせてくれないのだ。正直これから戦だと言うのに寝不足で辛い。

だから蓮華と思春が終わつたら一旦終了じゃダメかな、皆。流石にこれ以上はキツイんですが。というかもう寝かせてください。昨日どころか行軍始まつてからずっとなんです。

「・・・駄目。」

「駄目じゃ。」

「駄目だな。」

「駄目です。」

「駄目よ。」

「駄目ね。」

中で順番待ちしてる恋や冥琳達どころか、馬車を動かしてる詠や月にまで拒否された。何でや！どう考えてもこの状態はあかんやろ！俺呉を出発してからずっと太陽見てないんだけど！って言うか雪蓮や祭は軍ちゃんと率いてこいよ！何でここにいるんだよ！

「大丈夫よ。ちゃんと貴方の団員に任せてきたから。」

「そうじゃ。だから早うせい。」

何でもないように、ていうか当然のように言う2人。全く悪びれない姿に冥琳が呆れているが、お前もだからな? ……ん? ていうか今うちの団員って言わなかつた!?

…誰に任せた? 華雄か? 霞か? 真桜? それとも沙和? 鈴々? まさかと思うが…。「愛紗と星よ。大丈夫、流石にうちの将も付けたから!」

「うむ、霞と華雄には左右の部隊を任せておるから、儂等の中央と最前衛を愛紗達任せたのじゃ。あの2人なら信用出来るからのう。ああ、凧達はそれぞれ軍師達に付けておいたぞ。」

…えつ。その配置まさか俺の所に行く為とは言つてないよね? あ、言つたの? …ハハツ、俺終了のお知らせ。よりよつて1番嫉妬深い3人にバレとる。

これはもう駄目だ、と落ち込んでいると急に視界が遮られた。柔らかい感触。この感触は思春だな。胸に抱きしめられているのは分かるが息がしにくい。幸せな感触だけど。「いい加減にしろ。今は私と蓮華様だ…んつ。」

「その通りよ、道玄。余所見なんて…酷いわよ。」

どうやら2人を怒らせてしまったらしい。肌を重ねてからだいぶ口調が砕けてきた蓮華と、同じく態度がやたら軟化した思春の2人に激しく責める様に求められる。正直な話色々それぞれじゃないのだが、どちらにしてももう手遅れなのは確かだ。仕方

ない、こうなりやヤケだ、全力出してさきつと終わらせてやる！

この後めちやくちや床上手無双した！やり過ぎて普通に声が漏れて、愛紗達の容赦が完全にゼロになったよ！序でに兵達の士気がダダ下がりした！

??

呉を出発してから一週間が過ぎた。

途中袁術さんの一部部隊（僅か200。）が援護という名目で合流したが、全員騎馬のくせにやたらと軽装な明らかに監視部隊だった。たぶん何かあったら助けるのではなく袁術さんの所か、近くの斥候部隊に駆け込む為の人員なのだろう。まず人数からしてふざけ過ぎであるし。こちらから周りに密偵を放つて斥候部隊がない事が分かると、雪蓮が指示してさつきり殺された。

その時一部馬も殺されているのだが、勿体無いので殺した馬は全部もらってお肉にした。相変わらず白蓮がちよつとゴネたが、より力を込めて俺と流琉が作った渾身の料理を出したら沈黙した。呉のみんなにも好評で、ウチの食事に参加したことのなかった呂

蒙さんが、馬を見る目が変わりそうです、と驚愕しながら美味しいと言ってくれて個人的には流琉と2人でガッツポーズしたくらい嬉しかったのだが、ウチの持ち馬達に何時もより怯えられてしまった。何故か俺だけ。理不尽だ。

そのまま本来攻めなければならぬルートを無視して、袁術さんの一部部隊が通つて来たであろう道を進み、漸く袁術さんの布陣する砦に到着した。何でこんな所に、と思つたら、どうもここは元々袁紹さんの持つていた砦らしく、わざわざ今回の隙をついて奪つたものだそう。ここに布陣することでもちようど袁紹さんと華琳さん達の戦場の真横に出れるらしい。ここ一番で横から殴りつけて、漁夫の利を搔つ攫う目的なのだろう。

うーむ、少佐があの子、やれば出来る子だったのじゃあないか、とか言いそうな狙いである。是非蝶のように舞い、蜂のように死ぬ！と言つて欲しい所だ。正直俺は割と嫌いじゃないが、雪蓮達やウチの女性陣はそういうやり方は嫌いらしい。まあ、雪蓮達もそうだが、ウチの女性陣は殆どが豪傑と呼ばれるほどの人物であり、気高い精神を持っている。仕方ないな。理解を示してくれる真桜とだけ死んだら終わりやんなー？と仲良く話しておく。

さて、流石に相手も仲良く話しをしに来たわけではない事に気付いているだろう。呉の皆さんやる気満々だし。案の定城壁の上に兵が集まり始めた。それに合わせて雪蓮が号令を出し、冥琳が各部隊に伝令を飛ばして、こちらも陣形を作る。

やがて双方に牙門旗が立ち上がり、雪蓮が冥琳と祭を伴って前へと進み渡る。向こうの城門に並ぶ旗には、当然の如く袁の文字と、嚴と黄の……んん？誰だ？

そう思うと同時、門の上に3人の女性が……ってあああー！思い出した！

「何の用だ孫伯符!!お前が向かうべき戦場はここじゃないぞー!」

「悪いけど火急の用があるの。袁術様の下へ通してもらえないかしらー!」

通してくれないなら押し通るわよ!などと敵将と言いつつ雪蓮を尻目に、俺は門の上の3人の武将に目を奪われていた。

1人は銀の髪を肩まで伸ばし、たわわな胸と細い腕には不釣り合いな巨大な拳銃にこれまた巨大な刃を付けたような銃剣?もはや砲剣擬きを携える女性。

1人は黒髪に一房の白髪が混じり、勝気な瞳と元気な声。そしてこれまた細い腕には腕には巨大かつ無骨な鋼鉄の鈍器を持つ少女。

そしてもう一人は、鮮やかな薄紫色の長い髪と、これまたたわわな胸を持ち、瞳に悲壮な決意と覚悟を秘めた、白く美麗な長弓を持つ女性！

・・・どう見ても敵顔、魏延、黄忠の3人です。本当にありがとうございます。

ああああああ!! ヤバいやバいやバいやバいや!! 完全に、完ツツツ全に忘れてた! 何でここにあの3人が居るとかそういうのはもういいけど、ちびつ子! 璃々ちゃんのは事はヤバい、洒落にならん! 何たる失態!!

い、急いで助けないと・・・いや、待てよ? もしかしたらここに居るといふことは、別に人質とかそういう訳ではないのかも知れない。ホラ、劉備さんとか反董卓連合参加しないとカバタフライエフェクト激し過ぎたし、ここにその影響がある可能性も・・・!

僅かながらの期待を込めてもう一度黄忠さんを見る。明らかに悲しそうな顔をしながら、決意を固めた顔で、雪蓮の降伏勧告を退ける黄忠さん。

「どんな理由があろうと、私は貴女方を通すことは出来ません。」

そう言つて矢を放つ黄忠さん。矢は雪蓮の爪先ギリギリに突き刺さる。当然狙つたのだろう黄蓋さん並みの腕前だ。流石だな、と思うと同時に、同姓同名かつ見た目が

そっくりさんの別人、という可能性が完全に消えてしまった。あんな腕前の武将のそっくりさんがそこらへんにいてたまるか。というかあの発言と顔が完全に嫌な予感を掻き立てる。

仕方ない、まずは確認だ！それ次第で今からでも公式天使を助けないと！

「ちよ、ちよつとアンター！どこ行くのよ？あんたの出番はもうちよつと先よ!？」
「少し急用が出来た。」

馬車を安全な所まで下げて、万が一何かあったら逃げろ、と流琉、月、詠の3人に指示し、念の為三羽鳥を呼び戻し、護衛に付ける。馬車が下がったのを確認し、そのまま舌戦中の雪蓮達の下へ歩いて行く。

俺が動き出したのを見て、蓮華達の部隊や愛紗達が僅かに動揺したのに気付いたが、今は完全に無視だ。ザツザツザツと、少し早歩きで雪蓮達の下へ辿り着く。俺が来たことに気付いた門の上の3人や兵達が怪訝な顔をし、雪蓮達が驚いて固まった。

「ちよつと道玄、出てくるのが早すぎるわよ。」

「珍しいな。どうかしたのか？」

「何にせよ、今舌戦中じゃ。後にしてくれぬか、道玄？」

俺が来た予定外の行動をした事を怒らず、軽く咎める程度にしてくれる3人の優しさに感謝しつつ、更に予定外な事を今からするので申し訳なくも思う。とりあえずまずは謝っておこう。

すまん。ちよつと急用が出来た。今から少し出てくる。

「はあっ!?!ちよ、ちよつとどういう事よ!」

気にするな、野暮用だ。確認して問題なければすぐ戻る。ただちよつと開戦は待つてくれ。ああでも出来れば袁術さん達が逃げられない様に包囲しておいてくれると助かる。見て分かると思うがああ髪の長い弓使いは祭並みの腕だ。距離は十分にとれよ。

「おい、どういう事じゃ道玄、ちゃんと説明せんか!」

「そうだぞ道玄。流石に急にそんな事言われても困る・・・って待て!」

どう説明しても許可は貰えなさそうだし、そもそもちびつ子が捕まっている確証も無いので、無視して走り出す。後ろからああー!とか待ちなさい!とか聞こえるが振り返らない。絶対後で怒られるけど、泣いてるかもしれないちびつ子が優先だ。後がめつ

ちや怖いけど！

走りながら全身の色がうつすら変わる程度に超弱変身。更に気を練って圧縮しながら、全身に行き渡らせる。

どうも彼女達は俺を知らないらしい。1人で向かってくる俺を不思議そうに見てく
るが、1人では何も出来ないと思っているのか、何も妨害は来なかった。袁術さんの軍
なら知ってる奴もいるだろうが、自軍の兵を温存するつもりなのか、見える所には居な
い。

好都合なので気にせず突っ込み、門の前で両足揃えて踏み込む。一瞬だけ両足の筋肉
が膨れ上がり、それが元に戻る瞬間には俺の身体は黄忠さん達3人が居る城壁の上に跳
び上がっていた。

このくらいならエリア移動式レーザージャンプは必要ない。そして今回はちよつ
と用があるのでまだ門は壊せない。壊すと門が破られたと勘違いして袁術さん達が逃
げちやうからな。まだ包囲が完成してないし、それは不味い。

驚愕を通り越して呆気にとられる3人を見下ろしながら、落ちる。思いつきり着地し
て門を粉碎することもできるが、今回は優しく着地しようと、地面についた瞬間の衝撃
をしゃがみこむ様に両手両足をつけて関節をクッションにして吸収する。ちやうど真

ん中に居た魏延さんの目の前に着地した。

それと同時にコメカミに矢が直撃。黄忠さんだ。もう正気に戻ったらしい。狙いも流石だな、と思いつながら、カン、と軽い音を立てて矢が弾かれる。おっと、弾かれた矢が魏延さんに当たりそう。キャッチキャッチ。

「!?」

黄忠さんの驚愕が聞こえると同時に頭に大きな金棒が振り下ろされる。魏延さんだ。直撃し、鈍く大きな音が立つが無視して身体ごと頭を持ち上げる。当然無傷だ。個人的にはふわっふわの食パンで叩かれたらこんな感じかな、くらいの衝撃である。あり得ない、という顔の魏延さんを無視して、黄忠さんの方を向く。

「どけえ、魏延!!」

同時に敵顔さんがその巨大な銃剣で後ろから斬りかかってくるが、効くわけもないので振り向かない。案の定高い音を立てて弾かれる。

「?!ーっ、ならこれでどうだっ!」

ドゴンツツツ!!

轟音と同時に衝撃が背中に叩きつけられる。流星はロマン兵器パイルバンカー、一撃

の重さなら恋より少し弱いくらいだな。が、こんなこともあろうかと背中に血液を集めて元祖闘気硬化してある。なので、当然それも無傷だ。

「なんだとっ!?!」

流石に無傷とは思わなかったらしい。敵顔さんが今度こそ驚愕で硬直した。

それを無視してあえて何事も無かったかのようにゆっくり一歩前に出る。このままでは話ができないので黄忠さんの目と目を合わせて、あえて威圧しながらとりあえず降伏を勧める。

今ので分かったと思うが、お前達の攻撃は俺に通じない。つまりお前達に勝ち目はないぞ。降伏しないか？

華琳さんさえ息を呑み、動けなくなる俺の威圧だ。今の一瞬の攻防についていけなかった一般兵たちは当然息を飲んで固まり、全身から力が抜けたかの様に尻餅をついた。敵顔さんや魏延さんも戦力差を感じ取ったらしく、冷や汗をかいて大きく後ずさる。

「・・・ツツツ!!」

しかしそれだけの圧力の中で、歯をくいしばって矢を手取る黄忠さん。どう見ても

決死の覚悟を固めた顔である。小さな声で、ごめんね、と誰かに謝ったのが聞こえた。

ひゆう、と風が吹き、それによって運ばれた彼女の匂いを、俺の鼻が捉えて感情を読み取る。そこにあるのはやはり悲しみと、後悔と・・・強い覚悟。

うーわ、完全にちびっ子が人質フラグ。マジで大失態だな俺。っていうかバタフライエフェクト仕事しろ！こういう時こそ働け！なんで毎度毎度事態を悪化させる時だけ仕事するんだ！たまには良い方に転がしてみろ！

そう考へてはみたが、今更言つても仕方がない。彼女が俺が知つてる通りに娘を人質にされているなら、とりあえずまだ生きているはずだ。死んでいたら人質にならないし。まあ殺しておいて、生きていると嘘をつく場合もあるが、その時は下手人と関与したものをすべてを消し去つてやろう。

問題はどこにいるかだよな。この砦に入ればいいが、最悪別の街に捕らえられている可能性もあるんだよなあ・・・。

はあ、とため息をついて、砦を見渡す。いきなり視線どころか身体ごと逸らした俺に驚愕する黄忠さん達だが、まあ無視だ。うーむ、どつかにそれらしい場所ないかな。地下とかだとしたら探すのが大変過ぎるし、勘弁して欲しいが、それよりも他の街にいる

方が厄介か、と思い直して余計に落ち込む。またしてもため息が漏れる。

やれやれ、正直これは大分面倒なことになったぞ。そう思いつつも目を凝らして砦内部を見下ろす。背後から今だ！とか、余所見とは良い度胸だ！とかのセリフと共に轟音が鳴り、身体に衝撃が奔るが、まあ特に問題は無いので無視だ。下の方から雪蓮がやるなら真面目にやりなさいよ！とか言ってる気がするが、今の俺は大真面目なので違う人に言ってるに違いない。

むむむ、あの正面の本丸みたいな所には恐らく袁術さん達がいるとして、ちびっ子はどこだろなー。ていうかあの子真名以外は何て名前なのか。真名は神聖なものなので、心の中でも勝手に呼ぶのは憚られるのだ。

まるで止まる事なくガンガンドゴンツツツカンと音がするが、これが俺の身体からつてんだからどうかしている。きつと恋敵の主人公を機械で脳波弄つて無理矢理ハルクにした拳句、好きな女の前でロケツトランチャー撃つて始末しようとしたら生身の身体にロケラン弾かれて自滅した彼も同じことを思つた事だろう。

「ハッ、ハッ……ッ！なんだこいつは！どうなっている？魏延の鈍砕骨も、儂の豪天砲も生身で弾くとは……本当に人間か？」

うーん、どうしよう。本当に一から探さなきゃ駄目かな。ちよつと手間がかかり過ぎるし、もう少し楽な方法無いかない。あー、場所とか分かる様に千里眼とか使えたら良かったんだがな。せめて匂いが分かればな。いやいや、よく考えたら、幼女の匂いを嗅がせて下さいとか言えねえわ。むしろ言ったら事案不可避。出来ても却下だな。

ん？あれっ。

良く考えたらどうせ袁術さん達抑えなきゃだし、袁術さん達がここのボスな訳だし、砦内のこととか一番把握してるのも多分張勳さんだし……袁術さんと張勳さん捕まえればちびっ子の位置もわかるんじゃないやね？

……おおっ！我ながら意外と良いアイディア！これはイケる！

そうと決まれば早速、そう考えて振り返る。すると丁度目の前に黒い塊が降ってきたので、思わず腕を振ってしまった。ガシユ、と軽い音を立てて、降ってきた黒い塊――

魏延さんの何とか骨が消し飛んだ。

「ええっ!?!わ、私の鈍砕骨が!?!」

あ、いけね。ついうっかり反撃してしまった。ゴメンゴメン。まあ、勢いあり過ぎて逆に武器だけ壊せたからいっか。身体に当たってたら魏延さんミンチよりひでえ!になつてたけど、もう少し弱ければそれはそれで武器が砕けず衝撃を丸ごと受け取った魏延さんの体は武器ごとこの高い城壁から紐なしバンジーしてたしな。結果的に良かっただろう多分。

何か流石に青い顔をして下がる魏延さん。あれ、この人あたいたらサイキョーね!的なキャラじゃなかったっけ?元氣ないなー。んー、華雄だっけかそれ?何かちよつと意外だわ。とりあえず今、何かしたか?と素知らぬ顔で言つて誤魔化す。あ、魏延さん達が更に後ろにあとずさつた。

つていうか黄忠さん達がちびっ子の居場所とか知らないかしら。いや、待てよ?普通に聞いたとして・・・?

お前の娘はどこだ?↓わ、私の娘が狙い!?!何が何でも殺さなきや!

「……うん。まあ普通にこーなるよな。ましてや今の俺はほぼ完全な蛮族。どうしよう、なんか非常に声をかけにくい。前世で道に迷ってベビーカーを押す若いお母さんに道を尋ねたいけど声掛けられなかった事を思い出す。」

「……貴様、黙ってればどういふ事だ。何故攻撃してこない？馬鹿にしておるのか！」
3人を無視して悩んでいたら敵顔さんに怒られた。失敬失敬、何も害がないから忘れてた。そう言ったら口惜しそうな顔をする敵顔さん達。あ、やべ、うっかり本音が。ごめんよ3人も。

無意識に3人の武将としてのプライドを傷つけてしまった。反省しなきゃ！でも今はそれどころじゃないので、後にしよう。と言うかもうめんどくさい。疑われてもちびっ子ちゃんと連れてきたら問題あるまい。ついでに袁術さん達も拾ってこよう。うむ、それがいいな！きつと雪蓮達も喜ぶだろうたぶん。よっし黄忠さん！
「……何故、私の名を？」

知らん勘だろたぶん。それよりちびっ子は何処に囚われてんの？さきつと助けに行くから教えろ。分かんないならいいよ、諦めて一から探すから。

そう言うのと、黄忠さんの気丈な顔が一瞬で真っ青になった。な、何故それを……!?と明らかに怯え始めた。ああ、やっぱり誤解されてる雰囲気。敵顔さんは知らない？ああ魏延さんにまで凄腕睨まれた。なるほど、3人がここにいるのはちびっ子が原因なの

ね。そう言うのと余計に強硬な態度になった。完全に信用されてない感じ。当たり前だけども。

埒があかないのももういいや、張勳さんの所に聞きに行こう。そう判断し、足だけ部分変身、さあ跳ぶぞー！と言うところで、何か黄忠さん達の名前を叫ぶおっさんが遠くに登場。何か袁紹さんとかが戦場で乗ってる神輿みたいなアレを大分小さくした一人用？みたいなものに乗ってる。何アレお父さん？もしくは旦那さん？完全に場違いだけど。格好が文官だし。

って聞いたたら凄い勢いで敵顔さんに怒られた。全然違うらしい。じゃあ誰かな、と思ったたら早く俺を倒せ、とか儂の顔に泥を塗るつもりかー、とか叫び出した。ああこれはアカンですわ。昨今の腐った官僚的なアレですわ。つまり面倒な上司か、と思いつつも、袁術さん、おっさん、黄忠さんの式を頭の中でメモを取る。まあいいや、無視して袁術さんの所へ・・・

「きさまあつ！早くその男を倒さんと、娘がどうなつても知らんぞー！」

・・・ほお？

その言葉に遅れて後ろから齒軋りが聞こえてくる。なるほど、アレが主犯か。これは

ラッキーだ、向こうから馬鹿がこのこやつてきた。

おもむろに城壁の淵に立つ。成り行きを見守る事しか出来なかつた兵達が怪訝な顔をする。無視して、倒れる様に宙に身を投げた。

「!?」

息を飲む音が、聞こえた。

僅かな時間、体が落ちて行く。直ぐに壁面を足の指で捉え、壁面に垂直に立つ様な状態になる。間髪入れずにしゃがんで足に力を込め、直ぐに解き放った。

ドンツツ!

その間僅か一秒ほど。ちよつと強く蹴り過ぎただろうか。足場の城壁から大きな音がしたのを聞いた。しかし、それを耳が捉えたのは、俺が地面に足をつけてからだつた。

「ぐぎゃつ」

ザツ、と強く風を斬るような音とともに、御輿から地面に落ちたおっさんの口から短

く豚のような悲鳴が漏れる。無視しておっさんの首を掴み、猫の首を持つようにそのまま顔の目の前まで連れてくる。おい、娘は何処だ？早よ答えろ。わざわざ喋れるように優しく掴んでいるうちにな。

「……えっ？……はっ？い、いやあれ？」

おっさんが答えない。どうにも今の状況が分からず混乱しているらしい。愚図が、無能過ぎるな。下を見ろ。

「……？っひいいぎゃああー！」

死体くらいでいちいち叫ぶなよ。この時代じゃ珍しくもないだろ。ちよつと俺が王の元に向かうピトーさんみたいな超垂直壁ジャンプしてその勢いでお前の神輿担いだ兵を殺したただけだ。あん？さっきまであそこにいた？馬鹿か、跳んできただろ。単純にお前の目で追えないくらい速度が出てただけだ。

漸く絶対絶命の状況を理解したらしいおっさんが暴れながら儂を誰だと思ってる！とか誰か早くこの男を殺せ、とか喚く。黙れ、質問してるのは俺だ。娘は何処だ？

「ぶるぎいっ！ばなせっ、はなざんかつ！儂を誰だと……ギヤアアア!!」

あんまりにもうるさいので暴れる腕を片方握り潰す。忘れがちだが今の俺は鬨気術と超弱変身により極限ラージャン3.5体分だ。天上天下の過去編に出てきたシスコンにいちちゃんよりも圧倒的な力を持つ俺の握力は、簡単に腕を握り潰し、はみ出た手首

から先が枯れ枝が折れる様な軽い音とともに落ちた。

喚くおっさんの首を軽く締め、質問しているのは俺だ、と再度状況を理解させてやると、漸く理解したのか、ひゅーひゅーと荒い呼吸を呼吸をしながら目で了解を伝えて来た。おっさんの下半身から色々な匂いがするが、無視してもう一度聞く。娘は何処だ？

すると怯えながら、無事な方の手で場所を指す。どうやら先ほど俺が袁術さん達がいる場所と判断した所にいるらしい。場所は？と聞くと、地下牢と震えながら答えるおっさん。なるほど……。

その方向を見ると目の前には震えながら槍を構える兵達。装備的に恐らく厳顔さんの兵だろう。その少し先に広がる、大勢の袁術さんの兵達。なんか頭おかしい奴だ！とか聞こえた。ちらりと見ると、階段を駆け下りて、こちらに向かってくる黄忠さん達。ふむ、厳顔さんの兵を無闇に殺すのは勿体無いな。震えながらも俺の前で槍を構えていられる精鋭だ。

もう用は無いのでおっさんを投げ捨てる。少し強く投げてしまった。壁に人体が激突した音と、短く汚い悲鳴が聞こえたが、普通にどうでも良いので聞き流す。壁にシミができてしまった事は後で謝ろう。兵達が悍ましいものを見た顔をしている。まあ汚

いよねそのシミ。

とりあえずちびっ子の下へ行かねば、とそのままぐつと脚に力を込めて再度跳躍し、ちよつと邪魔な袁術軍をシカトして本丸つぽい大きな建物に向かう。といつても勢い余つて崩してしまつたらちびっ子が死んでしまう。久しぶりに飛鳥文化アタックしようと思つたけど自重しておき、素直に穏やかに降りる為、着地の瞬間に風を受けて勢いを軽く殺し、四点式ラーಜャン着地!!

「あ、頭のおかしいやつがくるぞおー!」

「退け、退けえー!!」

ダンツ、と周囲に強めの震動が伝わる。あんまり穏やかじゃなかつたてへペろ。ギリギリ兵は踏み潰してないが、震動で動けないらしい兵達に向かつて着地と同時にバインド・ボイス!! さあ、恐怖するがいい!

「グルアアアアツツ!!」

案の定、うわあああ!と恐慌を起こす兵達。蜘蛛の子を散らした様に逃げ去つていく。やつといつて何だが別にバインドボイスをする必要は無かつた気もする。まあ失礼

な事言つてたから仕返して事で！てかどうでもいいけど戦わなくていいのか君ら。あつ、威圧で気絶した兵が踏まれてる！可哀想に・・・俺のせいだけど許してくれ。そして追撃は面倒いので逃げていく兵は無視して城に向かう。といつてもわざわざ目の前に跳んだので直ぐそこだ。中々大きな扉に直ぐ辿り着く。

結構大きな扉つぽいところを引つ張つたら、ガギャ、という音と共に扉ごと外れてしまった。しまった引き戸か。後ろから違う、そうじゃない！とか叫び声が聞こえたが誰かがやらかしたんだらう。俺はこの砦に知り合いはいない筈ので俺のことではないのは間違いないな。

とりあえず中に入って気付いた。俺地下牢の場所知らねえや。おっさん連れてくれば良かった。まあ血まみれのおっさんちびっ子に見せるのもアレか。いいやもう後はノリで何とかなるでしよ！

よっし、待ってろよちびっ子ー！健康オーク系蛮族のおいちゃんは今助けにいくでえー！

この後めちやくちや迷子になった！



「ぐえええ、ひつく．．．ごわ、がっだよ、おお．．．」

何とかちびつ子は見つかった。

しかも本当にこの暗い地下牢に1人だけで放り込まれた上に、兵たちに殴られたらしい、頬が腫れている。食事などの最低限の対応はあった様だが、こんなちびつ子が暗い地下牢に1人だけで過ごすというだけでも辛い筈なのに、看守は大人の男で、暴力を振るわれたんだ。相当怖かった筈である。

とりあえずロリコンの変態だけは居なかったらしい。不幸中の幸いという奴だ。全然良くないが、まだマシとだけ思っておく。

助けに来た瞬間、とても怯えていた。まあいきなりこんな見知らぬ蛮族がやって来たら怖いだろう。敵か味方かも分からないんだから当然だ。怯えるこの子に助けに来た、と言つても信じてもらえなくても何ら不思議ではない。

それなのに、助けに来た、と言っただけでこの子は泣きながらこちらに寄つて来た。見ず知らずの人間の言葉を疑う気力もないくらい、不安で苦しかったのだろう。

ギリ、と思わず歯を噛みしめる。

俺は何をしていた。この子が泣いている時、俺は何をしていた！

元々誰かを救いたい、という気持ちを見知らぬ誰かにまで向けられるような立派な人格は持っていない。

世界平和などどうでもいいし、世界中で次々に誰かを襲う不幸をいちいち気にしてたら生きてはいけない。

この子の事もそうだ。あるいは、俺が子の存在を覚えていたとしても。この薄れて来た知識がもつとちゃんとしていて、彼女達のいる街を知っていたとしても。

それでも、俺がいる事で変わってしまったこの世界で、ここにいる事は知らなかっただろうし、ある意味ではだからこそ擦れ違わずここで助けられたのかもしれない。

だが、それでも俺はこの子が泣くかも知れない事を知っていた。

怒りが溢れ出てくる。己への怒りだった。何よりも今、俺は自分が許せない。胸に抱くこの子が今泣いているのは、俺のせいだ。

ざわ、と金色の髪が泣き疲れて眠ってしまったこの子の体を覆う。そのまま髪の毛をこの子の身体に巻き、左腕でしっかりと抱える。完全変身時の俺の髪は特別製だから、これだけ巻けば流れ矢どころか豪天砲でも通らないだろうが、改めてこれ以上の苦しみを与えないと誓う。

身体が怒りに反応してどんどん変化していく。手当たり次第に全てを破壊したくなる。激情が身体を駆け巡り、バケモノに変わっていく身体。薄暗い地下牢がどんどんくつきりと見える様になっていく。

そんな怒りを、抑えこむ。

視界に角が映る。無造作に掴んでへし折った。転生して始めて感じる激痛が奔った。これは俺自身への怒りだ。他者に向けていいものではない。ましてや俺の腕の中で眠るこの子が怯えるといけない。戒めよ、と魂に刻む。

血が流れて直ぐ止まり、痛みがどんどん引いていく。それどころか角まで再生しているらしい。この身体で傷を負ったのは初めてだから知らなかったが、どうにも再生力も尋常じゃ無かったようだ。くだらん発見だな、と思いながら、意志の力で無理矢理先ほ

どの状態、超弱変身まで抑えこむ。ただ、髪の毛だけはこの子を守るのに必要なので、超部分変身で髪の毛を維持する。

胸の中で眠る幼子の瞳から、残った涙が流れた。もう大丈夫、と安心させたくて、優しく指で涙を拭い、頭を撫でる。少しだけ笑った気がする。

そんな微かな微笑みに笑顔を返し、振り返る。大量の兵がいた。外の兵は軽く威嚇したら逃げていったが、流石に城の中の警護を行う連中は練度が違う様だ。冷や汗をかきながらも剣を構えた。結構やるな、と内心ほめておく。きつと華琳さんでさえ褒めただろう。

だが、そんな事はどうでもいい。

「この子を殴った奴は、この中にいるか？」

俺が地下牢に来た時、兵はどこにも居なかった。俺が内部に侵入した時追いかけられたから、その時にここからも向かったのだろう。つまり、この子を殴った奴がこの中にいるはずだった。

この子が泣いたのは俺のせいだが、それでもこんな小さな子に手を挙げた馬鹿を許す

つもりはなかった。俺は子供好きなのだ。父親でも教師でもそれと似たような関係でも無い人間が殴つたのだ。俺ルールでは極刑である。

兵たちは答えない。知らないから答えられないのかもしれないが、それはそれでどうでもいい。決死の覚悟を決めたらしい兵たちに、忠告だけしておく。

「そうか。ならば区別はしてやらん。

．．．．．死ね。」

あまり激しく動くのはこの子に良くない。空いている右腕だけ部分変身。少し強めに薙ぎ払う。

ズガアンツツツ！

それだけだった。

それだけで発生した膨大な風圧と衝撃の塊は、目の前に並んだ精鋭達を全て飲み込ん

で、それでも止まらず地下牢から城の入り口までを容易く吹き飛ばしその勢いで城近くにいた総勢千程度の兵が巻き込まれて全滅した。

そして気付いた。

あ、外の確認忘れてた。

・
・
・
・
・
・
あつ。

・
・

やっべ、これ俺やらかした？

理不尽な怒りに任せての一撃だったが、右腕だけとは言え完全変身の攻撃は威力があり過ぎた。やっちまった、と急速に怒りが引いていくのを感じる。

黄忠さんとか巻き込まれてないと良いけど。そんな事を考えながら脱出する。いや迷って走り回ってたから分からなかったけど、どうも地下牢って位置的に城の真ん中付近にあつたみたいなんだよね。

城の中央部の地下から半分くらいがごっそり無くなったらどうなる？分かりにくい方はジエンガの一番下三本のうち端から二本抜いたイメージしてくれ。

・・・うん、つまり崩れるんだ。

にいーげるんだよおー!!しながらダツシユする。いや城が崩れてきたくらいで俺も俺の腕の中のこの子も死ぬことはないが、確実に目は覚める。そして防護服代わりに巻いた俺の髪で身動き出来ない事に気付いて痴漢呼ばわりされるだろう。

幼女に痴漢呼ばわりされたら俺は死ぬ。社会的に死ぬ。

だから全力・・・は、周りを粉碎してしまふので優しく、一歩一歩を大股で、跳ねる様に走りながら、崩れた足下は砕きながら踏み込んでいく。

そうして漸く外に出たところで上から叫び声が聞こえる。どうやら崩れる城の窓から飛び出てしまったらしい子達を発見。僅か2人なのでジャンプしてキャッチする。片腕埋まっているので大変だが、俺の腕は身長に見合う以上に長いので女の子2人くらい余裕だ。跳びながら舌を噛まない様に指示をする。まあ出来るかは分からないが、と思つたら大きい女の子の方は出来そうだな。金髪なちびっ子は・・・ってこれ袁術さんだ。てことはこつちのもう1人は張勳さんか。なんか色々予定と違うけどまあ結果オーライかな。

口を閉じれなそうな袁術さんの方は胸に押し付けて顎を固定する。一際大きな壁片が落ちてきたのでそれを足場に更に跳んだ。

一気に城より遥かに高い上空へと跳び上がる。張勳さんたちが凄いい声なき絶叫してゐる気がするが無視。ちびつ子はこんな状況でも寝てるみたいなのでまあ良いとしよう。眼下では城が崩れて兵達が全力で逃げている。まあそんなに巻き込まないだろうしきつと大丈夫。俺が吹き飛ばした奴らはどつちみち城が崩れたら死んでたからセーフセーフ。まあ俺がやらなきゃそもそも城が崩れることはなかったんだが。

ふと見ると、黄忠さんらしき人が嚴顔さんや魏延さんに羽交い締めにされてる。なんか城に向かおうとしてるみたいだ。あ、つまり目的はこの子か。ちようど良いからそっちに向かおう。

体勢を変えて、風の受け方を調整し、落ちる場所を黄忠さんたちの目の前になるように微調整。城が崩れ落ちると同時に黄忠さんが膝から崩れ落ちた。イカンイカン、これは完全に誤解してるな。はよ連れて行こう。・・・って、あつ。

おい、周りの人達ー！そこにいると踏み潰すからどいてー！

ギョツとした顔で上を向き、走り出す兵達。

「「ふざけんなあつ!!」」

なんか一斉に文句を言われたが、俺は大真面目なので問題ない。むしろこの状況でふざけているやつとか最低だと思います! とりあえず気にせず着地!! でもちびっ子いるから優しめに!

ダガン、と石畳を粉碎して着地。腕の中のちびっ子には衝撃が伝わらないよう工夫したので問題ない。まあ空中で捕まえた2人はグエツつて乙女が言っちゃいけないようなアレが漏れてたけど怪我とかは無いから大丈夫大丈夫。

「ひ、酷い目にあつたのじゃ・・・七乃く。」

「お嬢さまあ〜! 私達奇跡的に生きてますよお!」

うんうん、仲良きことは良き事かな! でも逃げちや駄目だよ? 逃げたらああなるからねー。

まあ実際やらんけど、牽制の為に崩れた城を指差しておく。2人は寧ろ自分達を助け

たのが敵だと漸く理解したらしい。一瞬ポカンとした顔を浮かべたが、すぐに周りに助けを求めようとして声を上げ……そうになって固まる張勳さん。そのまま真っ青になって震えだした。

「な、七乃? どうしたのじゃ? 寒いのかや?」

「おおお嬢さまっ、ぜ、絶対に暴れちゃ駄目ですよっ! こ、こ、ここの人には逆らっちゃ駄目です! 良いですかっ!」

凄じい剣幕の張勳さん。よく分からないみたいだが。とりあえず頷いて口を抑える袁術さん。あらやだ意外と素直で可愛い!

どうも張勳さんは黄巾討伐戦とか反董卓連合の時とかの俺を覚えているみたいだ。頭おかしいので絶対に相手を怒らせないでください、と小さな声で袁術さんに教えている。失礼な、俺はちびっ子には優しいぞまじで。

とりあえずお馬鹿可愛い袁術さんの頭を撫でて、2人にべっこう飴を渡す。静かにしてたら食べていいよ、と言っておく。コクコク必死に頷いたので良しとしよう。

2人はこれで良いとして、黄忠さんだな。

未だ全身の力が無くなったかのようにへたり込む黄忠さんの前までゆつくり歩いていく。何故か俺が一步近付く度に兵たちが一步ずつ後退つて行く。モーセか俺は。

まあ好都合なので、そのまま黄忠さんの前まで辿り着く……ところで敵顔さんと魏延さんが立ちふさがった。険しい顔付きだが、どこか死を覚悟した目をしている。通さない、と2人の全身が物語っていた。

しかし、掠れた声が2人を止めた。黄忠さんだ。

「2人とも……、もういいわ。」

「!?」

2人が同時に振り向く。そこにはふらふらしながらゆつくりと立ち上がる黄忠さんの姿が。なんか明らかに生きるのに疲れちゃった顔をしている。あらやだ美人はこんな状態でも美人ですね。

俺がくだらない事を考えている間に、3人の間で何を言うか黄忠!とか、諦めちゃ駄目です!3人で力を合わせればきつと!とか、もういいの……もういいのよ。とか、なんか凄いラスボスに主人公無しで戦った仲間達みたいなやりとりしてる。つてことはラスボス俺か。じゃあこの後主人公が来て逆転されちゃう前に用事を済ませよう。

「……もういいか？」

「ツ！……くそつ。」

「……ええ、もう大丈夫よ。」

悪態を吐く敵顔さんが悔しそうな顔をして俯き、疲れた顔の黄忠さんが一步前にでる。魏延さんが絶望した顔をしている。では、と言ったところで黄忠さんから待ったがかかる。なんぞ？

「お願いが、あります。……兵や、この2人は私の為に協力してくれただけです。どうか、責は全て私一人に……。」

知るか。そういうのは責任者に言え。俺に言われても困る。もう無いな？じやあはいこれ。今ちよつと気を失つてるけど命に別状は無いから。てか寝てるだけだから。

そう言つて髪の部分変身を解く。ズア、と髪の毛の色が失われていき、同時に縮んで元の長さとは戻った。すると中からちびっ子が現れた。すやすやと眠っている。いくら精神的にも体力的にも疲れていたとはいえ、結構色々あったんだが……凄いい子だなあ、と思いつつ両手で持つて幼女を黄忠さんははおやに手渡す。

「残念です……つて、えつ？」

「きさまあ！……つて、えつ？」

「黄忠様っ！……つて、ええっ？」

「「「「「「……えっ？」」」」」」

ん？どした？あれ、もしかしてお母さん違いだった？匂い似てるしそうだと思っただけ。……あれ、もしかして俺本当にやつちやつた？もしかして他の人子供?!ちよ、ちよつとそれはヤバイ！本当のお母さん！どこだー！

「い、いえ！ちがいま、そうじゃなくて！……えつと、とにかく私の娘です！間違つてないです!!」

なんだ、驚かせんなよ。ここに来て記憶違い起こしたかと思つたじゃないか。まあ合つてるならいいや。じゃあこれはいい、塗り薬な。打ち身に効くから腫れてる頬とかに塗つてあげてくれ。あ、効果は高いがちよつとスースーして子供には辛いかも。我慢させてやつてくれ。で、これが栄養剤な。粉末で苦いからこっちの梅シロップ：つて言つても分からないか。梅を砂糖で漬けると出来る汁がこの中に入っている。そのままだと甘過ぎるから水で3倍に割つて、食後にでも栄養剤と一緒に飲ませてやつてくれ。これ単体で飲ませてでも疲労回復と喉の痛みに効く。ただ、さつきも言つたように元が甘過ぎるから、きつちり水で割らないと太つたり虫歯になつたりするから気をつけろよ。あ

あ、それとそのちびっ子なんだが、地下牢に捕まっていて、更に中で兵達に殴られたみたいだ。殴った理由は分からんが、下手人らしき奴らはたぶんさつき大体俺が殺しちやつたので復讐は難しいかもしれない。そんな訳なのでしばらく大人の男や兵隊、暗がりや怖がるかもしれないから、面倒がらずに一緒に居てやるんだぞ。ああそうだ、これはおまけな。はいべっこう飴。このくらいの子はだいたい甘いもの好きだし、喜んでくれると思う。たくさんあるからお母さんも食べていいが、子供の分が無くなるまで食べるんじゃないぞ。あとこれな替え「ちよ、ちよつと待たんか!!」何だよもう。時間ないから手短かにね!

「す、すまん。．．．ではないわっ! きさまっ、何が目的だ!」

それはもう終わった。今はただのアタワーケア中だ。それだけか? いやあこれ念の為予備の塗り薬と栄養剤な。後は．．．え、何? 訳がわからない? ああ、アタワーケアとか言われても困るか。面倒だな、何がわからないって? 目的? だからもう終わったって。そこですやすや眠ってるちびっ子を助けに来ただけだよ。後は?」

「あ、あの．．．貴方は、私達と戦争しに来たのでは．．．?」

そうだけど? でもまだ始まってないから戦う必要ないじゃん。俺は傭兵だから、仕事が始まればちゃんと戦うけど、始まってないからまだ戦う必要はないだろ? だからまだ

別に敵じゃないぞ、俺。まあ味方とは言えないが、現状敵ではないのは間違つてないはず？

「えつ。じゃ、じゃあ何故一人で戦いを挑んで来たんだ！」

・・・？なんか魏延さんが不思議な事を言い出した。戦いなんて挑んだか俺？

「一人でいきなり乗り込んで来ただろ！門を飛び越えて！」

ああ！ちびつ子捕まつてたらマズイなと思つて侵入した時な！ちよつと話を聞きに来たらいきなり攻撃されたつけ。あれ？でも俺反撃はしてないはずだけど。うっかり武器壊しちゃつたけどあれは事故だよ事故。その証拠に魏延さん無傷だし。まあ話聞いてくれなさそうだったから降伏を勧めはしたけども。交渉しようとしたらそれさえも通らなかつたからさー。

「えゝつつ、そ、それつてつまり・・・？」

まあ君らの早とちり？かなー。あ、安心して。紛らわしい行動した自覚もあるし、結局俺に怪我は無いいし、おまけに娘さんが人質に取られてたら冷静な判断はできないよね！気にして無いよ！

「・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・。」

「わ、私達の決死の覚悟は一体・・・!?」

それは、ほら・・・お疲れ様?

そう言ったら巖顔さん達どころか周囲の兵が全員へたり込んだ。スマンスマン、お騒がせしました。まあ君らも勘違いした訳だし、おあいこつて事で一つのんます。

あ、尚うつかり吹き飛ばしちゃった兵とか城とかおっさんとかは謝らない。ちびっ子に手をあげる人間はみんな死んだら良いと思うよ!何なら袁術軍今から残りを滅ぼしてもいいと思ってる!

そう言ったら物凄い勢いで袁術さん達と兵が震えだした。安心してくれ、本気だぜ?

まあこれ以上長居しても仕方ないか。じゃあ俺帰るけど、うつかり拾った2人は連れて行きます。実質大将が居なくなるけど兵はまだまだいるみたいだし降伏とかするのも思い切つて戦うのも好きにしたらいと思っよう!戦う場合は今度はちゃんとやるから安心してね!

そう言ったら何か皆凄く絶望した顔する。あちこちであんな反則や！チーターや！みたいな会話が聞こえるけど、俺はそんな反則じみた極限ラージャンを何度も1人で倒したし、きつとやってやれない事はないと思うんだ。まあ俺がラージャン1人で倒せるようになるまで何回死んだかわからないけど。

とりあえずそろそろ帰らないと怒られるので、袁術さんと張勳さんを拾い上げる。ん？どつたの袁術さん。ああ、飴気に入った？よしよし、いい子にしてたから大きいのをあげよう。喉に詰まったら大変だから、ゆっくり舐めるんだよ？いいね。

「わかったのじゃー！」

「ああ、たかが飴で簡単に懐柔されるなんてお嬢様ったら流石ですうっ！」

袁術さんは本当に可愛いなー。と思いつつながら優しく抱えあげる。流石にこれからどこに行くか理解してららしい張勳さんは青い顔をしながら明るく振舞っている。よしよし、と頭を撫でて、羌毅さん式ナデナデを発動っ！相手はリラーツクス！強制的に落ち着かせる。まあ悲しいけどこれ、戦争なのよね。そう嘯いて張勳さんも抱えあげて。さて、行こうか。

全身の色がうつつすら変わる。今回は帰るだけだし闘気術は要らないだろう。2人に

しがみ付く様に言つて、歩きだしたところで、躊躇いがちな感じで黄忠さんにあの、と呼び止められた。何ぞんしょ？

「色々聞きたい事はありますが、一つだけ。……何故、この子を助けてくれたのですか？ 貴方にとつて、敵の子でしよう？」

「？ じゃあ黄忠さんは敵の子供が悪人に捕まったら見捨てるの？ その子が泣いてても？」

「……それは。」

「そういう事だ。」

ましてや俺は蛮族で傭兵だ。誰もが敵で、誰もが味方になる根無し草だ。何処の誰のどんな子だ、とか心底どうでもいいな。

そう言つて話を切る。んじや、たぶんすぐ会うだろうからまたな！

そう言つて走り出す。これ以上は流石に不味いし、大きなお土産が出来たから急ごう。ふつつつつつ、お土産さえちやんとすれば怒られない！ これ、前世で妻子持ちの朝帰りの紳士達から教わつた技術です！

ついでに鈴々にお父さんがちびつ子を助けた武勇伝を語つてこよう。きつとまた目

をキラキラさせておとーさん凄いのだ！つて言つてくれるに違いない！娘の尊敬の眼差し！その為に俺は頑張っているのだ！

そんなことを考えながら、俺は城壁を跳び越えたのだった。



「もう一度言つてみなさい？」

呉の陣幕にて、戻つた俺は何故かみんなから尋問を受けていた。正座をさせられて、逃げられないように鈴々と音音の娘2人が膝の上に乗せられた。

ええ、また？もう3回目だぜー？雪蓮は仕方ないな、一回で覚えるよなーもー。「道玄様？」あ、はいしません。真面目にやります。

とはいえ、何度も言つたように大したことはしてないつてば。ちよつとちびつ子助けに行つたらうっかり城壊しちやつて、袁術さんと張勳さんが落ちてきたので拾つてきた

んだって。

「道玄。あんまりふざけていると怒りますよ?」

ええっ!?!こ、これ以上ないくらい真面目な話してるんですが!実際これ以上何もしてないって!本当だって!

必死に弁明してみるが、成果は芳しくないようだ。皆頭痛そうに難しい顔をしている。とは言え、俺は本当にそれ以上何もしてない。だからもうそろそろ正座解いていい?あ、駄目?そっか。

するとずっと笑顔で震えてた孫策が急に叫んだ。

「ふ、ふ、ふ、ふ……敵陣の子供を助けに行っただけで何もしてない?ふざけんじやないわよ!何処の世界に子供助けるついでに城破壊して総大将拾ってくる馬鹿がいるのよ!!見なさいこれ!今日の日の為に散々みんなで頑張つて来たのに、アンター人で終わらせちゃったからみんなの士気が消し飛んだじゃないの!何のためにここに来たと思ってるのよ!?!」

え、いやまだ終わってないよ!確かに総大将を持って来ちゃったし城もうっかり壊しちゃったけど、この2人よりしつかりした武将がいるし、兵はそもそもほとんど残って

るし！だから油断するには早いと思うよ！

「その残りの敵だが、先ほど降伏を申し入れて来たぞ。」

.....

えつ・・・と、ホラ、孫呉の武にみんな恐れを抱いたとか？あ、もしくは実は戦いたくないけど戦わされてたとか！それを俺が大将持つてつちやつたから解放・・・されて？あ、やつぱ今のなし。

「自分が原因つて分かつてんじゃないの。」

い、いや！待て！きつと他にも理由がある！

「道玄、お前だつたらあらゆる攻撃が効かず、単身10万を超える敵陣に乗り込んで生身で城を破壊して大将を攫つてこれる敵が、更に自分達以上の数の武将と兵を連れてやってくるとしたらどうする。もちろん、逃げ道はない状態でだ。」

え、当然降伏するよ？何その無理ゲー。考えるまでもないやん。

「ではそういう事だな。」

えつ。・・・あつ。

しまった嵌められた。さ、流石冥琳、恐ろしい策略だ。後世に長く名を残すだけある

ぜ・・・！！

冥琳の手腕に心底怖いっていると、何故か皆してため息ついた。あれっ？何か呆れられてる？

「本人がこれじゃものな。」

「もう全部こいつ一人で良いんじゃないかしら。」

「まあ、たった一人で戦力過多になる男ですから。」

「我が主人にやる気があれば、とくに中華統一終わってますからなあ。」

「はわわ！兵数を維持する努力が無駄な気がして来ました！」

「言うな朱里・・・今までの苦勞を思い出して泣きたくなる。」

何か酷い事言われてる！お、俺は無実だ！それと朱里、冥琳、兵だつて立派な雇用だぞ。無駄なんて事はないってかここで維持を辞めたら賊が増えちゃうぞ！最悪黄巾の乱再びだ！

そう力説したら更に深いため息を吐く皆。これでこういうことも理解できる知識もあるんだからなあ。と疲れたように言った。本当に全部こいつのやる気次第なのよねえ、と雪蓮が言い、全員が頷く。

「まあ、實際兵の消費を抑えられた上に、大量の投降兵が入ったのは確かだ。うまく使えばこれから楽になるだろう。」

「そうね・・・そう考えないとやってられないし、それでいいわ。となると、こつちも決着をつけて、軍の編成を急ぎましょう。」

そう言つて剣を抜く雪蓮。唐突に空気が変化する。雪蓮の覇気が、天幕を埋め尽くす。視線の先には張勳さんと袁術さん。

雪蓮の覇気に当てられたのか、単に空気の变化を察したのか・・・2人は剣を抜いた雪蓮に怯えてお互いに抱き合つて震えだす。顔が真っ青だ。

「そそそ孫策！わ、妾はこの狭い天幕で武器を振り回すのは危ないと思うのじゃが・・・！」

「おおおおお嬢さまの言う通りですう！ほ、暴力は良くないと思えますう！」

「問題無いわ、すぐ終わるもの・・・今まで色々やってくれて本当にありがとう。こんな結末になるとは思わなかったけど、せめて痛みを感じないように終わらせてあげて・・・さようなら。」

本当にすぐ終わらせるつもりらしい。誰も何も口を挟まず、雪蓮と袁術さん、張勳さ

んから距離を取る。それで流石の2人も逃げられないと悟ったのか、涙を流しながらより強く抱き合った。互いの名を呼びあい、恐怖から逃れるように固く目を瞑る。

雪蓮は万感の思いを込めるように、僅かな間だけ剣を構えて黙祷し、そのまま問答らしいやりとりもなしに、その手の南海霸王が振るわれた！

ガキーン！

袁術さんを斬ったと思っただけ？残念、俺でした！

まあ当然のごとく俺が防ぎました。ちよつと全力で移動したから見えなかつただろうふーははは！あ、2人が生きてる？って不思議そうな顔をしている。そして下半身がびしょ濡れなので、毛布を掛けてあげたら理解の範疇を超えたらしい、えっ、えっ、えっ？と混乱している。こうして見ると張勳さんも可愛いな！

「……………一応聞いておくわ。何のつもり？」

……………？俺が目の前でちびっ子殺させるわけないだろ。何言ってるんだ？

「そんな理由で邪魔をするの？積年の恨みと、私達の悲願が掛かっているのよ？」

は、ただの八つ当たりを正当化すんなよ。悲願に至ってはもう既に叶っただろ。こ

の2人は既に立場を無くしてゐるし。

そう言うのと雪蓮の眉が釣り上がり、辺りの呉の人間達から怒気が溢れ出す。うちの女性陣は・・・直ぐに離れて見守る姿勢だ。俺へのフォローとか無いらしい。酷いぞお前ら！まあいいけど。

「百歩譲つて2人は立場を無くしたから、と言うのは理解できなくもないけど・・・八つ当たりとはどう言う意味かしら？」

それによつては貴方でも斬るわよ、と雪蓮が言う。斬れるもんなら斬ればいいと思うが？まずその思考が八つ当たりだよな、と指摘しておく。何？お前の気に食わなきや斬られなきやならんのか？大した暴君だな。

「・・・ッ、話を逸らすな！」

逸らしてねえよ。そもそもそういう考えだから八つ当たりと分からんのだ。指摘してるんだから少しは考えろこのアホ！・・・とはいえ、言わないと理解できなさそうだから説明してやる。よく聞け。

そもそも、袁術さんの庇護下に入ったのはお前達の方から頼んで入ったんだ。そうだと？

「それはっ！・・・あの時はお母様が亡くなって、私達に力が無かったから仕方なく！」

おお、蓮華、急にどうした。ああ、お前も納得できなかつたか。やつぱりお前も雪蓮の妹だなあ。では聞くが、何故袁術さんを選んだ？他に庇護下に入れそうな勢力はあつただろ。近いところで言えば・・・黄祖？だつて。忘れたけど。とにかく別に袁術さんじゃ無くても良かった筈だな？つか、聞いたらお前らが袁術さんの庇護下に入った時点でこの子幾つだよ。まともな政治も何もわかる訳ないと知つてた筈だろ？

「黄祖何かの下につけるか？！奴は孫堅殿の仇と言える男ぞ！」

いや。祭よ、ハッキリ言うが孫文台が関する選択のほとんどはお前らの事情、つまり私情だ。私情で選んだ選択肢はそもそも自分で責任を負うべきだろ。例えるなら軍師の策を無視して一人大軍に突っ込んで犬死しても、それは自業自得だ。違うか？

・・・まあ、雪蓮は正しく言う馬鹿なので、その尻拭いばかりしてたらその辺曖昧になるのも分からんでもないが。

「それは・・・その通りじゃが。」

「ぐつ、当たり前前の様に私を馬鹿にしたわね・・・！」

勝てる気がする、で作戦無視して一人で敵に突っ込んで兵の被害増やす大将など馬鹿でしかないだろ、何言つてんの？というか何のために軍師達が頭悩ませて献策してると思つてんだ馬鹿。

「その通りなんですがー、おにーさんが言いますかー？」

風、俺はむしろ自軍の被害を減らしてゐるからいいんだよ。ある意味軍師の策より良い結果を出してゐるので問題ない！・・・たぶん。だからブーイング止めろ！てか今真面目な話してゐるなら空気壊さないで！

ええつと、何だつけ。そうそう、そもそもお前らが私情で明らかに幼く無能っぽい袁術さんの庇護下に自ら入った。此処まではいいな？正直この時点でもう自業自得としか言いようが無いが、そこで更に重要な話として、なんだかんだお前ら袁術さんに護られてゐるのよな。正しくはお前らが袁術さん越しに期待した、袁家の威光に、だけれど。違うか。

「それは・・・まあ、確かにそれで豪族達の反発を抑えられたのは事実だ。しかしな、これまで何度も命懸けの無茶な任務を投げられたのも確かだぞ。」

いや、冥琳。それ他の勢力についてたら無かつたと、本気で思つてんの？というか、そもそも庇護下に入らなかつたら滅んでたかもしれないんだろ？それが嫌だから自分達でキツくても生き残る道を選んだんだろ。なら結果的に望みは叶えられた以上、文句言うのは筋違いだ。まあ愚痴を言いたいのも分かるし、殺してやりたいくらいムカつくのも分かるが、それが嫌なら庇護下に入らず自分達だけでやってくべきだった。違うか？「それは・・・でも！私達には護らなければならぬ民がいたわ。」

うん。その考えは立派だと思ふよ、本当に。こんな国が腐つた中でそれだけ民を想え

るのは人徳の証だと思う。では、そもそもの問題点になるが……何故お前らは自分達だけで、民を守れなかつたんだ？

「それはっ！……だからお母様が「それだ。」えっ？」

正直俺は孫文台を直接は知らんし、どんな形にあれお前達にとつては大事な人で、大切な拠り所だつたらうから今まで言わんかつたが……お前ら、何でもかんでも孫文台のせいにし過ぎだぞ？

「……どういう、こと？」

どういふことも何も。そもそもお前らのケチがつくところ全部孫文台が出てくるだろ。孫文台が死んだから、求心力を失つて民を守れなくなつた。孫文台が死んだ原因だから、黄祖の下にはつけなかつた。孫文台が死んで自分達だけでは豪族を抑えられないから、嫌々袁術さんの庇護下に入って、命懸けの任務をこなす羽目になつた……。

分かるか？お前らとしては孫文台が如何に偉大だつたかを語っているつもりかも知れないが、視点を変えたらそんなもん全部孫文台に責任転嫁してただけだ。

「……っ！！」

孫文台が限りなく偉大で素晴らしい人物だつたから甘えんのは分からんでもないが、

そもそも国が誰か一人の力で成り立っていた、というのが異常だ。どれだけ個人に負担掛ける気だ？

というか、どんな凄い人物だつて人間であるからには病に罹れば傷付いたり疲れたりもする。当然死ぬこともあるだろう。実際孫文台は死んだわけだし。死んだ人間は生き返らないんだから、生きている人間だけで何とかするしかない。違うか？

「・・・それは、そうだけど。」

うん。だからお前達はお前達のできることをして、できない事は嫌な思いしても頭下げて、結果的に自力で立てるところまで復活出来た訳だ。こういう時代だから、下克上してお前らを守つた袁術さんの立場を奪うのは仕方ないと思うが、どんな形であれお前達が護られたのは事実。その事実を無視してお前のせい、と糾弾するのはただの八つ当たりだ。そうだな？

「・・・むう。そうなるわね。」

よし、じゃあ納得したところで積年の恨みを晴らすといいよ！あ、もちろん殺すなよ！ちびっ子だから殴るのもダメな！それ以外なら好きにしなよ！

ズコー、と全員が滑った。おお、古いアクションだな！いや、時代的には未来のリアクションか？どうした？俺なんか変なこと言った？

「……あ、アンタねえ。今までの話は一体何だったのよ！」
「わ、私達やつぱり助からないんですかー!？」

「……? 何って、お前が袁術さん達を殺すのは八つ当たりだから止めろって話しかしてないだろ? ……ああ、お前まだ話よくわかってないだろ? 頭脳労働を冥琳に任せてばかりいるからそうなるんだ馬鹿め。仕方ないな、分かりやすく商人で例えてやる。」

まずこの場合、お前達孫呉は家族で店を経営している小さな商家だ。そして袁術さんはその100倍くらいの規模を持つ大商会だ。此処までいいか? よし。

ある日お前達の店は、仕入れから何からをほとんど仕切ってた父親が急病で死に、軽い手伝いしかしてなかった残りの家族だけでは生計を立てられなくなった。そこで、店主の性格是最悪だが規模が大きく経営の知識が豊富な大商会の傘下に入り、経営を学ぶと同時に伝手などを広げていく事にした。

しかしながらいくら大商会といえど、働かない奴に食わせる飯はない。だからお前達にも仕事を回すが、そもそも経験も知識も足りないお前達にはキツく難しい仕事ばかりだった。

おまけに店主はやる気がなく、臆病だったので、偉くて気難しく気性の荒い客への対応は全てお前達に投げってくる。そうしてお前達は死にそうな思いで日々働き、やがて機

会を得て立場を逆転、ついに大商会を乗っ取り、新たに自分達の店を復活させた。

するとお前達の下には散々無茶なことをさせたにつくき元店主が！良しじやあ積年の恨みを晴らそうか！

で、はい。此処で見事母店を乗っ取り、店主になって元上司を下に持った雪蓮さん！どんな仕返しをする？

「えっ？・・・えつと、斬る？」

スパン、と雪蓮の頭を軽く叩く。

ドアホ！どこの世界に仕事の恨みで剣持ち出す商人が居るんだよ！それとも何か？お前のところじゃ商人が商人を殺してもいいのか？違うだろ？普通は今までの仕返しとして同じような仕事させたり、いびつたり、解雇して路頭に迷わせたりするだろ！何でもかんでも相手も殺す方向に持つてくんぞ馬鹿！華琳さんもそうだけど、お前ら軍人って気にくわない奴は殺していい事になってんの？処罰も仕返しも斬首一択なの？上に立つ連中がそれやったらただの恐怖政治だろ馬鹿！！

「いつつたーい！もうちよつと手加減しなさいよ！後馬鹿馬鹿言い過ぎよ！だいたいアンタ私が積年の恨みって言った時八つ当たりって言ったじゃないのよ！」

だから、今までの対応にムカついてたからって上司を部下にした途端殺したらただの犯罪で、おまけに理由が上司が殺した訳でもない家族が死んだからなんて言ったら八つ

当たりだろ！上司関係ないんだから！それに積年の恨みは否定してない！ただ、無茶な仕事の恨みを返すなら、無茶な仕事をやらせ返すのが筋だつて言つてんだよ！だいたいお前毎回命懸けの任務させられたつて言うけどな、お前自分の国を満足に護る能力がなくて庇護下に入れてもらつてんだぞ！他にどんな方法でその対価を払うつもりだったんだああん？まさかただ飯食わせろつて集るつもりだったのか街の居酒屋みたいにあれ俺がお前のツケ払つてんだぞ！理由はよく一緒に居るから、とかふざけた理由なんだぞ！お前わかるか？愛紗や祭と飲みに行つて店に入つた瞬間に他の女のツケ払う俺の気持ち！凄い顔されるんだぞ！今までこれ以上冥琳達の負担を増やすまいと我慢してたがな、太守がツケであちこち飲み歩いてんじやねえ！つていうか仕事しろ！

「あーもううるさい！話が長いのよ！だいたいツケくらいでいちいち文句言わないでよ！それに毎回違う女と飲み歩くアンタが悪いんでしょ！私が誘つても来ないくせに！」それはお前が仕事中に誘つてくるからだ馬鹿め！これでも俺は真面目に仕事してんだよ！真昼間から堂々と仕事抜け出して飲みに行こ！とかほごくお前に付き合つてられるか！その後お前の仕事を肩代わりする冥琳達に愚痴を聞いてんのは俺だぞ！だいたいお前一時期のちゃんと仕事して、酒も飲んでないつてわざわざ報告してきたしおらしい態度はどこにいったんだ？

「あれはアンタが良い子にしてないと駄目つて言うから・・・！もうっ、分かつたわよ！

要するに殺さなきゃ良いんでしょ殺さなきゃ！じゃあ追放よ追放！さっきの例えならクビ！これなら文句ないでしょ！？」

うむ。無いな。とゆー訳でやったね2人とも、死刑は免れたよ！

無罪判決を勝ち取ったので裁判は終了です。良かったねー。そう言ったら2人ともよく分かつて無いらしい。困惑している。と言うか、よく見たら全員唾然としていた。うん？どした？

「掌返し過ぎです、道玄。貴方にしてはやけに饒舌だなと思つたら……。」

「どうりで……。例えばが迂遠だったのは、単純に話長くして雪蓮を押し切るつもりだったな？少し無理な主張だと思つたんだ。」

「まあ道玄様ですから。子供を殺させない為の言質を取れば良かったんでしよう。」

おやまあ、流石は俺の女。俺の事がよく分かつてるね！その通り、ノリと勢いで押し切りました！

そう言ったら漸く言い包められた事に気付いた雪蓮が怒り出すがもう遅い！言質は頂いたぞ孫策ー！てゆうか気付くの遅いぞ？途中から冥琳達は気付いていたから口出してこなかっただろ？後ろ見てれば分かつただろうに！まだまだ若いなー雪蓮。ぬははは！

「ぐぬぬぬ……！冥琳、気付いてたんなら教えてよ！」

「あれぐらい少し冷静になれば分かるだろう……。というか、分かってくれ頼むから。まあ私も少し業腹だが、道玄のおかげで袁術の持つ兵力がこちらの消耗無しに手に入ったんだ。道玄の話にも一理あるし、多少譲つても問題はないさ。」

気持ちの埋め合わせは道玄自身にしてもらいな、とニヤリ笑う冥琳。むう、強かやな。

まあ良からう。幾らでもしてあげるよ。そういうと即愛紗がでは私も、と言い出し、うちの女性陣全員が次々名乗り出した。ちよ、呉の人ら以外は遠慮して下さい！ 粹怜、祭、お前らは多少遠慮してね。お前らに付き合つてたら金が無くなる！

途端にわいわい騒がしくなった皆から離れ、未だに流れについて行けてない袁術さんと張勳さんの前に歩いていく。

2人の前にしやがみ込むと、ビクつと震える2人。思わず苦笑いして、とりあえず2人の頭を撫でながら、追放だつてさ、と伝える。

よく分かつてない袁術さんに、今から袁術さんと張勳さんの2人だけで街を追い出され、つらい根無し草生活が始まる、と軽く説明する。それでも想像がつかないみたいなので、服もご飯も寝る所もなく、一年中外を彷徨いながら、虫にたかられ、野生動物に脅かされ、民に石を投げられ、賊に襲われ、兵には剣を持って追いかける。当然

蜂蜜水もない。そんな怖くていつときも気の休まらない、辛くて痛くて苦しい毎日になるよ、と脅かしながら教えてあげる。

とりあえず蜂蜜水が無い、だけ理解できたのか、その辺りで顔を真っ青にして張勲さんに泣きつく。張勲さんも命が助かっただけで奇跡的なんですよー、と宥めているが、まあ色々だいたい急だったから理解が出来ないのは仕方ないね。

・・・それにしても。

なあ張勲さんよ。随分上手く育てたな？

「・・・分かりますう？お嬢様可愛いですよねえー？」

そうだな。実に可愛い。あんたの愛情の賜物だ。大したもんだと思うよ？

そう言うのと、彼女は照れちやいますねえ、と笑った。俺たちの雰囲気の変化を察していつの間にか皆静かになり、袁術さんはそんな皆を見て気付いたのか、気圧されたかのように泣きそうな顔を始めたので、とりあえずちびつ子大好き猫ちゃん型棒付きべっこう飴を口に放り込んで更に頭を撫でて誤魔化す。

いきなりお猫様!と現れた周泰さんには三つほど纏めてあげて、ついでに2人の着替えを頼んだ。そこで漸く漏らした事を思い出した2人が顔を真つ赤にして恥ずかしながら。特に少しだけ真顔になつてゐるカツコつけてた張勳さんは死にそんな顔をしている。ふ、正直狙いました。

「うう……穴があつたら入りたいて、こういう気持ちなんですねぇ。知りたくなかつた……!」

はつはつはつ、そのカツコで格好付けるからそうなる!……まあ、権力を無くし、金も大した武力もなく、たつた2人の女だけで行くよりはマシな生活を約束しよう。ただし、ウチでは成長してもらうぞ?

そう言うと、意味を察した女性陣が後ろから驚愕の声をあげた。

「ちよ、アンタねえ!人が妥協して軽く済ませたのを更に軽くすんじゃないわよ!」

「団長、流石にそれは甘やかし過ぎやと思うで?」

「確かに。幾ら子供とはいえ、袁術の悪政は有名だ。幾らなんでも無罪というのは良くない。」

「道玄、また女を増やすつもりですか?」

とりあえず愛紗は落ち着け。誤解です。

それと、甘やかしてるのは否定しないが、無罪という訳でもない。実に厳しく教育し

てやるつもりだ。もう構わんだろう、張勳？

「・・・良いんですかあ？これでも私達悪名高いらしいですよお？」

何、それを言ったらそもそも俺は危険生物扱いの蛮族だ。今更悪人2人が増えたところで変わりはないさ。

「・・・一応、何故と聞いてもいいですか？」

さて・・・君の優しさと、覚悟と、不断の努力に。何より、その大いなる愛情に敬意を表して。と、いったところでどうだろうか。

そう言うのと、張勳さんは少しだけにはかんで、悪い気はしませんね、といった。そして少しだけ考える様に天井を見上げて目を瞑ると、未だ腕の中の袁術さんを抱きしめた。飴を舐めながら七乃？と不思議そうな顔をする袁術さんの頭を撫でて、彼女に笑いかけた。

「お嬢様、七乃はずっとお嬢様の側に居ますからねー？」

「うみゆ？うむ、ずっと一緒なのじゃ！」

そんなやり取りのあと、彼女は此方を向いて、これからよろしくお願いします、と言った。

「教育も、躾も、どんどんお願いします。私には出来ませんでしたから。」

うむ。了解した。

流琉、月、詠。この2人を御前達に付けるから、超一流の侍女になれる様に厳しく叩き込め。特に袁術さんには容赦なく。あと、朱里、雛里、風、稟。それぞれ交代で空いた時間に学を仕込め。やり方は任せるが甘やかさない様にな。とりあえず、先ずは着替えを頼んだ。

皆色々言いたい事がありそうな顔をしながらも、流琉達はい、と返事をして2人を連れて行ってくれた。5人が天幕の外に行くと、どういうことですか？と蓮華に尋ねられた。別に怒っていたり、不満な訳ではなく、純粹に疑問に思ったようだ。貴方が意味もなくああいう事をしないと分かっていますから、と嬉しい事を言ってくれたので頭を撫でようとしたら、愛紗が間に入って来た。むしろ張勳さん袁術さんと我慢した方なので、ちゃんと撫でて置く。

「いつそ素直で無能な方が、安全な事もある。と、いうことだ。」

今でさえ幼いあの子が、さらに幼い時にろくすっぽ平定されてない領地を与えられれば、付近の豪族は色めき立ったろう。そこで下手に能力があると思われ、成長する前に狙われれば幼いあの子はひとたまりも無かつたろうよ。

「それならばいつそ程のいい傀儡になる、と思わせることで利用価値を作り、その身を

護った……そういう事？」

たぶんな。じゃなきや幾ら落ちぶれつつある袁家でも、あの子があそこまで無知な理由がない。袁紹さんですら華琳さんと同じ私塾を出てるんだからな。最も、そんな歳で領主なんて遣らされたのは、内部の別な思惑がありそうだが。

「じゃあ、張勳はその、恐らくは身内の良くない思惑から袁術を護る為に？」

「ならば張勳殿はその頃には、既に袁術殿を人知れず護りながら、1人で身内の敵や外の敵と戦っていたということになりますな。……いやはや、大した御仁だ。」

まあ、味方がいかなかったかどうかまでは分からないが。……袁術さんは当然だが、張勳さんもまだまだ遊びたい盛りの歳だったろうにな。大したものさ、本当にな。

「……お母様が居なくなつた時、私達には祭や粹恰みたいなお母様を支えてた頼れる先達や、冥琳達皆が居たけど。あの2人は身内さえ敵だった？」

「更に道玄の話を持ち出すならば、私達はそんな相手に護つて下さいと請うた事になるな。しかも護られた挙句反乱起こして追放してしまった。」

なんか2人が落ち込み始めたので、あくまで俺の推測だ、と言つて有耶無耶にする。お前達はただ、自分達だけが苦勞してきた訳でもなければ、相手にも事情がある、という事だけ理解してればいい。どうせどんな理由があつたつて、自分達に譲れないものま

で譲る必要などない。命が最たる例だな。相手にどんな理由があろうと、殺されてやる謂れない。死んだら終わりだからな。

「そうじゃの。譲れないものがあるのは皆同じ。戦場では臆した者から死んで行く。大事なのは相手にも事情があると理解した上で、己の意思を曲げない胆力を持つ事じゃ。」

良い感じに祭が締めてくれたので、皆が神妙な顔をしてそれぞれ勝手に納得してくれた。とゆう訳で話は終わりだ。シリアス疲れた。飯食って今日はもう寝よう。風、料理手伝つて。ああ、流琉達いないから今回は朱里と雛里も手伝え。尚、料理に協力した者には銚子が一本付きます。定員3名。

一気に緊張を解き、色々な事を明日に放り投げて飯の準備に入る。調理を手伝つてくれる3人が分かりました、とか了解でしゅ、とか言つて付いてくる。その後ろでは酒好きどもが我先にと手伝いを名乗りでて、即睨み合いに発展したが放置する。今日は色々あり過ぎて付き合つてやる体力が残つて無いのだ。

真面目な話に飽きて暇してた鈴々が飛びついてきて、すぐ音音が後に続く。音音も最近では恋から少しずつ離れ始めた。成長してるなあ、と思いつつ、摘み食い目的で付いて来ようとした恋を特大べっこう飴であやす。

そうしていたらふと、何故か前世の家族を思い出した。
少しだけ懐かしくなって笑い、立ち止まる。振り返れば、家族の様な仲間達。
誰一人、死なせる気はない。

迫る宿命の時を前に、もう一度決意した。

続く。

43話

カルボナーラよりミートソースが好き。

やあみんな、とうとうたった一人で戦力過多と呼ばれる様になったオーク系転生者の俺だよ！

アレから2週間が過ぎた。

孫策軍と俺たち傭兵団は、今だに袁術さんの砦で事後処理している。ぶっちゃけ俺が城を崩壊させたせいだ。どうもウチの軍師組や冥琳達は、もともと勝つてここを使うつもりだった様で、城だけとは言え一から作り直しになったことで、かなり怒られた。何でも此処に一部部隊を残して動かすことで、奇襲に使えるとか。

幸い無事な区画に城の図面が残っていたのと、俺が粉碎させたのは下の方だけなので、意外と使える石材が残っていたこと、真桜が図面を弄って簡素な城にしたこと、なご色々な偶然が重なり、人海戦術の力も相まって、急ピッチで城の再建が進んでいる。

なお、降伏した兵達のほとんどがそのまま孫策軍に組み込まれ、孫策軍は今や60万を超える大所帯になった。とはいえ、流石に命令系統の構築や、専用部隊などの割り出しには時間がかかり、兵の訓練に連日武將組が駆り出されている。かなり忙しい様で、軍議などで夜遅くまでかかる事もある。まあそれでローテーションに欠番が出ないのは流石と言うべきか何と言うべきか。

軍師組は最初は色々な手配に奔走していたが、今は少しだけ余裕が出来たらしい。何でも本国に残してきたひやわや張昭さん（ちんまい人。口調がカツコイイ。あんまり絡んだ事はない。）などの返事待ちとか何とか。よく分からんが、まあ呉に来てから雪蓮のせいで忙しそうにしてたし、休みなのはいい事だ。

「まあ、最近まで忙しかったのは道玄のせいですけどね。」

「むしろ予測がつかない分おにーさんの方が対応が大変ですー。」

「はわわ、毎回対策が役に立たないですー！」

「・・・私は軍師として雇われなくて良かったわ。」

「あわわ！詠ちゃんずるいですー！一緒にやって下さいー！」

絶対に嫌よ、と詠がきっぱり拒否する。俺とんだけ厄介者扱いなのか。くっそう、今に見てろよ！後で詠の苦手な焦らしプレイでガン泣きさせちやる！

「何で私だけなのよ！あ、あれを引き合いに出すのは卑怯よ・・・。」

「あれは辛いですからねー。星ちゃんなんかはあのもどかしい恥辱の後の開放感が堪らないって大喜びですがー。」

「えう・・・星さんは、凄いです。」

「あれは素直に変態と言つていいと思いますが・・・。」

まあ、星は変態だからな。もうどうにもならん。個人的には朱里と雛里があれの影響を受けている方が心配だ。

「はわわ、それは秘密でしゅっ！」

「えっ、朱里達何をしたの？」

んー、流琉まで影響されたらマズイから内緒にしておこう。そう言つて話を打ち切ると、目の前の器からクツキーを一枚取つて口に運ぶ。サク、と小気味良い音がなり、口の中に砂糖の優しい甘みが広がり、ビターなチョコチップの苦味が程よく引き締める。噛んだ瞬間までは粉の塊の筈なのに、直ぐに口の中で解ける様にしつとりとした食感に変化した。そのまま唾液と混じって滑らかに喉を滑り落ちる。僅かに残る後味を、砂糖不使用のピーチティーで流せば、桃の香りが華やかに鼻を抜けた。

「美しい。」

いつの間にか流琉の調理技術がお菓子類まで及び、さらに天限突破しててヤバイ。このクツキーとか前世で一度だけ食べた事のある超高級クツキーより美しい。あつちは

缶に入った長期保存可の作り置き、こっちは焼きたての長持ちしないもの、という違いがあつてもこの味。どうなつてんのこれ。もはやパティシエになれるどころか世界一待つたなし。俺の妹が天才過ぎる件について。つていうかクッキーはともかく紅茶の入れ方までいつの間にか巧みになつてる。料理限定とはいえ、一人で何百年未来まで進む気なんだこの子は。とりあえず既に千年は超えた気がする。

「兄さまの砂糖のおかげですよ。」

幾ら使つても無くならないですからねー、と照れた様に苦笑する流琉だが、それだけでここまで技術が上がるなら、前世のパティシエール達は研鑽も修行も要らなかつたらう。明らかに尋常ではない。もはや俺などお菓子に関しては何一つ敵うものはないだろう。兄としての誇り的には悲しいが、逆に誇らしくもある。立派になつたものだ……！

とりあえず撫で撫でして褒めまくる。うりうりーとやればきやつきやつ喜ぶ流琉。今だに鈴々や音音なんかも大喜びの羌毅さん式撫で撫で！実は少しずつ進化してるのだよ！ふーははははは！

そのままキヤツキヤしてたら唐突に流琉が言った。

「でも私、自分で作るお菓子より、兄さまのべっこう飴が一番好きです。」

……こやつめ、可愛すぎるぞ！ナデナデ追加じゃー！

そうして流琉とイチヤついていると、朱里や雛里に加え、珍しく風も撫でろと乱入してきたのでしつかり撫で回す。うむうむ、実に可愛い！でも風、俺の膝の上で寝るのは早いよ？まだおやつの時間だよ。

「あ、あの〜。出来れば私もおやつとお茶が飲みたいんですけどお・・・。」

そう悲しそうな声で聞いてきたのは張勲さんだ。あの後うちの侍女組に組み込まれた袁術さんと張勲さんは流琉達の下、一流の侍女としての修行が始まった（袁術さんのみあらゆる科目の勉強もしている。メインは計算）。特に袁術さん、いやさ美羽は本当に何もかも未体験かつドジで根性無しなのでもうびつくりするくらい流琉が厳しく指導している。

厳しく、と言ったのは俺なのだが、少し可哀想になるくらい厳しい。何せ一度耐えかねて逃げ出そうとした美羽に電磁葉々を持ちだしたくらいだ。その為、美羽は毎日必ず一回ガン泣きさせられていて、たまに甘やかさそうとした張勲・・・七乃も正座で一日中説教されて、美羽と一緒にガチ泣きしてた。まああの状態の流琉はおせっかいレベル100、お節介過ぎて物理的に指導しちゃうので、流琉の力でやられたら洒落にならんくらい怖いから気持ちちは分かる。あ、二人の真名は二人をうちに引き入れた翌日に交換しました。

さておき、音音、美羽の進み具合は？

「まだ七割ですぞー！」

「うう、くつきー、くつきー食べたいのじゃあ・・！」

だつてき。美羽の宿題が終わらなきや食べれないよつて言つたら？その為に来ながら自力でとかなくちやならない宿題なのに、計算の仕方なら七乃も教えていいつて言つたわけだし。昨日お前が甘やかさずきちんとやらせてればもう終わつてた筈だ。だつてあれただの計算ドリルだし。最も、答えだけを教えられないようにウチの軍師組が常に監視してたが。

「そ、それはですねえ、えーと・・色々と深い理由が。」

いい、軍師組にも聞いてないが分かる。どーせ美羽を弄りながら甘やかしてたんだろ。こんな問題も解けないんですかあー？とか言いながらいちいち問はずつ蜂蜜水とかあげたりしてて、気付いたら全然進まなかつた、といったところか？

「ぎくつーな、何故それを・・!?」

今朝、美羽から蜂蜜の匂いがした。月と詠の侍女教育からも、流琉の料理教育からも日々の合格基準を満たしたとは一度も聞いてない。満たしてないとご褒美のおやつは出さない。満たした所でお前達が来てから蜂蜜を使ったご褒美は俺も流琉も作つてない。ついでに美羽自身に蜂蜜を残しておく、という考えはない。そして軍師組の持つてゐる甘い物イコール俺か流琉のお菓子だ。つまり持つてゐるにしても美羽にあげられる

のはお前だけだ、七乃。

「か、完全にバレてる・・・お、お嬢さまあつ！頑張ってくださいいい！このままでは私までおやつが!!」

どうやら美羽を甘やかして自分にとぼちりが来るとは考えてなかつたらしい。今更美羽に泣きついていているが美羽自身もおやつが食べたくていっぱいいっぱいだ。七乃に泣きつかれてむしろ美羽がガチ泣きしそうである。ああ七乃、泣き真似するのは構わんが、答え教えたなら向こう2週間おやつ無しな。

ぎくっ！と七乃の身体が強張った。な、何故？と聞かれたので答えてやる。俺は鼻も良いが、耳も良ければ視力も良い。音音の死角で指で答えを書いていても腕の筋肉の動きでわかるし、美羽にしか聞こえない程度に小さな声で喋っても分かる。あ、ちなみに連帯責任なので美羽も2週間おやつ抜きになります。

そう言ったら途端に美羽が涙目になって七乃をあっちへ行くのじゃ！妾は自分で解くのじゃ！と追いつ返した。まあ今の努力が無駄になったら美羽としては絶望するしかないからな。

美羽にまで追いつ返された七乃は涙目でこっちを見るが、当然無視だ。女性陣も誰一人取り合わない。自業自得だ。ん？なんだ？こうなったら身体で？お前おやつに身体かけんなよ馬鹿なの？え、早いか遅いかの違い!?お前の中で俺はどんな鬼畜に・・・いや

いい、聞きたくない。というか、星の名が出てきた時点で察した。

つか、身体払いは構わんが、目の前の女性陣に許可取ってからにしてくれ。お前ローションに入ってないし。まあおやつの為、では誰一人許可出さないとおもうが。

案の定全員に駄目出しくらい七乃が崩れ落ちた。まあ流琉の作る料理は麻薬成分ゼロだがDCSより中毒になりやすいガチの美味しさを誇る。俺だって朝帰りして流琉を怒らせた時飯抜きにされたら死ぬほど落ち込んだ。気持ちにはわかる。だが助けない。何故なら俺も流琉に怒られるからな！

しばらくして、膝を抱えて落ち込む七乃を尻目に、美羽がようやく宿題を終わらせた。頑張ったのじゃ！と胸を張る美羽を褒めながら頭を撫でて、おやつを許可を出し、流琉にピーチティーを入れてもらう。もちろん美羽に付き合っ自分も我慢してた音音の分も忘れずに頼み、音音を労いながら美羽と一緒に頭を撫でる。

ちちうえーとご機嫌な音音。実は撫でて欲しくて頑張って美羽に教えているという事を俺は知っている。別に理由や結果を出さなくても求められれば一日中だつて撫でてやるのだが、どうもご褒美だから良いらしい。うちの娘は本当に可愛い。とりあえず二人をそれぞれ膝の上に乗せて撫でながらおやつを好きだけ食べさせる。余計に七乃が落ち込むがフルスルー。

「道玄、今日もですか？」

唐突に稟に質問された。今日も武將組と一緒に行かないのか？という意味だが、行かない。俺が行くと兵が怯えて使い物にならないからな。どうもちよつと城を破壊したのがやり過ぎたのか、俺が近くに居る時の元袁術軍の兵達はものつそい怯える。もうそれこそネオに捕食されそうな動物達並みに怯える。だから俺は武將組の手伝いが出ないのだ。うむうむ、実に仕方ないね！

「んなわけなからうが!!道玄、お主いつまで遊んでる気じゃ!!」

いきなり怒られたので見ると、胸の下で腕を組んだ祭がこちらを睨みつけながら仁王立ちしていた。どうでもいいけどそれ威圧感感じるより先に胸に全て視線が行くから、俺の前以外でやるなよ。

「ぬっ?ま、まあお主がそれを求めるならば・・・ではないっ!そうやって誤魔化そうとしても無駄じゃぞ!毎度毎度同じ手に乗るか!」

?何を言うか。以前ならともかく、今はもうお前は俺の女だ。自分の女に他の男の視線が集まっても嬉しくない。正直露出を控えさせたいくらいには独占したい。だから無意識でもなんでも他の男を誘惑する様な真似は控える。

「なあっ!ぬ、ぬう・・・心配せずとも、儂が想っているのは道玄だけじゃぞ。な、なん

なら確かめてみるか？」

「おじちや〜んつ!!」

「おとーさん、璃々を連れてきたのだー!」

おお! 璃々、鈴々! 待っていたぞー! よく来たなー璃々! よしよし、ほーらお菓子もあるぞー。よく噛んでたくさんお食べー?

鈴々、お迎えご苦労様。良くやったなー、流石お姉ちゃんだ! えらいぞー! よしよしよし!

「わーい! 流琉おねえちゃんのお菓子〜!」

「鈴々もう子供じゃないのだ! お迎えくらい余裕なのだ! でももつと褒めても良いのだぞー! …頭ももつと撫でて欲しいのだ!」

ぬははは! よーしよしよし、思う存分撫でちやる! …ん? どうした音音? え、自分ももつと撫でろ? なんだー? ヤキモチかあー? 任せろ! …ん、どうした美羽。妾も頑張った? 仕方ないなー全く、可愛いやつらめ! 撫でまくりじゃー!

「…おい、道玄?」

うちの子達本当に可愛い! いやーおとーさん幸せだなあ! よーしよーし、璃々。今日

は何して遊ぼうか？鈴々もおいでおいで！武将としての仕事は他の人達に任せておけば大丈夫！雪蓮あたりが働くよたぶん！

「ほお……。またしても騙されたのか儂は……。ふふつ、良い度胸じゃのう。」

んん？どした祭、お前仕事は良いのか？駄目だぞ、呉の宿将が遊んでちゃ。雪蓮が調子乗るからな！ほら今日も頑張ってくるといいよ！

「貴様も行くんじゃど阿呆!!またしても騙されるところじゃったわ！毎度毎度そうやって誤魔化しおって！今日こそ来てもらおうぞ！」

えつ、俺？あー、今日は子供達と遊ぶ系の仕事が忙しいから無理だな。

「昨日もそう言っておったじゃろ！いい加減にせんか！」

断る。俺は子供達と遊ぶ系の仕事が忙しい。向こう10年は予定でいっぱいだ。

「子どもが大人になるまで遊び続ける気か!?ええい、子どもの為に働くのが大人の仕事じゃろうが！」

止めろよー、引つ張るなよー。俺の仕事はこうして子供達と遊びながら成長を促す事なんだ。たつた今俺は傭兵から保父さんになったんだ。子供達が将来おとーさんみたいな人と結婚する！って言うてくれるまで甘やかすんだー！

「娘が生まれたばかりの父親か！それはもはや洗脳じやろうが！せめて甘やかすのではなく教育せんか馬鹿者！」

そんな事したら嫌われちゃうかも知れないだろ！今の俺はおとーさんの服と私の服一緒に洗濯しないで、とか娘に言われたら死ぬ自信があるぞ！本当だぞ！

「思春期の娘を持つ父親みたいな事を言い出すな！ええい、いいから行くぞ！」

あ、こら耳を引つ張るな！卑怯だぞ！俺がちびつ子たくさん抱えてて手を離せないからって、防げない所を狙うなんて！ほ、暴力反対!!

暴力の権化みたいなお主が何を言うか！と容赦無く攻め立てる祭。膝の上できやつきや楽しそうなちびつ子達。ぬぬぬ、ま、負けぬぞ！今日はみんなで散歩しに行くのだ！そしてデカイ獲物取っておとーさん凄いのだ！って娘に尊敬の眼差しを向けられる為なら俺は修羅になる！

「必死過ぎでしょう、道玄・・・。」

「アンタ、子どもが絡むと本当に馬鹿になるわよね。」

「風ちゃんもこれはドン引きですー。」

「えう、子ども好きは素晴らしいと思いますが、し、仕事はちゃんとしないと駄目ですよ

！

ええいうるさい！俺の仕事ハッキリしないからいいんだよ！というか、俺が行くと兵が怯えるって言ってるだろ？むしろそう言つて来なくていいって言つたの祭やん！都合が悪くなつたら呼び出すの良くないよ！

「あれはお主が璃々をおびえさせた、とか言つて阿保みたいな殺気をばら撒くからじゃろうが！あれのせいで元袁術兵が動かなくなつて大変だつたんじゃぞ!?あの場はどう考へても原因のお主を一旦取り除くしかなからう！お主も他のみんなもわかつておつたから何も言わなかつた筈じゃ！それをこれ幸いとばかりにそのまま今日までずっと来なくなるやつがあるか！」

あーあー、聞こえませーん。誰がなんと言おうと俺はもう武將組の手伝いはしません。安心しろ！その代わり全力で子守するから！将来立派なお嫁さんになるまで悪い虫は例え蚊みたいな小さい虫でも一匹残らず殲滅するから！むしろ嫁に出さない勢いで守るよ！

「分かつた、話は後で聞いてやる。お主の留まるところを知らない親バカっぷりとかも全部な！だから早う動かんか！」

軍師組と流琉達の白い目を全力でスルーしながら祭に抵抗する。だが耳は髪と同じでパワーでガードできない部分だ、意外と辛い。だが負けぬ！膝の上の四人のちびっ子の為に！おとーさんは娘のためなら天にも喧嘩を売れる！だから止めるんだ祭！そして俺の代わりに雪蓮をこき使っておいで！つーか今日はしつこいぞ、何なんだ一体!?

「やかましい！いいから早くするんじや！このままではまた・・・！」

また？と疑問に思ったら、祭が気まずそうな顔をした。ふむ？

今日なんかあつたつけ？と思いつつも、うちの子達と遊ぶことにしか使われてない俺の脳細胞は、記憶を漁る事さえ諦めている。なので手つ取り早く軍師組に聞いてみるも、軍師組も分からない様だった。なんだなんだ？つて考えているとこんにちわ、と声を掛けられる。見ると黄忠さんだった。あつ、おかーさんだ！と元気よく手を振る璃々、あらやだ本当にこの子可愛い。俺も黄忠さんに挨拶をして、璃々を撫でながら、再度思考する。あれ、敵顔さんも来たの？仕事しろよ。え、全部魏延さんに投げてきた？・・・流琉、後で魏延さんにお菓子でも持つてつてあげてくれ。

「紫苑、でいいと言ってますのに・・・。」

「またこんなところで油を売っているのか。暇なら鍛錬に付き合え道玄。」

うちの女性陣とはまだ交わしてないんだろ？知ってるやつしかいない時だけにしておくよ、黄忠。敵顔、今ならあの辺りに呂布がいるから行つておいで。俺はちびっ子と

遊ぶ仕事で忙しい。

俺の隣に座って、璃々をあやす黄忠さんを横目に、なんだつまらん、と不満気な敵顔さんが酒を取り出したので即座に取り上げる。何をする！と文句を言われるが、昼間っからちびっ子の前で酒を飲むな。璃々とウチの子に悪影響だろ。ただでさえ星たちのせいで酒に興味持ってきてるんだから。というか、酒を出したら孫策や程普といった呑んでくれ共が抜け出してくる。周瑜が可哀想だからやめてやれ。

「この親馬鹿め。暇で敵わんのだ、酒ぐらい構わんだろう？それとも道玄が相手をしてくれるのか？」

あと桔梗と呼べ、と黄忠さんの反対側からしなだれかかる敵顔さん。暇なら仕事したらいいと思います。面倒なのでスルーしようとしたら、鈴々がなら鈴々が相手になるのだー！と膝から降りて行ってしまった。なああああ！お、おのれ敵顔、俺から鈴々との遊び時間を奪うとはいいい度胸だ！良かろう、こうなったらお望み通り俺が相手になってやる。久々にキレちまったよ……！え、なに鈴々？鈴々がやりたい？そーかそーか、なら頑張っておいで。おとーさんここで見てるけど、気をつけるんだよ？

チヨ口過ぎか！と叫ぶ敵顔さんをシカトし、頑張るのだ！と元気一杯な鈴々に璃々と一緒に頑張って、と手を振る。璃々によくできたねー、と褒めつつ頭を撫でて、美羽と

音音も撫でる。おい、いつまでやってんだ。はよ来い七乃!

「つ、良いんですかあ!」

今回だけな。これに懲りたら美羽をあんまり甘やかすんじゃないぞ。次はないからな?

さつきまで膝を抱えて絶望していた七乃が飛び起きる。こいつがここまで執着するとは・・・流硫の手料理恐るべし。現金な奴だな、と苦笑しつつ、まあ美羽も七乃と一緒に食われて嬉しそうだからいいかと思うことにする。うむうむ。

って言うか祭、さっぱり分からん。今日、なんかあったか? 諦めて祭自身に聞いてみた。面倒になったわけではない。

・・・あれ?

返答がないな、と思つて祭を見ると何か俯いて震えている。どうした? すると急に顔をあげてキツ! と俺を睨む祭。お、おお? なんなんだ? 本当にどうした?

「うるさいっ! 儂はもう知らん!・・・この女誑しめ、ずっとそうしてるがいいわ!」

そう怒鳴つた後、そのまま踵を返し大股で去つて行く祭。うん? 訳わからん。

あまりに意味不明だが、とりあえず膝の上のちびっ子をささつと降ろし、立ち上がる。そのまま急ぎ足で去つて行く祭を、気配を殺しながら素早く強襲する。祭が片足を出した瞬間に残つた軸足を膝裏からかつくんし、後ろに倒れるのに合わせて掬いあげる。一

瞬でお姫様抱っこ状態になった祭は何が起きたかわかってないようだ。目を開いて固まっている。

「……とりあえず、まずは説明しろ。」

「……？ツ、うるさい！離せつ、離さんか！」

ああこら、暴れるな。

ジタバタする祭を落とさない様に気を付けながら、どうも意固地になつてゐたみたいで話したくないらしいので、ささっと匂いで感情を読むことにする。くんかくんか。

むむ？何か思つてたのと違うな。これは嫉妬と怒りと……不安？

嫉妬と怒りはまあいつものこととして、不安つてのは何だ。普通に考えたら戦の事だが、祭は呉の宿将とか呼ばれる程に戦慣れした猛将だ。今更こうなるとは思えんし、実際今までの戦でそんな匂いはしなかった。

むむむ、何だろう？と思つてたら、トコトコ歩いてきた風が、ひよつとして敵顔と黄忠が原因じゃないか、と言う。びく、と腕の中の祭が震えた。んん？どういうことだ？まさかまた俺浮気を疑われてんの？つていうか浮気を疑われるのはいつもの事だが、それならいつも嫉妬と怒りで埋め尽くされ……あつ。

「前にも一度祭さんがこんな風になつた時があつたはずですよー。」

そうだな、あつたあつた。あれは……粹恰の時だったか。なるほど。流石だな風、助

かったよ。今両腕塞がってるから後で撫で撫でしちやる。えつ、今日のローテーションの時に他より力を入れる？お、おう。できたら頑張ります・・・？

さて、風と交渉が済んだので腕の中の祭の顔にこちらも顔を近付けて、ちよつとドキリと固まる祭に囁く様に訊ねる。

「まさかと思うが・・・祭、俺がお前からあの2人に乗り換えると思ったのか？」

「違うわ馬鹿者！・・・ただ、ただこれ以上増えたら、儂の居場所が・・・。」

んん？何それ、と思つたら、どうも周りに比べて自分が年上な事を気にしていた様だ。儂の方が先にお主を、とかお主を一番に思っているのは、とかブツブツ言っているが、要するにただでさえ周りに比べて年上なのに、自分と同じくらいの年の2人が入って来たら、自分は相手にされなくなるのでは、と不安になった様だ。特に黄忠さんは娘の璃々を俺が猫可愛がりしてるから、余計に、だろう。粹怜の奴の時の過剰反応はその辺りもあつたのね。何というか・・・

このBBA可愛すぎかよ！

何てくだらないこと気にしてんだこいつ！ある訳ないだろそんな事。つーかまず2人と何もなし。ちよつと真名は交換したけど璃々を助けたお礼とかそんな感じだし

！急に乙女みたいなこと言いやがってくつそ可愛い！普段綺麗キャラだからギャップが酷いこの熟女！

可愛過ぎたのでそのまま祭にキスする。驚愕する彼女を無視して舌を突き出し、唇を割って無理矢理絡ませる。暴れていたのが嘘のように、直ぐに目がトロンとする。後ろからの視線は無視だ！

たつぷり2分ほど舌を絡めあつて、最後に軽いフレンチキスをする。いや、完全に忘れてたけど璃々が後ろに居たんだよね。少し離れてるけど後ろでおかーさん、あれが大人のちゅーなの？って黄忠さんに聞いてるんだよね。なので今更遅いかもだけど、せめて唾液の糸が引く瞬間くらい隠したいな、と思つたんだ。個人的にそれが一番エロいと思うから。まあ後ろでその辺含めて全部黄忠さんが璃々に解説してるけどな！自分の娘だからってちびっ子に何教えてんだアンタ！

「んう・・・道玄、もつと・・・！」

こっちはこつちでスイッチが入ってしまった。相変わらずお姫様抱っこ状態の祭だが、さつきまで暴れていたのが嘘のように大人しくなり、腕を俺の首に絡ませて甘える

ように強請る彼女。完全に顔が夜の闇での顔だ。これはマズイ、璃々と美羽の教育に良くない。だからちよつと出掛けてくるわ！決して祭が可愛過ぎてムラつとした訳ではない！

「駄目です。」

「却下だな。」

足を踏み出したと同時にそんな言葉が聞こえて、次の瞬間には俺の足に絡まる鞭と、目の前に突き出される刃・・・どう見ても青龍偃月刀ですありますがとうございませう。えつと、何故ここに、とかいいつの間に。愛紗、冥琳。

「今日こそは私と一緒に来て下さいね、と言ったはずなのにまだ道玄が来ないので、また璃々とでも遊んでいるのだらうと、見に来たのですよ。」

「私はお前を連れてくると言った祭殿が戻ってこなくてな。軍議の時間だから探しに来たんだ。まさかまだ道玄と一緒にいるとは思わなかったが。」

そう言うてにこり、と笑う2人だが、俺は騙されぬ。目が全く笑ってないからな！ やっぱり無茶苦茶お怒りのご様子。だが狼狽えない！最近の俺は遂にこういつた場合の切り抜け方を見出した！あくまでこういつた俺の女達誰か1人を優遇した場合限定なので、新しく誰かに手を出したりするとまるで意味は無いが、今はだいじょーぶ！喰

らえ、全員が躊躇する魔法の言葉！

「2人とも、今邪魔をすれば自分の番の時でも邪魔が入るぞ？」

「2人とも。すまぬが此処は退いてくれぬか。2人の時は邪魔せぬし、何なら協力もする。だから頼む。」

おっと、俺の魔法の言葉に更に祭からの援護射撃だ！想定外だがナイスだ。どうやら祭は今回は2人きりがいいらしい。俺はどうせ夜のローテーションは無くならないから今の段階で人数増やしたくないだけけども、利害は一致してるから問題はない！言ったら祭に怒られるから言わないけど！

とにかく、これならば2人も引き退る他あるまい！実際これを破れば俺も乱入者を拒んでやらないからな！最近では星や凧でさえ次は自分だと約束させるだけで去っていくぐらいだ。まあ凧の場合は相手が沙和や真桜の場合に限り、本人から参加を許されるんだけどな！何故か星は凧や凧に許されないけども。そんな事を考えながら、内心勝ち誇って愛紗と冥琳を見る。すると其処には悔しそうにしながらも諦める2人の姿が！

なかった。むしろさっきの3倍くらい暗い瞳で笑う2人がいた。

．．．．．あれっ。

お、おかしいな。ちよつと想像してたのと違うんだけど。というか、冥琳もヤバイけど愛紗の目がヤバイ。強烈に病んでる時の目だアレ。初めて俺を襲った時の目まであと少しって感じ。ど、どうしよう祭、これは無理せずこっちが折れた方が安全な気がする！

「嫌じゃーは、初めてお主から求めてくれたのじゃぞ！今回ばかりは絶対に譲らぬ。2人きりでなければ嫌じゃー！」

祭が我儘を言い出した！どんだけ乙女になっているんだ．．．！後ろから突き刺さる軍師組の視線が痛い！これから逃れる為にささつと離れようとしたのにつ！というか、さつきから璃々があれがしゅらば？って無邪気で楽しそうにしてて辛い。横でそうよ

！あれが修羅場よ！つてくねくねしながら璃々に教えてる黄忠さんは後で説教だ！あ、鈴々と敵顔さんが組手の手を止めてこつちを見始めた！いかん、どんどん大事になってくる！

と、とにかくこの場を離れたいが、足に絡みつく鞭どうしよう。引き千切るのはカンタンだが、此処は建業じゃないので直ぐに作り直すことはできない。軍師や武将の持つ武器は基本的に業物だ、そんな武器をおいそれと破壊して、戦場で冥琳に何かあっても困る。嘗ての春蘭みたいに、補給の当てがあるなら別だが。

「・・・あの日、お前と再会した時、お前は雪蓮と交わった私を浮気者とし、相手がいなかった祭殿には操を立てたと特別扱いをしたな。」

どうしようか迷っているうちに、冥琳が暗い瞳のまま語り出した。あつ、逃げるタイミングを逃した！

「それがあんまりにも羨ましかったから、私は断腸の思いで雪蓮の誘いを断り続け、お前に愛されたくて頑張った。結果それを認められて私がお前と2人きりでいられる特別な日を迎える迄に、3回。祭殿がお前に特別扱いされた。」

その後も、私が雪蓮達の分まで仕事して忙しくする度、いつの間にか他の誰かがいい

思いをする。今だってそうだ、私が頑張っているというのに、祭殿がまた道玄を独り占めする・・・私はまだ一度しか特別扱いしてもらってないのに。邪魔が入る？邪魔が入るものにも、私はそもそも邪魔が入るような2人きりの時間がないぞ？幾ら何でも不公平じゃないか？それとも私では嫌か？」

い、いやそんな事は全然ないです。むしろ冥琳と2人きりになりたいくらいです！ただちよつと冥琳が忙しいそうだから邪魔しちや悪いなー、とか、雪蓮と一緒にの方が喜ぶかなー？とか思ってただけで！

これはマズイ、良かれと思つてた事が全部裏目だったくさいぞ。まさかあえて冥琳一人と過ぎさなかつたのが不満だったとは思わなかつた。珍しく饒舌に文句が出るくらい怒っている！流石に祭もちよつと及び腰なのか、首に絡めていた腕に力が入る。

「・・・道玄。」

うおっ！

冥琳に気を取られていたら愛紗がとうとう口を開いた！ヤバイ、名前呼ばれただけなのに思わず身構えるほどの殺気が溢れている！璃々達まで届いて無いから良いけど、これはヤバイ！愛紗達の後ろを通りかかった兵が腰を抜かしてへたり込んだくらいだか

らクツソやばい！

「……道玄、貴方の一番は私です。なのに此処最近、私よりも他の女を優先し過ぎますよ？特にこの3ヶ月……私は一度も貴方と2人きりの1日を過ごしてません。それどころかどんどん新しい女を増やして、そっちに構つてばかり……。まさか、私よりも他の女を選ぶ気ですか？駄目ですよそんなの。絶対に、絶対に駄目です。許しません。」

貴方は私のものです。そういう愛紗の目がどんどん暗くなつていく。いかん、こつちは洒落にならん。俺を腹上死させかけた時と同じ顔になつてきてる。確かに今までは愛紗ばかり優先してたから、この3ヶ月はなるべく他の皆と2人きりの日を作ってたけど、その分愛紗とはなるべく普段の日々を一緒に過ごせるようにしたんだがなあ……。それでは駄目だったらしい。正直俺でもガクブルなくらい狂気的な目をしている。後ろでヘタつてた兵は気絶してしまった。霸王色か！本気でマズイ、今の愛紗は自分以外の女を殺しかねん。ど、どうしよう、いつものノリでいたら終末に突入しかけてござる。

腕の中の祭は、いつもの剛毅な感じはどこにやったのか、離れとうない、としおらしくとも可憐だ。くっそこれは駄目だ可愛過ぎて離せない！

かといって目の前の2人を置いていく、という選択肢は死亡フラグだ。ここで逃げたらそのまま帰ってこないつもりでないといけないだろう。こ、これは・・・進退極まった感じ？

！
そうこうしてたら、急に後ろから肩を叩かれた。すわ救世主かと振り返るとそこには

「何をしているのですか、道玄様？」

「お前・・・またか？」

凧と白蓮がいた。あ、これはヤバい、状況悪化した。白蓮はともかく、凧はアカン。

そう思った次の瞬間には腕の中の祭を見て、凧の視線が一瞬で険しくなった。咄嗟に距離を取ろうとしたら腕に違和感、愛紗と冥琳だった。凧に気を取られていた間に距離を詰められたようだ。何気に白蓮がタツクルして左足を抑えていやがる！地味に嫌な事を！

「逃がしませんよ？道玄。」

「流石にもう我慢の限界だ。許してはやらないぞ？」

詰んだ。すまん祭、なるべく優先的にするから、諦めてくれ。あ、待つて愛紗、まだ

腕の中に祭がいるから！私にはもつと長くとかキスするの待って！分かった、分かりました！ちゃんとみんなの相手します、だからマジ待ってってあれ？いつの間にか周りに軍師組が!?

おい黄忠さんくねってないで璃々連れて離れろ！教育に良くない！違う呼んでない！参加してとか頼んでないくんくん！あ、何鈴々、今日は鈴々もする!?!そ、そっかあゝ、別の日には・・・しないのね、分かった。後ろでニヤニヤしてる巖顔さんは後日俺と組手です。

くつ、こうなったらヤケだ全力で相手をしてやる！だから夜になる前に終わらせてくださいお願いします！「あら？道玄、ここにいたのね。皆も一緒に何してるの？」れ、蓮華・・・!?

この後なんだかんだ全員集まってきた！当然の如く朝までコースだったよ！酷い目にあつた！

??

あれから1週間で過ぎた。

うっかりまた死に掛けたけど、ギリギリの、本当につ、ギリツギリのタイミングでやってきた張昭さん達からの連絡が帰ってきて、孫策達と軍師組が忙しくなったので何とか助かった。例によつて愛紗、星、凧の3人は最後まで容赦なかったが。連絡を持つてきてくれた名も知らぬ伝令の彼には感謝してもきれない。まあ目的だった女性陣の裸は諦めてもらう他ないが、今度酒でも奢ろうと思う。

まあその後黄忠さん達にお盛んでしたねって言われた時は正直そんなレベルじゃねえって感じだったが、それよりも璃々に笑顔でおじちゃんウマナミなんでしょ？って聞かれた時は心臓が止まるかと思つた。もちろん悪ふざけで教えた星はガチ泣きするまでお仕置きしました。あいつ体罰はご褒美になるからマジで厄介すぎる。そして黄忠さんと厳顔さんのニヤニヤが鬱陶しすぎる。璃々が居なかつたら正座させて説教してたよ！

あ、ちなみに美羽と七乃は参加させてません。例によつて星の手引きで素知らぬ顔して閨に混じつてた事はあつたが、その時にいた雪蓮達と俺の反対が重なり、ギリギリ不

参加となった。どうにも七乃は俺のお手付きになる事で、安全を確保する狙いがあった様だが・・・ぶつちやけそんな事せんでも放り出したりする筈もないし、何より大人扱いされたい、とかそんな感じの理由で混ざると決めた美羽が俺のを見て尻込みしてたので、何とか納得して貰った。それでもまだ不安そうだったので、対価と言うか保証として誓約書代わりに俺の真名を預けておいた。

なお、冥琳はその辺を読んだ上で楽はさせません！的な考えだったらしいが、他の奴らは純粹に嫌いな奴と一緒に抱かれたくない、みたいな事を言っていた。まあ、ある程度相手の事情が分かっても嫌いなものは嫌いだよ。仕方ない。むしろ自分達がしない、という考えが無いのか？あ、ないよね知ってた。うちの女性陣も大概だけど、呉の女性は性欲強すぎだと思うよ。

蓮華だけは、美羽より先に国で留守番してるシャオを優先したい、とかそんな事を言っていたが、さも当然の様に俺が相手の事に戦慄を禁じ得ない。何としても先に一刀くんに合わせなくては！つか、俺としてはシレッと混じってる粹怜と穩が色々疑問なんだが、それはいいのか？細かい事はいい？あ、はい。粹怜の後ろで人を殺せそうな目の祭は見なかった事にします。

あと、敵顔さんや黄忠さん達と仲良くなった話をしてなかったの、軽く触れておこう。

とはいえ、そう深い話は無い。あの後、大将を失ってしまった彼女達が降伏し、雪蓮達がそれを承諾してから3日後の事だ。

その時はまだ俺も真桜と一緒に破壊した城の再建を手伝ったり、武将組と一緒に軍の編成を決める軍議に参加したりと、割と真面目に働いていた。俺を知らない奴らが居るところだと、だいたいナンパされるうちの女性陣も、今回ばかりは全くされなかった。どうも元袁術軍や孫策軍の兵達が、とぼつちりを恐れて周知徹底したらしいが、詳しくは知らない。とりあえず俺は頭のおかしい城破きと呼ばれている事だけ覚えた。何故頭のおかしい、が付くのか。甚だ疑問である。

そんなおり、いつもと同じようにウチの女性陣と孫策達軍幹部と共に昼食をとっていると、黄忠さんに連れられて璃々がやってきたのだ。

俺が璃々を助け出してからあの子が起きていた時間はかなり短く、正直覚えてないだろうと思ったし、一応気になって目が覚めたらしい翌日には敵顔さんに話を聞いてみたが、やはり大人の男に若干怯えているらしいとの事だったので会う気は無かった。しかし、どうにも璃々の方が覚えていたらしい。後で話を聞いて驚いた。

それで母親である黄忠さんに俺のことを聞いたそうだ。それを受けた黄忠さんは、俺が渡した薬を信じるか悩んだ末に試しに自分に使ってみたら、効果が確かだったので一応信じてくれたようで、普通に俺の事を話したらしい。

それを聞いた璃々は良くできた子なので、お礼を言いたいと、まだ怖くて仕方ない兵がそこかしこにいる陣の中を黄忠さんに連れられて、わざわざ俺に会いに来てくれたのだ。

再会した時の璃々の可愛さときたらもうそれはそれは・・・公式でも天使みたいな子らしいが、これはもうそんなレベルではない。可愛いという概念そのものでは無いかと思っただね。

何故かって？それはな、再会した時、璃々は黄忠さんの脚にしがみつきなから周りをキョロキョロ見回してはビクビクしていたんだ。恐らく周りを歩く兵が襲ってこないか不安だったんだろうな。

それなのに俺を見つけたとたんパアツと嬉しそうに笑っておじちゃーん！って黄忠さんから離れて、俺の方に向かって猛ダツシユな訳ですよ。この時点でやだこの子可愛い、と思つてた俺は、急ぎ過ぎた璃々が躓いて転びそうになった時、嘗てない速度でそれを受け止める事に成功したんだ。俺きつとあの瞬間だけはころせんせーより早かつたと思う。

そうやつて抱きとめた璃々は、一瞬キョトンとしてたが、目の前に来たのが俺と分かる。とまたしてもパアツと花咲くように笑つて、おじちゃん、助けてくれてありがとう！って言ったんだ。俺は思つたね。何故この世界に録画技術がまだないのかと。永久保存したいと思うくらい可愛かつた。危うくキユン死するレベルだ。

良く見るとまだちよつと頬は腫れていて、俺が渡した葉が塗られていた。まだ傷も癒えてなければ、兵に対する恐怖も無くなつてないだろうに、無理しなくてもと正直思つたが、黄忠さんに先ほどの俺にお礼が言いたくて来た、という話を聞いた時は健気過ぎてそのまま抱き上げてお菓子をあげまくつたくらいである。

また、スーパー可愛い璃々は更に嬉しい事を言ってくれた。何でも兵は怖い俺は安心するらしい。嬉し過ぎてべっこう飴を大量にプレゼントしたら、既に黄忠さんに渡さ

れて味を知っていたらしい璃々は、とても嬉しそうに喜びの声をあげたあと、おじちゃん大好き！と抱きついて来た。感動で危うく全力で抱きしめるところだった。いつか俺も娘が欲しいと本気で思った。

それくらい可愛い璃々は、それでいて他のみんなも虜にするくらい可愛いので、他人の子供を猫可愛がりする俺を見て若干引いていた女性陣も直ぐに俺と一緒に璃々を可愛いがり始めた。

何時もなら俺がちびっ子を可愛いがるとヤキモチ焼いて割り込んでくる鈴々や、普通に恋や俺を取られまいと身構えた音音も、璃々の鈴々おねーちゃん、音音おねーちゃんであっさり陥落。おねーちゃん振りながらおやつと一緒に食べだした。ウチの娘達が可愛過ぎる……！

俺、ウチの娘達の為ならフロンティア古龍にも単身喧嘩売れるわ。そう確信した頃、すっかり存在を忘れていた黄忠さんに改めてお礼を言われ、軽く流した。いや、璃々が可愛過ぎて他の話とかどうでもよかつたんですわ。

その後の話もだいたい璃々に夢中になって聞き流したが、とりあえず昼間璃々の世話
が出来る者がいない、という黄忠さんの言葉に、任せろ！と反射的に言ったのは覚えて
いる。まあ後になって俺が仕事中の時の璃々の世話を投げた流琉から怒られたのだが、
流琉も璃々におねーちゃんと呼ばれてメロメロだったので問題は無かった。璃々、恐ろ
しい子・・・！

それから毎日璃々がうちの陣営に来るようになって、流琉や月、詠とも仲良しになり、
出来たばかりの妹分を構いたくて仕方ない鈴々や音音がずっと陣に常駐するようにな
った。懸念していた美羽と七乃だが、どうにも七乃は璃々を使つて黄忠さんを従わせ
ている、という策は容認していたが、肝心の璃々に会つた事などは無いらしく、何も言
わなければ璃々も怯えなかった。どころか、美羽などは鈴々達と同じくおねーちゃんと呼
ばれて舞い上がつてしまい、璃々に構おうとして仕事をサボり、流琉にガン泣きさせ
られていた。

やっぱりあの時俺がうっかり壁のシミにしちゃつたおっさんが諸悪の根源だったよ
うだ。もう少し厳しく苦しめるべきだったか。と、反省した。

そんな日々が2日続けば、楽しそうな璃々の姿に安心したのか、璃々や黄忠さんを夕

食に誘った時、一緒にいた敵顔さんや魏延さんからもお礼を言われた。2人も何とか璃々を取り返そうとしていたらしい。本当に良い人達や。

折角なので2人も夕食にご招待し、存分に流琉の料理に舌鼓をうってもらった。

そしてなんやかんやと歓談した後、唐突に敵顔さんから真名を預かり、それに次いで魏延さんからも真名を預かった。ほぼ勢いとその場のノリだったが、酒の力もあって俺も彼女達に真名を預けて、楽しく酒を飲んでいた。のだが・・・その頃になって、別の場所で冥琳達と話してた黄忠さんがやって来て、俺が敵顔さんを桔梗と呼んだら何か愕然として膝をついた。

いきなりなんだ? と思い話を聞いてみると、よく分からんが、黄忠さんも俺に真名を預けるつもりでいたらしい。ただ、雰囲気がどうか場所がどうか言ってたので、望みのシチュエーションかなんかがあったのではなからうか。

宮中の儀礼とかに詳しい月や詠によれば、元々真名の交換には正式な儀式があったらしい。まあ真名がもつと神聖な扱いをされていくくらい昔の話で、今更そんな事をしたがるのは夢見がちな少女でも珍しいとかなんとか。

とはいえ、実際に俺にそんな作法を求められても困るので、これで良かったのだろうと思っている。傷心の黄忠さんには、もうすぐそんな劇的な真名を交わすような人に会

えるよ、と予言みたいなこと言つて慰めた。ぶつちやけ一刀くんのことだが、原作では彼女にご主人様と呼ばれていたツワモノなので嘘では無いはず。何故か黄忠さん達全員が唾然としていたが、もう慣れたものだ。たぶん何か俺が変なことを言つたんだろが、どこが変かも分からないので気にしない。気が付かなかつたことにすれば意外とスルーできるんですよ！

まあだいたいそんな感じで真名を交換してからは直ぐに仲良くなつた。まあ魏延さんと仲良くなつた真の理由は、やたらと俺と手合わせを望む敵顔さんが、毎度魏延さんに仕事を押し付けてくるので、その慰労にと差し入れを行なっているからの気もする。

尚、黄忠さんとは正直もはやママ友である。俺父親だけど、同じ娘を持つ親として良くその手の会話が弾む。最近良く話すのが璃々には父親が必要か、という話題で、周りからは新しい父親がいるべきだ！みたいなことを言われるらしい。ただ、言ってくる人はだいたい黄忠さんの体とか強さとかその辺目当ての男ばかりらしく、なかなか決めかねているのだとか。

俺としては今の璃々は健やかに元気一杯で天真爛漫スーパー可愛く育っているので、居なくても問題ないと思う。だから胸を張つて女で一つで育てています！つて言うべきだ。

とかまあそんな感じに黄忠さんの素晴らしい母親っぷりを褒めたのだが、肝心の黄忠さんには残念な感じの顔をされた。何故だ？個人的にはなかなか良い感じのことを言えたと思うんだが。桔梗、どうしてだと思う？

「違う、そうじゃない！」

・・・良く分からないけど、愛紗達には褒められたから良しとしよう。

・
・
・

ゴトゴトと震動がやや鬱陶しい。

うちの馬車は真桜の手によって快適に改造されているが、それでもこういうった道そのものが悪路である場合はどうしようもない。21世紀の車の震動が少ないのは、道が整

備されているからなのだな、と思い知る。

まあ、なるべく尻などが痛くならないように沙和お手製のクツションや、俺が積んだ束にした藁を敷き詰めてるので、震動による乗り物酔い以外に問題はないのだが。うちの女性陣で乗り物酔いする奴一人もいないし。現代人と違って地力が違うんだなぶん。初めて会った時の朱里や雛里も、盗賊どもから逃げ出して何キロもほぼ全力で走り続けて俺たちの元へ来たわけだし。

そんなわけで現在、城の再建に目処が立ったので、残りの作業を行う工作兵と、再編成した半分ほどの軍を残して砦を出発しました。ちなみに残ったのは粹怜、つまり程普だ。あれで仕事は出来るし武力もある凄い奴なので、こういった大役も任せられるらしい。まあ本来なら祭も残すか、むしろ祭を残すのだが、これから向かう先で祭は居る必要があるらしい。祭自身が反発したのもあるが。まあチラチラこちらを見てたので理由は分かる、愛い奴である。

てか呉に帰って何かあるのか、と思つたらそもそも帰るのではなく、とある場所に向かっているのだとか。こないだの軍議で話があつたらしいが、例のごとく璃々と何して遊ぶか考えてた俺は聞き流したので知らない。そう言つたらまた軍師組に怒られたけ

ど、とりあえずこの後の中華の歴史を定める重要な場所らしい。どこだよそれ。赤壁？には早いよな確か？

まあ何でもいいか。ぼちぼち孫策との契約期間も終わりだし、そろそろ俺の目的もみんなと共有しておかないと。

「おじちゃん！みてみて、さつき恋おねーちゃんたちとつくったのー！」

「・・・作った。」

「ねねも頑張ったのですぞ、ちちうえー！」

呼びかけられたので、声の間こえた馬車の外を見てみると、恋の馬に乗った璃々と音音、そして騎手である恋の頭には花で作った冠が載っている。もうそんな時期か。とりあえず体を乗り出して3人の頭を撫で、可愛いと褒めておく。実際無茶苦茶可愛い。ここいつら天使かよ。あ、可愛いの化身だった。つまり正義。

何時もは璃々の代わりに乗っているセキトは、今回は俺の膝の上にお留守番だ。今は俺と同じように身を乗り出して主人であり友達である恋の花冠姿を褒めるように吠えている。セキトにとつても可愛く見えるぐらい可愛いのだなー、と思いつつ、落ちないようにセキトの体を抑えておく。するとセキトの分、といって璃々がセキトの頭に小さ

い花冠を載せた。あらやだ可愛らしい！良かったな、セキト。

わふ！とセキトも大喜びだ。するとどうやら音音は鈴々の分も作つたらしく、先頭に
いる鈴々に渡してくる、といつて3人を乗せた馬が緩やかに馬車を追い抜いていった。
「すいません、皆さんでうちの娘の相手をさせてしまつて。」

ん？ああ、気にするな。皆も璃々の事が好きだからああして構いたくて仕方ないだけ
だ。むしろこつちが璃々を連れ回してばかりですまないな、黄忠。

「とんでもありません、璃々のあの喜びよう……むしろお礼を言わせてください。」
喜んでもらえているなら良かった。あのくらいの子供は楽しく遊びまわるくらいで
ないとな。なら、お互い気にしないって事で。

「ふふ、そうですね。」
「わふー！」

セキトもそう思うか？そーかそーか。おおそうだ、最近固いもの食べてなくて不満げ
だったセキトにはこれをやろう、熊の腕の骨だ。良く噛んでお食べ！

途端にガルル、と唸りながら骨に齧り付くセキト。うむうむ、お前も忘れがちなだけ
で野生なんだな。よしよし。すると隣に座っていた黄忠さんが可愛いですね、と左肩
に、というか腕に頭を預けて来た。あ、それはまず、

「近すぎです。離れて下さい。」

「あんたも何当然のようにジツとしてんの。離しなさい。」

「兄さま、こつちに來てください。早く。」

「えう、ご主人様……怒りますよ?」

あつハイ、すいませんごめんなさい。ほら俺が怒られた気をつけてよ黄忠さん。ただでさえウチの女性陣厳しいんだから。いやごめんなさいって言いながらあーた、顔がテヘペロなんですけど。美人がやっても可愛くなるだけで、誤魔化されたりはしないよ?うちの女性陣はね。俺はともかく。

とりあえず怒られたので流琉の横に移動する。即座にセキトを抱えた流琉が膝に座り、詠が左側、愛紗が右側を占拠する。馬車内での良くある陣形だ。尚、詠と月は交代制、愛紗は愛馬を七乃と美羽に預けている。ちなみに、愛紗の愛馬は七乃と美羽が入る前は馬車に追加で繋がれていました。

さて、当然の様に璃々がいた時点でお気付きだと思うが、そう。黄忠さん親子が付いて来た。厳顔さんと魏延さんは程普と一緒に砦にお留守番です。厳顔さんは無茶苦茶付いて来たが、程普だけより、あの砦に慣れてる武将がいた方がいい、という建前のもと残された。

敵顔さんが残された本当の理由は、いつの間にか仲良くなったらしい程普の奴に無理矢理引き止められたようだ。どうも程普、黄忠、黄蓋、敵顔の4人は熟女だから気が合うのか、仲が良い。それで今回の様に祭と黄忠・・・もういいか、紫苑が俺に付いてくる事になったので、粹恰としては自分も行きたいのに自分以外の3人が行くのが悔しかったんだろう。本来なら自分の代わりに祭が残る筈だった訳だしな。

まあ紫苑が付いて来てるのは俺のせいでもある。いや、本来は紫苑も残る筈だったんだが・・・。実は、出発直前になって璃々が俺たちが居なくなる事を寂しがって泣き出したのだ。

皆はなんだかんだといい感じの事を言つて璃々と別れの挨拶を済ませて居たが、璃々の涙に感化されもとい、どうせ戻つて来るなら璃々と一緒に居たかった俺は普通に在留を決意。何気なく送る側に混じつて皆に手を振つていたら激怒した皆が速攻戻つてきて無茶苦茶怒られた。特に愛紗の激怒っぷりは半端なく、最近では懐かしのひつつき虫になつてずっと離してくれなかつた程だ。

何を考えてるんだ馬鹿！と皆に言われ、思い切つていやや！ワイは璃々と離れとうな

い！と駄々をこねてみた。結果として、璃々とは

おじちゃん！璃々！とまるでドラマの様なワンシーンを演じたが、ウチの女性陣からは正座でマジトーンの説教を2時間、他の娘たちから「私達より璃々を選ぶの？」という様な寂しげな顔で2時間見つめられるという過酷な刑を執行された。

精神的にボコボコにされ、いたたまれなくなつた俺は、なら傭兵団全員で残る、という提案をしたのだが、遅れてやって来た雪蓮達に却下された。特に祭は「お主が来ねば儂が行く意味無かろうが！」とマジ切れし、そんなに粋恰が良いのか？それとも紫苑か？桔梗なのか？とあらぬ言い掛かりを付け始め、それがひつつき虫になつていた愛紗にとつての起爆剤となり、危うく衆人環視の中で愛紗と子作りせねばならないところだつた。

そんなこんなでバタバタした後、璃々がこんなに懐いているからと、兵を厳顔さんに預けて黄忠さんと璃々が付いてくることになつた。厳顔さんも付いて来ようとしたが先の理由で断念し、必ず戻る事を約束させられてから、漸く出発する事になつたのだ。

となると、当然璃々は俺たち傭兵団と一緒に移動するので母親で付き添いの黄忠さんも一緒に来るのだが……この黄忠さん、娘がいる未亡人だからか、隙が多いというか、脇が甘いというか。

ぶっちゃけスキンシップが多い。ただでさえ美人で俺お気に入りの子供を持つ未亡人、という事でウチの女性陣に警戒されている。愛紗がこうして馬車の中にいるのもその為だ。もはや俺に信用なさすぎて笑うしかない。

まあ、だからもうちよい意識して、さつきみたいな事は控えてほしい。後で俺が大変な事になる。

「あらあら、ごめんなさい。次は気をつけますね。」
うふふ、と柔らかに微笑む彼女。完全に反省してないので次もやるなこれは。なんか楽しんでるっぽい。

右腕に絡み付く愛紗が腕に爪を立てて無言の圧力をかけて来る。痛くはないが、最近ひつつき虫になったばかりなので、些細な事にも大きな反応をしてくる。こういう時の愛紗はこちらも多少大げさに対応しないと夜に返ってくるので、絡み付く愛紗を一旦剥がし、自由になった腕で胸に抱き寄せる。この時、一緒に頭を撫でておけばとりあえずは問題ない。

左側の詠にも愛紗と同じ様にし、膝の上の流琉は腕が使えないので、体を曲げて流琉の頭の上に顎を置く（何故かちびつ子皆喜ぶ）。これでとりあえずは大丈夫。御者をしてる月は後で詠と代わった時にしよう。

なだめる為にそのまま軽くいちやつく。目の前の紫苑が仲がよろしいですね、と笑う。まあ、と短く返しつつ、少し視線を逸らす。なんか紫苑の視線が気まずい。まあ自分一人残されて目の前でいちやつかれたら苛立つよね。すまん紫苑。だが挑発したの自分だから許せ。

そんなこんなで若干気まずい空気のまま行軍は進み、璃々を乗せた恋の馬が帰ってくるまでは精神的に大変な思いをする俺だった。

??

砦を出て1週間。

どうやらそろそろ目的地に着くらしい。

なんか美羽と七乃をイビリに来た雪蓮に教えられた。そっか。と一言だけ返し、じゃあ契約期間も本当に終わりだな、と考える。何気に結構長く居たのでちよつと感慨深

い。

しかし隣に座る冥琳や、その向こうの蓮華と思春には不満げな顔をされた。反応が軽すぎて別れを惜しんでないように見えたらしい。誤解なので少しだけ弁明しておく。実際たくさん関係を結んだ女性がいるので、後ろ髪引かれるのだが、俺もやることがある。仕方ないな。

おい雪蓮、美羽と七乃をいびるのは構わんが、流石に雇用主のお前に言われても解雇はしないぞ。っていうか2人には流琉の手料理禁止とかの方が効果あるぞ。

「それは分かっているわよ。っていうか流琉の手料理禁止とか、私でもそこまで酷いこと言わないわ。」

「よ、余計な事を言うでない！本当に禁止にされたらどうするのじゃー！」

「あ、お嬢さま、ご主人様にその口調は駄目ですよ！流琉さん達にに聞かれたら・・・あつ。」

クビより流琉の手料理禁止の方が鬼畜なのか。流琉の手料理はどういう扱いになっているのだろうか。ああ、流琉。俺は気にしてないから、説教は程々にな。でも口調は侍女の基本なのでせめて詠のように切り替えが出来るようでないとならん。月、これ今日の夜、美羽達のデザートだったアップルパイな。口調一回間違えるたびに12分の1ずつ

つみんなに分けていいから。

「あはは、分かりました。」

ぎにやあああ！と崩れ落ちる美羽と、とばつちり食らつて絶望する七乃を見て、逆の毒になつたらしい雪蓮が慰めていた。まあ間違えなきや良いだけさ。頑張れ。そういと、そうじゃな、まだ始まつておらぬ！と素早い立ち直りも見せる美羽。こういう時袁紹さんと似てるなあと感じる。まあその立ち直り発言自体をワンミスとカウントされて早速一切れを雪蓮に目の前で食べられてしまい、すぐ沈んでたが。

現在、昨日の昼から今日の朝まで朝まで降り続けた、突然の豪雨のせいで軍の出発が少々遅れている。その為、荷物が少なく、あつてもだいたい4次元袋に放り込めてしまふ俺たちは、朝食後に少し時間を持って余したのでそれぞれ時間を潰している最中だ。

と言つても武将組はいつもと変わらず全員で鍛錬をしていて、璃々は紫苑と共に、それを離れて見学している。がんばれーと応援する姿が非常に可愛い。さつきまで俺も璃々に応援されたくて、珍しくあつちに混ざっていたのだが、カッコイイところを見せようと少し本気出して5人くらい秒で制圧したら誰も相手にしてくれなくなつた。戦鬨の霞や雪蓮さえもだ。それどころか本気出しすぎて璃々には見えなかつたらしく、卑怯な事をしたと思われたのか、おじちゃんズルい！と怒られてしまった。璃々に褒め

られるどころか怒られてしまった俺は悲しくなつたので、すごすごと軍師組に合流したのだ。

残りは軍師組やその他のみなんでお茶しながら歓談したり、読書をしたりしている。先ほど穩の奴が朱里に未読の本を借りていきなり発情し始めた時は危うく全員参加になりかけ、大惨事になるところだった。出発が遅れるとか説得しなかつたら危なかつた。つていうかお前は何故今読んだし。まあ、僅か二発でだいたい満足してくれたし良いけどさ。

え、今なら大丈夫だと思つた？ どういう意味だ？ …… くん？

待てよ？ 良く考えたらお前普段本読んだ後どうやって …… おかげで最近はお助かつてます？ 好きな時に発散できる？

ちよつ、お前もしかしてやろうと思えば我慢できるんじゃないか!? まさか暇潰しに読書したんじゃないかってこつち目的で読書したのか?! おい、どこ見てんだ! 目を合わせろ、おい!

分かつてんのかお前、後であの木の陰からすごい顔で見てる愛紗達の相手するの俺なんだぞ!!

ちよ、こつち見ろやコラアーツ!!

・
・
・

「見えてきたわ。」

そう言った雪蓮の後に付いて最前列まで移動すると、それが見えた。

まだかなり距離があるのにここまで響いてくる怒号と、戦闘音。たなびく牙門旗が何本も立ち並び・・・まあ、ぶつちやけ戦争だ。旗を見るときもうほぼ壊滅状態の方が袁紹さんで、追いかけてるのが華琳さん達と劉備さんか。目的地つてあれか。なんだ、やっぱり漁夫の利狙いやんのか？

そう隣の雪蓮に聞くと、あんた本当に軍議聞いてなかったのね、と呆れながら違うわよ、と否定された。戦闘が終わってなかったのは偶々らしい。華琳さんと話があったからきたのだそう。

そうか、と返しつつ戦場を見ると、すごい勢いで袁紹さんの軍を引き裂いて一直線に大将神輿（袁紹さんの乗ってるアレ）に進む部隊が見える。あの動きは春蘭か。つて事

はそろそろ秋蘭の部隊から援護がくるな。

予想通り、慌てて体勢を整えようとした袁紹さんの部隊が矢の雨で足止めされた。更に追い討ちをかけるように別の部隊が・・・あ、あれ一刀くんじゃん。馬に乗りながら見事に矛を操り、的確に敵の部隊を崩している。流石はうちの女性陣が鍛えただけあるな。そう言うのと、いつの間にか集まっていた女性陣がまだまだだ、とか、少しは様になってきたな、とか言つて笑つた。なんだかんだ教え子の成長が嬉しいようだ。

にしても何だあれ。劉備さんの指揮する部隊がすごいな、アホみたいな士気の高さが離れてても分かるぞ。明らかに華琳さんの兵より気合いが入つてる。何が起きたんだアレ。

そうこうしているうちに、袁紹さんの乗つてる大将神輿が急速に撤退を始めた。まああれだけの勢いで春蘭の部隊が詰めてきたら逃げるしかないよな。季衣ちゃんの部隊も回り込んできてるし。まあ大分前から実質完全敗北確定してたけど。むしろ今頃逃げ出すとか大丈夫か。

あ、親衛隊と思しき部隊が大将神輿から離れて行き始めた。まあ袁紹さんも大部分の部下見捨てて逃げてるから、仕方ないっちゃ仕方ないな。

・・・あ、袁紹さんが大将神輿から落とされた。慌てて顔良と文醜の乗る馬に拾われ

だが、あれはもう無理かな。お、あれはまあちか。おお、焦ってる焦ってる。遠目で見てもわちやわちやしてんな。んん？手に持つてる何か持つて・・・

そう思うが早いか、次の瞬間にはパァン、と音がなり、空から緑色の煙が降ってきた。あー・・・あいつ、目敏く俺に気づきやがったのか？まあ孫策軍は見えてるだろうしなあ。

ぬう、ちよつと気が進まないな。そう考えていると、行かないの？と雪蓮に問われた。まあ雪蓮と冥琳はあの場に居たからな。とりあえず少し離れたところで、静かに戦場を見下ろしていた白蓮を近くに呼ぶ。

「どうした、道玄。何かあったか？」

あー、俺は基本的に約束した事は守る男だが、それよりも優先したいことがあればそつちを取ることもある。俺の大事な女とか娘とかが最たる例だ。

「い、いきなり何だ!?!ま、まさか告白か？い、いや愛紗達を差し置いてなんて・・・お、お前がそれを望むなら。」

アホ、話は最後まで聞け。ていうか愛紗達の前でそれを言うな。死ぬぞ？冗談抜きで。ほら、後ろにいる愛紗の顔を見てみる。

「へ？うわっ！」

白蓮が振り返るとそこには暗い瞳の愛紗がぴったりと背中について青龍偃月刀を片手に立っていた。僅かに口の端に引つかかる髪の毛がポイントだ。むっっちゃ怖い。白蓮は即ガチビビリしてダツシユで俺に抱きついた。まああれは怖いよな。ホラー映画とか観た後で暗闇であれやられたら心臓弱い奴はシヨック死する。間違いない。

だから言つたらうに。あー、愛紗、ついでに星と凧、いつもの白蓮の勘違いだ。落ちて着け、武器下ろせ。まだ話があるから待ってくれ。

そう言うと、密かに迫っていた2人と愛紗が、割とあっさり武器を下ろして離れる。まあ今回はただの警告だろうしな。それでこれだから俺の女達が修羅場すぎて困る。ああ白蓮ビビるのは分かるが後にしろ。話の続きだ続き。

とにかく、俺は今回はお前の意思を優先する。ここまではいいな？よし、じゃあ続けるが、実はなお前がうちに合流する前、俺は袁紹さんとのこの軍師、田豊と、ある約定を交わした。

「ある約定？なんだそれ。それがどうしたんだ？」

「・・・約定の内容は、袁紹達の身に危険が迫った場合、一切の条件無し、無償でこれを救うことだ。」

「っ!？」

ちなみに、今さつき上がった緑煙がその要請信号だ。真桜が作った奴だな。

だが、あくまでこれはお前がうちに合流する前に結んだもので、正直お前があいつらを助けて欲しくないと言うなら俺は約定を破るつもりだ。どうしたい、白蓮？ いつかのお前はあいつらに恨みは無いと言っていたが、本当のところはどうだ？

白蓮に袁紹さん達の生殺与奪を投げたようであつと気分は良くないが、白蓮の気持ちを優先したいのは本心だ。あんまり悩むようならさきに助けてその後沙汰を・・・そこまで考えたところで白蓮が剣で俺を叩いた。見るとものすごい怒っている。

「馬鹿かお前は！それなら早く行ってやれよ！何やってんだ！」

決断早っ、それで良いのかお前は。

「良いも何も、私があいつらを恨んでない！前に言つたら。二言はないし撤回もしない！何より、例えこんな方法で恨み晴らせても、私を守って死んでいったあいつらに顔向け出来ない！」

教えてくれたのはお前だろ、とプンスカ起こる白蓮。やれやれ、本当にお前は良い奴だな。後悔すんなよ？俺は一度助けたら殺させないぞ？

「するか馬鹿。良いから行け。本当は早く行きたいんだろ？・・・知ってるんだぞ？私は

そんなお前に惚れたんだ。」

・・・ははっ。

白蓮、お前つて時々、どうしようもないほど良い女になるよな。

ぬかせ、と笑う白蓮に、俺も笑って返す。

じゃあ雪蓮、行ってくるわ。愛紗、星、ちよつとこつち頼む。

「お任せを、我が主人。」

「行つてらっしゃい、道玄。」

「早く済ませて来なさいよ。」

あいよ。

そう答えて、そのまま走り出す。

走りながら全身うっすら色が変わる程度に超弱変身、ズボンで見えない足だけ部分変身。念の為闘気術で全身を強化する。

戦場を見ると、もう袁紹さんに春蘭が追いつくところだった。あ、袁紹さん達の馬が転けた。たぶん秋蘭だ。急がねばならんな。そう思い、部分的に完全変身した足で思いつきり、跳んだ。

視界が一瞬で流れていく。毎度の事だが気持ち悪いなこれ。

きつと今の俺は流星みたいに見えることだろう。その気になればガチでそれくらいの威力は出せると思うが、たぶん袁紹さん達も巻き込まれて死ぬので自重しよう。

さて、今すぐいくけど後悔すんなよまあち！俺の助け方はちよつと荒っぽいぞ！

くらえつ、超上空での〜〜つ！

カツコイイポーズ!! (特に意味はない。)

か、ら、の〜〜つつ！必つつ・・・殺ツツツ!!

メ テ オ ス タ タ ン プ !!!

説明しよう！必殺！メテオスタンプとは？

腕を組んでただ立ったまま着地するだけ！お手軽だぞ！ちなみに当てる気は無いので誰も死なないぜっ！

ダガンツツツ

ちようど目論見通り、転けた袁紹さん達の間に着地!!ちよつとその際に地面粉碎したけどまあ構うまい！後ろから悲鳴が聞こえたけど、精々破片が文醜に当たっただけだ。あいつ名前に猪がつくから。名は体を表すから。猪はあれくらいじゃ無傷だから大丈夫。鈴々の親友基準だけだ。

そのまま飛んできた袁紹さん狙いの秋蘭の矢を腕で払い、馬に乗ったままやってきた春蘭の剣を元祖闘気硬化で弾く。ガギン、と鈍い音がる。地味に馬の体重が載ってて重い一撃だ。

カカンツ

「キサマツ、道玄っ!!いきなり何のつもりだっ!」

カカカンツ

あー、約束でね。一応後ろの人らを守らねばならんだ。というわけで急だがここで止まらないと俺が相手だぞ。あ、華琳さんは知ってるからちよつと確認とつてくれ。無駄にお前らの兵を減らしたくない。というか、状況的にもうお前らの完全勝利で袁家の滅亡確定だし終わりにしないか?

カカカカカカカカカツツツ

「ほう、相変わらず大した自信だな。いきなり出て来てお前一人でこの数の兵から奴らを守り抜くという訳か?舐めてくれる・・・!」

カカカカカカカカカカカカカカツツツ

さて、守り抜けるかどうかはやってみないと分からないが、少なくともお前達に甚大な被害が出るのは確実だな。試してみるか?

カカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカツツツ

「抜かしたな?吐いた唾は飲めんで、道玄!ここで会ったが千年目!今日こそこの七星餓狼の カカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカツツれるっ!」

れ・・・なんだこれ!!

幸いな事に守らなければならない袁紹さん達には一本も向かってないが、どうもこの状況について行けずに固まっているようだ。いや逃げろよ、と言いたいところだが口を開いたら一瞬で口いっぱい矢がご馳走されるだろう。俺なら多分無機物も食えなくは無いが別に進んで食べたくも無い。マジどうしようこれ。下手に動いたら全部袁紹さん達に行くから動くこともできん。

矢が尽きるか、袁紹さん達が正気に戻って逃げるの待つしか無いかな。つかいい加減弾かれた矢で周囲が埋まってきたるんですけど!

そんな事を考えてたら、少しずつ秋蘭が近付いて来てる事に気付いた。無論矢の勢いはかけらも落ちてない。何あいつアレで動けんの?どうなってるんだマジで。矢筒を差し出しながらついていく兵が化け物を見る目をしている。

「・・・何人だ?」

えっ、何が? なんかの話!?

「私を置いて行った拳句、何ヶ月も放置しておきながら、新たに手を出した女は何人だ

「？」

「フアツ!? ちよ、えっ!? まさかこれ嫉妬的なヤツ!? ま、待て秋蘭、俺の話を「5人だ。」あれっ?」

「私が知っているだけでも5人……! 私はその間お前をずっと待っていたにも関わらず、お前達は私だけ除け者にして、ずっと……ずっと!!」

あれっ、質問しておいて聞いてないパターン!? ちよ、春蘭、秋蘭を止め、ああ矢が鬱陶しいってああっ、春蘭何逃げてんだテメー! 戦略的撤退? おまつ、曹魏の大剣が逃げているのかこらー!

「うるさいっ! お前は知らないからそんな事言えるんだっ! 秋蘭はなあ、怒ると物凄く怖いんだぞ!」

知ってるよ! むしろ現在進行系で味わってるよ!! 何だよこれ本当に1人で射ってるの?! 雨なんですけど! 矢の雨なんですけど!! しかも超豪雨!! 弓兵100人居てもここまで酷くないぞ!

「知ってるか、道玄。」

へっ!? な、何が? というか喋りにくいから矢を止め、あ、はいすいません。

「今、私達はお前がやたら買っていた劉備達と同盟している。」

あ、ああ。それは知っている。さつきもちよつと上から見てたが、やるようになったもんだ。

「そう、確かにお前が気にかけるだけあつて大したものだ。特に北郷は、お前にこそ及ばないものの、華琳様でさえ一目置いている。大した男だ。」

お、矢の勢いこそ変わらないが、少しずつ会話が成立してきてる！いいぞ、この調子だ！そうだな、彼は本当に「だがな。」えっ？

「優れた男とは皆お前や北郷の様なのか？いつもいつも場所を選ばず其処彼処で……！お前を待つ私に対して喧嘩を売るかのようにツツツ！」

ちよ、一刀くん華琳さんのところでも場所を選ばず盛ってんの!?俺にとぼちりくるじゃんやめてよ！何処からか冤罪だ！とか聞こえたけど後で俺の代わりに此処に立たせてやる！覚悟「そして風から送られてくるお前達の近況には、誰がどこでどんな風に、お前に抱かれたかこと細かく書かれている。」しと、け……？

えつと、な、何のことだか私にはさつぱり……。あ、嘘ですごめんなさい。うう、風よ、何でそんなことわざわざ書いちゃったんだチミは。

気がつくくと既に矢の豪雨は止んでいて、目の前には秋蘭。そして周囲には230セン

千の俺が何も見えない程に積み上げられた矢の山。

「捕まえたぞ。これでお前は暴れられない。」

そう言つて矢を払いのけ、俺にしがみつくと秋蘭。確かに俺はこうなつたら秋蘭を傷付けてしまうので、全力は出せない。とうるか華琳さん達と戦わない約束もしたから、当然秋蘭達と戦うつもりはないし。春蘭？ハツタリつて大切だよね！

しかし何とまあ、あの鬼気迫る矢の豪雨はこの為か。凄く使い方するなあ。

あ、いかん。この隙に袁紹さん達狙われたらまずい。とりあえず軽く矢の壁を薙ぎ払う。良かった、袁紹さん達も周りも固まったままだ。

すると、秋蘭が両腕を伸ばし、俺の耳を引つ張り無理矢理顔を自分に向けさせた。ちよ、痛いんですが！

「余所見するな！……何ヶ月も他の女ばかり見てたんだ。しばらく私以外、見るんじゃない。」

そう悲しそうに言う秋蘭。何これ胸が痛い……つてちげえよ！一応まだ戦闘中ですけど!?周りをみると先ほどまでの空気が嘘のように完全に白けている。俺をよく知る曹操軍の兵達にいたつてはまたお前かよ爆発しろ！とばかりに舌打ちし唾を吐き捨て

る。あれっ、俺のせいかこれ！

「うるさい。袁紹などどうでもいいだろう！今は私だ！もう逃がさないからな・・・今日は覚悟しろ。」

え、いやあれ？何これさつきから秋蘭が可愛いんだけどどういふこと？一応俺、大規模戦闘に割り込んだよね？なんか普通にただの痴話喧嘩みたいになつてない!?つていうか悪ふざけやらなにやらをしてない秋蘭に違和感が酷い！いやめちやくちや可愛いけど。でも俺の知つてる秋蘭じゃない！

・・・あれっ。俺ひよつとして今違う世界線来てる!?

「馬鹿ね、何慌てているの。・・・貴方の帰りが遅いからでしょう?」

そう言われ、声の方を見ると呆れた顔の華琳さんが桂花と逃げてつた筈の春蘭を側に控えてやつてきた。いや、そう言われても困るんですが。こつちも仕事だし。つていうかもつと早く来てよ。

「嫌よ。私も秋蘭と同じ気持ちだもの。もっと困るが良いわ。」

ええ……。まあ色々言いたい事はあるがとりあえず置いておく。戦闘になっても困るので対話をしてみた。

とりあえず華琳さんに後ろの人達の命は俺が預かる！でも袁紹さんの負けとかその辺は任せるよ！という的な話をして、同時にやたらしおらしい秋蘭を抱き締め、撫でておく。これで多少落ち着くだろう。愛紗達から何してるか見えない事を祈ろう。見なくても何故か分かるから無理だと思っただけ。

話が終わると、華琳さんが覚えているわ、と溜息を吐く。

「華琳様！よろしいのですか？」

「構わないわ春蘭。道玄が田豊と約定を交わした時、私もそこに居たから覚えている。というより、覚えていたから決着を急いだのよ。雨が降らなければ昨日で終わっていたのだけれど……。」

ああ、昨日の急な奴な。確かに酷い雨だった。っていうか急いでたのか。さつき着いたばかりだから知らなかったわー。

「さつき着いたばかりで良くもまあここまで戦場の空気を破壊できるわね、アンタ。士

気を上げる為に力を尽くした私達の時間返しなさいよ。」

その辺は腕の中にいる秋蘭に言ってくれ、桂花。まさか俺を逃さない為だけにあんな絶技をしてくるとは思わなかった。矢の無駄遣い甚だしいが。

「何言ってるの？ 貴方を条件付きとはいえ一時的に動けなくしたのよ？ 安いものだわ。ああそれと、命は取らないけど拘束はさせて貰うわよ？ 後の処理があるからね。」

良いんでない？ 俺がまあちに頼まれたのはあいつらの身の安全であつて袁家の存続とかではないし。拷問とかもされないだろうから、それぐらいは仕方ないよね。で、問題はなにか？ 田豊。

「もう一つ、捕虜となる兵達の事でお願いが……。」

「抵抗しない限り、身の安全と食事は保証しましょう。私としても無意味な殺生は望まない。」

「お心遣い、感謝致します。……本当は私が言うことではありませんが、代わりに……降伏致します。後の事は、どうぞよしなに。」

田豊が未だに騒いでる袁紹さん（顔良と文醜に流石に無理だから！と抑え込まれてい

る。)の代わりにそう宣言すると、妹にビビって逃げてつたとは思えない顔した春蘭が勝鬨を上げ、兵が歓声を上げる。ちよつと皆やる気ないけど、俺のせいなので気にしないことにする。

すると側に来たまあちに礼を言われた。本当に来てくれるとは思わなかった、と言われる。正直、公孫瓚の事があるから悩んだんだがな。いやはや、大した読みだよ。まさかあの条件の後で即公孫瓚を攻めるとは思わなかった。

「へっ!?!いい、いや誤解です!わ、私が帰った時には既に姫様達は出陣してですね!」

はっはっはっ、謙遜するなよ。あれがなければ正直行き倒れてたあいつを拾った時点で俺が君ら滅ぼしてた。冗談抜きで。いやー、嵌められたと気付いた時はハラワタ煮えくり返るかと思つたよ!

「ひいつ!何か凄い悪人みたいに思われてる!?!ほ、本当に誤解なんです。と、斗詩、貴女からも説明を!」

「あ、あの真値さんの言ってること本当です!姫様がいきなりーっつてこれじゃ姫様が悪いみたいに!いや姫様が悪いんだけどえつと、違うんです!」

何でも構わんよ。俺としちゃ怒り心頭だったが、元親友で今は俺の女である公孫瓚本人が、お前らを恨んでないらしいし。だから俺も助けに来たんだし。今のはただの嫌味

だ気にすんな。約束は守るから安心しろ。

そう言つてまあちの頭を撫でて、未だこの私がああ貧相な娘にいい！と騒がしい袁紹さんに口いっばいの巨大なべっこう飴を突っ込んで黙らせ、頑張つて抑えてた2人にも飴を渡す。その辺りで首にぶら下がるようにしがみついていた秋蘭にまた怒られたので宥める。

辺りでは春蘭と桂花が指示を飛ばして、早速後処理が始まった。ついで、離れたところから劉備さんと一刀くんが部隊を連れてきたのが見える。やれやれ、白蓮と話してた時まではシリアスだった筈なんだが、その後ほぼギャグだったから調子狂うな。間違えてシリアスを忘れてきたか。

そんな時、不意に華琳さんから話しかけられた。

「ところで道玄、貴方がここにいるという事は、孫策の下での仕事は終わったと言うこと？」

「んん？どつたの急に。まあ一応契約はここに来るまでだったな。俺しか来てないけど。」

「まあ終わった事は何となくわかっただろうし、もうすぐ来るだろ。雪蓮も目的は華琳さんらしいし。」

「そう……。ならようやく帰ってきたのね。お帰りなさい。」

相変わらず俺が華琳さんに仕えてるみたいな会話だが、その言葉を放った華琳さんがいつになく慈愛に満ちた眼差しだったので、思わず苦笑いしながら、ただいま。と返した。

その瞬間。周りの空気がガラリと変わり、辺りに指示を出してた筈の春蘭がいつの間にか俺の右腕にしがみついた。思わず顔が真っ赤だな、なんて呑気な事を考えてしまった時、首にしがみついていた秋蘭は左腕に位置を変え、急に首に別の衝撃が走った。みると桂花がこれまた顔を真っ赤にしてしがみついている。

何だ急に、と思った時には遅かった。華琳さんが俺に近付いてきたと思ったら正面から抱きついて来た。身長的にギリギリ腹筋辺りだがちよつとまづい見た目だ。

そして、爆弾が落とされた。

「お帰りなさい。待っていたわ・・・我が伴侶よ。」

続く！

・
・
・
・
・
なんて？

44話 プリンよりは茶碗蒸し！

やあみんな、みんな大好きオーク系転生者の俺だよ！

拝啓、前世の顔すら思い出せなくなってきた両親様。

いかがお過ごしでしょうか？

今頃は私と同じく転生したりしてるでしょうか。

あの日、私が死んでからの事が少し気になります。もともと、私が死んだ時にはどうの昔に他界していた両親達なら何のことか分からないでしょうが。

聞いてください。私は今、ゲームや漫画の世界の怪物的な存在になって三国志の世界を生きていますよ！

まあ恋姫世界が三国志か、とか言われたら困りますが、とにかく前世の日本では見たことないような、いろいろ新しいものを見してきました。過去なのに新しいとか斬新ですよね！

何故か既にドリルやパイランカーとかが存在するので、これからの世界はきつと浪

漫溢れるロボオタ狂喜の世界になるでしょう。その分ロボアニメは減りそうですが、グレンラガンとグラヴィオンくらいは残って欲しいですが、どうなることやら。

ああそうそう、私にもついに恋人が出来ました。綺麗で可憐で、大人びているように子供っぽかったり、真面目なようでお茶目だったり、ふざけているようで一途だったり、ちよつと病んでたり。

私には勿体無いくらいの恋人です。ええ、毎日が幸せですよ!

・・・えっ?

今何してるか、ですか? ふふふ、それはですねえ。

「・・・どういう事ですか? 納得のいく説明をお願いします。それ次第では苦しまないように殺してあげます。」

「ふふ、最愛の男を奪われて納得する可能性が僅かでもあるのなんて・・・優しいのね?」「時間の無駄ですな。皆、武器をとれ。」

「それはいい。お前達が死ねばその分道玄を独占できる。」

「ははは、やってみろ孺子。塵一つ残さず殺してやろう。」

「そうだな、序でに天下も手に入って一石二鳥だ。雪蓮、全軍を出すぞ。」

嘗てない規模の修羅場の真っ只中にいますよ！大絶賛絶体絶命です！！
助けて下さい！

・
・
・
・
・

「……どういう状況ですか、道玄。」

険しい顔の愛紗が険しい声でそう言ってきた。残念ながら愛紗が不機嫌になる様な状況なのでその声色なのも理解出来る。だが。

い、いや、俺にもさっぱりわからん。袁紹さん達を無事保護してから何か急にこんな感じに……！

そう、俺も状況が分からないので俺に聞かれても困るのだ。本当に。

あの後。

そう、謎に春蘭達に捕獲され、華琳さんに衆人環視の中で伴侶呼びされた俺は、よく分らないが今、華琳さん達の天幕内でもてなされていた。

もてなされる、と言えば美味しい食事だったりお酒だったりないイメージを感じられるが、俺の場合はちよつと違う。確かに目の前には豪華な食事と酒があるが、座っている場所は寝台だ。いや、これは天幕とかの色々な場所に何度も運んだりする上、来客を通す様なものでもない無駄な所（玉座とか）に金を掛けない華琳さんの嗜好だから構わないんだが……。

「どうしたのかしら？他人の目など気にしないでいいのよ？」
「そうだぞ道玄。むしろ早くしよう。ずっと待っていたんだ。」

何をだよ馬鹿か。

というかお前らが余計に訳わからなくしてんだよ！

現在の俺の状況。

膝の上に華琳さん。

右腕に秋蘭。左腕に春蘭。

後ろから抱きつくように見知らぬ元気っ子。

右足に寝そべる様に季衣ちゃん。

同じように左足に桂花。

そして左右によく知らぬ親子が大きな団扇で扇いでいる。

・・・なんだこれ。なんだこれ!!

ちよつと本気で意味が分からない。せめて知らない人混ぜるの止めるべきだよ！意味不明過ぎる。今合流したばかりの愛紗達なら余計に意味不明だろう。これで札束の山が置いてあればジャンプの後ろとかにある神秘的なパワーがある天然石の宣伝広告だと思うんだが・・・。

「・・・どうやら本当に道玄もわかってない様だぞ?」

「本当ですな。我が主人が浮気の露見以外であそこまで狼狽えるのも珍しい。」

「浮気以外ってあたりが道玄らしいわね。」

「そうですね、蓮華様。正直、夜の回数をもっと増やすべきかと。」

「それはお主がしたいだけじゃろう・・・儂の分も増やせよ?」

「では一人二回程度増やしてみますか? 確かに最近怪しい女性の影がちらほらありますし。」

「あら、誰のことでしょうか。ひよつとしてあちらの方々ですか?」

「・・・まあ、あれもそうですが。」

「いけしやあしやあと、なのー。」

「アンタ、本当にそろそろいい加減にしなさいよ?」

「あはは、ご主人さまもてますねえー!」

いやお前ら、なんだかんだ俺が悪いつて言ってるよねそれ。つていうか流れで一人当たりの回数増やささないで。死んでしまいます。つーかそろそろ説明してよ華琳さん。

流石にこのままでは話が進まない。美女に囲まれるのは悪い気はしないが、理由が分からんのに持て囃されても困る。何よりあそこにいるウチの女性陣が怖いからな。

「仕方ないわね、少し耳を貸しなさい。」

はいはい、なんぞって、んっ!?

「んっ……はあ。ふふっ……貴方の味ね。」

……ベタな手を。思いつきり引つかかった俺が言うことじゃないけど。というかいきなり何すんねん。いや嬉しいけども。美少女からのキス嬉しいけども!

耳を貸しなさい、で頭下げた途端キスされるとは思わなかった。ラブコメかよ。いや、少年誌的ラブコメではないな。思いつきり舌入れられたし。

まあとりあえず華琳さん。

「あら、何かしら?」

「時と場合と場所を考えろ。」

あれを見る。俺の女性陣が全員武器抜いたじゃないか。軍師組は武器持つてる人だけけど。俺のじゃない黄忠さんとか七乃まで武器を抜いてる理由は分からないが、無駄に刺激するなよ。後で俺が大変だろ!

「馬鹿ね、華琳様は立場の違いを教えてあげたのよ。」

そう言ったのは桂花だ。何故か首輪をつけている桂花だ。あえて突っ込まないけど

首輪をつけている桂花が足元から居丈高に言い放ったのだ。こいつよくこの状態でカッコつけられんな!

おい桂花、春蘭もだけどお前ら顔赤いぞ無理すんな。秋蘭はともかく、お前らそういうこと華琳さん以外にする奴じゃないだろ。というか、この両隣の人等と背中につけてる人は誰だよ紹介してよ。

「うっさい! 華琳様と私にここまでしてもらえてるのよ!? 黙って感謝してれば良いのよ!」

「無理などない! い、妹に出来て姉である私に出来ない事などない!」

いや桂花よ。感謝はしているが、無理してまでやられても困るぞ。春蘭、じゃあお前秋蘭の代わりに書類仕事やってみろ? 出来ない事と出来ることはそれぞれ違って良いんだよ。無理すんな。

そう言つて2人を宥めながら華琳さんに視線で抗議する。この2人に何吹き込んだ? あつ、鼻で笑いやがった! この強気な感じ、華琳さんの指示だけじゃない? どういう事だ?

「道玄、お前は本当に鈍感だな。実は気付かないフリしてるだけ、だつたりしないか?」いきなり何を言い出す秋蘭。獣が混じる俺以上に敏感な人間なぞいないぞ、たぶん。

それはない、と断言する秋蘭。こやつめ、ははは。でもなんか俺の知ってる秋蘭に戻りつつあつてちよつと安心する。そんな事を考えていると、華琳さんが軽く女性陣をチラ見して言った。

「あの場に孫権や甘寧がいる、という事はもう春蘭や桂花の事も知ってるでしょう？」
なんの話、と言おうとしたが、春蘭や桂花の顔が真っ赤になつたので思い出した。星のやつとの濁り酒事件の話か。知ってるけど。俺あれのせいで死にかけたというか人数増え過ぎて現在進行系で命の危機だからな。

でもあれは華琳さんがいたと聞いたから、正直華琳さんの悪ふざけかな、と。なんだかんだ春蘭と桂花なら男相手でも華琳さんの命令なら聞くだろうし。・・・当の華琳さんは他の女性の艶姿観れば参加しそうだし。

そう言うのと華琳さんは少し不機嫌な顔をして、私だつてそれだけの理由であんな事誰にでもする訳じゃない、的な事を言った。理由が足りないだけで否定はしてないのでそんな理由で参加したなこいつ。

ちよつと呆れた目で見えていたら、逆に俺がおかしいと言いたげな表情をした華琳さん。はため息をついた。分かってないわね、道玄。そう言つてまるで母親の様な慈愛に満ちた目でこちらを見る華琳さん。

・ ・ ・ あれつ、これ春蘭や季衣ちゃんを見ると同じ目だ！あれつ、俺ひよつとして2人と同じ扱いされてる!?

「確かに私は2人に貴方のものに奉仕する様に指示したわ。けれど、強制はしなかった。2人がそれで私への愛を貫く為に拒否するならば咎める事は無かった。むしろ条件を出したわ。貴女達が道玄に身体を許してもいいと思ったならば、とね。

・ ・ ・ ふふつ、口では色々言つてたけれど、2人は拒まなかつたわよ？手だけでなく口に含んで最後は貴方のものを飲み干した。むしろ私の方が少し嫉妬したくらいよ。

何より、2人は今ここに居るのよ？以前は居なかつたでしょう？」

クスクスと楽しそうにすごい事を普通にバラす華琳さん。確かに居なかつたけども！あの時は秋蘭と華琳さんだけだったけども！何か腑に落ちない!!だって2人の華琳さん愛はヤバいし。飲みに行った時に死ぬほど惚気られるし! ・ ・ ・ え、何真桜。春蘭はともかく桂花と2人で飲みに行ったのか？

え、普通に行つたけど。そんなに多くないよ4回くらい。あつ、浮気とか本当にしてないぞ!!本当だぞ!!桂花に聞いてみる!

え?違う?そうじゃないの?じゃあどういふってあれ、華琳さんが凄いいヤニヤヤして。何かおかしいところあつた?

「私を知る限り春蘭や桂花が男と2人で出掛ける、なんて貴方以外では無いわよ。ましてや2人とも酒に強くないのに酒家？襲ってくれって言うてるようなものじゃない。」

「違つ、違います華琳様!!私はそのままでするつもりはっ!!」

「・・・そこまで？ほう。どこまでならするつもりだったんだ、桂花？」

「うぐつ・・・!」

何か反論しようとした桂花が即墓穴掘つて沈黙した。というか、桂花や春蘭との2人飲みつてそんなに珍しいのか？真名交換する前から行つてたから普通なのかと。

「・・・あんた以外の男と、私が行くわけじゃないでしょ!」

えつ、そうなの!?!付き合い始めてもう3年くらいになるけどたつた今知つた驚愕の真実!!つーか急にしおらしくしないで。今の状況だとキユンとしちゃうだろ。

ちよつと男友達みたいな関係だった女友達にいきなり告白された気分。急に意識しちゃうよね、こういうの。そんな経験今までに一度もないけど!

周りを無視して桂花と見つめ合っていたら、春蘭に私を忘れるなあ!と怒られた。おつと、ついうっかり。あれ、でも春蘭は偶に部下の男どもと飲みに行つてなかつたか?

「ふ、2人だけで行くのはお前だけだ馬鹿者!!何故気付かんのだ!」

「というかな、道玄。姉者に至つては割と露骨に迫られてなかつたか?」

あれ、そうだったか? えーと・・・んんん? 何か良く考えたら春蘭と2人だけで飲みに行った日の記憶、全部曖昧だな。毎回ペロペロの春蘭を背負って帰ったのは覚えてい
るんだけど。

何だと!?!と怒る春蘭と、貴様、姉者にそんなに魅力が無いといたいのか!と怒る秋
蘭。いやちよつと待って。何か理由あつた気がする。んー、何だっけな。

・・・うむ、思い出せない。何だっけな・・・? つーか今思い返して気付いたけど
あまり春蘭と2人だけって記憶以外と少ないな。大抵秋蘭と一緒に・・・あつ!

思い出した。俺が春蘭と2人だけで飲んだ記憶が曖昧なのお前のせいだ秋蘭。

「あら、どういふことかしら。」

「む? 秋蘭がどうかしたのか?」

「・・・つー!」

いや、今思い出したけど、春蘭と2人だけで飲みに行った日って必ず秋蘭が密かに後
をついて来てたんだよね。監視みたいに。春蘭にはバレないようにしながら、あえて俺
の視界に僅かに入つて餓狼爪(秋蘭の弓の名前。業物。)をチラチラ見せてきて、常に牽
制されてた。そつちが気になって春蘭との会話結構聞き流してたなそういや。

あ、言い訳は無駄だぞ秋蘭。思い出したというか今気付いたが、良く考えたら俺と春
蘭2人だけの飲みの会話で、俺が覚えてないのにお前が知ってるという事は、お前があ

の場に居たつて事だからな!

「しまった、あの時は妨害することしか考えて無かった……!まさかこうなるとはっ!」

「秋蘭、貴女……。」

「しゅ、しゅーらん……。」

ああ、良かった。何か俺の知ってるダメな秋蘭がようやく戻ってきた感じ。凄いホツとする。あ、それはそれとして気持ちは凄い嬉しい。ありがとう。もちろん桂花もな。

まあ周りに他の女性たくさんいる状況で出す会話じゃ無いけどなあ!

つていうか本当にこれヤバイ。友達が異性になる瞬間ヤバイ!凄イドキドキする!ちよつと困惑してるけど凄い嬉しい。そしてどうしたらいいか分からない!何これどうしよう!こんな時どんな顔していいか分からない!

「断ればいいと思います。」

「と、言うか今すぐ断れ。」

「流されたらあかんで団長。」

「……だんちよ、ダメ。」

「拒否一択です、道玄様。」

「そうですね、断りましょう道玄さん。」

「早く断りなさいよ、道玄。」

「というか、いい加減離れんか。」

あ、はいごめんなさい。調子にのりました。何気黄忠さんにも怒られたけどその通りだから素直に反省しよう。でも離れるのはちよつと。いや、抱きつかれて嬉しいとかじゃなくてね。よく見て欲しい、両手両足塞がってるんだよね。え、無理矢理剥がせ？俺に女性が傷付けられると思ってるの？あ、待った愛紗、切り捨てるとかは待った。分かった分かった。でも最終的に剥がすにしても暴力は良くない。まずは最後まで話を聞こうじゃないか。今の話は結局春蘭と桂花がここに居る理由でしかないしな。だから剣を下ろせ雪蓮、思春。

何か女性陣を宥めるのが大変過ぎる！なまじ武将が多いから暴力には高い殺傷能力が基本装備されている。春蘭達はともかく桂花は危ないからな。

・・・っていうか、本当後ろの子とか誰だ。両隣の親子も分らんが背中ひつついてる子も全く知らん。実は会ったことある設定もたぶんない。というか、最近知らない人が普通について困る。程普とかひやわわとか糜姉妹とか色々、恋姫の2次創作では見たことないぞ。いや、もしかしたら三国志には出てたのかもしれないが、恋姫世界にいる

のかそれは。まさか俺が知らないだけで原作が新しいの出でてその新キャラとか？

まあそもそも原作未プレイだし、そうだとすても不思議ではないが。いや、やつぱこの世界限定のキャラかも？

そんな事を考えていたら唐突に背中に抱きついていた子が顔を上げた。むふー、堪能したつス！とか言い出した。漸く顔が見れたつてあれ、ちよつと華琳さんっぽい？と思つたら従姉妹さんらしい。曹仁さんと言う彼女は、元氣一杯なワンコみたいな子だ。よろしくつス！と語尾にスがついて華琳さんとは大分タイプが違うが面白い子だ。というか以前手紙にあつた人か。曹洪さんとかいう妹がいるんだっけ？

・・・違った。どうやら曹洪さんは同じく華琳さんと従姉妹に当たるが、姉妹ではないらしい。彼女の妹は曹純さんと言うらしい。間違えてごめんよ。許してくれた。ええ子や。というか芝犬みたいで可愛い。

思わず曹仁さんの頭を撫でていると、両隣の親子っぽい2人も自己紹介してくれた。予想通り親子だった。陳珪さんと陳登さんというらしい。母親の陳珪さんは腹黒微笑キアラで、陳登さんは・・・おい、華琳さんこの子普通に嫌そうな顔してんだろ何で連れてきた。え、何連れて来たのは陳珪さん？俺に会わせる為？へー。あ、その辺の心こもつてないお世辞要らんよ。なんで俺の心象良くしたいか知らんが、嫌がる娘を連れて

こない方が好感度高いから次から気をつけてくれ。

なんか驚いてる親子は無視だ。てかさつきから頭を撫でてた曹仁さんが満面の笑みで掌に頭を擦り付けてきてマジ可愛い。本当に犬みたい。ちよつと鈴々に通じるところがあるな!

というか、説明はまだか。いい加減向こうの女性陣が超怖いから教えてくれ華琳さん。

「仕方がないわね……。結論から言いましょ。私と道玄はこの度夫婦になったわ。側室は無く、妾の座は埋まっている。悪いけれど貴女達は新しい出会いを探さない。」

・・・は？

なにそれ聞いてない。

そんな華琳さんの爆弾発言と共に、話は冒頭に戻る。

??

一触即発。

現在、正しくそんな状況だ。

特に愛紗がヤバイ。既に華琳さん達を殺す気だ。俺以外にあのヤンデレの病ん部分
がガチで向けられているのは割と珍しいが、あの顔はマジだ。洒落にならない。

どうするか、と少し考える。原因である華琳さんによると、よくわからないが華琳さ
んと俺は夫婦らしい。初耳過ぎて困る。

だが、冷静になって考えれば婚約も式もしてなければ籍を入れた記憶もないのであり
えない。だとすれば何か別の目的があると思うんだが、目の前の華琳さんからはやたら
強気な感情が嗅ぎとれる。今の自分に自信があるらしい。別の目的につながる狙いが
あるかどうか分らん。

目の前には勝手に妻を主張されてブチ切れ寸前の愛紗達。これが見知らぬ人間が
やったことなら等に武器が振り下ろされていただろう。冗談とかそういうのは関係な
い。何せちびっ子の将来○○のお嫁さんになるー発言も相手が俺なだけでガチギレし

ちやう女性陣だ。本当に何でこうなった。

今みんながまだ保ってるのは、相手が気心知れた華琳さんで、何か別の狙いがあるかも、と勘付いているから皆ギリギリで理性を保っている。いや、愛紗だけ殺す為の方法を考え始めてるけど。

まあ他の冥琳とか星とか風の怒りっぷりもヤバイが。正直目を逸らしたいレベル。

ひよつとしてこれが狙いか?と思つたが正直愛紗達を挑発する意味はない。それを伝つて俺を怒らせたいわけでも無いはず。つていうか夏侯姉妹と華琳さんは良いが、曹仁さんと季衣ちゃん、桂花が溢れる殺気に怯えている。なんでもいいけどとりあえず仲裁しよう。

華琳さんや、目的は何だ?いきなり夫婦、なんて嘘つく理由も分からん。まずは説明してくれ。

「あら、私は嘘なんてついてないわよ?」

・・・あん?ガチで嘘じゃないっぽいどういうことだ。秋蘭ならまだしも華琳さんと結婚するようなこと何もしてないぞ?よく知らないがそういうのって色々書類とか同

意とか必要なんじや?というか俺にはまず戸籍もないんですがそれは。

「ふふ、貴方の事だから知らないでしょう。良い事教えてあげるわ、道玄。」

私は国を起こしたのよ、と華琳さん。

言われてそういえばそんなイベントあつたな、と思う。というか雪蓮も袁術さんに勝つたので、建業に戻つたら晴れて孫呉を起こすらしいし、中々にタイムリーな話題だ。まあみんなは冥琳とかから聞いていたらしいので驚きは無いっぽい。例によって聞いてないのは俺だけですわ知ってた。さらに聞けば劉備さん達も何か備えているらしい。とりあえず曹魏の建国おめでとう、と祝つておく。

「あら、私の国の名を知っていたの? . . . 否、やっぱり貴方は知っていたのね . . . まあいいわ。つまり私は今王なのよ。」

あ、何か今やらかした。まあ流してくれるらしいからいいや。王だからなんなのか。俺には関係ないけど崇めればいい感じ?

「ふふ、貴方に敬われるのも面白そうだけど、それはいいわ。重要なのは、私は私の国の中ではなんでも出来るという事よ。」

それこそ、軍も行政も司法でさえも、ね。そう言つて笑う華琳さん。なんだそりや、と言おうとして気付く。俺より先に気付いた軍師組が声を上げた。

「まさかっ!」

「はわわわ!もしかして道玄しゃんとの籍を!」

「勝手に作ったとー?幾ら何でもそれはー・・・。」

「あわわ、強引すぎでしゅ!」

いやいや、強引通り越して横暴過ぎる。さ、流石にそんな無茶・・・しないよね?

流石にないだろう、とは思いつつ、思わず確認してしまう。幾ら何でもスマートじゃなさ過ぎるので華琳さんのやり方じゃないとは思う。華琳さんは自分で覇道を征く、というだけあつて高潔な精神を持つ豪傑だ。もちろん本当に必要な多少強引な手段や汚い策を用いることを厭わないだろうが、こんな無茶な困い込みはしない筈だ。

何故なら、この方法では華琳さん側にこちらに對しての負い目しかない。本来?の外史で、袁紹さんに攻められた劉備さんが華琳さんの領地を抜ける時、対価として関羽を要求したように、相手側に最低限の負い目がない状態で、権力を使った横暴をするような人ではない。

横暴な条件を吹っかけるなら必ず対価を用意するし、大抵の場合は相手の意思を尊重するのが華琳さんだ。相手の意思を無視するような時は、必ず相手に出来る(と期待している)ことしかしない。一刀くんに春蘭と模擬戦させたり(一刀くんではなく春蘭の方に手加減ができるくらい力量差がある。)とかな。

まあ身内に限った話だが。この場合俺は身内じゃないのでやられてもおかしくない

気もするが、仮にこれで夫婦になったら身内である。華琳さんなら身内になる相手にそんな無茶をするような配慮ので無い人とは違う。・・・と思うんだが。

目で答えを聞いてみる。その瞬間、

目の前の少女を基点に、一瞬で世界が変貌した気がした。

ニタリ。と、口が裂けるように大きく歪み、空気がドロリと粘度を増したかのように部屋の中に禍々しい気配が充満した。殺気ではない。狂気だ。しかも身に覚えがある。

膝の上に座る少女が、小さき霸王から邪悪な魔王に変化したかのように感じる程に、その身から溢れる強く濃厚な狂気。彼女の持つ強大な覇気が全て狂気に変わったかのようにさえ感じた。

強烈なまでの存在感。しかし禍々しい気配。

誰だこれは、と一瞬考えてしまった。だがしかし華琳さん以外の何者でもない事は、俺が1番よく分かっている。何せ匂いも覇気の大きさも身体の重さも何もかも彼女

だからだ。それでも別人に見えるほどの強烈な気配の変化。

何だこれ・・・？悪意？いや、ちよつと違うな。妬み？いや、怒り？感情が混じりすぎて分からん！

あまりの威圧感に周囲の女性陣が大きな反応を示す。武将組は一瞬で武器を構え、侍女組、軍師組はその後ろへと回る。突発的に戦闘が起きた時の為に仕込んだ陣形のうちのひとつだ。しつかり出来て何よりだ。

何気に黄忠さんも軍師組に混じって下がり、後ろで弓を構えている。急なこの事態に対応した上に、うちの女性陣に咄嗟に混ざれる辺りは流石だ。冷静な視野と迅速な判断力を持った確かな傑物なのだろう。

尚、呉の女性陣は蓮華と穩と呂蒙さんを後ろにやった後は全員臨戦体勢だ。地味に冥琳が下がらないのが凄いな、と思いつつ、こつちも凄いなー、と内心褒める。そんな現実逃避をしていたのは僅かな時間だったが、華琳さんの両手が俺の頭を固定するように自分に向けさせてきたので意識を戻す。

俺と華琳の視線が噛み合う。暗い瞳だ、と思うが早いか引き寄せられ、再び口付け。侵入してくる彼女の舌が、先程よりも荒々しい。同時にギリ、と歯を噛みしめる様な音を俺の耳が捉える。顔が固定されているので分からないが、多分愛紗な気がする。・・・

後で頑張ろう。うん。

先程よりも少しだけ長く、されど比にならないほど濃厚な交わり。終わる瞬間には互いの唇に唾液の橋が架かった。それを舐め取る様に舌で切った彼女が、そうよ。と呟く様に言った。

「そう。その通り私は貴方と結ばれる為に勝手に2人の婚姻を済ませたわ。これで私が治める場所に於いて貴方は私のモノ。そしてこの地は今日から私の領地。故に私と貴方はここでは夫婦。ほら、何も間違っていないわ。」

確かに理論上はその通りだ。俺の意思とか意見とか、夫側の存在感が皆無な事を除けば、だが。ちよつとというかだいぶ強引すぎる。俺は人間じゃないので人権無視は仕方ないとしても、周りへの配慮のなさや、華琳の矜持的にも、かなりらしくないやり方だ。

何故そんな事を？いくら何でも無理矢理過ぎる。俺が他国に渡らない様に、とはいえ自分が妻になる理由がない。秋蘭辺りにやらせても問題無いはずだ。

「駄目よ。それでは貴方は私を見ない。こちらを、振り向かない。」

何の話だ、とは言わなかった。分かっていたからだ。分かっている気がない振りをしていた。彼女なら言わないだろうと思つたし、俺の口からは言えない事だつたからだ。

だからこそ疑問だつた。何故今になって? つい、そう問いかけてしまった。

途端に彼女の顔から僅かに狂気が抜け、悔しそうに彼女は言った。

「後悔しているわ。あの日、貴方と初めて会つた日を。」

私が驕つてさえないなければ、と自虐的に笑う華琳。俺の顔を押しやる腕に力がこもり腕が震える。その腕から、彼女の想いが伝わる様だつた。

華琳と俺の顔の距離は拳一つ分くらい。かなり近い。自然と視線が合う。一切逸らさず、腕の動きだけで秋蘭と華琳の向こう側にいる女性陣に合図する。

ちよつと賭けだつたが、秋蘭は華琳の変貌について行けない周りの女性達をやんわり動かして離れてくれた。助かる、秋蘭以外は今の華琳に気圧されて固まっていた。たぶん、彼女達としても此処まで本心を露わにする華琳を見た事はないのだろう。当然、この狂気も知らなさそうだ。俺も知らなかったが、向けられた俺はともかく、彼女達は今の華琳の近くにいない方がいい気がしたのだ。

うちの女性陣や呉のみんなも動く音が聞こえないので、待機指示を聞いてくれたらしい。できれば外に出ていて欲しいが、状況的にウチの女性陣は確実に拒否する。これ以

上は無理だろう。しかしまあ、念のためハンドサイン教えといて良かった。・・・後が怖いが仕方あるまい。必要経費と思おう。

「あの日・・・あの日に、私が既に王であつたなら。貴方の望む存在であつたなら！貴方を、何処へも行かせはしなかつた！」

再び彼女の顔に狂気が浮かぶ。激情をそのままに、思いの丈をぶつけるように叫んだ。放出する強大な鬼気に比例するように、彼女の身体が小さくなるような錯覚、元から小さな彼女が、更に幼子の様に思えた。

思わず叫ぶ彼女を抱き寄せる。妙な手ごたえ、どうも嫌がつている感じ。抱き寄せは中止、と思つたら彼女から身体を寄せてきた。素直じゃないな、と彼女らしさに内心苦笑いする。

落ち着けよ華琳。例えあの時既にお前が王だつたとしても、俺はやることがあつたし、結局旅を続けたさ。後悔なんてらしくないぜ。

「嘘ね。貴方は誰にも目的を話さないけれど、それは誰に話しても貴方の目的を叶えないからでしょう。否、理解が得られない、のかしらね？だから貴方は旅をした。どこかに肩入れし続けるわけでもなく、目的の為に自ら渡り歩いた！」

・・・でも、それはつまり、理解者がいて、目的を叶える為のきちんとした協力が出来れば貴方が旅を続ける理由はないという事。違うかしら?」

・・・まあな。

本当にそれが出来たら、確かに俺がこうしてちよろちよろ動く必要は無かったかな。そういうとやはりね、と華琳は少し寂しそうに笑い、その後方では驚愕する声が聞こえた。まあ、誰にも話してないから仕方ないね。

しかし良くそこまで分かったな。俺が誰にも話してない以上、よっぽど俺の事を調べて考えてないとそこまで俺を理解できない筈だが。何故なら当時の俺はそこまで詳しく考えて動いて無かったからな! 流琉仲間にした時とか殆どその場の勢いだけ! というか三羽鳥とか董卓組、袁術組以外はだいたい流されただけ!

「考えていたわ。ずっと。貴方のことを、片時も忘れた事はなかった。いえ、気付いた時には忘れられなくなつた。」

ははは、まあ記憶に残りやすい見た目なのは自覚している。そういつて戲ける。即座に茶化さないで、と懇願される。あ、はい。どうも空気を軽くして誤魔化すのは無理らしい。

「その頃には、貴方が私以外の女といふ事に、少しずつ不満を感じ始めていたわ。でも、考えないようにはしていた。貴方を思う秋蘭がいたし、私は霸道を進む者。色を好んでも色にのめり込んではいならない。王とは、孤高であるもの。そうでしょう?」

そうだな。少なくとも俺は華琳の中にそんな霸王を見たな。

だから俺も此処に長居しなかつたわけだし。

「・・・道玄?」

どういう事ですか、と問い掛ける愛紗にハンドサインで後でな、返事をする。今は華琳さんだ。

「・・・やつぱり、貴方は私を誰よりも理解するのね。嬉しいわ。

・・・そうよ。結局私は貴方を諦められなかつた。

私の中の女が、貴方をずっと、ずっと求めて止まなかつた。」

「なのに貴方は私の側にいない。いつだつて他の女の側にいる。私以外の、女の為に動いている!それがどうしても、我慢出来なくなつて・・・ッ!」

「そうか。まあだいたい理由は分かった。だが、それだけなら俺のやる事は変わらないな。」

そう言つて強制的に会話を切ると、そのまま華琳の腰を両手で掴む。彼女が驚愕するのを無視して持ち上げ、俺の上から下ろす。立てるように床に立たせたのだが、下半身の力が抜けたかの様にへたり込む。

椅子代わりの寝台から立ち上がり、華琳を見下ろす。んじやな、どう声をかける。華琳どころか全員が呆然とするのが分かるが無視だ。何故?と華琳が呟いた。

「何が足りないの? 関羽達や秋蘭達が良くて、私だけが違うのは何故? …道玄、何故貴方は私の下を離れていくの?」

理解できない、と呆然としたまま話す華琳。

違うね、お前は理解できないんじゃない。自分の理想と想いが絡まって、どうしたいかという考えから逃避してるだけだ。

中途半端な状態で、決断を拒否して、お前の中の俺を扱いかねているだけだ。だからこそ、こう答えよう。

「お前が、俺の為に王であるうちは、俺とお前の関係は変わらん。」
それだけで、と背を向ける。

実際、華琳の元に留まらない事に難しい理由は本当に無かった。

まあ確かに俺は元々誰かに仕えるつもりなどなかったし、俺と関係を持った後に愛紗達がそれぞれ別の主人を望んでも、その主人に敵対はせずとも仕える事はなかっただろう。最悪、目的の為に利用するなら目的が一番近くてやりやすい劉備にするつもりだったしな。

そんな俺が、仕えても良いかな？なんて考えるくらいには、俺自身かなり華琳を気に入っているんだろうし、その自覚も既にある。だが、だからこそ俺はまだ華琳に仕える事はない。何故なら、かつての彼女が霸王として求めたのは豪傑としての俺で、今の彼女が求めているのは恋人としての俺だ。

いつか華琳自身が言った。俺に相応しい存在になって俺を臣下に迎えると。俺はその時はまだ誰かに仕える気など微塵もなかったから、気のない返事を返した。

だが、そんな彼女の努力する姿や在り方を見るうちに、彼女に仕えることも考えるほどに感化された俺は、1つだけ決意したことがある。

それは彼女が努力するに足る、彼女が望む俺であり続けること。

「圧倒的強者である俺」を「臣下にするに相応しい存在」である為に努力を続け、日々覇道を邁進する華琳に応えるには、俺は「華琳が様々な努力の果てに手に入れる価値のある存在」であるべきだと思つたのだ。それが特典任せで本来なら大した価値のない俺の為に努力を重ねる彼女に対しての俺が出来うる最大の誠意だと思つた。

だからこそ、華琳が俺への恋慕で自分が俺に相応しい王として揺らいでいる事に苦悩した時、華琳自身が望む理想の霸王であるように俺の方から線を引いた。

他でもない俺自身が、俺に相応しい存在になる努力をする華琳の妨げになると知ってしまったから。

華琳が最初に求めた豪傑たる俺。そこに想い人としての俺を重ねてしまった彼女は、自分がどうあるべきか分からなくなつていたんだと思う。王であらねば俺は臣下にならない。だが、恋人、あるいは夫としても俺といたい。劉備あたりなら臣下のまま恋人になつちやえばいいんだよ！なんて呑気なことを言いそうだが、俺の為に理想を目指した華琳はそれが出来なかつた。恐らく、そうしてしまえば自分が俺の望むものとは別の存在になると彼女は考えてしまったのだろう。

彼女の中で、俺が仕える王としての自分と、俺と愛し合う恋人としての自分は違い過ぎた。だからそんな自分は同一に存在しない、どちらか片方しか選べない。

俺を臣下にすれば。王である彼女は俺と恋愛的には結ばれない。

俺を恋人にすれば、彼女が求めた臣下としての俺は手に入らない。

実際のところは全て置いて、恐らく華琳はそんな思考のループに嵌まってしまったんではなからうか。

だから俺は華琳が悩まないように、臣下にした俺であり続けた。彼女が、俺と出会ってから生まれた恋慕の感情。その気持ちは非常に嬉しかったが、俺みたいな蛮族相手にそんな感情を抱いてしまうのは間違いだと思ったし、彼女の努力を、苦労を知った俺には、一時の気の迷いかもしれない感情で、彼女が必死に積み上げてきた日々を、否定してしまうのが嫌だった。

だから何かと理由をつけて、彼女の下で働いている時も彼女の側での仕事はほとんどしなかった。俺がなるべく警邏隊に居ようとしたのも、華琳との接触を減らす為だった。

まあ、だから劉備さんの事で華琳に思いつきり頼らねばならなかった時とか割と断腸の思いだったわけだが。劉備さんマジ許さない。後で村の桃買い占めてやる。そして流琉と2人で美味しく調理した挙句分けてやらない。今や流琉の料理はそんな脅しになるくらい旨さがあるのだよ!ふははは!

長々と語つたが、そんな訳で未だどっちつかずの状態の華琳には俺も応えてやれぬ。彼女が今回とつたやり方は王としても、ただの華琳としても中途半端だ。支離滅裂ギリギリの話し方だったし、訳分かんなくなつたままここまで来てしまつたのだろう。

どうにも追い込んでしまつたのは俺らしいので申し訳なさも感じるのだが、此処は厳しく行かなければならない。彼女がどうしたいかは分からないが、今の彼女はらしくない。何故なら、俺の知つてる華琳は、誰かに媚びるような真似はしない。どの様な立場にあつても、彼女の誇り高さは曇らないはずだ。

そんな事を考えながら華琳に背を向け、ウチの女性陣の方へ向かう。

グイッ

向か・・・向かえなかつた。後ろ足のズボンを華琳が摘むようにして引き止められて

いた。しかし振り向かない。

「……いや。」

そう小さく呟いた華琳。

その姿は普段の威厳をまるで感じさせなかった。先ほどまで彼女を中心に渦巻いていた狂気的な鬼気もいつの間にか失せていた。

俺を僅かに摘んだ右手が微かに震え、行かないで、と想いを叫ぶ瞳は涙で潤んでいた。そこにかの霸王の姿は何処にもなく、年相応の少女にしか見えなかった。

駄目、と彼女が震むほど小さな声で囁き、へたり込んだまま、今度は縋る様に、両手で俺の足を掴む。

「貴方は私のものよ。何処にも行かせないわ。……何処にも、行かないで。」

ズキユウン！

何この可愛いはおーさま。最強かよ！

俺の誓いが秒で崩れそうになる。即振り返って頭を撫でそうになった。むしろならなかったのは奇跡と言っていいだろう。

ピタ、と身体が固まる。振り返りたいが気合いで堪える。何時もなら動きが止まった時点で愛紗達に腕を引っ張られるが、あの殺気立っていた愛紗達でさえ俺の後方、華琳を見て固まっている。どっかの華琳大好き2人は、さつき俺と甘酸っぱい空気を出したとは思えないほど鼻血出しながら華琳しゃまー!状態だ。たぶん直視できる皆には、広過ぎる視野でうっすら確認しているだけの俺よりも遥かに可愛い華琳が見えていることだろう。

ああああ、振り返りたい!振り返りたいが……!

が、我慢だ俺!ここで負けるな俺!ここで負けてはならないんだ俺!

彼女が正しく霸王である為に、ここは心を鬼にするんだ俺!人に厳しく自分にもっと厳しく!そういうの凄い苦手だけど頑張れ俺!

何とか一歩を踏み出す。後たった10歩ほどの距離。びっくりするぐらい足が重く感じる!死ぬほど後ろ髪引かれるけど……!ま、まけぬ!

ふと前を見たらもはや俺を見てない女性陣。レズっ気のある雪蓮なんか俺の代わりに華琳を抱きしめそうな勢いで身体が前のめりになっている。

しかしそれでも!

齒をくいしばって更に一步を踏み出す。

それでも、守りたい世界があるんだー!!

うおおお、俺は修羅になるぞジヨジヨー!!

「お願い、道玄・・・、こっちを見て。私を、見て！」

はい喜んでー!

可愛いはおーさまには勝てなかったよ・・・。

■
イチャイチャ、イチャイチャ。

「離れてください。そこは私の場所です。」

「知らないわ。この国に於いてこの場所は私の場所よ。」

「ならば今すぐその首を落としましょうや。そうすれば名実共に私のものですな?」

「させるわけないだろう。今日からここは私達の場所だ。諦めて帰るが良い!」

「姉様、殺しましょう。待つ理由がないわ。」

「そうね。冥琳?」

「とうに指示は出している。お前達はどうだ、凧。」

「いつでも殺れます。」

まあまあ皆落ち着けよ。いつもはお前達が優先されているのは確かだし、今日ぐらい「ああ、?!」すいません調子に乗りましたごめんさい。

現在。

結局可愛い過ぎるはおーさまには勝てず、振り返って抱きしめてしまった俺は、衆人環視の中戦争で離れ離れになった恋人同士の再会並に劇的なハグをかました後、それはもうディーブなキスをした。

そして、そのまま人間のドロドロなアレを見せない為にちびっ子組と一緒に避難させた璃々に隙間から覗き見られてガチ落ち込んだ。

今は少し落ち着いて、さつきと同じ様に華琳を膝の上に乗せながら周りを春蘭達に固められている。もっとも華琳は先ほどと違い俺に向かい合う様に膝の上に座っている。先ほどから猫の様に顔を擦り付けてきたり甘噛みしたりキスしたりとイチヤイチャつぷりが跳ね上がっている為、先ほど華琳の可愛さにやられていた女性陣が正気に戻ってしまい、再び修羅場に突入してしまった。むしろ先ほどより苛立っているだろう。超怖い。

なお、肝心の華琳は無茶苦茶ご機嫌である。膝の上で誰だこいつレベルで可愛らしくして、私は貴方の前では霸王でありながらただの華琳でもあることにしたわ、と

ても楽しそうに笑った。無茶苦茶可愛い。色々吹っ切れたみたいでそれはいいけども
うそろそろ女性陣煽るのやめて? あ、駄目? 了解です。

元気一杯な曹仁さんと一緒に、覗いていたちびっ子どもを遊びに行かせて良かった。
これは教育に良くない。何が良くないって曹仁さんの居なくなつた背中側を争つてい
るのが黄忠と陳珪さんっていうね。お前は一体何してんだ、紫苑エ・・・。

んー、これ以上は不味いな。華琳が可愛過ぎてされるがままになつて居たが、これ以
上は流石にヤバイ。愛紗が俺に触れなさ過ぎる&他の女が触り過ぎるでどんどん顔か
ら表情が無くなつていつてる。

仕方ないのでそろそろ何とかしよう。ちようどうちの女性陣と争つてるので俺自
身の拘束は緩い。さっくり手足を引き抜いて立ち上がり、華琳を引き剥がす。

私じゃ嫌なの? と本当に俺の知つてる華琳じゃないような事を言われるが、苦笑いし
て誤魔化す。華琳を寝台の上に降ろすと同時に愛紗が右側に抱きついてきて、左側には
なんと蓮華だった。いつもの星や凧は春蘭達と睨み合つてて出遅れた様だ。唾然とし
ている。反対側の秋蘭や、桂花と争つた冥琳はしてやられた! って顔をしている。

もう離しません、と苛立ちを露わにしがみ付く愛紗を見て、やれやれと、どう宥める
か考えていたら後ろから軽く衝撃、ついでに軽い重み。

鈴々が戻つて来たのかと思つたら、鈴々よりずっと長い脚が見えた。あれ、この脚は恋か？いきなり肩車したから鈴々かと思つた。どうしたいきなり。なんかあつたか？

「・・・恋も、したくなつた。」

肩車をか？鈴々みたいだがまあよかる。とりあえずそのままにして、雪蓮に向く。このままじゃここに来た意味無いしな。おい雪蓮、ひと段落ついたし、よく分かんが華琳に用があつたんだろ？それは良いのか？

「・・・あー。確かにこんな予定じゃなかつたわね。ある意味今既にやつてると言えはやつてるけど。」

「確かに。何を仕掛けて来てもおかしくはなかつたが、流石にあそこまで強引な手を打つてくるとは・・・！」

え、何それ。心理戦的なサムシングだったのか。つて事はあれ一応華琳の策でもあつたのか。本人が情緒不安定過ぎてなんか最後の方よく分からない感じだったけど。あのまま行つたらたぶん華琳と俺でキングゲイナーのオープニングしてた。

「当然よ。まあ、私が王となり、道玄が私の領地に足を踏み入れている時点で私の勝ちは決まっていたけれど。」

やや不満そうな顔しながらはおーさまから霸王様に戻つた華琳がそんな事をいう。え、俺関係してんの？マジで？初耳ですけど。

そんな俺を差し置いて、孫呉と曹魏のみんなの言い合いが続いている。祭が凄い勢いで秋蘭と睨みあつてたり、華琳と雪蓮が無言で覇氣のぶつけ合いみたいなの状況。俺に説明してくれる親切な人は一人もいないらしい。

うちの女性陣は割と静観の構えだ。星とか凧とかは普通に混じつて睨みあつてるけど。その横で流琉が季衣ちゃんと仲良く話してるのが凄いシユール。どうでもいいけど季衣ちゃんよく分かつてないみたいだから混ぜないであげてね、流琉。

他の皆はどう成ろうと俺と共にあるのは変わらないらしい。いや、それは嬉しいけど、まず俺がどう関係してるか教えてよ。訳が分からん。そう言つても当然の如くスルーされた。

どうしたもんか、と頭をかく。埒あかんなこれ。

こうなつたら一旦放り投げて帰るか。もうウチの娘達と璃々に癒やされたい。そう提案すると引つ付いていた3人と、蓮華の側に控える思春から賛成が取れたので、抜き足差し足でひっそり天幕から抜け出す。

そんな時だった。

「どこへ行くんですか？」

唐突、としか言いようがない。

正しく唐突にそれは来た。俺の知らない圧倒的なオーラを纏い、強烈な熱気と共にやっけて来た。

「駄目ですよ、道玄さん。ここは分水嶺。この中華の行く末を左右する、大事な大事な分水嶺。貴方が逃げちや駄目です。」

王。

それ以外の認識が出来ない。

大きな声では無い。威圧感があるわけでも無い。普通に話しているだけなのに、否応なく全身に染み渡る、声。

嫺やかな佇まい。殺気も殺意も感じないのに息苦しく感じる程に強大なオーラが漂う。彼女はその瞳に決意を込めて、強い意志を吐き出すように言った。

「さあ、参りましょう。今日が歴史の転換点です!」

・・・その前に1つ良いだろうか。

「?・・・何でしょうか?」

「誰だお前。」

世界が凍った。

・
・
・

あ、ありのままに今起こった事を話すぜっ！

この場を離れようとしたら王に話しかけられた！

王だと思つてたら劉備さんだった！

な、何を言つてるか分からねーと思うが俺も分からねー！

あれは演技だとか、猫被りだとか、そんなチャチなもんじゃあ断じてねー！

頭がおかしくなりそうだぜ・・・！

「もうっ！そこまで言わなくても良いじゃないですかあー!!」

酷いです!!とプンプン怒る劉備さん。

そう、さっきの覚醒したメルエムさん並に王。なオーラのカリスマはまさかの劉備さ

んだったのだ。

いや確かに見た目とか何も変わってなかったけどマジ分からはなかつたレベル。どんな進化をしたらこうなるのか。え、まさか原作だと最終的にこうなるの？

・・・原作やっておくべきだったか。

今更だが反省しておく。まあ次に活かせないからどうしようもないけど。まあいや、俺たち飯食いに行つてくるから積もる話は後にしてくれ。華琳ならあそこで雪蓮となんか睨みあつてるから。んじやな。

「ちよちよ、ちよつと待つて下さい道玄さん！話聞いてました!」

あれ、一刀君じゃんおひさー。さっきの戦いは見事だったぞ！うちの女性陣も褒めてた。華琳と一緒にいるからは非報告しといで。あと俺飯作つてるって女性陣に伝えといて。何気さつき覗いてたちびつ子達が俺の為に華琳が用意したらしいご馳走たべちやつたから自前で用意しないと。なあ恋、華琳の手料理は美味かつたか？あ、一緒につまんでたのは知ってる。はは、凄いスピードだったな。怒つてないから安心おし。

「あ、お久しぶりです。本当ですか!?!いや師匠達に褒められると嬉しい……つてちがあー

う！何普通に世間話して帰ろうとしてるんですか！何の為に此処に来たんですか貴方は!？」

おお、ナイスなノリツツコミ！相変わらずキレイキレイだな！あ、劉備さん、後ろの愚連隊みたいな暑苦しい熱気を放つ兵下がらせて。鬱陶しいし、こんなにかくさん天幕に入らないぞ。え、近衛兵？知らんよ

さておき、何の為とか言われても・・・雇用主の孫策について来ただけだし。特に目的はないよ？

しぶしぶ兵を戻らせる劉備さんを横目に、一刀君にそう言ってやる。そう言うのと兵と戻らなかった太眉の女の子達が驚き、先頭の十文字槍を持った女の子はとぼけるな！と怒り出す。とぼける？何をだよ。

「ちよ、落ち着いて翠。この人相手に喧嘩売つちや駄目だよ。道玄さんもこんな時までふざけないで・・・あの、ふざけてるだけ、ですよね？」

俺のこのキョトン顔が冗談に見えるか？

「北郷殿、彼は本気ですよ。」

「一度ちゃんと説明したけど、妹達と遊ぶのに夢中で聞いてなかったらしいわ。」

ええええ・・・！と驚愕する劉備さん達。槍を持った太眉な女の子達がマジかよお前、みたいな顔をするがマジで何の話かわからぬ。というかこの太眉さん達は誰だ。華琳

さんも劉備さんも俺の知らない人材だし過ぎだぜ。あ、どうも。私は羌毅と申す。見ての通り蛮族どすえ。ちなみこちらは孫権。孫策の妹です。さつきから楽しそうにキョロキョロしてる上の子は呂布。2人は初対面だよね？

「あ、すいません。こっちの子は馬超で後ろが馬岱、その後ろのつてええっ!?!孫権っ!?!そんなでもつてりよりよ、呂布う!?!」

あの万夫不当がこの女の子・・・?と驚きまくる一刀君。まあ驚くよね普通は。呂布と言えば普通はモリモリ筋肉の俺みたいな大男を思い浮かべるもん。まさかこんな少女だとは思うまい。俺も前世知識がなければ詐欺を疑う。それはそうと一刀君、紹介されてない2人が不満気な顔してるよ?あと劉備さんが1人キョトンとしてる。まあ太眉さん達は会ってないだけで反董卓連合来てたらしいけど、一刀君と劉備さんは来てないからね。知識で知ってる一刀君は分かるけど、劉備さんは分からないよね。

言われて気付いた一刀君は、劉備さんに説明を始めてしまったので、本人たちが自己紹介してくれた。何故か馬岱さんもしてくれたが、残りの2人は馬休さんと馬鉄さんというらしい。へー、またしても前世の2次創作知識に無い人達が出てきたぞ。オリキャラはどう扱えばいいか分からないから困るね!

その辺りで劉備さんが一刀君から説明を聞き終えたらしく、驚愕の声を上げた。そして俺の頭の上の恋をいきなり勧誘し始めた。そして話してる途中で拒否られた。

「恋、だんちよの女。だんちよの側が、恋の居場所。何処にもいかない。」

え、何この子。急にきゅんと来ること言わないで感動するだろ！でもありがとう嬉しいよ！とりあえず頭を撫でて感謝を示す。肩車してるから非常にやりにくい。恋が身体を屈めてくれたので何とか撫でる。

あの呂布が・・・！と驚愕しまくってる馬家の皆さん。なんぞ？と不思議に思ってたから、反董卓連合の際、俺らが後方待機している時、孫策と一緒に呂布に挑んで全員薙ぎ払われたらしい。退き際を無視した马超さんなんかは孫策と一緒にうっかり死にかけたとか何とか。

そうだったのか。いや、恋と戦って良く生きてたね。うちの女性陣が10人単位で戦わないと本気も出させられないレベルなのに。そう言って褒めたらいやあ其れ程でも！と照れて嬉しそうになる马超さん。さっきまでの劍幕は一瞬でなくなつた。あ、げろチヨロだなこの人。

「まあその私達が束にならないと勝てない呂布を含めた全員を相手にして無傷なのが道玄なのですが。」

「しかもそれで全力でないからな。私の剣で跡もつかない……!」

「だんちよ、強い。」

「あはは、見ているだけの私でさえ有り得ないって思うから、実際に刃を交える愛紗達は余程でしょうね。」

え、何それ怖い、と馬岱さん達が一步下がる。あ、反董卓連合の時の俺と恋の闘いは見てないの? 马超さんの看病してた? なるほど。

その言葉で褒められて舞い上がってた马超さんは固まった。劉備さんと一刀君はまたお前か、みたいな顔でジト目である。失礼な! 俺は素手だから刃を交えた事はないぞ? え、なに思春、余計に駄目?

こら、知らない人の前で人をバケモノみたいに言うんじゃない。これでも必死でやってるんだぞ?

「それは私達に怪我をさせないように、の話であって、負けないように、ではないでしょ

う?」

・・・はは、何を馬鹿な。

視線が泳いでる? き、気のせいだよ!

ジト目の女性陣の追及から目を逸らして誤魔化す。慣れている愛紗はもはや諦めムードだが、思春はまだちよつと悔しいらしい。そんな目で見るな。手を抜くと怒るのお前達だろ。

咄嗟に左手に巻きつく蓮華を思春ごと押し飛ばし、その手でそのまま肩の上の恋を片手で引っこ抜いてそのまま上に投げる。右腕の愛紗は腕ごと背中に隠す。次の瞬間!

ガキイツ

俺の左胸に十文字の槍が殺到し、しかし皮膚一枚通らず弾かれた!

「っ!」

落ちてきた恋が危なげなく元通りに肩に着席する。蓮華は驚愕しているが、思春は反応してくれたようだ。転ける事なく着地し、武器を抜いて鋭い視線をこちらに飛ばしている。争いになりそうなので先に話しかけるか。

おい、いきなりするのは構わんが、他に人がいる時は最低限配慮しろ。巻き込んだらどうする。

「は、弾かれた? 生身なの?」

いや、聞けよ。

何でか急に馬超さんに攻撃されたでござす。最初から目的は俺みただが、あれだけ密着してたら女性陣も危ない。そこはマジで気をつけてもらわないと困るよチミ。

「どう言うつもりだ貴様ツ!!」

「ちよ、お姉様っ!?!いきなり何してんの!?!」

「翠ちゃん!?!何を!?!」

一歩間違えれば蓮華が巻き込まれていたのも、案の上ブチギレた思春と、予想外だったらしい馬岱さんと劉備さんが馬超さんに詰め寄る。一刀君達は予想外過ぎてまだ固まってる。おやおや、一刀君、いくら強くなってもこの程度で固まったら駄目だよ? 戦場で止まることは死を意味するって教えたろ?

「ハッ!?!す、すいません、油断してました……。あの、大丈夫ですか?」

ん? 大丈夫大丈夫。恋も蓮華にも怪我はないよ。俺? 俺を殺したきやせめて音速以上で攻撃しないと。にしてもいきなりどうしたの馬超さん。脈絡なさ過ぎて少し驚いた、あの子戦闘狂か何か?

「い、いえ、そんな事は無いです!す、翠、どうしていきなりこんな事を!道玄さんのことは散々教えただろ!?!」

「あ、いや……ごめんご主人様、余りにも隙だらけだったから本当に話の通り強いのかつ

て疑問に思っちゃって。つい……。」
「つい?! ついでいきなり人に攻撃したのお姉様!? あ、頭大丈夫?」

ああ、何となく殺せそうだったからか。まあ俺自分の身に關しては警戒とかまるでてないからな。殺しやすく見えるよな! はは、ウケるw

ん? 何蓮華。何がおかしいって? そんな怒るなよ。お前の姉も初対面あんな感じだったぞ? 寧ろもつと殺意全開だった。思い出して笑いが止まらないぜ。

「姉様……! い、いや、それどころじゃ無いでしょ! 貴方今命狙われたのよ!」

「うるさいわね、さつきから何を騒いでるの蓮華。……あら? どういう状況かしら?」

「道玄、伴侶の私を置いてどこに……劉備、説明して貰えるかしら?」

「主人、私達を置いて逃げるなど……むっ?」

あ、いっけね。抜け出したのバレた。どう誤魔化そう。そんな事を考えながら愛紗の肩を抑えて引き止める。待て待て、誰も怪我してないから落ち着け。

「え? うわっ! いきなり何するんだお前!」

「きやあつ、嘘っ、いつの間に!」

「邪魔しないで下さい、道玄。下手人を仕留め損ねました。」

俺が止めた事でギリギリ愛紗の矛が馬超さんの胸を貫く事なく止まり、気付かなかつ

たらしい馬超さんと馬岱さんが驚く。どうでもいいけどいきなり槍で突いた人のセリフじゃないよ、馬超さん。

「うぐつ、武人の癖に油断する方が悪いだろ!」

いや俺武人じゃないし蛮族だし。常在戦場関係ないし。というかうっかりやらかして引つ込みつかなくなってるのは分かるけど落ち着け。落ち着いて自分の非を認めて謝罪しなさい。俺は特に怒ってないからそれで治まる。つか、俺だって腕は二本しかないから抑え切れない。

「何を言ってる……ッ!? 卑怯だぞっ!」

いや、だから君が言うなっつて。

まあでも皆も落ち着け。誰も怪我してないから。

そう言ってる周りの皆を牽制する。いつの間にか皆が劉備さん達を完全に包囲して武器を突き付けていた。

流石にこの状態のヤバさが分かるらしい劉備さん達が慌てている。馬超さんもやかした事を漸く察したようで、ちよつと顔が青い。

「よく分からないが、我が伴侶を馬超が手に掛けようとした、ということか? 答えよ、劉備。」

「まだあんたのものじゃないわよ、華琳。まあそれはさておき、どうなの劉備。事と次第

によつては・・・分かつてるわよね？」

「・・・すいません。私の監督が行き届いて無かったです。」

ああ、もう誰も話聞いてないな。完全に劉備さん達を処断する構えである。いいじゃないかうっかりなんだし。俺にダメージ無いし。まあこれが女性陣にやったならもう木っ端微塵にしてる。あの地球人の様にな！誰だよつて話だよねー。

やれやれ、と一歩前が出る。仕方ないので鎮圧しよう。おい、と馬超さんに声を掛ける。

なんだよ、と武器をこちらに向けて威嚇する馬超さん。完全に引つ込みがつかなくなつてらしい、後ろで顔真つ青の馬岱さんが怯えている。やれやれ、とため息を吐いた。そして俺に向けられた馬超さんの十文字の槍の穂先が交差する部分を掴む。

グシヤ

「ハアツ!!わ、私の銀閃がつ!!」

さつくり握り潰してやると馬超さんが驚愕し叫んだ。そこで全員の意識がこつちに向いたのもう一度落ち着く様に言う。今度は聞こえたらしい、武器は降ろさないままだが、皆闘気を消した。

やれやれである。とりあえず馬超さんには俺はともかく、他人に配慮しなかった罰だと言つて砕いた武器のカケラを更に握り潰し、粉末レベルにしてサラサラと目の前で地面に捨てる。これで手打ちだ。文句は? ないな、よし。

勝手に話を終わらせ、納得のいかない連中が騒ぐ前に俺から話を切り出す。おい雪蓮。

「私? なによ?」

なんかさつきからやたらと何のためにここに来たかつて怒られるんだけど。何か理由とかあつたの? 誰も教えてくれないんだけど。

「あんたねえ．．．! 私が何度軍議で話したと思つてるのよ!! 再三確認もしたのよ!」

そうなの? すまん、軍議なんかより娘と遊ぶ方が優先順位高いんだ、俺。そう素直に言つてみる。あ、雪蓮が落ち込んで冥琳に泣き付いた。

「いや雪蓮、お前も戦場ではあんな感じだぞ? 私の話毎回無視するし、無茶な突撃はするし。道玄は兵に被害がない分、お前の方が酷い。」

はうつ、と胸を押さえて仰け反る雪蓮。心当たりがあるようで、今までごめんね、と逆に反省しました。いや、それはいいから。

「あんた本当にどこでも軍議聞かないわね．．．。」

疲れたような顔の桂花がやれやれと頭をさすりながら言った。

「いい？一回しか言わないから良く聞きなさい。ここに皆が集まった理由それは――」

あんたの所属を決めるためよ。」

・・・え、何それ俺の意思は？

だから何度も話したって言ってんでしょが！と、全員から怒られました。

テヘペロリン！

??

「議論の余地など何もないわ。私と道玄は既に夫婦。我が曹魏こそ彼の無二の居場所よ。」

「貴女が勝手に決めた、貴女の国の中だけの話でしょう?そもそも道玄の了承を得ない時点で話にならないわ。どう考えても彼の寵愛を受ける女が数多く居る我が孫呉こそがふさわしい。」

「愛人の数で道玄さんを語らないで下さい。あの方はアレで自分から女性に手を出したりはしないです。愛人が多いということはそれだけ貴女達から迫ったというだけのはしたくない話、何の自慢にもなりません。かねてよりずっと協力関係にあった私達と共にあるのが自然でしょう。」

「険悪、という他ないプレッシャーの中、絶賛三国会議(仮)が行われております。ちなみに(仮)がつくのは、正式に国として独立を果たして居るのは魏だけだからだ。孫呉とか劉蜀とかは国民に通達してないのでまだ国じゃないが、一応天下は殆どこの3人の誰か、という事でこうなったらしい。」

「華琳はきつちり霸王様モードだし、雪蓮は珍しくシリアスな面構えである。そんな覇気溢れる2人と平然とやりあえてるのがあの劉備さんだと思いと、正直夢でも見てる気分だ。この人いつの間にかこんな進化したんだ?え、原因俺?・・・どうしよう、まさか

あの八つ当たりでここまで人間性変えちゃうとか。今更謝罪しても駄目だよね、ヤバい。

さて、あの後だが結局話を有耶無耶にし損ねて、逃げ出したことを皆に叱られた。そしてその後なんやかんや揉めたが、とりあえず俺たちも長い行軍して来たし、華琳と劉備さんは今日戦が終わったばかりだ。お互い疲れているし、まずは休もう！との事で、一旦解散し、会議は翌日の昼以降に持ち越しになった。

そしてそのまま女性陣に昼間の態度はなんだ！と怒られ、特に長く定位置を奪われていた愛紗なんかは何の容赦もなかった。そしてさも当然の様に交じった秋蘭を含めた女性陣全員のお相手をさせられていたところ、特別待遇の捕虜扱いだった顔良と田豊がお礼を言いに来たと言って天幕に侵入、何故か事を覗くという事態になり、またしてもいつの間にか覗きに来ていた黄忠や美羽達も連座で発見されたことで何とか三日三晩くらいでお開きになった。俺的には結果オーライだ。

最近は人数が増え過ぎて夜は早く爆睡しちゃう筈の俺が徹夜に慣れるという異常事態もさる事ながら、最近またしても精力が強化されたらしい俺の身体にも疑問は尽きない。

それと、袁紹さんと文醜さんは騒がしいので2人とは別々に隔離されているらしい。2人は心配していたが、フオローする2人がいない以上無茶は出来ない筈なので、袁紹さん達が解放されるまでの短い休暇を素直に楽しめ、とアドバイスしておいた。心配で逆に休まらない、と即答される。これがワーカーホリックか。

仕方ないのでしばらく俺たちと一緒にいる事を提案する。何せウチにはスーパー料理人の流琉が居る。あの素晴らしい料理の数々と、うちの娘達と璃々の愛らしさがあれば癒されることは必至である。むしろ逆にハマって抜け出せなくなるレベル。おまけに今は仕事が終わったばかりなので丸ごと休暇である。前世の俺ならそのまま墮落する幸せ空間だ。

そんな話をするると2人も案外乗り気だ。心配だけど偶には解放されたいらしい。よかよか、すっかり癒されるといいよ。そして是非また2人の保護者頑張ってくれ。万が一にも俺は嫌だ。なんて内心はもちろん語らずにおく。

え、対価? いや別に何もいらないけど? あれ、何で顔赤いんだお前ら・・・あつ(察し)。

安心してくれ、誰に言われたかはあそこに居るメンマで大体把握した。もちろん対価に身体を要求したりしないので、気兼ねなく休む様に。俺はちよつと今から用事が出来たので失礼する。またな!

逃げるなこの残念メンマコラア！

・・・そんなこんな流れであつという間に翌日の昼。俺だけ一切疲れが取れないままに三国会議に出席である。正直既にどうでも良い気がする。

なお、この会議は代表者こそそれぞれの王がやっているが、周りには俺と関係の深い者達が並び、各々言い争っている。何でも俺を慕い、本当に俺と未来を想える者だけがこの場に立つ資格がどうか言つてた。俺を想うならまず俺の意思を確認しよう・・・。

ちなみに、一応女性以外にも良く酒を飲んだ男性兵や仲の良い一刀君も並んでいたのだが、女性陣の覇気についていけず、始まつて五分で壁際に並んで置物と化している。

どうやらこれが以前祭が言つてた祭が行かねばならない理由つて奴の様だ。なるほど、このために華琳は俺の知らない女性をも連れて来たのか。俺が知らない時点で意味ないと思うけど、数が多ければ発言も増える、ということか。

とはいえ、それなら確かに孫呉が1番強い。なんだかんだ俺が手を出した相手が1番

多いし。まあ劉備さんの言う通り、そんな理由で所属を決めるわけじゃ無いしなあ。と
いうかその方法なら蜀は始まる前から惨敗である？

にしてもあれだな・・・なあお前ら、もし何処かに所属するとしたらどこにする？

今となつては不毛な話だが、ちよつと気になつてウチの女性陣に聞いてみた。ちようど
俺の膝の上で眠る璃々に薄手の毛布をかけてくれた愛紗が、即答で魏以外ですな、と答
える。他の皆もとりあえず其処は同意見らしい。ちよつと意外だ。確かにあの場の誰
とも仲がいいが、中でも華琳達とは一番古株な関係の為、もつと協力するかと思つたん
だが。

激しく言い争う3人も聞いていたらしい。露骨に華琳さんが不満気な顔をし、他の2
人が1人脱落、とでも言いたげに勝ち誇る。華琳が何故、とこちらに文句を言う。当た
り前でしょう、と愛紗が呆れた。

「彼を慕うものこそが彼を手に入れるに相応しい、というならば。常に彼の側には私達
が居ます。その私達を無視して道玄の妻？あり得ません。・・・何より、道玄の正妻は
私です。」

「勝手に決めるな、愛紗。我が主人には女が多い、お主の様な独占主義が正妻では主人が
苦しむ。夫を苦しめる妻などおらぬ。正妻には私の様な大らかな女がなるべきだ。」

「お二人共、その辺にしましょう。妻を名乗るならまず夫の為の料理が出来ないといけ

ません。……私は既に良いお嫁さんになれると道玄様からお墨付きを頂いてますが、お二人は……失礼しました。それ以前の話でしたね。」

「なはは、まあこの3人はともかく、ウチらにおいて兄さんの正妻を気取る国はちよつと、なあ?」

「沙和は正妻にこだわりはないからどうでもいいの!でも妾か愛人の立ち位置は譲らないの!」

「だんちよ以外じゃ、恋が1番強い。だからだんちよの隣は、恋。」

「恋殿が正妻でねねが娘なのが1番ですぞ!」

「まあ、私達軍師組は正妻を特に希望してませんが、頭ごなしに彼の正妻を名乗られるのはちよつと……。」

「風ちゃんも別に正妻にこだわりはないです。お兄さんから言われたら嬉しいですけどー。」

「はわわ、最低限私達の中から正妻を選んで欲しいでしゅ!」

「あわわ、私達は娘枠ですつと一緒でしゅ!」

「私は兄さまの妹ですから。妻とか伴侶とか別れる可能性のある不安定な関係よりもつと固い絆で結ばれてますから。」

「ウチらはまあ新参者やしな。団長から直接言われたら喜んでうけるけど、最低限妾に

「居られれば文句ないで。」

「私も最悪子種さえ．．．いや、やはり妾くらいには収まりたいところだな!」

「わ、私は別に正妻じゃ無くても．．．あ、でも道玄に言われたらどうしよう．．．うへへ。」

「えう、私はずっとお側に居られれば何でも．．．でもご主人様から求めたら．．．きやつ。」

「私は月と一緒に側に置いてくれれば何でも構わないわ。まあ確かにウチの誰かが正妻の方が納得いくけど。」

「私は侍女兼愛人枠でお願ひしますうー。」

「わ、妾はお嫁さんが．．．ひいつり!? 娘がいいのじゃ!」

「鈴々もおつきくなったらおとーさんと結婚するのだ!」

鈴々が可愛過ぎる定期。とりあえずその3人は落ち着け、俺を挟んで暴れるな。あと美羽を脅すな。というか寝てる璃々が起きるから黙らんと向こう2週間ローテーションから外すぞ。

他の女性陣の落ち着いた回答に安心する。皆ありがとう。なんでこんな蛮族に惚れたのか分からんし正直趣味悪いと思うけど、大切にしたいと思います。え、ならまず浮

気止めろ？俺自身はだいたいなにもしてなあつ、はいごめんさい。

音音の頭を撫でながら、飛びつく鈴々を優しく受け止める。とりあえずもう可愛い娘がいるからなんかもう色々どうでもいいや。おとーさんは幸せです！あ、そんな感じで魏は駄目らしいよ華琳。やつちまったな。無かつたことにしたらどうだろうか？

「嫌よ。今まであの子達は一緒だったのだから、正妻の座は譲らないわ。何より貴方を迎える為に王まで昇りつめたのよ？妾なんてあり得ない。」

え、そうなの？初耳なんですけど。イケメン過ぎるなにその理由。あれっ、これアレじゃね？おれと華琳さんキャスティングミスじゃね？立ち位置逆の方が良かった気がする！

自分の女体化を想像したら頑張つても恋姫卑弥呼にしかならなかつたので記憶ごと思考を放棄した。女体化？知らない子ですね。

そんな感じで話を聞き流しつつウチの女性陣といちやいちやグダグダしてたら何か三国会議がちよつとストップしていた。おや、もう終わりなの？帰っていい？駄目？そっか。

「というかお主らするいぞ！儂らがこんなに頑張っている横でそんなに和氣藹々と・・・！道玄、お主も何とか言わんか！お主自身の話じゃぞ！」

「そうだな、結局道玄は何処に所属したいんだ？もちろん私のいる曹魏だとは思うが、いい加減お前自身の口から聞きたい。」

「もちろん私達のいる孫呉よね？王どころかその一族から臣下の全てが貴方の女になるわよ？」

「あの、むしろその通りにしたら道玄さん死んじゃうんじゃない？」

一刀君がちよつとだけフオーローしてくれた。雪蓮達どころか華琳達にまで睨まれてすぐ壁際に戻ったけどありがとう！その通りです！むしろ俺のためを思うなら増やさないで欲しいです。その点だけで蜀に仕えたくなるレベル。怒られるから言わないけど。

てかさ、何でみんな俺取り合ってるの？俺傭兵だし、もつとこう・・・交渉的なのをまず俺とすべきじゃね？

ふと疑問に思ったので聞いてみる。なに言ってるんだこいつ、みたいな顔される。何故だ。え、俺が介入したところが勝つ？いやもう面倒だから否定しないけど、三国で何処も俺を雇わない協定でも結ばば？あ、誰もそれを考えなかった感じ？ウケる。

「言われてみれば盲点だったわね。確かにそれなら純粋に私達の闘いだわ。被害は増えるけれど。」

「悪くはないわ。勝者が全てを得る。分かりやすいわね。……それまで道玄がお預けになるのは嫌だけれど。」

「それをすると私達が一番不利ですが、確かにそれなら公平です。異論はありません。」

他の人たちも不満は無いらしい。なら決まりね、と雪蓮が確認し、皆が頷く。どうやら合意が取れたらしい。やれやれ、本当に俺が怒られたのは何だったんだ。

まあ言つといて何だがガチ争いはちよつと困るけども。なんか考えねば。

早速舌戦的なアレをしてる3人。いつの間にかこんなところまで来たんだなと思うと感慨深い。いやはや3人ともそれぞれテコ入れして来たけど、もうすぐ俺にとっての山場かあ。いやー、長かったような短かった様な……。まだ三年だけど。

まあ、皆頑張ってくれ。俺は最も重要な場面で乱入するからよろしくな？

何気なく戦線布告する。

その瞬間ウチの女性陣以外が全員ピタリ、と止まった。相変わらずこういう時だけは
何故か俺の話聞いてくれる不思議。

「我が主人、教えてしまつてよろしかったのですか?」

「はわわ、警戒されてしまいましゅ!」

良いんだよ。これで公平だし、警戒してくれた方が俺の目論見に近い結果になる。

そういうと、一同驚愕の表情を浮かべた。そんな、と悲しそうな声が誰かの口から漏れる。裏切られたと感じたのだろうか。一応その為に傭兵なだけどね、俺ら。

「道玄、一応聞いておくわ……. どういう意味かしら?」

はは、当然分かつてるだろうに。

俺は俺で好きにやるという事さ。雪蓮、お前が知りたがつていた俺の目的を今こそ教えよう。

「――国を造る。」

お前達と同じ様に、俺も俺の理想とする国を造る。

今までもこれから、その為に俺はこの地を守る。

にやりと悪役みたいに笑つてそう告げる。王である3人が、鋭い視線でこちらを射抜く。いいね、楽しくなつてきた。

すると視線はそのままに、何故?と問われる。華琳さんだ。

「何故、今なのかしら? 貴方がその気なら、わざわざこの場でそれを宣言せずとも、最初から貴方1人でこの国全てを従えられたはず。それを煩わしいと思つたにせよ、それな

「この場の誰かについて、乗っ取るだけで済む話。何故今なの？」

「それだけではないです。そもそも道玄さんが造る国とは何ですか？ 貴方程の人が国を造る、なんて事を思い付きで言うとは思えません。様々な下準備も無しに今、それを宣言する理由も不明です。」

「……王として聞きたい事全部言われちゃったから、私からは個人的に1つだけ。」

「……貴方の目的は、私達の誰かと一緒では叶わないものだったのかしら。私達では、貴方の側にいる資格は無いと、そういうこと？」

「あら、やっぱそれ聞いちやう？ 説明面倒なんだがなあ。」

「んー、そうだな。俺が今この状況でわざわざこんな事を言い出したのは、この三国が揃うのを待っていたからだ。君ならこの意味が分かるだろ、一刀君。君達には諸葛亮が居ないけど、君なら分かる。そうだろ？」

「っ！ 天下三分の計……！ 貴方は、やっぱりっ！」

「正解だ、一刀君。この中華がちょうど3つに分かれるこの時を待っていた。この時こそが分かれ目だ。この時の為にわざわざ本来いるべき場所から人を引き抜いた。この時の為に、戦場を渡り歩いた。全ては、今日この時の為！」

「道玄さん、貴方って人はあー！」

一刀君が激昂、こちらに向かつて走り出す。違うな一刀君。そこは更に何なんだあんなたはあー!だよ? まあそれはさておき。

「ちなみに、今の話は嘘だ。」

ズザーツ!!

おお、何という古典的リアクション! やるな一刀君! まさかそのまま顔面からコケるとは! 素晴らしい、実に素晴らしいぞ一刀君! . . . あれっ? どしたのみんな? なんかいっつきりコケたみたいないなカツコで。

「道玄 . . . 貴方はもつと真面目な雰囲気維持できないのですか? 流石に北郷殿や、彼女たちが可哀想です。」

「主人、毎度毎度その場の空気を粉砕する必要はないのですぞ?」

「事情を知る私達でさえこれは . . . 皆様、心中お察しします。」

なんだよー。険悪な雰囲気や真面目な空気を長々続けるのが悪いだろ。壊してくれって言うてるようなものじゃ無いか!

そんなノリで力説したら全員からメチャクチャ怒られた! 一刀君は何か落ち込んで馬岱さんとかに慰められてた。 . . . 解せぬ!

閑話休題

「……で？どつからどこまでが嘘なの？」

あん？なんだ分かつてたのか雪蓮。

……ええ、勘？カマかけただけ？クツソこんな奴に嵌められた。

まあいいや。とりあえずそもそも目的が後付けかな。国を造るって奴。だから当然それまでの過程も嘘だ。別に俺が考えて誰かを引き抜いた事なんか一度もない。というかその辺の決定権がまず俺にない。戦場に至っては仕事で無ければそもそも参加してない。

「ほ、ほとんどノリじゃないですか!？」

そう言われても困るなあ、一刀君や。事実だけでも。本来俺自身は君達の下に愛紗達を連れて行つたら山に帰って悠々自適に生活するつもりだったしな。今でこそこいつらを置いていくような真似はしないが。

「兄さん、それやとうちら兄さんとまず遭うてへんのやけど。」

「兄さま、私はどうなるんですか？」

どうなるんだっけ、一刀君?俺三国志ごく一部しか覚えて無いんだ、興味なかったから。

「俺っ!?覚えてない……なるほど、だからか。」

あ、えつと確か楽進、李典、于禁、典韋、張遼は曹孟徳の下にいたはずですけど……。」
へえ、そうだったんだー。だつてさ。

割と軽いノリで話したら無茶苦茶怒られた。実際やってないし良いじゃないかよう。あ、止めて愛紗。山に帰るつもりだったことバラさないで!!

華琳さんには私のものを盗んだのね!?とガチギレされた。失敬な、人をモノ扱いするでない!というか、俺についてくるとか言われた俺の方がびつくりしたわ!

第一、俺の知る歴史とここ色々違うんだよ!初対面で関羽は死にかけてるし、趙雲は自殺しようとするし、諸葛孔明と龐統は何故か幼女だし!そもそもだいたい女だし!だから色々違ってても何も悪くはない!たぶん。

「それは……まあ。俺も劉備や関羽が皆女性だった時は驚きましたから。でも死にかけてたつて……?」

「主人、主人、私は自殺しようとしてないですぞ?彼処から大逆転で賊の全てを薙ぎ払つてですな?」

「星、お前は私と道玄が行かなかつたら確実に死んでいただろう。あの数を何も考えずに正面から突撃するのは自殺で間違つてない。．．．私は道玄と会えましたから、あの危機に感謝しています。」

おお、そう言われると嬉しいな！愛い奴め。うりうり。

愛紗が可愛いので撫で回す。急にイチャイチャしたら一刀君にジト目されたがふはは、効かぬわ！あ、星ごめん止めて、今は愛紗とつてヤメロオ！ゆったりした服だからつて体ごと入ってくるな！なんかぞわぞわするだろ!?分かった、分かりました！だから出ろ！

「まあ貴方の正体は薄々勘付いていたから良いとして．．．まさか、貴方が私達を倒して王になる、なんてね。」

「仕方ないんじゃない？誰にでもその権利はあるわ。かなり苦しくなったのは事実だけど。」

「そうですね、私達がここまで来れたのは道玄さんのお陰ですから、その導いてくれた道玄さんにも王なる資格はあります。」

あ、そう言えば道玄さんはどんな王を目指しているのか聞いても良いですか？」

複雑そうな顔でそんな変な事を言いだす3人。何気俺の正体バレバレでわろた。まあやらかしまくってるから不思議では無いけど。てかさ、劉備さん、つて言うか3人とも。

・・・さつきから一体何の話？俺別に王になる気は無いけど。

あれっ、何でまた皆さん固まってんの？俺一度も王になるとは言っていないじゃん。

何故か唾然とする皆さんに聞いてみる。人の話聞いてた？俺国造るとは言ったけど、俺が王をやるつもりはないよ？てーかできん。知つてると思うけど、まだ文字の読み書きも出来ないのよ俺。え、じゃあどうするって、もちろん王は配置するよ3人くらい。

俺は何も出来ないの、一般的な蛮族として、必要な人材をかつぱらつてくるだけだよ。民も文官も王も、そこに変わりはない！と、ドヤ顔しておく。

「あの、それって・・・何の意味が。」

「道玄、それだとお主が何したいか分からんのかやが・・・？」

いやだから国造りだよ国造り。別に王以外が国造りしても良いだろ。俺は俺の理想の国が作りたいたいだけさ。その為に王を連れてきて働かせるだけだ。一刀君にも分かりやすく言うなら、俺は店主を雇って方針だけ投げて後は任せる株主的な奴になりたい。何というか、誰かに仕える気もないけど、誰かを使う立場も向いてないからさ。

「ねえ、道玄。それは私や姉様には手伝えない事なの？ 私達は孫呉を取り戻し、平和を築けるならば何でもするわ。わざわざこんなことをしなくても・・・。」

最初はそれも考えたよ、蓮華。だがそれだと孫呉に肩入れして周りをまるっとぶっ潰す感じになるだろ？ それでは駄目だ。各陣営にせつかく残した兵力がなくなってしまう。何の為にうちに武將をおいておいたかわからん。なにより、それをやると後が時間かかる。建て直す間にやってくる。そうなれば全て台無しだ。お前達が全てを賭けて目指すもの全てが無駄になる。それは駄目だ。できるだけ全ての兵力と国力は温存したい。

まあ本当にそれをするなら俺が一人で各国の王を捉えて人質にしちゃうのが一番被害が無くて楽チンなんだが、それでは理不尽過ぎてお前達も納得いかないだろうし。

「ちよつと待て道玄、お前の言い方ではまるで兵力を温存する理由があるみたいだが、この天下を賭けた戦い以上に力を使う理由があるのか?」

「……たぶんな。なんとも言えない。っていうか皆グイグイくるな今回は!?!深くは聞かんといてよいつもみたいに。あまりまだ言えないことがあるんや。」

「たぶん? 随分曖昧な発言ね。……さつきからアンタの言ってる事がいまいち要領得ないのは、それが関係してるの?」

ぎくっ!

馬鹿な、いつもならこれくらいの情報量で勝手に勘違いしてくれるはずなのにバレただど!?!だから話が長いのは嫌いなんだ! いや、ま、まだだ! まだ、終わらんよ!

「ハア……無駄ですよ、道玄。前と今では彼女達の理解度が違います。嬉しくないですけど。」

「そうだな。お前と実際に触れ合った今と、そうでない前では、お前に対する理解も深まっているし、なにより想いが違う。お前が何か隠してるのは私には分かるぞ?」

「冥琳、さりげなく自分だけ分かっているみたいない方をするでない。儂にもそれくらい分かるし、苟彘も分かっている。」

「むしろ、これぐらい分からずに道玄様の女を名乗られても困ります。」

ぬぬ、こーゆー時に限って勘違い系補正が働かないから困るな。とりあえず宣戦布告したら逃げれば良かった。てか風や愛紗は祭達を褒めてるのか貶してるのか。

どうしようか、流石にまだちゃんと言つてないうちにこの後の事をバラしていいのだろうか。いや、万が一泥沼バトルの時の強制介入の為に俺がラスボスになるフラグを今立てたわけだが、ナルトの最終決戦並みにテコ入れみたいな無理矢理だからな……。むむむ、悩むな。

などと考えてたら、華琳が目の前に来ていた。どうした、と訊ねるより早く、膝の上の璃々を抱き抱えたとそのまま入れ替わるように膝の上に乗ってきた。さりげなく璃々が起きないように気を遣って丁寧な動きな辺りがこの人の身のこなしを匂わせる。流石だ、思わずそのまま乗せてしまった。

可愛いわね、なんて笑いながら璃々を撫でる華琳。寝てる璃々も心なし嬉しそうだ。まあ璃々が可愛いのは全世界共通の常識なので当然である。なので璃々に手を挙げた兵士はアポ郎並にワールドエネミー。成長する前に殺されても仕方ないね！

なんて考えてたら、膝の上の華琳が見上げるように背を逸らし、左手を俺の頬に添えて、優しく言った。

・・・あれ。俺、信じてないように見える？

「実際はどうあれー、そうとられても仕方ないようには見えますー。」

風がそう言い、ウチの女性陣全員が頷く。マジか。

・・・ぬう。仕方ない。じゃあ全部話す。ただ、分かっていると思うが、この話は確証は無い。杞憂の可能性もある。良いか？

「全てよ。どんな話でも、一切合切全て話してもらおうわ。全てはそれからにしましう。」

分かった。じゃあ聞いてくれー・・・。

??

「五胡の大軍・・・!？」

「それが、貴方がずっと備えてきた中華全域の危機・・・。」

何故知ってるかとか言われると困るので、胡蝶の夢的なサムシングで色々な人の部下として最終決戦を生き残ったら毎回その直後に五胡の大群に襲われた事にして話して

みた。意外にもみんな信じてくれている。ちよつと驚きだ、自分で言うのも何だが、かなり胡散臭いことを言つてるとは思うのだが。実際穴だらけだし。

「道玄、それはどのくらいの規模なのかしら。中華全域、と言うくらいだからかなりの数なのは分かるのだけれど。」

・・・さあ? (2次創作だと) 毎回数が違うからな、今回がどのくらいかは分からんな。ああでも300万を下回つた事はないはずだ。

「さんびやくまつ!?!・・・そんな!!それが本当なら何でもつと早く・・・!」

いやだからまだ本当に起きるか分からないんだって一刀君。確かに俺がみた夢では毎度毎度状況は違えどこの場に居る全員が揃つてたし、最終的に天下をかけて争つた後、必ず五胡の大軍に襲われていたが、所詮夢だ、と言われてしまえばその通りだし、俺自身必ず来ると言う確証もない。

そんな状況で未来がヤバいから備えてくれって言われて君は信じられるか? よしん

ば君が信じたとして、目の前は乱世突入してて国は腐敗しまくり、民は飢え、人心乱れ放題、そんな自国を憂いて平和を取り戻す為に必死に頑張ってる他の奴らに確認ないけど将来ヤバいからみな協力しろって言えるか？言われてはいそうですか？手を取り合って協力するか？

「それは・・・まあ、確かにそうですね。」

「まあ、今ならともかく、知り合う前にいきなり言われたら普通にしないわねー。まず話半分も信用しないし。」

「正直、私達でも半信半疑ですから。道玄が人を巻き込んでまでこんな嘘をつくはずないって分かっていきますけど・・・。」

「だろ？まあそんなこんなで言わなかったんだよ。正直今でも俺の夢ならそれでいいと思ってる。だが、そうでなければ俺1人じゃ流石に手が回らん。どうしたって脇を抜かれる。どのくらいくるかは分からんが、最小でも300万と仮定したら俺を無視して走り抜ける奴らは一万や十万じゃあ効かない筈だ。」

流石に俺はゲームの世界に転生しちゃった！君ら登場キャラなんだー、とは言えないので色々ぼかしながらだが、とりあえず俺が主要国の兵を減らさない為に戦闘頑張ったり、国の発展にうすらぼんやり協力したり、武将引き抜いて兵をたくさん編成できなく

して互いの消耗減らしたりと密かに暗躍した内容を盛ったり減らしたり語らなかつたりしながら話す。

「だいたい話し終えたところで一息つくくと、白蓮がそう言えば、と口を開いた。

「元々道玄は五胡の大軍が来ても死なないからどうでもいいや、つて感じだったんだろ？それで愛紗達に会ってから愛紗達が住むこの国も仕方ないから守ろうとした。それで一人じゃ守りきれないから協力者を育ててた。．．．何で育ててたんだ？敵国が幾つあろうがお前が本腰入れて取り組めば何処だって簡単に堕ちるだろ？わざわざ待たずとも一つに纏めてから五胡に備えればいいじゃないか。天下を取ってきちんと収めれば平和になるし、余裕も出来る。こんなギリギリに協力仰ぐような形にしないで良かったんじゃないか。．．．？」

．．．白蓮は本当にこういう時気付かなくてもいいこと気付いちやうよねー。珍しく長文を話しやがって。とりあえず引き寄せて胸を揉みしだく。有耶無耶にしようとしてるんじゃない、誤魔化そうとしてるんだ！あ、膝の上だからって華琳も揉むなよ。これは俺のだぞ。え、代わりに春蘭の揉んでいい？：むむ、秋蘭とは感触違うのかちよつと気になる。あ、一刀君、喘ぐ白蓮をガン見するのは構わないが後ろで劉備さんがナン

トカ伝家抜いてるから氣を付けるよ。

いい加減にしろ！と白蓮に怒られた。くっそう、喘ぎ始めてたから後ちよつとだったのに。誤魔化そうとしても無駄よ、と膝の上の華琳がとてもいい笑顔で言った。お前はさつきまでおっぱいに夢中だっただろ。

「それは簡単ですよ。行く先々で相手の女に情が湧いて手を出せなくなつたんだんです。最終的にはその女の夢や理想の邪魔をしないどころか手助けしながら、離れたところで見守る母の様なモゴツ」

愛紗、何故それを知ってるかは置いといて、バラしちやいけないこともあるんだよ？友達と敵対出来ないから戦わない様にしてたとか言っちゃダメでしょ！恥ずかしくて俺死んじゃうよ？何平然とバラしてるのかな？かな？

「へえ・・・そういうこと。それだけの力があるのに士官も旗上げもしなかつたのは、しないのではなく出来なかつたのね。」

「見た目と違つてとんだ甘ちゃんね。・・・まあでも、道玄に好いてもらえるっていうのは、悪い気はしないけど。」

ああああ！ほら見る鬱陶しいニヤニヤされるじゃないか！クツソ鬱陶しい！言つとくけどな、俺の女の為であつてお前らの為じゃないって雪蓮俺の女だったー！言い訳通

じねー!

むっちゃ周りにニヤニヤされる。壁際の男性兵は愉悦wって顔してるし、うちの女性陣は浮気者! って不満気だ。唯一価値観が近い一刀君だけ、友人と敵対は出来ないですよ、と理解を示してくれる。流石イケメン略してさすいけ!

ぐぬぬ、ニヤニヤが鬱陶しいので膝の上の華琳を下ろしてやりたいが、更にその上の璃々が寝ているので手荒な真似は出来ない。汚い、流石霸王様汚い! っていうか霸王様の上で平然と眠れる璃々が大物過ぎる。将来は凄惨になるに違いない。

そんなことをしていると、先程から何かを考えるように黙っていた劉備さんにあの、と声を掛けられる。なんだね?

「私達の為を思って今まで見守ってくれていた道玄さんが、私達を巻き込んでまで造りたい国って、何ですか? 貴方がわざわざ私達の力を必要とする理由が知りたいです。」
むむ、それか。はずかしいけど、大した理由ではないんだ。それでも聞きたい? そか、本当に大したものではないんだがね?

「飢えない国を、造りたい。」

変な意味じゃ無く、俺は子供達が好きだ。子供達こそ皆の理想の世界に繋がる存在だと思つているし、そうでなくても慈しむものだと思う。

だから、飢えて死んでいく子供を見るのが、嫌なんだ。？せ細り、話す力も、体を震わす力さえなく、冷たくなつていく手の軽さが何より辛い。やりたい事もなりたくないものも、何かを思い描く事さえ知らずに、ただ食うことだけ望んで、それすら叶わず無念に死んでいく子供達を、何度も見た。

そう、俺はこつちに來てから、結構のほほんと街や村に滞在していたが、この恋姫世界でも飢える人は沢山いて、華琳のところみたいな大きく栄えた街でも必ず一定数貧困に喘ぐ者たちはいる。俺や一刀君が現代知識を使つてだいで減らしたが、ゼロにするにはもつと抜本的な改革が必要だし、それをして結局、救えるのはその場所の人間だけだ。昔はそんな事を気にしたりはしなかったんだがな、なんて自嘲する。

最初は仕方ないと気にしてなかったが、自分に娘が出来るとか駄目だな。この小さな命が失われていくのが、どうにも我慢できん様になつてしまった。

思い出す。街や村で鈴々と遊んでいてもおかしくない小さな子が、冗談の様な軽さで道端に転がつている光景を。

思い出す。お腹いっぱい食べるのが夢！と笑う子供が、食べたものを消化する力も無いほどに飢えて死んでしまう姿を。

思い出す。飢えた子供にと食糧を盗んだ母親が、子供と共に賊として殺されてしまった事件を。

俺には米がほぼ無限湧く4次元袋があるから、ウチの子達が飢えることは無い。まあ無くても飢えさせる事などないが。だけど、ある時ふと考えてしまった。これがもし鈴々や音音だったらつてな。

俺の4次元袋は俺にしか使えない。俺がいなくて死ぬのはどうにもならない。ひたすら米を出し続けて一時的に食糧難を解決できても、結局俺が死ねばそれで終わりだ。頼られて結果墮落されたら未来で詰む。身内に甘い俺にそのへんの制御が出来る気はしなかったから、公的に4次元袋をこれまで使う事はしなかった。下手な施ししない方がマシだ。

この中華で飢える子供を失くすのは本当に難しい。華琳や雪蓮のところでもかなり色々やったけど、それでもゼロには全然出来てない。何より一つの場所で頑張っても、どこかで必ず見落としや取り零しがでる。目に入らなかつた、なんて理由で助けられた命を無くしたくない。

だから全部まとめて、全員で食糧難を完全に無くした国にする。超農耕大国にして誰もが最低限食には絶対に困らない国を造る。金が無くとも飢えない、学が無くとも腹が空かない、それぐらい食べ物に困らない国を創る。飽食と呼ばれ、食べ物之余つて処理

に困るぐらいの食料があり、2度と空腹で死ぬ子供を見ない国にする。

もちろん国には他に必要なものがたくさんあるのは知ってる。俺にそれを補う知識も能力もない事も、知っている。そんな奴に人を纏めて国を成す王になどなれない事も十分に理解している。だから、別に俺は王じゃなくていい。

とにかく、腹が減ったから、という理由で人が武器を取らない国を、空腹を理由に他者を害さない国を造る。幸い俺には若干の農業知識と、未来の重機顔負けのパワーがある。戦でも兵を無駄にしない程度に収めたから五胡の案件を上手く乗り越えれば平和になって、労働力の過剰な余りが出る。その殆どを開墾と街道工事に当てれば超大規模農耕も夢じゃない。今の兵には国の無茶な税で農業が続けられなくなった奴がかなり混じってるからな。

「開墾はともかく街道ですか？」

農耕が向かない土地はどうしても存在する。そこでよく整備された国の隅々まで行ける道があれば、流通を作れる。色々な施策が必要だろうが、上手くすれば食糧を自給自足できない土地にも食糧を供給出来るはずだ。

「そっか、高速道路と流通事業……！さらに、工事を国営にすれば平和になって仕事が無くなる兵達の雇用にも繋がる!!」

まだ取らぬ狸の皮算用だがな。屯田兵システムをきちんと作れば一応国防にもな

る。更に言えば何故かある無駄に高度な絡繰作りが得意な真桜がいる。上手くすれば運搬速度も運搬方法にもかなり改善が出来るはず。あとはどれだけきちんと中身を詰められるかだが・・・俺の女には頭の良過ぎる奴らが沢山いるからな。

そこまで話したところで、一息着く。まあ穴だらけな話だが、俺があらゆる事を覚悟すれば本当に重機より遙かに早く地形を変えられる。やってやれないことはないだろう。農業や畜産に関する専門家は育てるところから一緒に試行錯誤を繰り返して行く必要はあるだろうが。

とりあえずこんな感じだ、と劉備さんを見る。彼女は何か思案しているようだった。そんな劉備さんが口を開くよりも早く、下から声がかかる。華琳だった。

「つまらないわ。せっかくく天下を手に入れたのにやる事が食糧事情の改善だけ。それでは国は成り立たない、やれることはもつとたくさんあるはずよ。」

ピシヤリと断言する華琳。まあ事実だ。だが俺がしたいことは本当にそれだけだった。別に構わん、他に必要な事は王にぶん投げる。無論俺がしたい事を最優先で手伝わせるが。

「・・・はあ、貴方は本当に仕方ないわね。この私が手伝うのだから国民全てが満たされる幸福な国ぐらい言つて見せなさい。それぐらいでなければやり甲斐が無いわ。」

・・・華琳？お前それだと、

それ以上話すことは出来なかった。華琳に唇を無理矢理奪われていたからだ。隣の愛紗が反応するより早く離れる、早業だった。彼女は有無を言わせずに笑って断言する。

「その王の役職、私に寄越しなさい。貴方の望む世界を作つてあげるわ。．．元より夫の願いを叶えるのもまた、妻の仕事だもの。」

不敵に笑う彼女。誰よりも可憐、だがどうしようもなく霸王だった。

良いのか、お前自身の手で全てを手に入れなくて。やらなかった事を、挑戦しなかった事を、後悔するぞ？お前は誰よりも自分の手で全てを手に入れる事を望んでいたはずだ。

「そんな気遣いは無用よ。貴方の望みを叶える為に力を尽くすけど、それ以外なら私は私で好きにして良いのでしょうか？それなら貴方は私に仕えてないだけで私の国にいると言う事。他所に行かないならそれで構わない。ただし、終わつてもずっといてもらうわよ。」

え、住む場所は自然豊かな山村か、魚の取れる海の近くが良かったんですが。山にくつつくように城を新築？．．．悪くないかも。山部分に俺の家を建ていいなら？ウチの女性陣は街に住みたい派もいるし。

「道玄、私はもちろん同じ部屋ですよ？」

間髪入れずに愛紗が主張する。同じ家をすつとばして同じ部屋を要求してくるのが愛紗らしい。まあ直ぐに同じ事を言い出す訳だが。とりあえず華琳に採用を伝えようとしたら雪蓮に止められた。

「勝手に話を進めるんじゃないわよ。それじゃ華琳が貴方を手に入れるのと変わらないでしょう?」

「・・・どうせ天下を取って孫呉に平和をもたらせたら蓮華に後を任せるつもりだし、良いわ。私も王やってあげる。その代わり、家臣をちよつとぐらい連れてきても良いわよね?」

構わない、というかむしろ雪蓮より蓮華の方が真面目に仕事してくれそうだから蓮華をウチの王にして冥琳達を家臣に連れてくるのは・・・? あ、現王は私だから家臣である妹は好きに仕事をふれる? なるほどなるほど、後ろでブチギレてる蓮華は自分でなんとかしらよ?

いくら姉様でも道玄は譲らないわ! と怒りを露わにする蓮華を見なかつた事にする。すると劉備さんが私もやります、と元氣よく言った。平和になるならそれに越した事はないし、食糧事情の改善は素晴らしい。何より私も王になればそのまま私の望む国作りが出来ますから、と劉備さんは笑った。流れに乗らずに自分の意見を、と思つたが、隣の一刀君も笑っているので良いのだろう。

なんだかんだ皆いい奴だな、と思いつつ。赤壁の戦いなくなっちゃうな、とくだらな
い事を考える。ならば後は五胡の大軍をなんとかすればってえ、何劉備さん。

「国の名は、どうなるんですか？」

・・・一応あるけど。ウチの女性陣と話し合った時でた奴で、俺が1番気に入ってる
やつが。暫定だけどな。

「へえ？興味があるわ。なんていうの？」

雪蓮が楽しそうに言った。むう、いずれは分かる事だけど、なんかちよつと恥ずかし
いな。

・・・笑うなよ？と言って、あまり意味の無い釘を刺す。興味津々の皆の顔見て、溜
め息一つ。

・・・その場所では、常に腹が満たされ、心も満たされる。そんな願いと想いを込め
て・・・国の名は「満」。それが俺が造る国の名だ。

文句は?と聞く。

返事は満面の笑みだった。

続く?

45話

アップルパイは焼きたてよりも冷やした奴が

好き！

やあみんな、友達だと思つてた異性に告白されてドギマギしちゃう純情オーク系転生者の俺だよ！

パシヤパシヤ

「うにゃー！冷たくて気持ちいいのだ！」

ザパザパ

「ちちうえー！恋どのー！こつちですぞー！」

ズルツ、バツシャーントツ！！

「ぎにゃあ！こ、こら璃々！急に押すでない！危ないじやろ!？」

「えへへ、美羽おねーちゃんごめんなさい！」

空には太陽が輝き、周囲には青々とした新緑が目眩しい。

足下にはゴツゴツとした石が隙間なく並び、初夏の季節にも関わらず涼しげな音と共

にやや冷たい川が流れる。

ここはある山の滝ツボ付近。柔らかな緑色をした高木が周囲を包み込む様に並び、優しく太陽から守ってくれる。さらに飛び散る滝の水が、夏場にはちようどいい程度に空気を冷やしてくれる為、絶好の避暑地と言えるだろう。

素足は危ないので、全開ではしやぎ回るちびつ子達や、沙和や一刀君と協力して作った水着を着た女性陣全員に、これまた沙和や真桜に協力して貰って作った動きやすく脱げないサンダル（足首で固定できるベルト付き。）を着用して貰っている。

川に入ってバシャバシャと水を掛け合うウチの娘たち。水着姿が非常に愛らしく、保護欲を唆る。ああ、今すぐ娘と遊びたい。水遊びしまくりたい。

だがしかし、現状それは叶わぬ夢だった。

何故かって？原因はこれだ。

「あなた、璃々が呼んでいますよ？早く行きましょう。」ニコツ

穏やかで慈愛に溢れた母の微笑みを浮かべて、はち切れんばかりの母性が詰まった巨乳を揺らし、紫色の扇情的な水着を着混んだ彼女の名は黄忠。呉の黄蓋、魏の夏侯淵に並ぶ弓の名手であり、同時に川でウチの娘と遊ぶ璃々というこれまた可愛らしい娘の母親だった。

そんな彼女の夫はだいぶ前に他界していて、絶賛未亡人の筈の彼女が、俺をなんと呼んだかお分かりだろうか？

・・・そう、これが未だ娘たちと遊べない理由だ。

「どうしたの、あなた？早く行きましよう？」

「・・・そろそろいい加減にしないと本気で死んでもらいますよ、紫苑。」

「よさんか愛紗、璃々が悲しむ。・・・今は『まだ』早い。とりあえず道玄から離すぞ。」

「その通りよ愛紗。貴方もあの愛らしい娘を悲しませるのは本意ではないでしょう？何より道玄が悲しむわ。・・・璃々が居なければ魏の総力を挙げて始末してるところだけだ。」

「あの紫苑があそこまでとは・・・流石はお館様だ、と言うべきか？」

おかしいな、こんな涼しげな避暑地にも関わらず俺の周りでは空間が歪んで見えるほどに熱気のもった殺意が充満している。肌がヒリヒリして火傷しそうだ。俺は涼みに来た筈なんだが。というか桔梗、それは褒めてるのか？

とりあえず今分かっている事は、紫苑の奴のあなた、という呼称に今俺が迂闊に反応してはいけない、という事だけだ。

少なくとも今は、反応したが最後、俺はこの周りを完全に囲んだ女性陣全員が孕むま

で子作りに勤しまねばならない。というか、それが原因で割と最近まで容赦無く搾り取られていた。前は奇跡的に何とかなつたが、2回目は死ぬ。今度こそ死ぬ。

何故なら、俺の周囲を囲む女性の数は、30人を超えているからだ。

……どうしてこうなつたんだろう。

話は3ヶ月ほど前、俺が国造りを宣言した時まで遡る。

??

あの後。

いざという時の伏線と言うかテコ入れというか、念の為に宣戦布告をしたらそんなことしなくても手伝うよ! 的な皆の優しさのおかげで戦わずして勝つた感じの俺は、色んな意味で肩透かしされながらも、その3日後には意気揚々と色々細かい所を詰めた。

もつとも詳しく内容を精査し、三国の王や軍師達と細かい取り決めを行なつたのは軍

師組であつて俺ではない。え、それでいいのか？良いんだよ、俺は王はやらないから真面目な話は分からののだ。なのでそのままやすやすや眠る璃々と立ちつばなしで疲れたと愚図る美雨を膝の上に、遊び相手が居なくなつた鈴々を肩にライドオンさせる。そしてまたも乗り込んできた華琳を乗せた座椅子になる。ついでに何故かやたらとなつた曹仁さんの相手をする。

何時もなら監視に愛紗あたりが隣にいるのだが、何故かは分からないが、軍師組以外の女性陣も皆熱心に話し合いに参加していて、珍しく俺の両サイドに誰もいない。ちよつと違和感がある感じだが、これはこれで、と思つていたら陳登さんがやつてきた。曹仁さんをあやしながら対応する。なんぞや？

え、超農耕大国のを建国する際の農業ノウハウはあるのか？わ、割と穴だらけで良ければいくらあるけど・・・？あ、あんまり期待しないでね？場所は作るけどその辺は一から作る予定だから。厳密に言えば一刀くんにぶん投げる予定だから。

ん？一刀君に教わつた堆肥を使つても芳しい成果がでないところがある？急に言われても現地見てないと詳しい事はわからんよ。俺農業の専門家じゃないし。前世でも実家の農業を軽く手伝つてたくらいだし。その後気分で作つた家庭菜園では肥料は市販品だつたしな。あ、でも一刀君が言つた奴ならひよつとして家畜や人間の糞が基の堆肥かな？それなら腐葉土混ぜたら違つかも？

「腐葉土?・・・って何ですか?」

あれ、知らない?俺が出した奴で桂花に没にされた政策の中に資料が・・・あ、翻訳してないから提出してなかったか。すまぬ。山に行くのと落ち葉がたくさんあるやん?その重なって半分以上腐って土になってきてる部分だと思ってもらえれば大体あつてる。これを混ぜると微生物が・・・って言っても分からんか、えーと、糞を使った肥料は栄養が強過ぎて作物が吸収できないから、腐葉土を混ぜるとその中の物がそれを作物に吸収しやすくするとかそんな感じ。厳密には違うけど考え方的にはたぶん間違つてないはず。そんな感じのことを漫画で読んだ気がする。

とりあえずそれっぽい事を並べてみたら凄いい目がキラキラする陳登さん。あれっ、変な反応だぞ?え、土いじりが好き!?農政に関しては是非任されたい!?ああ、だから肥料の話・・・やっべ今の話かなりうる覚え!!ご、ごめん今の話はだいぶつてあれ?いない・・・?

え、早速本国の部下に連絡しに行つた?ああそう、ありがとう曹仁さん。じゃあお礼ついでにこの飴あげるから今見た事を忘れよう。俺たちは何も見なかった。いいね?よし。

まあ、うまく行つたらそのまま一刀君と共に農業関係の責任者を押し付けておけばたぶん大丈夫大丈夫。農業キャラとか出てこられると焦るなマジで。俺の知識大体マン

ガだからなあ……。

おつとイカンまたしても聞いてなさ過ぎた。流石に今回は怒られる！と慌てて参加してみると意外と問題なさげ、というか王様達の国政の話になって来てて聞かなくてもいいと言われた。マジでか。

軍師組も私達に全部任せて下さい、と胸を張る。なんか漸くきちんと頼られる、と意外と乗り気だ。特に風が珍しく張り切っていた。理由を聞いたら俺がやつと旗揚げしたから嬉しいんだそう。そういや会った頃からそんなこと望んでいたような気もする。待たせたお詫びに頭を撫でていたら、抱っこを要求されたので、望み通り華琳達を一旦下ろして膝の上に乗せ、後ろから抱きしめてやった。

すると何故か叩かれる。理由を聞いたらお姫様抱っこを所望していたらしい。なんと！頭は撫でられなくなるけどいいのか？え、片手でお姫様抱っこして片手で撫でろ？それは出来な……くはなかつた。見た感じバーサーカーとイリヤみたいな感じだが出来た。俺は一体何になるうとしてるのであろうか。まさか次死んだら聖杯に呼ばれるとかないよな。

なお、璃々はそのまま俺が受け持ち、美雨は七乃と一緒に再び立たせる。美雨はぶーたれたが、璃々の前ではおねーちゃんしたいらしい。我慢して七乃の隣に立っている。

その辺全て無視するフリーダムな鈴々はしばらく肩車状態である。曹仁さんはなんか桂花に怒られて戻っていった。

急に下ろされた華琳が不満気な顔をしたが、むしろ急にグイグイ来すぎだからとりあえず無視する。というか無視せざるを得ない。

何故なら昔は華琳にも俺に手を出させない!と息巻いてた青い髪の弓使いがそれよりもずっと不満気な顔をしてたからだ。後で聞いたら主人特権で仕方なく正妻の座を譲り渡したらしく、実は目の前で自分より俺とイチャイチャする華琳さんにちよいイライラしてはたらしい。とりあえずそこはかとなく構っておく。

俺も大概だがこいつもキャラがおかしな事になっっているなあ。え、何一刀君。正史で夏侯淵が曹操を裏切った説!?!な、なるほど秋蘭はそこまでいかなくとも完璧に華琳に盲信してない可能性もあるのか。良く考えたら華琳に諫言出来る奴だった。姉と違って冷静な部分も当然持つてるよな。

・・・あれっ、理由が俺の場合は冷静って言っているのだろうか? 要するに色恋沙汰だよな。・・・まあ、なんでもいいか。

そんなこんなで話し合いが進み、今決められる僅かな内容だけ取り決め、後のことは

五胡の問題が片付いてから、という事になった。結局途中から軍師組の言葉に甘えてあんまり聞いてなかったが・・・どれどれ、取り急ぎ決められた事は？

- 1、五胡の大軍の事は現時点では国民には伏せる。
- 2、三国統一の発表は五胡の件が片付いてから。
- 3、五胡がこれより2年間の間に攻めて来なければ来ないものとし、三国統一の発表を行う。

4、羌毅の存在は国共有財産とする。

5、羌毅が浮気せぬよう常に監視する部隊を即時編成する。

6、羌毅が浮気した場合の制裁は全員で行う。

7、羌毅は指定役員（正妻候補者兼妾候補者兼監視部隊員兼精管理者）の許可無しに射精を禁ずる。

8、羌毅は指定役員以外の異性ととの単独での接触を原則禁止とし、やむを得ない場合は指定役員四人以上を同伴すること。

9、新規正妻候補者又は妾候補者は指定役員の厳正なる審査の元、合格基準に達した者のみ許可される。

10、羌毅は特殊な事情がない限り毎日指定役員のいずれかと交わることを。

・・・ちよつと待て、馬鹿じゃないの？

「では当面はこれで問題ありませんね？」

「全ては五胡の問題が終わってからだしな。異議なし。」

「そうね、異議なしよ。」

「ウチも特に問題ありません。異議なしです。」

では可決で、と稟がいい、会議が終了する。待て待て待て!!

「・・・？何か問題ありましたかー？」

そう言つて不思議そうな顔をする風。後ろの女性陣も何か変なことがあつただろうか？と、マジのキョトン顔だ。舐めてんのかこら。問題しかないだろ!!

何で三国統一に関する重要な会議での取り決めに俺に関することが入ってくんだよ！それも七割！アホか!?内容に至つては俺の女性関係にしか追求してないし!!どこらへんが重要な話やねん！お前らあんなにやる気出しといてこれか!?最初の3つでほぼ十分だったじゃないか。

「まだ出来てないどころか机上の空論でしかない国の事など、先に大きな問題抱えたま

ま今日いきなり話して何がきまるわけでもないでしょう。」

「そうです！それに比べたら後継者問題に関わる分こつちの方が重大案件です！」

ぐつ、確かに机上の空論だけでも！いや、つーか後継者問題って何だよ。俺王はやらないって言ったやん！

「何言つとるんじや、道玄。」

「馬鹿ね、あんたが王にならなくてもあんたの代わりに王を成される華琳様や孫策たちはどうなるのよ。」

・・・あつ。

なるほど、その考えはなかった。そうかそうか、華琳はともかく雪蓮は俺の子を産むかもしれないのか。確かにそれは別の意味で後継者問題になるな。自分で言うのも何だが、俺の女たくさんいるし。王の男が他に女たくさん居ましたー、なんて普通に考えたらそんな節操ない奴が旦那でいいのかってなるよなー。

あれ、でもそれだと一刀君は・・・あ、なるほど。劉備さんが一刀君の腕を抱えたので大体把握。まあ俺もさつきまで珍しく側を離れていた愛紗がいつの間にか隣に戻ってきてるので似たようなもんだ。

なるほどなるほどじゃあ仕方ない・・・ってなるかつ!!

騙されるか馬鹿野郎！確かに重要な話に関わってくるとしても国に関わる要項に取

り入れられる問題かこれが! 第一これ俺にしか効果ないし! もっと他に色々あるだろ!
!?

五胡の問題片付いた後の領地をどう分けるかとか、何処に道を作るかとか、何かこう・・・こう、色々あるだろ!!

なのになんだこれ! 指定役員とか役職兼任し過ぎだし、何かよく見たら俺国レベルで謎の射精管理されてるし、その割には毎日のセックス要求されてるし! だいたい常に監視がつくってなんじゃい! どんだけ信用ないんだ俺は!

ちよつとこれはあんまりなので、珍しく声を荒げて猛抗議だ! 地味に一刀君も流石にこれは、と苦笑いしながらフォローを入れてくれる。ナイスだ一刀君! そう、もつと他に大切な話があるはずだよ! と力説して見る。やり直しだ! 断固やり直しを要求する!

いつになく強い姿勢できっぱりと言い切る。無口系のキャラ作ってからこんなに喋るの久しぶり過ぎてちよつと喉が痛い。だがその甲斐あって皆も真面目に再考をー・・・あれつ。

周りで見渡すと凄いい冷たい視線が一斉に突き刺さる。あれれつ、俺が求めている対応

じゃないぞ。おかしいな、皆俺の話聞いていたか？いいかお前ら、「ねえ道玄？」んっ？何だ蓮華。まだ俺が話して・・・あれっ、ひよっとして何か怒ってる？

よく見たら皆から殺気が流れてくる。何故だ？俺が言ってる事はそんなに間違つてないはず。蓮華や霞、恋や穩など、あまり怒らない連中まで何だが妙なプレッシャーを放っている。な、なんだというんだ！

俺は間違つてない！と、叫ぼうとしたところで、道玄、と体の芯から震え上がるような恐ろしい声で、隣に来ていた愛紗が呟いた。な、なんじゃない！

「いつも貴方は私達の誰かと、ほぼ必ず一緒に居るはず。特にここ最近私貴方を一人にした事はない。それは実質監視状態と変わらない筈ですが？」

「それを今になって拒否する、ということとは・・・貴様、これだけ女がいてまだ私達の知らない女に会っている、ということか？」

「おい道玄、私散々言つたよな？いい加減にしろつて。何だ、お前・・・私達では不満とでも言いたいのか？」

「これだけの綺麗どころが、お主一人にこんなにも懸想しとるといふのに、それを嫌がるとは。思春の言う通り、他所に女がまだ居るかも知れんの。」

い、いや！そんな事は断じてないぞ？単純にこう言つた大事な決まりごとで個人の事ばかり取り上げてたから相応しくないなと思つただけで・・・！ほ、ほらこの国の法で

も個人名出した一個人限定の法とかないだろ?それが原案の半分以上を占めていたら絶対におかしいだろ?本当にそれだけだよ?マジですよ?蛮族ウソつかない!

「では当然、我々以外に手を出さない、という文言は問題なく守っていただけますな?我が主人。」

ももももちろんだとも!こ、これ以上増やされたら俺の方が死んじやうし!だからお願いします!もう少しローテーションと言うか、一人当たりの回数を減らして「駄目です。」あ、はい。

「良かった、それなら常に誰かが側にいても問題ないな。やましい事は何もありません。う?」

え、っつ?!いい、いやもちろんやましい事なんか何にも無いですよ!ほんとほんと!・・・ただ、一人の時間も欲しいかな、なんて。

女性陣全員揃って駄目!と却下された。関係ない劉備さん達まで却下して来た。な、何故だ・・・!俺にも一人の時間ぐらい用意してくれたってええやないか!

「にいさんにいさん、まさか本気で自分に信頼・信用があるって思うとるん?」

「今まで一人の時間に何人の女を引つ掛けてきたか、胸に手を当ててよく考えてみるといいの。」

「ご主人様つて自分の愛人達にまでこんな評価なんですわえー！よつ、この女の敵！」
「お前・・・最低だな！」

待て待て待て！俺が一人の時に常にナンパしてるみたいない方はよして貰おう！
だいたいだな、ただの女友達を肉体関係ありまで無理矢理発展させているのは其処の馬鹿が原因だぞ！いやお前だよ星！どこ見てんだ趙子龍！

まさかの信用ゼロ発言でちよつと泣きそう。話を聞いた马超さんがゴミを見る目で見てくるし、楽しそうに笑う七乃も良く見ると目が全然笑つてない。愛紗が道玄・・・？と非常に恐ろしい声で右腕を抱き締める。待つて、誤解ですよ？

「ほう、誤解とな？面白い事を言うのう。なあ冥琳？」

「そうですね、祭殿。白々しくもまあ・・・明命！」

「はいですー！」

何か額に青筋浮かべた祭と冥琳がイライラしながら周泰さんと呼ぶ。何故？と思つたら周泰さんがたくさんの巻物を何処からか取り出した。バカな、どう見てもあの量は隠せぬはず！あやつ、まさか俺と同じ4次元袋を！・・・それはないか。気で脂肪と一緒に暗器を折りたたんで体内に隠しているとか言われる並にあり得ないな。

「この巻物には羌毅さんが我ら孫呉にて過ごしていた数ヶ月間の全行動が記録されています。当然一人で行動中も私達が見失わない限り全て記録されています。」

なん・・・だと・・・!?

いきなり周泰さんが来た理由なんだろうな? くらいに考えていたらとんでもない爆弾を持ち出して来やがった! 《おまつ、それは卑怯だろ!》いかん、一人の時の俺とか何をしでかしてたか自分でもわからん! 俺は過去にこだわらない男なのだ。明確にヤバイのは裏工作してあるが、うちの女性陣の判定は厳しい。俺のセーフと彼女達のセーフはだいぶ違うのだ。日に日に厳しくなるからな!

・・・いや待て、幾ら何でも周泰さんも自分の不利になる様なことまでまとめてはいないはずだ。ならば明確にヤバイアレやソレは削除されている筈だし、そんなにヤバイ事にはならないのではなからうか。と言うかそうであつてほしい。祈る様な目で周泰さんに訴えかけるが普通に無視された。ちよつと悲しい。

「ひとよんまるまる日。珍しくお昼ごはんを食べに街に繰り出した羌毅さんをいつも通り密かに尾行開始。街の商店街外れにある酒家に向かう模様。少しして女兒が泣いているのを発見、即座に羌毅がそちらに向かい飴玉を差し出して僅か5秒ほどで泣き止ませる。女兒が泣いていた理由は不明。そのまま女兒を肩車して移動。数分後に女兒の母親を発見し親しげに会話を開始。なお、女兒の母親は若々しく、後の調査によると近所で美しい評判の未亡人でした。十分ほど女兒の母親と会話をすると、母親が羌毅さんの腕を抱える様に組み、女兒と母親を連れてそのまま酒家に移動、共に食事をとる。そ

れが終わると彼女達を家まで送り届け、城に帰投しました。なお、羌毅さんと女兒との母親との関係は、戦で夫を喪つて街にやつてきた母親が悪漢に絡まれているのを羌毅さんが救出、その後住居や仕事などを面倒見てもらっている、と本人から聞き出しました。また、この女性とは三回ほど一緒に食事をしたり買い物をしていたりしていると近所の住民が目撃しています。」

・・・色々言いたい事があるんだが。まず、ひとよんまるまる日つてなんだよ・・・。え、思春と俺が聞で言つてたことのマネ!?馬鹿な、生真面目な女性軍人さんと、プレイが覗かれていただど!?それは聞いてなげふげふ、否つ、これさえもこの反応を引き出すための罠かつ!更には私は何でも知つてます的なアピールだな!

こやつ・・・やりおる!あ、はいふぎけました愛紗さんごめんなさい。え、私にも同じ事?いやあれは思春だから楽しい、いえ!何でもないです!愛紗さんとも後で必ずします!

あ、蓮華なんだね?私は知らない?い、いや珍しく思春から二人でつて・・・あれ、これ内緒だっけ?

「思春?貴女私に黙つて抜け駆けしたの?」

「い、いえ!そんな事は!・・・そ、それにそれを言うなら蓮華様が先にー!」

「……先に、何かしら?」

なんか後ろで主従対決が始まりだしたぞ。どうでもいいけど蓮華もつていうか1人1人専用のプレイあるんだからそんな怒るなよ。蓮華だつてこないだの砦で裸エプロンで新婚さんプレイしただろうに。愛紗以外に結婚してる設定でした事が愛紗にバレルとガチまずいから口には出さないけど。

……と、それはさて置き、それはたぶん楊文晋さんと娘の楊伯明かな。自称楊端和つて凄いらしい人の末裔とかなんとかそんな感じの人らだね。言われてみればそんな出会いだつた気がするし、そんな感じの休みを過ごした気もする。だが浮気はしていない! 確かにちよつと母親の割にスキンシップ多い気もするが、少なくとも俺は母娘の2人だと大変かと思つてちよつと気にかけてるだけだ。その証拠に彼女には雪蓮の兵で独身の将来性がありそうな奴を何回か引き合わせている。何の問題もない!

「団長、まず女と2人きりで会つてる時点で問題やで。ウチらが知らない女ならさらに大問題や。」

「というか、その女性に男を引き合わせるのは良いが、結果はどうなんだ?」

あー、それはすまぬ。娘が泣き虫で構っている内に気が付いたら一緒にいる感じだな。華雄、それは……まあ、男女の出会いってほら、結構合う合わないがあるよね!

「現在で3人ほど紹介なされたみたいですが、全滅です。理由を本人に確認したところ、体が大きくて顔の怖い子供好きな蛮族みたいな人が好き」だから、との事でした。」

へ、へえ〜〜〜。

え、ええと変わった趣味してたんだねあの人。それは知らなかったなあ！いやあ俺以外にも子供好きな蛮族がいるとは思わなかったね！親近感感じるよホント！ひよつとして前の旦那さんが蛮族だったのかなー？はははは！

・・・ははは。えつと、俺の事じゃない、と思うよ？だから皆、ちよつと落ち着いて欲しいかな、なんて。え、何だい周泰さん。前の旦那さんは完全な漢人？楊さんの周りに1人を除いて蛮族は居ない？本人が言ってた？そ、そう。どうやってそこまで聞き出したの？俺の情報と交換!?マジか。・・・マジか！

「ど・う・げ・ん・・・？」

「さて、主人。覚悟はよろしいですか？」

気がつけば女性陣ほとんどが戦闘態勢だった。一刀くん含む男性陣は全員劉備さん達を守りつつ、ジリジリと少しずつ天幕を去っていく。あ、何気に華琳の所の男性兵も混じってる！おのれ、裏切り者ー！

ま、待て皆！俺もその話は今知った！だからノーカン！ノーカンだと思えます！

「それが通ると思うか、道玄。こないだ搾ったくらいじゃお仕置きにはまだ足りなかつ

たな。」

め、冥琳? あ、あれ結構死にかけたんです。あ、はいすいません。やばいこれはマジでやばい、と怯えていると急ににこやかな声で冥琳が良からう、と言った。え、助かった? と思ひ冥琳を見てそれが勘違いであると気付く。いやもうほんと、目が全然笑ってない……。

「では次だな。明命。もう全部読み上げてくれ。」

えっ。

……そういえばまだたくさんの書簡の中の一目だっけ?

ま、待った明命、ストツプストツプ! 流石に良くないよ! そう言って彼女の口を塞ごうとしたら腕にしがみつくと愛紗が邪魔をする。紫苑も璃々を離さないでくださいね、と釘を刺してくる。思わず紫苑に助けを求めようとしたら、笑顔なのに目が全然笑ってなくてビビる。何故、と問うまでもなく華琳が動くな、と左手にしがみ付いた。ぐぬっ! 更にいつの間にも移動したのか、雪蓮と思春が背後に立っている。愛紗が肩の上の鈴々に何らかの交渉をしたのか、鈴々が俺の目をだーれだ! と隠した。くっそんな時でもうちの娘は超可愛い!

「そのままちよつと大人しくしていなさい。明命の報告が終わるまで、ね?」
「ついでに、いつの間に明命と真名を交わしたかも聞きたいところだな。」

まいがー！藪蛇つた！あ、コラ明命！無視して読み上げようとするな！今それはやばい！そう文句を言う前に女性陣がちびっ子達を俺の上に乗せてくる。もはや目が見えなくてもその重さだけで娘たちの誰だか分かる俺は身動きが封じられてしまった。ぐぬぬ、何気に美雨が乗つけられたのは七乃の奴か？

俺の身動きが封じられているのを無視して、明命は赤い顔のまま誤魔化すように一気に書簡を読み上げる。

「○○日、お昼休憩に楽進さんと2人で街へ。そのまま酒家ではなく宿へ。暫く部屋に籠ったあと楽進さんが気絶。その間獣の様な嬌声が聞こえたと多数証言あり。1人で食事をしに屋台へ。そこで屋台の女将と仲良くなりサービスを受ける。そのまま何故か屋台を手伝い、女将にお礼として頬に接吻を受けます。その後体を洗って鈴々さんやセキト、街の子供達と遊んで匂いを誤魔化し何食わぬ顔で帰宅する。その後は度々女将さんと共に調理する姿が目撃されています。なお、女将さんは人妻であり、近所で評判の女性です。」

○○日、夜中に1人で街に繰り出す。行きつけの酒家『満寵』で1人で食事・・・と見せかけて1人で泣きながら飲む女性の席に乱入。「酒は

楽しく飲め！」と話しながら意気投合、なんだかんだと泣き止ませた後、満寵にて度々

2人で相席する姿が目撃されています。なお、調べによると戦で婚約者を失った女性で、こちらも美人で評判なのだとか。

〇〇日、李典さんと街にて散策、途中何度か路地裏にて致したあと于禁さんも交えて宿で二戦、その後バレたらまずいと別々に宿を離れ、1人城に帰投と、思いきや途中で声をかけてきた知り合いと思しき商売女と共に夜の街へ繰り出す。残念ながらこの後はちよつと忙しくなり私達に帰還命令が下ったので不明です。なお、後日この女性に話を聞いてみると陳留にいた頃の知り合いとのこと。当日のことは聞き出せませんでした。

〇〇日、呂蒙ちゃんと2人で将棋。負けた羌毅さんが秘蔵のお酒とお菓子をご馳走してました。誰にもバレない様にとわざわざ呂蒙ちゃんの部屋に移動して2人きりになつてからです。あの呂蒙ちゃんが幸せそうな顔で食べてました。終始笑顔でした。

〇〇日、夜中に1人抜け出した羌毅さんを追いかけると、おそらく孫静様と思われる女性と落ち合い、2人で酒家、それも宿を兼業しているところに入つて行きました。残念ながら孫静様の部下が周りを固めてしまったので内部で何が行われていたのかは不明です。

〇〇日 《中略》

《中略》

《中略》

《中略》

《中略》

《中略》

〇〇日、黄蓋様と2人で街へ。街の子供達と戯れたあと、唐突に黄蓋様が「子供は何人欲しい？」と問われ、羌毅さんが最低3人くらい、と答えた後はお二人で宿に入つて行きました。宿の主人に聞いた所、黄蓋様と羌毅さんが2人きりでよく訪れる、とのことでしたのでこの宿は2人の密会に使用されている可能性が高いと思われます。：：以上で、報告は終了となります。」

「御苦労、明命。．．．さて道玄。何が誤解だつて？」

是非とも詳しく説明して貰いたいなあ？」

未だ鈴々が俺の視界を遮り、重石代わりに上に乗せられた娘たちや璃々が俺の身動きを封じる。まいった、逃げられない。くっそ明命の裏切りものー！

溢れる殺意。視界が塞がれていても容易に冥琳の顔が想像出来る。それは俺の周囲に集まって来ているだろう女性陣でも同じだ。

一刀くん達男性陣と劉備さん達がほぼ逃げ終わつたらしい。同時に天幕の入り口を閉じて、兵達に退がれ、という桂花達の声が聞こえた。すぐそばで愛紗が「私以外に：

どうしてどうして」とブツブツ嘯き、ふふふ、と皆の多種多様な笑い声が聞こえる。

ヤバい、想像なのに周りの皆の顔がめちやくちや怖い。これが恐らく外れていない想像なのが更に怖い!

こ、こうなったら一か八か、誤魔化すしかない!

ま、待て皆! 確かに誤解を招く様な行動をしたのは事実! それは謝る! だが、今の明命の報告をよく思い出してみてくれ。俺が肉体関係がある、とはつきりしているのはお前達の誰かだけだ! 信じられないかも知れないが、お前達以外の女を抱いた事はない! というか、そうだとしたら普段お前達が気付かない訳がないだろ! 報告された中で風や祭とした後、結局愛紗達に怒られているんだからな。

「当然です。道玄が私以外の女と浮気して気付かない筈がありません。」

「まあ、正直新参者の僕や月だつて分かるからね。なんとなく、だけど。」

「ご主人様を愛しますから・・・。だから浮気は許してあげません。」

ならそれが証拠だ。俺は確かにお前達以外の女と酒飲んだり飯食ったりした事があるが、俺が愛しているのはお前達だけだし、抱くのもお前達だけだ。嘘じゃない! つまり浮気とかしてないですマジで。

体の上に娘たちを乗せて、膝の上には璃々。更に周囲は女性陣に囲まれていると言うなんとも情けない状況だが、ちよつと声に力を込めて力説する。実際俺が抱く女は愛紗

達以外いないので「ほぼ」嘘は言っていない。

まあ、実際のところは、基本的に一度抱いた女以外は手を出せないだけだが。ハタレな理由だから口にはしない。いやだつてなし崩し的に関係を持つ事はあつても、それ以外で関係持ったらまずバレるし、バレたら性裁だし。そもそも外部ではなくうちの女性陣の誰かであつても、愛紗や凧には浮気扱いされて閨直行であるのだ。下手な真似など出来るはずもない。最近では祭や冥琳、白蓮や蓮華なんかも追求激しいし。

なので確かにそれっぽい動きだったのは認めるが、浮気は本当に誤解です。

「……孫静叔母様の事は？」

あー……それ、お前達の事でケリ着けに行つた時の話だよ、雪蓮。確かに行つたら全裸で誘惑されたが、拒否した。美人過ぎてちよつとクラつときたけど。まあ美人の誘惑というかそれ以上の事を皆としてれば耐性つくよね！何たつて俺は秋蘭と華琳を同時に袖に出来るほど我慢強い男だからな！

「むう、どうしますか華琳様!!」

「まだよ春蘭。こういう顔した時の道玄は嘘は言っていないだけで本当の事を話していないわ。」

「あややー、分かりますかー？確かにこの顔のおにいさんは全部は話してないですー!」

「流石ですね、華琳様。私達でも道玄のコレを見抜ける様になるまで時間が掛かったのですが。」

「……いや本当に、何で分かるのだろうか。というか華琳達はまだ話に入って来ては駄目だろ。秋蘭ならともかく。」

流石に何度も経験してるので、このままいけばこの後に待っているのは華琳さん達も含めた性裁だということぐらいい俺にも分かる。そしてそれはまずい。人数が多過ぎる。最終決戦前に腹上死とかアホすぎる死を迎えかねん。

何とか切り抜けねば……。

物理的な攻撃ではたぶん死なない俺に、まさか、こんな死地が待っているとは……！

くそ、世界はいつだってこんなはずじゃないことばかりだ！

独りこの窮地を脱出すべく頭を振り絞っていると、不意に俺の上から娘たちの重りが消えた。ついでに鈴々も降りて視界が回復する。むう、拘束状態はともかく、娘が乗っているのはおとーさんの嫌じゃ無いのだが……。

それはともかく、一瞬助かったか？と甘えた考えが浮かぶが即座に否定する。うちの女性陣がそんなに甘い訳はないし、重要な時期だからと自重してくれる皆ではない。これから性裁だから子供達を退かしただけ、とかの可能性もある。どう動く？最悪この天

幕を突き抜けて跳べるように脚に超弱変身を……!

「まあ、良いでしょう。」

来るならこい！今日こそ逃げてや……えつ。

「まあ、仕方ありませんね。一々道玄の行動にケチつけて何とかなる訳でも無いですし。」

「せやな。にぃさんが女誑しなんは今に始まった事では無いし、肉体関係まで進んでないなら、不本意やけどまあ、許したる。」

「大いに、不本意であるがな。」

???

……!?

?!?!?!?!?

バカな、助かっただと!?

今までのこの展開は無かったので脳が理解するまで時間を要した。

ありえん!と思わず叫びかけたくらいだった。いかん、願い通りだが逆に信じられ無い。かといつて疑ったらそれはそれで「何かやましい事があるのか」と問われたら困るので追求はできない。出来ないがカマかけたら死ぬ。逸る気持ちを無理矢理押さ

えつける。

……とりあえず深くツツコミはせず、分かってくれたか、と安堵した感じを出しつつ様子を見る。不承不承、という顔で頷いてくれる皆。どうも本当に許してくれたらしい。

き、奇跡だ……!

こんなことで奇跡を感じてるのがすごいアレな感じだが、実際この状況を免れたのは初体験な気がする!

「道玄さん良かったですね!」

本当にな!だがお前の裏切りは許さないぞ明命!絶対にだ!

「ええつ、そんな!?こんな仕事を命じた冥琳様の方が裏切りだと思いま……せん!ごめんなさい!」

口答えしようとした明命が即主張を変えて謝る。たぶん隣の冥琳の殺意に気付いたのだろう。良かったな、言い切ったら悲惨な事になっていたぞ。

まあ狙ったんだけどな!

それに気付いたのだろう、明命が貴様ツ嵌めたな!と言いたげな表情でこちらを見ている。ヤバいところは話さなかったから、フハハ、この辺で勘弁してやる。と視線だけで返しておく。バラしますよ?と視線でキレられたので、勘弁して下さいと即謝罪す

る。

「・・・随分仲がいいわね？」

「そうじゃな。そういえばいつ周泰と真名を交換したか、まだきいてなかったのう。」

無言のやり取りだがお互い笑顔だったせいで冥琳と祭に疑いの目線を向けられる。マズい、深く追求されたら死ぬ！誤魔化さねば！

当たり障りなく、猫好き同士だからそれで仲良くなつたんだ、と言っておく。実際に彼女と真名を交換したきっかけは猫なので嘘ではない。猫ですか？と疑問そうな愛紗にそうだと頷く。周りの女性陣も少し訝しんだ顔だ。まあ、何が言いたいのかは分かる。

「あれ？お前、動物に嫌われる体質じゃなかったか？」

女性陣全員の疑問を代わりに言ったのは白蓮だった。まあ俺と過ごしていれば当然そう考えるだろう。

何故なら俺は、動物に恐れられている。それはもう、悲しくなるレベルで、だ。

以前からちよくちよく馬に乗れないとか色々あったとは思うが、そう。困った事に俺

自身は基本的に動物大好きなのだが、動物達は本能で俺の中の圧倒的強者にして捕食者であるラージヤンを察知しているらしい。幾ら気配を消して近付いても、視認されたり接触したりすると即逃走されてしまう。それも超全力でだ。

これが肉を得るための狩猟ならば一度でも接触出来れば良いので問題は無いが、愛でる為だともならない。無理矢理捕まえたら一頻り暴れたあと、死を覚悟したかの様に大人しくなってしまう、見ていて悲しくなるぐらい絶望した顔になってしまう。ちなみにこれは小連の虎の周々や恋の友達のリオン（何故いるかは考え無い事にした。現在は洛陽の動物園所属。）で試した結果なので、実際のところ野良猫だとなるかは分からない。まあこれよりマシ、という事はないはずだ。

なお、虎やライオンがあまりにもビビり過ぎて円形脱毛症を起こしてしまった為、恋と小連にめちゃくちゃ怒られました。二匹にはお詫びとして懐かしの亀龍の肉を渡しておいた。

そんな余談はさておき、そんな訳で唯一の例外であったセキトを除いて俺は動物と仲良くなる事は出来ず、当然猫好き同盟（メンバーは2人だけ。）に加入して、猫と触れ合う為に色々未来知識を使ったが、その恩恵に預かれるのは明命ばかりだった。

俺はどちらかと言うと猫派だったのだが、明命に哀れまれるレベルの嫌われっぷりに真剣に悲しくなり、これはもう犬派になるしかないか、と絶望し始めた頃である。明命

が俺を叱りつけた。

「諦めたらそこで試合終了お猫様との戦いは無しですよ。」

何処かで聞いた様なセリフだったが、まさしくその通りだった。

そして俺は目覚めた。

絶対ににやんこと仲良くなる！と本気で心に誓いを立てた。俺が死神だったら俺の魂にだ！と叫んだ事だろう。その日から明命に励まされながらの『にやんことお友達大作戦』が始まった。

あの手この手で猫と仲良くなる為に腐心する日々。中々結果は出ず、気落ちする俺を猫耳つけた明命や事情を知らないはずの我が娘達が励ましてくれる。あまりの可愛さにもう猫はこれでいいか、と妥協しそうになる心を叱咤し、雨の日も風の日も猫にアプローチをかけた。傍らには常に明命が居た。

そしていつしか俺たちは固い絆で結ばれ、生まれた場所と時は違えども最後まで猫と共に生き、共に猫に囲まれて死ぬという永遠猫の誓いを交わした義兄妹になったのだ。
た。

尚、猫に関しては恋が直接猫達に交渉してくれて5分で抱つことかできる様になった。恋を猫神様と呼ぶことにした。

・・・と、まあそんな感じで真名を交換したんですよ。なあ明命。

「はい! 私と道玄さんはお猫様を介して固い絆で結ばれています。」

そう言つて2人で親指立ててサムズアップ。やましい事など何も無いことをアピールする。これで文句はあるまい! と周りを見てみると、表情を消した冷たい目で睨む皆。

「・・・・・・・・。」

・・・あれっ?

なんか今の説明でマズいとこあつたらうか。いい感じに猫と俺と明命との熱血スポーツの風なストーリーが表現出来たと思うんだが。漫画だったら打ち切りで最終話でテコ入れされたみたいなのラストだったけど。何だよ直接交渉つて。野球で言えば賄賂で甲子園! みたいなもんだぞ。事実なだけに余計にヒドい。でもそんな恋の存在がチート過ぎて凄いい好き。チートつて使う側なら最高だよ。にゃんこが可愛いから異論は認めない。

そんな事を考えながら隣の明命となんかまですつたか? いえ、分かりません・・・と、視線でやり取り。上手く誤魔化さないと2人揃つてどうなるか分からないので、見た目は

ポーカーフェイスを頑張つて保ちつつ、必死に言い訳を考える。

「・・・道玄？」

ビクウツ！な、何でしょう愛紗さん！

「先程から周泰殿に私達と同じ匂いを感じます。・・・私達と同じ様な。」

「不思議な事に本当に今の今まで察知できませなんだ。しかし今は強烈に感じ取れますぞ。」

「狐につままれた気分ね。でも確かに今なら明命が私達と同じだって分かるわ。」

「よー分からんけど・・・とりあえず説明してくれるかいな、団長？」

!?

こいつらの探知能力がほとんどエスパーパーな件について。いや現実逃避してる場合じゃない。何で今までバレなかったのに急に!?

明命との事は協力者のおかげでバレない筈だったのにこのままではマズい。何がマズいつて協力者本人には協力してもらってることを教えてないからな！バレたらヒドい事になる！（確信）

と、ふと隣を見る。先程から明命が静かだったからだ。そこで気付いた。バレたのこいつのせいだと。

だつていつの間にか苦笑いで顔真っ赤にしていやんいやんつてモジモジしてるし！

何だおまえ、さつきまでの真面目な顔で報告書読み上げてた時の顔どこやった!?!え?俺の女扱いされて恥ずかしい?けど嬉しい?お、おう。凄く可愛く言ってるけどお前、目の前の愛紗達の事忘れてんだろ。というかこいつのせいでバレたのは間違いないみたいだが愛紗達がエスパーなのも揺るがぬ事実みたいだ。俺の女達が超能力者な件について。

こいつはやばい。一難去つてまた一難、しかも全てが俺を殺しにかかるアクシデントだ。世界は俺に恨みでもあるのか?

く、こうなつたら有耶無耶にするしか?!皆聞いてくれ・・・!

「そういうえば・・・だんちよ、最近何時も明命と一緒だった。」

有耶無耶にさせてくれよお!というかやつぱり恋に口裏合わせ頼むの先にするべきだったー!

どういうことですか?と恋に問いかける愛紗を見ながら自分の顔が血の気が引いて来ている事を自覚する。隣では上司に殺意を込めて睨まれていることに漸く気付いた明命も真つ青な顔でガクブルしながらちよんと俺の服を摘んでいる。ちよつと可愛いがイチャつく余裕は皆無である、

そう。何を隠そう!俺が本人にも内緒で協力してもらっていたのは恋だったのだ!何故なら比較的まだ付き合いの浅い元董卓組は愛紗達と比べればそこまでエスパー

じゃないし、多少野生が混じれど、スーパーピュアな恋なら、色々深く気にせず一緒に遊べるし、結果的に浮気してしまう形とはいえ、浮気は浮気。俺の罪悪感を紛らわす為にも娘達や恋と遊ぶ時間は大切だった。愛紗達なら問答無用だからな。

それに女を抱いた匂いは別の女を抱かないと紛れないらしい。かといつて娘達を自ら積極的に抱くのは個人的に気がひける。だが愛紗達の誰かにバラせばそのまま夜が全員になる。それでは頻度的に俺が死んでしまう。そういう意味でも恋の存在は有り難かつたのだ。え、初めての女に手を出す勇氣は無いはず？ 無いよ？ 初めての時は明命の方から襲われたんだし。恋やねねが手引きしたのは確かだが。

まあ普通にクソ野郎思考だけだな！ いや、本当に……！！

恋には本当に申し訳ないと思う。毎度毎度幸せそうな恋の笑顔には容赦なく良心を抉られる。出来るなら自殺しようかと思つた本当に。

だが、俺としても死にたくなかつたんだ……！！

「必死に言い訳探しているところ申し訳ないんですけどお。」

「とつと吐け。どうやってここまでボク達に隠したかは分からないけど……。」

「どうにも私達に黙って好き放題したみたいですね、道玄様？」

「許してあげようかと思つたんですがね。」

「厳罰が必要ね。私の夫になった以上、2度とさせないわよ。」

「とにかくまず全てを話してもらおうか。今度は、偽りなく全てをな。」

「当然、お主もじゃからな? 明命。」

「そうね。事と次第によつては・・・思春?」

「ええ、蓮華様。その時は新しい細作を育てましょう。」

ふにやあつ!?と今度こそ震え上がり俺に飛びついてくる明命。命の危機だからね、怖いのは仕方ないよね。まあ俺もちびりそうなくらい怖いから気持ちにはよくわかる。特に愛紗が本当にやばい。唇の端にちよこつと引つかかる髪の毛と光のない瞳がひたすらホラー。これが怪談だったら目を合わせてはならないとかそんなレベルじゃなくて、そもそも遭遇しちゃいけないやつ。超絶怖い。

い、いやえつと、あのですね!ちよつと落ち着いてほしいかなくて!・・・説明が先?あ、はい。すいません。ちよつと待つて今怒られないような内容にアレンジs「たぶん、森で恋とちんきゅーがだんちよとしてた時が最初・・・。明命ずつと見てたから少しだけ混ぜた。」ちよ、待てよ恋さん!待つてくださいよ!

「いいからとつとと全部吐け。それとも問答無用の方が好みか?」

「兄さま?素直に全部話した方が手心加えてあげますよ?」

秋蘭と流琉の目が愛紗と同じに……！ふと周りを見ると皆似たような目をしていた。あ、これはダメだ。これ以上足掻くと本当に問答無用になる。隣では明命が呉の皆に囲まれて小さくなっている。彼女だけ逃すという手段も取れなさそうだ。

……1つだけ、約束してくれないだろうか？

「……何かしら？」

大人しく全部話すので、流れで初めての参加は辞めませんか？

今まで見たくノリで抱くのはね、良くないと思うんですよ。特に璃々や紫苑とか無関係な奴とか居るやん？ 思い想われてこそ、だと思えます！

「内容次第ね。場合によっては……。」

ば、場合によっては？

「美しく可愛らしいものを集めた酒池肉林。悪くないと思わない？」

やめてくださいいしんできません。

この後無茶苦茶尋問された！

「ほう、最初は明命が猫の交尾を見て、猫と同じく発情したのが原因なのか。．．．んん？何だそれは。馬鹿なのか？」

「このやたら凝った作りの猫せつと？を着けてたせいで猫と同じに気分になった？．．．明命、お前は何を言ってるんだ？」

「それで寝てる道玄を襲ってる恋と音音に混じって啞えたと．．．。」

「あれ、その時は最後まではしなかったのよね、恋？」

「してない．．．。少しは分けてあげても、だんちよ、恋達のもの。」

「そこから先はどうなってるんだ道玄。．．．何？脅された？」

「え、さっきの報告書に出てきた話は、全部口封じの対価を求められた？どういう事ですか？」

「．．．はあ？ボク達に言わない代わりに続きを要求されたあ？それに屈したの？馬鹿じゃないの？」

「なるほど、つまりあれか。あの報告書1つ1つに実は明命としたいうオチが付いていたんじゃない。なるほどのう。」

「あれ？大した事のないものを入れればかなりの数の報告があつたと思うんですけどおー？」

「数十件はありましたね……。なるほど。」

「というか、私達が気付けなかつたのは何故でしょう？周泰殿からも本当に先程までそれらしき感じはなかつたですよね？」

「それと同じくらい呂布が道玄としたというのなら、道玄の方は簡単ね。要するに上書きでしょう？」

「では明命、貴女は何をしたの？答えないと……。分かるわよね？」

「なに？自分に暗示をかけた？道玄と二人きりの時以外は完全にお友達？でも未熟だから話題に上がつてした時の事を思い出して解けた？……。そんなバカな。」

「兄さま、ここ最近は何時よりも回数がちよつと減つてましたよね？」

「ああ、そう言えば夜以外の回数減りましたねー。夜の回数は減らせませんがー。」

「それだけ周泰さんと恋さんとかかり切りだつたんですね。へう……。酷いです、ご主人様。」

「……。道玄？私よりも2人を優先したのですか？」

「お前なあ．．．！なんで全部恋なんだ！私達だつて居るだろう!」

「明命ちゃんとした後必ず最初に出会おうのが呂布さんだつたあ？本当ですか？」

「．．．まあ、どこまでいつても一緒に居られなかつた私には何もできなかったろうが．．．限りなく、腹が立つな。」

「ウチらに隠してここまで．．．やるやん、団長。」

「許す気はあらへんけどな!．．．分かつとるよね、にいさん?」

「嚴罰待つた無しなの!」

「．．．何処へ行こうというのですか、道玄様。逃がしませんよ?」

「．．．そんなに、私以外にツ．．．絶対に許しません。今日という今日は完全になくなるまでです。」

「そういきり立つな愛紗。皆同じ気持ちなのだ．．．つまり長丁場になる。落ち着いてまずは寢床と食糧の在庫確認が先だ。」

「そうです!先ずはきちんと準備が必要でしゅ!」

「逃さず囲つてから、じっくりゆっくり包囲殲滅．．．絶対に逃がしません。」

「ねえ浮気者の御主人様、覚悟は良いわね?大丈夫、答えは聞いてない。」

「お嬢様あ、これ狙いどきですよ!これを機にお手付きされちやいませよ!これで鈴々さんや音々音々さん達の仲間外れじゃないですよ!．．．そして私も堂々と怒れますう(ボ

ソ

「ふふふ、覚悟は良いわね、2人とも。大丈夫、私も一緒よ?」

「はははい!か、華琳様と一緒になら私はどんなことでも怖くないです!」

「おおおおお伴します!華琳しゃま!」

アカン。

・・・どうしよう、これは俺死んだかも知れぬ。

ちよつと流石に助かる気がしない。なんか華琳や春蘭、桂花までやる気出してるし。祭や冥琳の怒りも尋常じゃない。その上何故か向こうの方で曹仁さんが準備運動して、陳珪さんがニヤニヤしててちよつと本気で意味が分からない。

うちの女性陣は既に最低一週間はヤル積もりで算段立ててるし、愛紗に居たつては見えないレベルで病んでる。自分の回数減らされて明命や恋としてたのが余程腹に据えかねてるらしい。

だが、意外な事に、事実上匂い消し代わりになってしまった恋は怒って居なかつた。というか、結果的に1番回数が多かったので寧ろ自分が1番だとちよつと嬉しそうだ。それを見て余計に愛紗が病んでるので、プラスマイナスで言えば結局マイナスだが。

チラ、と隣を見れば、逆さまに吊るされた明命が蓮華や思春に余罪の尋問を受けて泣き叫んでる。助けてやりたいが、こちらを見ていない思春と蓮華は、別に俺を怒らないわけではない。というか寧ろ猛烈にぶちギレてる。だって2人とも目が病んでるもん。スクールデイズに出演出来そうなレベル。たぶん上司たる自分達を無視して抜け駆けした明命を優先しているだけで、明命が終わったら俺もあなる。すまん明命、俺も後を追うから許してくれ。

転生してまだ五年も経ってないのかぁ・・・短い人生だったなあ。

そうやって儂んでいると、唐突に紫苑が口を開いた。何故だか先程までまでの冷徹な眼差しが消え、優しい笑顔だった。

「あらあら・・・。もう、仕方ない人ですね。」

まったく、と嫺やかに苦笑いする紫苑。周りとのギャップ差もあつてか、その微笑みに何故か慈愛を感じる。正座させられ、完全に包囲されている俺の元へ、ゆつくりと歩み寄る。やがて女性陣を除けて、俺の前まで来ると、俺が正座している為ちようど同じ高さになった目線で、しっかりと目を合わせ、まるで幼子を窺めるように人差し指を立

てて言った。

「こうなったのも、道玄さんが会う女の子皆に良い顔してるからですよ？誰彼構わず優しいのは貴方らしいですけど、女の子は好きな人には自分だけを見て欲しいんです。」

・・・うぐう。否定したいが、美人相手なら割と相手が誰でも良い顔して来たのは自分でも自覚ある。ぐぬぬ、だが最初に多数で共謀し襲いかかって来たのは女性陣の方なんですがそれは。

「言い訳はダメです。結果として手を出してしまった事に変わりないでしょう？どんな経緯かは知りませんが、殿方には責任がありますわ。それに、何人も女の子が、同時に其処まで思い詰めるなんて事、普通はありません。原因が自分にまったく無いとお思いですか？」

うぐう。

いえ、はい。全て私に原因がありますですハイ。ごめんなさい。

ちらつと周りを見ると、正論で真正面から穏やかに俺が怒られているのは珍しいから、險呑極まり無い雰囲気だった皆も少しだけ呆気を取られている。うちの女性陣の何

人かは紫苑の言葉に深く頷きまくりである。幼女軍師共はもつと言つてやつて下さい！と煽つてさえいる。ぐぬぬ！

「道玄さん？本当に反省してますか？」

穏やかな声、優しい笑顔。何時もの敵を見るような冷たい視線ではなく、いたずらした璃々を注意するような、慈愛に溢れた彼女だが、何故か有無を言わせぬ圧力を覚える。別に怖く無いのに萎縮してしまう。前世の学生時代に、何の前触れもなく校長室に呼ばれた時のような、そんな威圧感。何とはなしに、口から勝手に反省と謝罪が飛び出る。

はい！めっちゃ反省しています！本当にすいませんでした！

とりあえず全力で謝る。彼女の事なのできちんと謝れば許してくれるはず。

「すいません、で済む段階はとうに過ぎていきます。今はもう、はじめをつけなくてはいいません。」

フアツ!?

・・・全然許してくれなかった。

どうするんですか、と迫る彼女。どうする、と言われても何をすればはじめになるの
だろう？全員娶るとか？まさか死ねとか言わんよな。

・・・い、言わないよね？

選択肢をミスつたらヤバイ気がしたので、恥を忍んで直接聞いてみる。すると、血を
見ることになるかもしれないね、とため息を疲れた。え、血？

・・・えつと、それは小指とかそういう・・・？

どうしよう、完全変身すればそれぐらいの欠損は治りそうだが、そもそも俺の指を切
り落とすにはその辺のドスでは無理だ。というか斧でもたぶん無理だ。物理的にけじ
めがつけられない・・・！

「何を慌てているかは分かりませんが、違います。というか、その方法でけじめをつける
なら、切り落とす場所が違います。」

そう言っつ俺の股辺りを見る紫苑。本能的に恐怖を感じて股がひゅん、と竦んだ気が
した。ちょ、マジでか!?

が、即時周りの女性陣全員がそれは駄目！と割って入ってくれた。愛紗なんか絶対に
させない！と武器を構える程だ。これは俺を思っているのか、俺のチ○コを思っている
のか。どうしよう嬉しいけど素直に喜べない。

「駄目です! まだ道玄の子を孕んでいません。最低3人出来てからです!」

おっとー。

どうやら3人出来たら不要らしいぞ俺のマイサンよ。何とかしないと俺の息子が未来で死ぬ。逆君の名は。をやらねば助からなくなる。

「道玄さんも、皆さんも落ち着いてください。私もこの人を宦官にするつもりはありませんわ。というか、それでは皆さんに悲しみしか残らないでしょう?」

た、確かに! 言われてみればその通りだ! 良かった、本気でみつはを探すところだった。あれ、たきくんか?

・・・あの、なら俺はどうすれば良いですか? 息子を切られない為なら頑張りますよ、俺。

俺がそう言うと、紫苑はにこやかに笑って言った。同時に俺の背中を冷たいものが通り過ぎた気がした。

「あら、簡単ですよ? 貴方にとつての1番を決めてしまえば良いのです。つまるところ、ただ1人の正妻を選んで下さい。」

え、つつ

あの、それNGワ―「あら、それなら私で決まりね？何故ならもう夫婦だもの。」「冗談を。道玄の正妻は私以外にあり得ません。」「済まないが、新参の自覚があつてもそれを譲る気は無い。」「浅ましい、道玄様の妻は私以外にいません。」「……ほらあ。やつぱりこうなつた。前回どんだけ頑張つて納めたと……！」

「道玄さん、それが駄目なのですよ？皆さんの好意に甘えて、のらりくらりと女性と女性を行つたり来たり……だから皆自分が一番何だと思つてしまふんです。言つたでしよう？女の子は好きな人にとつて自分が一番でありたいんです。寧ろ自分以外いて欲しく無いんです。」

まあ、今貴方が一人だけを選んでそれ以外を排したら、それはそれで血の雨が降るでしょうけれど、と困つた様な顔でため息つく紫苑。前世でちびっこいガキの頃、告白した保育園の先生がこんな顔したな。仕方ない子だなあ、そんな顔だ。

うう、なんか気恥ずかしい。転生してから初めてのお子様扱いされてる気がする。胸からしてそうだと知っていたが、なんとという圧倒的母性。紫苑に菩薩的な何かの後光が見える。助けられたと思つたらいつの間にか断罪されそうだけど、全く逆らう気になれない。

てっしーの圧倒的癒しに浄化されたカス虫並みに慈愛の波動を受けてる。このまま

だとキレイな羌毅さんになる。

かと言つていきなり一番を決めろ、と言われても困る。選べと言われて選べるくらいなら俺の女はこんなに増えていない。優柔不断と言われるだろうが、俺は一人一人本気で愛している。良いところも悪いところも引つくるめて、全員に優劣など無いと断言できる。

逆に言えば一番がないからひよつとしたら俺は誰も愛してないのでは無いか、と悩んだこともあるくらい、俺にとつてこいつらは皆同じくらい愛している。

なので一番とか無理だ。済まぬ。

「ならばこのまま一番を選ばず今まで通りダラダラ皆で過ごしますか? . . . うふふ、後何人増えた段階で貴方が枯れ朽ちるのでしょね?」

うぐう。

せつかく真面目な事を言ったのに、秒で鎮圧されたでござる。しかも正論だから何も言えねえ。うう、流石はママ。つよい。

つかさつきまでガチギレだった皆がなんかおかしな空気。無言だが何処と無く牽制しあつてる感じ。ああ、俺が誰を選ぶか待つてんのか。参つたな、誰を選んでもちよつとは血が流れそうな気配だぞ。

どうしたもんか、とオロオロしていると、盛大にため息を吐いた紫苑が、呆れた顔を
して、あれ？今ちよつと笑った？

「本当に仕方ありませんね……。皆さん、どうしてもこの人には決められないみたいで
すので、どうでしょう？此処は1つ、私達の方で答えを出してみてもは。」

その言葉と共に、世界が変貌した。

その場に居た女性陣全員から覇気と殺気がたちまち充満し、錯覚ではなく温度が大き
く下がったと感じるほどに天幕内の空間がヤバイ。

咄嗟に美羽や音々を七乃や恋とくつつけ、頭を撫でて沈静化する。鈴々みたいに覇気や殺意に慣れていればともかく、こつちのちびつ子2人には刺激が強過ぎる。それでいて尚、慣れてないはずなのにこの氾濫する殺意の中すぴーすぴーと眠り続ける璃々はマジ将来大物になると思う。

というかこのメンツでその手の発言がヤバいつて分かつてるだろなに考えてんだ、と紫苑に文句言つてやろうと口を開くより早く、紫苑が落ち着いて下さい、と声を上げた。皆が言い合いを始める直前に言つたせいとか、出鼻を挫かれた女性陣全員の視線が紫苑に集まる。さつきから紫苑の独壇場みたいで、これほどのメンツの中で毅然とする彼女を少し尊敬しそうになつたが、事を荒げてゐるのも彼女なので気のせいと思う事にした。だつて腕の中で2人が震えてゐるのあいつのせいだし。

「皆さん、そろそろ意味の無い張り合いや自分本位の主張は控えましょう。武力で彼の隣を勝ち取つても、謀略の果てに彼を独占出来ても、結局彼は喜ばないと、分かつているでしょう?」

だから返つて膠着するのです、ときつぱり言い切る紫苑。

その堂々とした姿に道玄の1番は私です、と言いたげな愛紗や主人には私が1番と言おうとしてた星、私は既に妻よ、と言おうとして黙らされた華琳、何も言わずに隣に立つ

て無言の主張をしようとして祭や冥琳に阻止されてる蓮華や凧がぐぬぬ、と黙り込む。そんな彼女等を尻目に比較的冷静な軍師組が何か案があるのか？と紫苑に問う。その目は真剣そのもので、威圧感さえ感じる強い眼光を放っている。

「ええ。とはいえ、難しい話ではありません。．．．何でも皆さん、身籠もらない様に気を付けていらっしやる、とのことでしたよね？」

ちよ!?紫苑お前それは!

それはお前俺が死ぬほど頑張つて皆を説得したハナシ．．．!

やがて来る五胡の大軍戦に備える為、頼むからまだ待つてくれと土下座して皆に頼み込み、必死こいて前世の知識を引っ張りだして体温測つたり生理周期把握したりして安全日や危険日を割り出したり、色々あつて制裁される時も何とか避けてた、タブー中のタブーに簡単に触れてきた紫苑について声を荒げそうになつたが、突如女性陣に口を塞がれる。

黙っている、という事らしい。愛紗が深妙な顔で頷き、道玄との約束ですので、と答える。

「私達も疑問でしたが、おそらく先の話に備えて、の事なのでしような。それが、何か？」
「その約定を切り捨て、彼との間に一番早く子を持つた者が正妻、でどうでしょうか。」

提案、という様な程の言葉だったが、実際にはこれ以外無い、という断言である。しかし、自信溢れる彼女に対して、女性陣は一転冷ややかな目を向ける。

「何を言い出すかと思えば……。その程度の案が今まで我らから出なかつたとお思いか？」

「それで道玄の1番が手に入るならとつくに決着はついています。彼自身がそれを望まなかつたからこそその膠着状態なのです。」

「そもそも道玄様は私達が争う事自体を憂えています。まあだからと言って誰かを選んでそれが1番、となつても恐らく私達は納得しないでしようが。」

「というか、道玄が今まで誰も孕ませなかつたのつて先の戦に備えて何だろ？まあだいぶ運が良かっただけな気もするけど、その辺の本人の意思を無視して私達が勝手に決めるのもどうなんだ？」

「いえ……。この際道玄の意思を無視して決める、というのは良いと思うわ。この先、道玄自身が決める事は無い……。というか、道玄は身内には甘いし、折角決めても多分扱いは同列になる。それでは結局、誰もその1番に納得しないわ。形だけだろうと何だろ」と、1番は自分だけ。それ程には私達は道玄を欲している。」

「ならばいつそ私達が、ということですかー？悪くは無いですすが、それだと結局……。」

そこまで言つて、風が言葉を濁す。

そう、それでは結局、俺の一番にはならない。何故ならば。

「ええ、結局それは『彼にとつて』ではなく、『私達にとつて』の序列でしかない。その通りです。」

そしてそれは本来、私達が欲している一番ではないー。ー。

そう言つてにこやかに笑う紫苑。分かつているならば何故、と皆が目で問う。俺としては平然と私達つて言つた紫苑に突つ込みいれたいけど、なんか口挟んだら怒られそうだから辞めておく。

「ですが、だからこそ価値がある、と思いませんか？」

考えてもみてください。曹操様が先ほど仰つたように、恐らく彼は誰を選んでも他の誰かを蔑ろにはしないでしょう。

それは私などよりも彼と付き合ひの長い皆さんの方が良く知つてはいます。彼はどんな小さな変化も見逃さず、私達を見てくれます。まあ、色恋になると途端に洞察力が鈍るようですし、偶に欲しい言葉とは全然違う言葉を素で言つてきたりと、やきもきさせられたりもしますが。

それでも彼が私達を平等に愛してくれている事に違いはない。

・・・そうでしょう？」

おい平然と俺が愛した女達の中に自分を入れたぞあいつ。よせ、それは事実無根でも俺が怒られるフラグ。と、思ったら何か紫苑の言葉に共感してるらしい皆が凄いウンウン頷いている。マジか。怒られなくて良かったけど俺そんなにやきもきさせる程鈍かったらどうか。獣並みに鋭いと評判なんだが。男連中に。

「そう、だからこそ、ですよ皆さん。どうせあの人からの愛が平等なら、私達の方でそれを調節するのです。」

・ ・ ・ 例えば、序列毎に2人きりの時間が長く取れる、とか。」

ぴくつ、と何人かが反応した。紫苑の言葉にメリツトを見出したらしい。これはマズい、少しずつ皆が奴の言葉に耳を傾け出したぞ! いかん、奴の思うツボだ!

「例えば、彼に愛してもらおう優先権とかも良いですわね? 他には、彼と一緒に部屋に2人だけで住める、何て言うのも憧れますねえ。」

ぴくぴくつ

ああつ、さつきよりたくさん奴らが反応した! 明らかに興味を示してる! ヤバイ、これは結局愛紗のガチギレ不可避って事で御蔵入りになった最終奥義「比較的五胡戦に影響しなそうな侍女組を選んでその場のぎょぎょ最悪孕ませてもギリギリ戦は大丈夫!」を使わざるを得ないか!? 普通にゴミ野郎な方法なのと、どう考えても愛紗が納得しないだろうと言うデメリツトしかない手段だから取りたく無かったが・・・いや、ま

だだ！まだ、終わらんよ！！

「極め付けは、そう。本来皆に平等に使われる彼の愛、彼の時間が、平等の筈なのに自分が一番多い、とか……。どうです？想像、出来ました？」

ガタタツ！

「面白い、乗ったわ！」

「良いでしょう。その勝負、受けます。」

「どうせ道玄の一番は私以外あり得ませんが、ここで決着を付けておくのも確かに重要ですね。」

「よ、要するに誰が一番早く道玄の子を孕むかって事だろ？それなら私にも可能性が……！」

「ふふふ……いいえ、それなら寧ろ今までずっとやってきて尚、子が出来なかつた皆さんより私やお嬢様の方が可能性が！くふ、良いですね、運が回ってきましたよお嬢様！」

「ぐぬ、ずるいぞ。これではお主ら若者の方が有利じゃろうが！不公平じゃ！」

「あら。祭、それは言い訳よ。こればかりは運の要素が大きいし、文句があるなら誰よりも道玄に抱かれれば良いのよ。」

「そうね、姉様の言う通りだわ。最も、選ばれる回数も私が独占してみせるけれど。」

「ご冗談を、蓮華様。道玄様が選ぶのは私です。そうでなくとも傭兵団員が独占でしょ

う。貴方方とは練度も実績も違います。」

「言つてくれるな、風。確かに蓮華様は自惚れが過ぎるが……誰よりも道玄の好みを体現する私に勝てるだけでも?」

「娘2人と子を作る……この背徳感に勝てる人はいません!」

「そうでしゅ!更に私達は2人!お徳感でも圧勝です!巨乳など敵じゃない、ですつ!」

ああああ……!

終わった。完全に皆その気になつてる。まだ同時に妊娠発覚したらどうする、とか、そもそも俺(獣)と子供が本当に出来るか、とか根本的な問題が残っているけど、今の彼女達にそんな事言つたところで、「では試してみましよう!もし2人以上同時に出来た時はその時にまた考えましよう!出来なかつたら出来るまで!」とか言われるのがオチだ。

くつそ、本当にやりたく無かつたが……!皆聞いてくれ。唐突だが俺が選「ああ、言い忘れましたが、その場しのぎに先の戦に関係しないひとを選んで事無きを得る、とかは駄目ですよ?」なん……だと……!?

馬鹿な、読まれていただど!?誰にも明かしたことのない最終奥義を?!奴は化け物か!

「そんな事を考えて居たのですか？道玄、それは流琉や月達に失礼ですよ。．．．ああ、もしかして本当に私が勝つか不安なんですか？安心して下さい。貴方の一番はこの愛紗です。それを証明して見せましょう。」

「私達はそれで一向に構いませんよ？どんな理由であれ、ご主人様が選んでくださったのなら、其れに勝る喜びはありません。ねえ？詠ちゃん。」

「まあね。ボク達を選んでくれるなら、その、嬉しいし．．．！」

「お二人とも凶々しいですよ？ご主人様はわたしとお嬢様を選んでくださったんです。」

「七乃、流石にそれは．．．こう言う時、兄さまが選ぶのは妹である私に決まってるんですよ？」

いかん、下手にバラされた所為でなんだかんだ仲の良い侍女組でも内部分裂が！これでは俺のフォローどころではない！

くそ、紫苑め、なんで策士だ！こんな見事な離間の計を仕掛けてくるなんて、恐ろしい奴だ！いかん、何かもう誰が一番にヤルか、一人当たり回数とかめちやくちや議論が始まってる！人数が人数だけに手がつけれない熱気だ！く、本当に人数が多い！こ

れじゃー1人ずつ羌毅さん式ナデナデで鎮圧しようにも、5人目くらいで最初の1人が周りの熱気に当てられて復活する無限ループだ・・・!!

てか、アレ!?よく見たら田豊と顔良混じってない?!あいつら軟禁されてたはずだろ誰だよ出したの!!寧ろ周りも気付けよ!てかそれなりに良い雰囲気になった事のある(一応未遂) まあちはともかく何で斗詩が混ざってんだ!アイツ絶対周りの流れに乗っただけだろ!

和気藹々、と言うには明らかに敵意が充満する討論が行われる。最終奥義まで封殺され、このままでと子作りという名の俺限定デスゲームが始まってしまおう!とオロオロするしかない俺。ど、どうしようどう考えてもこの人数は無理だ。今度こそ死ぬ。腹上死する!ヤバイヤバイ、五胡の前に腹上死とかアホすぎる!

そんな風にテンパる俺や、必死に自分たちに有利な条件を押し通す為声を荒げる彼女達を横目に、ひっそりと紫苑が俺の前へやってきた。こ、此奴、ぬけぬけと・・・!

見れば紫苑はクスクスと微笑みながら、人気者ですね?なんて楽しそうに言った。お、お前なあ!

「あら、だってこのままでは一生誰も選ばなかったでしょう?というか、彼女達から1番を選ぶなんて発想も無かつたんじゃありません?」

ぐぬぬ。い、いや、それにしてもだな「ところで！唐突に話は変わるのでありますが、ここ最近、ずっと璃々が貴方をお願いがある、と言って居たのですが、どうにも言い出せなかつた様なのです。宜しければ聞いていただけませんか？」

あん？璃々のお願ひ？そりや構わないが・・・い、いや！今それどころじゃないだろ!?どうすんだこの事態！最低でも俺が死ぬぞ！最悪血の雨が降る！そんなに俺を殺したいのか!?

「そんな訳ありません。流石にそれは誤解です。それに彼女達が貴方を殺すなど、あり得ません。・・・まあ確かにやり過ぎる事はあるかもしれないですね。」

・・・璃々のお願ひを聞いてくださるなら、私が見事に納めて見せますよ?」

此奴め！自分で事を荒げて納めるから対価を寄越せ、とか何というマッチポンプ！ぐぬぬ、でも乗らないとガチで俺が死ぬ。くそう、ハメられた・・・!

ぐぐぐ、良いだろう。元々璃々のお願ひならこんな脅迫なんぞされんでも幾らでも叶えちやる！それが対価というなら是非も無いわ!

「まあ！本当ですか？嬉しいです。では、さっそくお願ひしますね?」

そう言つて俺の膝の上で眠り続ける将来大物間違いなしの璃々をゆさゆさと揺さぶり起こす。ううむ、この殺伐とした空気が嘘の様な寝顔。めちやくちや癒やされる・・・

マジ可愛い。俺もこんな娘いつか作ろう。

「んう・・・あれえ、おじちゃん？あ、おかーさんも・・・？」

ガチでこの空気の中熟睡してたらしい璃々。寝ぼけててもめちやくちや可愛い。将来は絶対に美人になるだろう。おじさんは実に楽しみである。

そんな風にホツコリな璃々に微笑みながら、優しく語り掛ける紫苑。

「璃々、良かったわね。おじちゃんが、璃々のお願い聞いてくれるそうよ？」

「ほえ、璃々のお願い？・・・えっ！ほんとに!?!おじちゃん本当に璃々のお願いきいてくれるの!?!」

ちよつとまだ寝ぼけたのに、一瞬で目が覚めたらしい。そんなにして欲しい事があったのか。早くいえば良かったのに。璃々のお願いなら基本断らないよ俺。

にしても、もの凄いい喜んでるし、内容が無理難題でも今更嘘とは言えないなこりや。まあ俺はチミっ子の期待を裏切らないと評判のオーク、羌毅さんだ。大抵のことは普通に叶えてみせる!ので、どんとこい、と胸を張って見る。

「本当!?!本当に本当!?!」

本当だとも。何でも言いなさい!この蛮族系おじちゃんに不可能はあんまり無い!

「本当!?!・・・やったあ!えへへ・・・あの、あのね?」

おじちゃんのこと、おとうさんってよんでもいい？」

こふっ！・・・天使や。俺の前に今可愛さの化身にして天使がおる。あまりの可愛さに変な息漏れた。ヤバい。

この可愛さそのものたる天使のお願い、聞かぬ人間がおろうか。いや、居るはずがない。何故ならこれを拒否る外道は俺が滅殺するからだ！

つまり良いよ！断然良いよ！俺でよければ幾らでも璃々のおとうさんになるよ！むしろ今すぐ俺の胸に飛び込んでおいで我が娘よ！

既に膝の上に乗る璃々をさらに腕を広げて迎え入れる。間髪入れず飛び込んでくる璃々。ああ、何と愛おしい。これが娘を抱きしめる父親の感情・・・！肉体関係のない健全な親子の絆が、こんなにも暖かい！いかん、これは過去最高に幸せだ。

しばらく璃々を抱きしめて、やがて璃々が俺の胸に顔を擦り付けるのに飽きた頃、唐突に紫苑を振り返って叫ぶ璃々。

「おかーさん、やったねー！これからおとーさんとずっといつしよだね！」

・・・んっ？

「ええ、そうね璃々。これからは3人ずつと一緒よ? さつそく今日は3人で寝ましようか。」

・・・んんん?

「ほんと!? やったあ! おかーさんとおとーさんもいつしよだあ! えへへ、うれしいな!」

「最初に貴方と子供が出来た人が正妻なので、これから末長く、宜しく願いますね。あなた」

・・・アレツ!? もしかして俺、ハメられた?

あれれれれ? もしかしてこれ、ヤバくね? 慌ててちよつと待つてくれ、と言おうとして、しかし直ぐに俺の耳元で紫苑が言った。

ー駄目ですよ、男に二言は無い、でしょう? それともまさか・・・

あんなに嬉しそうな璃々を裏切るのですか?

目の前にめちやくちや嬉しそうにはしやぐ璃々。あかん、ここでやつぱダメとか言ったら確実に泣く。俺にはそんな外道な真似出来ねえ。

「ふふふ、良かった。やっぱり貴方は優しい人……璃々の父親として、貴方を選んで本当に良かった。私のことも、これから宜しくお願ひしますね？」

ああ、皆さんですか？大丈夫ですよ！一番早く貴方との子供が出来たら、ときちんと言いましたし、皆さんも納得済みですから。」

誰も孕んだら勝ちなんて言っていないだろ？言外にそう言つて、俺の首に腕を回し、ゆつくりと紫苑の顔が近付いてくる。

まるで時が止まったかのように、まるで動けない俺。

しかし、そんな静寂が、俺と紫苑の間だけのものではないと、気付いていた。

何故なら

紫苑との距離はもう10センチもない。紫苑が唇を突き出す様に顎をあげる。目を瞑る彼女の睫毛の一つ一つが見えるほど近くに――

彼女達は、皆、見ていた。

2人の距離が、ゼロに、唇が、重なって――！

――ドウゲン。

この後2人とめちやくちや逃げた。

尚、暴走した女性陣によるとぼつちりで軍があわや半壊しそうになった事を、ここに記しておく。

その後は非常に大変だった。

一度完全にブチ切れた女性陣はなかなか止まらず、あまり武力に訴える事のない軍師組でさえ兵を指揮して全力の追撃をしてきた。

慌てて紫苑と璃々を抱えて逃げたが、そうしなかつたら2人とも死んでいた可能性がある。いや、牽制ではなく俺の体に矢とか刃が当たってるからね。俺がいなかつたら2人に直撃してるコースで。

紫苑はともかく璃々にまで！と思つたが、ガチ病みした愛紗を筆頭に誰も話を聞きやしねえ。恋の全力なんか真剣にヤバかった。思わず部分完全変身したくらいだ。

まあその中でも何かのアトラクションと勘違いした璃々が楽しそうだったのが幸いだろうか。普通に考えたら生命の危機過ぎてトラウマ一直線だからな。何故か紫苑の

奴も余裕ぶっこいてたが。

全く、何が見事に納める、だよもう。確かに紫苑自身が決めたルールでは紫苑の一人勝ちだし、皆もそれに乗ってしまったのだからある意味してやられたのは事実で、そういう意味では納められたのかもだが。

・・・それはあくまでいい様に出し抜かれた皆が素直に納得したららの話である。

まあ俺を含めて全員が、それこそ軍師組や華琳でさえ乗せられてしまったのが本来悪いんだが、あれだけお膳立てしておいて、急に一人梯子を外しての抜けがけが許されるはずもない。

桃香の奴が決死の覚悟で武将以外の全兵の動きを止めてくれなかったら、五胡の前に中華が滅んでいた可能性がある。まあ俺も両手が塞がったまま普段より強い武将組を上手く怪我の無いように抑える、なんて軽い神業をした訳だが。今でもあの瞬間の俺はだいたい神がかったと思う。もっかいやれとか言われても無理だが。

結果的に皆暴走状態で大変だった訳だが、中でも愛紗は尋常では無かった。先にあった様に愛紗は自分が如何なる時も俺の一番は自分である、と本気で思っているのだ、たぶん誰よりも盛大に梯子を外された様に感じたのだろう。

何とか全員を鎮圧したころには既に嫉妬暴走による幼児退行が始まっていて、ひと段落した時には、それはそれはもう酷い引つ付き虫になってしまった。その引つ付きぶりときたら、鈴々や音音はおろか、璃々でさえ「愛紗おねーちゃんにゆずったげる！」と俺の膝を差し出したくらいである。どれほどの引つ付きか推して知るべしである。

当然その間も俺への性裁は止まることはなく、1日3回の食事の時間に璃々に会えるのが唯一の救いだった。正に監獄の様な日々だった。

また、璃々との面会は許されたが紫苑とは許されなかった。それが許されたのはかなり後で、俺が愛紗の引つ付きから多少解放され、いつの間にか砦から敵顔や程普が建業からやってきたシャオを引き連れて来るまでの2カ月間を終えて、漸く紫苑と璃々の2人同時に再会できたのだ。

正直紫苑が愛紗とかに暗殺されてもおかしくなかつたので、できる限り積極的に皆と一緒にいる様にしたが、また会えた時は無事で安心した。いやぶっちゃけ正妻とか言われてもまるでピンとこないが、璃々が泣くのは勘弁である。まあ久しぶりに会った紫苑

は平然と微笑んでいたし、流石に暴走中でなければ女性陣も璃々まで狙ったりはしないように良かった。

尚、余談になるが、そんな訳なのでまだ紫苑とはしてないです。美羽や七乃、華琳達や何故か斗詩やまあちとは散々やったけども。陳珪さん親子はギリギリ2人とも未遂だ。悪ノリした華琳が混ぜようとしたが真名も交わしてないと他の女性陣が拒否ってくれた。

・・・まあそういういたら曹仁さんはあつさり真名を交換と言うか叫んで混ぜつちやつただけども。こう・・・「華崙つす！よろしくつす！」みたいな。そもそも誰だよ連れてきたの、つて思ったがこの時の俺には拒否権が存在しなかったのだ。というかあらゆる権利が無かった。でなきや流石に美羽やまあち辺りも止めている。美羽はちびっ子だし、まあちもだいぶ脈絡無さすぎだし、斗詩に至っては理由が「恥ずかしかったけどちよつと興味があつて・・・みんな凄いつて言つてたので。」だぞ？ストレス発散にセツク〇する〇しみたいな理由だった。恋姫世界つてこんな女性疲れてんの？あ、袁紹さんのところだけ？なるほど。

あととはとりあえず華琳や春蘭もそうだが、桂花がひたすら可愛かった。前世で結構人気があったのも頷ける。つい調子に乗つて華琳と合わせて鳴かせまくりの泣かしまくつてしまい、愛紗と冥琳に構い過ぎだと無茶苦茶おこられてしまった挙句、1人放置され

た春蘭と嫉妬暴走気味の秋蘭にビックリするほど絞られてしまった。

そして地味に明命とまともな寝台の上でしたのは初めてっていうね。いやほら、だいたい町で疑わしいアレの後に要求されてたから、初めての時以外割と路地裏とか物陰とか、だいぶスリル満点な場所だったんだよね。趣向が痴女の星でもここまで外でした事ないかも知れん。

まあそんな感じで2カ月過ぎ、その後は合流した粹怜が混じったりして余計に死にそうになりながらマセ過ぎたシャオの相手をはんなりしてたらいつの間にか孫家姉妹の手引きによって当然の様にシャオが閨にいたり、何か周りの目を盗んだ紫苑と初夜（何故か協力者とかいって桔梗もいた。意味不。）を迎えそうになったりした。尚、紫苑と桔梗を相手にした時は即愛紗と祭が乱入し、後を追いかけてきた残りの女性陣を含めて俺と肉体関係のある女性ほぼ全員を一度に相手するというクリア難易度ルナティツクなイベントが起きた。そして紫苑だけ出来ないというか目の前で俺が他の女と、みたいな逆NTRイベントみたいな感じになった。何げ桔梗は普通に混じってたのでもうよく分かりません。この3カ月で2度ほど華佗にお前なんで生きてるんだ？とか言われた俺が、どれくらいダメージを負ったかは想像してほしい。多分それよりひどい。

そうしてそんなこんな爛れた日常を送らされた後、いつもの様に馬車に押し込まれて（もちろん道中も陽の目は見ていない）気がついたら洛陽に到着していた。そしてかつて使っていた拠点が華琳達の手で自分達も使うからと無駄に強化され、ウチの傭兵団がちょうど収まるか、ぐらいの規模だった元隠れ家は、兵の詰所より豪華になつてもはや小さい城というような風体だった。

自分達の別邸みたいなものだから、などと華琳は言っていたが、俺には個人的にお気に入りに入りだつた隠れ家の要素が消し飛んで笑うしかなかった。

最近の俺は一体何処に向かっているのか? というかこの3カ月ほぼセックスしかしてないんですけど! と抗議するも、相手は皆超が付くほど有能な女性陣。もう全部終わってる、と言われ聞いてみたら兵の訓練スケジュールから、三国合同会議の日程や、五胡に備えての協力体制や戦闘予測による費用や食糧の算出など、時間のかかる軍の移動の為の街道工事など以外は本当にほぼ終わってて、それどころか俺の国を建国にするに当たつて必要な政策や法の思案、農地の規格統一や運営方法など、先の事まで手が伸びてて唾然とするしかない俺。

つまるところここ最近の俺の扱いはほぼほぼ肉バイブでファイナルアンサーだ。

どうよこれ。俺、泣いても良いだろうか。

どう思う一刀君?

「……………えつと、

……………すいません、言葉が見つからないです。」

泣いた。

閑話休題。

「ええつと、とりあえずこの涼しげな場所に来て何故か汗をかいてた理由は分かりました。とりあえず今道玄さんがその状態なのもなんとなく。」

分かつてくれるか、ありがとう一刀君。そうなんだ、先の事でまたこうなってしまうてな。かれこれ二週間近く引っ付かれています。

そうしてちら、と右腕を見るとしがみ付く愛紗と目が合う。腕どころか足まで絡ませ

て意地でも離れない!という顔をする愛紗。なんかもう慣れて来たけど風呂はともかくトイレくらいは1人で行きたい。

まあ今更言ったところで聞くわけもないので、とりあえず無言の訴えでキスを要求されたので軽くしておく。いや、右腕にくつつき過ぎてキスし辛いことこの上ない。しかしまあ、まだしばらくは構い倒すくらいじゃないと駄目だなこれは。

ふと見ると、物凄い微妙な顔をする一刀君。なんぞ? キスくらい散々目の前でさせられたやろ俺。

「いや、それは確かに見慣れましたが。あれ、それもどうなんだ・・・? つていや、そうじゃなくて。」

なんと言うか、道玄さんの周りの女性つて三国志の英雄ばかりな筈なんだけどなつて・・・。散々稽古つけて貰いましたし、そういう部分もたくさん見てきました。」

それがこれかあ、みたいな顔で愛紗を見た後、これは道玄さんが凄いのか? いや、むしろ駄目にしてるよな、とか呟く一刀君。いやあ本人を目の前にして良い度胸だ。

こないだ飲んだ時盧植の奴といい感じだったこと桃香にバラすぞ?

「ちよ! あ、アレは昔助言もらったりしたからお礼的なですね!・・・いや、というか道玄さんも皇甫嵩さんと仲良さげだったじゃないですか。」

おや、愛紗が隣に居るのにそれ言っちゃう? ねえそれ言っちゃう?

ところがどっこい！既に制裁済みです！じやなきやその皇甫嵩があそこでみんなと一緒に居るわきやないよ！

「ああ、それで。いや、いつの間にか混じつて居るなあと。でも良く反対されなかつたです。すね？いくら肉体関係ないとはいえ。」

いや、うん。ほら・・・分かるやろ？うちの女性陣アレで意外と面倒見いいから・・・。「ああ・・・確かに。必死というかなんというか、大変そうでしたもんね。じやああれはそういう意味ではないって事ですか？」

ああ、言つちやなんだが仲間として受け容れたのではなく、同情的な奴で友人として連れてきたんだらう。その証拠にさつきまで俺の周りで殺気立ってた皆があいつが来た途端愛紗残してこれだもんよ。せめて気を紛らわしてやろうと思つたんだらうよ。あいつ女友達さえあんま居ないらしいし。華琳がマジで人を哀れむとこ初めて見た。無茶苦茶有能らしんだがなあ。

いやもうホント、こないだ飲んだ時の楼杏の奴つてば婚期を焦りまくりというか、婚活戦士の40代OLみたいだったもんね。口癖は寂しい、だし、腕が軽く擦れただけで

触れ合い扱いするくらい人肌に飢えてるし。いやまあ、俺があいつと初めて会ったのも、反董卓連合の後洛陽の居酒屋であいつが半泣きで飲んでたからだったが。

「あれ、もう真名まで? 大丈夫なんですか?」

ちら、と愛紗を見て言う一刀君だが、駄目なら既に愛紗が反応してる筈という事は彼も分かっているの、唯の確認だろう。

大丈夫大丈夫。皆知ってるし、実を言えば再会する前に既に真名の交換終わってたんだ。再会した時に呼ばなかったのは単に盧植と初見だったのと一刀君とあいつが真名を交わしてなかったから、最近忘れられがちな真名を交わしあつた人間しかいないところでしか真名を呼ばない俺ルールしてただけだし。

「ああ、そういえば道玄さんそのへん真面目ですもんね。でも、皇甫嵩さんと会ったのって一回だけって・・・?」

今じゃ人間関係の主張と知り合いが増えすぎてひたすら真名で会話してるから、たまに字名とかで呼ばれた奴が一瞬誰だかわからん時があるぐらいだがな。

おうよ、一回だけだ。その一回で一晩たまたま一緒に飲んだだけの奴に、なんかやたらと一生懸命真名を預けて来たから勢いに負けて交わした。あの時は俺の情報は知ってても俺の容姿は知らなかったみたいだから、真面目に謎だったな。後で話を聞いた女性陣によると、「誰でもいいから自分が將軍って知ってても仲良くなれた異性との繋

ギクウ!と固まる一刀君。近付いてきた皆に気付いて無かった様だ。2人に聞かれてどうなるような会話でも無いが、万が一問題起きると面倒だ、フォローしておこう。

呼んではないな。ただ一刀君が2人は可愛いと熱弁してただけだ。

そう言うのと2人揃って「そんなあ、もうご主人さままつたら!・・・むっ!」とシンク口。数秒睨み合ってこれまた同時にどっちが上か一刀君に問う。しどろもどろの一刀君に残りの馬家姉妹がジト目をし、糜姉妹か涙目で私は!?!と詰め寄る。

あれれー、可笑しいなフォローのつもりが火に油だー(小難風

きさまっ!よくもっ!つと言いたげな一刀君だが、俺に構ってる余裕などないので視線だけだ。ふはは、愉悦愉悦う(笑)

すまないな一刀君。君は良き友人だったが、ハーレム主人公なのに俺よりハーレムしてない君がいけないのだよ。だから決して原作主人公より大きなハーレム築いた事に最近気付いた、とか、今更あげる気なんてないけど原作主人公仕事しろ、とか獣の俺でさえ瀕死なのに何故君は平気なんだ、とかの八つ当たりではない。無いったらない。いつの間にか隔離されてた袁紹さんと文醜さんをラバースに引き込んだくらいじゃ許されないぞ知れ!

まああんまり一刀君を虐めても仕方ないので、一頻り遊んだ女性陣の一部も戻つて来
たし、飯の準備始めるとしよう。食材ならこの場所に来る途中で大きな鹿を一頭と、ウ
チの武將組が遊びながらとりまくつた川魚、果てにはさつき鈴々が見つけたやたらデカ
い大山椒魚と対抗した季衣ちゃんが見つけた大ウナギがある。四次元袋の中の食材も
合わせればなんでも作れるだろう。とりあえずどんぶり飯より明らかに鰻の方が肉厚
な鰻丼は作つてみよう。

おい、一刀君と愉快な仲間たちよ。飯にするぞー、その辺にしとけ！

そう言うのと今大事な話してるから口出すな、的なことを言われたので、じゃあメシ抜
き。と伝えるとピタツと固まる。ふ、既に各国の新参古参含めて全員の胃袋は征服済み
だ！流琉がな！

だから俺の周辺の大体の人間がメシ抜きと言われると猫を人質にされた明命みたい
になる。ある意味で恋と稽古より恐れられる脅しだった。俺の義妹が料理で無敵な件
について。あれ、今気付いたけど王様達も流琉に胃袋抑えられてるってことは、ひよつ
として三国無双つて流琉じゃね？緊急速報、ウチの義妹が中華を征服してた件につい
て。

「ま、待つてください!それは流石に横暴です!」

「そ、そうだよ。私達には大事な話なんだから!」

ははは、知ったことか!・・・と、言いたいところだが、原因は俺にも若干あるからな。若干どころじゃない!とか一刀君が叫んでる気がするけど気のせいに違いない。うむ、仕方ない。ならば俺が見事に仲裁してあげよう!この一刀君と同じ時代に生きて、同じような女性に対する感性を持ち、彼の女性嗜好を知るこの俺がな!!これなら文句は無かるう!

「!? ちよつ、おまつ!完全に遊「確かに・・・。どうせご主人様じゃハッキリしないし。」ええっ!?!」

「なるほど、一理あるな。客観的に見て誰が一番ご主人様の妻に相応しいか、つて事だな?」

え、ちよつと皆?とオロオロしている一刀君を無視して意外と乗り気な女性陣。ふふふ、掛かつてもじやないならば聞かがいい一刀君ずラバース達よ!え、ラバースつて何か?恋人達つてことさ。さて置き、古来より日本に伝わる恋愛の真理を教えてあげよう!それはツツ!

『男は胃袋掴んだ女の勝ち』ツツ!!

に各国からの支援助物資持って行った時の糜姉妹までだった筈なだけ。え、この3カ月の間に希望者のみの流琉のお菓子教室で!?なにそれ愛紗参加したの? 事件にならなかった? あ、やっぱ1日で出禁になったのね。

だからこないだ泣きながら俺に料理教えてくれって来たのか。流琉は食材を冒読する奴には容赦無いからな。愛紗本人にそんな気はなくとも愛紗の料理は食材の冒読だから仕方ないね! 大丈夫大丈夫、猛特訓の甲斐あつて最近は三回に一回くらいしか俺が気絶レベルは無いよ! ランダムで状態異常発生するけど。毒や麻痺はともかく、石化し始めた時は真剣に焦ったよハハ。いやガチで。モンハンに石化無いし。ははは。

右腕の愛紗がむううう! と腕を叩いて抗議してくるが頭を撫でて誤魔化す。フオロ? いやあ、普通の食材を毒物以上のファンタジー劇薬に変える技術は、錬金術師なら褒めるけど料理人なら未だに練習させてるだけでもう海より広い度量があると思ってるよ?

にしても馬岱さん達はともかく馬超さんも参加したの? 珍しいね、花嫁修業嫌いなのに。え、なんだい馬岱さん? 自称味見役? ああなるほど。納得。

どういう意味だ! と馬超さんが怒り出すが、月のお淑やかな女性になる為の作法教室を開始20分で背中がムズムズする、と逃げ出した事は記憶に新しい。他の馬家のみな

さんは平気だったので馬超さんが特別なのは間違いない。そういうとうぐぐぐ、と唸る馬超さん。まあ、その教室自体俺が一刀君はお淑やかな女性が好き、とかパチこいて開かれたネタ教室なんだが。いや、制裁中だったから抜け出す娯楽が欲しかったんだよね。

おつとそうだ、ここで企画者兼審判の俺からの刺客です。君らの料理対決にはこの元なんちゃら將軍皇甫嵩が飛び込み参加します。ポツと出一刀君の胃袋とハートを奪われたくなかったら頑張れみんな。

え、私ですか!?!と無茶振りされて驚く楼杏を無視して代わりに一刀君ラバーズを一刀君はこの皇甫嵩が戴いた!と挑発しておく。青くなる一刀君は見なかった事にしよう。

よし、じゃあ皆頑張「兄さま、いつまでも遊んでないで手伝ってください!愛紗さんは参加させちやダメですよ!」あ、ハイ。すいません。

そんな感じで怒られながらも料理対決スタートです。

く以下長くなりそうなのでダイジエストく

おおつと!馬超選手まさかの焼いただけだあ!しかもあれは山椒魚だ!使い慣れていない大穴食材だぞ!しかし滑りとりとか下拵えしてないし随分分厚いけど火は通つ

ているのかあ!?

「したごしらえ……ってなんだ?大丈夫、採れたてはこういう単純な塩焼きが美味いってご主人様が前言ってたし、山椒魚の肉は健康に良いって誰かも言ってた!」

「いやそれ川魚の話d、グワァー!生臭さが全身を駆け巡っていか生焼けだコレ!?!」
糜姉妹はそれぞれ……!?!あれ、なんだこれ炭?

「魚らしいですよ?あ、2人ともこつちに。早く来なさい。」

あ、糜姉妹は食材を無駄にしたという事で典韋大先生の教育的指導が入りました退場です。

「ちよ、電磁葉々はっ、ぎにやああ!」

おおっと劉備さんが出して来たのはチャーハンだー!しかもハート形だ!なんの変哲も無いチャーハンなのにハート形!あざとい!これはあざといぞー!

「隠し味は愛情です!」

「セリフまであざといっ!」

ああ、でも普通のチャーハンがこんなに幸せなんて……!

おっと、馬鉄さんと馬休さんはまさかのタッグだ!料理は……あれ、何これ玉子スープ?随分普通な献立やなー。

「いや、ご主人様大変そうだから……。」

「私達はお腹に優しいモノを、と思ひまして。」

「優しさに涙が止まらない……！でも助けてくれるという選択肢はないんだね。あ、目を逸らさないで！」

颯爽登場！俺もつい最近存在を知った劉備さんの侍女兼秘書兼隠密の孫乾さんだあ！和かな笑顔の裏に隠すその実力は恐るべきものがあるぞっ！現にさっきまで自分の補助していた筈の彼女を見て劉備さんが驚愕しているー！明らかに何も知らなかった顔だー！何故貴方がそこに……、そんな顔の主人を素知らぬ顔でスルーして出したのは鹿ロースのたたきポン酢！酒のツマミに最適な逸品だ！ちなみにレシピ提供は俺だっ！

「うふふ、いかがですかご主人様。」

「普通に美味いけどこの後の桃香を考えると既にお腹痛いです。」

ここで登場！審査員からの刺客にしてダークホース、皇甫嵩だあ！料理は俺が教えた現代日本で男子がお嫁さんに作って欲しいもの鉄板の肉じゃがだ！当然典章大先生監修済み且つお墨付き！つまり勝ちが決まったあ！何処からか卑怯だとか横暴だ、とか野次が飛んで来ますが依怙鼻根は審判の特権なので何も問題は無い！無いったら無いのでここでけつちやー……あれ、どうした楼杏。早く行ってこいよお前の勝ちだぞ？

「あ……この料理は道玄さん、貴方に食べて欲しくて……一生懸命作りました。食

べて、くれますか?」

!?

なん・・・だと・・・!あ、ちよ皆待つぐわああ!

「策士策に溺れる・・・残念、いや、良かったですな道玄さん。」ドヤア

※只今審判の制裁中です。少々お待ちください。

：失礼、お待たせ致しました。ちよつと審判が嚴重注意をあ、愛紗待つてもうちよつとだから。いやゴメンで!ええつと、とにかく次はお待ちかね、隠れた遣り手馬岱さんだー!しかもあれはいつだったか頼まれて俺が教えた一刀君の大好物、ロールキャベツだあー!当然俺監修の俺お墨付きです。流琉が出てこなきや華琳さんにだつて勝つたことある逸品中の逸品だ!

「もう、待ちくたびれたよー!まあ将を射んと欲すればまず馬を射よ!つまりご主人様の好みは親友のおにーさんに訊くのが一番!どう、ご主人様?」

「ああ、本当に美味しいよ蒲公英。道玄さんの味を完璧に再現している。文句なしに一番美味しいよ。」

「やったあ!蒲公英がいつちばーん!ゴメンねおねーさま!」

喜ぶ馬岱さんと泣き崩れるその他の皆さん。勝者と敗者が此処に決まり、勝者である馬岱さんを皆が祝福する・・・かに見えた!

！
 ここで今一空気を讀まない事に定評のある白蓮こと公孫瓚が例によつて余計な一言

「あれ、道玄の味の完全再現で優勝なら、一番は道玄なんじゃないか？」

ガタタツ ↑ヤ○イ好き幼女達が一齐に立ち上がった音。

「北×道と聞いて。」

「違うよ雛里ちゃん、道×北だよ！」

うるせえだまれ腐れ幼女座れ！

くダイジエスト終了く

◆ ◆ ◆
 やれやれ、慌ただしい休暇である。

まあなんだかんだ忙しいが、皆楽しんでるからよしとしよう。俺も娘達と遊べたので概ね満足です。やっと精神が癒された気がするわ。原因俺だから自業自得なんですけどね！

あ、因みに料理対決は腐った幼女達が腐った息で荒らしやがったので、俺が秘密兵器、日本人のソウルフードであるカレーライスを持ち出して全一刀君の評を総ナメ、他者に

大差をつけて圧勝且つ完勝してやった。どうやら一刀君はカレーに飢えていたらしく、彼のラバーズを一顧だにしない絶賛っぷりで、おまけで出したココイチばりのオプション用意したら俺を見て「貴方が神か・・・!」と崇め出したくらいである。

この時点でもう殆ど勝負の事は忘れられ掛けてたが、序でに俺が「兄さま、私もこの料理はまだ教わってません!」と盛大に怒られたりして完全に有耶無耶になりました。結果的にちゃんど仲裁した雰囲気なので問題はないね!

因みにカレーは最初こそ見た目から皆にブーイング(食べ物に偏見のない鈴々にさえ「なんだかばつちいのだ!」と言われて泣きそうになった。)を食らったものの、匂いで美味さを探知した恋と、泣きながら美味いと一刀君が叫ぶので、やがて皆感化されて恐る恐る食べたら一気に広まりました。璃々だけは辛いと泣きそうだったので即席で甘口にしたけど。美羽は璃々の前でおねーさん振る為に震えながら食べてた。お馬鹿可愛いつてあーゆーこというんですよね!

まあ、それはさて置き。

「・・・璃々は、寝たようだ。」

「そうですか。ふふ、かなりはしゃいでましたからね。このきゃんぷ?が決まった一週間前からそわそわして余り眠れなかつたくらい楽しみにしてましたから。」

まあそのぶんお昼寝が増えたのですけど、と淑やかに微笑む紫苑。

時刻は既に夕暮れを遙かに過ぎて、拠点のある洛陽でもぼちぼち街の灯りが消え始める頃だ。

幸い月が出ているので夜目が利く俺でなくとも多少は見えるだろうが、山という人工の灯りがない場所では、街以上に子供達の眠りは早かった。最も、紫苑の言う通り、昼間にはしやぎ過ぎたのも原因の一つには違いないが。

鈴々や季衣ちゃんみたいな体力ある武将組でもぐつつすりな事から、よっぽど楽しかった様で、企画した俺としては幸いである。まあ流琉や風と言った子供達でも一部は今も起きて、大人達と共に、一緒に月を見ていた。

「綺麗ね……。」

感じいった様に華琳が呟いた。

「本当に。月見をしよう、と昼間に鬱蒼とした山の中に連れてこられた時は何事かと思いましたが。」

「滝の音も聴き慣れると何故だか安心しますな。周りが静かなせいか響くので、もう少し煩わしく感じるかと思っておりましたが。」

「おまけに夏山で虫が鬱陶しいに違いない、と思つて戦々恐々としてたのに、全然いないの！半信半疑だったけどおにーさんすごいのー。」

「うむ、いきなり焚き火を消す前に説明しろ、とは思ったが。この光景を虫などを気にせず心穏やかに見れるなら、勿体ぶって何の説明も無かったのもよく分かるな。魏延の奴も連れて来てやれば良かったか。」

はは、俺自身こんな効果があると知ったのは最近だがね。こんな効果があると知っていたら山暮らししてた頃もつと楽だったのになあ。桔梗、お前はもうちよつと魏延さんに優しくしてやれよ。仕事押し付け過ぎだぞ。

なんて、おどけながら肩を竦め、視線を戻す。

目の前では、大きく欠けた三日月が、ちようど水の流れに合わせて形を変えたところだった。

そう、この昼間散々皆が遊んだ滝壺付近、皆で遊べるだけあって結構広いのだが、それが夜になると月を大きく映す水鏡となり、更に不規則に跳ねる滝の雫が水面を揺らし、月明かりを疎らに反射させて森を彩るといふ、なんとも荘厳な風景を生み出すのだった。

娘達と遊ぶ為に散々飛び回って夜中まで背中に愛紗を引つ付けたまま周囲を探索してつい最近見つけた、俺自慢の秘境である。ちなみに、山を登れば以前愛紗と逢引した絶景スポットに辿りついたりする。

また、現在の俺は体の色がハッキリ濃緑に染まり、角や牙なんかは生えないまでも髪の毛が長く伸びて、薄く金色に輝いていた。まあ赤く光るトラ縞が浮かぶ完全変身では無い為、暗闇だと髪の毛だけ浮いてるように見えるだろうが。弱変身を過ぎて、けれど完全変身ではない、言うなれば中変身という微妙な状態だ。

何故こんな状態かと言えば、理由はこの虫みたいに薄く輝く髪の毛にあった。

実を言えば本当に最近、それこそ女性陣のご機嫌取りに散歩と称して夜景の綺麗な場所に夜駆けする際、この状態くらいから明確にラージャンの発電能力が活性化してくると知った。毎度変身具合はその日の気分だったのだが、この時の淡い光が一番綺麗だと女性陣に好評だった為ずっと光らせてたら、光なのに虫が寄ってこない事に気付いたのだ。

どうやら体内発電を行うと電磁波的なサムシングが髪の毛を中心とした体毛を伝って拡散、虫などを追い払い寄せ付けなくなるみたいなのだ。いやまあ電磁波つてのは単なる推測だが、実際虫やら何やらが寄ってこないのは事実だ。正確には虫は寄せ付けなというか近付くと死んでしまっているのだが。

しかし、ならばと完全変身してから発電したら今度は強過ぎて俺の身体には常時放電現象が、周囲には広範囲で静電気が発生、その時連れていた風に危ない痛いと思われたので、安全と実用の範囲を模索して色々試した結果この状態に落ち着いた。やはりレベ

ルがオーバーフローしてるからか、ラージャンビーム以外では比較のおまけな発電能力も桁違いだなー。

この状態なら序でに獣達も俺の中のラージャンの気配をより明確に感じ取れるのか、かなり広い範囲で寄って来なくなり、こうして夏の夜の山の中という一時間もいれば全身を虫刺されだらけになれる場所でも無傷でいられるようになるのだ。現代日本に俺と同じ効果のあるアウトドアグッズがあれば、夏休みにキャンプに行く親子連れに大ヒット間違いなしだったと思う。

「ははは、確かに蚊取線香や殺虫剤のいいところ取りしてますね。一家に一台羌毅さん。お値段なんと29800!なんて。」

安心して下さい、防犯機能とちびっこ大好き変身機能付きですよ!夜更かしする子供がガン泣きします!ってか?サイズ俺ならキャンピングカーじゃないと乗れないから持つて行けない気がする。

そう言つて肩を竦めれば、一刀君もそれまた確かに、と笑つた。いやあ最近はお互いの女性陣が常に側に居て、その対応に追われて居たからか、一刀君との会話がなんか盛り上がるな。気安く話せるって大事よな。

俺もそうだが彼も袁紹さんとか新しい女性を増やしてるからなあ。まあ向こうはま

だ俺みたいに日割りで同時に何人と最低何回ずつ、みたいなローテーションもノルマもないみたいだが。実に羨ましい。なんでうちの女性陣は同じ恋姫なのにこんなに性欲強いのか。最初はただの自虐だったのに、今や名実共に性獣オークさんな俺。ネタがガチになるって結構クルものがあるよね。

「あなた、同郷の殿方との会話も良いですけど、私達の事を忘れて下さいな。」
「ぐぬ……道玄……こつちを見てなきやダメです！」

おっと。放置し過ぎて両隣の紫苑と愛紗に怒られてしまった。ふと見ると一刀君の方も両手を引かれて無言の抗議を受けてるみたいだ。2人揃って女性陣に謝り、顔を見合わせて互いに苦笑する。大なり小なり、ハーレムを持つ男の苦労は共通のようである。

さて、怒られてしまったのでそろそろ真面目な話をしようか。

えーと雪蓮、いややつば冥琳。明命がこの場に居るってことは報告があつたんだろ？ どうだった？

雪蓮が何で私を取り止めたのよ！と怒るが、明命の報告とかをちゃんと聞いて分析してるなら答えてくれ。うぐ、と即詰まったのでこのままスルーだ。

「やつと聞いてくれたか。遅いぞ。もう軍師組とは話し合つてあるくらいだ。」

休日の昼間は娘達が優先なのは父として当然なので聞く耳持たぬ。親バカ?ふ、むしろそれは褒め言葉と受け取る!

「やれやれ……まあいい。以前話した通り、こちらに向こうの土地勘は全く無い為、やはり深く細作は入り込めなかったようだ。僅かながら白蓮が元自領付近なら多少は分かるとの事だったので少々協力して貰ったが、それでも分かった事は一つだけだ。」

まあ彼等の土地で漢人は目立つからな。それは仕方ない。てか白蓮が途中から居なかつたの俺に氣を遣つたからじゃなかつたのな。

「当たり前前だ!何なら私はまだちよつと怒っている。愛紗と違つて常にお前と一緒だった訳では無いし、七乃とかは時間の問題だったけどいつの間にか桔梗や斗詩や真値、華命に小蓮まで増やしてるし!」

白蓮の叫びに皆が頷く。手ははやすぎると、口々に呟く。

待て。それは俺が悪いの?あの全自動種付け機みたいな扱いだつた俺に拒否権用意してくれなかつたのはお前達やないか。というかむしろ俺が止めたのにシヤオとかブツ込んで来た姉妹とかに問題あると思います!

「では、彼女達と今からもうしないと、自分の女では無いと誓えますか?」
うぐう。

それはちよつと無理かな。あつちで不安そうな顔してるあいつらに気付かなくて

も、一度自分の女にしたら捨てられないタイプだし。向こうが俺とは遊びだつて言うならまだしも。

「そんな事言いません！」

「とうか、遊びでこんな事しません！」

「うむ。まあ流石にそこまで軽くないわなあ。」

いや知つてるつて。正直斗詩はきつかけ良くわかんないし、桔梗は半分悪ふざけな気がするけど。

それでも遊びかどうかくらい分かる。・・・匂いで。

なので諦めて説教を聞く事にしながら、で、何が分かつたのかと冥琳に問う。ちゃんと聞け！と怒られるが、こつちも重大案件であるので勘弁。

「・・・人が足りない、だそうだ。」

なるほど。行き先や移動は？分からない？へえ、じゃあもうその辺は終わつてるかもなあ。予想以上に時間はなさそうだ。

肝心なのは何処に集まっているかだが、これはあんまり気にしないでも良かる。いつもやって来たのは一方向からだけだったしな。

「例の夢？なら多少気が楽ね。・・・本当なら、その夢がただの夢なのが一番良かったのだけだ。」

言うな雪蓮。それは俺も思うが、鏡と一刀くんがこの世界の在りようを全部投げるよりは自分達で何とか出来るだけマシだろ、たぶん。

「ご主人様と鏡、ですか?」

ああいや冗談だ劉備さん。忘れろ。さて置き、残念ながら俺の懸念が現実になったな。ん、何だ一刀君。今のうちに各個撃破? 何処に集まって何時からやってくるか分からないのに、地の利どころかどんな場所かもよく知らない地に攻め込んでどうすんだよ。よしんば戦えたとして、気付かないうちに横抜いたらどうする? 帰って来たら何も残ってないかもしれんぞー?

「向こうが纏まってくるのを迎え撃つのが一番、ですか。敵の事をほとんど知らないのが此処まで痛いとは……。」

それは仕方ないさ。とりあえず殺せば死ぬって分かるだけマシだよ。しかし分かっているのはいたが大変な時にきたか全く。

「あら、完全ではないとはいえ、これだけ備えてあるのよ? 一年はないでしょうが、今すぐくることは流石にないでしょうし、そこまで悪くないでしょう?」

残念ながらそうでもないよ、華琳。とりあえず、うちから武将組3人と流琉、侍女組は抜ける。やれやれだぜ。

「ハア!? ちよ、どういう事じゃ道玄! お主のところは誰一人欠かせないじゃろ! という

か、誰が抜けるといふんじゃ！」

愛紗は確定だな。あとほぼ星と凧も確定かなー。

「なあっ!?!聞いておりませぬぞ我が主人!このような大舞台で私に後ろに下がれと言うつもりか!?!嫌ですぞ!」

「それが道玄様の命なら従いますが・・何故ですか?皆が命を賭ける場で、私達だけ安全な所に、などというのはあんまりです。」

言います。下がってなさい。異論は認めん。

そう言ったら皆さん絶句。華琳が目で理由は!?!と問うて来たが、一つしかないだろ馬鹿か。

もちろん「私達が煩わしくなったのですか?」そうそ・・って違うわバカ!何て絶妙なタイミングで何てこと言うんだ!俺がそんな事思うはずないだろ!何言ってるの愛紗。

「嘘です!だって、だってここ最近ずっと、ずっと・・!」

ちゃんと抱いてくれないじゃないですか!!」

ごごふっ

その言葉に吹き出してしまった。ちよ、愛紗サン?いきなり何を!?

「だってそうじゃないですか! 閨以外では私達3人だけ回数が減ってるし、今までと違つてちゃんと挿れてくれないし、ここ二週間なんて私達の番に春蘭や華琳殿たちが居るし、私達3人はみんなが抱かれた後出すときだけ挿れられるばかり! それでも気持ち良くはしてくれるし、最近はこのうのが好きなのかなつて、自分に必死に言い聞かせて来たのに……!」

ちよつ、まだ一刀君たちいるからね! 夜の事情バラすの止めようね!

慌てて愛紗を抱きしめ、頭を撫でてあやす。最後ちよつと嫉妬暴走入つてたなあつぶねえ。

と、思つたらくい、と服を引かれたので振り返る。するとそこには、泣きそうな顔の星と凧が!

「そうなのですか主人? 最近のアレは『お前は俺の○液○所だオラア! 黙つて○液○捨てるられてろ!』というふれいではなく、単純に我らに飽きただけだったと? だから最近は全然奥まで挿れてくれなかつたのですか!」

「そんな!?! いい、嫌です道玄様! 頑張ります、頑張りますから! 華琳様達に負けないよう頑張りますから!! お願ひしますつ、捨てないでください……ッ!」

捨てませんよ!?! 飽きたとか有り得ないし、そもそもお前達に優劣付けたりしないしつていうか星! お前の中の俺はどんな鬼畜なんだ! え、閨ではあんな感じ? 何を馬鹿

な……あれ？なんで誰も否定しないの？え、やる気を出した俺はやたら強気になる？……と、とにかく誤解ですよ！

「皆、良く見なさい。あれが愛される努力を怠った女達の姿よ。愛されている事に胡座をかいて怠け、恋愛も戦場と変わらぬ戦いだと忘れたら、あの姿は明日の我が身よ。」

「何と恐ろしい……！私達も負けられないわね、思春？」

「そうですね、蓮華様。まあ、空きができたのも確かですが。」

「哀れやな、3人とも。風には悪いけど、ウチらは頑張るな、沙和。」

誤解だつて言つてんだろコラ！あああ！ほら三人が慌て出した！

違つて！本当に誤解だつて！！

「ああ言つてるけど、実際どうだと思う？愛紗達と最近ずつと一緒だつたら、秋蘭。」

「どうか……。確かに以前と違つて全然突いてないし、動いてなかつたかな。本当に出すだけ、という感じだった。きちんと満足させてたが。」

「全然奥まで刺さつてなかつたな！腹が膨らんでなかつたから間違いない！」

「?!?!ちよつ、待て春蘭！腹が膨らむつて何だ!?!」

「翠ちゃん落ち着いて。あの、白蓮ちゃん？話には聞いてたけど、ほ、本当にそんなに大きいのか?」

「ん？ああ。……初めての時は正直自分の身体大丈夫かなつて思つたな。鈴々や流琉

達なんて半分も入らないのに、妊娠してるみたいになるくらいだしな。」

「艶本にあるような比喩ではなく、まさしく串刺し! つて感じよね。我が事ながら初夜ではまず自分の身体に神秘を覚えたのは忘れられないわね。私達くらいの身長だと、全部入れたら身動き取れないし。」

「うふふ、あの時の桂花は可愛かったわね。途中から道玄に「お願いだから動いて!」つて泣きながらおねだりして。……まあ、流石に私も自分の両腕より太いとは思わなかったけど。まさか更に上があるなんて……。」

「え、何それ!? 一体どんな大きさで……本当の馬並み? うわあ。良く入ったね皆。蒲公英絶対無理だよ。」

「慣れると凄いわよー? 普段はみんなで跨ってるけど、たまに道玄の方から組み敷かれたらもう……!」

「朝までイキっぱなしで、形変えられて他の人じゃ無理になるのー。少なくとも私は無理だったのー!」

「確かにのう。儂もかつてはこの大人の技で虜に、と思ったもんじやが。……実際に、実に夢い夢じやったのう。」

「2人揃って朝まで獣みたいに鳴かされてましたね。最後には絶頂して気絶して絶頂して起きての繰り返し……あれから怖くて媚薬なんて使えないわ。」

「そ、そんなに凄いですの？じゃあ斗詩さん達は……？」

「（顔を背けて）……えつと、もうお嬢様達とは……。」

「そんな!?!と、斗詩いいい!！」

おいよせ、止めろ下さい。

何平然とプライベートバラしてるの!?!見ろ、一刀君たちが全力で引いてるだろ!

そして袁紹さん達はNTRイベントあつちでやってて!俺も当事者?俺から手を出してないってかむしろ止めたよ!選んだの斗詩だから。

ああてかそれどころじゃなかった!?!ほら3人も落ち着いて!本当に誤解ですよ

!?!

「せやかて団長、最近おぎなりに抱いてたん事実やろ?愛紗結構落ち込んでたで?」

おぎなりじゃないわい。確かに今までより落ち着いたやり方だったのは否定せんが、

ちやんと満足させつつ頑張ったわ。

「ふえ……?本当に私の体に飽きたわけではないんですか?やつぱり華琳達に夢中になつて私達はもう用無しなんて、い、言わないですよね?う、嘘だと言つて下さい道玄!やだ!やらあ!道玄の1番、私じゃなきやや「何も言つてない。落ち着け愛紗。」うう……。」

とりあえず愛紗を宥めつつ3人まとめて抱きしめる。いやほんと、俺を鬼畜扱いし過

ぎだろ。つーか、俺にそんな風に女捨てる度胸あつたらここまで愛人増えてないわ!

「・・・だんちよ、結局、理由は・・・?」

いや恋よ、そんなの決まってるだろ。てかまず本人に気付いて欲しかったな。一番望んでた筈なのに。確かにそう最近慌ただしかったけれど。

なあ愛紗よ。来なくなつてそろそろニヶ月経つけど、まだ気付かないか?

「ふえ? 来ないつてなに・・・が?」

あ・・・えつ!? まさか、本当に!？」

ようやく悟つたらしい。一気に精神が安定したな。別の意味でばにくつてるみたいだけ。

一頻りあわあわおろおろした後、自分の腹に手を当てて、もう一度本当に?、と呟く愛紗。そんな彼女を見て、腕の中の2人も、他の女性陣も気付いた様だ。

「まさか・・・! 主人ツ、それでは我らも!？」

「道玄様! まさか、まさか・・・本当、ですか?」

多分な。2人は愛紗より若干遅いけど、それでもだいたいぶ来てないし、生理不順じゃなければ確定かな。一応もう少し様子見。

まあ、うん。俺頑張った。そしておめでどう愛紗。

「~~~~ツツツ!! 道玄ツツ!!」

うおつ、コラ2人も居るんだから暴れるな。「あるじいつ!!」「道玄様あつつ!!」ぶるーたすお前もか。

・・・まあ喜んでくれて俺も嬉しいけど。まあそんな訳なんで3人と世話役の侍女組、護衛の流琉は後方待機でお願いします・・・って、あれ？

なんだお前ら、ザ・ワールドされたみたいな顔して。てか、聞いてた？

「「「「……………」」」」

あれれ、おーい。

誰も反応しないな、と思つてると、くい、と服を引かれたので振り向くと、困り顔の紫苑。どした？

「あなた？その、それはつまり3人は・・・御懐妊ということですか？」

？だからそう言つてるだろ。

つーかなに驚いてんの？早く全員孕ませろつて言ったのお前と桔梗やん。流石に全員はやばい気がしたから、出会った順的に1番早い愛紗のいるローテーション内でこれまた出会った順で星と凧。そんな感じ？

「ハアアアアツツツ!?!」

うおつ、久しぶりだなこの感じ。なんだなんだ？

「どーゆーことやねんにいさん! 何で風が選ばれてウチがはずれやねん! あとおめでとう三人共!」

「横暴なの! 納得いかないの! 断固抗議なの! ツツ! 三人共おめでとうなの!」

「ずるいでしゅ! 卑怯でしゅ! 順番なら星さんより私達の方が先でしゅ! 三人共おめでとう! ございませしゅ!」

「あわわ、やり直しを要求しましゅ! おめでとうございませしゅ!」

「愛紗さん達、おめでとうございます! 兄さま、私も赤ちゃん欲しいです! ! 駄目とは言わせませんよ?」

「星ちゃん達おめでたいですわ。ところでおにいさん? 風達軍師組の扱いについて抗議したいことがありますよ。」

「三人共、おめでとうございます! 道玄、これは流石に鼻崈が過ぎますよ? . . . 後でお説教ですね。」

「だんちよ、次は、恋。あと、三人共、おめでとう。」

e t c

駄目だウチの女性陣だけでも聞きとれない。呉や魏の皆はもう怒ってることしか分からん。なのでおそらく純粹におめでとうと喜んでくれてるらしい蜀のみんなはもはや口パクに見える。

待て待て、一斉に話すな。せめて祝福と文句は分けてくれ。俺は聖徳太子じゃないから分かん。

あ？説明しろ？えーと、とりあえず幼女組は候補外でした。これは華佗と話し合った結果、物理的に母胎が小さ過ぎると判断されたからで医学的に根拠あるので諦めろ。忘れがちだけどお前から今俺とヤツテるだけで無理してるからね。文句があるなら回数減らします。安全第一。

軍師組は次に決まってるので勘弁。ゆーてもウチの軍師組は幼女組が多いので、稟だけだが。あ、一応七乃も軍師なんだっけ？まあ活躍見た事ないからウチの加入順的に最後かな。ついでに時間ない事が発覚したので五胡との戦終わってからかなー。

基本的にはウチの団内から武將組と軍師組で交互に。その後各国に行きます。前述の通り、幼女組は問答無用で体が成熟するまで後回し。牛乳飲んで待ちなさい。以上！「嫌よ。貴方は私の夫なのだから、私が一番であるべきよ。できちゃったものは仕方ないけど、次は私よ。戦を待つてなんていられないわ。」

「星、共に愛紗を出し抜くと誓った私を裏切るのか!？」

「姉様、今までお世話になりました。私と思春は今日これより出奔させていただきます。」

「許すわけないでしょ。第一、今から道玄の傭兵団入ったって最後よ？大して変わらな

いじゃない。」

「そうだな雪蓮。では後を頼むぞ。偶には様子を見にくる。」

「冥琳!」

駄目だ、皆収まりそうにもないなこれ。

えっと、皆。時間は掛かっても約束は守るのでマジ勘弁。流石にこれ以上は無理だ。

そう言って話を切る。いや全然皆騒いでるけどスルーしよう。俺には収められぬ。

ん?どした愛紗。ようやくですね?ああ、確かにようやくだな。まあ時期的には微妙だけありがとうな、三人共。俺も嬉しいよ。

正直に言えば子を作らない方が良いかなって思ってたんだ俺。ん?いやさつきも言つたけど、お前らを嫌いとかあり得ないからね。そうじゃなくてさ、単純に不安だったんだ。

・・・いや、何でそんな不思議そうな顔をするかな。俺を何だと思ってるんだ。俺だって元は人間だから人並みに父親になる事に不安ぐらいあるよ?

オマケに今は人外だから、お前達と子が成せるかって言う不安は拭えないし、出来ても俺の血を引いてるなら幼くとも人外だ。ちゃんと人の世に混じれるか、そもそもお前達の体に害は無いか、最悪腹を割いて出てきたらどうしようとか、本当に色々悩んでだな・・・いや待て、何で爆笑する。笑うところじゃ無いだろ今は。

「ふふふ、何を言いだすかと思えば……道玄、そんな事で悩んでたんですか？ 杞憂も良
いところですよ。」

「愛紗の言う通りですぞ主人。お人好しの主人の血を引く我が子が、むやみに人を、まし
てや母を害する筈も無し。そもそも主人の子なら母親とはいえ女を傷つけるわけがあ
りませぬ。」

「同感です。万が一道玄様から受け継いだ力で悪を成すなら、そうならない様に私達が
育ててみせます。ご安心下さい。」

「……ぬう、こうきつぱり杞憂と言われるとちよつと悲しいが、心強いな。まだ生ま
れてないが、母は強し、と言うやつか。」

うん、安心した。これなら向こう一年くらいローテーション外れても大丈夫だな！ 良
かった良かった、性欲強めの三人だから少し心配だったんだ！

「……あれ、なんだお前らそのえつて顔は。当たり前だろ妊娠中だぞ。今までみたい
に降り出しに戻したいならともかく、普通に考えて無理だろ。あ？ 安定期？ 何で知つて
るかはおいといて、それは普通の大ききさだったらの話ですな！」

「待つて下さい。今までみたいには？」

あ、やべ。これ一応内緒だった。

むう、まあ大した事じゃないしいいか。じゃあ教えるけど、落ち着いて聞いてくれ。今まで皆には色々俺考案の避妊対策して貰ってたじゃん? うろ覚えの保健の知識を基に安全日とか危険日とか。

あれな、結論から言つて全然効果無かつたらしい。基がうろ覚えなだけあつたね! いやまいった本当。華佗から話聞いた時は心底焦つたね!

うん。つまり君ら受精だけなら何度もしてたらしいです。毎日の様に子宮使つた激しいセツ〇〇してたから着床しなかつただけで。いや、子作りの詳しい原理とか言われても分からんだろうけど。着床しなかつたら妊娠しないですよね!

要するに〇宮〇はやっぱ無理があつたんです。ましてや俺のサイズだし。気持ちいいのは認めるけど。まあ同時に俺(人外)から栄養(白濁液)持つていつてたから少し無理してる、程度で済んでたらしいのが不幸中の幸いと言つたところか。

「あの、道玄? それはつまり...?」

俺と子を成すなら最近の愛紗達みたいな優しいセツ〇ス必須。つまり仕込み初めてから産まれるまで凄く快感は減るよ!

そう言ったら皆凄い葛藤し始めた。後ろで騒いでた女性陣もだ。何でも癖になつてるので一時的とはいえ無くなるのに強い抵抗があるらしい。はは、前世と比べて俺凄すぎウケる。リアルに何度も死に掛けてるので凄い複雑な気分だが。

ん？なに愛紗。その間は見てるしかないのか？いや？嫌見てるだけが嫌ならそもそも別の部屋に入ればいいと思うよ？参加？ははは、御冗談を。

お腹の子を大事に出来ないなら離婚です。

あ、愛紗達が灰になった。



さて。

あれから色々すったもんだあつたが、お祝いと称したやけ食いヤケ酒などを含めた大宴会が起き、その後は無事に3人は華佗やその他医者や産婆のおばちゃんたちのもとで正な妊婦生活が始まった。

養生場所は洛陽だ。拠点があるから当たり前なんだが、華琳達のテコ入れにて商家みたいだった拠点は現在小さい要塞みたいになっていて、隠れ家感が消し飛んで悲しい。まあ前のままだったら今の人数入らなかつたから助かっているんだが。

実を言えば、腹も出てない3人はまだ悪阻も始まってない為妊婦に見えない。エコー

どころか検査葉さえないこの時代では、初めのうち3人はまだ妊婦と診断されなかった。その為医者からは完全に気の早い夫婦扱いだった。なんなら医者 of 態度で3人も実はまだ出来てないのでは? と疑問顔であった。

それを華佗が腹に微小の気を感じる、と真つ先に信じてくれたおかげで、医者達もそのつもりで頑張ってくれたし、他ならぬ俺の子だからと愛紗達も肅々と養生し始めた。本当に華佗には頭が上がらない。

唐突に槍や酒などを取り上げられた星がちよつと不満気だが、他の2人を見習つて我慢してもらっている。

で、現在は夜。ちよつと思うことがあつた俺は、出来ないならせめて一緒に寝よう、と言われて3人と一緒にの寝台から抜け出して、屋根の上で月見酒である。今日は丁度満月で、杯の中の酒に映る姿がとても雅だった。

しかしまあ、自分で決めてそうなる様に行動したとはいえ、俺が父親ねえ……。

ハハハ、堪らん。なんともおつかない事よ。

前世でも子供どころか嫁さえ居なかったからなあ。今生でも養子である娘達はある

程度大きくなっていた状態で迎え入れてるから、地味に赤子からは初めてだ。無論養子だろうと娘達を全力で愛しているが、それとは別に何故か感慨深いものがあつた。

色々不安もやはりあるし、天下分け目の戦いも目の前だ。この先の事を、旦那としても父としても、不本意ではあるが团长としても見据えておかねばならない。

何より、やや子を宿した愛紗達はこれからの大戦に自衛手段がない。流琉を護衛に付けるが、大軍相手になれば流石にキツイだろう。いつもの彼女達なら勝つのは無理でも逃げるくらい余裕だつたろうが、五胡共が来る頃には身重だ。武器どころか馬にさえ乗れないだろう。よしんば五胡がくるのが遅くとも、幼い子を守りながらではまともに戦えない。

これで完全に退路は消えた。元より逃げる気など無かつたが、いざという時に最悪俺の女だけは逃す、という保険が消えた事は大きい。万が一知らないところで急襲されたらどうにもならないから、多少危険でも目の届く戦場付近に連れて行くしかない。来た大戦は、様々な意味で、絶対に負けられない戦いだった。

流石にちよつと重圧を感じる。ガチで負けられない戦いで、俺の大切な人を死なせてはならない、というのが絶対条件だ。この日の為にだいぶ色々鍛えてきたが、完全変身状態では威力の問題で練習は無理だ、ぶつつけ本番になる。どうしたって不安が残る。

うーむ、とりあえず全身の筋力を全力全開にした状態で首を振れるようにはなつた

が、念のためもう少し全集中の呼吸を使いこなせるようにしておこう。雷の呼吸なんか相性良さげなんだが、やり方わかんないんだよなあ。

「あら、眠れませんか?」

そんな感じで一人悶々としてたら、後ろからさも偶然の様な装いで声をかけられた。だがここは屋根の上である。確信犯過ぎるので振り返らず尋ねる。

「璃々は良いのか?」

「うふふ、先ほど漸く寝ましたわ。おねーちゃんになつたらこうしたい、あーしたいとはしゃいでもばかりで、最近は夜ふかし気味で大変です。」

そうか、と返す。変わらず振り向かないが、黙っていても隣に座り込んだ。されど、身体には触れない。

「気の多い旦那様を持つと大変ですわ。浮気ばかりで中々家族の元に帰ってこないんですもの。挙句の果てには正妻を差し置いて他の女性と子を成すなんて・・・家族との時間を蔑ろにしすぎではないですか、あなた?」

抜かせ。ちゃんと璃々や娘達との時間は取っている。

あら? 私一度もそんな覚えがないわ、と笑う紫苑。ハツ、と鼻で笑ってやる。いくら俺でも俺を求めてない女を無理に抱いたりしない。

「・・・うふふ、やっぱり分かっていましたか。」

当たり前だ阿呆。本人にその気がなくとも、妻の事を見ていない夫がいるものか。そう言つたら意外そうな顔で驚く紫苑。ちよつと腹が立つ。

・・・だが正直分からんな。璃々の為にしてはやり過ぎじゃないか？深くは読めんが、お前自身の気持ちはまだ前の旦那に有るのだろう？いくら娘の為とはいえ、簡単に割り切れるものでは有るまいに。

「ふふふ、たくさん女性の達を誑し込んできた貴方でも、流石に母親というモノにはまだまだ理解が浅い様ですね。」

ハハ、こやつめ。人間きの悪いことを抜かしおる。文句の一つでも、と思ひ顔を向けると、珍しく彼女は笑つて居なかつた。いつもの慈愛に満ちた微笑みは鳴りを潜め、何処か寂しさを湛えた瞳で、優しく光る満月を見上げていた。

・・・はあ、こういう時間を何時も察知してくる3人は今頃夢の中だ。他の女性陣は仕事でしばらく城に泊まり込みだから、璃々も寝た今、どうせここには2人だけだ。

そう言つて酒を注いだ杯を紫苑に差し出す。彼女がこちらを見ずに杯を取つた。それで良い、と頷いて新しい杯を取り出す。何時もならアル中共か愛紗達の誰かが必ず隣に居るから、予備の杯どころか皿も箸も予備があるのだ。

新しい杯に酒を注いで、互いに目を合わせる事もなく月を見上げて杯を傾けた。

・・・何時も頑張っているのだ。今ぐらいは母親でなくとも構わないだろう。

そう、心の中で独りごちた。

◇ ◇ ◇

「正直に言えば、貴方に惹かれていない、といえば嘘になります。」

あれからほぼ無言のまま静かに杯を酌み交わし、いつの間にか満月を雲が遮り出しだ頃、静かに紫苑が口を開いた。

「ですがまだ、私の中にはあの人が居るのです。いいえ、居なくてはならないと思う私が居るのです。・・・それは、あの人をただ忘れたくないだけなのかも知れません。どちらにせよ、そんな状態では貴方や貴方を愛している彼女達に失礼だけです。だから、初めはこんな関係になるつもりもありませんでした。」

まるで罪を告白するように、沈痛な面持ちで彼女は続けた。いや、たぶん本当に彼女にとつては罪の懺悔だったのだ。

俺は何も言わず、杯を傾けて酒を飲む事で続きを促した。

「璃々は父親を知りません。あの子が生まれるより早く、あの子は戦場で逝ってしまつたから。それでも私は璃々に父親の居ない負い目を感じさせたくなかつた。あの子と私の愛の結晶であるあの子に、そして逝ってしまったあの人に、私達夫婦の愛の証を立てたかつたのです。」

月を見上げる彼女の横顔に変化はない。されど、何故だか泣いているように見えた。「あの子には私の持てる全てを注ぎました。辛い事も有りましたが、健やかに育つあの子を見て、自分の努力が報われているのだと思えば苦にもならなかつた。逝つてしまつたあの人に、誇らしい気持ちでさえあつた。・・・だけど。」

それは所詮、母親わたしの驕りでしかなかつた、と彼女はとうとう涙を零した。強い後悔を感じる、身を切るような切実な想い。小さな声だが、まるで叫んでいるようだった。

「・・・璃々は、貴方に会うまで一度も「父親が居ない」事を私に何故と聞いてきた事がありませんでした。私はずっとそれを私達夫婦の愛が伝わっているから、そう思つていました。逝つてしまつたあの子の分まで、私はあの子を愛する事が出来ているのだと、信じていました。」

まるで違うと言いたげだが、實際出来てたと俺は思う。かつて紫苑にお前は立派な母親だ、といった事もあつたが、その思いは今も変わらない。

「嬉しいですね。でも駄目なのです。私はあの子に全てを注いで生きて来たつもりでしたが、その実あの子を何も見ていなかった。

・・・私達と貴方が出会つた時、私達を脅していたあの男を覚えていますか？あの男がどうやって璃々を捕らえたか、知っていますか？

・・・父親に、会える。

これだけです。たったそれだけの言葉で璃々はあの男に自ら着いて行つたのです!」

・・・ふうむ。あの無能クソオヤジがどうやって紫苑から璃々を引き離れたかと思つては居たが、なるほどそうやったのか。まあそうでなければこのスーパー子煩悩マママンを生かしたまま璃々だけ捕らえるとか出来る訳ないか。多少の脅しで怯むほど弱くないし、絶望的な戦力差でも璃々を奪われるくらいなら生命尽きるまで抵抗するだろうし、あの程度の小物の悪意を感じ取れない女じゃないしな。

「貴方に璃々が救われた後、漸く私は気付きました。あの子は父親が居ないことを疑問に思わなかつた訳でも、父親が居ないことに寂しさを覚えなかつた訳でも無い。いえ、本当はずつと、ずつと・・・!」

それでもあの子が何も言わなかつたのは!言えなかつたのは・・・!」

お母^{わたし}さんが悲しそうな顔をするから・・・!」

「・・・私は結局、あの人を失つた寂しさをあの子で誤魔化していただけ。あの子が寂しくないように気遣う事を愛情と思ひ込み、あまつさえあの子が、私が悲しまないようにな気遣つて父親の事を話題にしなかつた事に、あの子の人質にされるまで考えたこともなかつた!」

私はそんな、愚かな母親なのです。そう呟いて、頬を濡らす彼女は顔を下げた。小さな嗚咽が、静かな夜を裂くように耳朶を打った。

・・・何か声を掛けようとして、やめた。肩を抱いて引き寄せることもしない。今はまだ彼女がそれを求めてないと思ったからだ。何も言わず、ただ月を見上げて酒を呷った。

そのまましばらく待ち、やがて彼女が思い出したように口を開いた。

「・・・初めてだったんです。璃々が、あの子が父親の事を私に訊いたのも、貴方の様な父親が欲しいと、我儘を言ったのも。」

だから、それを叶えたいと思ったのか？自分の想いを封じ込めてまで？贖罪のつもりかよ。

「どうでしょうね・・・。いえ、きつとそれもあります。あの子の願いを叶えて、母親面したかったのでしょうか。そうする事で、不甲斐ない母を、許して欲しかった。」

ふーん。まあ、気持ちは分らんでもないな。正直あの子がそんな事気にするはずもないから、ただの自己満足だとは思いますが、好きにしなよ。・・・あん？どした変な顔をして。

「・・・怒らないのですか？璃々の為とはいえ、貴方達の関係を乱して愛もないのに勝手

に正妻になったのですよ。言ってみれば、私の都合で貴方達を利用したのです。それでいて尚、未だに過去の夫を忘れられず、煮え切らないまま私は此処にいる。」

だから？ お前の自己満足もあるだろうが、娘の為なら仕方ないだろ。元より子のためなら己が身さえ捧げられるのが母親という生き物だと俺は思ってるし、俺にとつても既に璃々は娘だ。何も問題は無い。

死に別れた旦那を忘れられないのも別に悪い事じゃなかる。お前はそれを罪悪感からと思つているのかもしれないが、どうであつても璃々の本当の父親は亡くなつた旦那なんだ。あの子を想い育てるならば、おいそれと切り捨てられる方がどうかしている。

だから、気にせず利用でもなんでもすればいい。それが俺の家族を傷付けるものではない限り、俺はお前を責めることはないし、それがお前と璃々の為になるなら協力を惜しまん。

それに、迷いながらも、苦しみながらも、自分勝手に旦那を過去と割り切りたくないというお前は嫌いじゃない。

そう言うのと、何故か驚いた顔をする紫苑だったが、すぐに力無く笑つて、ありがとうございます、と言つた。

「・・・貴方はやはり、責めてはくれないのですね。」

まるで気にしてないからな。お前が俺や愛紗達に罪悪感を感じているのは知つてい

るが、俺もあいつらもお前の気持ちは何となく察してたし、あえてそのお前が正妻になる事で却って他が優劣着ける事なくいられる様にしたのも、皆分かつてるさ。これでも俺は感謝しまくりなんだぜ？まあそれと同じくらい愛紗達を煽つてる事を恨んでるがな！毎度毎度俺にしわ寄せ来るんだよ！

「・・・それも分かつているんですね。あと、煽っているのではなく、背中を押してあげているだけですわ。」

はは、コヤツめ。

まあ、だからホント気にするな。璃々にはまた早くと墜とせと怒られるが、俺としてはやはりお前のしたい様にすればいいと思うし、前の旦那に操を立てるのも本当に立派だと思うので是非頑張つて欲しい。

というか今増えられても困る。華琳を筆頭にあいつら一度は納得したはずなのに、愛紗達が羨ましい狡い！とか言つて閨でガチの子作り要求してくるし、夜の順番から外された愛紗達の嫉妬は酷くなるし、大変なのだ。

「ふふふ、相変わらず愛されてー！ーあれ？今何かおかしな事言いませんでしたか？」

へあ？何が？あ、もしかして華琳達がああの程度で納得すると思つた？ははは、俺としても納得して欲しかったんだがな。やっぱ駄目だったわ。愛紗達3人もローテー

シヨンから外されて欲求不満が「それは知ってます!今璃々に怒られるってーっ!?」
あ?ああ!それな。

うむ、一応璃々との秘密の約束だが、まあお前の意思を考えると教えておこう。えー
と、璃々はたぶん母親であるお前が思う以上にマセてるというか賢い子でな?つま
り・・・

端的にぶつちやけると、今お前が話したこと全て察してて、その上で新しい旦那を当
てがおうという事らしいぞ!

「・・・まさか。いや、幾ら何でもそれは流石に・・・。」

あ、嘘だと思ってるな?まあ俺も驚いたけど、璃々曰く『おとうさん』のいるおうち
を見るたびにおかあさんがかなしそうな顔になるの!璃々のほんとうのおとうさんは
もういないけど、新しいおとうさんはいるから、おとうさんがおかあさんをおとうさん
のことだいきすきにすればいいんだよ!」だつてさ。どうもうちの女性陣というか主に星
の入れ知恵が大分影響しているが、本当にそう考えてるみたいだぞ?

「・・・本当に？本当に璃々がそう言ったんですか？」

うむ。どうも璃々も紫苑が自分に遠慮してると感じているみたいだつたな。もつとも、詳しいことは流石に理解していないみたいだが。あ、安心しなよ！だからと言ってお前の意思を無視する気はないぞ。何度も言ったが、お前はお前のしたい事をすべきだ。母親として娘の為に出来る限りするのは構わんが、紫苑は紫苑で自分の人生がある訳だし。

と、つついっいそんな感じにドヤ顔で紫苑を諭す俺。珍しく含みのない本心で語った為か、単に酒が入っていた為か、とにかく饒舌に話していたのは間違いない。

だからだろうか。

俺はこの時、うつかり紫苑の顔を見ていなかった。彼女の変化を、見逃したのだ。

それでいて、俺の耳は小さな呟きさえ逃さず、紫苑の声に反応した。

「本当に、良いのでしょうか・・・？」

いいんだよ！お前と璃々は家族だろ。お前は母親だから、出来る限り娘を優先してや

るのはいいと思うが、だからと言って遠慮するのは違うだろう! 家族の仲に、遠慮など不用! 思いやりがあればいいんだよ!

グリーンダヨ! と心の中で続けて、あまりの寒さによくやく正気に戻った。酔いが醒めたと言ひ換えた方が良くもしれない。アルコールではなく自分に、だった。

冷静になった途端にガチでシングルマザーを頑張つてた紫苑相手に子育て未経験どころか前世含めても未婚なのに、ドヤ顔で語つたのが急に恥ずかしくなつた。慌てて残つてた酒を一気飲みして誤魔化す。

そろそろ終わろうか。そう言つて空の器を片付けて、そそくさと立ち上がり、愛紗達3人のいる聞に戻ろうとした。いや、すっかり忘れてたが、よく考えたらセック○が出来ない3人の為にわざわざ日々のローテーションを休んでまで3人寝てるのだ。俺が側にいない事に気付かれたら後がメチャクチャ怖い。何が怖いってあの3人なら既に気付いてそうなのが本当に怖い。

色々な意味で早く帰らねば! そう思つた時、ふと紫苑が唐突に言った。

「ねえあなた? 本当に私は私がしたい様にして良いのかしら?」

ふえっ?! いきなり何? い、良いと思うよもちろん! 焦りと気不味さもあつてか、少しどもつてしまつた。とにかくおやすみ、と言おうとして、

ぐい、と顔を無理矢理振り向かされた。

「んうっ」

なんだ、と思つた瞬間には唇が重なつていた。首に絡みつくように紫苑の腕が回された。身長差で自然と足が屋根から離れた彼女の身体を勝手に腕が抱き支えた。何時も鈴々たちの飛び付きを受け止める条件反射だった。

別に今更キスぐらいで狼狽えることは無いが、脈絡の無さに抗議しようとして目で訴えてみたが、紫苑はまるでそれがキスの正しい作法と言わんばかりに瞳を閉じていた。

女の心理は本当によく分からない。心の中でそう嘆息すると、とりあえず俺の口内に侵入してきた彼女の若干酒くさい舌に合わせる。

20秒くらいだろうか。

体感でそれぐらいの、キスにして短いような長いような微妙な時間が経つた後、ゆっくりと唇を離れた彼女をそのまま優しく下ろす。

先程までの泣き顔が嘘のように、いつもの微笑みが浮かび、されど明確な熱を頬に乗せたまま彼女は楽しそうに言った。

「いつもは、気を抜くとあの人を簡単に忘れてしまいそうになるから、抑えているのですけど……。今は、貴方への想いを我慢しなくてもいいんですよね？」

え、いや今日はもうお開きにツー!?

唐突な事態にツツコミ入れるより早く嫌な予感が過ぎる。慌ててこの場を離れよう

と思つたが、彼女の手は俺の服をしつかりと握りしめている。いかん、今着てる服は反董卓連合の時無くした地上最強シリーズの代わりに紗和が生地から作つてくれた一品だ。破れたら困るから無理矢理は離せない!

「ねえあなた? 仮にも正妻の誘いを断つたりしませんよね? ましてや、お妾さんを理由になんかあり得ないですわよね?」

え、いや待て何故急につてか愛紗達を妾扱いは俺が死ぬ!? 待て待て! お前との子作りそれ自体に異存はないが、お前の部屋には璃々が、俺の部屋には3人が寝てるし他は華佗達医者が使つてるから空きはない、今度時間を作るからそれまでちよつと待つてくれ!

「あら、初夜が夜空の下というのも中々風情がありますし、忘れられない思い出になつて丁度良いじゃありませんか。」

まさかの野外?! い、いやもう夜も遅いか「もう、野暮ですわあなた!」ちよ、押し倒そうとするな! いやホント、ホント待つて今日は不味い! 何が不味いつて愛紗達と一緒に寝る予定だったのに抜け出してここで紫苑と飲んでたのがもう不味い! だからむぐつ

言い訳は聞きません、とばかりに情熱的に口付けする紫苑。見ると既に自ら服をはだ

けていて、俺の服に手をかけていた。ちよ、ちよ待てよ！話、話を聞いてください紫苑さん！！夫の話を良く聞くのも良い妻の条件だつてばつちやが言つてた！

「ああ、これが皆の言つてた……！凄い、あの人の3倍は優に……！ごめんなさい璃々、お母さんもうあなたの兄妹作つてしまうかも。」

話を聞いてー！お願いだから紫苑さーん！あれつて言うか下から三人の気配がするつて言うかなんか声が聞こえて……アッツツー！！

つづく！